

深 谷 市

しろ きた  
城 北 遺 跡

一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書

— II —

(第1分冊)

1995

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

卷頭図版 1



第4号住居跡人骨出土状況



第1号祭祀跡遺物出土状況

## 卷頭図版 2



第1号祭祀跡出土土器



第5号祭祀跡出土土器

卷頭図版 3



第1号祭祀跡出土滑石製模造品



第135号住居跡出土土器削片

巻頭図版 4



ベンガラ関連遺物



樹脂付着土器

## 序

近年の首都圏の発展は周辺地域の都市化と共に、交通量の大幅な増大をもたらしました。建設省では埼玉県を縦断する一般国道17号の交通混雑および沿道環境悪化などに対処するため、大規模なバイパスを何本も計画しました。熊谷市から深谷市を通過し、利根川を渡って群馬県に至る上武道路もその一環で計画されたものです。

上武道路が通過する深谷市は、埼玉県北部に位置し、利根川を境として群馬県に接し、豊かな自然環境と歴史に育まれた文化財が数多く残されております。原始・古代の桜ヶ丘組石遺跡や上敷免遺跡などがあるほか、中近世に営まれた深谷城などは当地の繁栄の証といえましょう。

上武道路は、深谷市の北東部を通過し、隣接する熊谷市分を含めて10か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しましたが、その取扱いについて関係各機関の間で協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。

今回報告する城北遺跡はこれらの遺跡の一つで、150軒を越える古墳時代後期の住居跡と膨大な量の土器などが出土した大集落であります。なかでも特筆されるのは、4軒から人骨が発見されたことで、全国的にも例は少なく、当時の葬祭儀礼の研究に一石を投じることになると思われます。また、集落内で発見された祭祀跡も県内では類例がなく、古墳時代のムラで展開された祭祀を考える上で重要な遺構の一つです。

これらの成果をまとめた本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで多大な御指導・御協力を賜りました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、建設省大宮国道工事事務所、同熊谷出張所、深谷市教育委員会並びに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井 桂

# 例　　言

- 1 本書は埼玉県深谷市大字堀米字前窪476他に所在する城北遺跡の発掘調査報告書である。文化庁指示通知は平成元年6月15日付委保第5の543号、平成2年10月3日付委保第5の718号である。  
遺跡名の略号はSRKTである。
- 2 発掘調査は一般国道17号（上武道路）改築工事事業に伴うものであり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は平成元年4月1日から平成3年1月31日まで、整理・報告書刊行事業は平成4年4月1日から平成7年3月31日まで実施した。発掘調査および整理・報告書刊行事業の組織は第I章に示した。
- 4 本書の執筆および編集は資料部資料整理第二課の山川守男が行い、岡本千里・桜井元子の補助を得た。第I章－1は文化財保護課、第IV章－1の一部は剣持和夫、第V章－4の一部は大屋道則がそれぞれ執筆した。  
遺物実測には山川・西口正純・大屋道則があたり、田中正夫・岡本・桜井・石塚香・藤沢晶子・山崎えり子・植木智子の協力を得た。
- 5 本書に使用した発掘調査時の写真は剣持和夫・宮井英一・立石盛詞・石坂俊郎・山川・村田章人・福田聖が、遺物写真は水村孝行・大屋道則が撮影した。
- 6 本書にかかる資料は、平成7年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 7 発掘調査および整理・報告書刊行事業にかかわる委託事業と委託先は下記のとおりである。

基準点測量・航空写真測量・空中写真撮影	中央航業株式会社
巻頭遺物写真撮影	小川忠博・折原基久
人骨鑑定	日本赤十字看護大学 森本岩太郎 聖マリアンナ医科大学 吉田俊爾
獣骨鑑定	群馬県立大間々高等学校 宮崎重雄
土壤分析・樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
土器胎土分析・顔料分析	(株)第四紀地質研究所

- 8 城北遺跡に関する文献は下記のものに発表されているが、内容等については本書が優先する。  
『年報』10・11 1990・1991 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
『第23回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 1990 埼玉考古学会他  
『考古学ジャーナル』No.325 1990 ニューサイエンス社  
『埋文さいたま』第2号 1990 埼玉県立埋蔵文化財センター  
『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』 1991 日本考古学協会  
『日本考古学年報』42 1991 日本考古学協会

- 9 一般国道17号（上武道路）改築工事事業関係の報告書は本書以外に下記のものがある。
- 『ウツギ内・砂田・柳町』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集 1993  
『前・居立』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集 1995  
『清水上遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集 1994  
『根絡・横間栗・関下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集 1995
- 10 本書の作成に際し、下記の方々からの御教示・御協力を賜った。 (敬称略)
- 青木一男 青木克尚 荒川 弘 石井克己 市毛 純 白井直之 大塚昌彦 小野田勝一  
加部二生 金子彰男 金子正之 小池晋禄 坂本和俊 佐原 真 澤出晃越 篠崎 潔  
清水 豊 杉山秀宏 鈴木徳雄 須永光一 田口一郎 辻葩 学 堤 隆 都出比呂志  
徳山寿樹 鳥羽政之 西田健彦 西中川 駿 野村一寿 橋本博文 平田重之 堀口万吉  
増山禎之 松井 章 丸山雄二 矢口孝悦 山崎 武

# 凡　　例

1 本書に掲載した遺構図の指示は以下のとおりである。

- ・X、Yにおける座標表示は国家標準直角座標IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表わす。

- ・遺構図の縮尺は原則として以下のとおりとし、それ以外は個別に縮尺を示す。

住居跡・土壌・井戸・木製品集中地点・性格不明遺構…1/60

カマド・祭祀跡…1/30

- ・全測図等に示す遺構表記の略号は次のとおりである。

SJ…堅穴住居跡 SD…溝 SK…土壌 SH…祭祀跡 SE…井戸 SX…性格不明遺構

- ・遺構図中に示した遺物番号は、各遺構ごとの遺物図の番号と一致する。また遺物の記号化は人骨・獸骨を○、それ以外を●とする。

- ・断面図の水糸レベルのうち、微細部分で他と共通するものは一部省略する。

- ・土層注は、土層番号・色調・性質・混入状況および成因の順である。なお、色調は『新版標準土色帖』(農林省水産技術会議事務局監修1967)に基づく。

- ・噴砂、カマド構築粘土、カマド煙道部天井、カマド内外灰層、FA 関係土層の5項目についてはスクリーントーンによって表現し、前3者は土層番号を省略する(凡例図参照)。

2 本書における遺物図の指示は次のとおりである。

- ・遺物図の縮尺は原則として次のとおりとし、それ以外は個別に縮尺を示す。

土器(ミニチュア土器・手捏土器を含む)・石器類…1/4

土製品・石製品(臼玉・砥石・石器類を除く)…1/2

臼玉…1/1 砥石…1/3 木製品…1/6

- ・上記の各種遺物のうち、土器・祭祀跡出土の滑石製模造品・河川跡出土の木製品は出土遺構の遺構図・説明文に付隨させるが、それ以外の土製品・石製品・木製品は第IV章-1(7)~(9)に集成して掲載する。

- ・土器実測図のうち、黒色処理・赤色塗彩・黒色樹脂付着のみとめられるものには、それぞれアミをかけ、使用による磨滅部分は、その範囲を一点鎖線で示す(凡例図参照)。

3 土器観察表の凡例は以下のとおりである。

- ・法量の単位はcmであり、口径・底径は残存値が50未満の場合に、また器高は口縁部から底部までの図化ができない場合にそれぞれカッコをつける。

- ・胎土は土器に含まれる含有物を次の記号で示す。

R赤色粒、W白色粒、W'白色透明粒、B黒色粒、H片岩粒、U雲母粒

- ・焼成はA良好、B普通、C不良の3ランクに分けた。

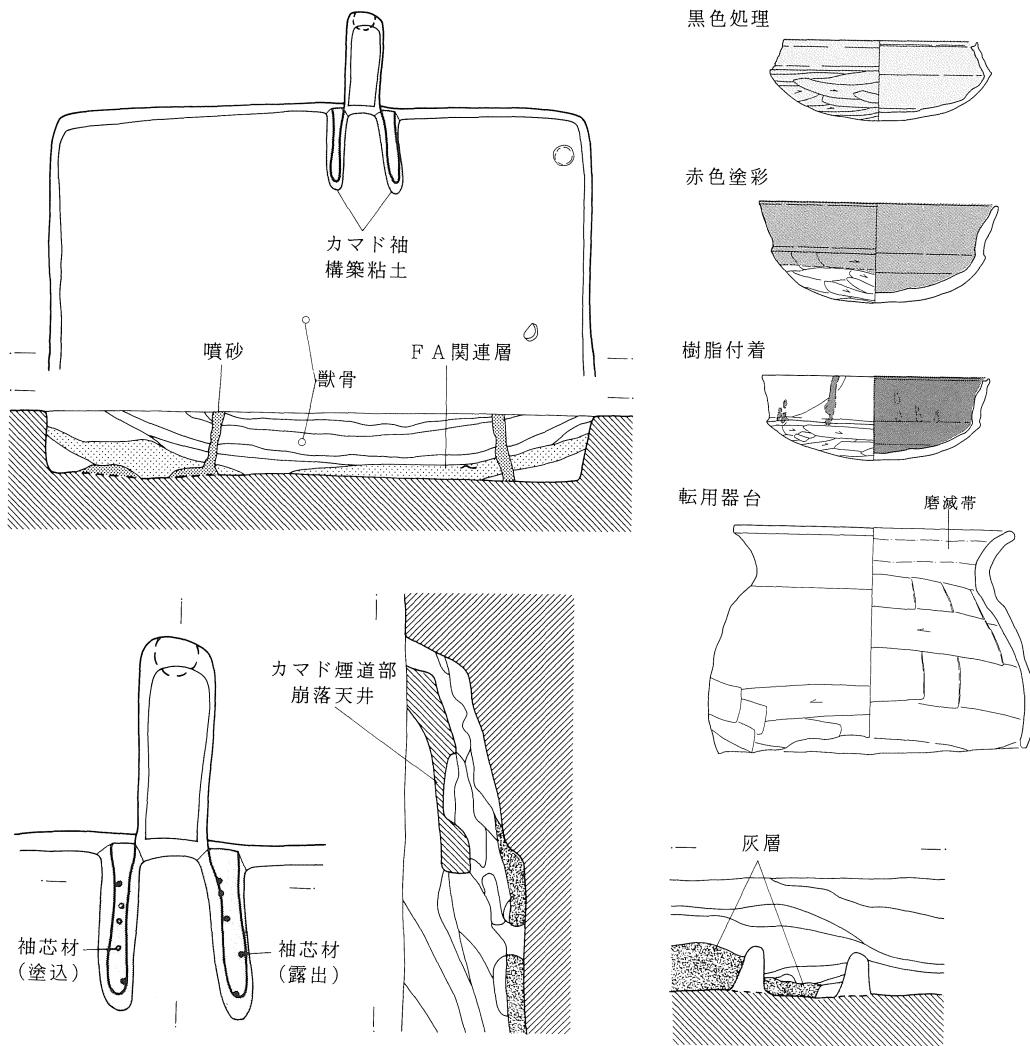
- ・色調は『新版標準土色帖』(前出)に照らし最も近い土色名を記すが、色相・明度・彩度を示す数値は省略する。

- ・残存は図で示した部位に占める残存率を%で表わす。

・出土位置・その他は発掘調査時に付されて注記された番号および出土位置と、土器の特徴とを簡潔に示し、欄に記載しきれない場合は本文中に詳述する。

4 写真図版は原則として以下のとおりに組む。

- ・遺構写真は空中撮影と地上撮影のものに分け、それぞれ遺構番号順に配置する。
- ・遺物写真は器種ごとに分け、それぞれ出土遺構番号順に配置する。ただし、甕は上下段で別々の配列である。また、模倣壊出現以前の時期のものは各器種の先頭に置く。



凡 例 図

# 目 次

序  
例 言  
凡 例

## 〈第1分冊〉

I	調査の概要	1
1	調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	2
3	調査の経過	3
4	調査の方法	5
II	遺跡の立地と環境	7
III	遺跡の概観	12
IV	調査された遺構と遺物	20
1	古墳時代の遺構と遺物	20
(1)	住居跡－1	20

## 〈第2分冊〉

(2)	住居跡－2	341
(3)	祭祀跡	555
(4)	土壙・性格不明遺構	602
(5)	溝	611
(6)	河川跡・河畔帯	617
(7)	土製品	641
(8)	石製品	669
(9)	木製品	693
(10)	遺構外採集遺物	694
2	平安時代の遺構と遺物	702
(1)	土壙・井戸	703
(2)	溝	706
V	調査のまとめ	711
1	遺跡の変遷	712
2	人骨・獸骨	717
3	祭祀跡	722
4	住居施設	727

5 土 器	735
6 生産関連遺物	744
7 木 製 品	753
8 特殊遺物	756

〈第3分冊〉

付編 科学分析報告	763
1 獣骨鑑定	764
2 覆土中のリン酸・カルシウム分析	777
3 樹種同定	789
4 テフラ・微化石分析と古環境の復原	795
5 土器胎土分析	812
6 顔料分析	818
7 人骨鑑定	823

## 挿 図 目 次

〈第1分冊〉

第1図 埼玉県の地形と遺跡の位置	7	第26図 第5号住居跡	38
第2図 周辺の主な遺跡	8	第27図 第5号住居跡 出土遺物	39
第3図 隣接遺跡の遺構分布	9	第28図 第6号住居跡	41
第4図 柳挽台地・妻沼低地の遺跡分布	10	第29図 第6号住居跡 カマド	42
第5図 砂田・柳町・城北・居立遺跡の遺構分布	13	第30図 第6号住居跡 出土遺物	43
第6図 城北遺跡の微地形と基本土層	14	第31図 第7号住居跡	44
第7図 城北遺跡全体図(1)	16	第32図 第7号住居跡 カマド	45
第8図 城北遺跡全体図(2)	17	第33図 第7号住居跡 出土遺物	46
第9図 城北遺跡全体図(3)	18	第34図 第8号住居跡	47
第10図 城北遺跡全体図(4)	19	第35図 第8号住居跡 出土遺物(1)	48
第11図 第1号住居跡	20	第36図 第8号住居跡 出土遺物(2)	49
第12図 第1号住居跡 出土遺物	21	第37図 第8号住居跡 出土遺物(3)	50
第13図 第2号住居跡	23	第38図 第8号住居跡 出土遺物(4)	51
第14図 第2号住居跡 出土遺物(1)	24	第39図 第8号住居跡 出土遺物(5)	52
第15図 第2号住居跡 出土遺物(2)	25	第40図 第9号住居跡 カマド	55
第16図 第2号住居跡 出土遺物(3)	26	第41図 第9号住居跡 馬歯出土状況	56
第17図 第3号住居跡	27	第42図 第9号住居跡 出土遺物	57
第18図 第3号住居跡 カマド	28	第43図 第10号住居跡	58
第19図 第3号住居跡 出土遺物	29	第44図 第10号住居跡 出土遺物	59
第20図 第4号住居跡	31	第45図 第11号住居跡 馬骨出土状況	60
第21図 第4号住居跡 人骨出土状況	32	第46図 第11号住居跡 カマド	61
第22図 第4号住居跡 カマド・貯蔵穴	33	第47図 第11号住居跡 出土遺物(1)	62
第23図 第4号住居跡 出土遺物(1)	35	第48図 第11号住居跡 出土遺物(2)	63
第24図 第4号住居跡 出土遺物(2)	36	第49図 第12号住居跡	65
第25図 第4号住居跡 出土遺物(3)	37	第50図 第12号住居跡 カマド	66
		第51図 第12号住居跡 出土遺物(1)	67

第 52 図 第12号住居跡	出土遺物（2）	68	第103図 第31号住居跡	.....	121
第 53 図 第13号住居跡	カマド	69	第104図 第31号住居跡	出土遺物（1）	122
第 54 図 第13号住居跡	馬齒出土状況	70	第105図 第31号住居跡	出土遺物（2）	123
第 55 図 第13号住居跡	出土遺物（1）	71	第106図 第32号住居跡	.....	125
第 56 図 第13号住居跡	出土遺物（2）	72	第107図 第32号住居跡	カマド	126
第 57 図 第14号住居跡	.....	73	第108図 第32号住居跡	出土遺物（1）	126
第 58 図 第14号住居跡	出土遺物	74	第109図 第32号住居跡	出土遺物（2）	127
第 59 図 第15号住居跡	.....	76	第110図 第32号住居跡	出土遺物（3）	128
第 60 図 第15号住居跡	出土遺物（1）	77	第111図 第32号住居跡	出土遺物（4）	129
第 61 図 第15号住居跡	出土遺物（2）	78	第112図 第32号住居跡	出土遺物（5）	130
第 62 図 第15号住居跡	出土遺物（3）	79	第113図 第32号住居跡	出土遺物（6）	131
第 63 図 第16号住居跡	カマド	81	第114図 第33号住居跡	カマド	134
第 64 図 第16号住居跡	出土遺物（1）	82	第115図 第33号住居跡	.....	135
第 65 図 第16号住居跡	出土遺物（2）	83	第116図 第33号住居跡	出土遺物（1）	136
第 66 図 第17号住居跡	.....	84	第117図 第33号住居跡	出土遺物（2）	137
第 67 図 第17号住居跡	カマド	85	第118図 第34号住居跡	カマド	139
第 68 図 第17号住居跡	出土遺物	85	第119図 第34号住居跡	出土遺物	139
第 69 図 第18号住居跡	.....	87	第120図 第35号住居跡	.....	140
第 70 図 第18号住居跡	出土遺物（1）	88	第121図 第35号住居跡	出土遺物（1）	141
第 71 図 第18号住居跡	出土遺物（2）	89	第122図 第35号住居跡	出土遺物（2）	142
第 72 図 第19号住居跡	.....	90	第123図 第36号住居跡	.....	144
第 73 図 第19号住居跡	出土遺物	91	第124図 第36号住居跡	出土遺物（1）	145
第 74 図 第20号住居跡	.....	92	第125図 第36号住居跡	出土遺物（2）	146
第 75 図 第21号住居跡	.....	93	第126図 第36号住居跡	出土遺物（3）	147
第 76 図 第21号住居跡	出土遺物（1）	94	第127図 第36号住居跡	出土遺物（4）	148
第 77 図 第21号住居跡	出土遺物（2）	95	第128図 第36号住居跡	出土遺物（5）	149
第 78 図 第22号住居跡	.....	96	第129図 第37・38号住居跡	.....	152
第 79 図 第22号住居跡	出土遺物	96	第130図 第37号住居跡	出土遺物	153
第 80 図 第23号住居跡	.....	97	第131図 第38号住居跡	出土遺物	154
第 81 図 第23号住居跡	出土遺物	98	第132図 第39号住居跡	カマド	154
第 82 図 第24号住居跡	.....	99	第133図 第39号住居跡	.....	155
第 83 図 第24号住居跡	出土遺物	100	第134図 第39号住居跡	出土遺物（1）	156
第 84 図 第25号住居跡	.....	101	第135図 第39号住居跡	出土遺物（2）	157
第 85 図 第25号住居跡	出土遺物	102	第136図 第39号住居跡	出土遺物（3）	158
第 86 図 第26号住居跡	.....	103	第137図 第39号住居跡	出土遺物（4）	159
第 87 図 第26号住居跡	出土遺物（1）	104	第138図 第39号住居跡	出土遺物（5）	160
第 88 図 第26号住居跡	出土遺物（2）	105	第139図 第40号住居跡	.....	162
第 89 図 第26号住居跡	出土遺物（3）	106	第140図 第40号住居跡	出土遺物（1）	163
第 90 国 第26号住居跡	出土遺物（4）	107	第141図 第40号住居跡	出土遺物（2）	164
第 91 国 第27号住居跡	.....	110	第142図 第40号住居跡	出土遺物（3）	165
第 92 国 第27号住居跡	出土遺物	110	第143図 第41号住居跡	.....	166
第 93 国 第28号住居跡	.....	111	第144図 第41号住居跡	出土遺物	167
第 94 国 第28号住居跡	出土遺物（1）	112	第145図 第42号住居跡	.....	168
第 95 国 第28号住居跡	出土遺物（2）	113	第146図 第42号住居跡	出土遺物（1）	169
第 96 国 第28号住居跡	出土遺物（3）	114	第147図 第42号住居跡	出土遺物（2）	170
第 97 国 第29号住居跡	.....	116	第148図 第43号住居跡	.....	171
第 98 国 第29号住居跡	出土遺物（1）	117	第149図 第43号住居跡	出土遺物（1）	172
第 99 国 第29号住居跡	出土遺物（2）	118	第150図 第43号住居跡	出土遺物（2）	173
第100図 第30号住居跡	.....	119	第151図 第44号住居跡	出土遺物	173
第101図 第30号住居跡	カマド	120	第152図 第44号住居跡	.....	174
第102図 第30号住居跡	出土遺物	120	第153図 第45号住居跡	.....	175

第154図	第45号住居跡	出土遺物	176	第205図	第64号住居跡	出土遺物	229
第155図	第46号住居跡	カマド	178	第206図	第65号住居跡	.....	230
第156図	第46号住居跡	出土遺物（1）	179	第207図	第65号住居跡	出土遺物（1）	231
第157図	第46号住居跡	出土遺物（2）	180	第208図	第65号住居跡	出土遺物（2）	232
第158図	第47号住居跡	.....	182	第209図	第66・67号住居跡	出土遺物	234
第159図	第47号住居跡	出土遺物（1）	183	第210図	第66・67号住居跡	.....	235
第160図	第47号住居跡	出土遺物（2）	184	第211図	第68・69号住居跡	.....	237
第161図	第48号住居跡	.....	185	第212図	第68・69号住居跡	出土遺物	238
第162図	第48号住居跡	出土遺物	186	第213図	第70号住居跡	出土遺物	239
第163図	第49号住居跡	.....	187	第214図	第70号住居跡	.....	240
第164図	第49号住居跡	出土遺物	188	第215図	第71号住居跡	.....	241
第165図	第50号住居跡	.....	189	第216図	第71号住居跡	カマド	242
第166図	第50号住居跡	出土遺物	190	第217図	第71号住居跡	出土遺物	243
第167図	第51号住居跡	.....	191	第218図	第72号住居跡	.....	244
第168図	第51号住居跡	出土遺物（1）	192	第219図	第72号住居跡	出土遺物（1）	245
第169図	第51号住居跡	出土遺物（2）	193	第220図	第72号住居跡	出土遺物（2）	246
第170図	第51号住居跡	出土遺物（3）	194	第221図	第72号住居跡	出土遺物（3）	247
第171図	第52号住居跡	.....	196	第222図	第73号住居跡	.....	249
第172図	第52号住居跡	出土遺物（1）	197	第223図	第73号住居跡	出土遺物（1）	250
第173図	第52号住居跡	出土遺物（2）	198	第224図	第73号住居跡	出土遺物（2）	251
第174図	第52号住居跡	出土遺物（3）	199	第225図	第74号住居跡	カマド	253
第175図	第53号住居跡	.....	201	第226図	第74号住居跡	出土遺物（1）	254
第176図	第53号住居跡	カマド	202	第227図	第74号住居跡	出土遺物（2）	255
第177図	第53号住居跡	出土遺物（1）	203	第228図	第74号住居跡	出土遺物（3）	256
第178図	第53号住居跡	出土遺物（2）	204	第229図	第75号住居跡	出土遺物	257
第179図	第53号住居跡	出土遺物（3）	205	第230図	第75号住居跡	.....	258
第180図	第54号住居跡	.....	206	第231図	第76号住居跡	.....	259
第181図	第54号住居跡	出土遺物	207	第232図	第76号住居跡	出土遺物	260
第182図	第55号住居跡	.....	208	第233図	第77号住居跡	.....	261
第183図	第55号住居跡	出土遺物（1）	209	第234図	第77号住居跡	出土遺物（1）	263
第184図	第55号住居跡	出土遺物（2）	210	第235図	第77号住居跡	出土遺物（2）	264
第185図	第56号住居跡	.....	211	第236図	第78号住居跡	.....	266
第186図	第56号住居跡	出土遺物	212	第237図	第78号住居跡	出土遺物	267
第187図	第57号住居跡	.....	213	第238図	第79号住居跡	.....	268
第188図	第57号住居跡	出土遺物（1）	214	第239図	第79号住居跡	出土遺物	269
第189図	第57号住居跡	出土遺物（2）	215	第240図	第80号住居跡	カマド	270
第190図	第58号住居跡	カマド	217	第241図	第80号住居跡	.....	271
第191図	第58号住居跡	出土遺物（1）	218	第242図	第80号住居跡	出土遺物	272
第192図	第58号住居跡	出土遺物（2）	219	第243図	第81号住居跡	.....	273
第193図	第59号住居跡	.....	220	第244図	第81号住居跡	出土遺物	274
第194図	第59号住居跡	出土遺物（1）	221	第245図	第82号住居跡	.....	276
第195図	第59号住居跡	出土遺物（2）	222	第246図	第82号住居跡	出土遺物	277
第196図	第60号住居跡	.....	223	第247図	第83号住居跡	.....	278
第197図	第60号住居跡	出土遺物	223	第248図	第83号住居跡	出土遺物	279
第198図	第61号住居跡	.....	224	第249図	第84号住居跡	.....	280
第199図	第61号住居跡	出土遺物	225	第250図	第84号住居跡	出土遺物	281
第200図	第62号住居跡	.....	226	第251図	第85号住居跡	.....	282
第201図	第62号住居跡	出土遺物	226	第252図	第85号住居跡	出土遺物（1）	283
第202図	第63号住居跡	.....	227	第253図	第85号住居跡	出土遺物（2）	284
第203図	第63号住居跡	出土遺物	228	第254図	第86・87号住居跡	.....	286
第204図	第64号住居跡	.....	229	第255図	第87号住居跡	カマド	287

第256図	第76・87号住居跡 出土遺物（1）	288
第257図	第87号住居跡 出土遺物（2）	289
第258図	第87号住居跡 出土遺物（3）	290
第259図	第87号住居跡 出土遺物（4）	291
第260図	第88号住居跡	293
第261図	第88号住居跡 出土遺物	294
第262図	第89号住居跡	295
第263図	第89号住居跡 出土遺物（1）	296
第264図	第89号住居跡 出土遺物（2）	297
第265図	第90号住居跡	298
第266図	第90号住居跡 カマド	299
第267図	第90号住居跡 出土遺物（1）	300
第268図	第90号住居跡 出土遺物（2）	301
第269図	第90号住居跡 出土遺物（3）	302
第270図	第91号住居跡	304
第271図	第92号住居跡	305
第272図	第92号住居跡 出土遺物	306
第273図	第93号住居跡	307
第274図	第93号住居跡 出土遺物（1）	308
第275図	第93号住居跡 出土遺物（2）	309
第276図	第94号住居跡	311
第277図	第94号住居跡 出土遺物（1）	312
第278図	第94号住居跡 出土遺物（2）	313
第279図	第94号住居跡 出土遺物（3）	314
第280図	第94号住居跡 出土遺物（4）	315
第281図	第95号住居跡	317
第282図	第95号住居跡 カマド	318
第283図	第95号住居跡 出土遺物（1）	319
第284図	第95号住居跡 出土遺物（2）	320
第285図	第96号住居跡	321
第286図	第96号住居跡 出土遺物	322
第287図	第97号住居跡	323
第288図	第97号住居跡 出土遺物（1）	324
第289図	第97号住居跡 出土遺物（2）	325
第290図	第97号住居跡 出土遺物（3）	326
第291図	第98号住居跡	327
第292図	第98号住居跡 カマド	328
第293図	第98号住居跡 出土遺物（1）	329
第294図	第98号住居跡 出土遺物（2）	330
第295図	第99号住居跡	331
第296図	第99号住居跡 出土遺物	332
第297図	第100号住居跡	334
第298図	第100号住居跡 出土遺物	335
第299図	第101号住居跡 出土遺物	335
第300図	第101号住居跡	336
第301図	第102号住居跡	337
第302図	第102号住居跡 出土遺物	337
第303図	第103号住居跡	338
第304図	第103号住居跡 カマド	339
第305図	第103号住居跡 出土遺物	339
<第2分冊>		
第306図	城北遺跡全体図（1）	341
第307図	城北遺跡全体図（2）	342
第308図	城北遺跡全体図（3）	343
第309図	城北遺跡全体図（4）	344
第310図	第104号住居跡	345
第311図	第104号住居跡 出土遺物	346
第312図	第105号住居跡	347
第313図	第105号住居跡 カマド	348
第314図	第105号住居跡 出土遺物	349
第315図	第106号住居跡	351
第316図	第106号住居跡 出土遺物	352
第317図	第107号住居跡（1）	353
第318図	第107号住居跡（2）	354
第319図	第107号住居跡 出土遺物（1）	355
第320図	第107号住居跡 出土遺物（2）	356
第321図	第107号住居跡 出土遺物（3）	357
第322図	第108号住居跡	359
第323図	第108号住居跡 出土遺物	359
第324図	第109号住居跡 出土遺物	360
第325図	第109号住居跡	361
第326図	第110号住居跡	364
第327図	第110号住居跡 出土遺物（1）	365
第328図	第110号住居跡 出土遺物（2）	366
第329図	第110号住居跡 出土遺物（3）	367
第330図	第111号住居跡	368
第331図	第111号住居跡 出土遺物（1）	369
第332図	第111号住居跡 出土遺物（2）	370
第333図	第111号住居跡 出土遺物（3）	371
第334図	第111号住居跡 出土遺物（4）	372
第335図	第111号住居跡 出土遺物（5）	373
第336図	第111号住居跡 出土遺物（6）	374
第337図	第111号住居跡 出土遺物（7）	375
第338図	第112号住居跡 カマド	378
第339図	第112号住居跡 出土遺物（1）	379
第340図	第112号住居跡 出土遺物（2）	380
第341図	第113号住居跡	381
第342図	第113号住居跡 出土遺物	382
第343図	第114号住居跡	383
第344図	第114号住居跡 カマド	384
第345図	第114号住居跡 出土遺物（1）	386
第346図	第114号住居跡 出土遺物（2）	387
第347図	第114号住居跡 出土遺物（3）	388
第348図	第115号住居跡	389
第349図	第115号住居跡 出土遺物	390
第350図	第116号住居跡 出土遺物	390
第351図	第116号住居跡	391
第352図	第117号住居跡	392
第353図	第117号住居跡 出土遺物	393
第354図	第118号住居跡 カマド	394
第355図	第118号住居跡	395

第356図	第118号住居跡	出土遺物（1）	396
第357図	第118号住居跡	出土遺物（2）	397
第358図	第118号住居跡	出土遺物（3）	398
第359図	第118号住居跡	出土遺物（4）	399
第360図	第119号住居跡	出土遺物	401
第361図	第119号住居跡	出土遺物	402
第362図	第120号住居跡		403
第363図	第120号住居跡	カマド	404
第364図	第120号住居跡	出土遺物（1）	405
第365図	第120号住居跡	出土遺物（2）	406
第366図	第120号住居跡	出土遺物（3）	407
第367図	第121号住居跡（1）		410
第368図	第121号住居跡（2）・カマド		411
第369図	第121号住居跡	出土遺物（1）	412
第370図	第121号住居跡	出土遺物（2）	413
第371図	第121号住居跡	出土遺物（3）	414
第372図	第121号住居跡	出土遺物（4）	415
第373図	第122号住居跡		416
第374図	第122号住居跡	カマド	417
第375図	第122号住居跡	出土遺物	418
第376図	第123号住居跡（1）		419
第377図	第123号住居跡（2）		420
第378図	第123号住居跡	出土遺物（1）	421
第379図	第123号住居跡	出土遺物（2）	422
第380図	第123号住居跡	出土遺物（3）	423
第381図	第124号住居跡		425
第382図	第124号住居跡	人骨・牛骨出土状況	426
第383図	第124号住居跡	出土遺物（1）	427
第384図	第124号住居跡	出土遺物（2）	428
第385図	第125号住居跡		429
第386図	第125号住居跡	人骨出土状況	430
第387図	第125号住居跡	出土遺物（1）	431
第388図	第125号住居跡	出土遺物（2）	432
第389図	第125号住居跡	出土遺物（3）	433
第390図	第125号住居跡	出土遺物（4）	434
第391図	第125号住居跡	出土遺物（5）	435
第392図	第126号住居跡		437
第393図	第126号住居跡	人骨出土状況	438
第394図	第126号住居跡	出土遺物（1）	439
第395図	第126号住居跡	出土遺物（2）	440
第396図	第127号住居跡		442
第397図	第127号住居跡	出土遺物	443
第398図	第128号住居跡		444
第399図	第128号住居跡	カマド	445
第400図	第128号住居跡	出土遺物（1）	446
第401図	第128号住居跡	出土遺物（2）	447
第402図	第129号住居跡		448
第403図	第129号住居跡	出土遺物（1）	449
第404図	第129号住居跡	出土遺物（2）	450
第405図	第130号住居跡		451
第406図	第130号住居跡	出土遺物（1）	452
第407図	第130号住居跡	出土遺物（2）	453
第408図	第131号住居跡		455
第409図	第131号住居跡	出土遺物（1）	458
第410図	第131号住居跡	出土遺物（2）	459
第411図	第131号住居跡	出土遺物（3）	460
第412図	第131号住居跡	出土遺物（4）	461
第413図	第131号住居跡	出土遺物（5）	462
第414図	第131号住居跡	出土遺物（6）	463
第415図	第131号住居跡	出土遺物（7）	464
第416図	第132号住居跡		466
第417図	第132号住居跡	出土遺物	467
第418図	第133号住居跡		468
第419図	第133号住居跡	出土遺物（1）	469
第420図	第133号住居跡	出土遺物（2）	470
第421図	第134号住居跡		472
第422図	第134号住居跡	出土遺物（1）	473
第423図	第134号住居跡	出土遺物（2）	474
第424図	第134号住居跡	出土遺物（3）	475
第425図	第135号住居跡		477
第426図	第135号住居跡	カマド	478
第427図	第135号住居跡	出土遺物（1）	479
第428図	第135号住居跡	出土遺物（2）	480
第429図	第136号住居跡		481
第430図	第136号住居跡	カマド	482
第431図	第136号住居跡	出土遺物（1）	483
第432図	第136号住居跡	出土遺物（2）	484
第433図	第136号住居跡	出土遺物（3）	485
第434図	第137号住居跡		487
第435図	第137号住居跡	出土遺物	488
第436図	第138号住居跡		489
第437図	第138号住居跡	出土遺物（1）	490
第438図	第138号住居跡	出土遺物（2）	491
第439図	第139号住居跡		493
第440図	第139号住居跡	出土遺物	494
第441図	第140号住居跡		496
第442図	第140号住居跡	出土遺物	497
第443図	第141号住居跡（1）		498
第444図	第141号住居跡（2）・カマド		499
第445図	第141号住居跡	出土遺物（1）	500
第446図	第141号住居跡	出土遺物（2）	501
第447図	第141号住居跡	出土遺物（3）	502
第448図	第141号住居跡	出土遺物（4）	503
第449図	第141号住居跡	出土遺物（5）	504
第450図	第141号住居跡	出土遺物（6）	505
第451図	第142号住居跡		507
第452図	第142号住居跡	カマド	508
第453図	第142号住居跡	出土遺物（1）	509
第454図	第142号住居跡	出土遺物（2）	510
第455図	第143号住居跡		512
第456図	第143号住居跡	出土遺物（1）	513
第457図	第143号住居跡	出土遺物（2）	514

第458図 第143号住居跡 出土遺物 (3) .....	515
第459図 第143号住居跡 出土遺物 (4) .....	516
第460図 第143号住居跡 出土遺物 (5) .....	517
第461図 第144号住居跡 .....	519
第462図 第144号住居跡 出土遺物 .....	520
第463図 第145号住居跡 .....	522
第464図 第145号住居跡 出土遺物 .....	523
第465図 第146号住居跡 .....	524
第466図 第147号住居跡 .....	525
第467図 第147号住居跡 出土遺物 (1) .....	526
第468図 第147号住居跡 出土遺物 (2) .....	527
第469図 第147号住居跡 出土遺物 (3) .....	528
第470図 第148号住居跡 .....	530
第471図 第148号住居跡 カマド .....	531
第472図 第148号住居跡 出土遺物 .....	532
第473図 第149号住居跡 .....	533
第474図 第149号住居跡 出土遺物 .....	534
第475図 第150・151号住居跡 .....	536
第476図 第150・151号住居跡 出土遺物 .....	537
第477図 第152号住居跡 .....	538
第478図 第152号住居跡 出土遺物 .....	539
第479図 第153号住居跡 .....	540
第480図 第153号住居跡 出土遺物 (1) .....	541
第481図 第153号住居跡 出土遺物 (2) .....	542
第482図 第154号住居跡 .....	543
第483図 第154号住居跡 カマド .....	544
第484図 第154号住居跡 出土遺物 (1) .....	545
第485図 第154号住居跡 出土遺物 (2) .....	546
第486図 第155号住居跡 .....	547
第487図 第155号住居跡 カマド .....	548
第488図 第155号住居跡 出土遺物 .....	549
第489図 第156号住居跡 .....	550
第490図 第157号住居跡 .....	551
第491図 第157号住居跡 出土遺物 (1) .....	552
第492図 第157号住居跡 出土遺物 (2) .....	553
第493図 第1号祭祀跡 (1) .....	555
第494図 第1号祭祀跡 (2) .....	556
第495図 第1号祭祀跡 (3) .....	557
第496図 第1号祭祀跡 出土遺物 (1) .....	558
第497図 第1号祭祀跡 出土遺物 (2) .....	559
第498図 第1号祭祀跡 出土遺物 (3) .....	560
第499図 第1号祭祀跡 出土遺物 (4) .....	561
第500図 第1号祭祀跡 出土遺物 (5) .....	562
第501図 第1号祭祀跡 出土遺物 (6) .....	563
第502図 第1号祭祀跡 出土遺物 (7) .....	564
第503図 第1号祭祀跡 出土遺物 (8) .....	565
第504図 第1号祭祀跡 出土遺物 (9) .....	566
第505図 第1号祭祀跡 出土遺物 (10) .....	567
第506図 第1号祭祀跡 出土遺物 (11) .....	568
第507図 第1号祭祀跡 出土遺物 (12) .....	569
第508図 第1号祭祀跡 出土滑石製模造品 (1)	576
第509図 第1号祭祀跡出土滑石製模造品 (2) .....	577
第510図 第1号祭祀跡出土白玉 (1) .....	579
第511図 第1号祭祀跡出土白玉 (2) .....	580
第512図 第1号祭祀跡出土白玉 (3) .....	581
第513図 第1号祭祀跡出土白玉 (4) .....	582
第514図 第1号祭祀跡出土白玉 (5) .....	583
第515図 第1号祭祀跡出土白玉 (6) .....	584
第516図 第2・3・4号祭祀跡 .....	591
第517図 第2号祭祀跡 出土遺物 .....	592
第518図 第2号祭祀跡出土滑石製模造品 .....	593
第519図 第3号祭祀跡 出土遺物 .....	594
第520図 第4号祭祀跡 出土遺物 .....	595
第521図 第5号祭祀跡 .....	596
第522図 第5号祭祀跡 出土遺物 (1) .....	597
第523図 第5号祭祀跡 出土遺物 (2) .....	598
第524図 第5号祭祀跡 出土遺物 (3) .....	599
第525図 第5号祭祀跡 出土遺物 (4) .....	600
第526図 古墳時代 土壙 (1) .....	603
第527図 古墳時代 土壙 (2) .....	604
第528図 古墳時代 土壙 (3) .....	605
第529図 第1号性格不明遺構 .....	606
第530図 古墳時代 土壙出土遺物 (1) .....	607
第531図 古墳時代 土壙出土遺物 (2) .....	608
第532図 古墳時代 土壙出土遺物 (3) .....	609
第533図 集落北方溝群全体図 .....	612
第534図 集落北方溝群断面図 .....	613
第535図 第1号溝周辺 出土遺物 (1) .....	614
第536図 第1号溝周辺 出土遺物 (2) .....	615
第537図 第1号土器集積 出土遺物 .....	616
第538図 河川路・河畔帯全体図 .....	618
第539図 第1号木製品集中地点 .....	619
第540図 第2号木製品集中地点 .....	620
第541図 河川跡 出土遺物 (1) .....	621
第542図 河川跡 出土遺物 (2) .....	622
第543図 第2号木製品集中地点 出土遺物 .....	622
第544図 河川跡出土木製品 (1) .....	623
第545図 河川跡出土木製品 (2) .....	624
第546図 河川跡出土木製品 (3) .....	625
第547図 河川跡出土木製品 (4) .....	626
第548図 河川跡出土木製品 (5) .....	627
第549図 河川跡出土木製品 (6) .....	628
第550図 河川跡出土木製品 (7) .....	629
第551図 河川跡出土木製品 (8) .....	630
第552図 河川跡出土木製品 (9) .....	631
第553図 河川跡出土木製品 (10) .....	632
第554図 河川跡出土木製品 (11) .....	633
第555図 河川跡出土木製品 (12) .....	634
第556図 河川跡出土木製品 (13) .....	635
第557図 土錐 (1) .....	642
第558図 土錐 (2) .....	643
第559図 土錐 (3) .....	644

第560図 土 玉 (1) .....	647
第561図 土 玉 (2) .....	648
第562図 土 玉 (3) .....	649
第563図 土 玉 (4) .....	650
第564図 土器削片 (1) .....	653
第565図 土器削片 (2) .....	654
第566図 土器削片 (3) .....	655
第567図 土器削片 (4) .....	656
第568図 土器削片 (5) .....	657
第569図 扁平土製品 (1) .....	660
第570図 扁平土製品 (2) .....	661
第571図 扁平土製品 (3) .....	662
第572図 扁平土製品 (4) .....	663
第573図 扁平土製品 (5) .....	664
第574図 扁平土製品 (6) .....	665
第575図 亀甲状土製品 .....	668
第576図 住居跡出土石製品 (1) .....	670
第577図 住居跡出土石製品 (2) .....	671
第578図 滑石製品製作遺物 (1) .....	673
第579図 滑石製品製作遺物 (2) .....	674
第580図 砥 石 .....	676
第581図 石 器 類 (1) .....	677
第582図 石 器 類 (2) .....	678
第583図 石 器 類 (3) .....	679
第584図 石 器 類 (4) .....	680
第585図 石 器 類 (5) .....	681
第586図 石 器 類 (6) .....	682
第587図 石 器 類 (7) .....	683
第588図 石 器 類 (8) .....	684
第589図 石 器 類 (9) .....	685
第590図 石 器 類 (10) .....	686
第591図 石 器 類 (11) .....	687
第592図 貝巣穴泥岩 (1) .....	691
第593図 その他の石関連遺物 .....	692
第594図 住居跡出土木製品 .....	693
第595図 遺構外採集遺物 (1) .....	694
第596図 遺構外採集遺物 (2) .....	695
第597図 遺構外採集遺物 (3) .....	696
第598図 遺構外採集遺物 (4) .....	697
第599図 遺構外採集遺物 (5) .....	698
第600図 遺構外採集遺物 (6) .....	699
第601図 平安時代遺構全体図 .....	702
第602図 平安時代土壤 (1) .....	704
第603図 平安時代土壤 (2)・井戸 .....	705
第604図 平安時代溝群 (1) .....	706
第605図 平安時代溝群 (2) .....	707
第606図 平安時代溝群断面図 .....	708
第607図 平安時代溝・水溜部 .....	709
第608図 平安時代溝出土遺物 .....	710
第609図 土器変遷図 .....	714
第610図 時期別遺構分布図 (1) .....	715
第611図 時期別遺構分布図 (2) .....	716
第612図 人骨・獣骨出土遺構分布図 .....	719
第613図 人骨出土住居跡集成 .....	720
第614図 馬・牛骨出土住居跡集成 .....	721
第615図 第1号祭祀跡配置復原図 .....	724
第616図 第1号祭祀跡壙群復原図 .....	725
第617図 第5号祭祀跡配置復原図 .....	726
第618図 周堤盛土と壁補強土 .....	730
第619図 カマド構築材 .....	731
第620図 カマド煙道部の長さと傾斜 .....	732
第621図 カマドにおける甕の使用実態 .....	733
第622図 カマド外灰層・貯蔵穴 .....	734
第623図 壁口辺部の開裂痕とナデ方向 .....	741
第624図 甕口縁部集成 .....	742
第625図 転用器台と甕 .....	743
第626図 生産関連遺物出土遺構分布図 .....	747
第627図 壁体部のケズリ工程 .....	748
第628図 滑石製品製作関連遺物 .....	749
第629図 赤色顔料関連遺構・遺物 .....	750
第630図 黒色樹脂塗布用土器 .....	751
第631図 黒色樹脂使用遺物 .....	752
第632図 木製農具 .....	754
第633図 建築部材 .....	755
第634図 模倣土器 .....	758
第635図 特殊土器・有文土器 .....	759
第636図 穿孔土器集成 .....	760
第637図 特殊木製品 .....	761

## 表 目 次

第 1 表 発掘調査の経過 ..... 4      第 2 表 遺構番号新旧対照表 ..... 6

# 図版目次

卷頭図版 1	第 4 号住居跡人骨出土状況 第 1 号祭祀跡遺物出土状況	第137・138号住居跡 第139号住居跡
卷頭図版 2	第 1 号祭祀跡出土土器 第 5 号祭祀跡出土土器	図版13 第140・141号住居跡 第142号住居跡 第147号住居跡 第148号住居跡
卷頭図版 3	第 1 号祭祀跡出土滑石製模造品 第135号住居跡出土土器削片	第149・150号住居跡 第152・153号住居跡
卷頭図版 4	ベンガラ関連遺物 樹脂付着土器	第154号住居跡 第157号住居跡
図版 1	城北遺跡全景	図版14 第 4 号住居跡貯蔵穴 第 4 号住居跡木製品出土状況
図版 2	第 4 号住居跡人骨出土状況	第 4 号住居跡柱根 第 7 号住居跡
図版 3	第 4 号住居跡人骨出土状況 第 4 号住居跡貯蔵穴蓋材	第 7 号住居跡カマド 第 8 号住居跡遺物出土状況
図版 4	第125号住居跡人骨出土状況	第 9 号住居跡遺物出土状況
図版 5	第125号住居跡人骨出土状況	図版15 第11号住居跡遺物出土状況 第11号住居跡南東壁際馬骨出土状況
図版 6	第39号住居跡カマド 第32号住居跡カマド左袖芯材	第12号住居跡遺物出土状況 第12号住居跡カマド 第12号住居跡土錐出土状況
図版 7	第 1 号祭祀跡遺物出土状況	第13号住居跡遺物出土状況 第14号住居跡
図版 8	第 5 号祭祀跡遺物出土状況	第15号住居跡遺物出土状況 図版16 第29号住居跡遺物出土状況 第31号住居跡
	第 2 号木製品集中地点遺物出土状況	第32号住居跡遺物出土状況 第33号住居跡遺物出土状況
図版 9	第 1 号住居跡 第 2 号住居跡 第 3 号住居跡 第 5 号住居跡 第 6 号住居跡 第 7 号住居跡 第 8 号住居跡 第 9 ・ 10 ・ 11 ・ 12 ・ 13 号住居跡	第34号住居跡遺物出土状況 第36号住居跡 第39号住居跡遺物出土状況 図版17 第41号住居跡 第42号住居跡遺物出土状況 第43号住居跡遺物出土状況
図版10	第14号住居跡 第15・16・17号住居跡 第18号住居跡 第19号住居跡 第20・21号住居跡 第22号住居跡 第23号住居跡 第21・24・25・26号住居跡	第44号住居跡 第45号住居跡 第46号住居跡 第47号住居跡 第47号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 図版18 第48号住居跡 第50号住居跡遺物出土状況 第51号住居跡遺物出土状況
図版11	第27・28号住居跡 第30号住居跡 第34号住居跡 第35号住居跡 第37・38・39・41号住居跡 第40号住居跡 第119号住居跡 第128号住居跡	第51号住居跡カマド 第52号住居跡 第52号住居跡カマド 第53号住居跡 第53号住居跡カマド 図版19 第54号住居跡
図版12	第129号住居跡 第130号住居跡 第131号住居跡 第134号住居跡 第135号住居跡 第136号住居跡	

第55号住居跡	第95号住居跡遺物出土状況
第56号住居跡	第96号住居跡
第57号住居跡	図版26 第98号住居跡遺物出土状況
第58号住居跡	第98号住居跡カマド
第59号住居跡	第99号住居跡遺物出土状況
第61号住居跡	第99号住居跡カマド
第63号住居跡遺物出土状況	第97号住居跡
図版20 第62号住居跡	第101号住居跡
第62号住居跡カマド	第103号住居跡
第64号住居跡	第104号住居跡
第65号住居跡遺物出土状況	図版27 第105号住居跡遺物出土状況
第68号住居跡	第105号住居跡カマド
第68・69号住居跡	第106号住居跡
第71号住居跡	第107号住居跡
第71号住居跡カマド	第107号住居跡遺物出土状況
図版21 第72号住居跡	第107号住居跡カマド
第72号住居跡遺物出土状況	第107号住居跡貯蔵穴
第73号住居跡遺物出土状況	図版28 第109号住居跡
第73号住居跡炭化材出土状況	第109号住居跡土層断面
第74号住居跡	第110号住居跡
第74号住居跡カマド	第110号住居跡カマド
第75号住居跡	第110号住居跡煙道断面
図版22 第76号住居跡	第111号住居跡
第76号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況	第111号住居跡遺物出土状況
第77号住居跡	図版29 第112号住居跡
第77号住居跡遺物出土状況	第112号住居跡カマド
第78号住居跡	第112号住居跡遺物出土状況
第79号住居跡	図版29 第113号住居跡
第80号住居跡	第114号住居跡
第80号住居跡カマド	第114号住居跡遺物出土状況
図版23 第81号住居跡遺物出土状況	第114号住居跡カマド
第81号住居跡	第114号住居跡南壁遺物出土状況
第81号住居跡炭化材出土状況	図版30 第115号住居跡
第82号住居跡	第115号住居跡土層断面
第83号住居跡	第116号住居跡
第84号住居跡	第117号住居跡
第85号住居跡	第118号住居跡
第85号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況	第118号住居跡遺物出土状況
図版24 第87・88号住居跡	第120号住居跡
第87号住居跡遺物出土状況	図版31 第120号住居跡遺物出土状況
第87号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況	第120号住居跡カマド
第89号住居跡	第120号住居跡遺物出土状況
第90号住居跡遺物出土状況	第121号住居跡
第90号住居跡カマド	第121号住居跡カマド
第92号住居跡遺物出土状況	第122号住居跡
第92号住居跡カマド	第122号住居跡カマド
図版25 第93号住居跡遺物出土状況	第123号住居跡
第93号住居跡カマド	第123号住居跡遺物出土状況
第94号住居跡	図版32 第123号住居跡遺物出土状況
第94号住居跡遺物出土状況	第123号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況
第94号住居跡カマド	

図版33	第124号住居跡遺物出土状況 第124号住居跡人骨出土状況 第125号住居跡遺物出土状況 第125号住居跡人骨出土状況 第126号住居跡遺物出土状況 第126号住居跡人骨出土状況	図版44 第1号立ち株 第2号立ち株 第3号立ち株 第1号溝土層断面 第9号溝水溜め部 第15号溝 第3号土壤 第4号土壤
図版34	第128号住居跡カマド 第130号住居跡カマド 第131号住居跡カマド 第132号住居跡 第133号住居跡カマド 第134号住居跡カマド 第136号住居跡カマド 第138号住居跡カマド	図版45 第6号土壤 第8号土壤 第9号土壤 第13号土壤 第14号土壤 高位置住居跡土層断面 (S J 46) 低位置住居跡土層断面 (S J 7)
図版35	第139号住居跡カマド 第140号住居跡カマド 第141号住居跡遺物出土状況 第141号住居跡カマド 第141号住居跡東壁断面 第141号住居跡東壁際炭化材	図版46 坏(1) 図版47 坏(2) 図版48 坏(3) 図版49 坏(4) 図版50 坏(5) 図版51 坏(6) 図版52 坏(7) 図版53 坏(8) 図版54 坏(9) 図版55 坏(10) 図版56 坏(11) 図版57 坏(12) 図版58 坏(13)
図版36	第141号住居跡北壁断面 第141号住居跡南壁断面 第143号住居跡遺物出土状況 第143号住居跡カマド 第145号住居跡カマド 第145号住居跡遺物出土状況 第142号住居跡カマド 第155号住居跡遺物出土状況	図版59 坏(14) 図版60 坏(15) 図版61 坏(16) 図版62 坏(17) 図版63 坏(18) 図版64 坏(19) 図版65 坏(20) 図版66 坏(21) 図版67 坏(22) 図版68 坏(23) 図版69 坏(24)
図版37	人骨出土状況	図版70 高坏(1)
図版38	獸骨出土状況(1)	図版71 高坏(2)
図版39	獸骨出土状況(2)・カマド袖構築材(1)	図版72 高坏(3)
図版40	カマド袖構築材(2)	図版73 高坏(4)
図版41	第1号祭祀跡最上面 第1号祭祀跡最下段 第1号祭祀跡遺物出土状況 第1号祭祀跡石製模造品出土状況 第1号祭祀跡臼玉出土状況 第1号祭祀跡ピット内遺物陥落状況 第1号祭祀跡壺内土層断面	図版74 高坏(5) 図版75 高坏(6) 図版76 脚部欠損高坏 図版77 挽・短頸壺(1) 図版78 挽・短頸壺(2) 図版79 鉢(1) 図版80 鉢(2) 図版81 鉢(3)
図版42	第1号祭祀跡獸骨出土状況 第2号祭祀跡遺物出土状況 第3号祭祀跡遺物出土状況 第4号祭祀跡遺物出土状況 第5号祭祀跡Aブロック遺物出土状況 第5号祭祀跡Bブロック遺物出土状況 第5号祭祀跡Cブロック遺物出土状況	
図版43	第1号木製品集中地点遺物出土状況 第1号木製品集中地点出土部材 第1号木製品集中地点遺物出土状況 河川跡出土木製品 第2号木製品集中地点遺物出土状況	

- 図版82 甌（1）  
図版83 甌（2）  
図版84 甌（3）  
図版85 甌（4）・小型甕（1）  
図版86 小型甕（2）  
図版87 小型甕（3）  
図版88 小型甕（4）  
図版89 小型甕（5）  
図版90 小型甕（6）・台付甕  
図版91 甕（1）  
図版92 甕（2）  
図版93 甕（3）  
図版94 甕（4）  
図版95 甕（5）  
図版96 甕（6）  
図版97 甕（7）  
図版98 甕（8）  
図版99 甕（9）  
図版100 甕（10）  
図版101 甕（11）  
図版102 甕（12）  
図版103 甕（13）  
図版104 甕（14）  
図版105 甕（15）  
図版106 甕（16）  
図版107 甕（17）  
図版108 甕（18）  
図版109 甕（19）  
図版110 甕（20）  
図版111 甕（21）  
図版112 甕（22）  
図版113 甕（23）  
図版114 甕（24）  
図版115 甕（25）  
図版116 埴（1）・小型壺（1）
- 図版117 埴（2）・小型壺（2）  
図版118 埴（3）・壺（1）  
図版119 壺（2）  
図版120 壺（3）  
図版121 壺（4）  
図版122 壺（5）  
図版123 壺（6）  
図版124 大型壺（1）  
図版125 大型壺（2）  
図版126 ミニチュア土器・手捏土器  
図版127 須恵器・模倣土師器  
図版128 転用土器（1）  
図版129 転用土器（2）・平安時代須恵器  
図版130 土錘  
図版131 性格不明土製品  
図版132 線刻文土器片・砥石  
図版133 滑石製品関連遺物  
図版134 石器類（1）  
図版135 石器類（2）  
図版136 石器類（3）  
図版137 木製品（1）  
図版138 木製品（2）  
図版139 木製品（3）  
図版140 木製品（4）  
図版141 獣骨（1）  
図版142 獣骨（2）  
図版143 人骨（1）  
図版144 人骨（2）  
図版145 人骨（3）  
図版146 樹脂付着土器  
図版147 甕口縁部  
図版148 壺口辺部（1）  
図版149 壺口辺部（2）  
図版150 壺口辺部（3）  
図版151 壺口辺部（4）・内面

# I 調査の概要

## 1 発掘調査に至るまでの経過

建設省では、首都圏における交通量の増大に対処するため、さまざまな施策を推し進めてきた。埼玉県においても昭和30年代の後半から特に交通量の厳しい幹線道路を中心に、各種のバイパス建設が計画された。昭和40年代後半にはその大綱が示され、埋蔵文化財の取り扱いについての事前協議が開始された。

昭和46年には各種バイパスの建設計画に伴い、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から埼玉県教育局文化財保護室長（当時）あて、昭和46年11月25日付大国調146号をもって「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパス及び一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について（依頼）」があった。これを受け文化財保護室では、埋蔵文化財包蔵地地図と照合した結果、各バイパス建設予定地内には周知の埋蔵文化財が所在することを確認し、その旨教文第854号をもって解答するとともに、今後は各事業計画に沿って順次対応していくことにした。

上武道路は、熊谷市西別府を起点とし、深谷市の北東部をかすめて利根川を渡り、群馬県伊勢崎市から前橋市に至る全長約40kmの道路である。このうち約5kmが埼玉県を通過するが、県内の事業予定地については埋蔵文化財の所在が不明確なので、改めて分布調査を実施する必要があった。そこで、昭和62年11月5日付大国調155号をもって建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所長から県教育委員会教育長あて「一般国道17号（上武道路）改築工事の実施に伴う埋蔵文化財の所在について（照会）」があったのを受け、県内の事業予定地全線にわたり詳細な分布調査を実施した。その結果、同改築予定地内に10か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されたので、昭和62年12月7日付教文第1091号をもって県教育委員会教育長から大宮国道工事事務所長あて次のとおり回答した。

- (1) 上記の埋蔵文化財については、工事着手に先立って発掘調査を実施すること。
- (2) 発掘調査の実施に際しては、第1次調査を実施して事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地の規模及び性格等について明確にした後、第2次調査を実施すること。
- (3) 第1次調査の実施については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と別途協議すること。
- (4) 第2次調査の実施については、別途当教育局文化財保護課と協議すること。

この回答に基づき、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が第1次調査を実施した結果、深谷市内および熊谷市内に所在する10か所の埋蔵文化財包蔵地について、第2次調査を実施することが必要となつた。そこで県教育委員会教育長から大宮国道工事事務所長あて、昭和63年3月31日付教文第1569号で事業予定地内に所在する埋蔵文化財については、事前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知した。

これらの10か所の遺跡は昭和63年度から調査が開始された。

## 2 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

### (1) 発掘

平成元年度

理 事 長 荒 井 修 二  
副 事 長 百瀬 陽 二  
常務理 事 長 古 市 芳 之  
兼 管 理 部  
管 理 部

管 理 課 長 関 野 栄 和 一  
主 事 事 長 江 田 美 智 子  
主 事 事 長 岡 野 朗 人  
主 事 事 長 本 庄 藤 勝 秀  
調査研究部

理 事 長 吉 川 國 男  
兼 調査研究部長  
調査研究部副部長  
調査研究第一課長  
調査員 員  
調査員 員

平成 2 年度

理 事 長 荒 井 修 二  
副 事 長 早 川 智 明  
常務理 事 長 古 市 芳 之  
兼 管 理 部  
管 理 部

庶 務 課 長 高 田 弘 義 晋  
主 事 事 長 松 本 美 智 子  
主 理 課 長 岡 野 栄 和 一  
主 理 課 長 関 野 美 人 秀  
調査部

理 兼 調査部 長 吉 川 國 男  
調査部副部長 塩 野 博 信  
調査第一課長 坂 野 和 信  
主任調査員 劍 持 夫  
主任調査員 立 石 盛 俊  
調査員 員 岩 坂 俊 守  
調査員 員 山 川 守 章  
調査員 員 村 田 章 聖  
調査員 員 福 田

### (2) 整理・報告書刊行 (平成 4~6 年度)

理 事 長 荒 井 修 二 (4)  
副 事 長 早 川 智 明 (4)  
専 務 理 事 長 富 橋 好 嗣 (5)  
常 務 管 理 部  
管 理 部

理 兼 調査部 長 栗 原 文 藏 (4)

中 小 島 川 利 良 (5)

管 理 部  
庶 務 課 長 萩 原 川 和 夫 (4・5)  
主 查 事 員 長 及 賢 田 池 孝 之 (4・5)

主 専 門 経 調 理 調 設 課 長 菊 田 池 有 清 三 久 (4・5)  
主 主 事 員 長 関 野 栄 一 (4・5)  
主 主 事 員 長 江 田 滔 美 美 智 子 (4・5)  
主 主 事 員 長 長 福 腰 昭 雄 (4・5)

資 料 部  
資 料 部 長 中 小 島 川 利 良 (4)

中 小 塩 野 利 良 (5)

資 料 部 副 部 長 增 田 逸 朗 (4)

谷 井 彪 (4)

專 門 調 査 員 兼 資 料 整 理 第 二 課 長 小 久 保 徹 (4・5)

水 村 孝 行 (4)

主 任 調 査 員 山 川 守 男 (4)

※報告書刊行年度の現職以外は該當年度をカッコ内の数字で表わす。

### 3 調査の経過

#### ○発掘調査（平成元・2年度）

狭長な調査区を遺構の分布と道路の区面によって4つの小調査区に分け、各調査区間を第1表に示すように移動しながら調査をすすめた。B・C区の区分は本来存在した農道による。またアルファベットによる調査区の表記は本項のみの便宜的使用である。

**平成元年度**　　調査担当者、宮井・山川で開始した。4・5月：A区からD区に向けて表土除去と遺構確認を始めた。土器片や焼土・炭化物の出土から遺構の存在は明らかなものの、土の識別が難しく、プラン確認は困難をきわめた。7月：5月末より集落北端部の住居跡の調査をすすめたが低位置に存在するため、床面からの地下水噴出と周辺の水田からの農業用水の流入によって調査続行不可能となった。このため高位置で水の影響を受けないD区に移動したが、地震による液状化現象の影響を受け、壁面と床面の確定は非常に難しかった。11月：D区の20軒の調査が終了した時点で各遺構の空中写真撮影と航空測量を17日に実施した。28日に第125住居跡よりはじめて人骨を検出した。12月：第125住居跡に隣接する第124号・第126号住居跡からも人骨を検出した。平成2年1月：3軒の住居跡から検出した人骨の処理を検討した。18日に聖マリアンナ医科大学森本岩太郎氏に現地にて指導を受けた。24日には東京国立文化財研究所青木繁夫氏の指導で第124号・第125号住居跡の人骨の取り上げを行なった。D区の調査は表土除去未済の西半部を残し、調査の主体は水の引いたB区へ移動したが、集落北端に位置する第4号住居跡からも人骨を検出した。19日は再び青木氏の指導で、第126号住居跡の人骨を発砲ウレタンで梱包した。3月：28日に第4号住居跡の人骨を発砲ウレタンで梱包した。

**平成2年度**　　調査担当者、立石・山川で開始した。5月：B区の調査を終え、31日にB区各遺構の空中写真撮影と航空測量を実施した。6月：調査の主体はC区に移った。8日には人骨存在の重要性などを中間報告のかたちで記者発表した。D区は残りの西半の表土を除去した。8月：調査担当者に劍持・福田が加わり、補助員も増員してD区西半の調査を開始した。10月：調査担当者の改変により剣持・石坂が担当し、併行して調査をすすめた。12月：遺構の検出は終了し、13日に各遺構の航空測量と全景の空中撮影を実施した。またこれと前後して調査の成果を12日に記者発表し、15日に一般県民対象の現地説明会を開催して125名の見学者を集めた。平成3年1月：出土遺物・図面・写真を整理し、器材を撤収して一連の発掘作業を完了した。

#### ○整理・報告書刊行（平成4・5・6年度）

約510点の遺構実測図と、コンテナ約400箱の土器の整理から開始した。各作業に費やした期間は土器接合に平成4年4月から平成5年9月、遺物実測に平成5年2月から平成6年10月、トレスに平成5年4月から平成6年11月、写真撮影に平成6年10月から11月である。平成6年10月以降、版組み、原稿執筆をすすめ本書の刊行となった。

第1表 発掘調査の経過

年度	月	河川跡 (A)	農道北 (B)	農道—県道 (C)	県道南 (D)
平成元年度	4	表土除去			(無)—住居跡 H—祭祀跡 K—土壤 D—溝 W—木製品集中 E—井戸
	5	w-1	表土除去	K-1 D-2 3	
	6		1 2 5 D-4 5 6 7 8		
			D-1		
	7	水没	水没		
	8			表土除去	134 135 130 141
	9				129 136 127 128
	10				K-10 K-12 18 19
	11				133 137 138 D-24 131 132 139 140 D-14 16 142 146 K-11 15 21
	12				145 K-16 20 151 148 149 150 125 143 144 147 D-15 18 20
	1		4 6 8		124 154 155 157 D-21 23 25 152 153 156 K-17 119 126
	2		13 10		
	3	H-3 E-1	3 9 15 16 7 11 12 14 17 18		
平成2年度	4		29 31 32 33 35 40 H-1 34 37 46		
	5		20 21 28 38 39 24 25 26 27 41 19 22 23 30 36		
	6			47 50 54 55 56 49 51 53	K-7 西半表土除去
	7	水没	水没	52 57 58 59 63 65 68 71 74 75 78	K-4
	8			80 81 94 103 D-11 88 95 99 101	
	9			97 98 K-8 87	104 106 111 120 K-9 14 105 K-13 H-2
	10	表土除去		86 96 100 102 42 43 44 45 64	118
	11	H-5 W-2		60 66 67 69 70 D-9 76 77 79 82 83 84 85 90 93	K-6 D-12 107 116 112 114 123
	12	H-4		72 89 91 92 48 61 62 73	K-2 3 5 D-10 108 109 121 122 D-19 22 115

(1月は現場撤収作業)

## 4 調査の方法

城北遺跡は現地表下1.5m前後の深さに埋没し、土層の識別も難しかったため、土器片や焼土・炭化物から遺構の存在が十分推定できたが、その範囲や数は不明瞭な状態で調査を開始した。厚い表土層から部分的には旧表土の遺存の可能性も考えられたが、遺構プランの確認には困難をきわめたため、遺物の出土状況を観察しながらある程度明瞭なプランが確認できる面まで掘り下げた。また、遺跡は自然堤防上に形成され、東側が高く西側へ向かって傾斜している。このため、調査区の東縁は道路建設用地のラインに沿うものとなっているが、西縁は現地表面からの深さが深くなるのと同時に、用水路に面しているので、遺構の分布が途切れると考えられる地点で表土除去を止め、建設用地ラインに合わない不整形になった。

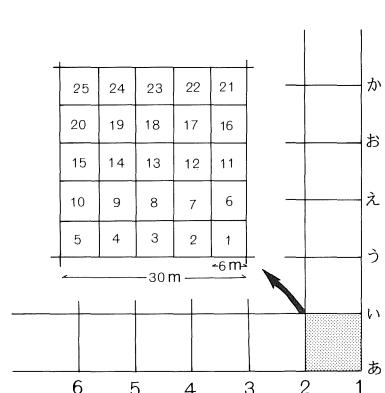
調査区には全面をカバーするグリッドを組んだ。国家標準直角座標系に基づき、調査区最南端のX=23,370m、Y=-44,970mを起点としたが、下図に示すように東から西へ向かう数字と南から北へ向かう平仮名の組み合せによる30mの大グリッドと、その中を25分割する6mの小グリッドで遺跡内の位置を示した。本報告書では大グリッドのみで位置をしめしたが、発掘現場での記録にはすべて小グリッドを使用した。

前項で述べたように出水等の事情により連続した地点の調査をすることはできなかった。このため、調査を開始した集落北端から遺構番号をつけ始めたが、途中で県道以南に調査を移した時点で、県道以南の遺構はすべて100番から始めることにした。調査終了時点では県道以北の住居跡の数が100軒を越えた反面、その他の遺構は県道を挟んで番号が大きく開いてしまった。さらに、遺跡全体を通して連続する番号の遺構位置が大きく乱れことになったため、整理の段階で北から南へ向かって遺構番号が連続することを原則にして、新番号をつけ直した。新旧番号の対照一覧は第2表に示した。

遺構図のうち、断面図はすべて発掘現場において手計りで実測したが、1/20平面図の大部分は航空測量に依った。ただし、良好な状態で遺物を検出した遺構や1/10のカマド平面図は手計りで実測した。また、第1号～第40号住居跡と、第127号～第157号住居跡の各遺構の全景写真は直上からの空中撮影とし、それ以外は地上撮影を行った。

カマドのセクションベルトは主軸ラインを住居跡A-A'ラインと共に通させて設定し、住居の埋没状況と合わせて土層観察するとともに、直交方向のセクションベルトは袖の両外側の土層も加えてカマド外灰層の状況も観察した。

住居跡からの遺物は、その住居の時期をおさえるため、カマド・貯蔵穴周辺および床面上の土器の位置を記録することに重点を置き、覆土中の土器は層位を確認して取り上げる方法をとった。



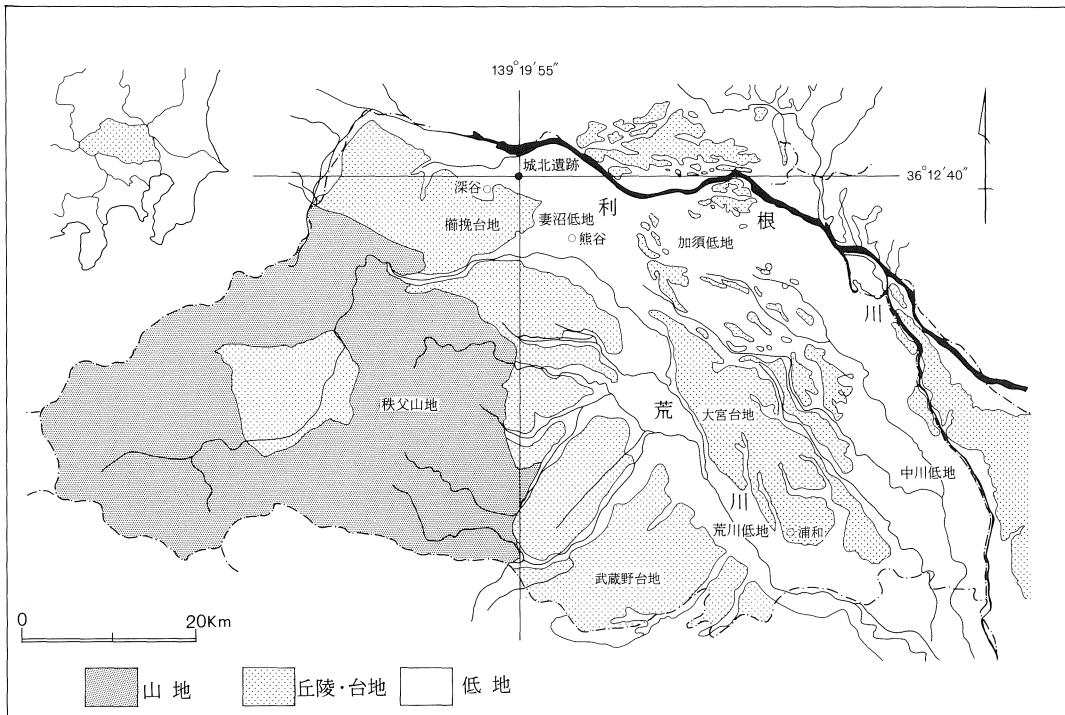
第2表 遺構番号新旧対照表（左：新番号 右：旧番号）

住居跡 [SJ]		39	27	79	85	119	130	祭祀跡 [SH]		9	11
		40	26	80	62	120	133	1	SH	10	12
1	2	41	35	81	63	121	135	2	SHS	11	—
2	3	42	99	82	86	122	132	3	土器集中	12	—
3	4	43	98	83	89	123	131	4	SHN2	13	100
4	5	44	97	84	90	124	T101	5	SHN1	14	102
5	1	45	96	85	78	125	T100	土壙 [SK]		15	103
6	6	46	30	86	79	126	T102	1		16	101
7	16	47	44	87	73	127	105	2	6	17	108
8	7	48	95	88	66	128	102	3	2	18	105
9	10	49	43	89	91	129	104	4	3	19	109
10	9	50	45	90	74	130	103	5	4	20	104
11	11	51	49	91	93	131	107	6	5	21	106
12	12	52	51	92	92	132	X102	7	—	22	110
13	8	53	50	93	72	133	106	8	—	23	107
14	17	54	48	94	64	134	100	9	108	24	—
15	14	55	47	95	65	135	101	10	X101	25	—
16	15	56	46	96	77	136	109	11	104	井戸 [SE]	
17	18	57	52	97	70	137	110	12	102	1	1
18	19	58	53	98	71	138	111	13	109	性格不明 [SX]	
19	37	59	54	99	69	139	112	14	107	1	100
20	42	60	94	100	75	140	113	15	103	木製品集中地点	
21	41	61	152	101	68	141	108	16	106	1	木器集中地点
22	40	62	151	102	76	142	114	17	X103	2	木器集中地点2
23	13	63	56	103	67	143	122	18	100	土器集積	
24	36	64	81	104	139	144	123	19	101	1	土器集中地点
25	34	65	55	105	138	145	115	20	105	立ち株	—
26	33	66	88	106	136	146	116	21	—	1	木根1
27	32	67	87	107	140	147	121	2	3	2	木根2
28	31	68	57	108	141	148	120	3	4	3	—
29	20	69	84	109	146	149	119	溝 [SD]		その他	
30	38	70	80	110	147	150	118	4	6	河川跡	古流路
31	21	71	58	111	137	151	117	5	7		
32	22	72	149	112	142	152	129	6	8		
33	23	73	150	113	143	153	124	7	9		
34	24	74	59	114	148	154	125	8	5		
35	25	75	60	115	153	155	126				
36	39	76	83	116	145	156	128				
37	29	77	82	117	144	157	127				
38	28	78	61	118	134						

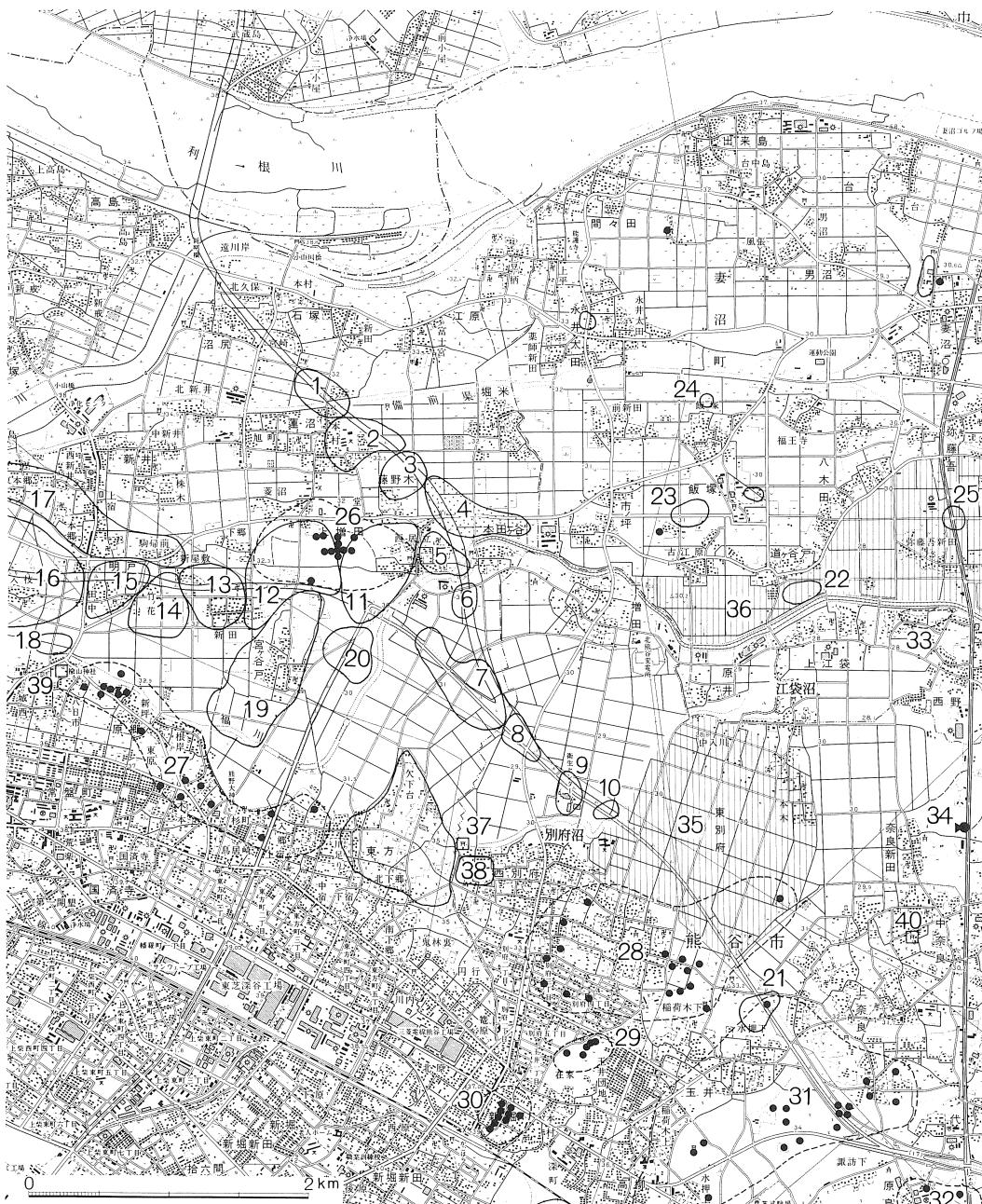
## II 遺跡の立地と環境

埼玉県北部に位置する深谷市は、南半の台地と北半の低地とで大きく二分され、前者は櫛挽台地、後者は妻沼低地と呼ばれている。城北遺跡は妻沼低地中央の自然堤防上に立地し、北方の利根川現流路からも、南方の櫛挽台地縁辺からも2kmの等距離にある。妻沼低地の大きな特徴は古くから利根川の氾濫地帯としてその影響を受けてきたことであるが、もう一方の主要河川荒川が低地中央部に形成した新荒川扇状地によって東西に分断されている。このため扇状地の東西両側には水田地帯が広がる一方、砂礫層の扇状地上は水はけ良好で、近年まで桑畠として利用され、扇端部各所には湧水地点も見られる景観を呈してきた。また、東西では水系が異なり、東部の河川は荒川に注ぐのに対して、西部の小山川・福川などは利根川の支流となっている。この様に区分される妻沼低地西部は利根川と櫛挽台地とに挟まれるが、この間には中小河川が東流し、古くはその流路も複雑に蛇行していたようである。その結果として低地内には多数の小規模な自然堤防と谷状の流路跡が形成され、前者は洪水時には浮き島状となるため矢島・大塚島・高畠などの地名となり、後者は宮ヶ谷戸・道ヶ谷戸・新ヶ谷戸などの地名となって残っている。

岡部町岡付近から東流してきた福川は、宮ヶ谷戸から本田ヶ谷でクランク状に曲がり、行田市酒巻の利根川との合流点に向かってさらに東流する。この間約20kmに及ぶが、城北遺跡はこのちょうど中間点の北岸にあたる。以下城北遺跡を中心とした福川中流域の遺跡の変遷を概観し、妻沼低地西部における歴史的環境の一端をまとめてみたい。

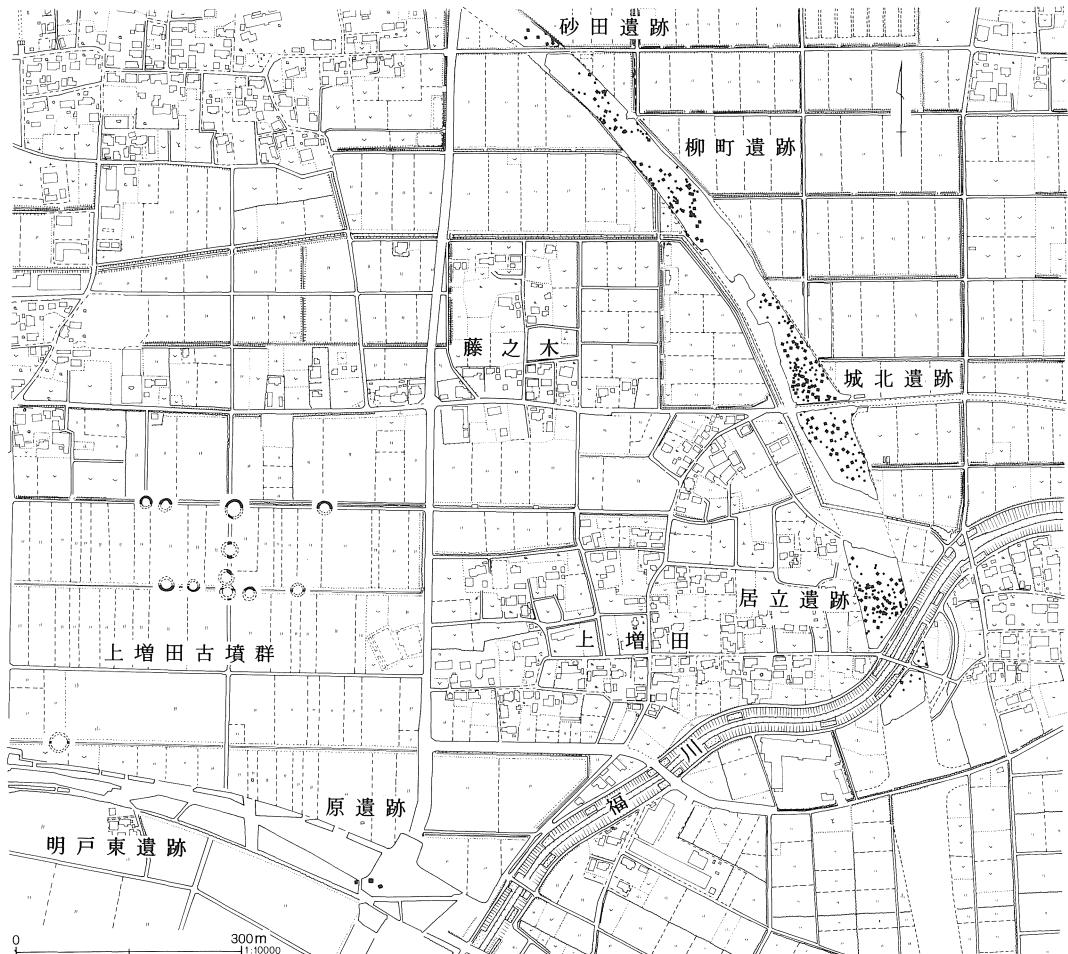


第1図 埼玉県の地形と遺跡の位置



- |          |           |           |            |           |             |
|----------|-----------|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1 ウツギ内遺跡 | 8 根絡遺跡    | 15 本郷前東遺跡 | 21 新ヶ谷戸遺跡  | 28 別府古墳群  | 35 別府条里遺跡   |
| 2 砂田遺跡   | 9 横間栗遺跡   | 16 上敷免遺跡  | 22 道ヶ谷戸遺跡  | 29 在家古墳群  | 36 道ヶ谷戸条里遺跡 |
| 3 柳町遺跡   | 10 関下遺跡   | 17 上敷免北遺跡 | 23 飯塚南遺跡   | 30 籠原裏古墳群 | 37 湯殿神社祭祀遺跡 |
| 4 城北遺跡   | 11 原遺跡    | 18 八日市遺跡  | 24 飯塚遺跡    | 31 玉井古墳群  | 38 西別府廃寺    |
| 5 居立遺跡   | 12 明戸東遺跡  | 19 宮ヶ谷戸   | 25 弥藤吾新田遺跡 | 32 原島古墳群  | 39 猿山神社     |
| 6 前遺跡    | 13 新田裏遺跡  | 堀ノ内遺跡     | 26 上増田古墳群  | 33 上江袋古墳群 | 40 奈良良神社    |
| 7 清水上遺跡  | 14 新屋敷東遺跡 | 20 東川端遺跡  | 27 木の本古墳群  | 34 横塚山古墳  | (●は古墳)      |

第2図 周辺の主な遺跡

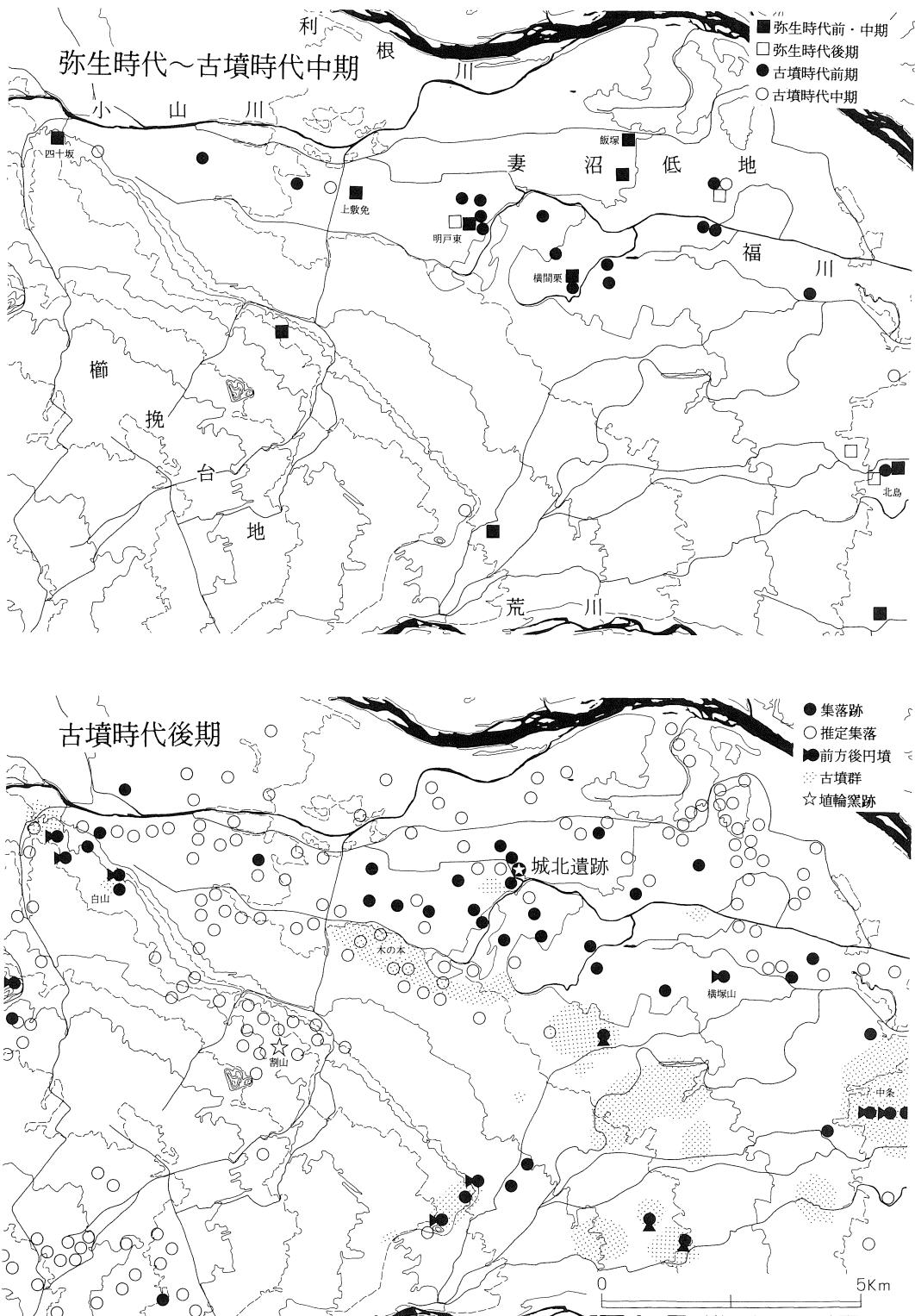


第3図 隣接遺跡の遺構分布

遺構の明らかな縄文時代の遺跡が福川中流域に登場するのは後期以降である。新屋敷東遺跡や明戸東遺跡を中心とする地域をはじめ低地帯に点在する当該期の遺跡の分布は、中期の遺跡が台地上に多く、低地に少ない状況ときわめて対照的である。

弥生時代前期から中期中葉までの遺跡分布もひき続き福川中流域の低地帯に散在的であるが、全県的に眺めると当該期の遺跡が最も集中する地域と言える。須和田期の再葬墓群として著名な上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土した。再葬墓や土器を伴う土壙はほかに明戸東・横間栗・飯塚・飯塚南の4遺跡で検出されているが、同時期の住居跡も横間栗遺跡に隣接する閑下遺跡や、飯塚南遺跡でも検出されている。中期後半のものは宮ヶ谷戸・清水上の2遺跡で中部高地系櫛描文土器が出土地である。後期の遺跡としては明戸東遺跡と弥藤吾新田遺跡があり、前者では比企地方で主体を占める吉ヶ谷式土器のほかに東関東系の櫛描文土器が出土し、後者では南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代前期には遺跡数が若干増加する傾向を見せる。福川中流域では、明戸東・清水上・根絡・



第4図 櫛挽台地・妻沼低地の遺跡分布（大里都市1992を改変）

弥藤吾新田各遺跡で集落跡が、また上敷免・東川端の2遺跡で方形周溝墓群が検出されている。集落跡からはS字状口縁台付甕が、東川端遺跡第2号墓からはパレス壺が出土しているがいずれも新相を示す前期後半のものである。前期の遺跡数増加傾向は中期になると全く逆転し、カマド出現以前の段階の住居跡の確認はほとんど皆無に近い。

カマドを付設する中期後半以降、須恵器模倣壺の出現期を経て、古墳時代後期には遺跡数は一挙に増加する。福川中流域の自然堤防上に営まれた集落跡は上敷免・新屋敷東の2遺跡を中心とする群（270軒以上）、砂田・柳町・城北・居立の4遺跡をあわせた群（350軒以上）、そして道ヶ谷戸・飯塚南の2遺跡をあわせた群（30軒以上）の3つに大きく分かれる。また、この時期は古墳の造営も活発になる。古墳群は立地によって福川沿岸の自然堤防上のものと、台地縁辺部のものとに分けられるが、墳丘の遺存状態が不良のため、発掘調査等で詳細の判明しているものは少なく、6世紀代以降のものが大部分と考えられる。城北遺跡西方には上増田古墳群が存在するが、上増田や藤之木の集落で埴輪の出土や古墳存在の伝承があることから古墳群の東限も推定できる。集落跡と近接していたことは明らかだが、具体的な相互関係の解明は今後の課題である。

古墳時代終末から律令期に至って、中心的な遺跡は台地上に移行する。この地域には幡羅郡が設置され、台地上に「原郷」の地名が残るとともに、西別府廃寺も存在する。また、縁辺部には式内社である楡山神社と奈良神社があり、その中間の湯殿神社境内には別府沼への湧水地点祭祀を行なった西別府祭祀跡が存在する。この祭祀跡出土の馬形石製品・櫛形石製品・有溝円板などは新屋敷東・本郷前東両遺跡でも河畔から出土しており、地域的な特色となっている。一方、低地帯には条里制が施行されるとともに集落も集束状態となる。上敷免・新屋敷東・柳町各遺跡などではこの時期になっても継続的に集落が営まれ、新屋敷東遺跡では総柱の掘立柱建物群が、また柳町遺跡でも庇付掘立柱建物群が検出された。一方、東川端・清水上・根絡各遺跡はこの時期に新たに形成される集落と言える。この様な中にあって城北遺跡は6世紀なかばをもって終息していた。

以上述べてきた概観を次のようにまとめておく。第4図に示したように弥生時代前期から古墳時代中期に至るまで遺跡分布の中心は妻沼低地にある。これは群馬県西部から児玉地域に入った人や物資が女堀川・小山川、さらに福川を通じて流入した結果と見ることができる。ただし流入ペースは一律ではなく、弥生時代後期の吉ヶ谷式土器をもつ明戸東遺跡の在り方は大きな問題をはらみ、古墳時代中期の集落の減少傾向も検討を要する課題である。古墳時代後期の遺跡の急増は開発の進展と考えられ、福川がもつ意味も人や物資の流入ルートから流通ルートへと変化した。古墳の存在から考えると、寅稻荷古墳などの前方後円墳が築造された福川最上流部は北武藏の先進地域であった児玉地域と福川流域とを結ぶ要衝であり、中流域の数少ない前方後円墳である横塚山古墳の存在も福川の交通との関係でとらえられる。また割山埴輪窯の製品の運搬にも福川が利用されたと考えられる。そして福川最下流には埼玉政権と関係の深い酒巻古墳群が存在することを強調しておく。この傾向は律令期にも継続し、幡羅郡の中心と考えられている原郷や、榛沢郡の正倉とされる中宿遺跡なども福川が台地に近接する地点に存在するのである。

#### 主要参考文献

大里都市文化財担当者会 1992 「大里地域の遺跡Ⅰ」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会

### III 遺跡の概観

#### ○地形

城北遺跡は緩く蛇行する河川の内側に形成された自然堤防上に位置し、最大幅60m、長さ400mにおよぶ狭長な調査区内からは古墳時代後期の大規模な集落跡を検出した。これだけの規模の集落跡が埋蔵されているとは予想できなかつたが、これは堤防の最高位部までもが現地表下深くに埋蔵されていたためである。

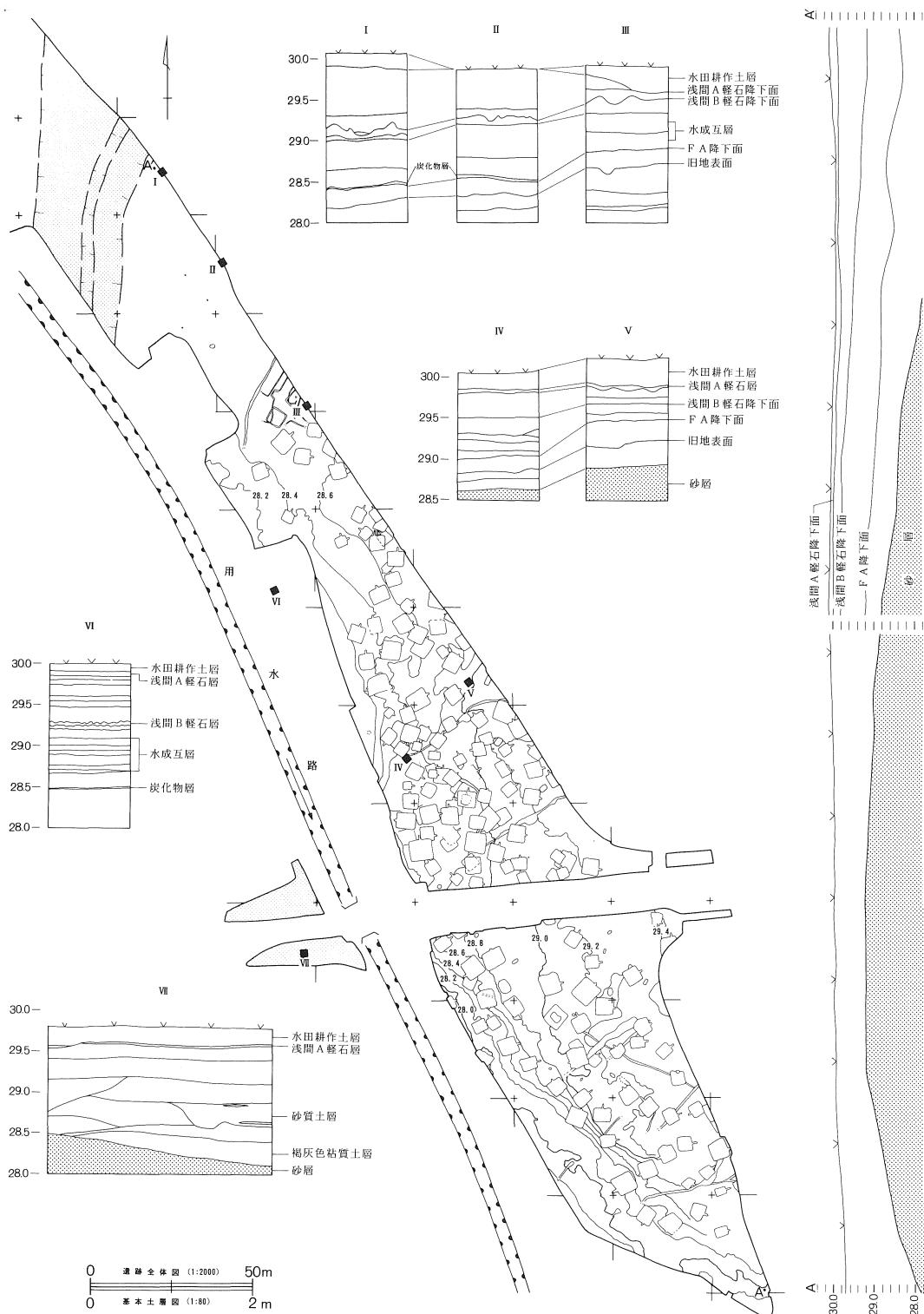
第5図には城北遺跡に隣接する同時期の遺跡である砂田・柳町・居立3遺跡の住居跡分布と、各遺跡の遺構確認面に住居跡の床面レベルを落とした高低推移を示したが、城北遺跡は遺構確認面と住居跡床面レベルが際立って低いことが看取できる。砂田・柳町遺跡の自然堤防は近代以降の粘土採取によって削平されているため比高差はさらに大きかったことが推察される。第2の相違点は遺構下の自然堤防の地山層であり、砂田・柳町・居立の各遺跡は堅固な粘土層上に成り立つのに対して城北遺跡下の自然堤防は砂層によって形成されており、大部分の遺構はこの地山砂層に掘り込まれていた。これまで深谷バイパスや上武道路関係の調査報告書の中でも再三触れられているように、9世紀から10世紀にかけて起こった地震は噴砂を発生させ、その時点で埋没していた遺構に痕跡を残している。しかし、城北遺跡では様相が異なり、地山砂層そのものが液状化現象を起こし床面や壁面と接する遺構内の覆土と攪拌状態となった。具体的には液状化した砂が噴砂となって粘土質覆土の割れ目に入り込む一方で、床面際・壁面際ではブロック状になった覆土や土器片・礫などが地山砂層中にもぐり込むという状態であり、このため調査時に壁面・床面を確定するのが困難な住居跡も多数存在した。本報告書中でも第129号・第145号住居跡など数軒で土層断面に見られる液状化現象を図示した。後に述べるように城北遺跡からは他遺跡にあまり例を見ない特殊な遺構・遺物が検出されたが、その特性の根源は集落の立地にあったと考えることもできる。

第6図には調査区内的微地形図と基本土層図を示した。微地形図中の等高線は調査時の遺構確認面のもので、土層断面図中の旧地表面よりも下のものである。しかし、基本的には集落の中央東側を最高所とし、外縁に向かってレベルが下がる傾向を見て取ることができる。

基本土層図は調査区内の7地点のものだが、鍵層となる榛名山二ツ岳火山灰(FA)降下面(6世紀初頭)、浅間山B軽石降下面(1108年)、同A軽石降下面(1783年)を中心に地点別に特徴を述べみたい。まず、集落外縁部(I・II・III・VI)では、FA下降面、旧地表面とも河川跡に向かって南から北へ傾斜していた。大きな特徴として、集落最北端第1号溝以北の河川跡に至るまでの広範囲でFA降下面直上に厚さ4cmほどの炭化物層が広がっていた。また、FA降下面と浅間山B軽石降下面の中間に水成の互相が存在し、6世紀以降、12世紀以前のある期間に、河川の水の影響を多分に受けていたことがわかる。IVは地点が離れるが、IIとほぼ同様の土層堆積状況である。次に集落中央部の土層(IV・V)を見ると、FA降下面以下は河川跡に向かい東から西へ平行に傾斜していた。集落の縁辺部という地点からIIとIVを比べると地山砂層の有無以外はFA降下面、旧地表面ともレベルはほぼ同じである。集落西方に離れたVIIでは地山砂層は逆に西から東へ傾斜し、集落から見て



第5図 砂田・柳町・城北・居立遺跡の遺構分布



第6図 城北遺跡の微地形と基本土層

河川跡対岸であることを示している。右端の図は遺跡の北西端と南東端を結ぶラインの高低推移だが最高地点から南北両方向へ下る地山砂層の傾斜は北側の方が緩やかである。北半には各鍵層のレベル推移を入れたが、上層になるにつれて傾斜が緩くなり、浅間山A軽石が降下した18世紀には現在と同様に平坦化していた。

以上が調査区内で観察できた地形的特徴だが、調査区東側の自然堤防後背地の状況を推察する資料は乏しく、地元関係者の話では県道南調査区の東方約150m地点の地表下は礫層であるとのことであった。

#### ○遺構・遺物

検出した遺構は古墳時代後期のもののほかに平安時代のものがあるが、前者はさらに住居跡を中心とした集落跡とその北方の河川跡および河畔帯とに分けられる。

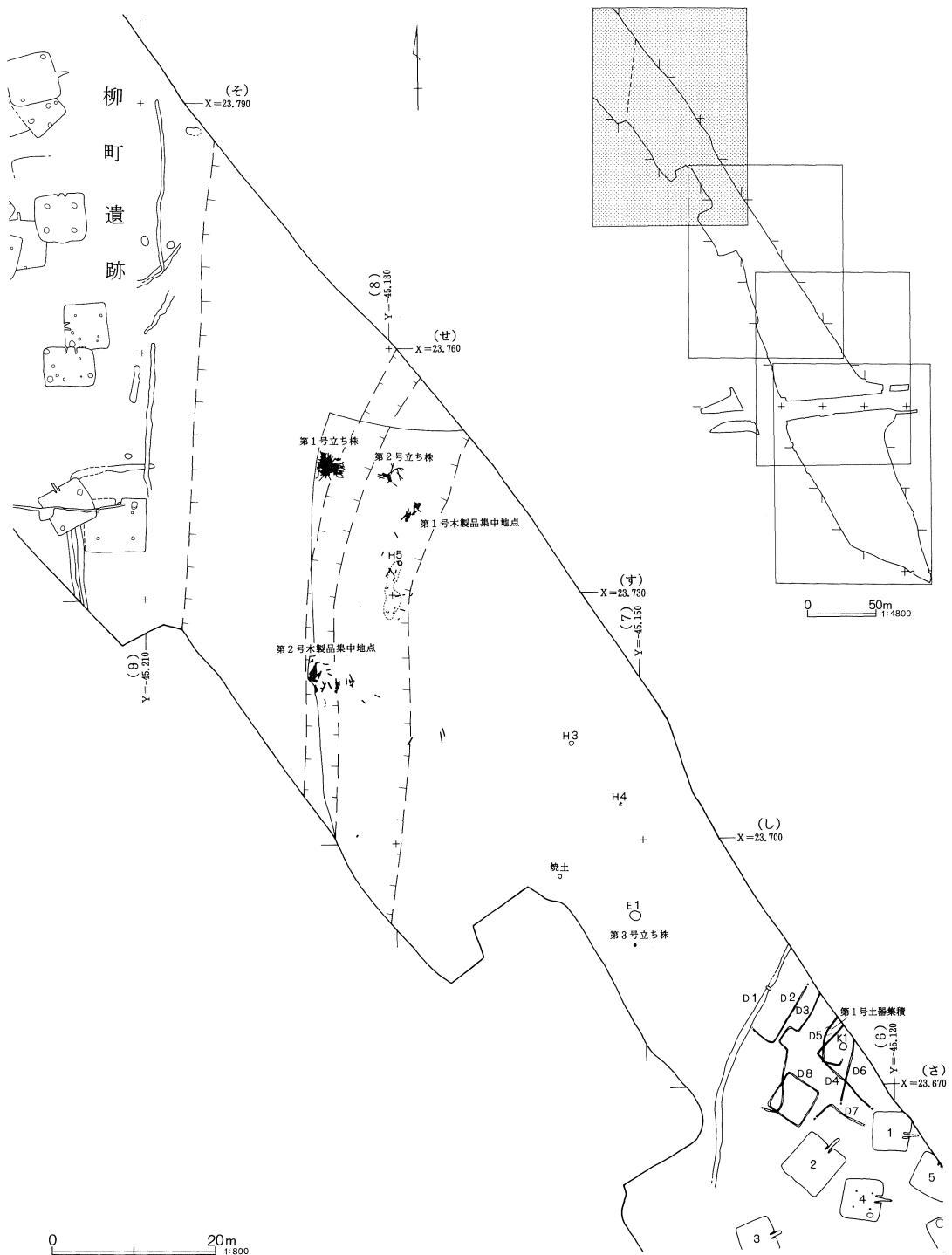
古墳時代後期の集落跡は住居跡157軒、祭祀跡5か所、土壙12基、溝8条、性格不明遺構、土器集積各1か所から成っている。住居跡はすべてカマド出現期以降のものだが、模倣環使用以前の段階のものもある。また、覆土中のFA関連土層を鍵層として、FA降下の前後の時期に分けることも可能である。前述したように第13号住居跡以南の大部分の住居跡は地山砂層を掘り込んでいるため液状化現象の影響を受け、ほとんどの場合柱穴・壁溝・貯蔵穴等の施設を確認することはできなかつたが、本来的な存在の有無については断定できない。また地山が砂層であることは、カマド袖を地山削り出しにすることを不可能にし、検出したすべてのカマド袖は灰白色粘土による造り付けであった。

住居跡からの出土遺物には大きな特徴と言えるべきものが2つある。1つは人、馬・牛、鹿・猪の歯や骨が多数残存したことであり、中でも4軒の住居跡の床面上で検出した人骨の存在はこれまで類例もあまり知られていない特筆すべきものである。また、馬・牛は6軒の住居跡からまとまって出土したが、これもこの時期のものとしては類例が少ないものである。もう1つは生産に関連する多様な遺物の存在である。土器製作の残滓である土器削片、滑石製模造品製作に伴う未製品や剝片、そして原材料としての赤色顔料や黒色樹脂などであるが詳細は後で述べることにする。

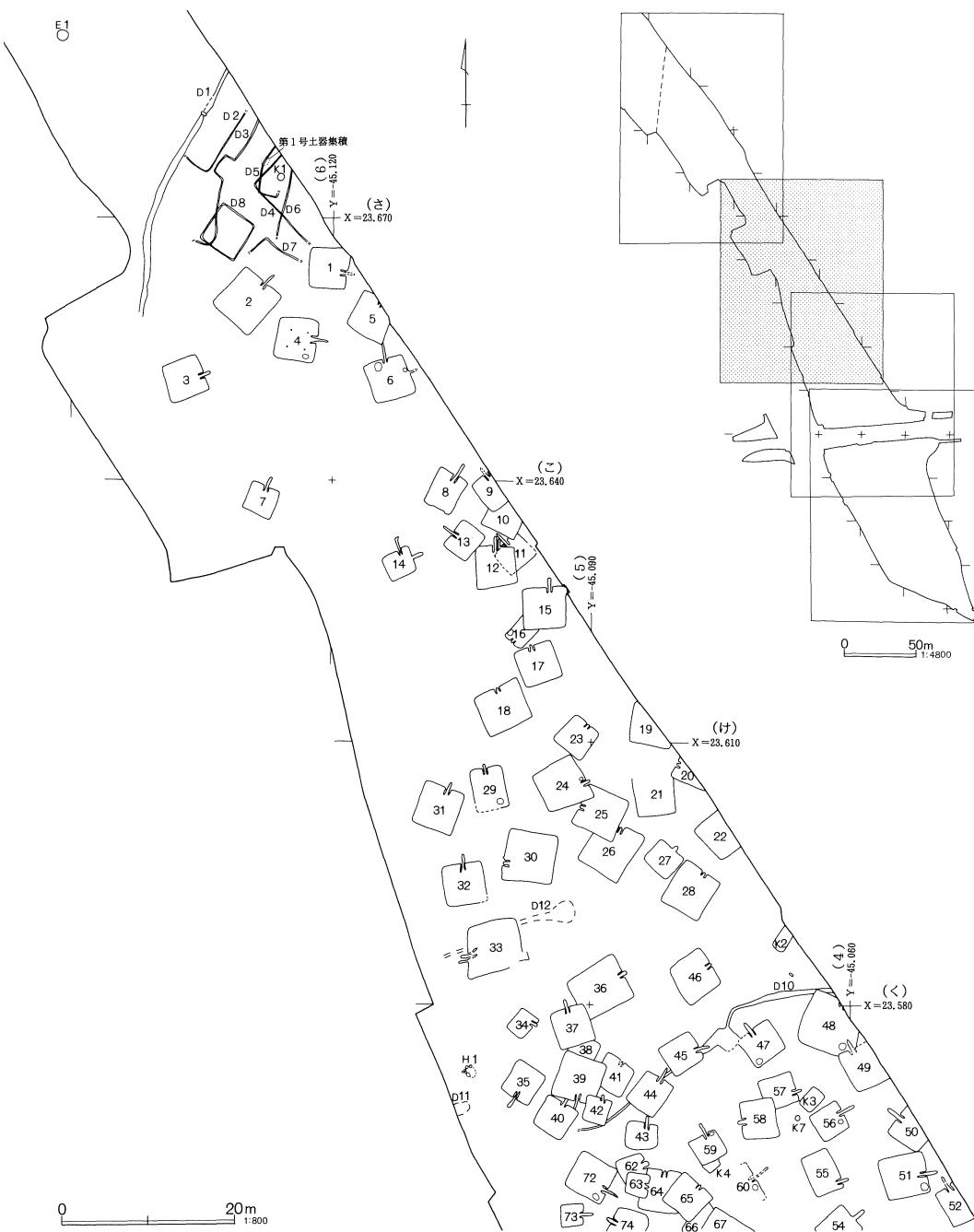
祭祀後は集落内で2か所、河畔帯で2か所、河川跡で1か所を検出した。各祭祀跡ごとに時期や形態は異なるが、集落内の2か所（第1号・第2号）には滑石製模造品が伴ない、第1号・第3号・第5号祭祀跡では大型の壺が使用されたという特徴が認められる。

河川跡・河畔帯では祭祀跡を除くと河川跡内の2つの木製品集中地点に集約される。杭や用途不明の部材が主体を占める中でわずかながら農耕具や容器などの製品も検出できた。妻沼低地西部では初めてのまとまった資料である。伴出した土器から見て、集落よりも時期的に新しい7世紀代のものと考えられる。河畔帯は炭化物層の広がる無遺構地帯だが、焼土面を1か所確認した。

平安時代の遺構は土壙9基、溝17条と井戸1基である。特に9世紀後半の第9号・第10号・第13号・第21号の4条の溝はほぼ平行し、自然堤防の等高線に直行するように河川跡に向けて掘られており、ほぼ同様の位置に水溜め状の膨らみをもっていた。



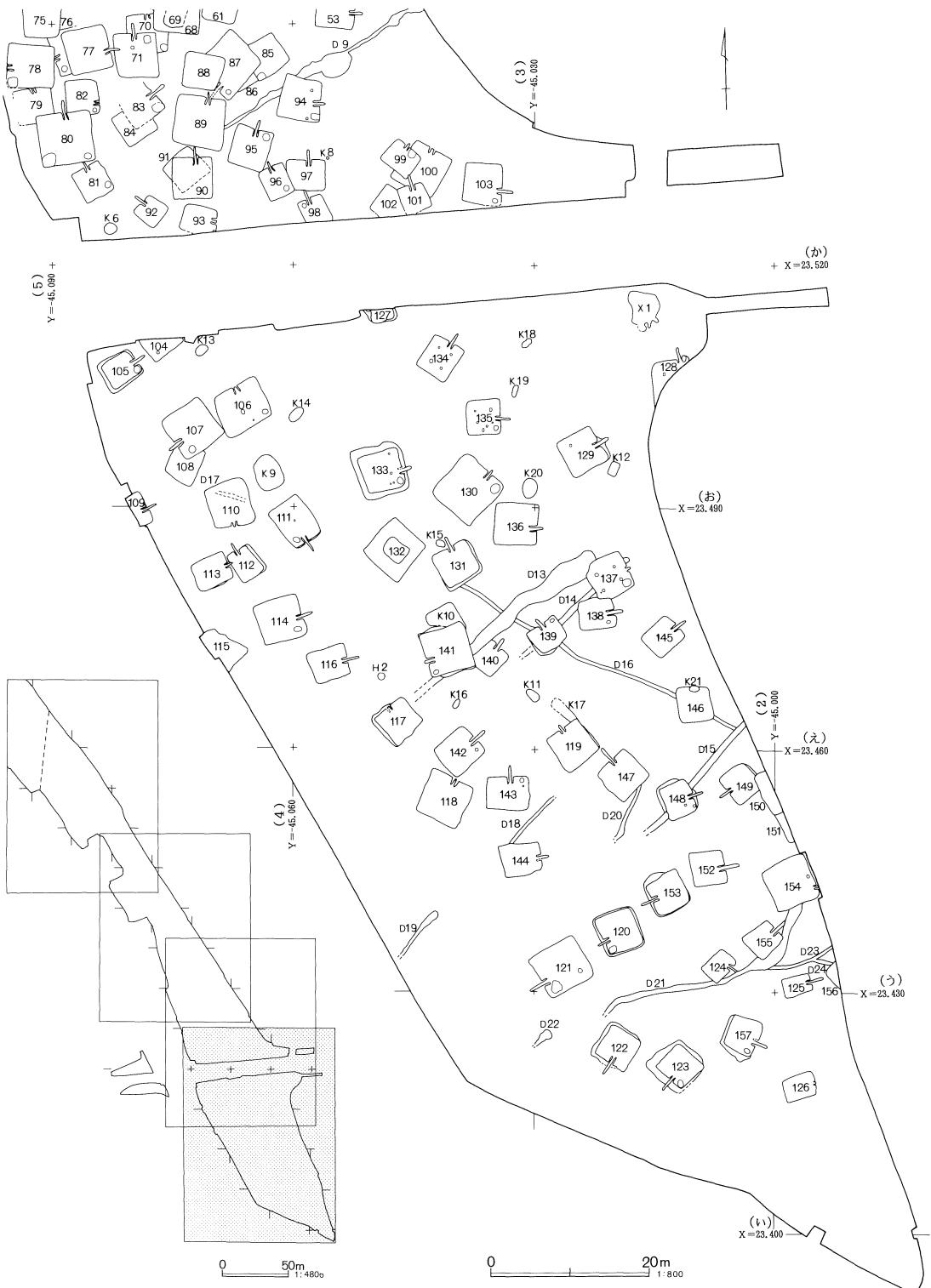
第7図 城北遺跡全体図（1）



第8図 城北遺跡全体図（2）



第9図 城北遺跡全体図（3）



第10図 城北遺跡全体図 (4)

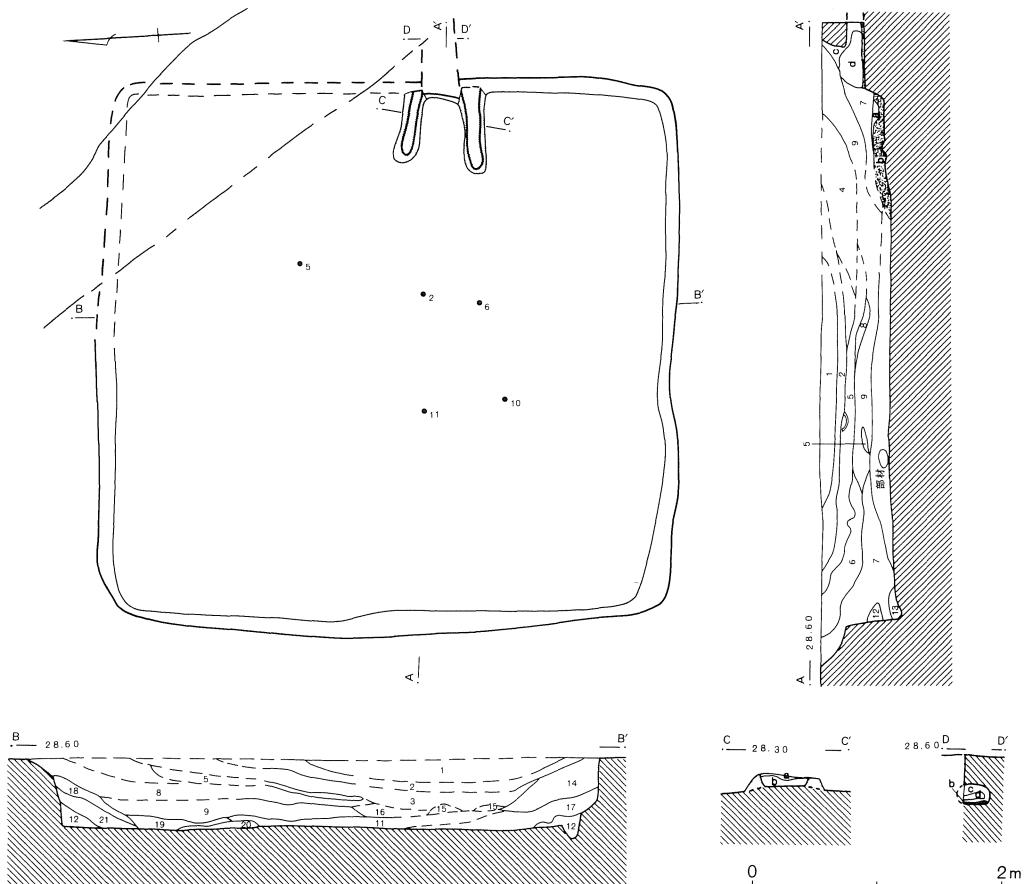
## IV 調査された遺構と遺物

### 1 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 住居跡－1

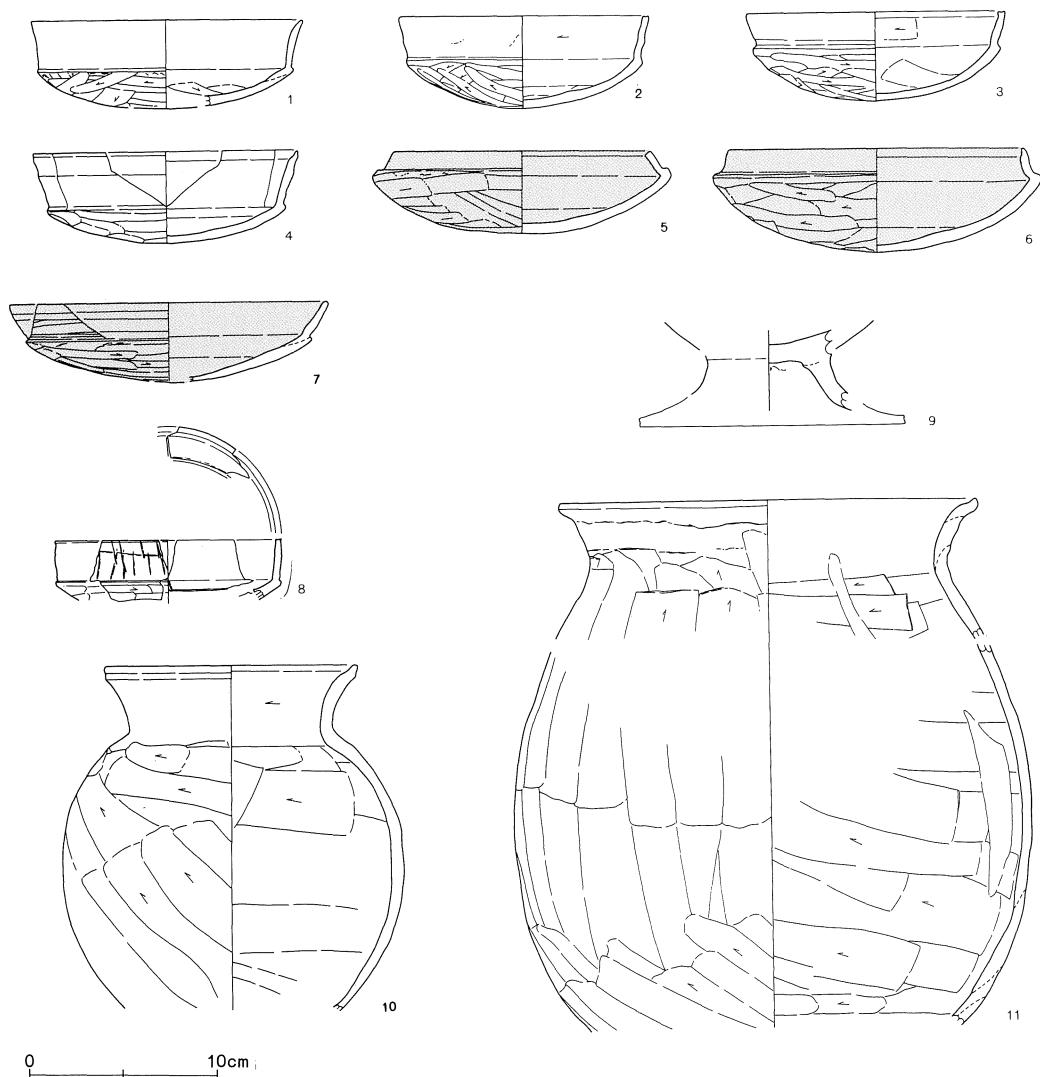
##### 第1号住居跡

こー6グリッドに位置する。規模は長軸長4.34m、短軸長4.10m、深さ0.55mで、主軸方向はN-94°-Eである。調査途中の出水により、床面とセクションベルトが崩壊して記録が十分にできなかた。床面直上には、住居構築材と見られる木材が存在した。



- |                 |                  |                  |                           |
|-----------------|------------------|------------------|---------------------------|
| 1 灰褐色(7.5YR5/2) | 粘土質。水成堆積で重層状。    | 14 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。少量の炭化物を含む。            |
| 2 乳白色           | 粘土質。水成堆積で重層状。    | 15 黒色(10YR2/1)   | 粘土質。多量の焼土ブロック・炭化物を含む。     |
| 3 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。少量の炭化物を含む。   | 16 黒褐色(10YR3/1)  | 粘土質。少量の炭化物・焼土を含む。土器を包含する。 |
| 4 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。微量の炭化物を含む。   | 17 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。少量の炭化物を含む。            |
| 5 黑色(10YR2/1)   | 灰層。土器、焼土ブロックを含む。 | 18 灰褐色(7.5YR5/2) | 粘土質。混入物なし。                |
| 6 灰褐色(7.5YR5/2) | 粘土質。微粒砂を含む。      | 19 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。多量の炭化物を含む。            |
| 7 暗褐色(10YR4/3)  | 粘土質。少量の微粒砂を含む。   | 20 黑色(10YR2/1)   | 炭化物層。                     |
| 8 明灰褐色          | 粘土質。少量の微粒砂を含む。   | カマド              |                           |
| 9 灰褐色(7.5YR5/2) | 粘土質。微粒砂を含む。      | a 褐色(10YR4/4)    | 粘性強。少量の炭化物を含む。熱の為に赤褐色化。   |
| 10 暗褐色(10YR4/3) | 粘土質。少量の微粒砂を含む。   | b 黑色(10YR2/1)    | 灰炭化物層。少量の焼土を含む。           |
| 11 明灰褐色         | 粘土質。上屋材を包含している。  | c 灰黄褐色(10YR4/2)  | 粘土質。少量の炭化物を含む。天井崩落後の流入土。  |
| 12 淡褐色          | 粘土質。地山の崩落土。      | d 銀黃褐色(10YR6/3)  | 粘性強。煙道天井の崩落土。             |
| 13 黑褐色(10YR3/1) | 粘土質。少量の炭化物を含む。   |                  |                           |

第11図 第1号住居跡



第12図 第1号住居跡 出土遺物

第1号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(14.5)	(4.7)		RW'	A	橙	30	
2	壺	13.2	4.9		RW	A	橙	60	No. 4
3	壺	13.7	4.7		RW	A	鈍橙	75	
4	壺	14.1	4.8		RW'B	A	鈍橙	50	破断面に刃物打撃痕有り
5	壺	13.7	4.3		R	A	赤黒	80	No. 5 内外面黒色処理
6	壺	15.6	5.5		W	A	赤黒	75	No. 3 内外面黒色処理
7	壺	(17.0)	(4.2)		RW	A	赤黒	20	内外面黒色処理
8	壺	(12.0)	(3.2)		RWB	A	橙	10	内外面に線刻文
9	高壺		(4.3)	(14.0)	RB	A	橙	60	
10	壺	13.4	(18.1)		WW'	A	橙	80	No. 1
11	甕	(25.1)	(28.0)		RWW'B	A	鈍橙	30	

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは55cm、燃焼部の幅は36cmである。焚口部の前面は踏みしまり硬化していた。

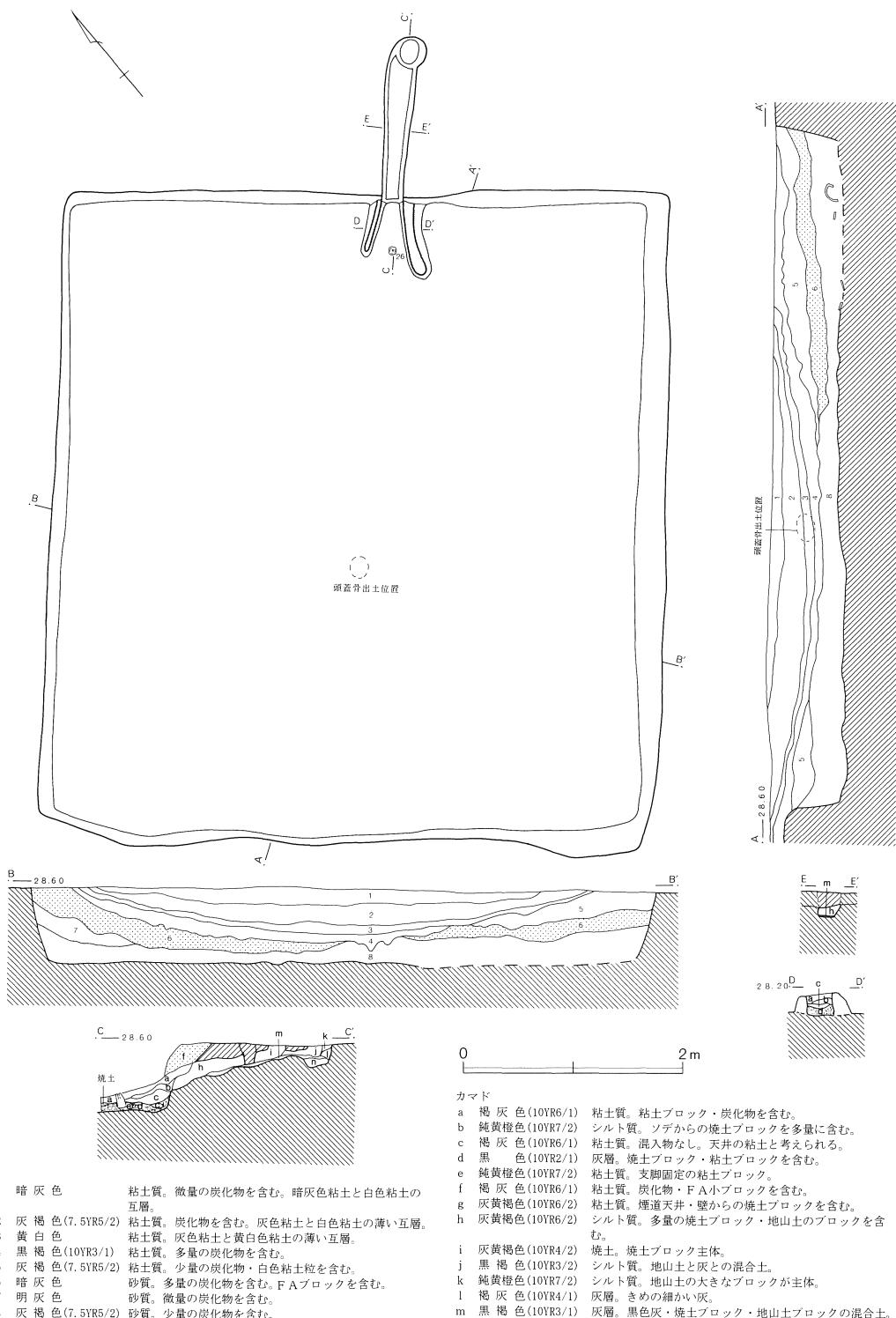
遺物は5層を中心とする覆土中に多く、土器のほか滑石製模造品の未製品も出土した。8の壺は口辺部外面と体部内面に線刻文をもつ。

## 第2号住居跡

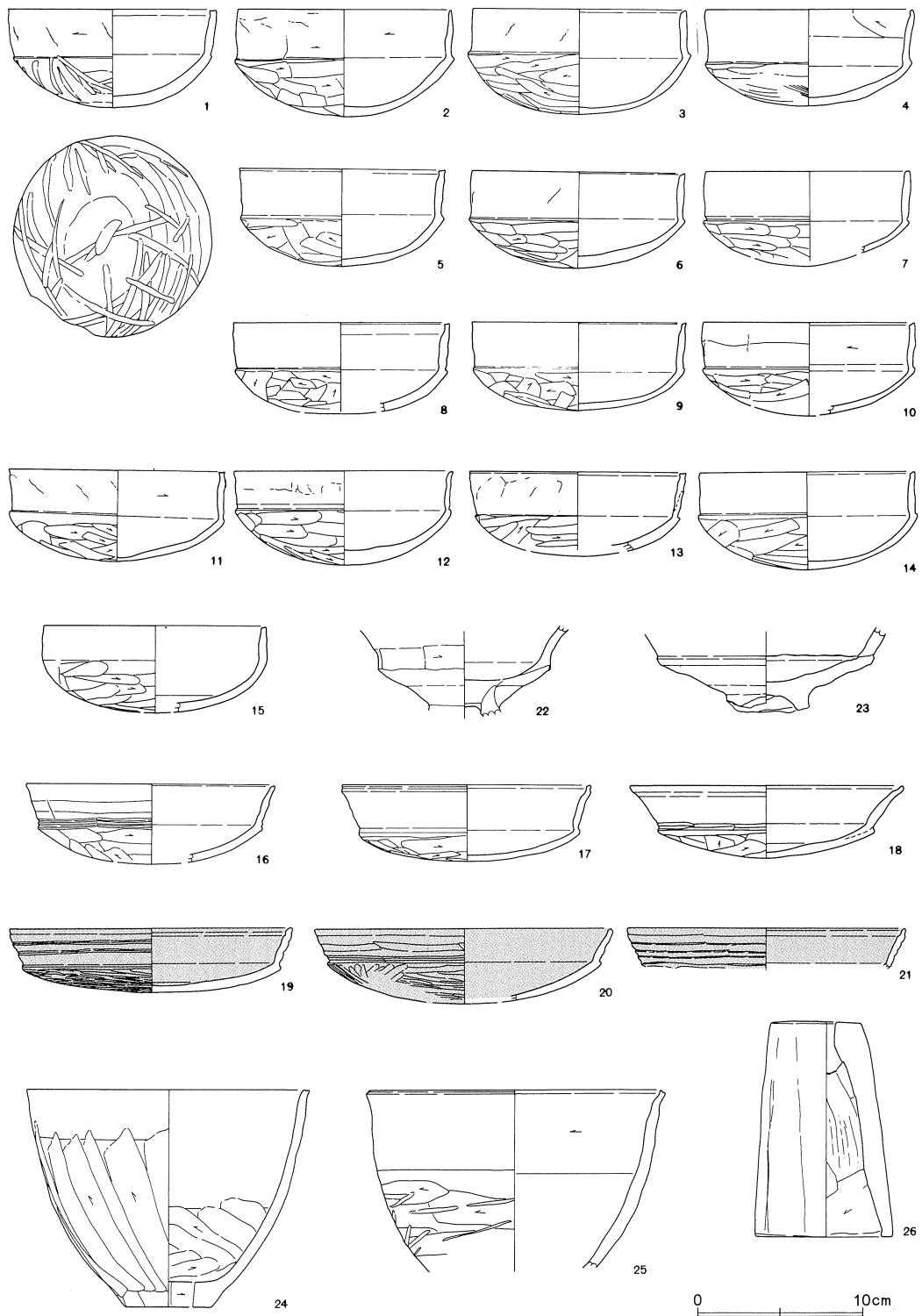
こ-6グリッドに位置する。規模は長軸長5.70m、短軸長5.18m、深さ0.65mである。主軸方向はN-40°-Eである。調査途中の出水のため壁溝・貯蔵穴・柱穴等は確認できなかった。覆土6層

第2号住居跡出土土器観察表

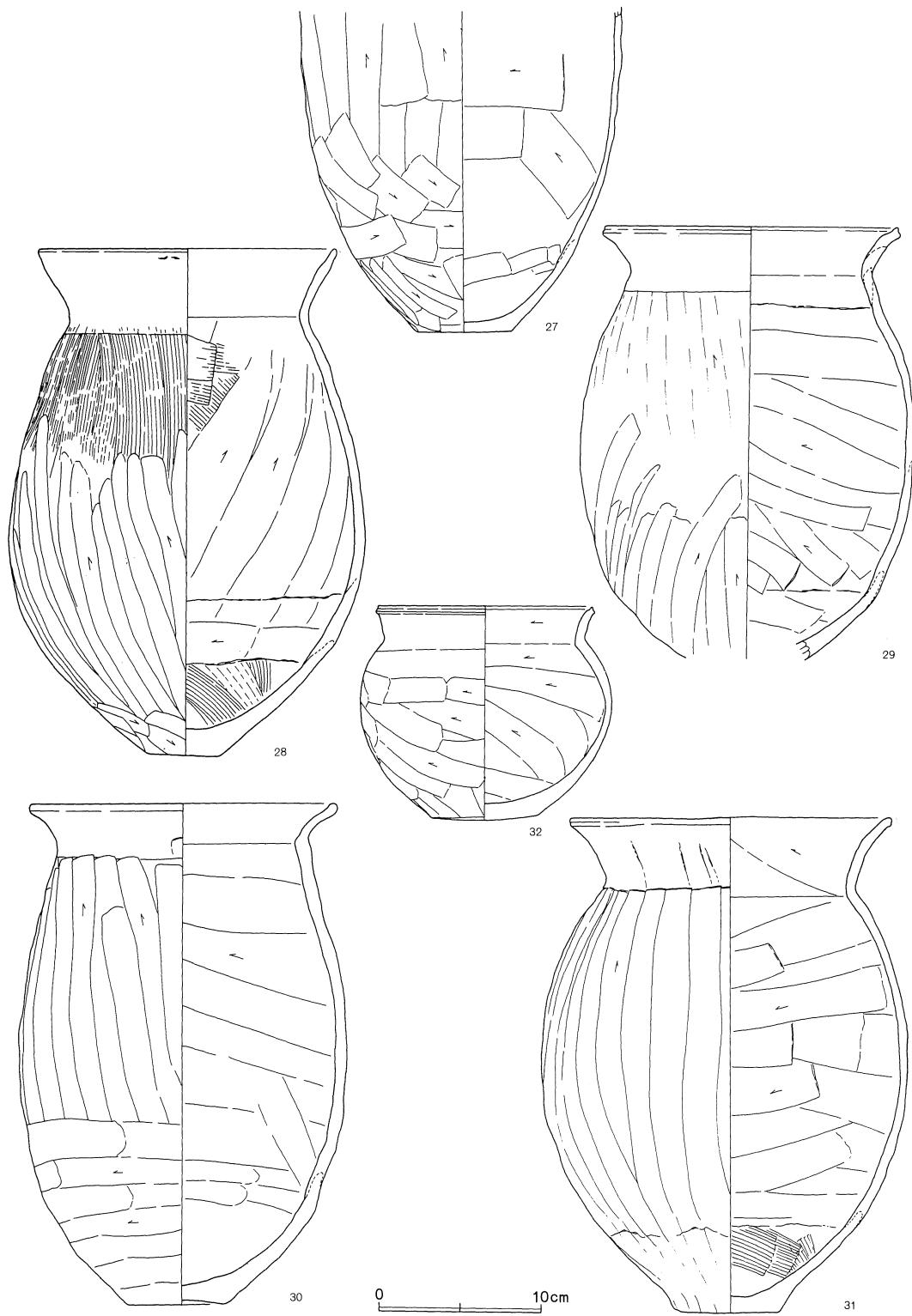
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	5.9		RW'	A	橙	80	床直 体部未削り
2	壺	12.9	6.4		RWB	A	鈍橙	80	床直
3	壺	12.9	6.4		RWB	A	橙	95	床直
4	壺	12.6	5.8		RB	A	橙	80	煤付着 体部外面に擦切痕
5	壺	12.4	5.9		RWB	A	鈍橙	80	
6	壺	12.9	5.7		RW	B	橙	70	
7	壺	12.3	5.7		RW'	B	橙	50	
8	壺	(13.0)	(5.5)		RWB	A	橙	30	
9	壺	(12.9)	5.3		WB	A	橙	25	
10	壺	12.8	(5.6)		RB	A	橙	80	外面に煤付着
11	壺	13.0	5.4		W	A	橙	60	
12	壺	(13.3)	5.6		RWB	B	鈍橙	30	
13	壺	(13.1)	(4.7)		RW	A	橙	25	
14	壺	(13.0)	5.9		B	B	鈍橙	40	床直
15	壺	(13.4)	(5.2)		RW	A	橙	30	
16	壺	(15.0)	(4.8)		RW	B	鈍橙	40	
17	壺	15.0	4.6		R	B	鈍橙	60	内面に炭化物付着
18	壺	(16.5)	4.3		RB	B	鈍橙	25	
19	壺	(17.1)	3.8		R	A	赤黒	40	内外面黒色処理
20	壺	(18.0)	(4.5)		W	A	赤黒	20	内外面黒色処理
21	壺	(16.2)	(2.5)		W	A	赤黒	25	内外面黒色処理
22	高壺		(5.3)		RWB	A	橙	25	
23	高壺		(4.3)		RWW'	A	橙	90	脚部を打ち欠いた転用壺
24	甕	17.0	13.0		RWB	A	明赤褐色	50	
25	甕	17.9	(10.8)		R	A	橙	60	
26	支脚		12.9	8.3	RW	A	橙	100	
27	甕		(19.7)	(5.9)	WB	B	鈍黄橙	30	
28	甕	18.4	31.0	4.3	RWW'B	B	鈍黄橙	80	床直
29	甕	18.3	(26.5)		RW	B	灰白	50	
30	甕	19.0	30.7	6.0	RH	C	鈍黄橙	80	
31	甕	19.9	30.2	6.4	RH	C	橙	80	
32	小型甕	13.4	13.1	6.5	B	A	橙	90	床直
33	甕	24.3	33.4	8.4	RW	A	橙	70	
34	甕	26.6	36.7	9.2	RWB	A	橙	90	床直
35	壺	26.4	(24.0)		RWB	B	浅黄橙	90	床直 脊部に坏焼成痕1か所
36	壺	19.4	22.7	7.0	RWH	C	橙	80	外面に煤付着



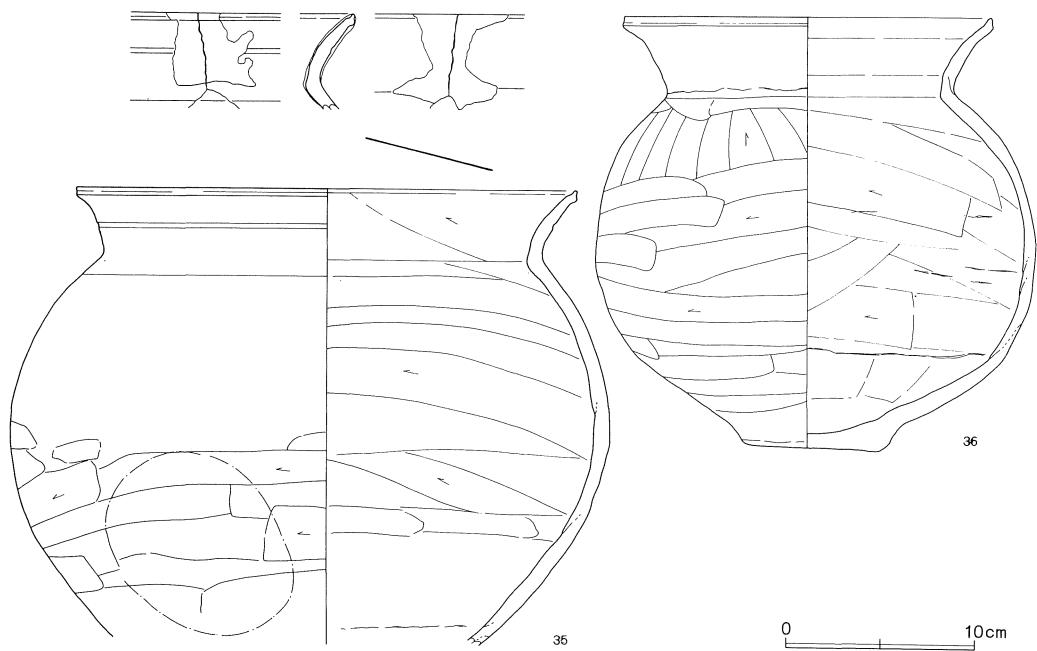
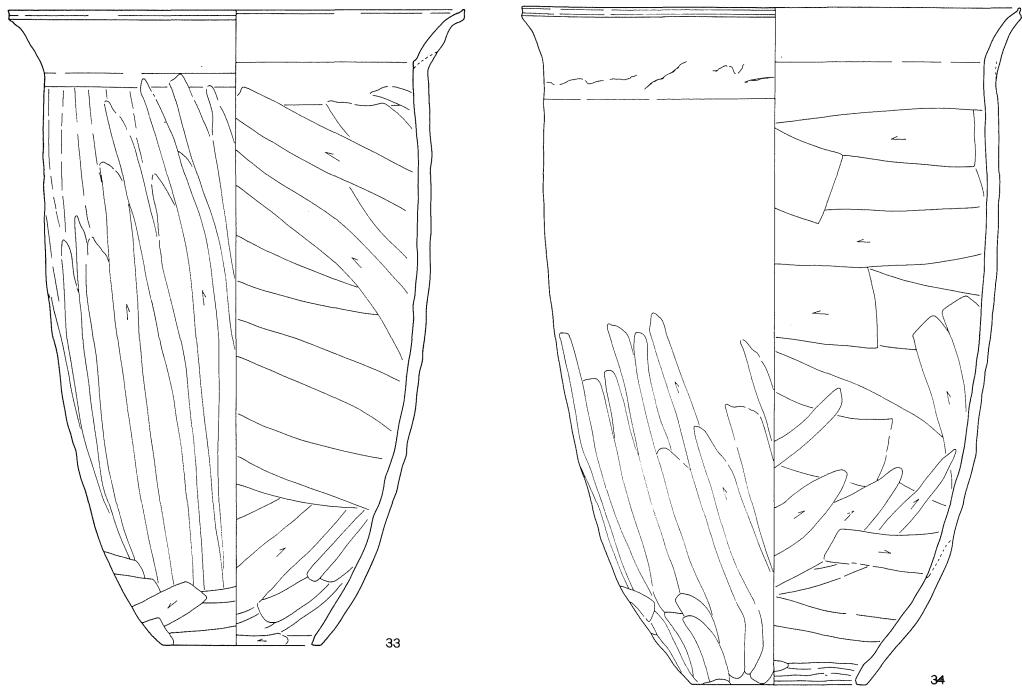
第13図 第2号住居跡



第14図 第2号住居跡 出土遺物（1）



第15図 第2号住居跡 出土遺物（2）

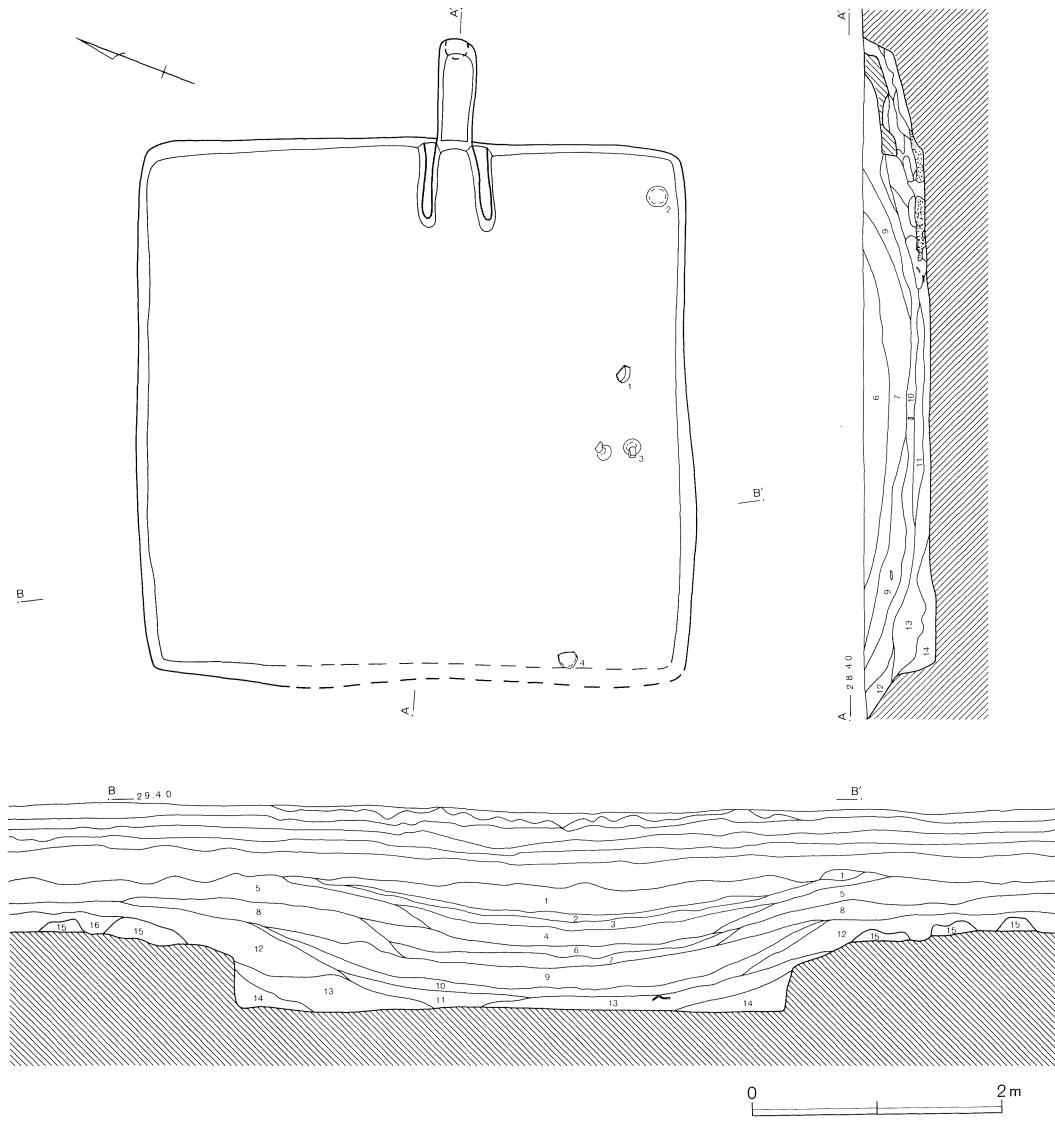


第16図 第2号住居跡 出土遺物（3）

にはFAブロックが含まれていた。

カマドは北東壁に造られている。袖には灰白色粘土が使用されていた、右袖の長さは66cm、燃焼部の幅は23cmである。煙道部は幅18cm、長さ146cmであり、地山を傾斜をつけて掘り抜き、先端に煙出ピットをもつ。支脚位置は中軸線上であり、土製支脚が使用されていた。

遺物はカマド周辺の床上直上より出土したが、出水により記録できなかった。また、4層中にも遺物が含まれ、土器や馬歯1点が出土したほか、住居跡中央ではこの層の上面より、人の頭蓋骨



- |                                       |                                         |
|---------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。         | 9 灰黄褐色(10YR5/2) 粘土質。少量の炭化物を含む。          |
| 2 黒褐色(10YR3/1) 粘土質。植物遺体が主体。多量の炭化物を含む。 | 10 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。砂の小ブロックを斑状に含む。    |
| 3 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。         | 11 黑褐色(10YR3/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。          |
| 4 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。炭化物を含む。            | 12 灰黄褐色(10YR6/2) シルト質。少量の炭化物を含む。        |
| 5 灰白色(10YR7/1) 粘土質。灰白色粘土と植物遺体の水成互層。   | 13 暗灰色(10YR4/1) 粘土質。少量の炭化物を含む。          |
| 6 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。灰白色粘土と植物遺体の水成互層。   | 14 暗灰色(10YR5/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。          |
| 7 黒褐色(10YR3/2) 粘土質。多量の炭化物を含む。         | 15 灰黄褐色(10YR6/2) シルト質。褐色粘土ブロックを含む。周堤盛土。 |
| 8 灰黄褐色(10YR6/2) 粘土質。微量の炭化物粒・焼土粒を含む。   | 16 暗灰色(10YR6/2) 粘土質。多量の炭化物を含む。          |

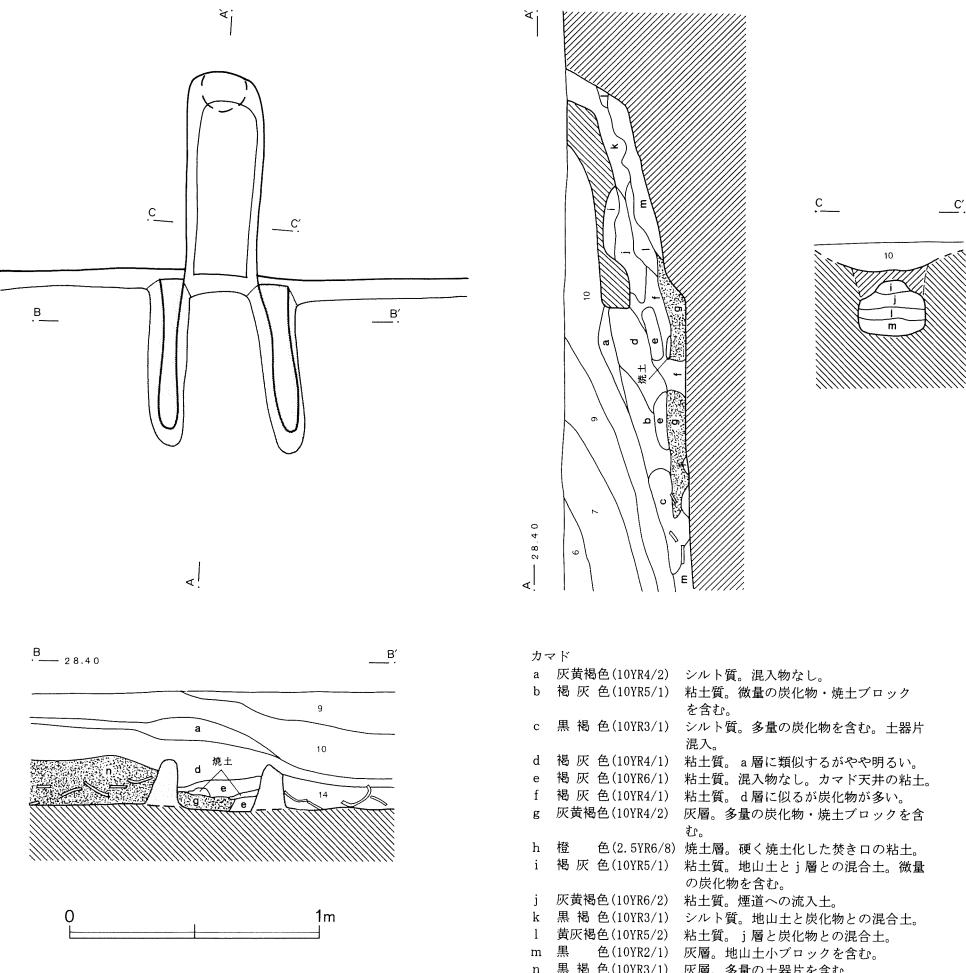
第17図 第3号住居跡

が出土した。さらに北隅の覆土最上層からは、滑石製模造品の未製品が出土した。1の壺は体部外面を粗くナデたのみでケズリはない。35の壺は乾燥時に生じた口縁部の亀裂に緻密粘土を上塗り補修し、胴部には焼成時に密着した口径10.6cmの壺の痕跡がある。16~21の壺と27の甕は4層中の土器と考えられる。

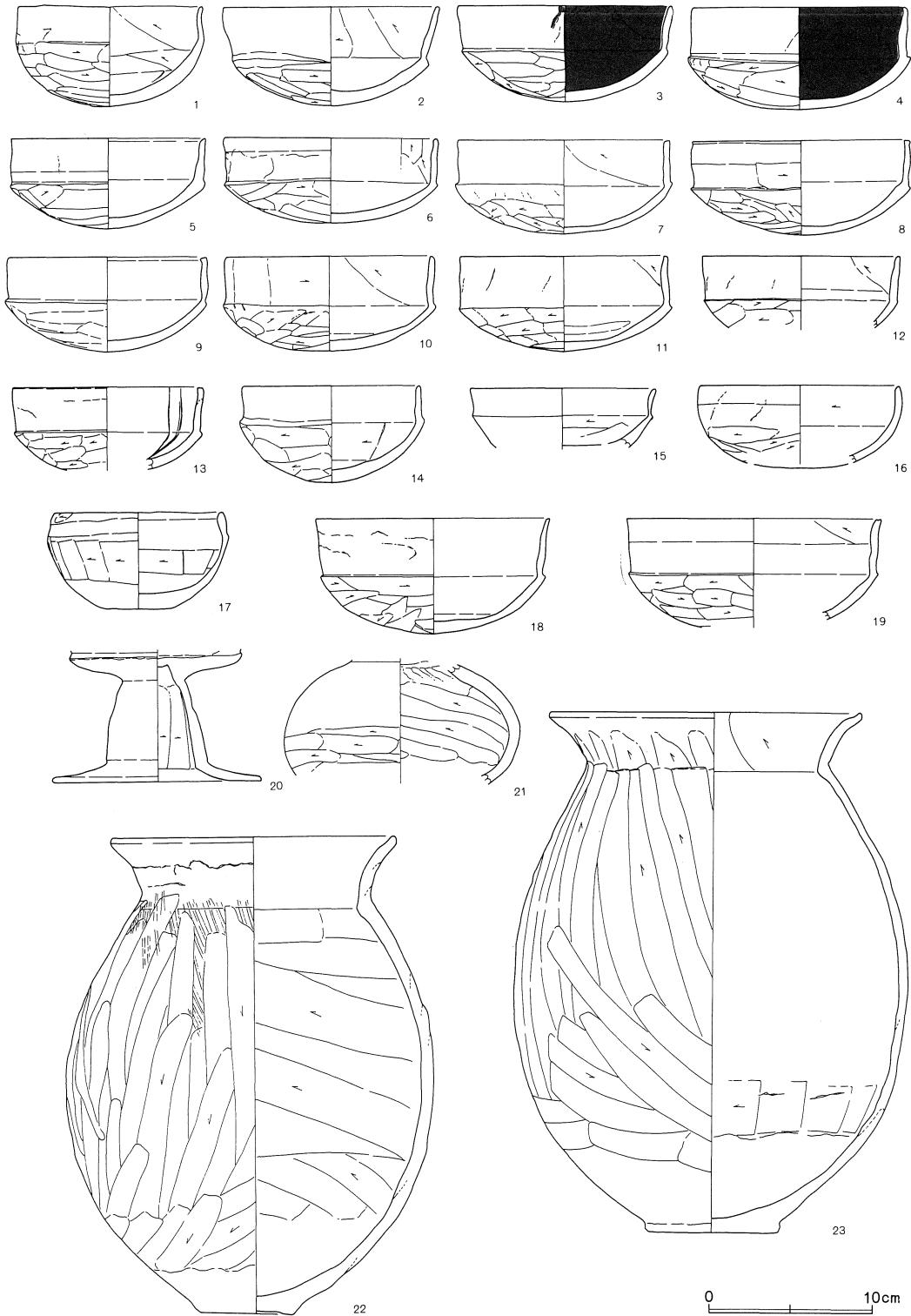
### 第3号住居跡

こー6グリッドに位置する。規模は長軸長4.22m、短軸長4.05m、深さ0.40mであり、主軸方向はN-69°-Eである。壁溝・貯蔵穴・柱穴等は確認できなかった。土層断面（B-B'）において住居の掘り込み外側に周提盛土と考えられる灰黄褐色シルトの高まり（15層）を確認した。

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは65cm、燃焼部の幅は33cmである。煙道は幅27cm、長さ80cmであり、地山を傾斜をつけて掘り抜き、先端に煙出口をもつ。



第18図 第3号住居跡 カマド



第19図 第3号住居跡 出土遺物

第3号住居跡出土土器観察表

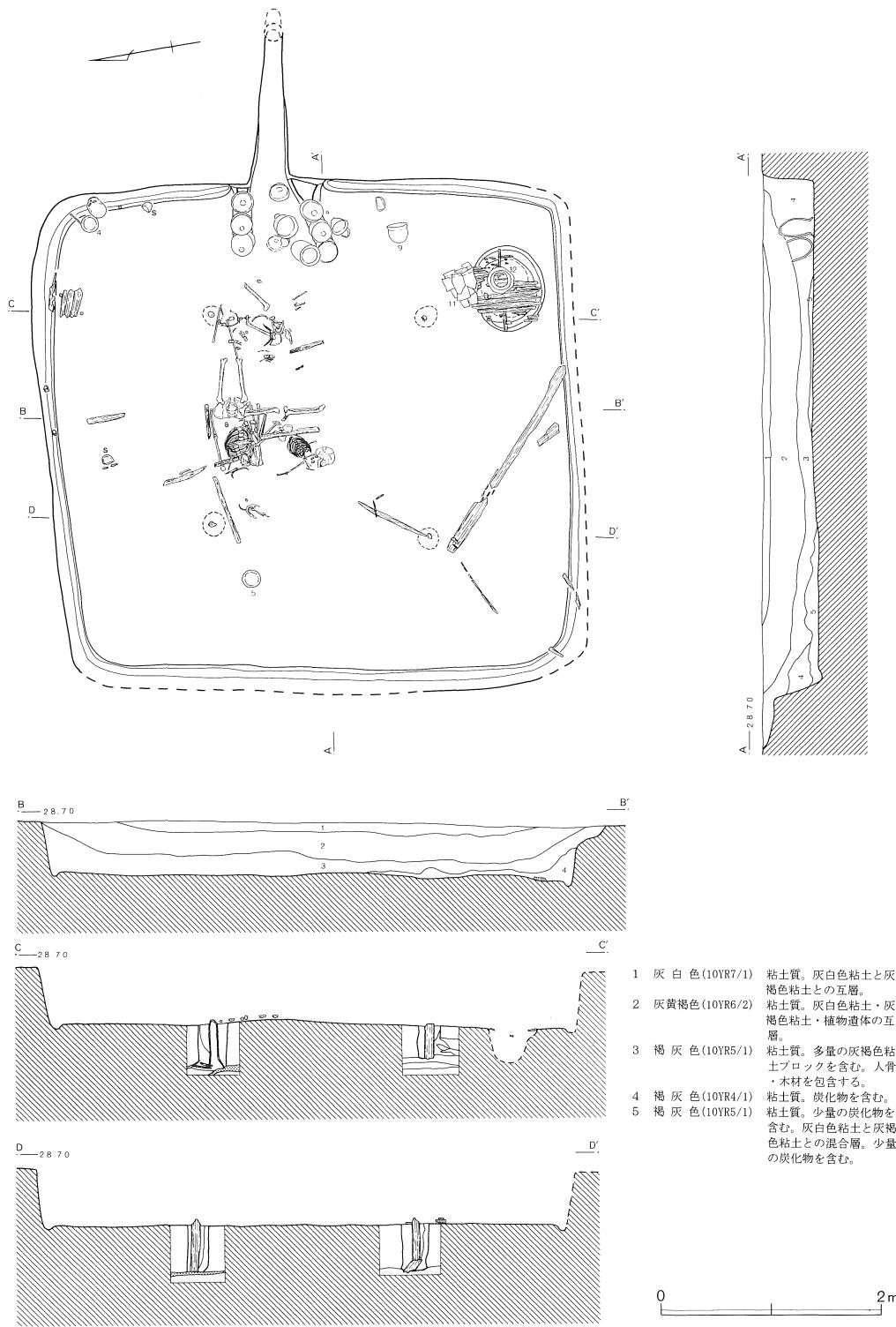
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.2	6.0		RWB	A	淡赤橙	100	No.2
2	壺	13.2	6.0		AWW'	A	橙	100	No.1
3	壺	13.1	5.8		RW	A	淡赤橙	100	No.3 内外面に樹脂付着
4	壺	13.0	6.2		RW	A	淡赤橙	100	内面に樹脂付着
5	壺	11.8	5.5		RWB	B	淡赤橙	90	下層 内外面に煤付着
6	壺	13.0	5.1		RB	A	淡赤橙	85	カマド左 被熱赤変
7	壺	12.9	5.7		B	A	淡赤橙	80	下層
8	壺	13.2	5.7		WB	A	橙	80	下層
9	壺	12.0	5.7		RWB	B	橙	80	下層
10	壺	12.7	5.7		RWB	A	橙	95	下層
11	壺	12.7	5.7		RW	A	淡赤橙	80	下層
12	壺	12.1	(4.5)		B	A	淡赤橙	50	下層
13	壺	11.6	(5.0)		RWW'B	A	淡赤橙	20	内面に尖端工具による線文
14	壺	10.8			RW	A	淡赤橙	80	カマド左 被熱赤変
15	壺	(11.3)	(3.7)		RW	C	灰白	15	下層
16	壺	(12.2)	(4.7)		RW'B	A	淡橙	40	下層
17	壺	10.3	5.8	4.0	RB	A	灰白	60	下層
18	大型壺	14.2	7.0		W'B	A	淡赤橙	60	カマド 内外面に煤付着
19	大型壺	15.5	(6.5)		RW	A	鈍橙	50	下層
20	高壺		(8.0)	12.5	RW	A	淡赤橙	70	No.4
21	壇		(7.5)		RWW'B	B	淡赤橙	80	下層
22	甕	17.5	28.7	5.5	RWW'B	B	橙	90	
23	甕	19.1	31.4	7.2	RWW'	A	橙	70	下層 カマド

左袖の外側には灰層があり、多量の土器片を包含していた。

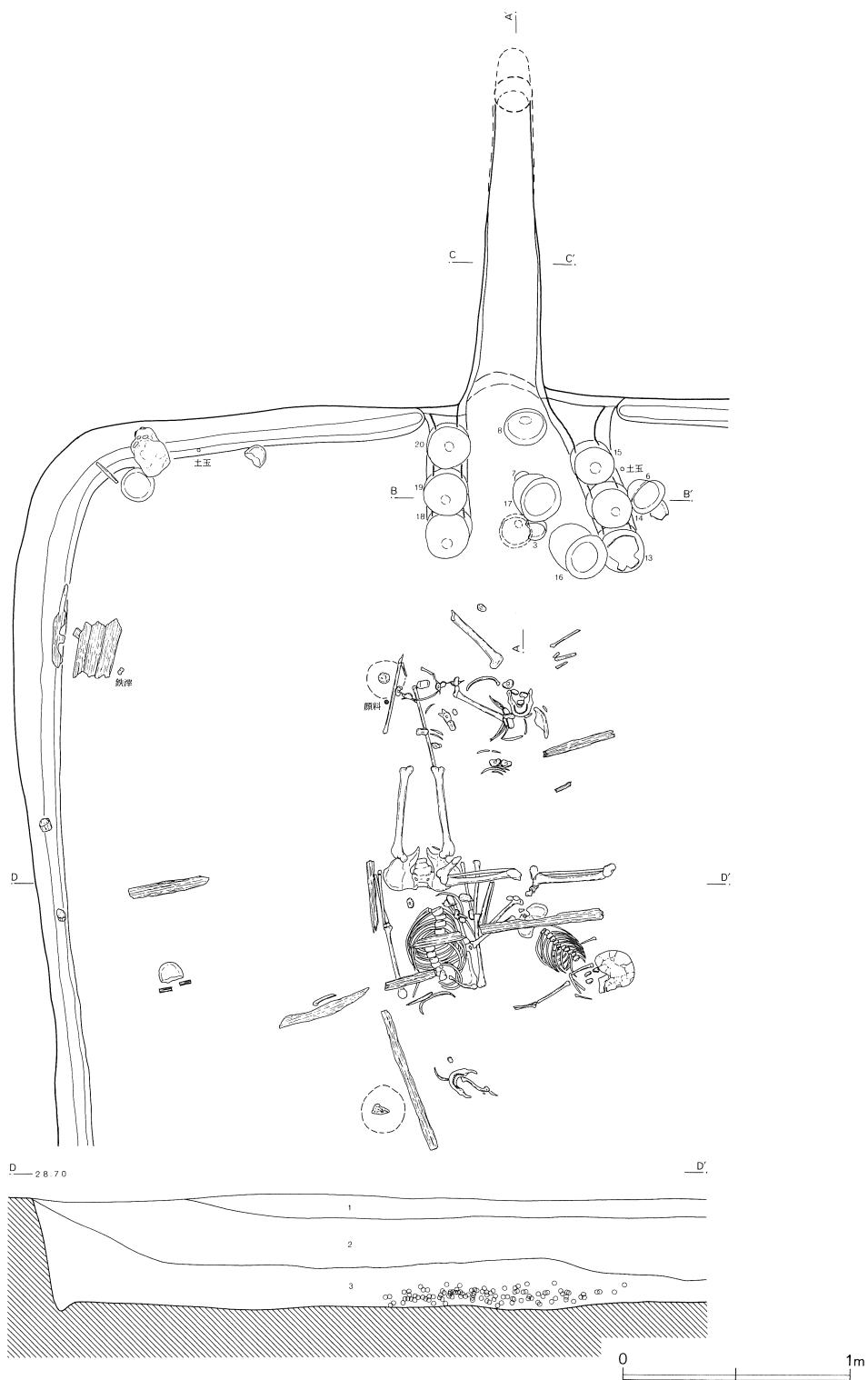
遺物は13層から比較的多く出土し、3と4の壺は内側全面と口辺部外面に黒色樹脂が付着している。6・14・23はカマド左の灰層中に含まれていたが、6と14の壺は火を受け変質している。

#### 第4号住居跡

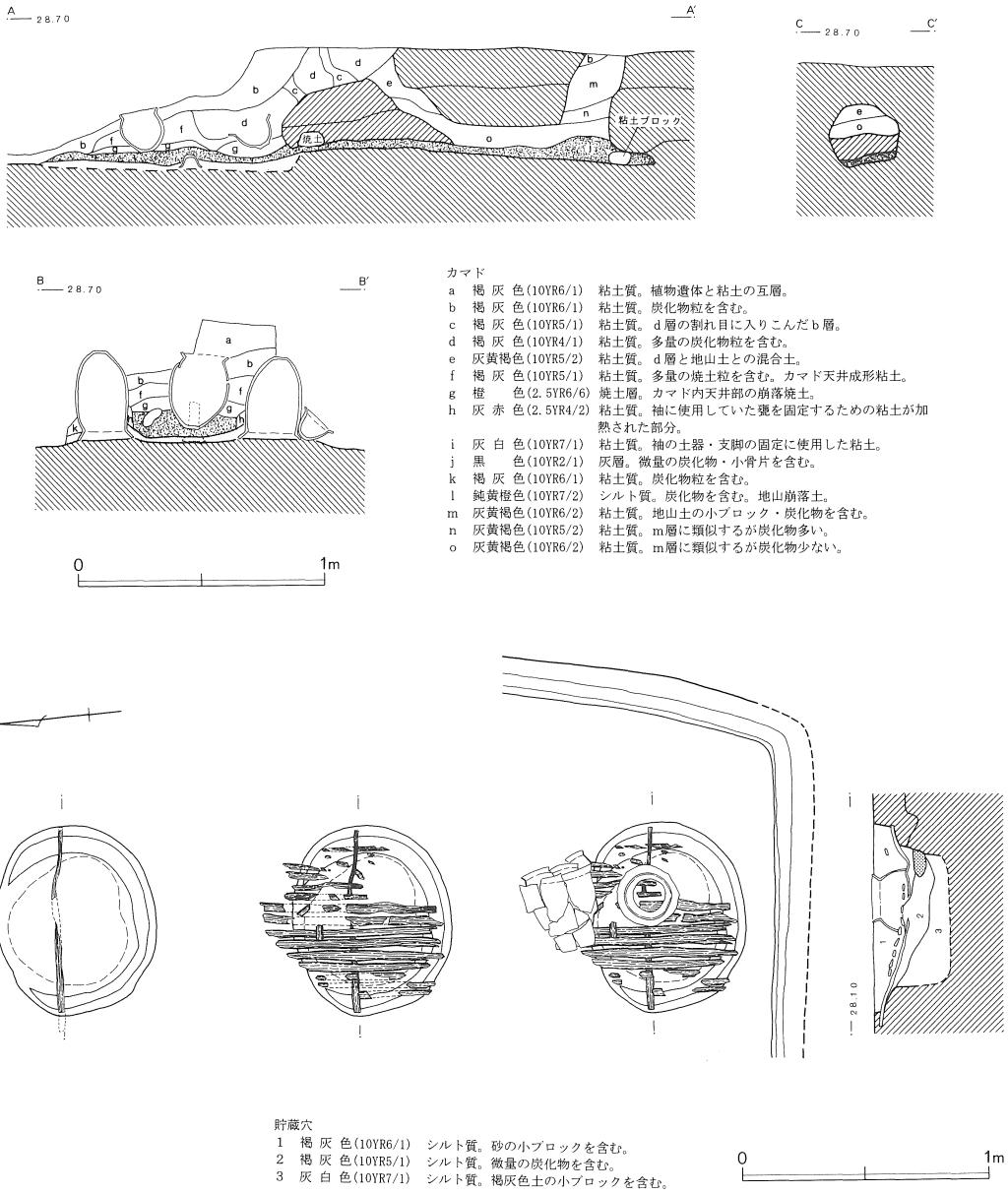
こー6グリッドに位置する。規模は長軸長4.78m、短軸長4.50m、深さ0.50mで、主軸方向はN-98°-Eである。壁溝は幅8cm、深さ4cmで全周していた。柱は4本とも径5cm程の柱根が残存していたが、柱穴の掘り方は平面では識別できず、断ち割った結果、径20~26cm、深さ30~40cmであることが判明した。貯蔵穴は南東隅に存在した。2段構造の円形ピットで、上段長径77cm、下段長径58cm、そして底面は不明瞭だったが床面からの深さ約30cmである。蓋材が残存し、長軸上に蓋受け棒材を渡して両端を埋め込み、その上に蓋となる棒材を14本並べる構造であった。その際、壁側の端部はピットの段に掛け、カマド側の端部床面上に掛けていたため、蓋は水平ではなく、斜め掛けであった。蓋の棒材を連結するような遺物は確認できず、蓋上には転用器台と甌がのっていた。このほかにも住居の部材が良好な状態で遺存し、南壁際からは柱間距離に相当する長さ1.97mの梁材が出土した。また北壁中央の壁溝内には径5cmの杭が2本打ち込まれていた。樹種同定の結果木材の大部分がクヌギ節であった。



第20図 第4号住居跡



第21図 第4号住居跡 人骨出土状況



第22図 第4号住居跡 カマド・貯蔵穴

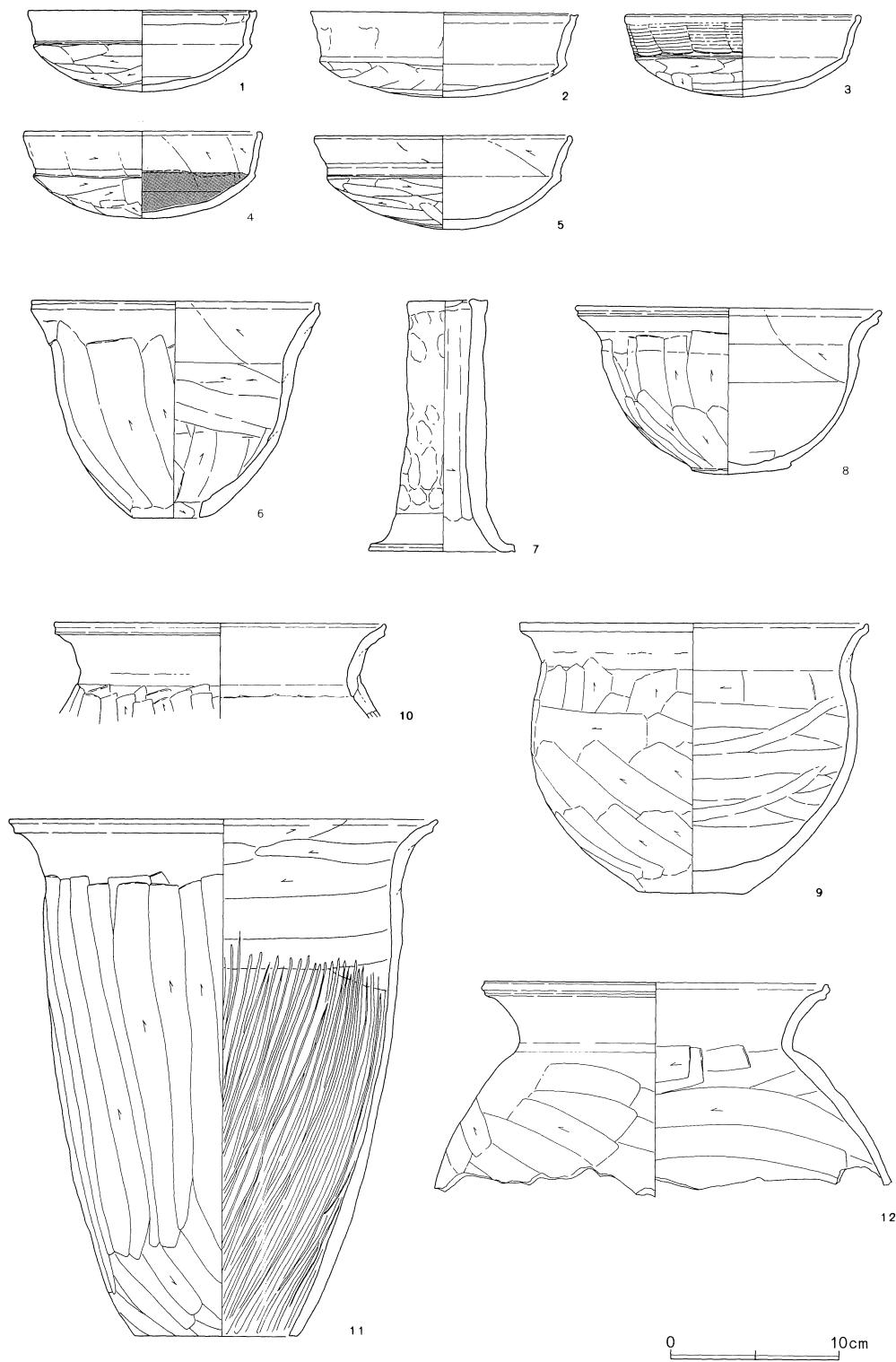
カマドは東壁に造られていた。構造がきわめて特殊で、両袖に各3点の甕を倒立させて下端を灰白色粘土で固定していた。粘土は燃焼部床面にも貼られ支脚も固定していたが、倒立した甕の隙間にわずかに見られる程度で包み込む状態ではなく、甕の内部は中空だった。左袖の長さは63cmで、燃焼部幅は50cmである。煙道は燃焼部床面と同じレベルで水平に掘り抜かれ、幅28cm、長さ155cmで、奥壁より135cmの位置に煙出口をもっていた。支脚位置は中軸線上で土製支脚が使用され、燃焼部には甕3点と鉢1点が掛けられた状態であった。本例は構造、規模、使用状況の各観点から見ても比較すべき類例の少ない特殊なものである。

本住居跡の最大の特色は住居内中央の床面上から人骨が出土したことである。鑑定の結果、頭蓋骨をはじめとする骨格の数から4個体の遺体の存在が判明した。詳細な所見は付編に譲るが、北壁に平行して肋骨・骨盤などがみとめられるものがA号、カマド前面の散乱した骨格群がB号、A号の南側で全身骨格の存在するものがC号、A号の右側腹部に頭蓋骨片が残るものをD号とする。A号は成人男子で、身長168cm、年齢20~29歳の壮年期前半に相当すると推定される。仰臥伸展位で、頸椎以上と、脛骨以下の各骨格が本体から大きく分離していた。B号は成人女性であり、骨格の大部分は散乱して原位置をとどめないが、頭位をカマド方向に置き、仰臥で大腿を開いて、左右の足底を合わせた姿勢であった。右膝がA号の骨盤上にあった。C号は小児で、左側臥屈位をとり、膝はA号の右上腕骨上にあった。D号は小児である。このほか、北東隅で床面から浮いた状態で頭蓋骨が1点、隣接する第2号住居跡の覆土中からも頭蓋骨が1点出土した。A号・B号とも下顎骨のみで頭蓋骨が付近になく、これらが対応する可能性がある。人骨群の中心部を通る土層断面を観察すると遺体に被せた人為的な土や覆土の掘り返しはみとめられず、A号・C号の直上には部材がのっていることを考えあわせてみると、上屋が倒壊する以前に住居内に遺体が存在し、その後壁際に覆土が三角堆積し、遺体が白骨化した時点で骨格が乱されたと考えられる。

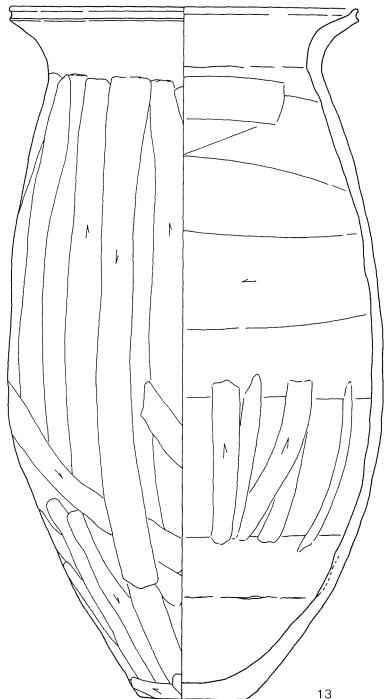
出土土器の大部分はカマドと貯蔵穴からのものであり、覆土中のものはほとんどない。甕や鉢の口縁端部の明瞭な面取りが特徴的である。土器以外には北東隅寄りで用途不明木製品・土玉・鉄滓・顔料ブロックが出土した。

第4号住居跡出土土器観察表

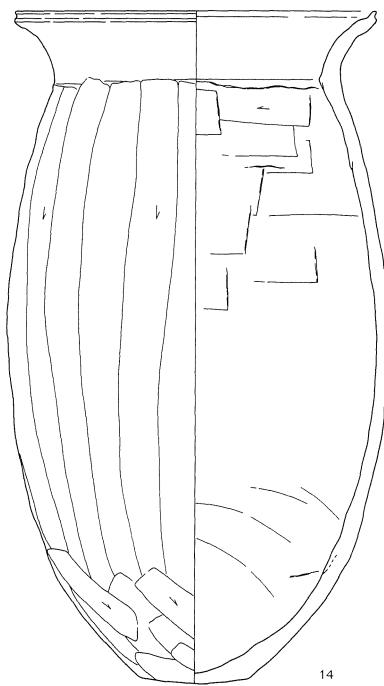
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(13.6)	(4.7)		RW	A	橙	40	No.2
2	壺	(15.9)	5.0		RW	A	鈍橙	50	No.6
3	壺	14.0	4.8		RW	A	橙	95	No.10
4	壺	14.2	5.1		RWB	A	灰赤	100	No.17 内面に樹脂付着
5	壺	15.3	5.5		RWB	A	鈍橙	100	No.18
6	甕	17.1	12.6	3.9	RWW'B	A	橙	100	No.5
7	支脚		7.4	4.4	RWB	A	灰赤	100	No.12
8	鉢	18.1	9.7		RWB	A	橙	100	No.13 被熱痕跡無し
9	鉢	20.7	15.8	6.4	RWW'B	A	鈍橙	100	No.3 被熱痕跡無し
10	甕	(19.6)	(5.6)		RB	A	橙	20	
11	甕	25.4	30.3	9.1	RW	A	橙	90	No.1
12	壺	20.4	(12.2)		BW'U	A	鈍橙	100	No.2 転用器台
13	甕	18.2	36.3	5.7	WB	A	鈍橙	90	No.6
14	甕	19.2	35.4	5.8	RWB	A	橙	100	No.7
15	甕	20.1	33.0	6.0	RWBU	A	鈍橙	100	No.8
16	甕	19.5	37.1	5.6	RWB	A	鈍橙	100	No.9
17	甕	19.5	(37.4)	6.2	RWB	A	鈍橙	95	No.11
18	甕	17.9	36.1	6.3	RWW'B	A	鈍橙	100	No.14
19	甕	19.8	33.2	6.0	RWW'B	B	橙	100	No.15
20	甕	19.3	35.5	5.3	RWB	B	橙	100	No.16



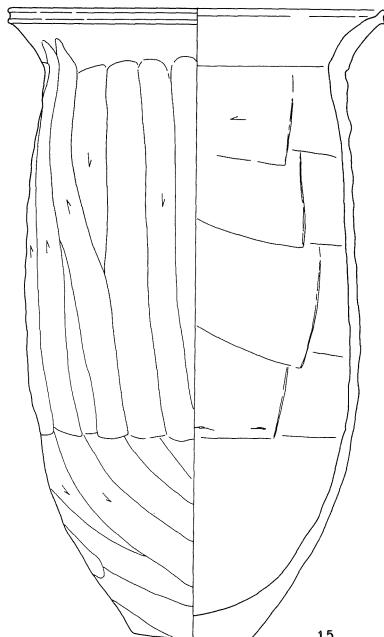
第23図 第4号住居跡 出土遺物（1）



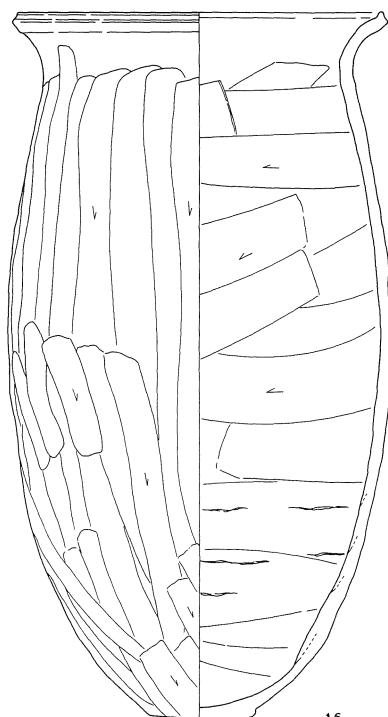
13



14



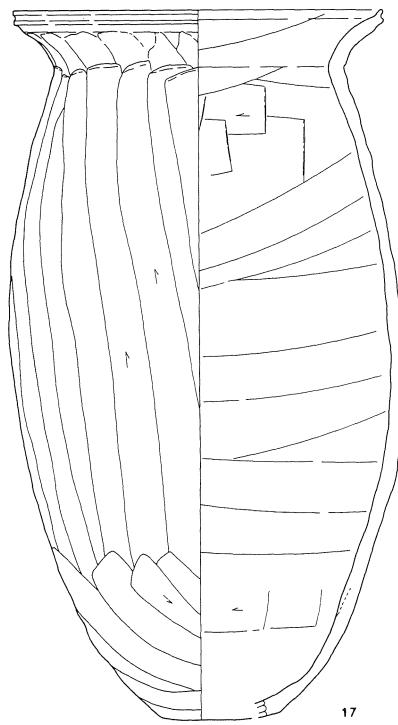
15



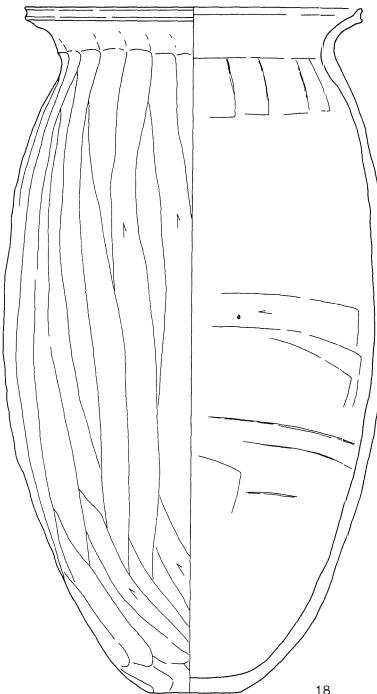
16

0 10cm

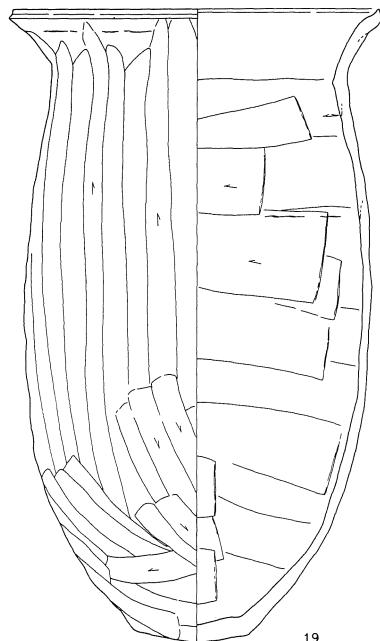
第24図 第4号住居跡 出土遺物（2）



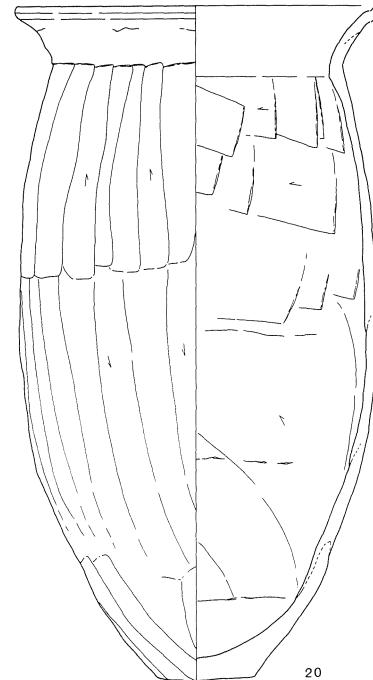
17



18



19



20

0 10cm

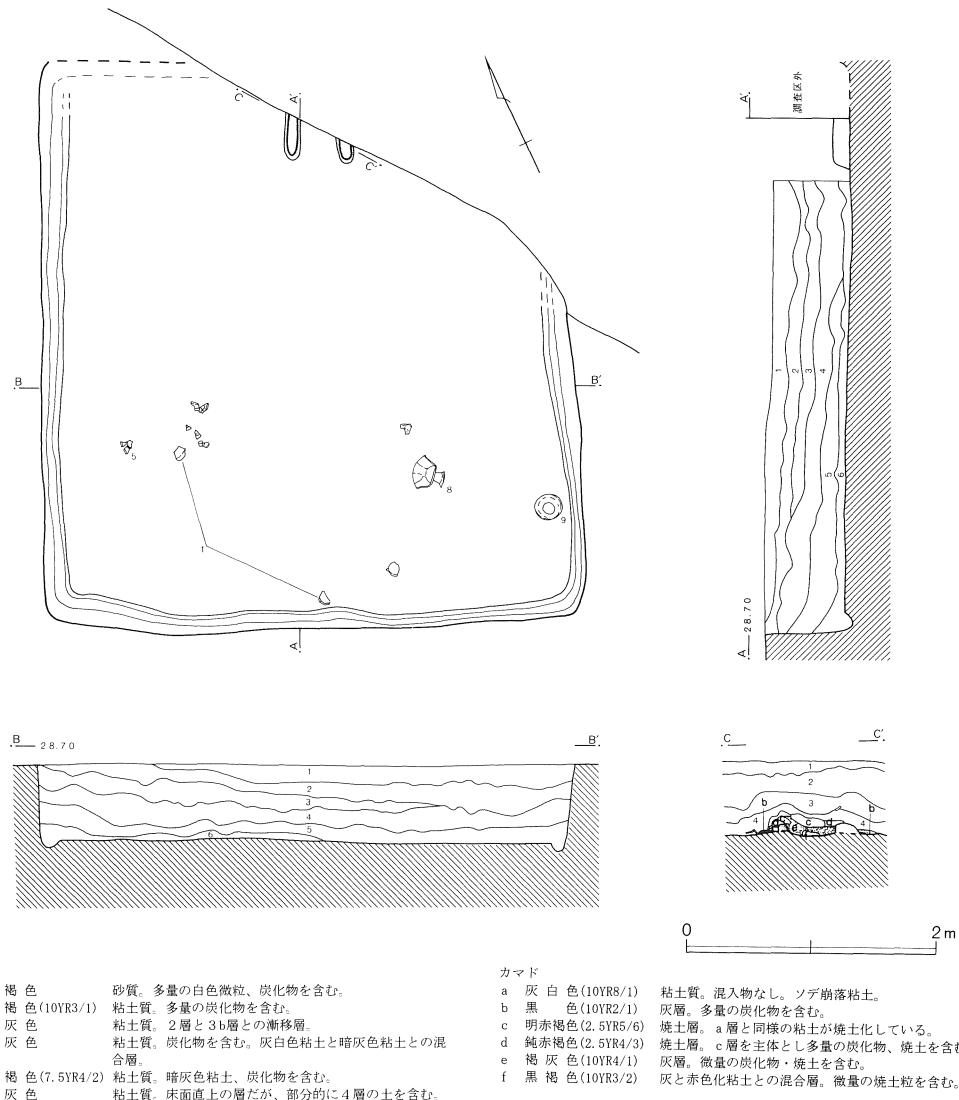
第25図 第4号住居跡 出土遺物（3）

## 第5号住居跡

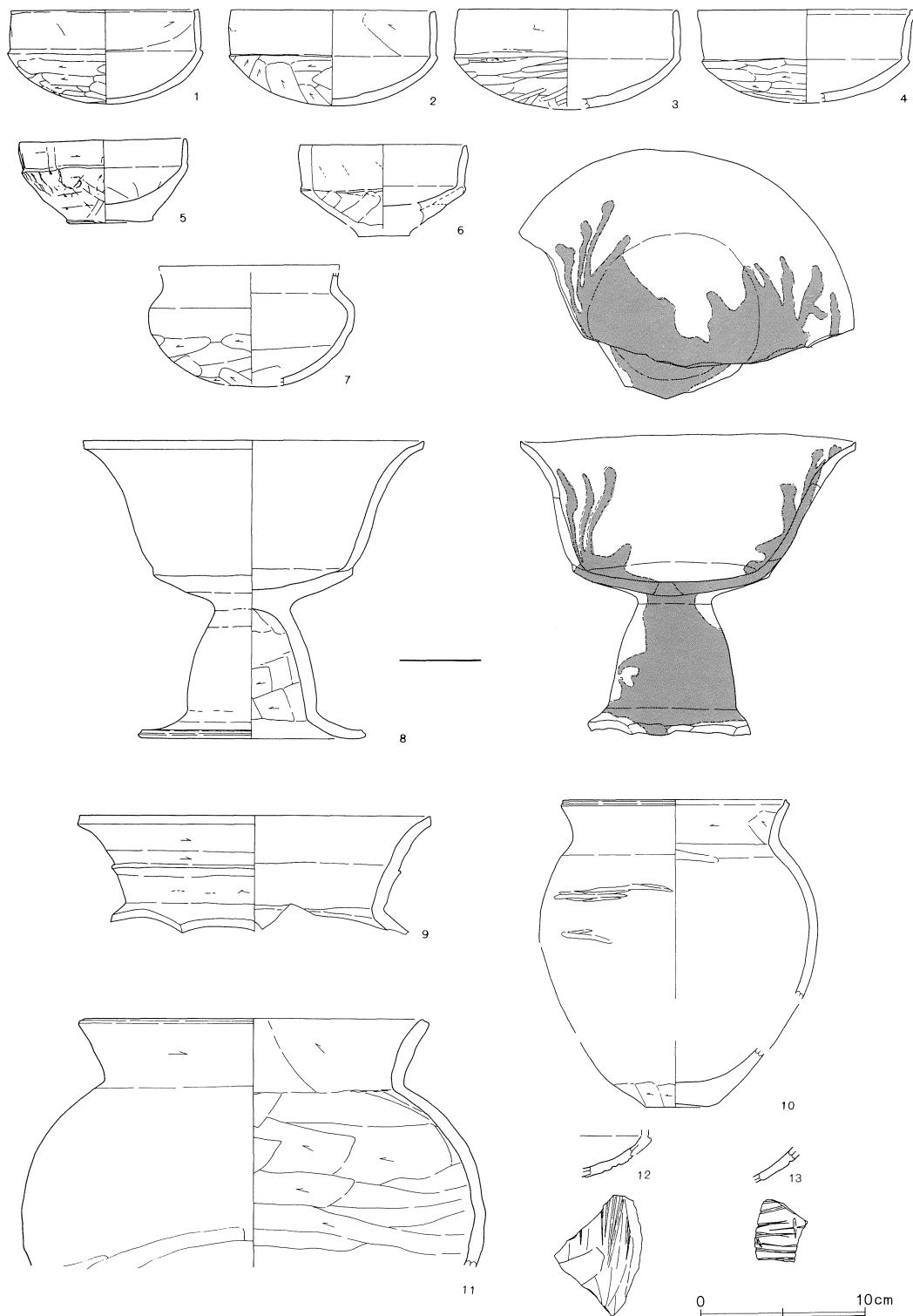
こー5グリッドに位置する。東隅は調査区外にあり、北壁は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長約4.30m、短軸長4.23m、深さ0.62mである。主軸方向はN-41°-Eである。壁溝は破壊部分をのぞいたすべての壁際で確認され、幅14cm、深さ6cmである。本住居跡も床面精査途中に出水に遭い、床面が破壊されたため貯蔵穴・柱穴等は確認できなかった。

カマドは北東壁に造られている。袖には灰白色粘土が使用されていた。燃焼部の幅は37cmで、左右両袖の外側には灰層があった。

遺物は5・8・9が床面直上から出土した。5の小型壺は口辺部の調整も未完であるが、体部外



第26図 第5号住居跡



第27図 第5号住居跡 出土遺物

第5号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.4	5.6		RWB	A	橙	80	No.2、8
2	壺	12.4	5.7		RB	A	橙	95	
3	壺	(13.4)	(6.0)		RWB	A	鈍褐	30	
4	壺	(13.3)	(5.6)		RB	A	暗赤灰	30	
5	壺	10.2	4.9	5.2	RB	A	赤灰	90	No.1 木葉底
6	壺	(10.2)	(5.0)		B	A	灰褐	15	
7	短頸壺	(11.0)	(6.8)		RWB	B	橙	30	
8	高壺	20.7	18.0	14.0	RB	A	明赤褐	60	No.10 樹脂付着
9	壺	21.4	(7.0)		WB	A	橙	100	No.11 転用器台
10	小型甕	13.9	(18.5)	3.7	U	A	鈍橙	90	
11	壺	(21.0)	(15.0)		R	A	鈍赤褐	25	
12	壺				RWB	A	鈍橙	破片	擦切痕
13	壺				RW	B	鈍橙	破片	擦切痕

面のケズリ調整は一切施されていない。底面には木葉痕が残り、体部は荒く指ナデされているだけで凹凸が顕著で亀裂も多数あり、未成品といえる。8の高壺は大型の壺部をもち本遺跡でも類例のない形態である。復原図とともに現状図も示したが、壺部の約半分と脚裾部の4分の3が打ち欠かれ、黒色樹脂が流れたように付着し割れ口にも及んでいる。出土状況と考えあわせると、割れ口を上にして据え置かれた状態で樹脂が掛けられたと見られる。9の壺は肩部以下を欠損しているが、口縁部は完存しており、床面に密着した状態で正立して出土した。壺口縁部からの転用器台である。12と13は擦切痕のある壺破片である。

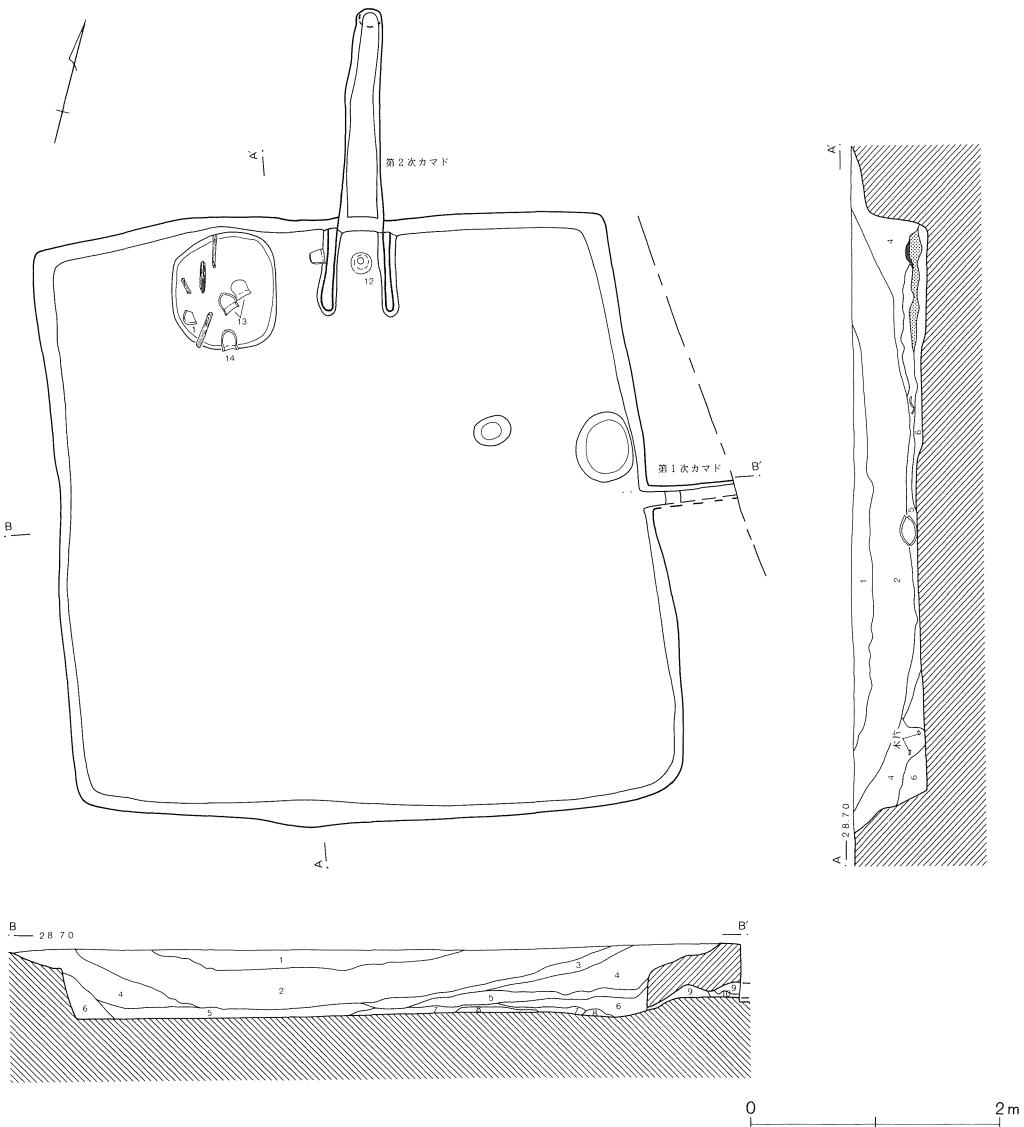
## 第6号住居跡

こー5グリッドに位置する。東壁の第1次カマド煙道は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長4.70m、短軸長4.52m、深さ0.53mで、主軸方向はN-19°-Wである。土層断面の観察からA-A'断面南壁寄りで6層堆積後の掘り込みがみとめられるが、基本的には自然堆積による埋没と考えられる。

貯蔵穴は第2カマド左側にあり、長径92cm、短径84cm、深さ14cmである。貯蔵穴に掛かる状態で5点の棒状木材を検出したが、第4号住居跡の例から見て、貯蔵穴蓋材の可能性が考えられる。ほかに2つのピットを検出したが、東壁際のものは長径54cm、短径47cmの皿状の掘り込みである。壁溝・柱穴は確認できなかった。

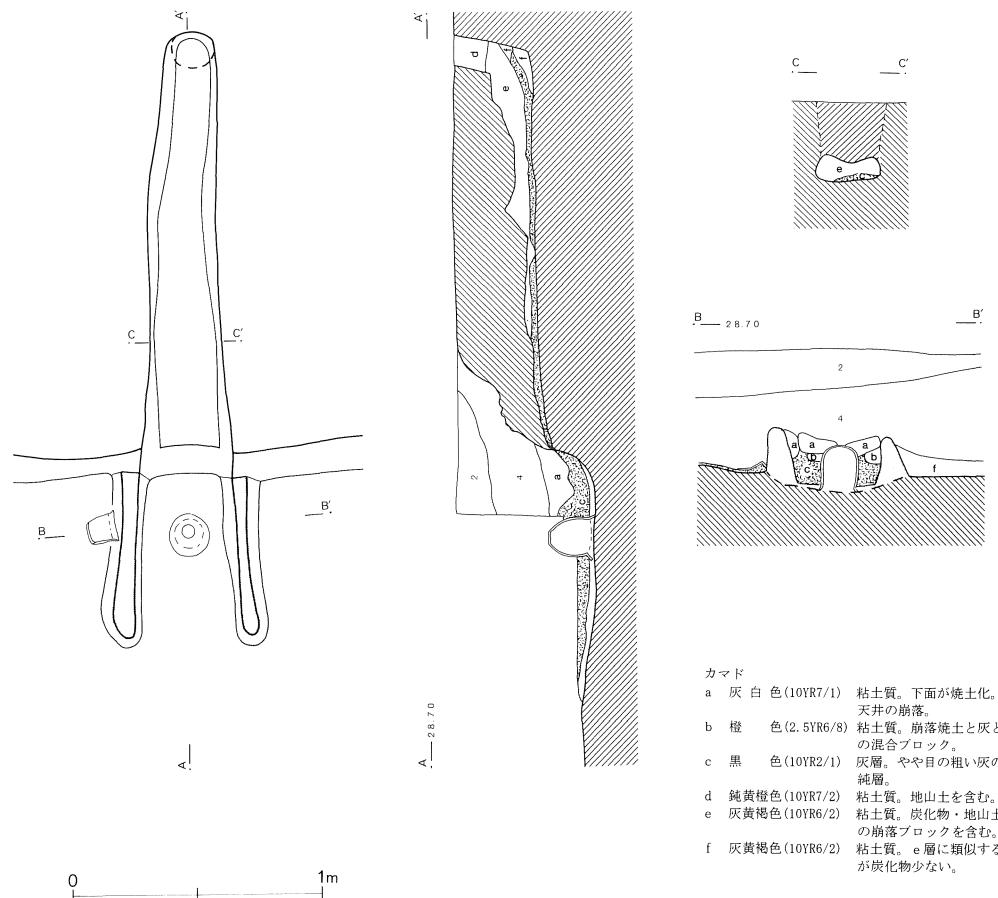
カマドは東壁で第1次カマド、北壁で第2次カマドを検出した。第1カマドは袖が残存しないが、前面で薄い灰層の広がりを確認した。煙道は幅約15cmで地山を水平に掘り抜いている。第2次カマドは灰白色粘土を袖以外に燃焼部床面にも貼りつけ、焚口部ではわずかに高まりをもっていた。右袖の長さは69cm、燃焼部の幅は35cmである。カマド断面に見えるa層は下面が焼土化した粘土層であり、燃焼部の天井が崩落したものである。煙道は幅25cm、長さ164cmであり、地山を水平に掘り抜き、先端に煙出し口をもつ。支脚位置は中軸線上であり小型甕が倒立転用され、床面の粘土で固定されていた。左袖の外側には灰層があった。

第2次カマド前面では床面よりわずかに浮いた位置で獸骨片を検出した。15の小型甕は第2次カマドの転用支脚である。貯蔵穴内からは1の壺と13・14の小型甕が出土した。12の甕は住居中央の出土だが、土層断面で観察すると本住居跡に直接伴う床面直上のものか、5層に伴う投入土器かは判断が難しい。



- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗灰(10YR6/1) 粘土質。白色シルトが薄い縞状に入る水成互層。 | 6 暗灰(10YR5/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。        |
| 2 暗灰(10YR5/1) 粘土質。白色シルトと植物遺体との水成互層。  | 7 灰白色(10YR7/1) 粘土質。灰層のブロックを含む。      |
| 3 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質。褐色粘土ブロック・炭化物を含む。 | 8 黒色(10YR2/1) 灰層。第1カマドにともなう灰層。      |
| 4 灰黄褐色(10YR5/2) 粘土質。微量の炭化物を含む。       | 9 灰黄褐色(10YR6/2) 粘土質。第1カマド煙道内への流れ込み。 |
| 5 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質。褐色粘土との混合層。       | 10 黒色(10YR2/1) 灰層。第1カマドの煙道内灰層。      |

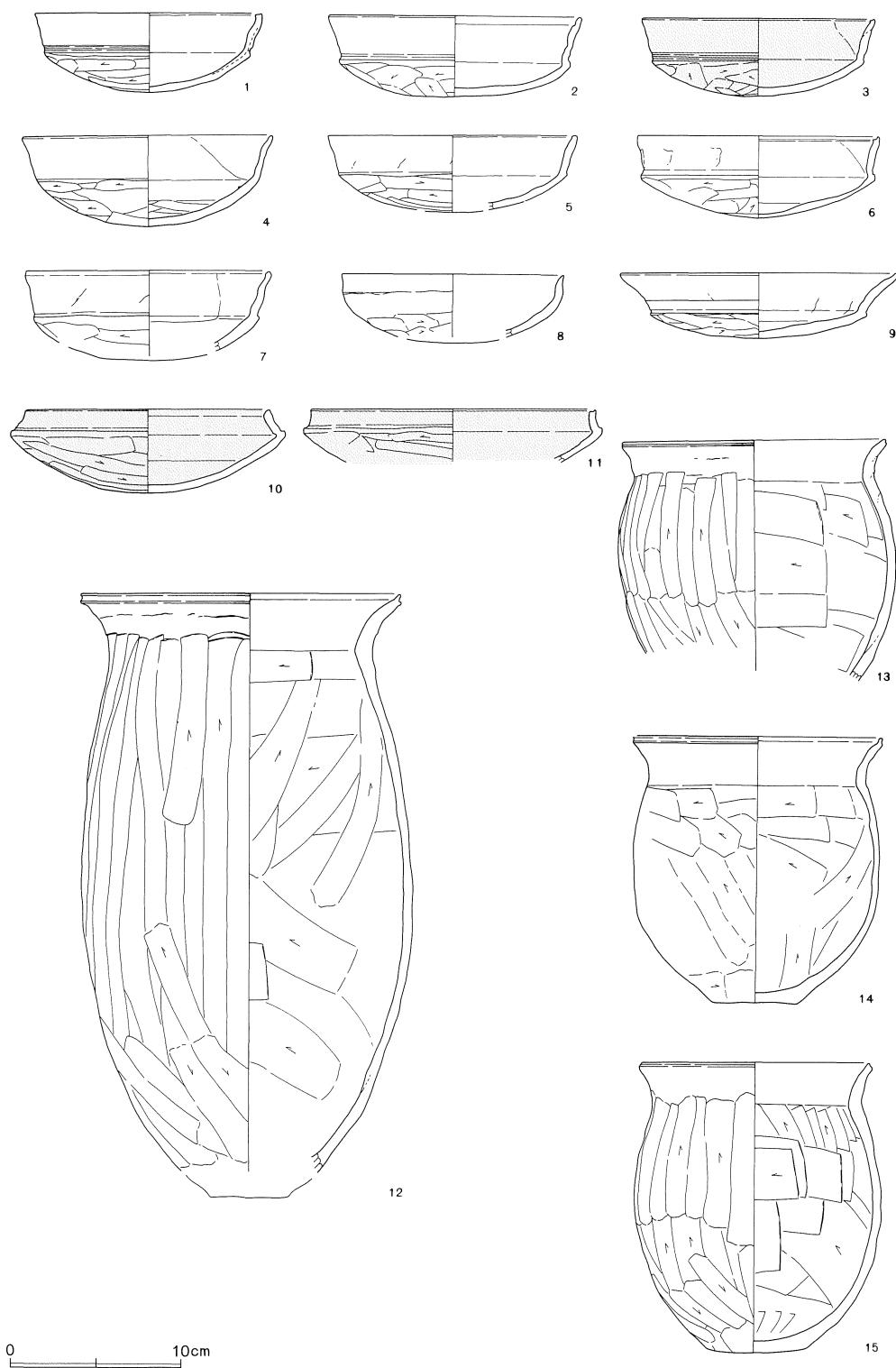
第28図 第6号住居跡



第29図 第6号住居跡 カマド

第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.3	4.6		RW	B	橙	50	No. 4
2	壺	(13.7)	(4.5)		RWW'	A	明赤褐色	30	
3	壺	14.9	4.7		W	A	赤黒	60	内外面黑色処理
4	壺	14.7	5.3		BW	B	赤灰	70	
5	壺	(14.7)	(4.5)		RW	A	橙	25	砂粒の多い胎土
6	壺	(14.2)	(4.8)		W	A	灰赤	30	
7	壺	14.4	5.3		RB	A	橙	80	砂粒の多い胎土
8	壺	(13.1)	(4.0)		RW	A	橙	25	
9	壺	16.3	3.8		R	A	鈍橙	50	
10	壺	(14.4)	(4.9)		RB	A	鈍褐	25	内面黑色処理
11	壺	(16.8)	(3.1)		RW	A	黒	20	内外面黑色処理
12	甕	18.9	(33.5)		RWB	A	鈍橙	70	
13	小型甕	15.6	(13.4)		RW'B	A	鈍橙	80	No. 3
14	小型甕	(14.7)	(15.4)	5.0	B	B	鈍橙	40	No. 3
15	小型甕	13.7	16.9	5.8	RW—	A	鈍橙	100	No. 1 転用支脚



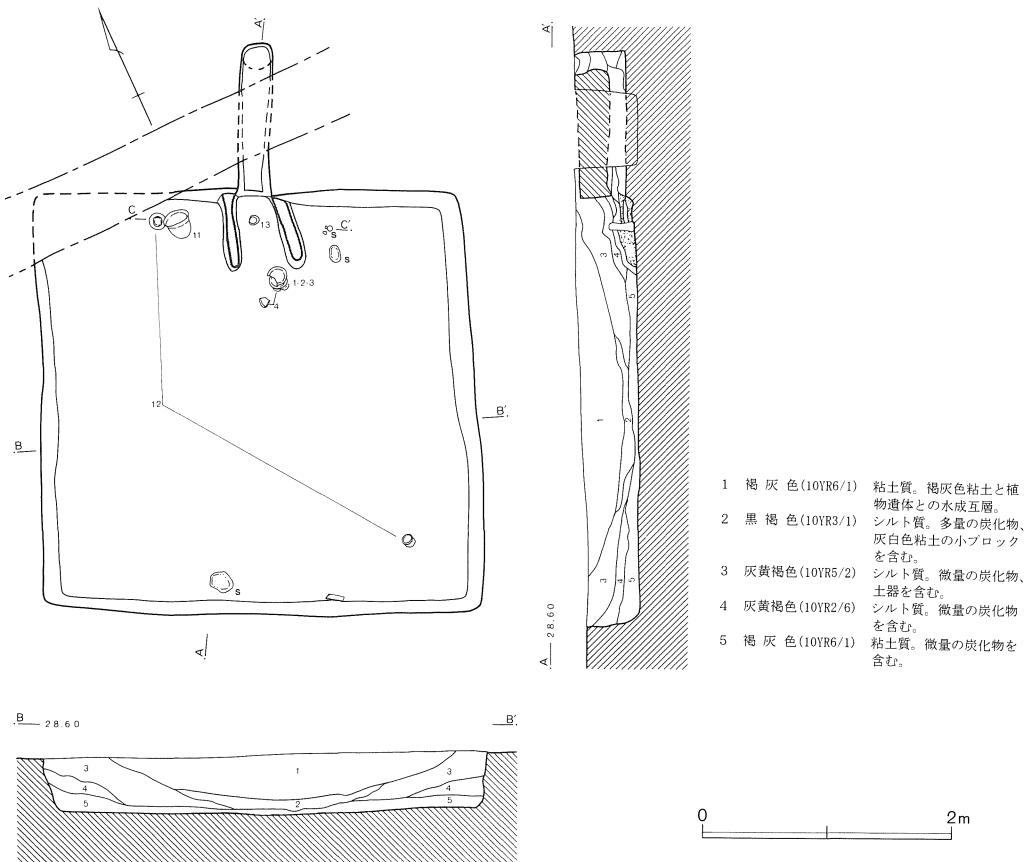
第30図 第6号住居跡 出土遺物

## 第7号住居跡

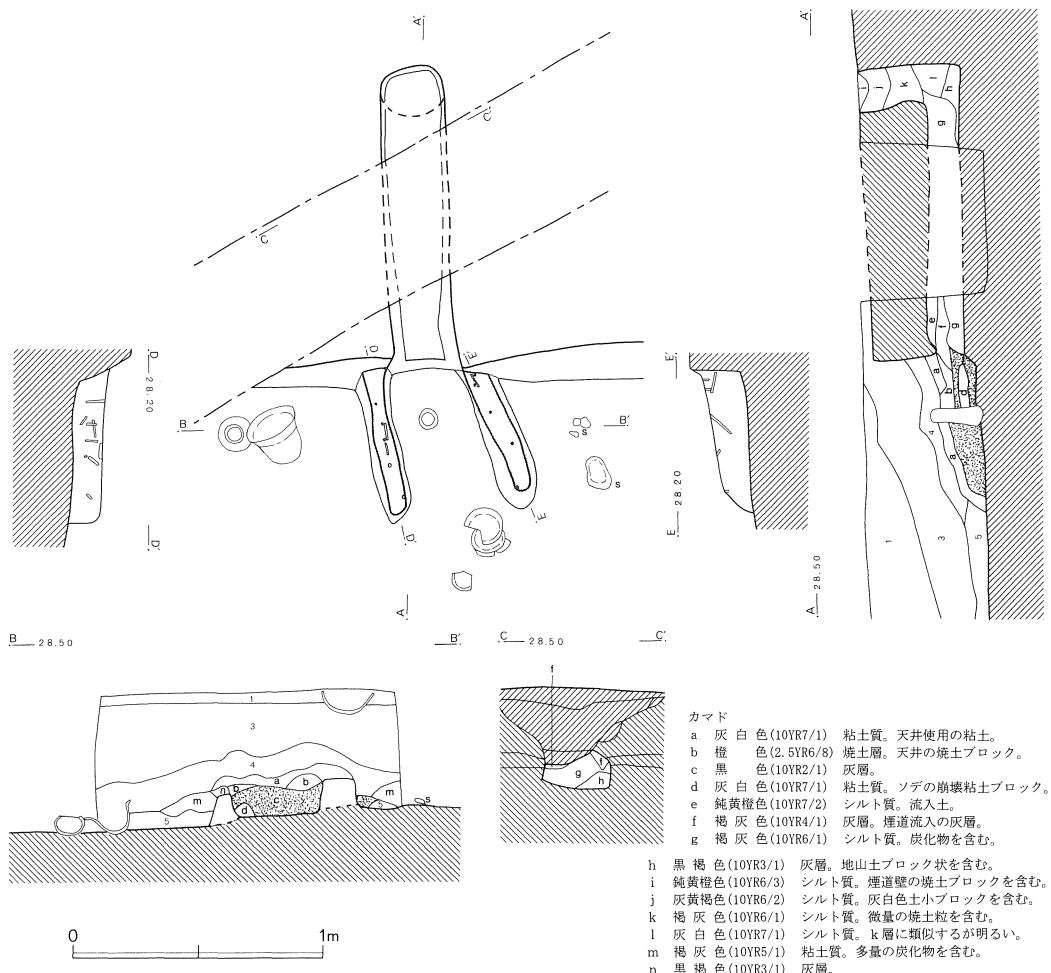
けー6グリッドに位置する。北隅はトレンチによって破壊されていた。規模は長軸長3.22m、短軸長3.16m深さ0.45mで、主軸方向はN-25°-Eである。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北壁に造られている。袖には灰白色粘土が使用され、両袖内に篠竹の芯材がみとめられた。左袖の長さは35cm、燃焼部の幅は35cmである。煙道は幅28cm、長さ116cmであり、地山を水平に掘り抜き、先端に煙出口をもつ。支脚は中軸線上であり、半焼成の土製支脚が使用されていた。右袖の外側には灰層があった。

遺物はカマド周辺を中心に出土した。カマド前面には床面より少し浮いて壊4点が下から1・2・3・4の順に重なって出土した。12の坩は内外面に暗文がみとめられるが、口縁部内面の暗文は12本のタテ線と1本の環状線で構成されている。完形だが、頸部で上下に分離し、口縁部は南東隅で、胴部はカマド左脇で出土した。このほか、使用痕をもつ安山岩と小礫がカマド右脇で出土した。



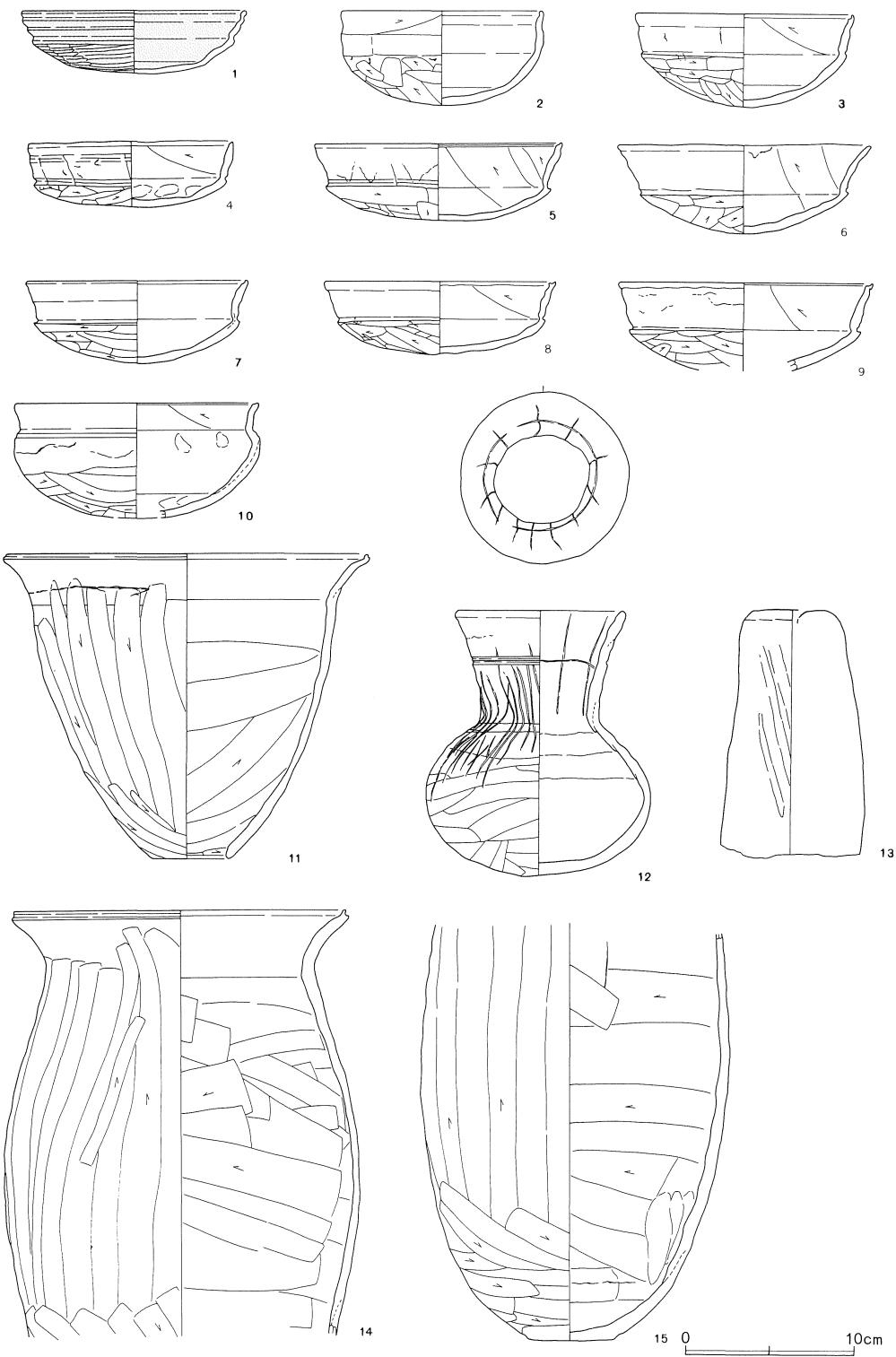
第31図 第7号住居跡



第32図 第7号住居跡 カマド

第7号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.3	3.7		W	A	黒	70	No. 2 内外面黑色処理
2	壺	12.0	5.5		RWB	A	鈍褐	100	No. 3
3	壺	12.9	5.4		RB	A	鈍赤褐	95	No. 4
4	壺	12.2	3.8		W	A	橙	100	No. 5
5	壺	14.6	4.5		RWB	B	明赤褐	50	カマド
6	壺	14.9	5.2		RW	B	橙	90	カマド
7	壺	13.1	4.8		RW	A	鈍橙	60	3層
8	壺	13.7	4.2		RW	A	鈍橙	90	3層
9	壺	15.1	(5.2)		W	B	鈍黄橙	40	
10	椀	14.3	(6.7)		RW	A	明赤褐	50	3層
11	甌	21.5	17.8	4.5	W	B	鈍黄橙	95	No. 6
12	壺	10.0	15.5		W	B	明赤褐	100	No. 7・8 口縁部・肩部に暗文
13	支脚			14.0	W	C	褐灰	90	No. 1
14	甌		(24.4)	(5.0)	RWB	A	鈍黄橙	30	3層
15	甌	(19.9)	(25.0)		WB	B	灰黃	30	3層

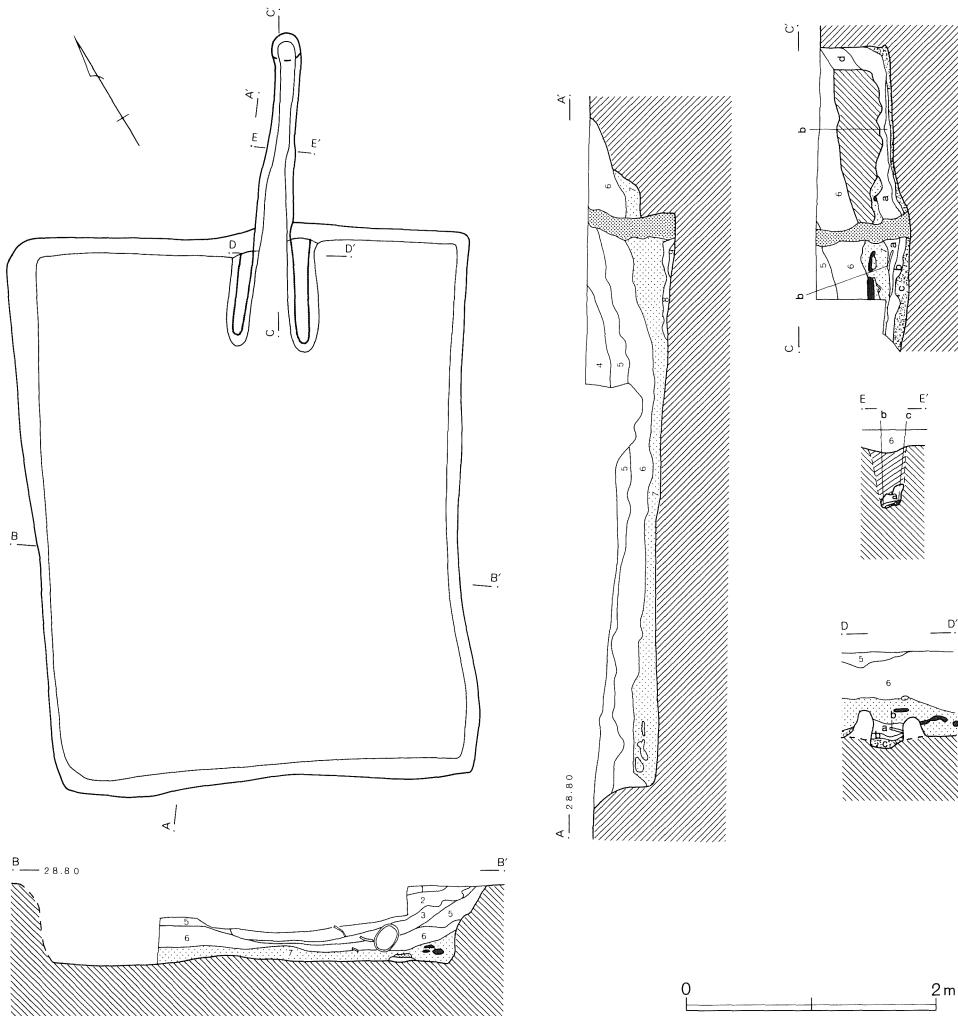


第33図 第7号住居跡 出土遺物

## 第8号住居跡

けー5グリッドに位置する。規模は長軸長4.08m、短軸長3.29m、深さ0.65mで、主軸方向はN-32°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、液状化現象の影響を受けて乱されていた。このため壁溝・貯藏穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土7層中にはFAブロックの混合が確認できた。

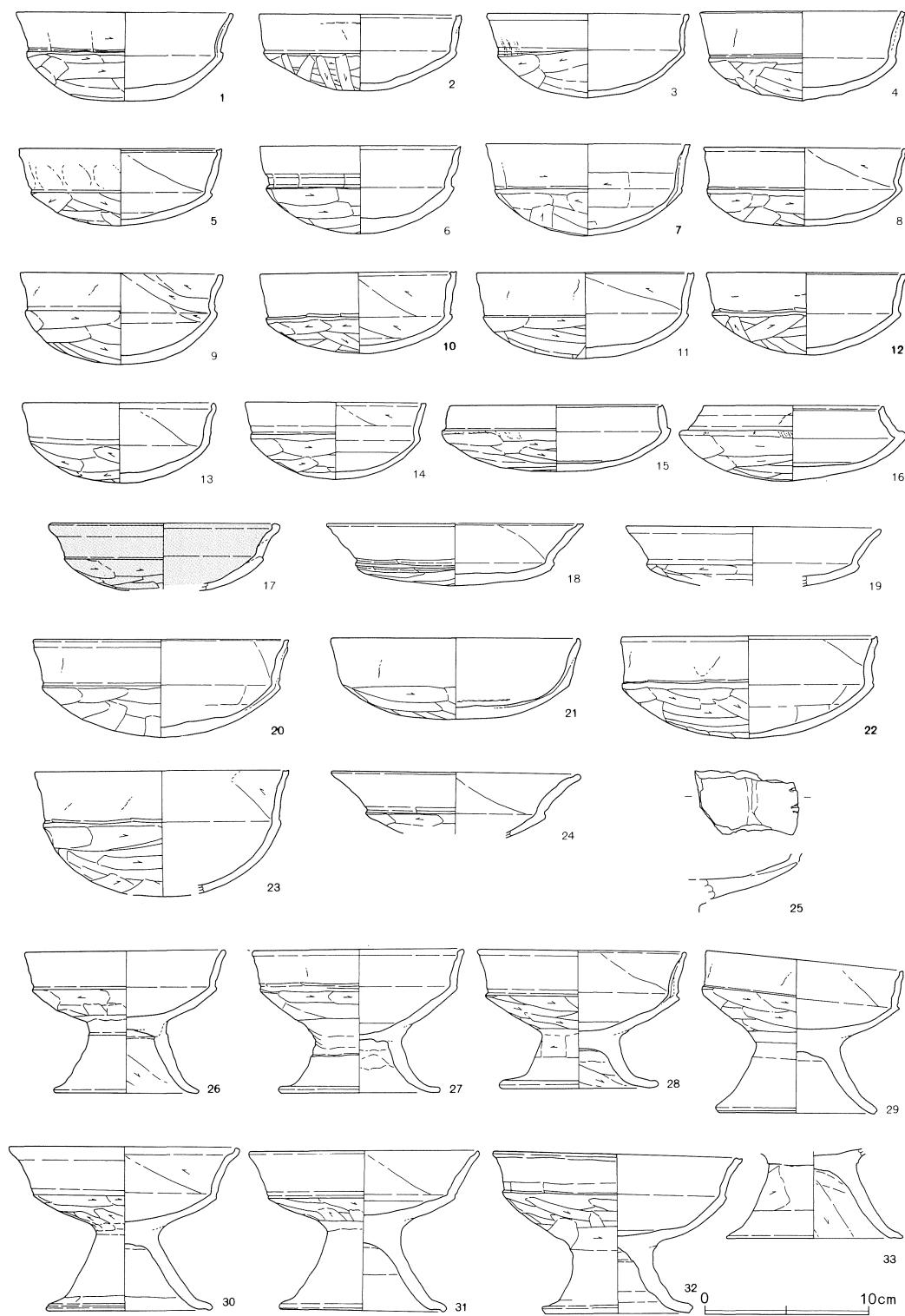
カマドは北東壁に造られている。袖には白色粘土が使用されていた。右袖の長さは88cm、燃焼部の幅は24cmであり、煙道は幅15cm、長さ164cmである。地山を水平に掘り抜き、先端に煙出口をもつ。左袖の外側には灰層があった。



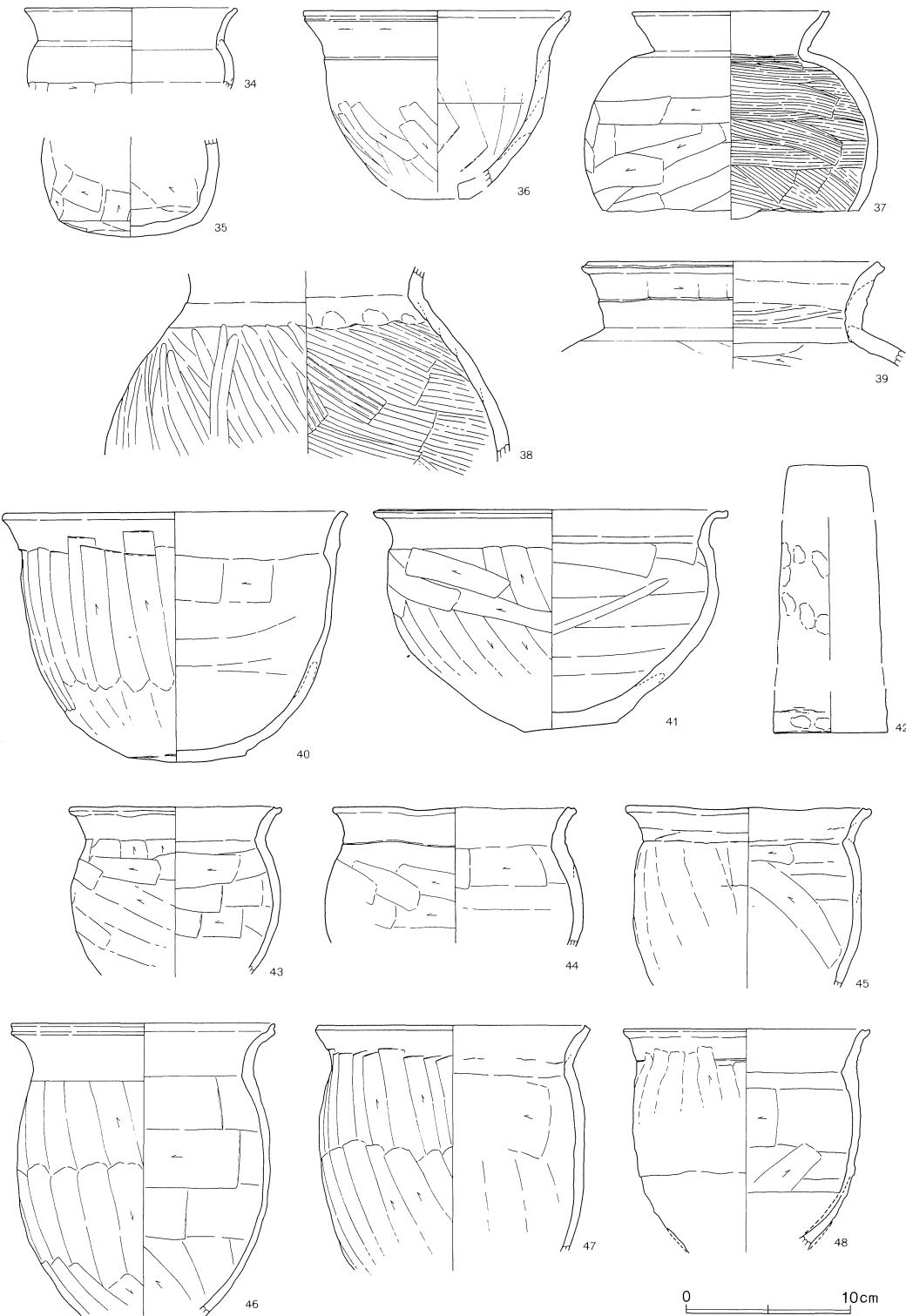
- 1 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質。多量の炭化物粒を含む。
- 2 黒 色(10YR2/1) 炭化物層。多量の灰白色粘土・焼土を含む。
- 3 鈍黃橙色(10YR7/2) 粘土質。少量の炭化物・焼土粒を含む。
- 4 褐 灰 色(10YR5/1) 粘土質。微量の白色微粒を含む。
- 5 褐 灰 色(10YR6/1) 粘土質。少量の炭化物を含む。
- 6 褐 灰 色(10YR4/1) 粘性強。多量の炭化物を含む。
- 7 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質。少量の炭化物・FAブロックを含む。
- 8 黒 色(10YR2/1) 炭化物層。少量の焼土を含む。
- 9 赤 褐 色(2.5YR4/8) 焼土層

- カマド**
- a 暖灰 色(10YR6/1) 粘土質。多量の炭化物・焼土粒・灰を含む。
  - b 赤褐 色(2.5YR4/8) 粘土質。多量の焼土・少量の炭化物・灰を含む。
  - c 黑 色(10YR2/1) 炭化物層。
  - d 鈍黃橙色(10YR4/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。

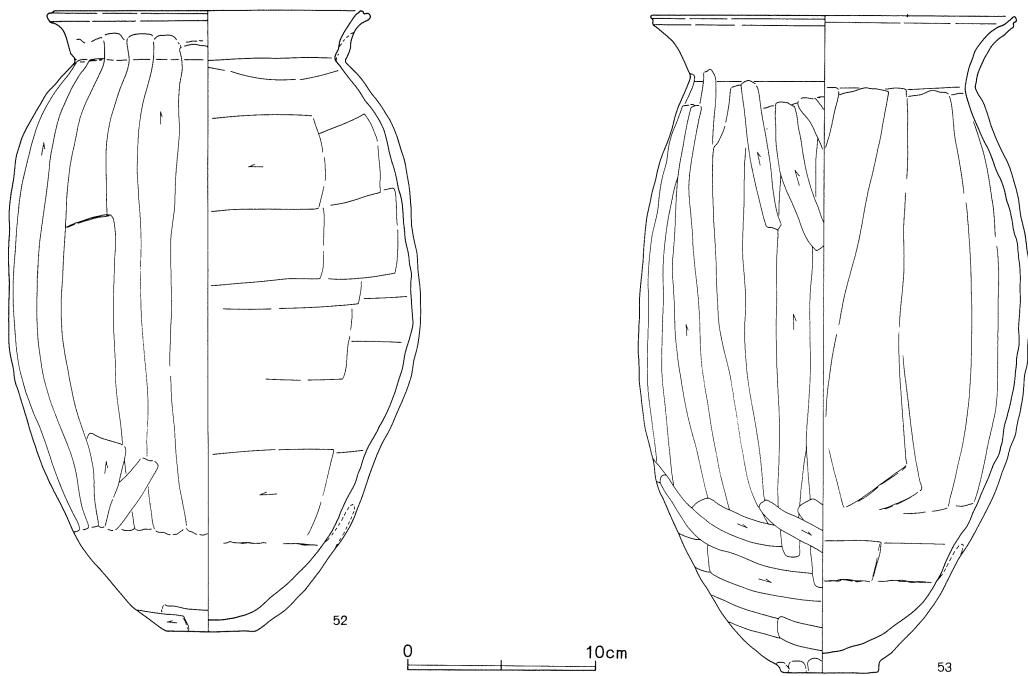
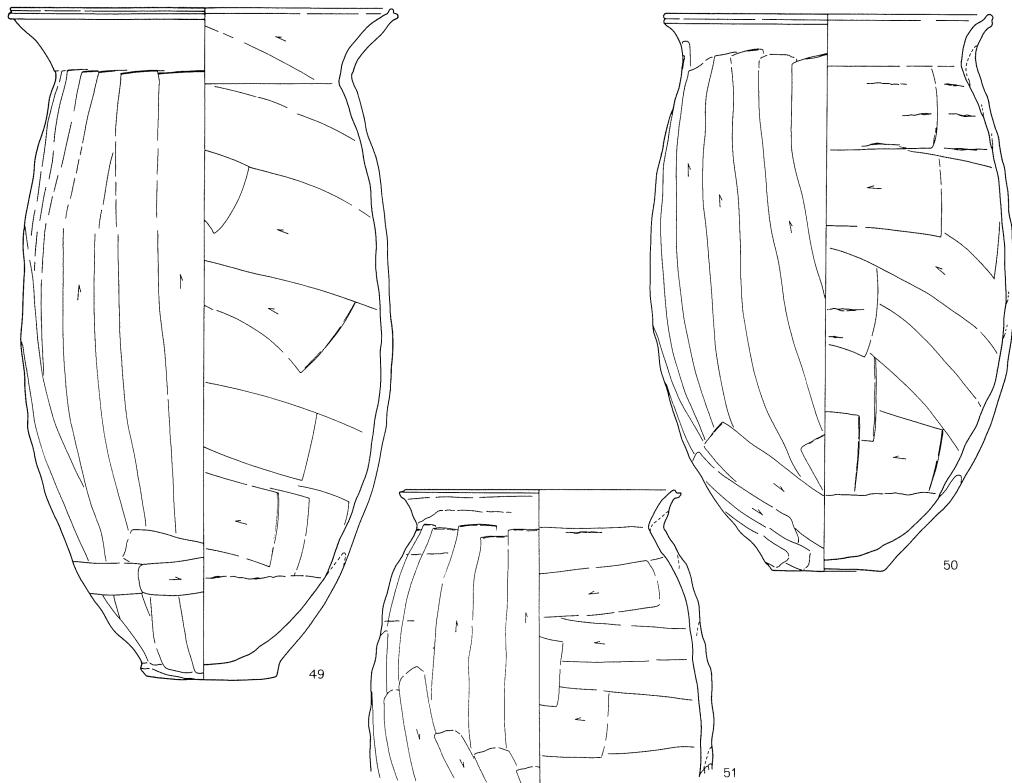
第34図 第8号住居跡



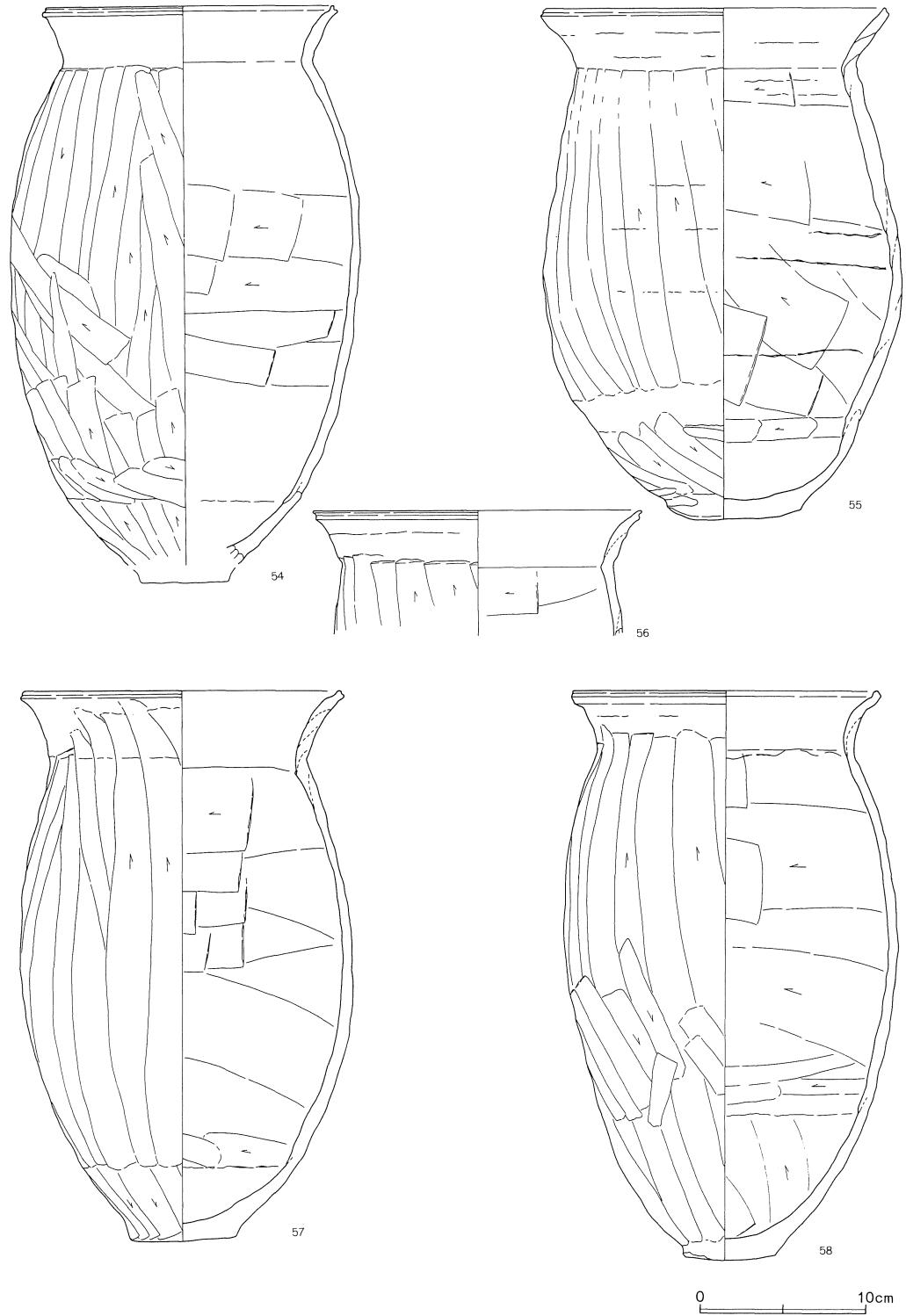
第35図 第8号住居跡 出土遺物（1）



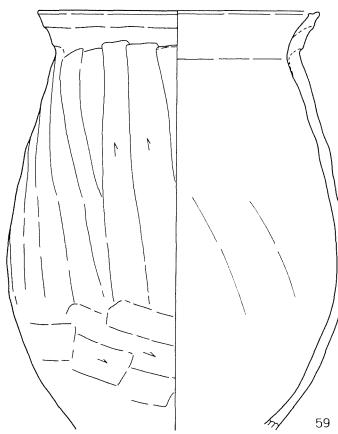
第36図 第8号住居跡 出土遺物（2）



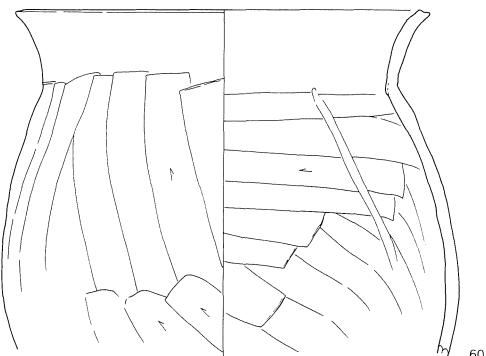
第37図 第8号住居跡 出土遺物（3）



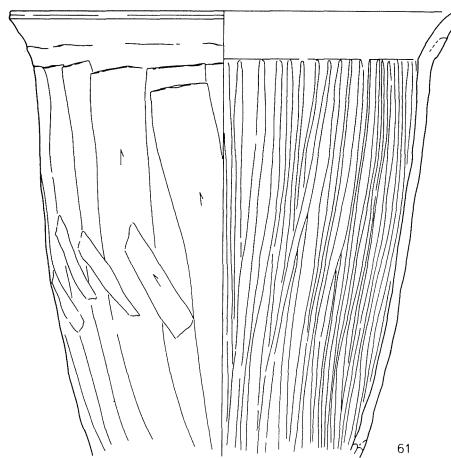
第38図 第8号住居跡 出土遺物（4）



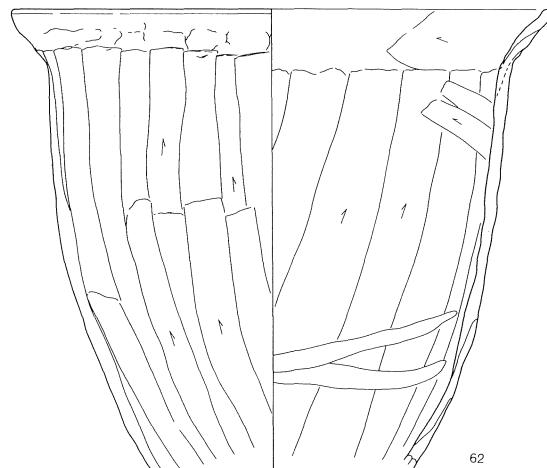
59



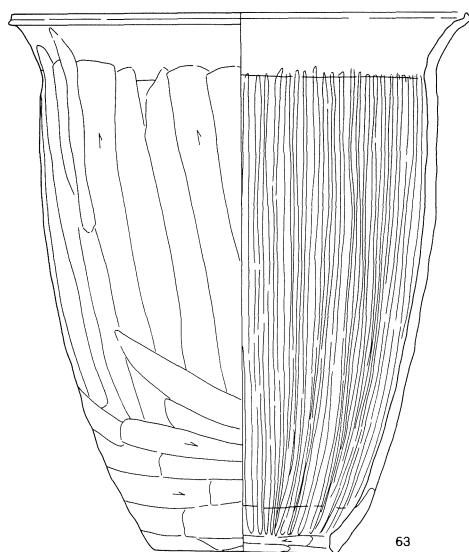
60



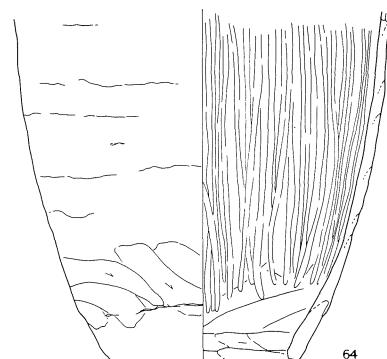
61



62



63



64



第39図 第8号住居跡 出土遺物（5）

第8号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(13.3)	(5.3)		WW'B	B	橙	30	中層
2	壺	12.4	4.6		RWB	B	橙	75	中層
3	壺	12.4	5.1		RW	B	橙	70	中層
4	壺	12.5	5.4		RB	B	鈍橙	50	
5	壺	12.4	4.7		RW	B	橙	95	中層 口辺部に指頭押出し痕
6	壺	12.3	5.3		RWW'	B	橙	70	中層
7	壺	12.5	5.5		RB	A	橙	50	
8	壺	12.4	4.7		RW	C	橙	95	中層
9	壺	12.4	5.5		W	A	橙	100	
10	壺	12.60	4.9		RW	B	橙	100	中層
11	壺	13.3	5.2		RWB	A	橙	100	
12	壺	12.1	4.9		RB	A	橙	60	
13	壺	11.8	4.8		RWB	B	橙	75	中層
14	壺	(11.1)	(4.7)		RWB	B	鈍橙	40	2層
15	壺	(13.1)	(4.0)		RW	B	鈍橙	20	中層
16	壺	11.0	4.6		RW	A	橙	100	2層
17	壺	(14.2)	(4.0)		WW'B	B	赤黒	25	内外面黒処理
18	壺	(15.7)	(3.8)		RWB	B	橙	25	中層
19	壺	(15.6)	(3.6)		RWB	B	橙	40	2層
20	大型壺	(15.6)	(5.9)		RW	B	橙	25	
21	大型壺	(15.3)	(4.9)		RH	B	橙	25	中層
22	大型壺	15.6	6.2		RW	A	橙	100	
23	大型壺	15.6	(7.6)		RW	A	橙	90	
24	高壺	15.3	(3.7)		RW	A	橙	60	中層
25	高壺				RWB	A	鈍橙	破片	中層 接合部に刻目
26	高壺	12.3	8.6	8.7	RWW'	B	橙	90	2層
27	高壺	13.0	8.6	9.7	RWB	B	橙	50	中層
28	高壺	12.8	8.3	9.5	RWB	A	橙	80	
29	高壺	12.1	9.2	9.5	RW	B	橙	95	中層
30	高壺	14.1	9.9	10.0	RW	B	橙	95	中層
31	高壺	14.1	9.6	10.0	RW	B	橙	95	中層
32	高壺	15.3	9.6	8.8	RW	B	橙	80	中層
33	高壺		(5.3)	10.2	RW	A	橙	100	中層
34	鉢	(13.0)	(5.3)		W	B	橙	25	中層
35	平底鉢		(6.0)	(8.6)	RWW'	B	橙	30	中層 被熱赤変
36	甑	(16.3)	(11.0)		WW'B	A	橙	20	中層
37	壺	12.0	(12.5)		WB	A	橙	90	中層 転用器台か
38	壺		(11.0)		RW	B	鈍橙	45	中層
39	壺	(18.5)	(6.5)		W	A	橙	30	中層 転用器台
40	鉢	21.0	15.1	7.2	W'	B	橙	70	中層 被熱赤変剝離
41	鉢	21.6	13.2	5.8	RWW'B	B	鈍橙	90	中層 煤付着
42	支脚		(12.8)	7.0	RW	A	橙	60	
43	小型甕	12.9	(10.2)		RW	B	橙	90	中層
44	小型甕	14.8	(8.2)		RWW'	B	橙	90	中層 転用器台か
45	小型甕	15.0	(11.0)		B	C	鈍橙	50	中層
46	小型甕	15.8	(17.7)		RWB	B	鈍橙	50	中層
47	小型甕	16.7	(14.7)		WB	B	明褐	100	2層
48	小型甕	15.0	(13.5)		W	B	鈍橙	90	中層

第8号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
49	甕	20.6	25.4	7.2	RW	B	橙	80	中層
50	甕	17.5	29.2	5.9	RB	A	鈍橙	70	中層
51	甕	14.9	15.6		RW'B	B	鈍橙	60	中層
52	甕	17.1	32.6	4.7	RWW'	B	鈍橙	70	中層
53	甕	19.4	34.5	4.9	RWB	B	鈍橙	80	中層
54	甕	17.6	(28.2)		RWW'U	A	橙	70	中層
55	甕	20.8	30.6	7.9	RWB	B	鈍橙	90	
56	甕	(19.9)	(7.5)		RB	A	橙	25	中層
57	甕	19.4	32.9	6.4	RW	B	鈍橙	70	2層
58	甕	18.6	34.0	5.5	RWB	B	鈍橙	70	中層
59	甕	15.0	(22.0)		RW	B	鈍橙	50	中層
60	甕	22.0	(18.3)		RWB	B	鈍橙	50	中層
61	甌	23.8	(23.5)		RW	B	橙	60	中層
62	甌	28.5	(24.3)		RWB	A	鈍橙	80	
63	甌	24.4	28.2	9.6	RW'B	A	鈍橙	90	中層
64	甌		(18.4)		RW	B	鈍橙	40	中層

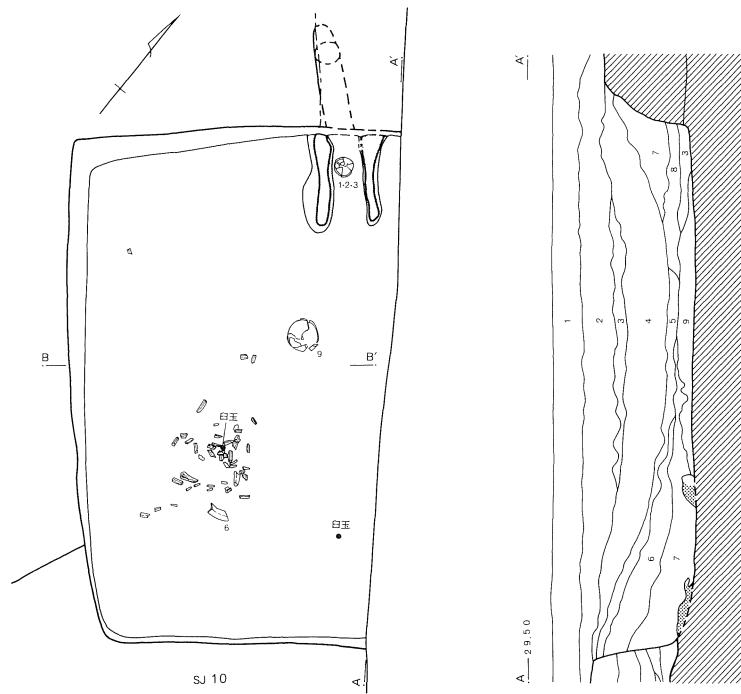
遺物は2・3層中から多量に出土した。2層は灰と炭化物の層だが、この層の傾斜に対応して南東壁から住居中央に向かって投棄されたような状態だった。完形品は少なく破碎された土器が投入されていた。高壺の点数が多いことが特筆され、形態のわかるものが7点ある。35は大きめの径の底部から胴部が垂直に立ち上がり、口縁部が不明だが、平底鉢的な形態と考えられる。砂粒の多い胎土で火を受けている。37の壺は胴部下位を欠損するが外面全体に煤が付着し、煮沸用の転用器台の可能性が考えられる。39の壺は口縁部内面が磨滅しており明らかに転用器台である。甕も多量に出土し、口縁端部に面をもつものが主体だが、52は口縁部が短く、やや肩の張る形態が特徴的である。図示した4点の大型甌のうち62は7層中からの出土であり、2・3層の土器群よりも時期的に古いものである。

### 第9号住居跡

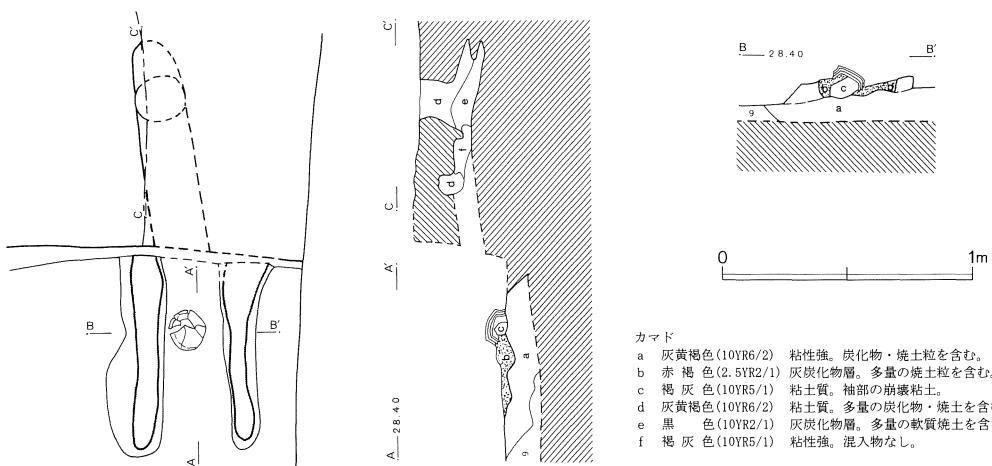
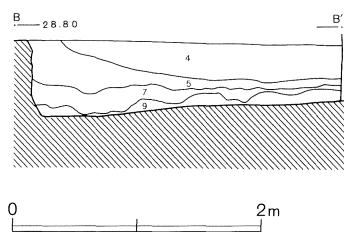
けー5グリッドに位置する。第10号住居跡の覆土を切り込んでいた。住居の東半分は調査区外である。カマド煙道部は側溝によって破壊されていた。規模は主軸長4.00m、深さ0.55mで、主軸方向はN-40°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、液状化現象によって乱されていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には白色粘土が使用されていた。左袖の長さは78cm、燃焼部の幅は30cmである。煙道は、長さ84cmであり、地山を水平に掘り抜き、燃焼部奥壁から60cmのところに煙出口をもつ。支脚は左寄りであり、粘土ブロックの上に壺を3点伏せ重ねて転用していた。

遺物は少量であり、支脚に転用された1・2・3の壺3点のほか、4の壺と7の甕がカマドから、また、6の甕と9の壺が5層から出土した。特筆すべきは、6・9の土器と混じって5層上面から馬齒が多量に出土したことである。切歯・臼歯合わせて21点あり、1か所に集中しているが、方向

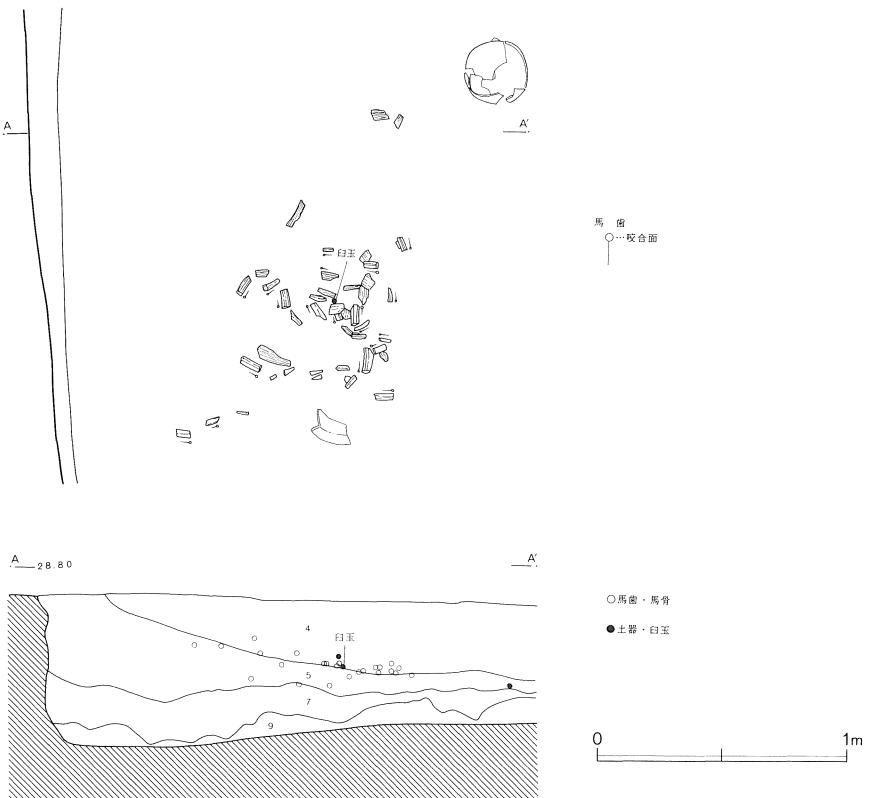


- 1 黒褐色(10YR3/1) 粘性強。多量の炭化物を層状に含む。  
 2 褐灰色(10YR5/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。  
 3 褐灰色(10YR4/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。  
 4 灰白色(10YR7/1) 粘土質。灰白色・灰褐色・白色各粘土の互層。  
 5 褐灰色(10YR5/1) 粘土質。少量の炭化物を含む。  
 6 鈍黄橙色(10YR6/3) 粘土質。少量の炭化物を含む。  
 7 褐灰色(10YR6/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。  
 8 黒褐色(10YR3/1) 粘土質。多量の炭化物・灰・少量の焼土粒を含む。  
 9 鈍黄橙色(10YR7/2) 砂質。液状化によって形成された。



- カマド  
 a 灰黄褐色(10YR6/2) 粘性強。炭化物・焼土粒を含む。  
 b 赤褐色(2.5YR2/1) 灰炭化物層。多量の焼土粒を含む。  
 c 褐灰色(10YR5/1) 粘土質。袖部の崩壊粘土。  
 d 黄灰褐色(10YR6/2) 粘土質。多量の炭化物・焼土を含む。  
 e 黑色(10YR2/1) 灰炭化物層。多量の軟質焼土を含む。  
 f 褐灰色(10YR5/1) 粘性強。混入物なし。

第40図 第9号住居跡 カマド

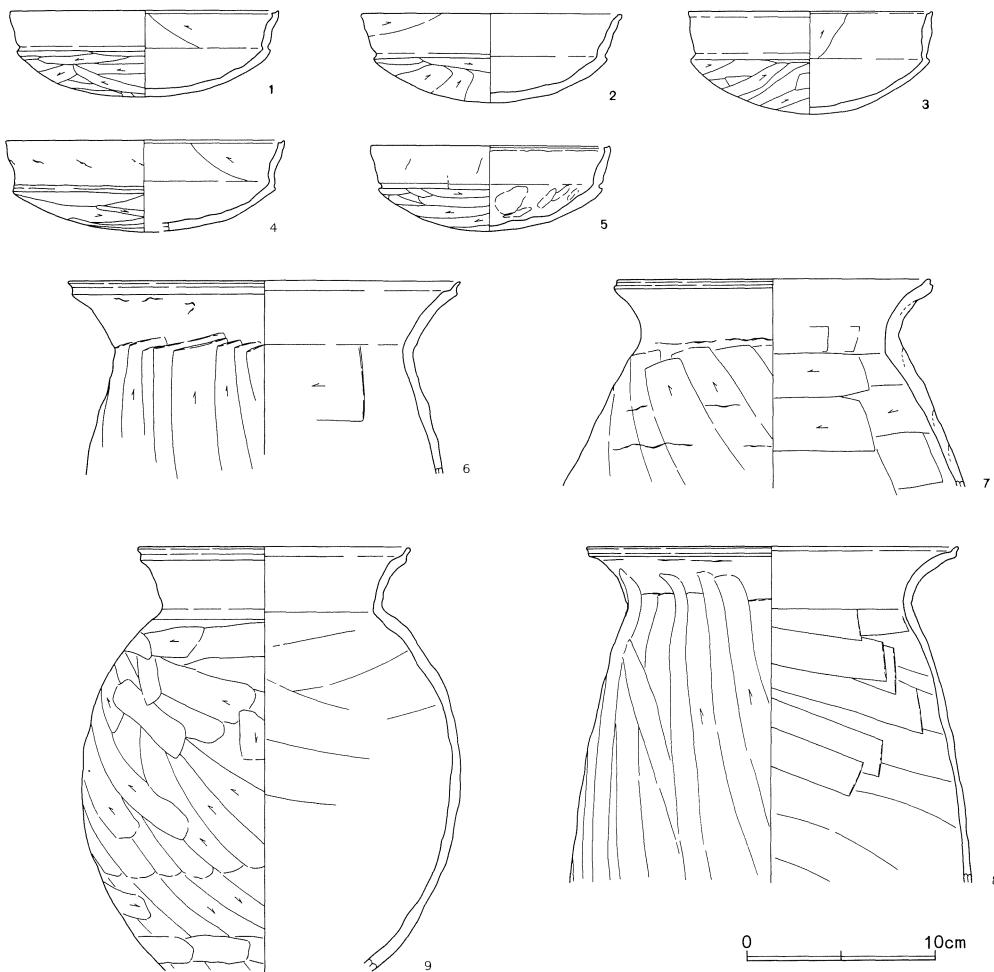


第41図 第9号住居跡 馬歯出土状況

を違えて乱れており、他所で頭蓋骨・下顎骨を破碎したものを、埋没途中で窪地状の本住居跡に投入したものと見られる。滑石製臼玉を伴う。

#### 第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	14.2	4.0		RW	A	橙	50	No. 6 転用支脚
2	壺	13.8	4.7		RWB	B	鈍橙	80	No. 6 転用支脚
3	壺	13.0	5.5		RB	A	鈍橙	80	No. 6 転用支脚
4	壺	14.7	(4.8)		RB	A	鈍橙	70	カマド
5	壺	12.7	4.5		RW	A	橙	50	
6	甕	(20.8)	(9.1)		WB	A	橙	40	No. 2
7	甕	16.8	(11.0)		RW	B	鈍橙	70	カマド
8	甕	19.7	(17.7)		RWB	A	鈍橙	70	
9	壺	14.5	(22.5)		W	A	橙	90	No. 1

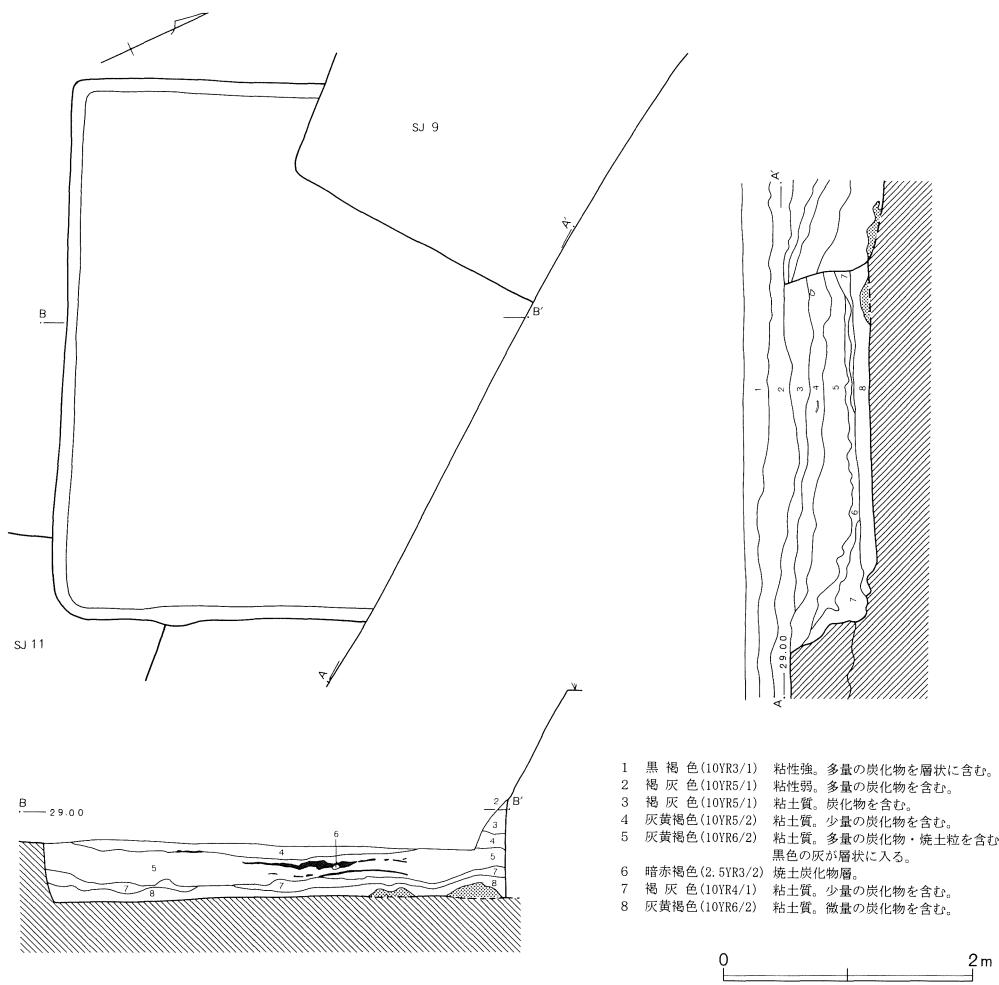


第42図 第9号住居跡 出土遺物

#### 第10号住居跡

けー5グリッドに位置する。第9号・第11号住居跡と重複し、両者に切られていた。西壁北半は第9号住居跡に破壊され、北壁は調査区外にある。規模は南壁長4.05m、深さ0.50mであり、主軸方向はカマドが北壁にあると考えると、N-27°-Eである。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

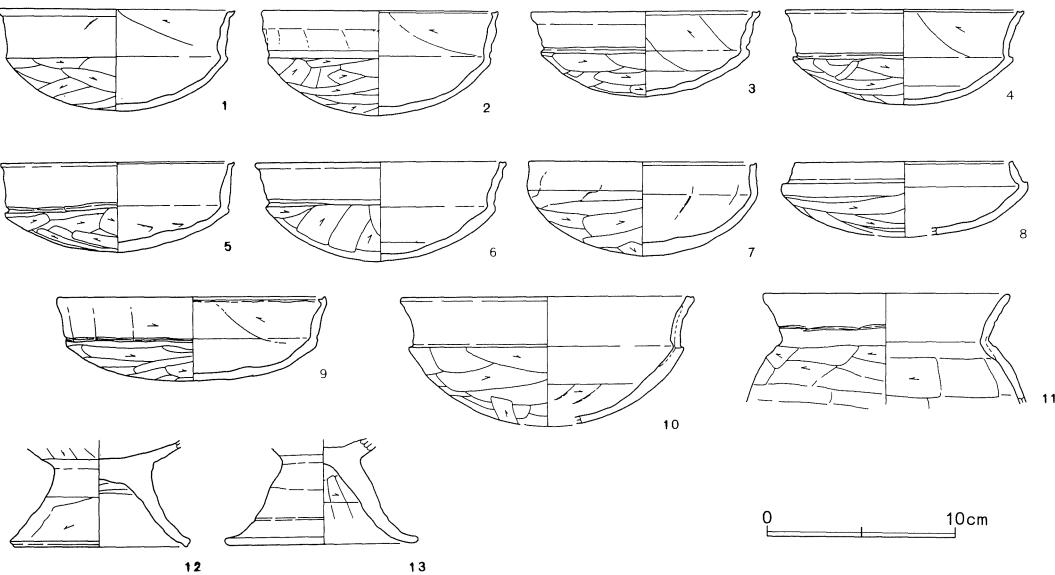
土層観察より、本住居跡を第9号住居跡が切り込んでいることは明らかだが、本住居跡が完全に埋没し、平坦化した時点では第9号住居跡が掘り込まれている。本住居跡からの遺物はほとんどが5層以下の覆土中からの出土であるが、第9号・第11号住居跡出土の土器と大きな時期差はみとめられない。前述の第2号住居跡で床面上の土器と覆土中の土器とで大きな時期差があり、長期間にわたって廃屋、窪地として存在していたと考えられるのと対象的である。これは、第9号住居跡の建設に先立ち、本住居跡が人為的に埋め戻され、平坦化されたものと考えることができる。



第43図 第10号住居跡

第10号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	5.3		W	A	橙	95	
2	壺	12.2	5.5		RW	A	橙	50	
3	壺	12.2	4.5		RW	B	橙	70	
4	壺	12.6	5.0		RW	B	橙	100	
5	壺	12.4	4.7		RW	A	橙	80	
6	壺	13.3	5.2		RW	B	鈍橙	60	
7	壺	12.1	4.9		RWW'	B	橙	95	
8	壺	(11.6)	(4.0)		RW	B	橙	20	
9	壺	14.3	4.4		RW	B	鈍橙	60	
10	大型壺	(15.4)	(6.8)		W	B	鈍橙	25	
11	小型甕	(13.1)	(5.8)		RW	B	橙	25	
12	高壺		(5.6)	9.1	RW	B	橙	80	
13	高壺		(5.5)	10.3	RWB	B	橙	70	



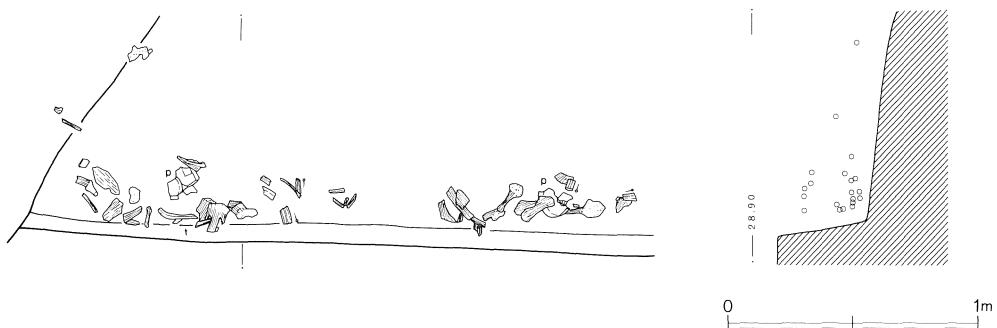
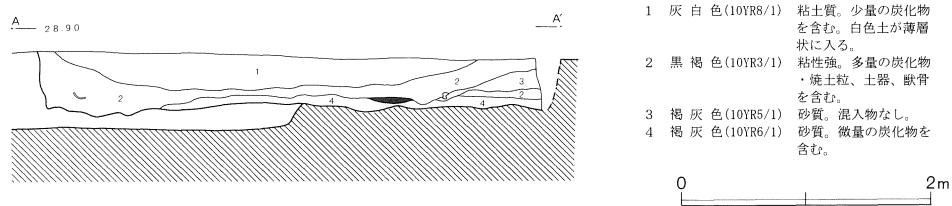
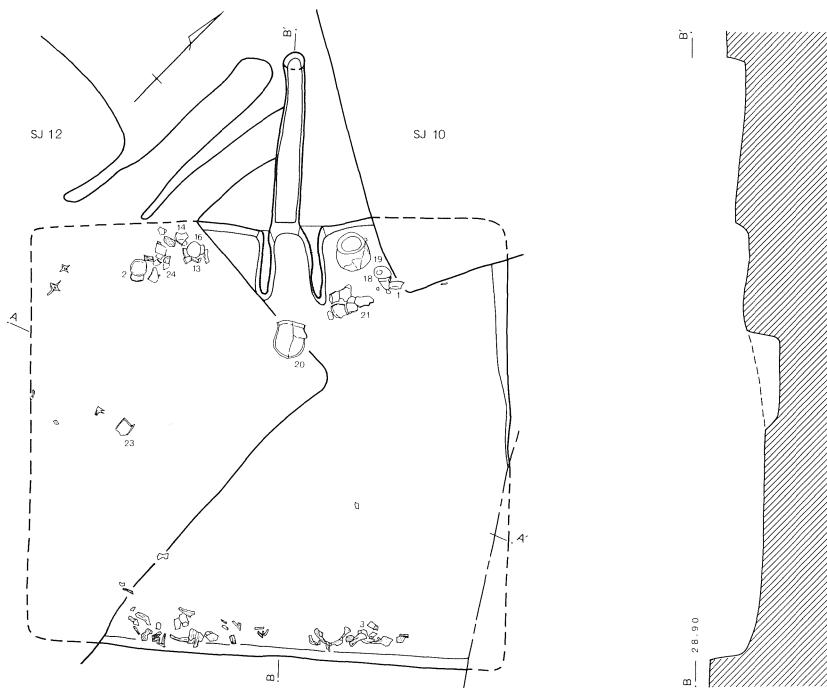
第44図 第10号住居跡 出土遺物

### 第11号住居跡

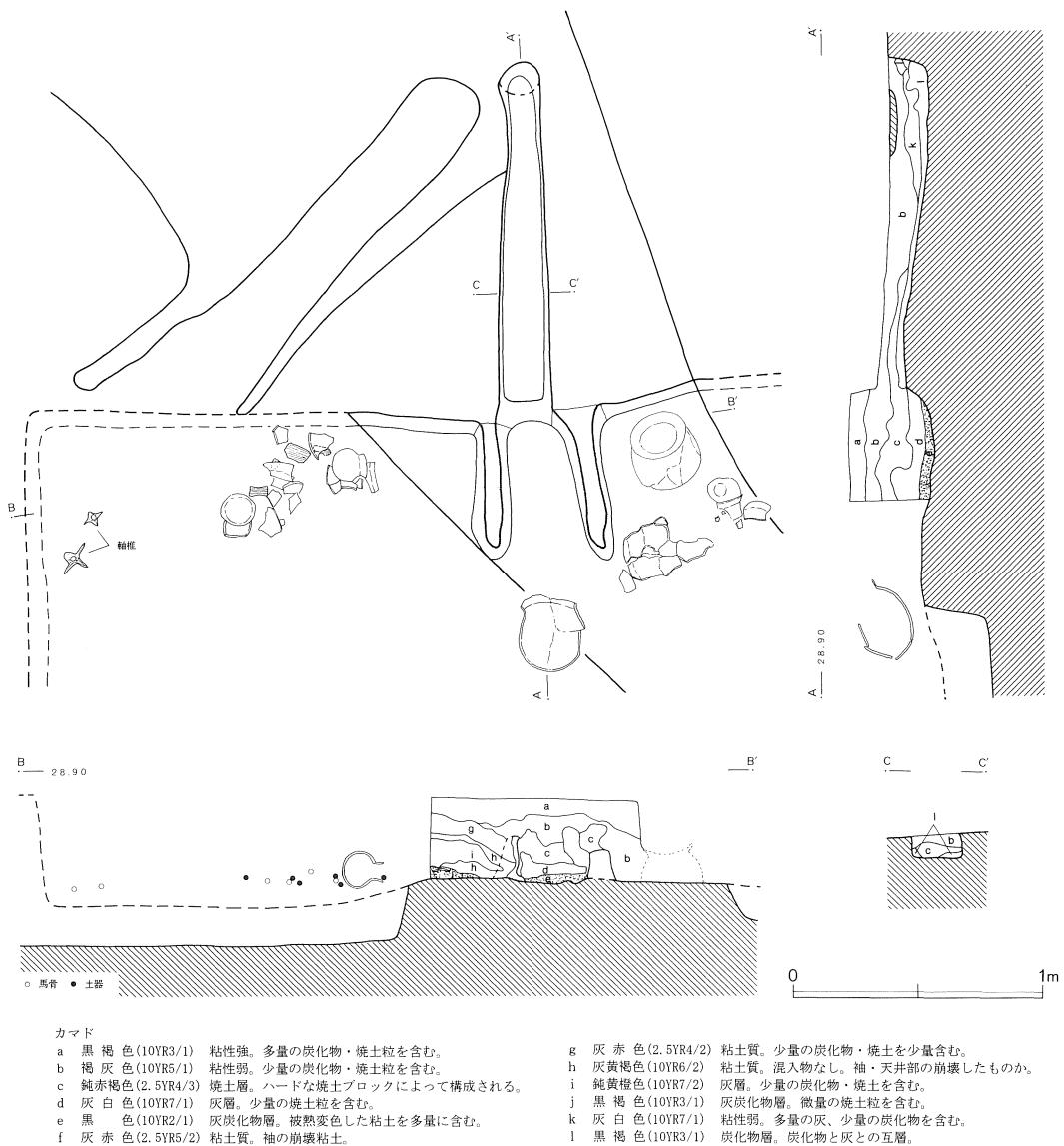
けー5グリッドに位置する。断面観察等から第10号・第12号住居跡の覆土を切り込んでいることは明らかだが平面的な土層の識別は難しく、床面と壁面を検出することはできなかった。東隅は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長3.73m、短軸長3.35m、深さ0.45mで、主軸方向はN-45°-Wである。壁溝・柱穴・ピットは検出できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右の袖の長さは56cmで、燃焼部の幅は30cmである。煙道は幅20cm、長さ132cmであり、地山を水平に掘り抜き、先端に煙出口をもっていた。左袖の外側には灰層があった。

本住居跡に直接伴う土器群はカマド右脇で検出した1・18・19だが、これに対して、2層中には多量の炭化物とともに多くの土器が包含されていた。特筆されるのは同層中に多量の馬骨も包含されていたことである。既に述べた第9号住居跡と後述する第13号住居跡でも多量の馬歯・馬骨が覆土中に包含されていた。この2軒では窪地化した廃絶住居跡の中央寄りに集中していた点と、馬歯と頸部が中心となって他の骨格がほとんど見られない点で共通性が見られるのに対して、本住居跡の馬骨は壁際に集中し、大部分が体幹、体肢骨で歯は少量であることが大きな相違点である。南西壁は推定線ではあるものの、南東壁からカマド左脇にかけて投入されたものと見られる。最も集中する南東壁の一群からは後足の大腿骨や中足骨のほかに上顎臼歯4本が出土した。また西隅からは軸椎2点が出土した。出土範囲は限られているが、いずれの骨格も散乱状態であり、他所で解体したものを窪地状になった廃絶住居跡に投入したと考えられる。馬骨に伴って土器も出土しているが、カマド左脇では2・13・14の壺、16の壺、24の甌の土器に骨片が絡まった状態で出土し、南東壁ではこれとは反対に多数の骨格の中に3の壺片が入り込んだ状態で出土した。また、20・21の甌は



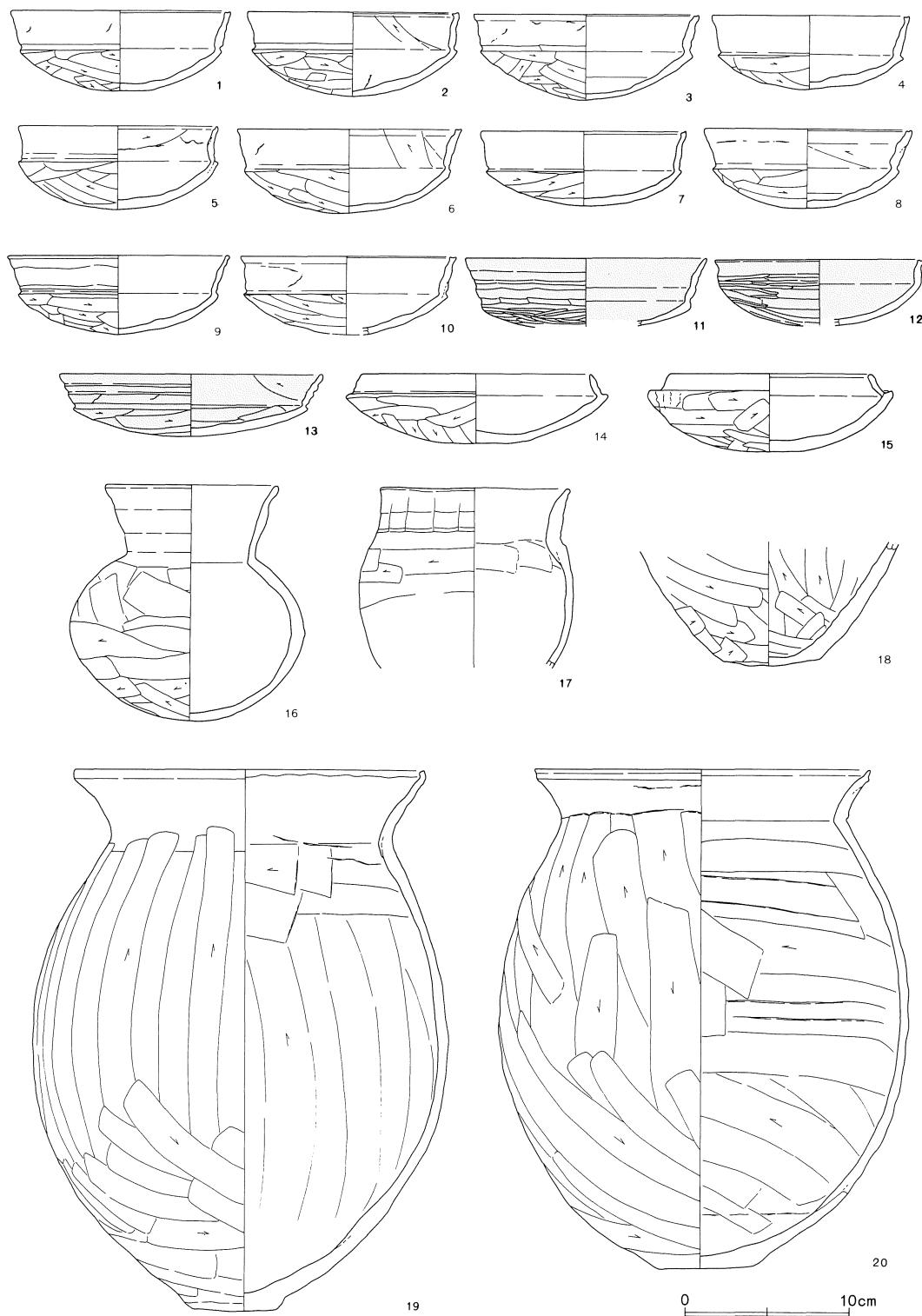
第45図 第11号住居跡 馬骨出土状況



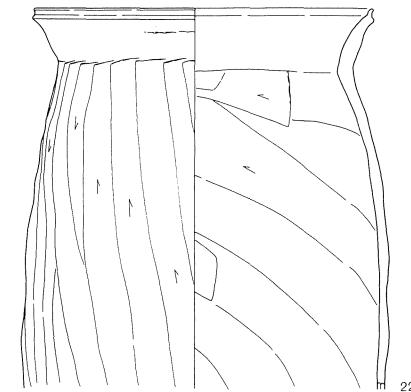
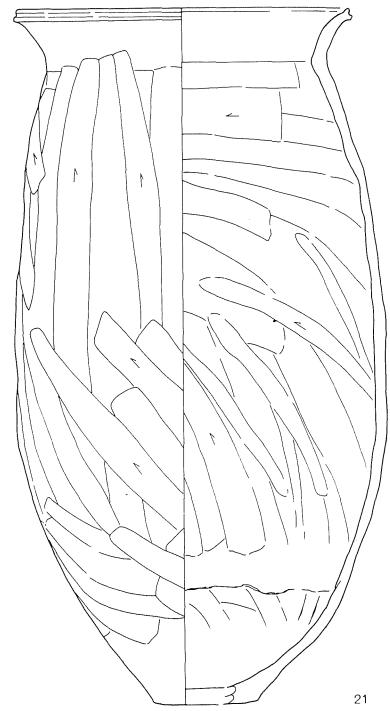
第46図 第11号住居跡 カマド

カマド前面から出土し、馬骨からは離れているが覆土中のものであり、層位的には馬骨と同時点に投入された可能性が強い。

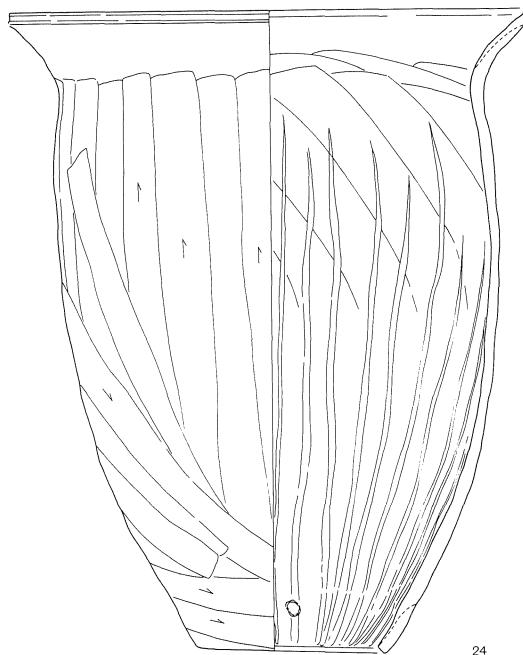
出土土器のうち、11・12・13の壺は黒色処理されており、14・15は通常は黒色処理される形態であるが非処理である。20・21・22の甕は口縁端部に凹面を持っている。24の甕は内面底部に小穴が1か所みとめられる。貫通しておらず、対面部分を欠損しているため、一対のものとなるかどうかは不明だが簀の子を掛けるためのものと見ることができる。



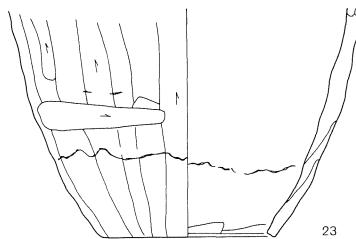
第47図 第11号住居跡 出土遺物（1）



22



24



23

0 10cm

第48図 第11号住居跡 出土遺物（2）

第11号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.5	4.8		WB	B	灰黃	60	No. 6
2	壺	12.9	5.1		R	A	橙	100	No. 9
3	壺	13.8	5.2		RWB	A	橙	55	南壁馬骨共伴
4	壺	(16.0)	(4.6)		RWB	C	鈍黃橙	20	
5	壺	(12.2)	5.1		RW	A	橙	40	
6	壺	13.7	5.1		R	B	橙	50	
7	壺	12.5	4.4		W	B	鈍橙	60	
8	壺	12.6	4.8		R	B	橙	90	
9	壺	13.6	14.7		WB	B	灰黃褐	50	

第11号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
10	壺	15.1	(4.7)		RWB	A	鈍黄橙	50	
11	壺	(14.8)	(4.2)		RW	A	黒褐	20	内外面黑色処理
12	壺	(11.8)	(4.0)		WB	A	黒褐	25	内外面黑色処理
13	壺	16.1	3.8		W	A	黒褐	50	No11 内外面黑色処理
14	壺	(14.1)	4.2		RW	A	明褐	35	No.8
15	壺	(12.9)	4.7		RWB	C	橙	25	
16	壺	10.6	14.2		RW	A	橙	100	No.7
17	小型甕	11.6	(11.0)		W	B	灰黄	70	
18	甕		(7.5)	(6.0)	WB	C	鈍橙	30	No.4
19	甕	21.5	32.9	5.5	RWB	B	鈍橙	80	No.1
20	甕	20.8	30.2	5.5	RWB	A	橙	80	No.3
21	甕	(18.0)	(36.6)	(5.6)	RWB	B	鈍橙	80	No.2
22	甕	(17.9)	(20.0)		RW	B	橙	30	
23	甕	(12.0)		(9.2)	RW	B	鈍橙	40	No.13
24	甕	27.7	33.8	10.0	RWB	B	橙	80	No.10 スノコ掛け凹穴有り

## 第12号住居跡

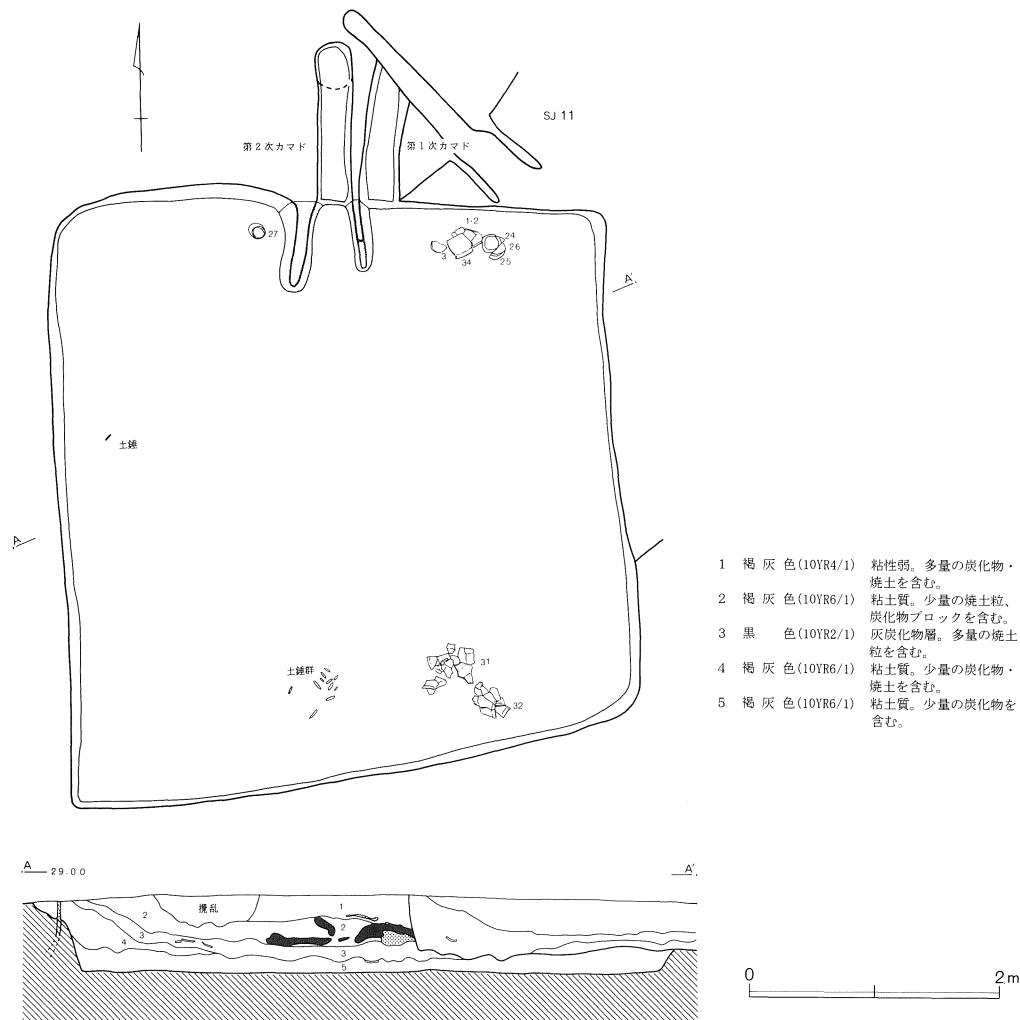
けー5グリッドに位置する。第11号住居跡に覆土を切り込まれていた。南壁が歪むが、規模は長軸長4.30m、短軸長4.20m、深さ0.6mで、主軸方向はN-1°-Wである。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

第12号住居跡出土土器観察表(1)

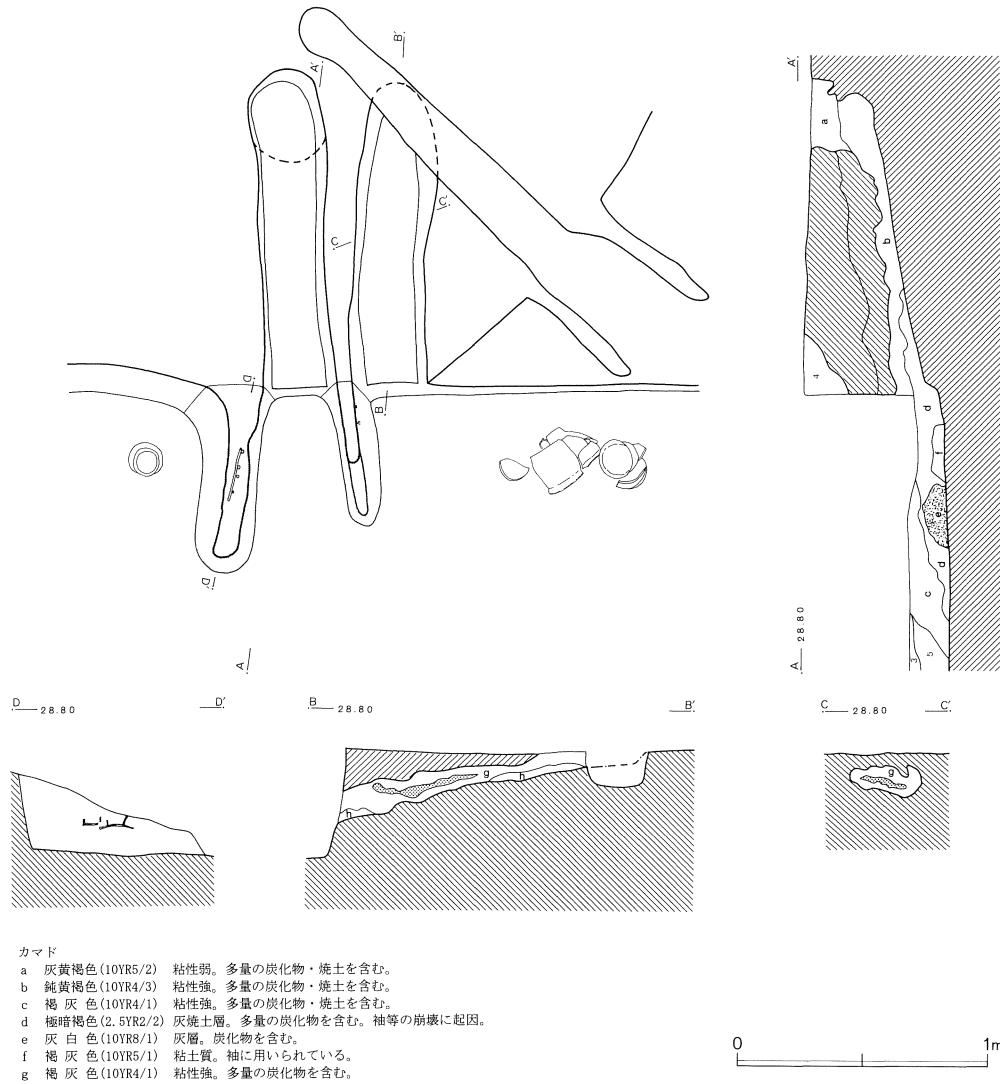
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.9	(6.0)		RW	A	鈍橙	50	No.20
2	壺	14.3	5.9		RW	A	橙	60	No.20
3	壺	13.1	6.2		RU	A	鈍橙	80	No.19 内外面に煤付着
4	壺	12.5	5.3		RW	A	鈍黄橙	60	内外面に煤付着
5	壺	11.9	5.7		RW	B	橙	90	中層
6	壺	12.4	4.2		RW	A	橙	100	中層
7	壺	12.3	4.9		RW	B	橙	80	中層
8	壺	12.0	5.1		RWB	B	橙	90	
9	壺	(12.7)	5.5		RW	B	鈍橙	40	
10	壺	12.9	5.6		RW	B	橙	80	
11	壺	13.0	4.7		RW	B	橙	80	
12	壺	(12.0)	(4.8)		RW	C	鈍黄橙	40	
13	壺	9.7	4.3		RWB	A	鈍橙	100	中層
14	壺	11.9	5.7		RW	A	鈍橙	70	中層
15	壺	10.7	4.9		RW	B	橙	80	
16	壺	(13.9)	(4.0)		W	A	黒褐	25	内外面黑色処理
17	大型壺	14.4	7.7		RWB	A	橙	95	中層
18	大型壺		(5.9)		RWB	A	鈍橙	30	
19	壺	14.5	(4.6)		RW	A	橙	100	穿孔土器
20	高壺	12.1	9.3	10.5	RW	B	鈍橙	50	中層
21	高壺		5.1	9.2	RW	B	橙	100	
22	高壺		5.4	10.3	W	B	橙	100	
23	高壺		5.0	11.3	W	A	橙	60	

カマドは北壁に2度造られ、煙道が並列する。第1次カマドは煙道の幅28cm、長さ116cm以上で、傾斜をつけて地山を掘り抜くが先端を第11号住居跡のカマド煙道に破壊されていた。第2次カマドは袖に灰白色粘土が使用され、篠竹による芯材も確認できた。右袖先端を第11号住居跡によって破壊されていたが、左袖の長さは71cm、燃焼部の幅は32cmである。煙道は幅23cm、長さ128cmで傾斜をつけて地山を掘り抜き、先端に煙出口をもっていた。

本住居跡に直接伴う土器はカマド周辺の1・2・3・24・25・26・27・34と南壁寄りの31・32および土錘群である。24の甌、25の短頸壺、26の壺転用器台は3点セットで重なって出土した。また2・3層を中心とする覆土中層からも多量の土器が出土した。19の壺は焼成後穿孔である。33の壺は口縁部内面と底部内外面において乾燥時に生じた亀裂を橙色の緻密な粘土で焼成前に上塗りし、補修している。



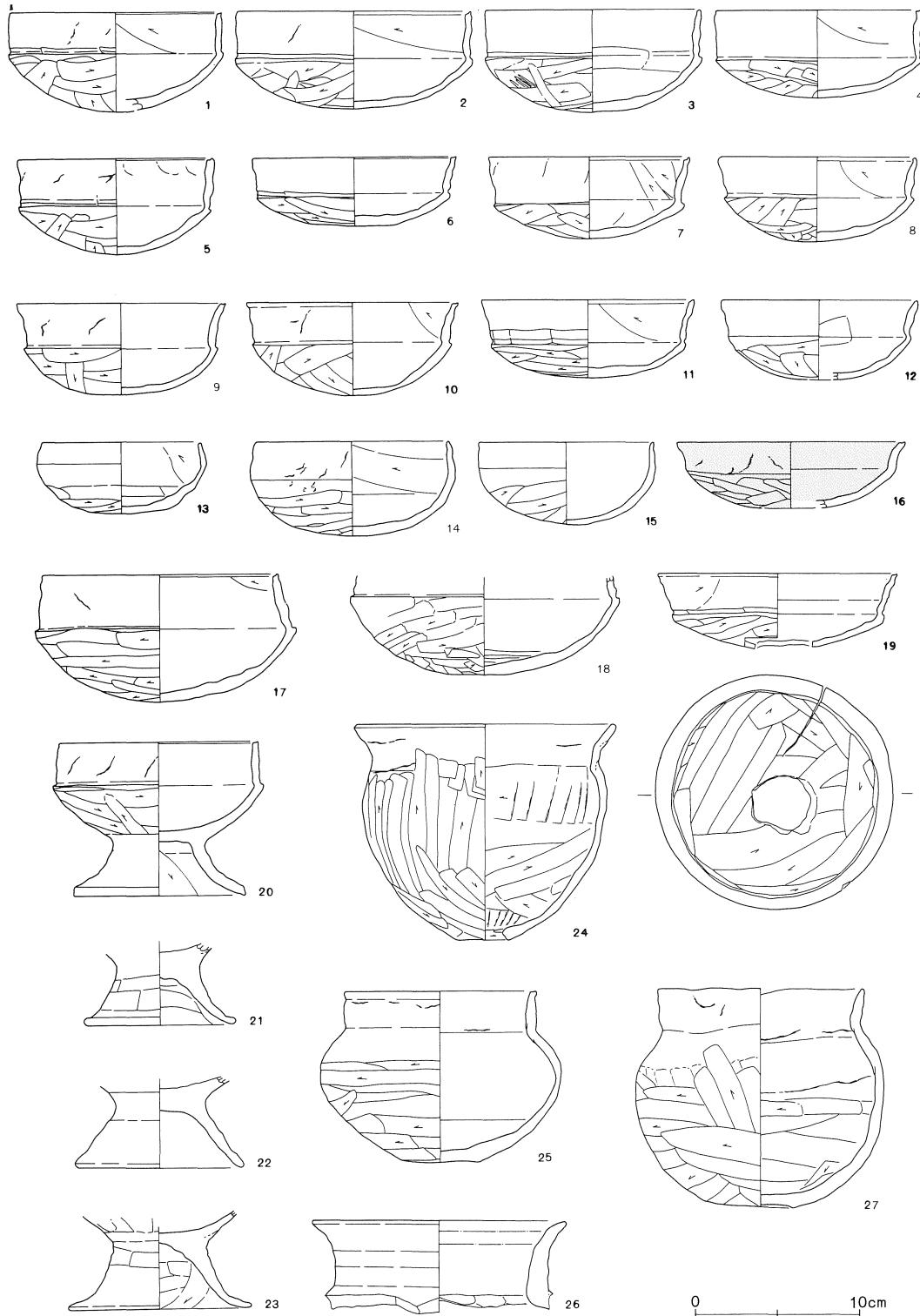
第49図 第12号住居跡



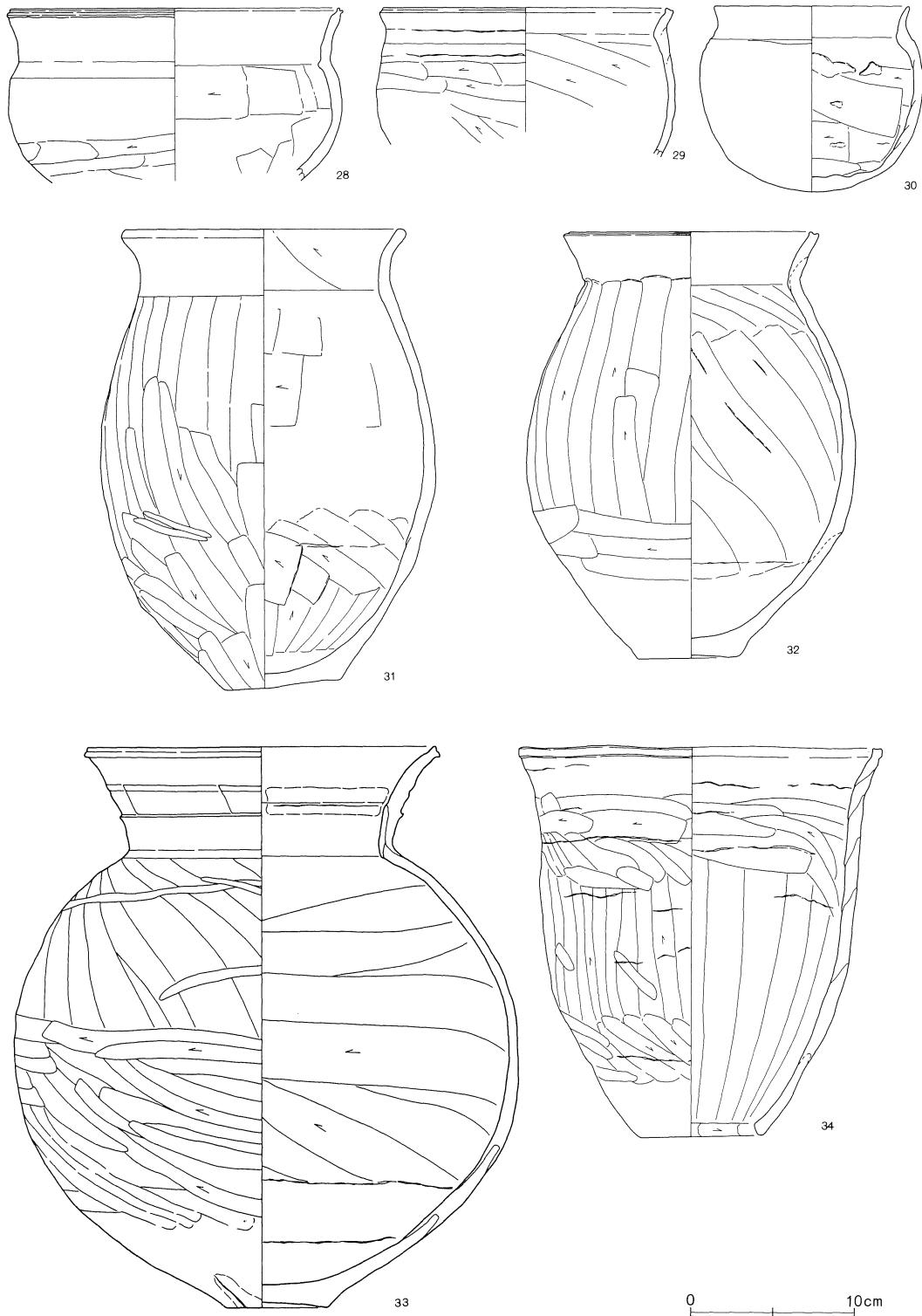
第50図 第12号住居跡 カマド

第12号住居跡出土土器観察表(2)

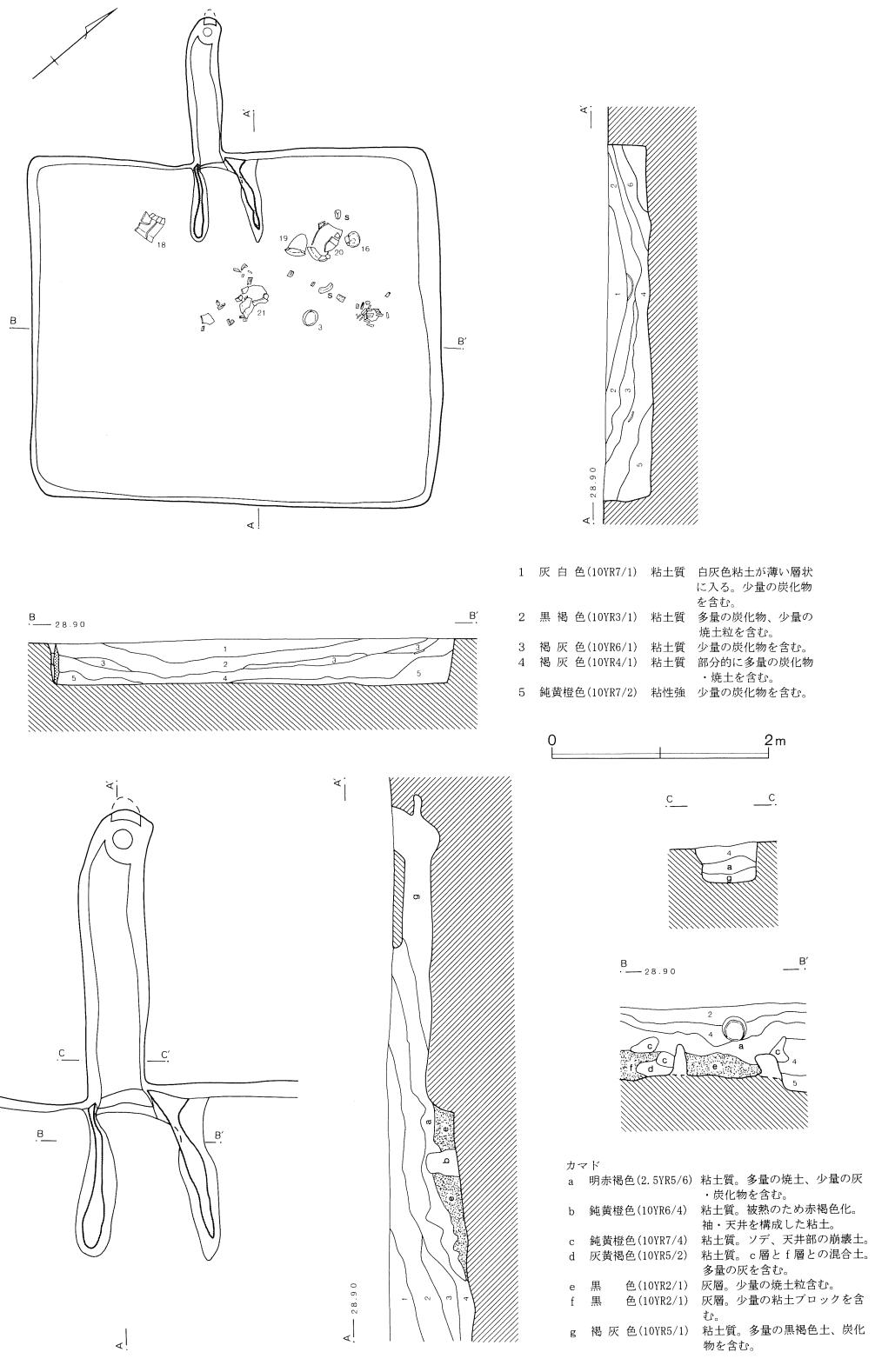
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
24	甌	15.9	13.0		RWB	A	灰白	100	No.14
25	短頸壺	11.7	10.3	4.5	RW	B	鈍橙	80	No.15
26	壺	15.6	(5.2)		RB	B	灰白	90	No.16 転用器台
27	小型甌	12.6	13.0	5.5	RWB	B	鈍黃橙	100	火に掛けた痕跡有り
28	鉢	(20.3)	(10.4)		RW	B	鈍橙	30	内外面に樹脂点在
29	鉢	(17.7)	(7.5)		RB	A	鈍橙	30	SJ13 の破片接合
30	鉢	11.8	11.2		RW	C	橙	45	
31	甌	17.0	27.5	7.0	RWW'	A	鈍黃橙	90	No.21
32	甌	15.2	25.6	6.3	RWB	A	鈍橙	80	No.22
33	壺	21.6	34.0	6.2	RW	A	鈍黃橙	95	中層 乾燥亀裂を赤粘土で補修
34	甌	22.2	23.3	7.5	RW	B	橙	90	No.17



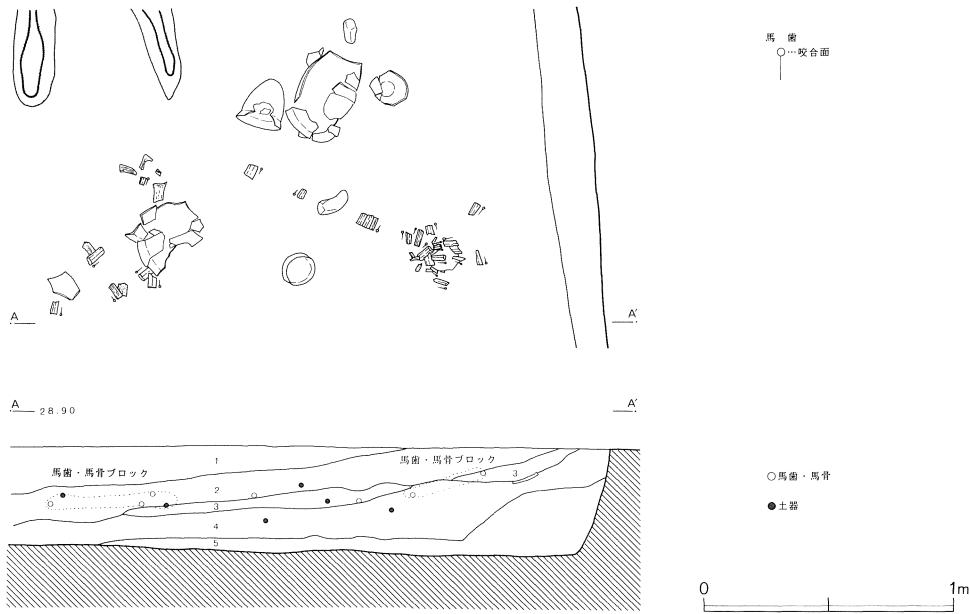
第51図 第12号住居跡 出土遺物（1）



第52図 第12号住居跡 出土遺物（2）



第53図 第13号住居跡 カマド



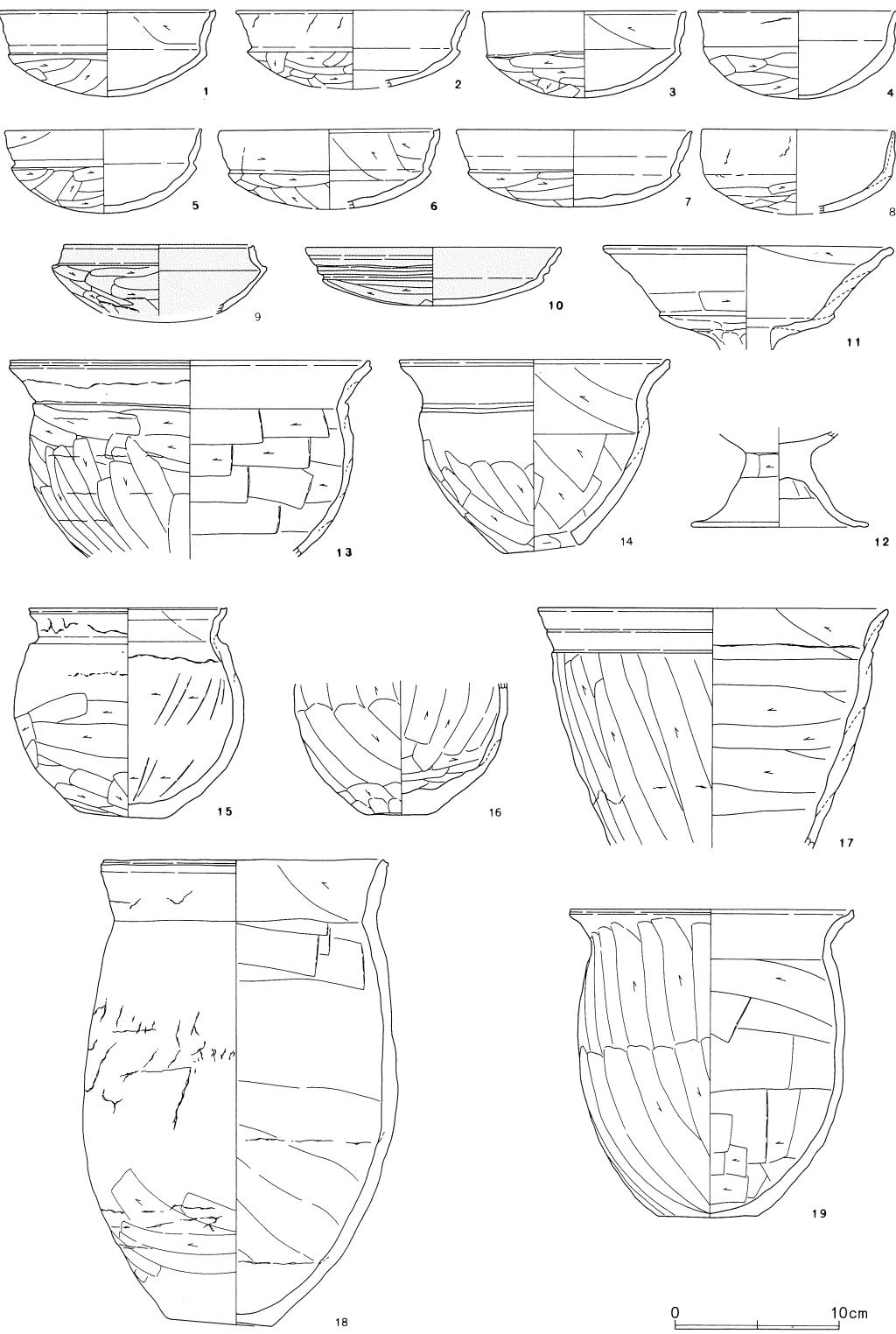
第54図 第13号住居跡 馬歯出土状況

### 第13号住居跡

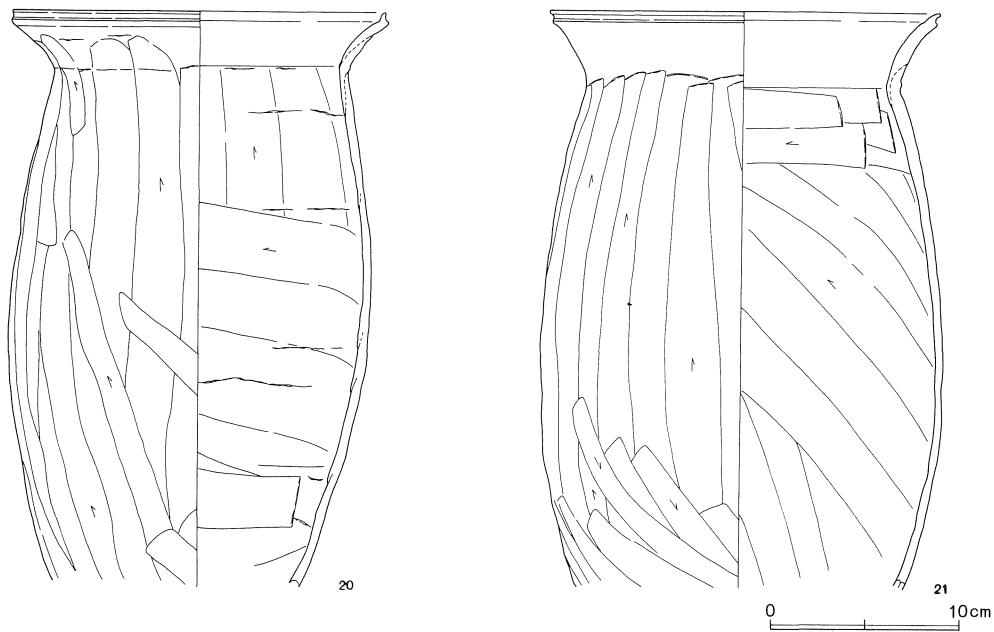
けー5グリッドに位置する。規模は長軸長3.61m、短軸長3.15m、深さ0.42mで、主軸方向はN-54°-Wである。壁溝・貯蔵穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは66cmで、燃焼部の幅は34cmである。煙道は幅29cm、長さ135cmで、地山を水平に掘り抜き、燃焼部奥壁から117cmのところに煙出口をもっていた。左袖の外側には灰層があった。断面観察より、天井を形成していたと見られるc層が両袖外側に散在しており、人為的な破壊が考えられる。

本住居跡に直接伴うと考えられる土器は2・4の壺のみであり、他の大部分は覆土2・3層中から出土した。特に2層は多量の炭化物を含むが、同層中に多量の馬歯を包含することが特筆される。同様に多量の馬歯・馬骨を包含する第9号・第11号住居跡の出土状況は既に述べたが、馬歯を中心とする点で第11号住居跡と異なり、さらに歯の点数で第9号住居跡を上まわる。これは第9号住居跡の馬歯が1個体に相当するのに対して、本住居跡の歯の点数は2個体分に相当するためである。鑑定によれば第54図においてカマド前面のグループが1号馬（仮称、2号馬も同じ）の下顎歯であり、その右側のグループが2号馬の上顎および下顎歯である。断面図上においても2つのブロックに分けることができ、窪地となった廃絶住居跡に投入されたと見ることができる。ただし、他の2軒の馬歯・馬骨出土住居跡と同じくグループ内でも歯の向きは不統一であり、他所で破碎した顎骨を投入している可能性が強い。3・16・19・20・21は馬歯に伴う土器である。18も層位的には同じである。いずれの甕も口縁端部に凹面をもっている。このほか、カマド左袖外の灰層中からは猪の左前足の焼骨片が多数出土した。



第55図 第13号住居跡 出土遺物（1）



第56図 第13号住居跡 出土遺物（2）

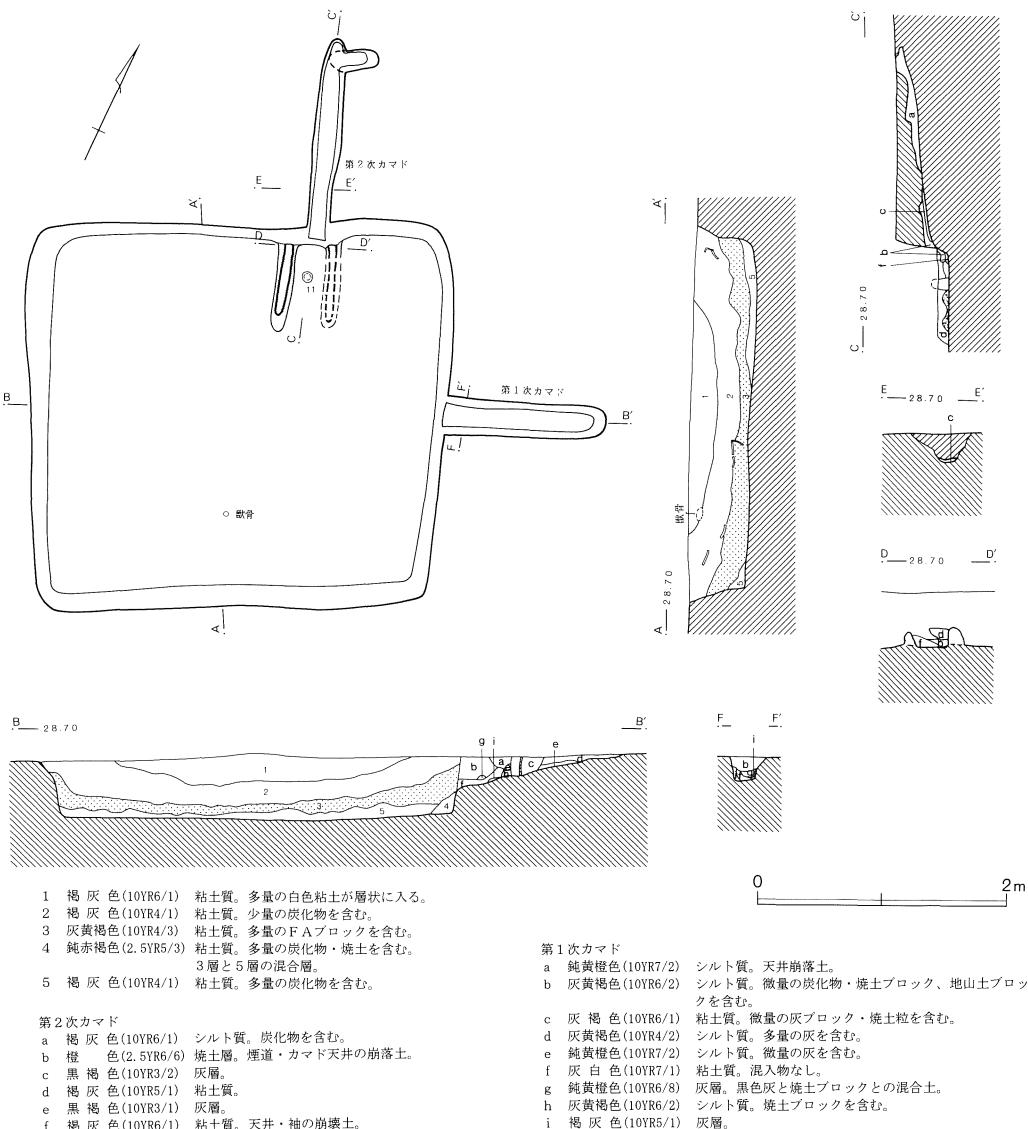
第13号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.1	5.2		RW	B	鈍橙	90	
2	壺	14.2	(4.8)		RW	B	橙	60	カマド
3	壺	12.3	5.2		RW	B	灰黄	100	No.4
4	壺	12.0	5.3		B	C	浅黄	90	カマド
5	壺	11.9	5.0		RWB	橙	70		
6	壺	(13.4)	(4.8)		RW	B	橙	25	
7	壺	14.3	4.6		RW	B	橙	60	
8	壺	(11.8)	(4.5)		RWB	A	橙	20	
9	壺	(12.2)	(4.2)		RW	A	褐灰	30	内外面黒色処理
10	壺	(15.5)	3.5		W	A	黒褐	30	内外面黒色処理
11	高壺	(17.6)	(6.2)		RW	B	橙	20	
12	高壺	(6.0)	10.8		RWB	B	橙	60	
13	鉢	21.8	(11.8)		RW	A	橙	90	外面が被熱赤変
14	甌	(16.4)	11.5	(4.1)	RW	A	橙	40	
15	小型甌	11.9	12.5	5.0	W	B	橙	80	
16	小型甌	(8.0)	4.7		RWB	B	鈍黄橙	60	No.1
17	甌	(21.2)	(14.4)		RWB	B	鈍黄橙	40	
18	甌	17.2	27.8	6.3	RWW'	B	鈍黄橙	80	No.7 外面未調整
19	甌	17.3	18.4	6.0	RWB	A	灰白	70	No.3
20	甌	19.9	(30.3)		RWB	B	橙	80	No.2
21	甌	20.8	(30.3)		RWW'B	B	橙	50	No.5

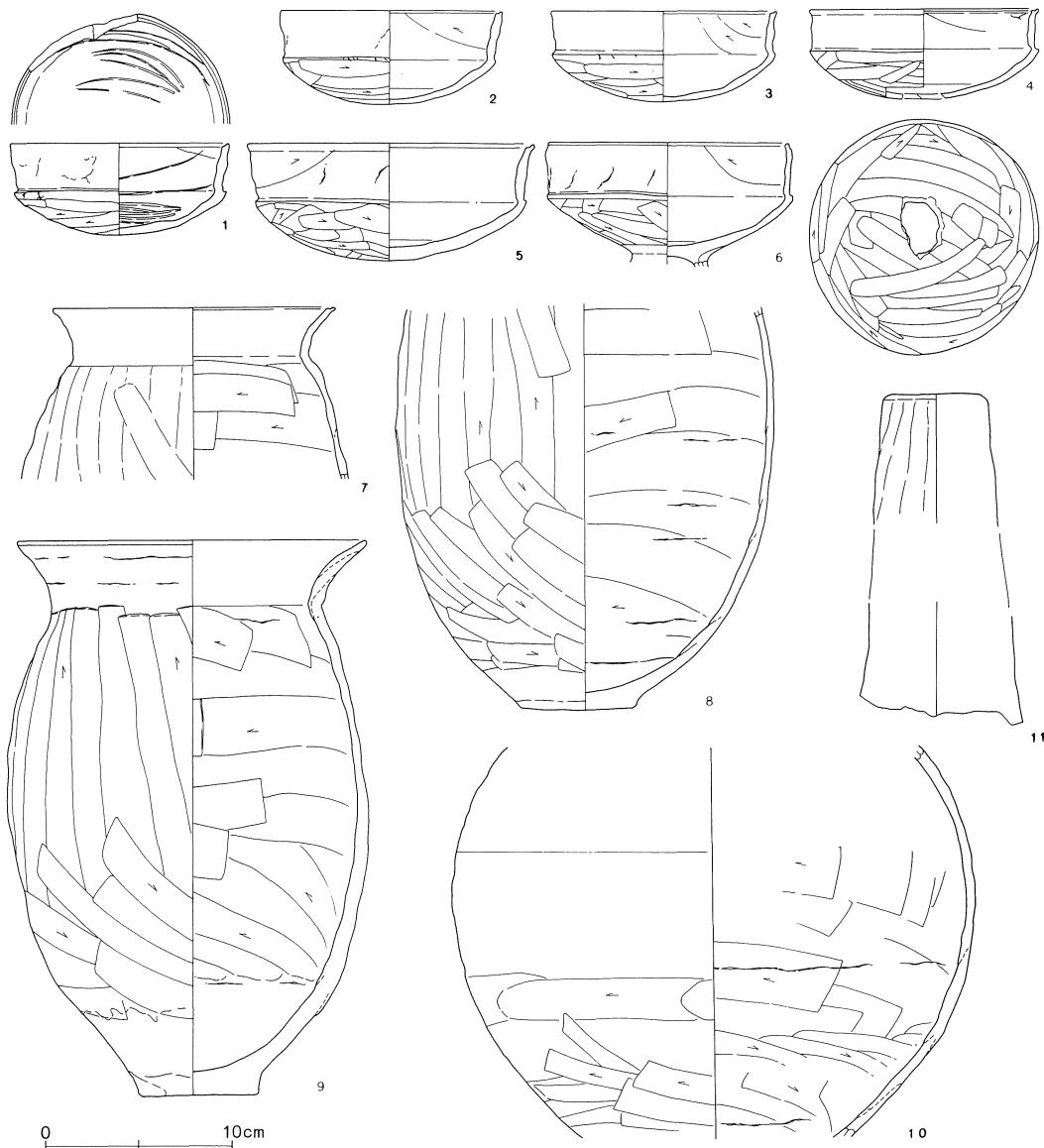
## 第14号住居跡

けー5グリッドに位置する。規模は長軸長3.06m、短軸長2.81m、深さ0.45mで、主軸方向はN-22°-Wである。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。東壁の第1次カマドは煙道幅28cm、残存長134cmで、傾斜をつけて地山を掘り抜いていた。北壁の第2次カマドは袖に灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは75cm、燃焼部の幅28cmである。煙道は幅48cm、長さ162cmで傾斜をつけて地山を掘り抜き、燃焼部奥壁から136cmの所に煙出口をもっていた。支脚位置は中軸線上であり、柱状に整形した粘土塊を使用していた。

覆土3層にはFAブロックが含まれるが、土器の大部分は2・3層を中心とする中層から出土した。また、2層上面からは獸骨片が1点出土した。



第57図 第14号住居跡



第58図 第14号住居跡 出土遺物

第14号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.7	4.9		RW	B	鈍橙	90	中層 内面に線刻文有り
2	坏	11.9	5.0		RW	B	鈍橙	100	
3	坏	12.1	4.8		RW	B	橙	100	中層
4	坏	12.3	(4.8)		RW	A	鈍赤褐	100	穿孔土器
5	坏	15.3	6.2		RW	A	橙	80	中層 内面に焦げ状炭化物付着
6	高坏	12.9	6.5		RWB	A	鈍赤褐	70	
7	甕	15.0	(9.1)		RB	B	橙	50	中層
8	甕		(21.6)	6.1	WB	B	明黄褐	70	中層
9	甕	18.7	29.4	6.3	RW	B	橙	80	中層
10	壺		(20.8)		R	A	鈍橙	30	中層
11	支脚		(16.6)		W	C	鈍橙	50	粘土製未焼成

## 第15号住居跡

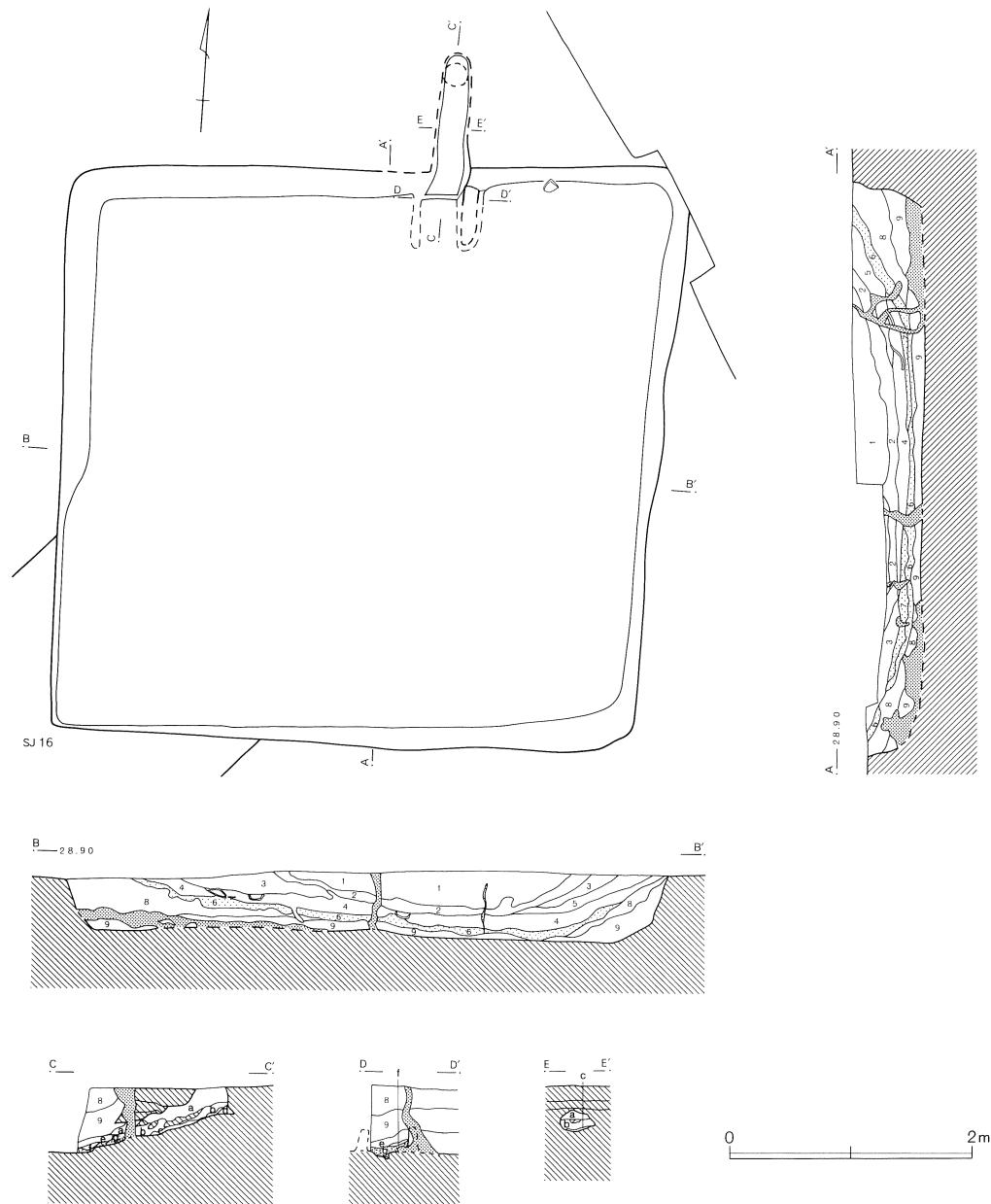
けー5グリッドに位置する。第16号住居跡と重複し、覆土を切り込まれていた。規模は長軸長5.57m、短軸長4.30m、深さ0.55mで、主軸方向はN-2°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため液状化現象によって攪乱され、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土6・7層にはFAブロックが含まれていた。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。煙道は幅27cm、長さ116cmで、傾斜をつけて地山を掘り抜き、燃焼部奥壁から98cmのところに煙出口をもっていた。袖の遺存状況はきわめて不良だったため、右袖の付け根を検出できたのみであった。

本住居跡に伴う土器は49の高壺と66の甌のみである。FAブロックを包含する6層の直上には炭化物を主体とする4層が堆積し、多量の土器と礫が投入されていた。16・40・41・42の壺や44の大型壺は火を受けた痕跡が顕著であり、土器の投棄と同時に窪地で火を燃やした可能性が考えられる。同層中からは猪の焼骨片も出土した。1～3層について見ると、ほぼ同質で微量の炭化物を含む1・3層の間に多量の炭化物を含む2層が挟まれており人為的な埋め戻しが考えられる。壺の割合が大きいが出土層位から見てFA降下直後のものであることを改めて記しておく。36の壺は穿孔されている。60・62・63の甌と68の壺は転用器台である。59の甌底部は擬口縁を利用した転用鉢である。このほかに土錘8点が出土した。

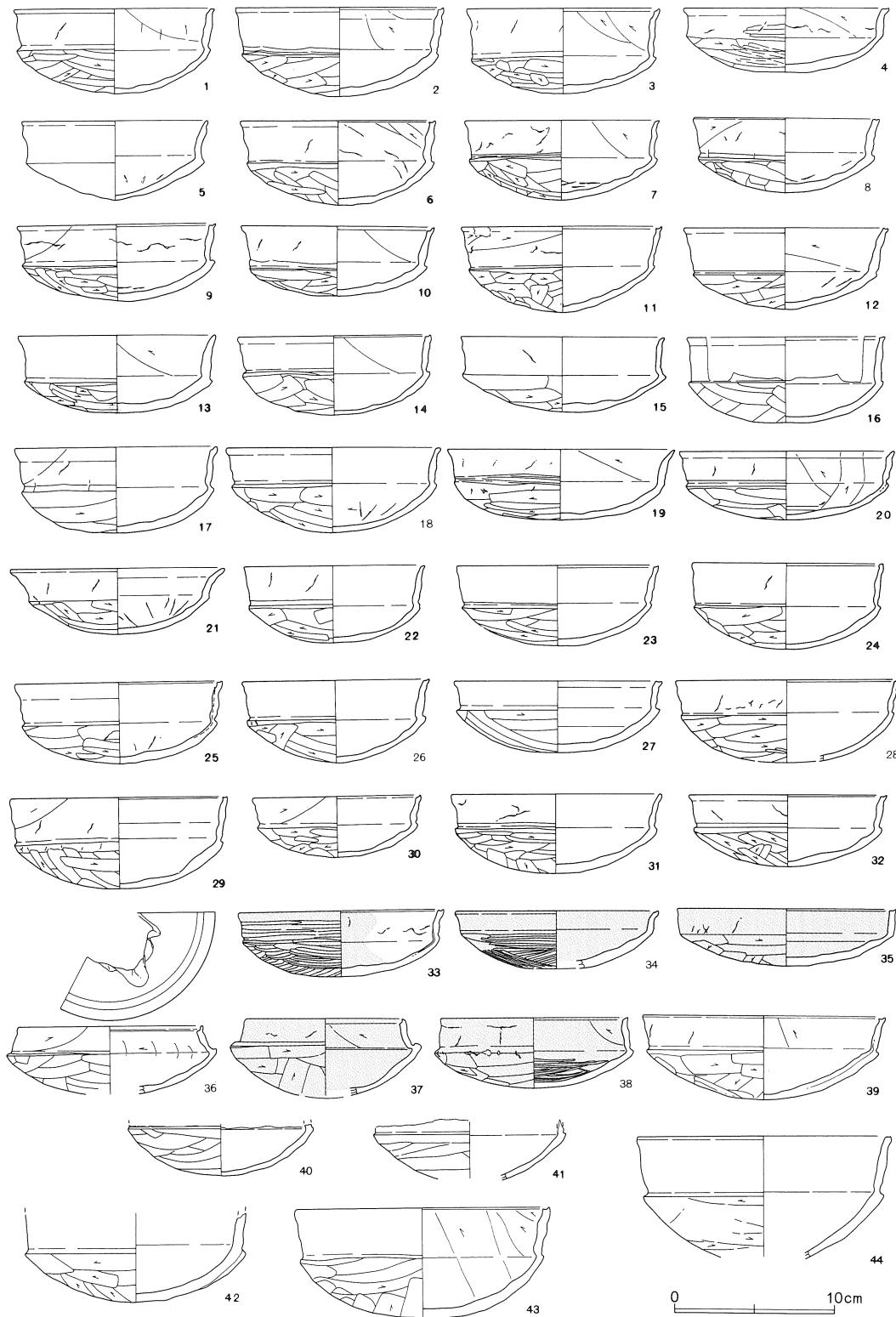
第15号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	5.2		RW	A	鈍橙	100	4層
2	壺	13.0	5.5		RW	A	橙	80	4層
3	壺	12.0	5.3		RW	A	橙	100	
4	壺	12.8	4.0		W	A	鈍橙	60	4層
5	壺	11.6	4.8		RW	B	橙	60	器面の荒れが著しく器面観察不可能
6	壺	12.2	5.2		RW	A	鈍橙	100	4層
7	壺	12.1	4.9		RW	A	橙	100	4層
8	壺	11.6	4.6		RWB	B	橙	100	4層
9	壺	12.4	4.6		RW	A	橙	100	4層
10	壺	12.1	4.3		W	B	鈍橙	95	
11	壺	12.6	5.3		RW	A	橙	80	4層
12	壺	12.7	4.9		W	B	鈍赤褐	70	
13	壺	12.2	4.8		W	A	鈍黃橙	100	4層
14	壺	12.1	4.8		RW	A	鈍橙	80	
15	壺	12.6	4.6		RW	B	橙	90	4層
16	壺	(12.2)	5.3		RW	B	鈍黃橙	20	被熱により器面荒れ煤付着
17	壺	12.6	5.3		RWB	B	橙	80	4層 外面煤付着
18	壺	13.4	5.2		RW	B	橙	80	
19	壺	14.2	4.3		RWB	A	橙	100	
20	壺	13.4	4.2		RW	B	鈍橙	55	4層
21	壺	13.4	4.1		RW	B	鈍赤褐	60	
22	壺	11.4	4.3		RW	B	橙	95	
23	壺	(12.7)	(5.0)		W	A	明赤褐	30	

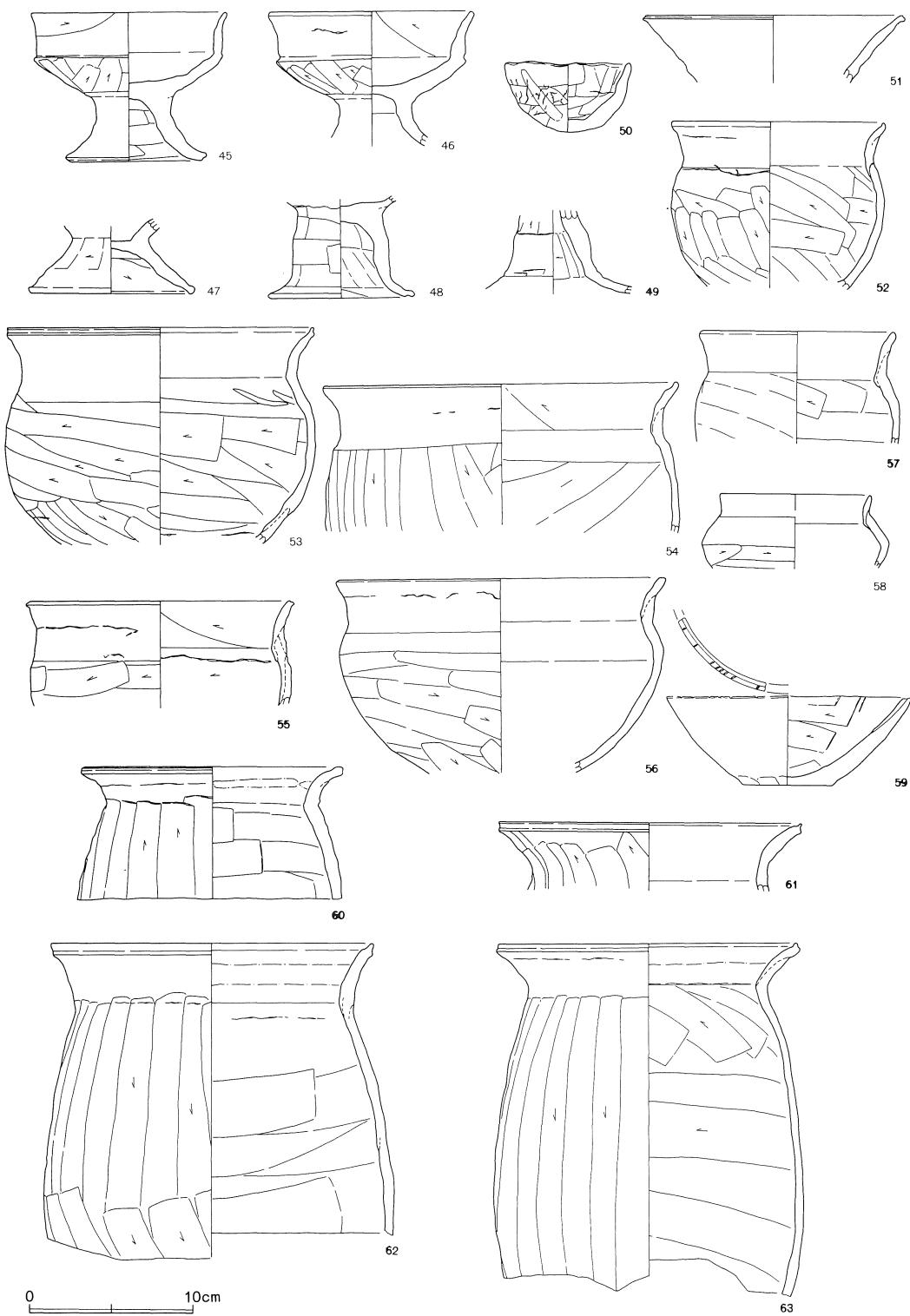


- 1 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質。微量の炭化物粒・焼土粒を含む。  
 2 黒褐色(10YR3/1) 灰層。多量の炭化物・焼土粒を含む。  
 3 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質。1層と同質。  
 4 黑褐色(10YR2/1) 灰層。多量の土器、礫・炭化物を含む。  
 5 黑褐色(10YR4/1) 砂質。多量の炭化物を含む。  
 6 鈍黃橙色(10YR7/2) 砂質。多量のF Aブロックを含む。  
 7 黑褐色(10YR3/1) 砂質。多量の炭化物・F Aブロックを含む。  
 8 暗灰色(10YR5/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。  
 9 暗灰色(10YR6/1) 砂質。混入物なし。
- カマド  
 a 暗灰色(10YR5/1) シルト質。炭化物粒含む。  
 b 鈍黃橙色(10YR7/2) シルト質。多量の炭化物を含む。  
 c 黑褐色(10YR2/1) 灰層。  
 d 鈍黃橙色(10YR7/2) シルト質。b層に類似するが炭化物少ない。  
 e 暗灰色(10YR6/2) シルト質。混入物なし。天井を形成した土。  
 f 明赤褐色(2.5YR5/8) 焼土ブロック。焼土化した天井内面。  
 g 暗灰色(10YR6/1) 灰層。灰白色粒が主体。焼土粒を含む。

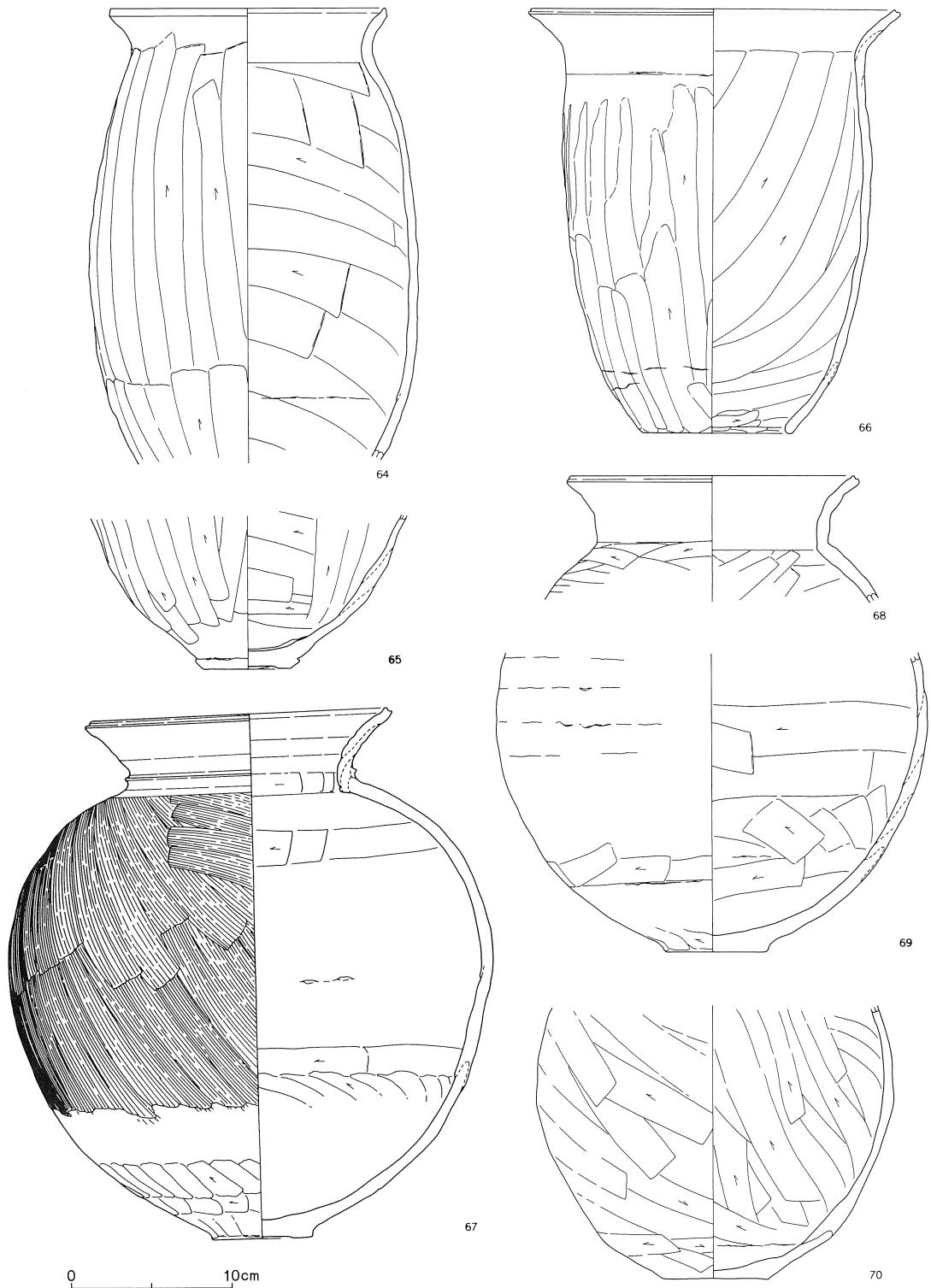
第59図 第15号住居跡



第60図 第15号住居跡 出土遺物（1）



第61図 第15号住居跡 出土遺物（2）



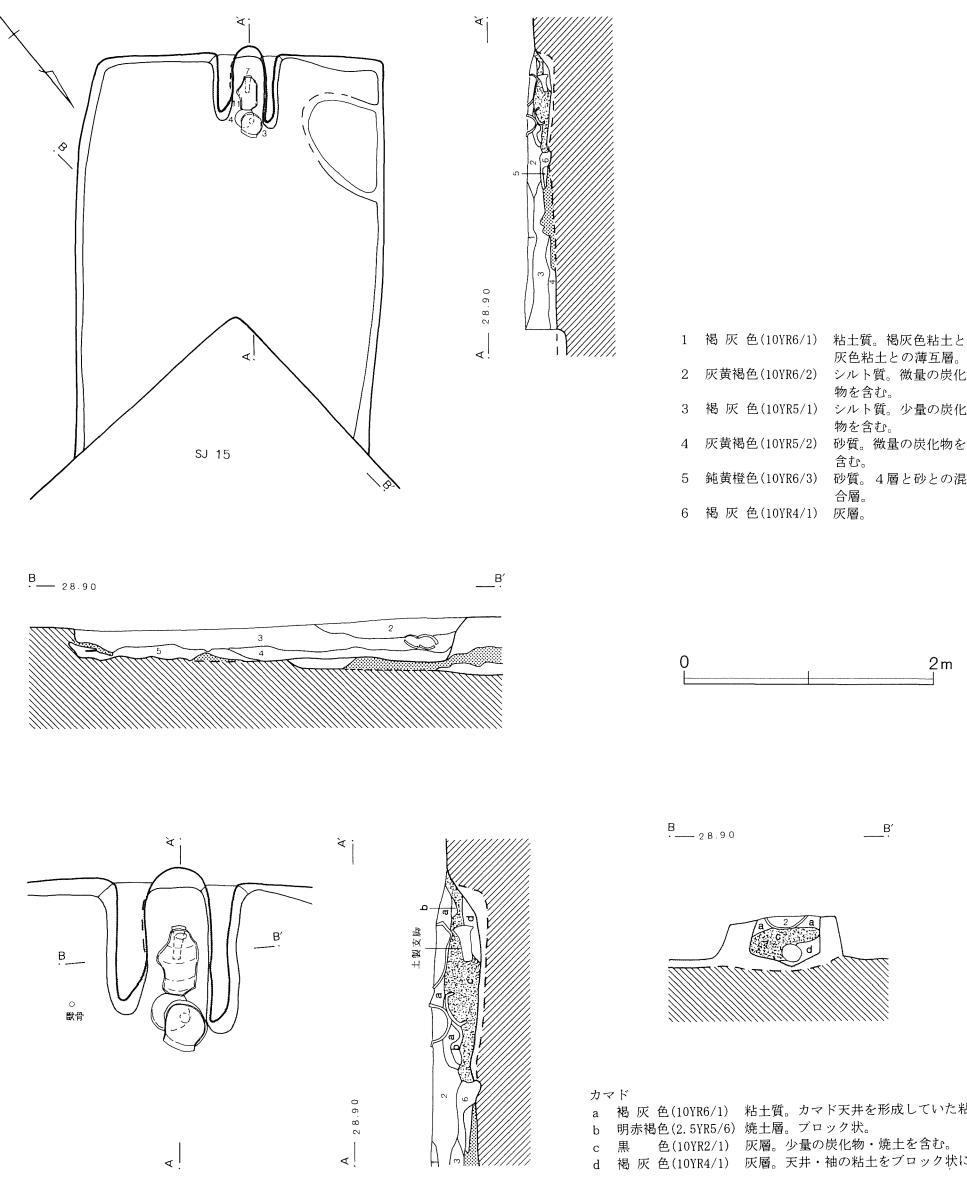
第62図 第15号住居跡 出土遺物（3）

第15号住居跡出土土器観察表(2)

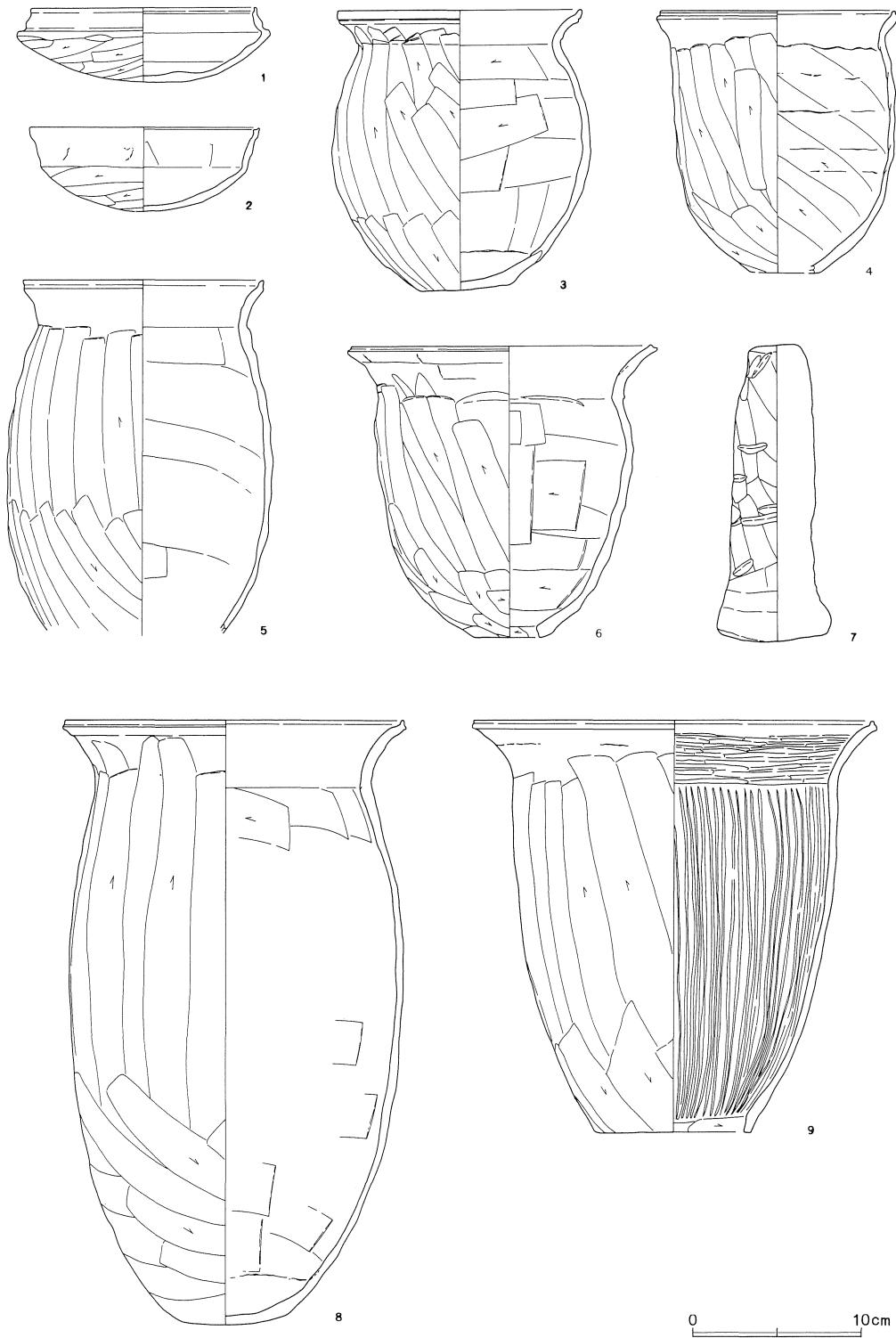
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
24	壺	11.9	5.3		RW	B	橙	80	4層
25	壺	(12.9)	5.0		RW	A	橙	40	4層
26	壺	11.7	5.0		RWB	A	橙	60	4層
27	壺	13.0	4.4		RW	A	鈍橙	50	
28	壺	13.9	(5.1)		W	B	橙	50	4層
29	壺	13.5	5.6		RW	B	橙	50	4層
30	壺	10.5	3.7		RW	A	明赤褐	90	4層
31	壺	13.1	4.8		RW	A	鈍黃橙	80	4層
32	壺	12.3	4.4		RW	A	橙	60	4層
33	壺	12.9	4.1		WB	A	黒褐	70	4層 内外面黑色処理
34	壺	(12.8)	(3.6)		W	A	黒	40	内外面黑色処理
35	壺	13.6	3.5		RWB	C	黒褐	40	内外面黑色処理
36	壺	11.5	(4.2)		W	A	鈍黃橙	80	穿孔土器
37	壺	(9.2)	(4.8)		W	A	黒	30	4層 内外面黑色処理
38	壺	11.7	4.4		RW	B	鈍赤褐	80	4層 内外面黑色処理
39	壺	15.1	5.1		RW	A	鈍赤褐	70	4層
40	壺		(3.0)		RW	C	鈍黃橙	20	被熱により器面荒れ煤付着
41	壺		(1.8)		RW	B	灰褐	15	被熱により器面荒れ煤付着
42	壺		(5.5)		RW	C	鈍橙	70	被熱により器面荒れ煤付着
43	大型壺	16.0	6.8		RW	A	鈍褐	100	
44	大型壺	(17.9)	(6.9)		W	C	橙	30	被熱により器面荒れ煤付着
45	高壺	12.1	9.0	8.6	W	A	橙	80	4層
46	高壺	12.5	(8.2)		RWH	A	橙	90	4層 脚裾全周欠損
47	高壺		(4.1)	10.0	RWB	A	橙	80	
48	高壺		(5.9)	9.9	W	A	鈍橙	70	
49	高壺		(5.1)		RW	A	鈍褐	60	床直
50	手捏土器	7.7	4.1		W	B	鈍黃橙	100	4層
51	埴	(15.9)	(4.1)		RWW'	B	橙	15	
52	小型甕	13.1	(10.1)		RWB	A	橙	60	
53	鉢	(18.7)	(13.1)		RWB	A	鈍赤褐	40	4層 火を受けた痕跡無し
54	鉢	(21.7)	(8.5)		WB	B	鈍橙	20	4層
55	鉢	(16.3)	(6.5)		W	A	鈍赤褐	25	
56	鉢	(19.8)	(11.8)		W	B	橙	15	火に掛けた痕跡有り
57	小型甕	(11.9)	(6.8)		RW	C	橙	40	4層
58	短頸壺	9.2	(4.5)		W	A	橙	50	4層
59	甕		(5.4)	(5.4)	RB	C	鈍橙	40	4層 転用鉢
60	甕	15.9	(8.0)		W	B	鈍橙	70	4層 転用器台
61	甕	(18.4)	(4.2)		B	B	鈍橙	25	4層
62	甕	19.7	(19.0)		RWB	B	鈍橙	80	4層 転用器台
63	甕	18.4	(21.7)		RWB	B	鈍橙	80	4層 転用器台
64	甕	17.2	(27.9)		RB	A	灰白	90	4層
65	甕		(9.4)	(5.4)	B	C	灰黃	15	底部内外面に粘土上塗り
66	甑	22.8	26.1	9.2	RW	A	橙	70	床直 外面の磨滅顯著
67	大型壺	16.5	32.5	7.0	RW	B	橙	70	4層 SJ12の破片接合
68	壺	18.0	(7.8)		RWB	A	灰白	80	4層
69	壺		(18.4)	(6.1)	RW	B	明赤褐	50	4層 外面に付着物 木葉底
70	壺		(16.8)	(6.5)	RWB	C	淡橙	30	

## 第16号住居跡

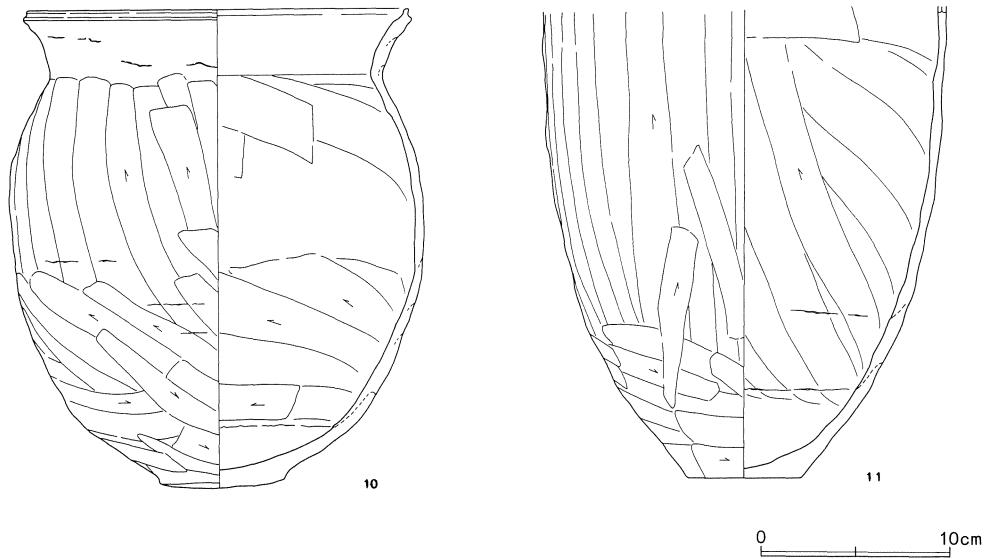
けー5グリッドに位置する。第15号住居跡の覆土を切り込んでいたが、北東壁を検出することはできなかった。長軸長3.20m以上、短軸長2.35mの小型長方形であり、深さ0.25mで、主軸方向はN-138°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため、液状化現象により攪乱されていました。貯蔵穴は西隅にあり、径74cm、深さ7cmの不整形な皿状である。壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。



第63図 第16号住居跡 カマド



第64図 第16号住居跡 出土遺物（1）



第65図 第16号住居跡 出土遺物（2）

第16号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	壺	13.4	4.4		W	A	灰赤	70	No. 4	
2	壺	13.7	4.9		R	B	橙	70		
3	小型甕	14.6	16.5	5.2	RWB	B	鈍橙	70	No. 3	
4	小型甕	14.3	(15.4)	(4.0)	WB	B	鈍褐	70		
5	甕	14.3	21.0		RW	B	鈍赤褐	70		
6	甕	18.2	17.2	3.8	W	A	橙	95		
7	支脚		17.5		WB	B	鈍橙	100	No. 2	
8	甕	20.3	25.6	6.0	RW	B	鈍黃橙	90		
9	甕	24.0	24.2	9.2	RW	A	鈍橙	95		
10	甕	20.4	25.1	6.5	WB	B	鈍橙	80	焼け歪み顯著	
11	甕		(24.8)	(6.1)	WB	B	鈍橙	30	No. 1	

カマドは南西壁に造られ、袖と燃焼部床面には灰白色粘土が使用され、さらに左袖外側の床面にも貼られていた。右袖の長さは55cm、燃焼部の幅は28cmである。支脚位置は中軸線上であり、土製支脚を使用していた。カマド断面のa層は天井部を形成していた粘土と考えられるが、燃焼部上に均等に広がり、判別の容易なものとしては本遺跡中でもあまり他に例を見ない。

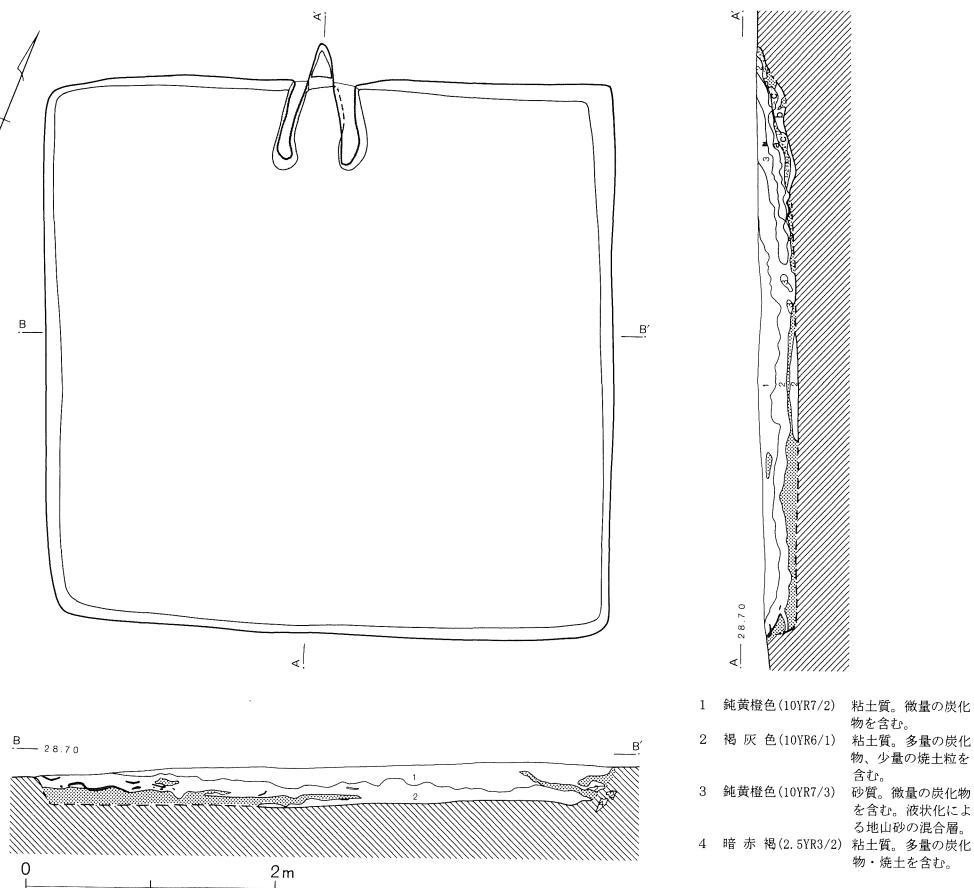
遺物はカマド周辺から出土した。出土状況と断面観察から見て、11の甕は支脚にのせられ、3の小型甕は伏せた1の壺とセットで掛け口に置かれていたと考えられる。左袖先端付近の覆土中から獸骨片が出土した。

## 第17号住居跡

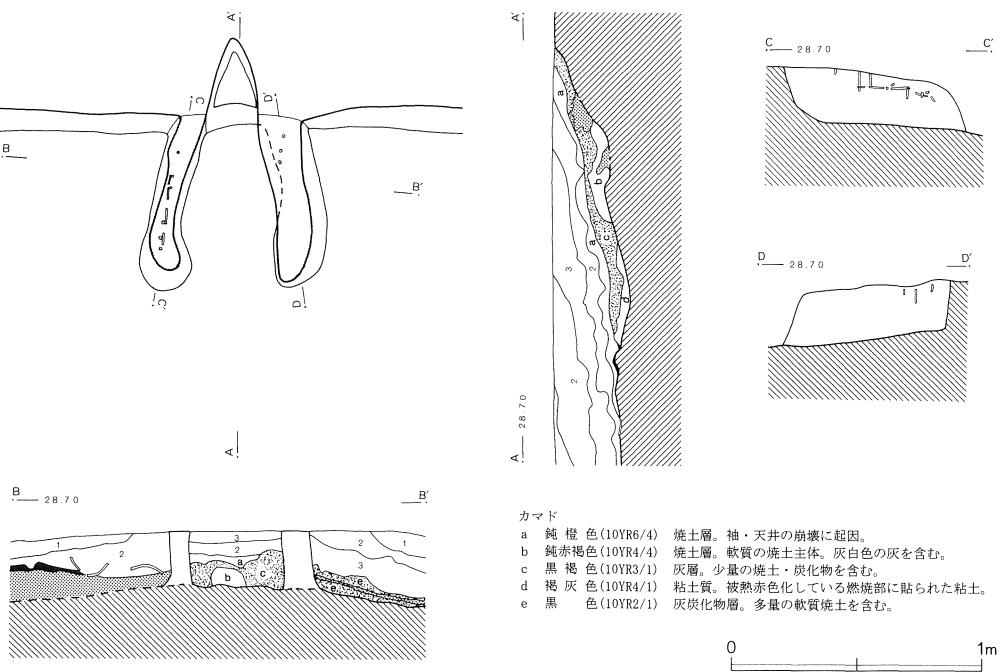
けー5グリッドに位置する。規模は長軸長4.30m、短軸長4.25m、深さ0.32mで、主軸方向はN-20°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため壁面とともに液状化現象によって大きく攪乱されていた。土層断面から見て、住居内南東床面の攪乱状況は著しく、床面でもあった地山砂が本来の床面より10cm以上も上昇していた。これはカマドの断面でも見られ、左袖外側床面は土器片とともに上昇し、袖の粘土を包み込んでいた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用され篠竹を使った芯材も確認した。芯材は左袖に多く使用され、横方向のものもみとめられたが、右袖とともに縦方向のものは床面まで達していなかった。左袖の長さは66cm、燃焼部の幅は37cmである。右袖の外側には灰層があった。

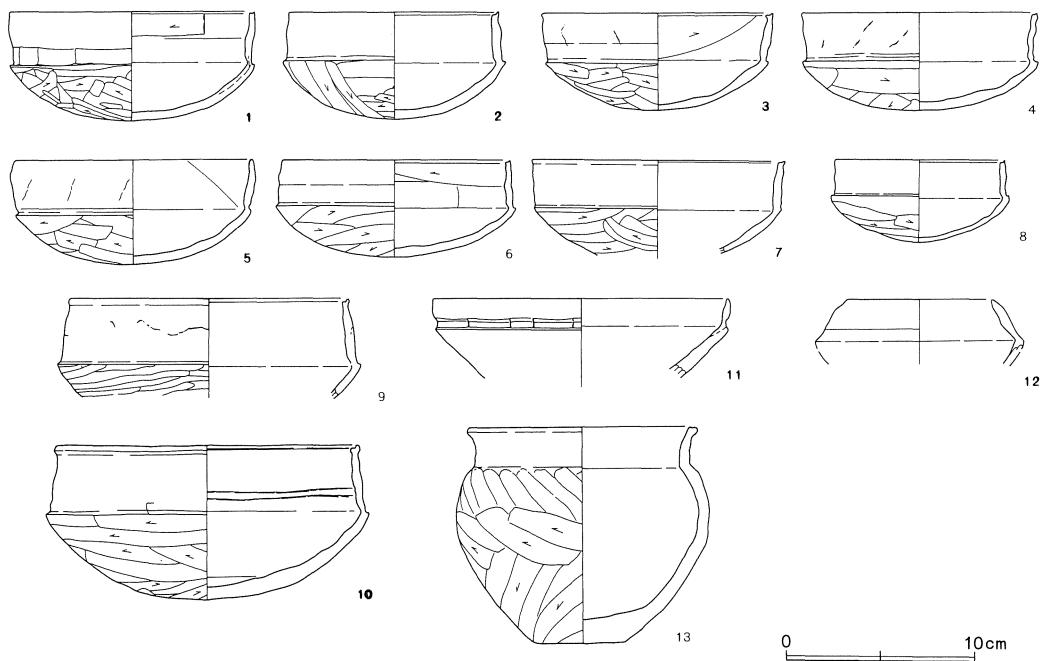
出土遺物のうち3・4・5の壺は二次的に火を受け内外面に煤が付着する。8はミニチュア的小型壺である。14は手捏土器である。



第66図 第17号住居跡



第67図 第17号住居跡 カマド



第68図 第17号住居跡 出土遺物

第17号住居跡出土土器観察表

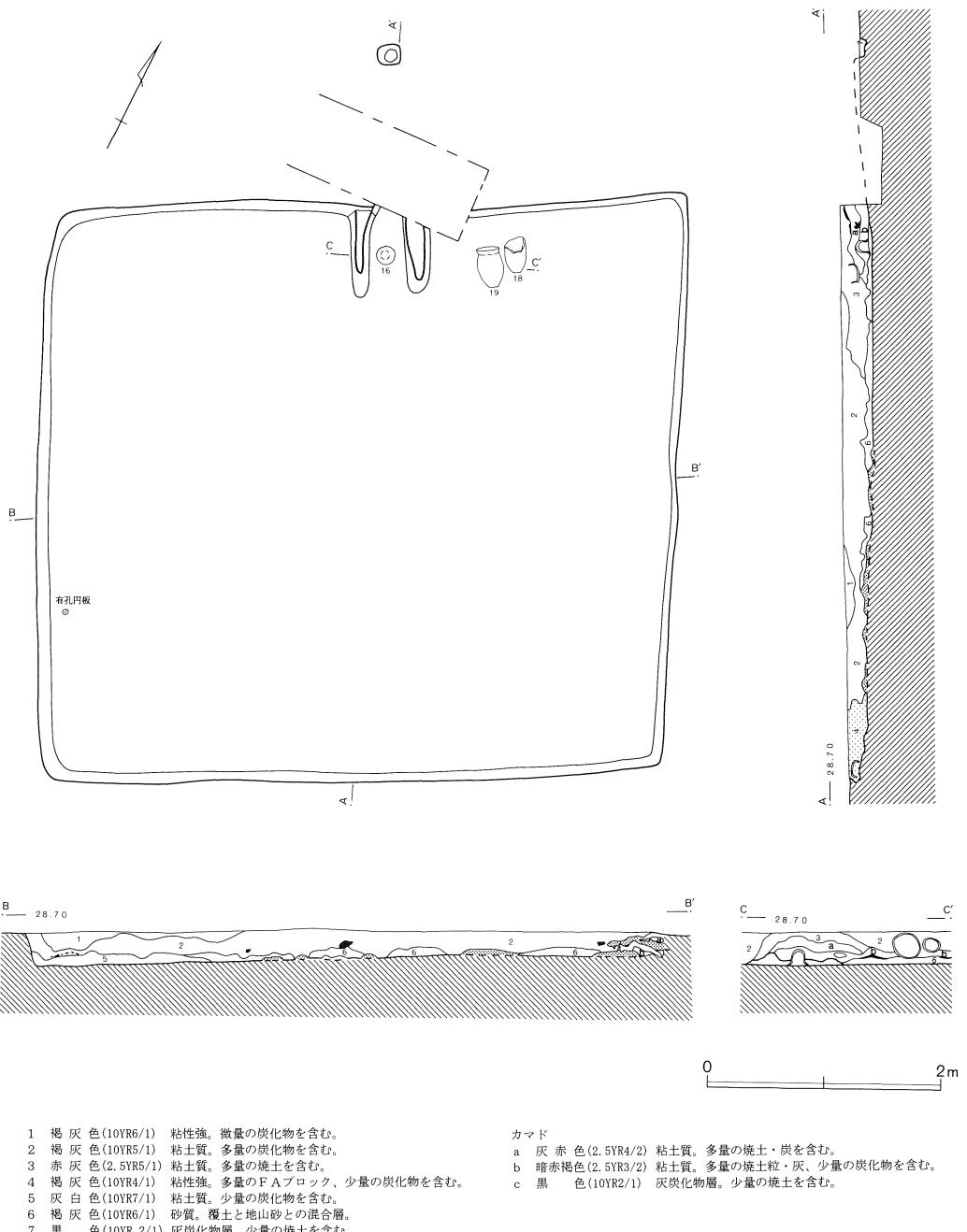
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.1	5.7		RWW'B	A	橙	60	
2	壺	(13.7)	5.6		RWB	A	橙	40	
3	壺	12.2	(5.1)		RWB	A	橙	80	外面に煤付着
4	壺	12.5	5.1		RWB	B	橙	50	内外面煤付着
5	壺	12.7	5.5		RWB	B	橙	100	内外面煤付着
6	壺	12.1	5.1		RWW'B	A	橙	80	
7	壺	(14.6)	(5.2)		WB	B	橙	30	
8	壺	(10.3)	(4.3)		RW	A	鈍黃橙	20	ミニチュア風
9	大型壺	(16.1)	(5.3)		RWB	A	橙	30	
10	大型壺	16.1	8.1		WB	A	鈍橙	70	
11	壺	(13.9)	(3.5)		RWB	B	橙	20	
12	無頸壺	(10.2)	(3.5)		R	A	鈍黃橙	15	
13	小型甕	12.2	11.3		RWB	C	橙	70	

### 第18号住居跡

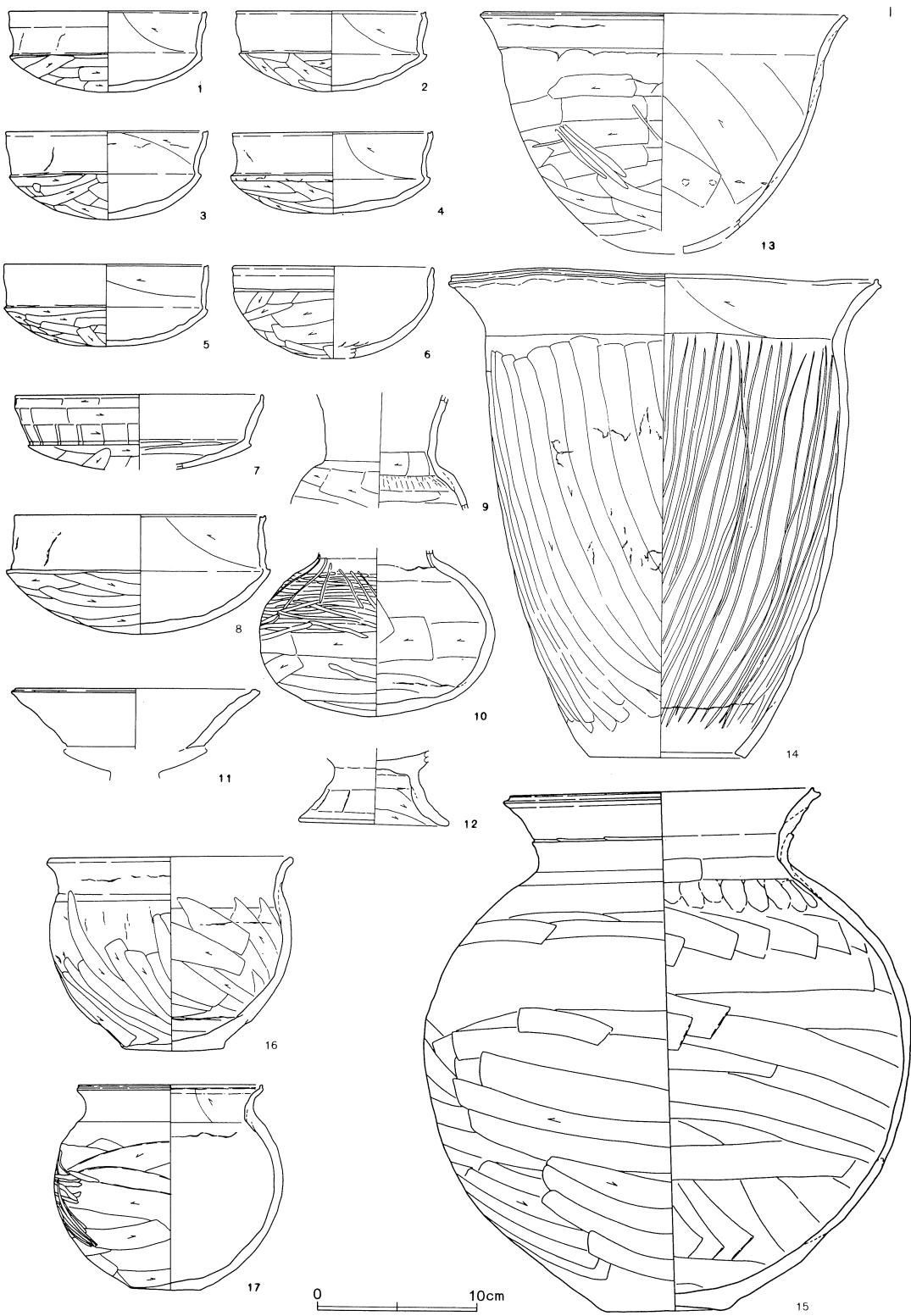
けー5グリッドに位置する。カマド煙道部はトレンチによって破壊されていた。規模は長軸長5.17m、短軸長4.76m、深さ0.29mで、主軸方向はN-25°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため液状化現象で攪乱され、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。土層断面の観察より、各土層の分層ラインは乱れ、2層によって大部分が埋まっていることがわかる。このことから、本住居跡は人為的に埋め戻されていると考えられる。これはカマド断面にも表われ、袖はわずかに高まりがわかる程度に残り、カマド内の灰層はb層としてカマド外へ流出している。意図的なカマド破壊の結果と見ることができる。覆土の4層中にはFAブロックが含まれていたが、この部分のみで確認できた土層であり、自然堆積の状態ではなかった。

カマドは北壁に造られ、袖と燃焼部床面には灰白色粘土が使用されていた。痕跡程度に残る左袖の長さは73cm、燃焼部の幅は31cmである。燃焼部奥壁から128cmのところでピットを検出したが煙出口に対応するものと見られる。支脚位置は中軸線左寄りであり、鉢を倒立して、床面粘土中に埋め込んでいた。

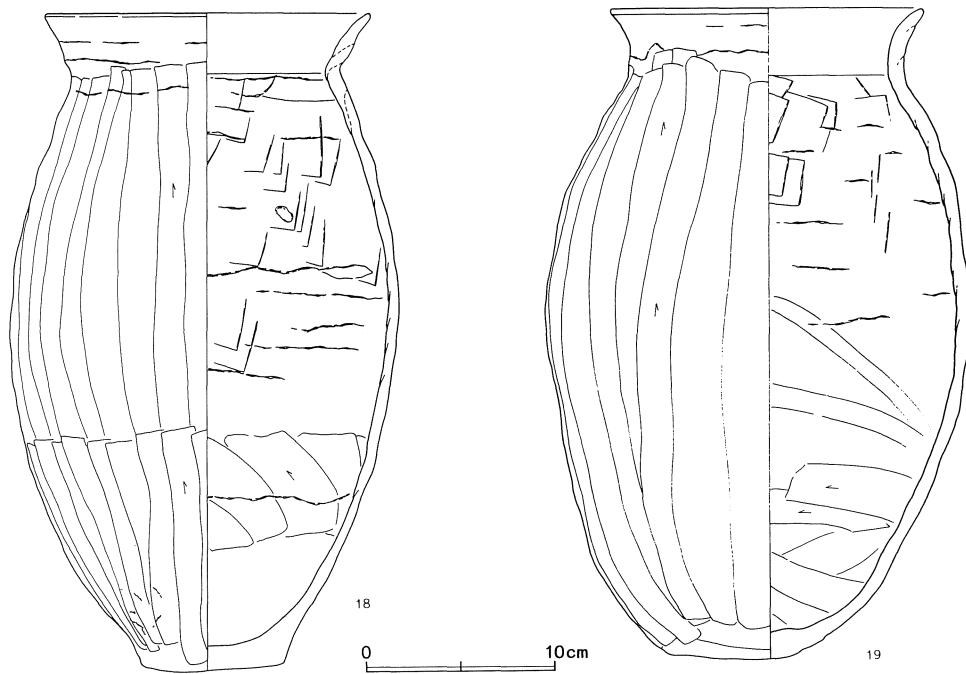
本遺跡に直接伴う土器はカマドから出土した4・6の壺と8の大型壺、支脚に転用されていた16の鉢、カマド右脇から出土した18・19の甕である。覆土4層との関係からFA降下前の土器と考えられる。1・2・3の壺および17の小型甕も完存しており、時期的に近いものである。13は底部を欠損するが焼成や胎土から甕と考える。17の小型甕は口縁部内面が磨滅しているが他の住居の出土例から見て本来は小型甕とセットとなって重ねて使用されたものであろう。18・19の甕は頸部と底部の形状が異なるがどちらも外面のヘラケズリが甘く厚手の作りになっているため重量感がある。西壁際の床面上からは滑石製の有孔円板が出土した。このほかにも土玉が3点出土した。



第69図 第18号住居跡



第70図 第18号住居跡 出土遺物（1）



第71図 第18号住居跡 出土遺物（2）

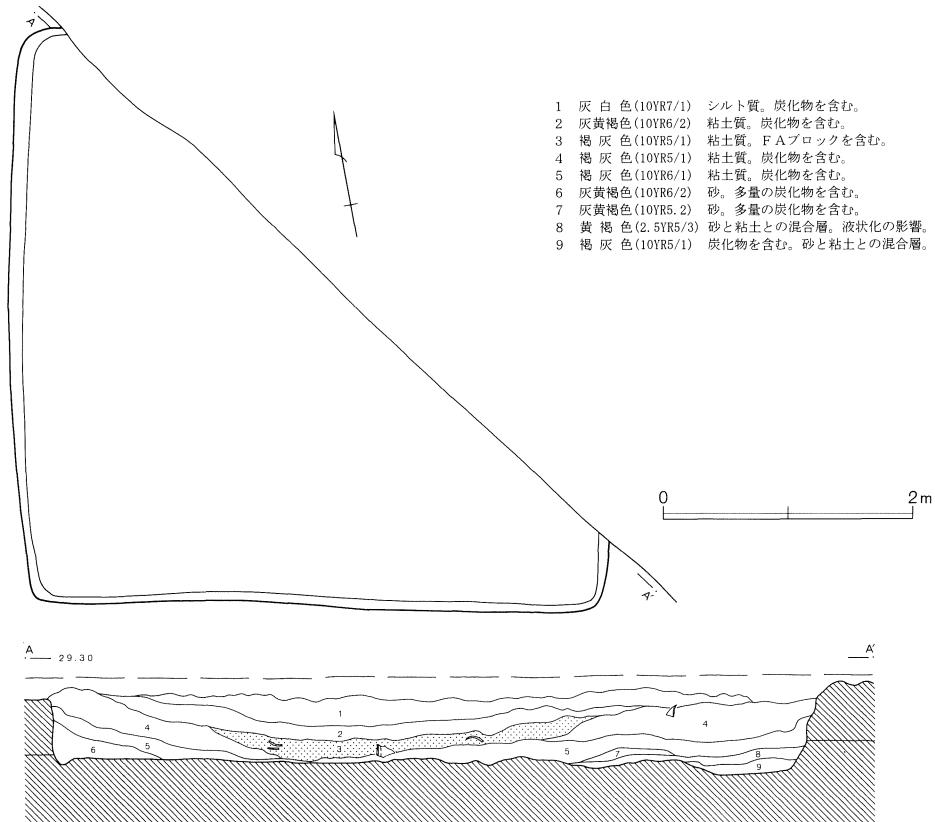
第18号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	5.0		RWB	A	鈍赤褐	100	
2	壺	11.9	5.0		RW	A	橙	100	No.3
3	壺	12.6	5.5		WB	A	橙	100	
4	壺	12.6	5.1		RW	B	橙	100	カマド
5	壺	(12.8)	5.1		RWB	A	橙	30	
6	壺	(12.7)	(5.7)		RWW'	C	橙	30	カマド
7	壺	(14.6)	(4.2)		RWB	B	橙	40	
8	大型壺	15.8	17.4		RWB	B	明赤褐	80	カマド
9	壇		(7.2)		RW	B	橙	30	
10	壇		(10.4)		RWB	A	鈍橙	80	
11	高壺	(15.3)	(3.7)		RWB	B	浅黄橙	10	
12	高壺		(4.7)	9.5	RW	B	鈍橙	95	
13	甌	(24.0)	(13.6)		RWB	A	橙	40	
14	甌	26.9	29.9	9.7	RWB	A	橙	70	
15	壺	(19.5)	(32.4)	(7.6)	RWW'	A	橙	40	
16	鉢	15.4	12.0	6.3	RWB	A	橙	70	No.3
17	小型甌	11.6	12.7	4.2	RWB	A	橙	100	口縁部内面磨滅
18	甌	17.3	34.5	7.5	RWW'B	B	鈍橙	80	No.1 削り不足し厚手
19	甌	16.6	34.2	6.2	RW	B	浅黄橙	90	No.2 削り不足し厚手

## 第19号住居跡

けー4グリッドに位置する。北東半分は調査区外にあり、規模は長軸長4.51m、短軸長4.45m、深さ0.51mである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土3層にはFAブロックが含まれていた。

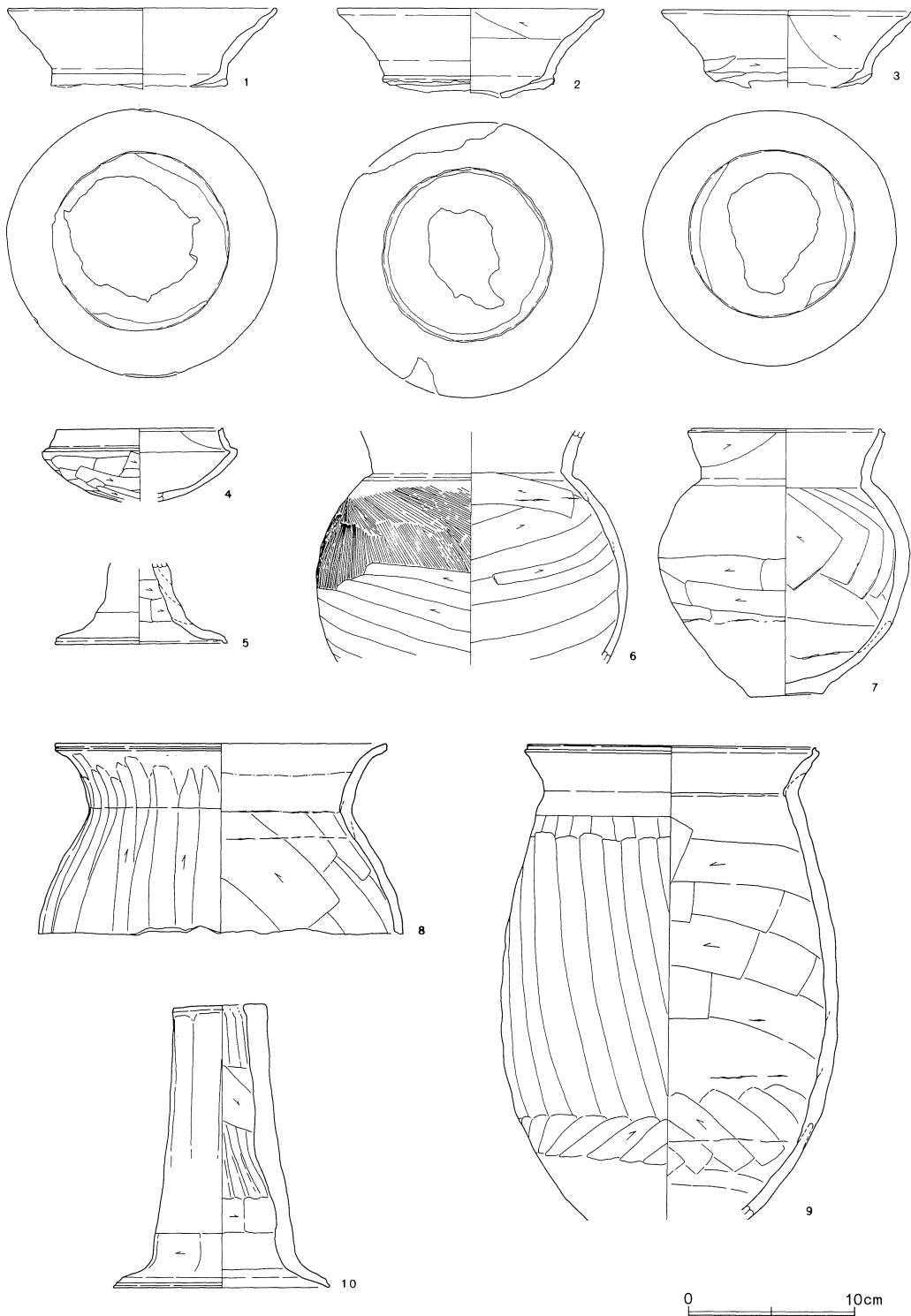
1・3・2は高壊の壊部であるが、底部は意図的に剝離されている。7は胎土・成形が壺的だが、火に掛けられた痕跡がある。残存率の高いこれらの土器が本住居跡に直接伴うと思われる。



第72図 第19号住居跡

## 第19号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高壊	16.2	(4.8)		RW	B	橙	90	壊底部剝離
2	高壊	16.0	(5.1)		RWB	B	橙	80	壊底部剝離
3	高壊	15.2	(4.1)		RW	A	橙	90	壊底部剝離
4	壊	(10.0)	(4.3)		RW	A	鈍橙	45	
5	高壊		(4.5)	(10.3)	WB	B	橙	20	
6	壺		(13.8)		RWB	B	橙	30	
7	壺	11.7	15.8	4.4	RW	B	橙	100	火にかけた痕跡有り
8	甕	(19.9)	(11.3)		WB	B	明褐灰	30	転用器台
9	甕	(17.8)	(28.2)		RWW'	A	橙	25	
10	支脚		16.9	13.1	RW	A	鈍橙	100	上面に木葉底



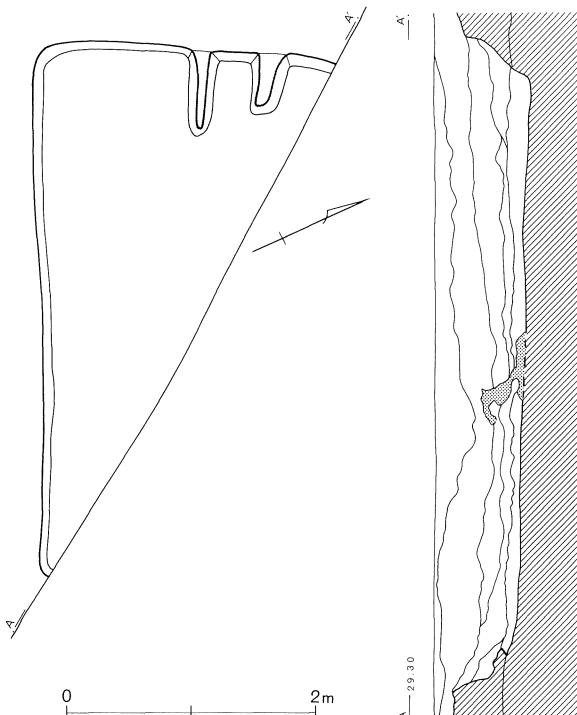
第73図 第19号住居跡 出土遺物

## 第20号住居跡

く－4 グリッドに位置する。第21号住居跡とわずかに重複するが、新旧関係は不明である。東半分は調査区外にあった。規模は主軸長4.15m、深さ0.46mで、主軸方向はN－66°－Wである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため、液状化現象の影響を受けて攪乱され、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。調査途中の出水により土層注の記録はできなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖に灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは62cm、燃焼部の幅は30cmである。

本住居跡に伴う遺物は出土しなかった。



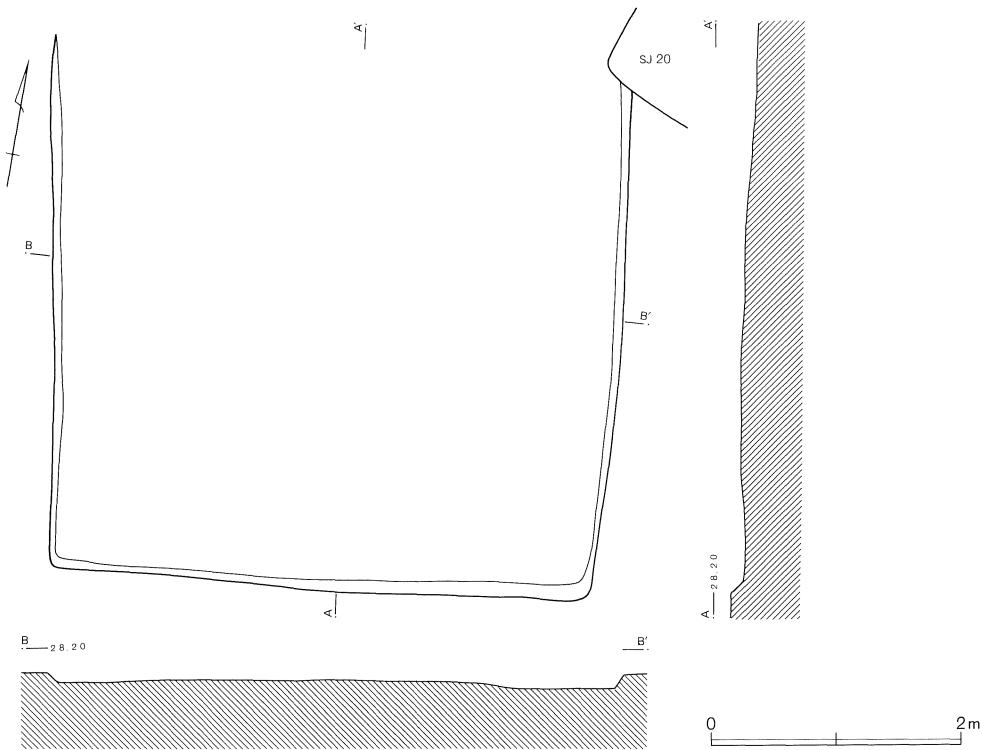
第74図 第20号住居跡

## 第21号住居跡

く－4 グリッドに位置する。第20号住居跡と一部重複するが、新旧関係は不明である。遺構確認面からの掘り込みが浅く、北壁は流失していた。規模は東西軸長4.46m、南北軸長4.32m以上、深さ0.7mで、主軸方向はN－7°－Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは残存していなかったが、東・西・南の各壁に灰・焼土等の痕跡も認められなかつたため、流失した北壁に造られたと見られる。

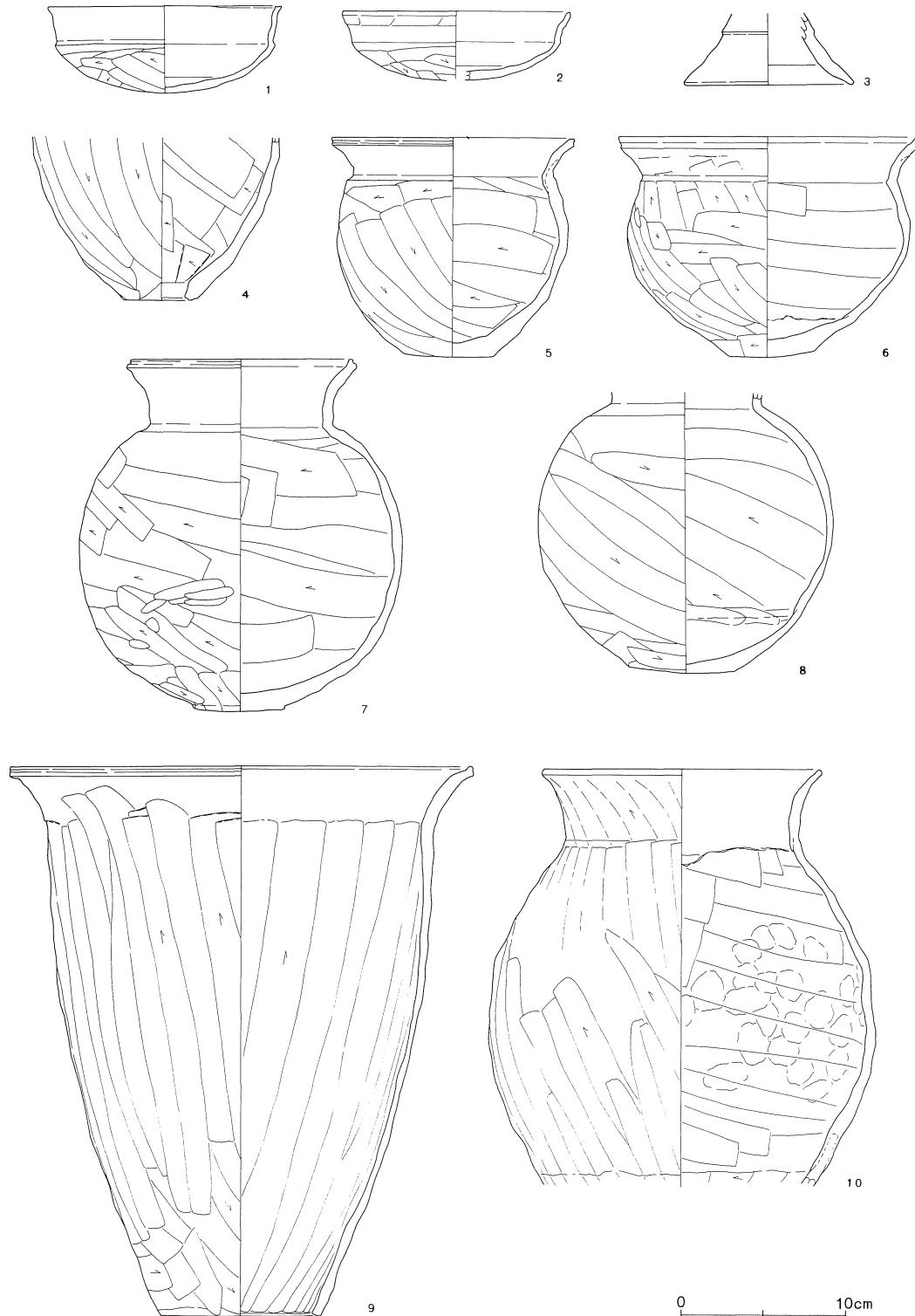
出土遺物は住居跡の残存が不良だったにもかかわらず多い。3の高壙脚部は小片から図化したものだが、壙の口縁部的な成形で有段である。5の小型甕は口縁部が精緻に成形され、端部に凹面をもつとともに頸部にも段をついている。6の鉢は外面の荒れが顕著で、火に掛けて使用されたことが明らかである。10は火に掛けられた痕跡があるため甕としたが、口縁部から肩部の形態が壺的であることや、大きく膨らむ胴部も内面に成形時の指頭痕を残す点など11以後の甕とは様相が全く異なる。これに対して11以後の甕は肩部が張らず、口縁端部に凹面をつくり出す共通点をもっている。口縁端部の特徴は長胴甕のみのものではなく、5の小型甕、6の鉢にまで及ぶものである。11は甕の胴部中位以上の転用器台であるが、口縁部内面には磨滅帶はみとめられない。他の住居跡の状況を考え合わせると9の甕とセットで使用された可能性が大きい。



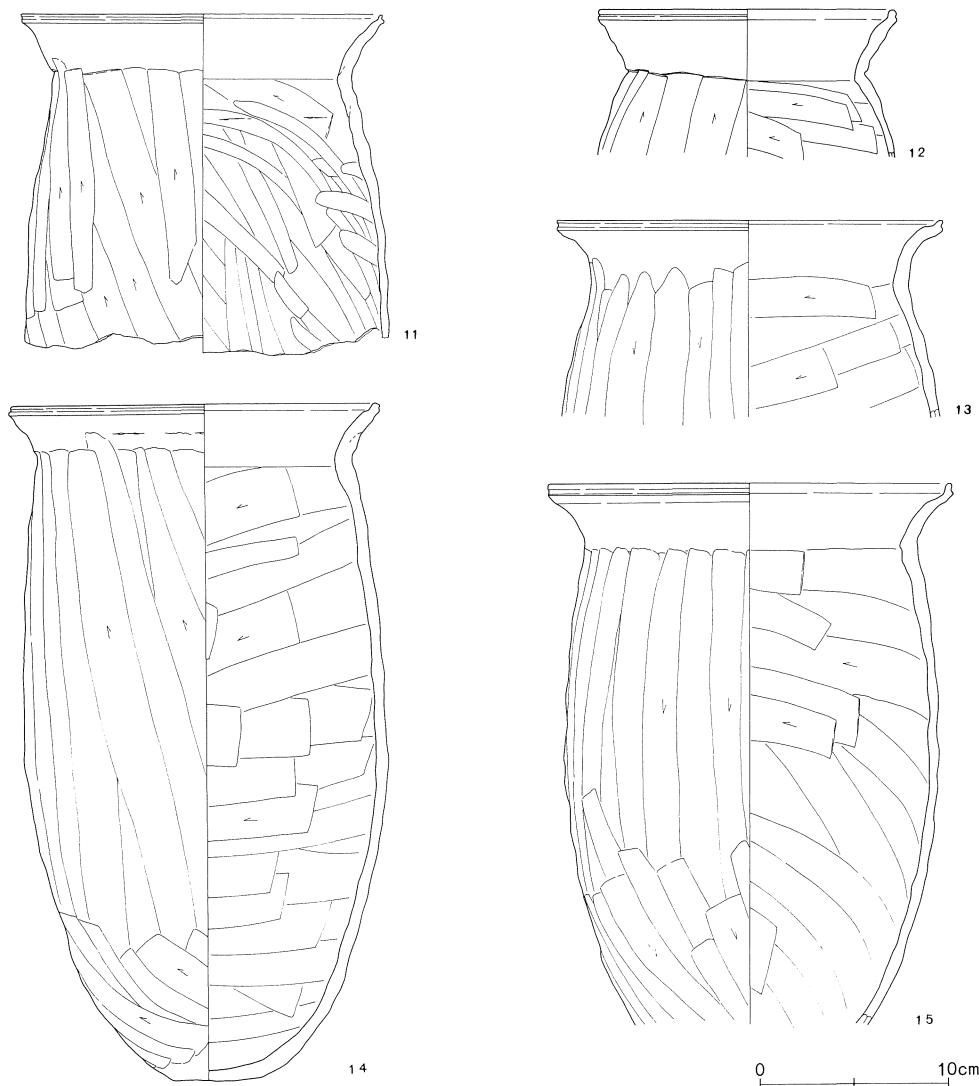
第75図 第21号住居跡

第21号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(14.2)	(5.2)		RWB	B	橙	40	
2	壺	(13.9)	(4.2)		RW	C	鈍橙	30	
3	高壺		4.3	(10.4)	RB	B	橙	15	
4	甑		(9.8)	3.9	WB	A	鈍黃橙	80	
5	小型甕	14.8	13.2	5.4	B	A	明赤褐	80	
6	鉢	18.2	13.2	5.1	B	C	鈍黃橙	70	火に掛けた痕跡有り
7	壺	(13.6)	(21.2)	(5.6)	RW	A	鈍橙	30	
8	壺		16.9	6.5	RW	B	橙	70	
9	甑	28.3	33.1	9.6	RWB	A	明赤褐	50	
10	甕	(17.0)	(25.2)		RWB	A	鈍黃橙	30	火に掛けた痕跡有り
11	甕	19.3	(17.7)		RWBH	A	橙	80	転用器台
12	甕	15.8	(7.8)		RWB	A	鈍橙	70	
13	甕	20.4	(10.4)		RWB	A	橙	50	
14	甕	(19.7)	(35.5)	(4.6)	RWB	B	橙	40	
15	甕	(21.4)	(28.4)		RB	A	鈍黃橙	20	



第76図 第21号住居跡 出土遺物（1）



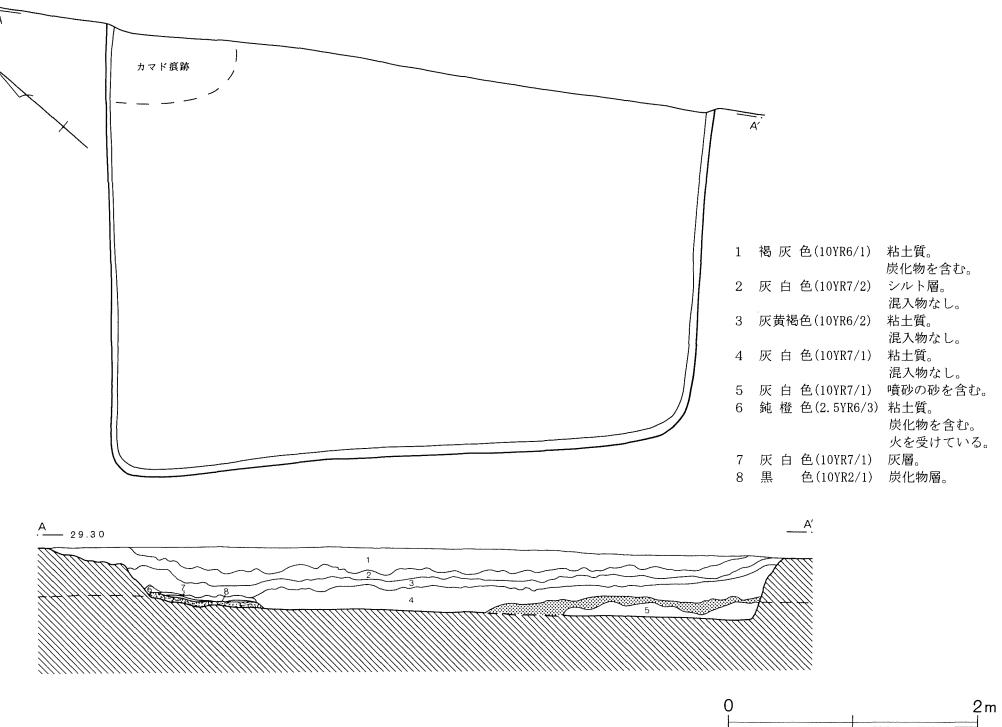
第77図 第21号住居跡 出土遺物（2）

### 第22号住居跡

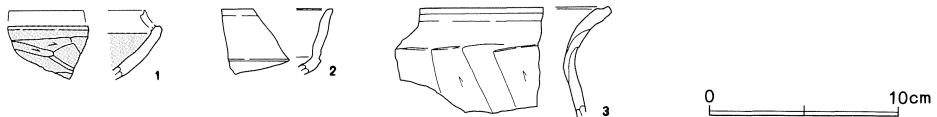
く-4 グリッドに位置する。北東半は調査区外にある。規模は南北軸長4.64m、深さ0.50m、主軸方向はN-42°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは明瞭な跡で検出できなかったが、北壁際に灰・炭化物層が広がる範囲がみとめられることから、この部分がカマドの痕跡となるか、もしくはこの灰・炭化物層はカマド外のものであってカマド本体はさらにこの東側の調査区外に位置するものと見ることができる。

遺物は土器小片がわずかに出土したのみであった。



第78図 第22号住居跡



第79図 第22号住居跡 出土遺物

#### 第22号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺				RW	A	橙	破片	内外面黒色処理
2	壺				RW	A	鈍橙	破片	
3	甕				RB	A	灰褐	破片	

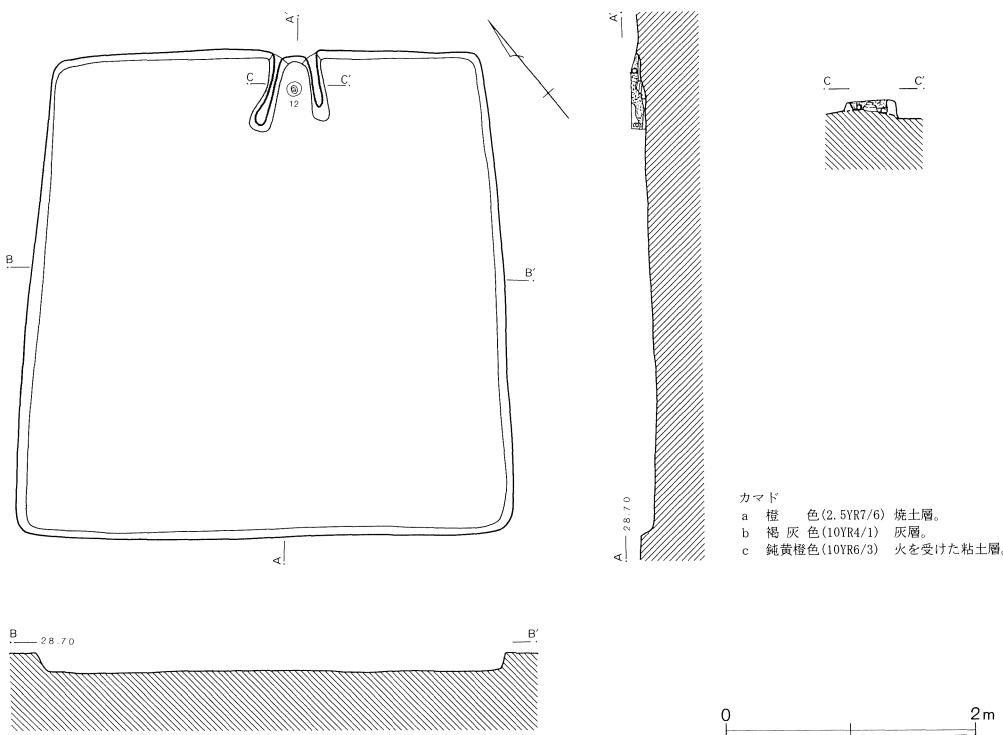
#### 第23号住居跡

けー5グリッドに位置する。規模は長軸長3.75m、短軸長3.65m、深さ0.10mで、主軸方向はN-38°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピット等は確認できなかった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは57cmで、燃焼部の幅は28cmである。支脚位置は中軸線上であり、高壺を倒立転用していた。

出土遺物のうち12の高壺はカマド支脚として転用されていた。4・5・6と7・8はそれぞれ同

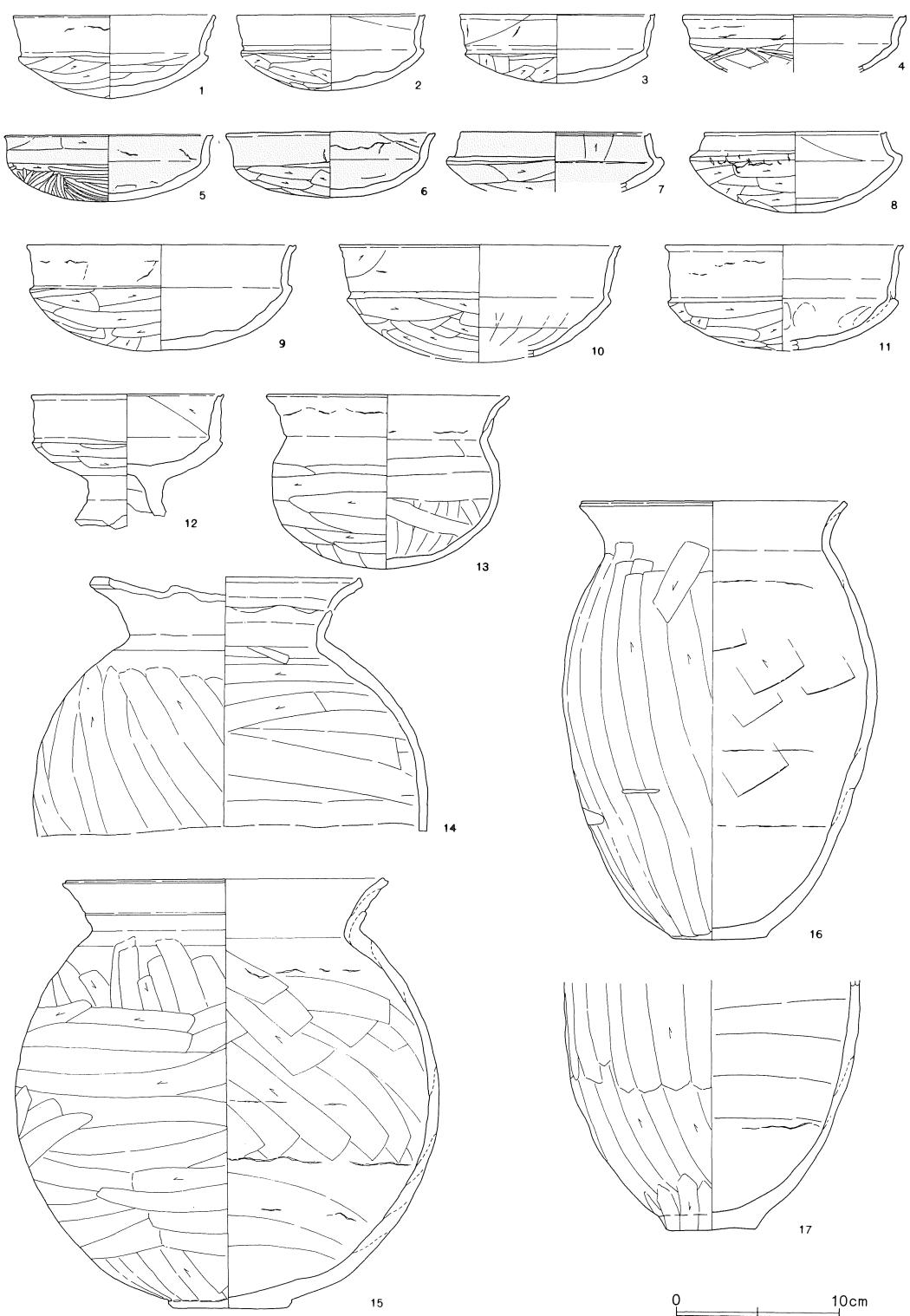
系統の坏で、5・6・7は黒色処理されているが、4と8は処理されていない。14は胴部の欠損が大きいが、壺からの転用器台である。



第80図 第23号住居跡

第23号住居跡出土土器観察表

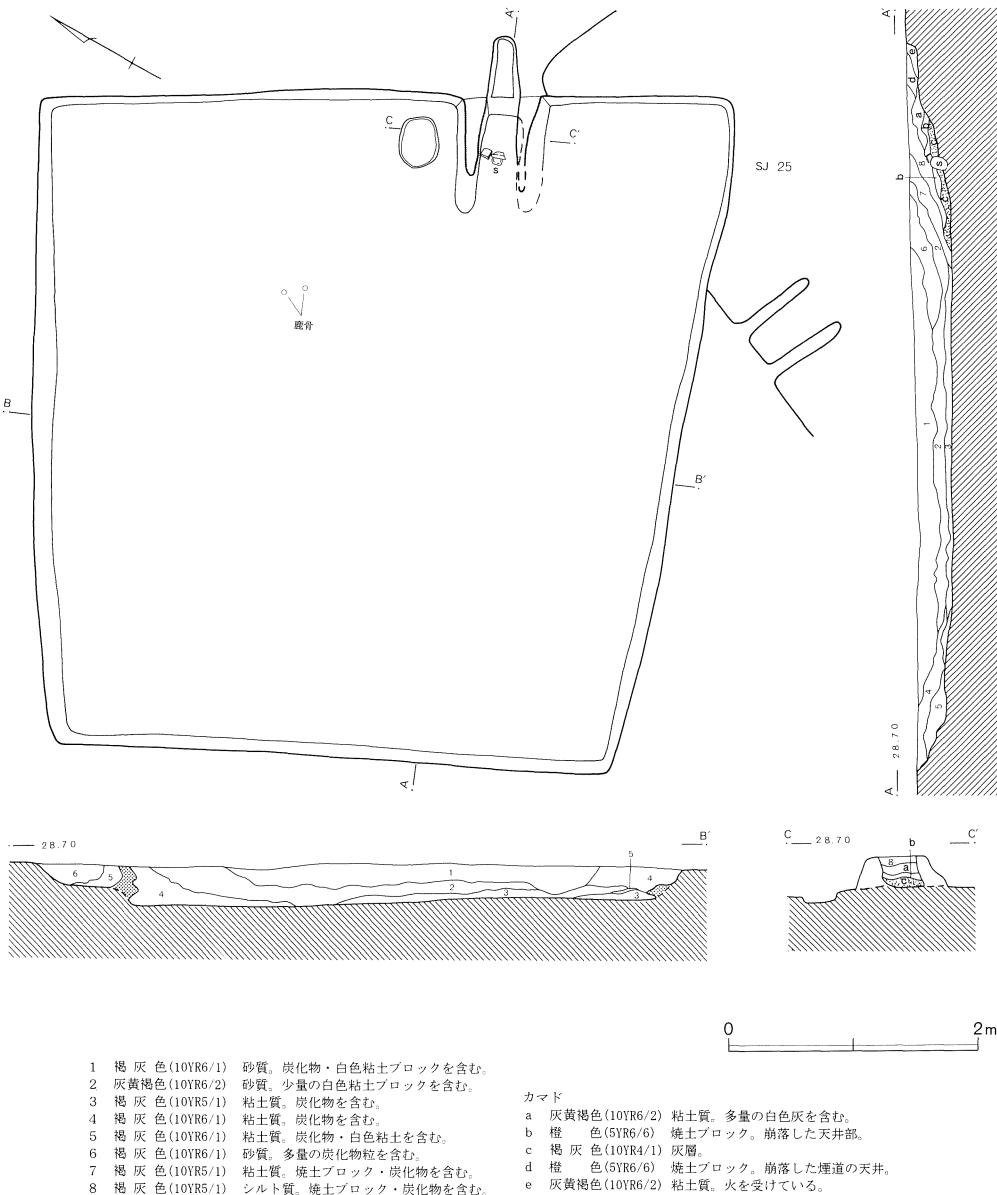
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	5.0		RW	B	橙	60	
2	坏	11.4	4.6		RW	A	鈍橙	100	
3	坏	12.0	4.2		RW	B	橙	60	口辺部内面に布压痕
4	坏	(13.7)	(3.5)		RW	A	橙	25	黒色処理せず
5	坏	12.8	4.0		W	A	黒	100	外面黒色処理
6	坏	12.7	4.0		W	A	鈍褐	100	外面黒色処理
7	坏	(11.7)	(3.6)		W	A	黒	15	外面黒色処理
8	坏	11.3	4.9		RW	A	橙	75	黒色処理せず
9	大型坏	16.5	6.4		RW	A	鈍赤褐	60	火に掛けた痕跡有り
10	大型坏	(17.2)	(7.1)		RW	A	橙	30	
11	大型坏	14.6	(6.4)		RW	B	橙	35	
12	高 坏	11.8	(7.4)		RW	B	橙	100	No.1 転用支脚
13	鉢	14.9	10.5		RW	A	橙	80	
14	壺	16.6	(15.8)		RWB	B	橙	60	転用器台
15	壺	(19.7)	(26.0)	(6.2)	RWB	A	橙	40	
16	甕	16.2	26.5	5.6	RWB	B	橙	80	
17	甕		(15.2)	5.5	RW	B	鈍橙	50	カマド



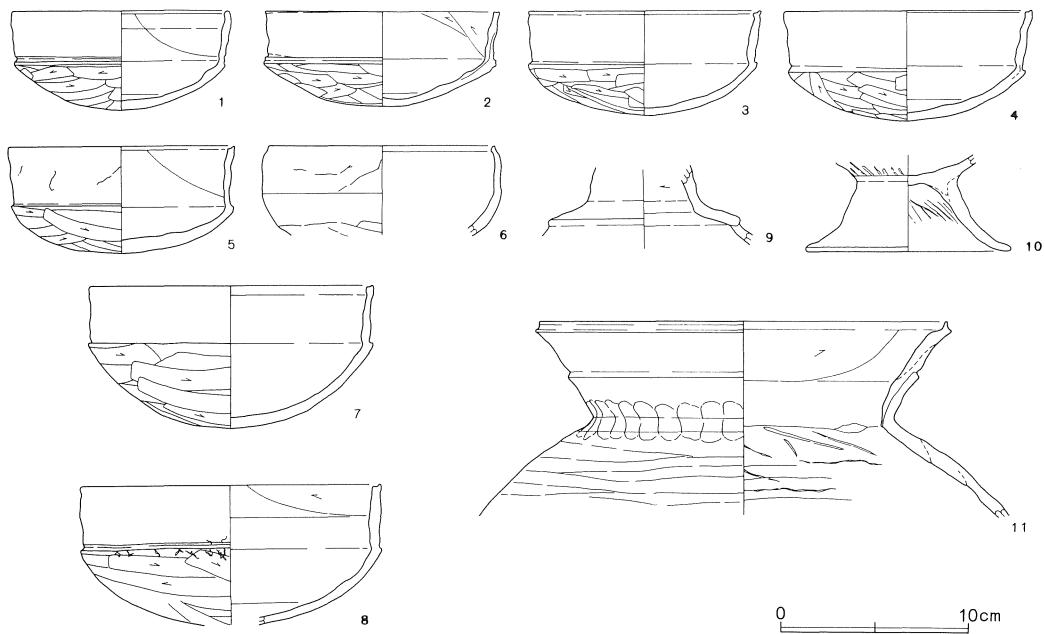
第81図 第23号住居跡 出土遺物

## 第24号住居跡

く－5 グリッドに位置する。第25住居跡に切り込まれていた。規模は東壁軸5.46m、北壁長5.10m、深さ0.30mで、主軸方向はN－63°－Eである。東壁に比べて西壁は4.50mと短いため平面プランは台形となっている。カマド左脇で長径40cm、深さ7cmの皿状の貯蔵穴を検出した。床面は地山砂層に掘り込まれていたため、壁溝・柱穴は確認できなかった。B断面の北壁下では床面が段状に高くなっているが、これは地山砂層の液状化現象に起因し、本来的なものではない。同様のことは他の壁下にも見られ、壁は床面から直立しない。



第82図 第24号住居跡



第83図 第24号住居跡 出土遺物

第24号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.6	5.2		W	B	明赤褐	90	
2	壺	12.4	5.0		RW	A	鈍黃橙	95	
3	壺	12.3	5.5		RW	A	橙	60	
4	壺	13.2	5.8		RB	B	鈍橙	70	
5	壺	12.0	5.6		RWB	B	橙	80	
6	壺	(12.0)	(4.2)		RW	A	橙	25	
7	大型壺	15.1	7.5		B	C	橙	60	火に掛けた痕跡有り
8	大型壺	(15.9)	(7.4)		RW	B	橙	40	
9	高 壺		(4.2)		RW	A	橙	25	
10	高 壺		(5.1)		RW	A	橙	50	接合部にハケメ
11	壺	(21.6)	(10.3)		RWB	A	橙	25	

カマドは東壁の南寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは77cm、燃焼部の幅は30cmである。煙道は幅22cm、長さ48cm以上である。支脚位置は中軸線上であり、礫を倒立使用していた。

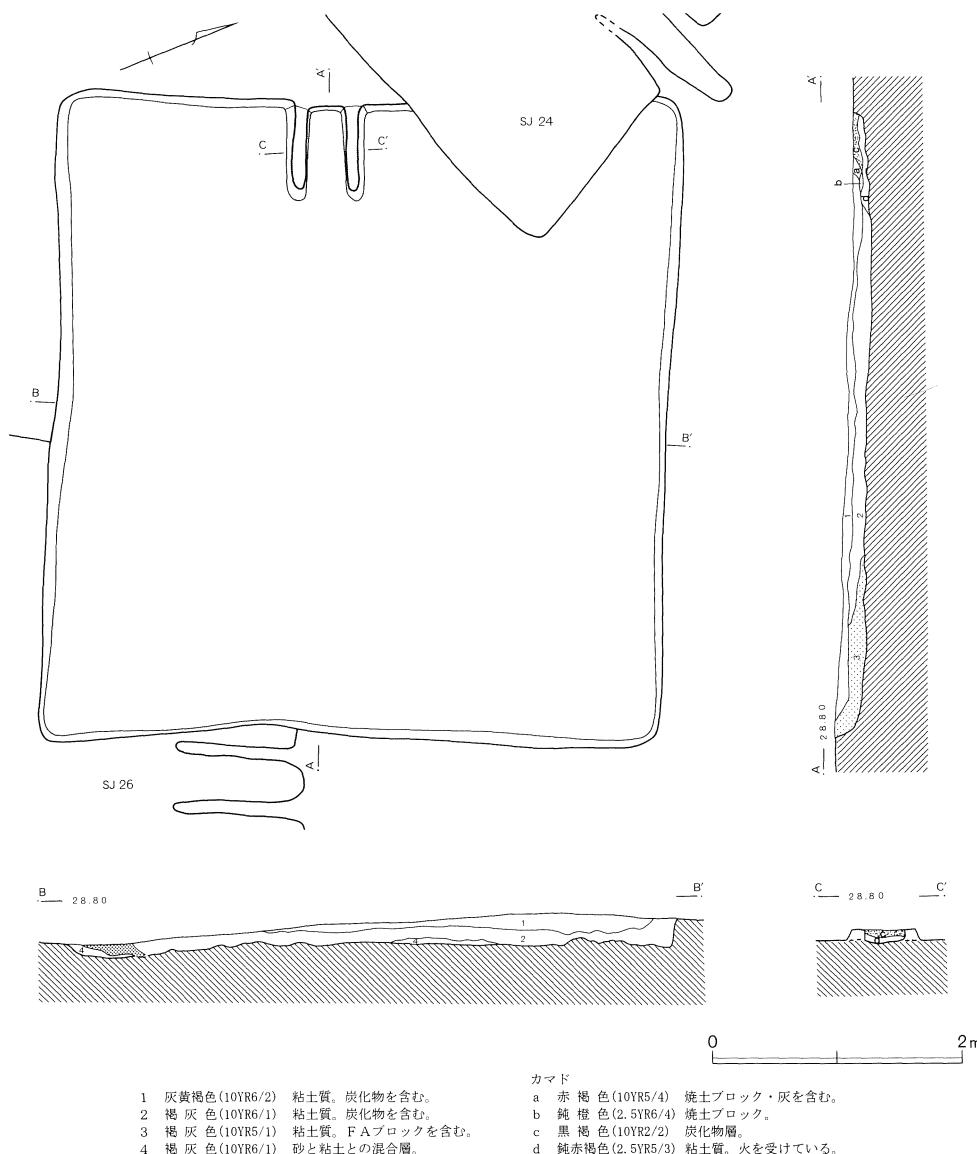
出土遺物は少量である。7の大型壺は体部外面と口辺部内面に煤が付着し、口辺部外面は火を受けて荒れていることから、鉢と同様に火に掛けたと見られる。9は高壺の有段脚部である。10は模倣壺が壺部となる高壺で、壺と脚の接合部にハケメを残す。このほか覆土中から土玉1点と鹿の骨片が出土した。

## 第25号住居跡

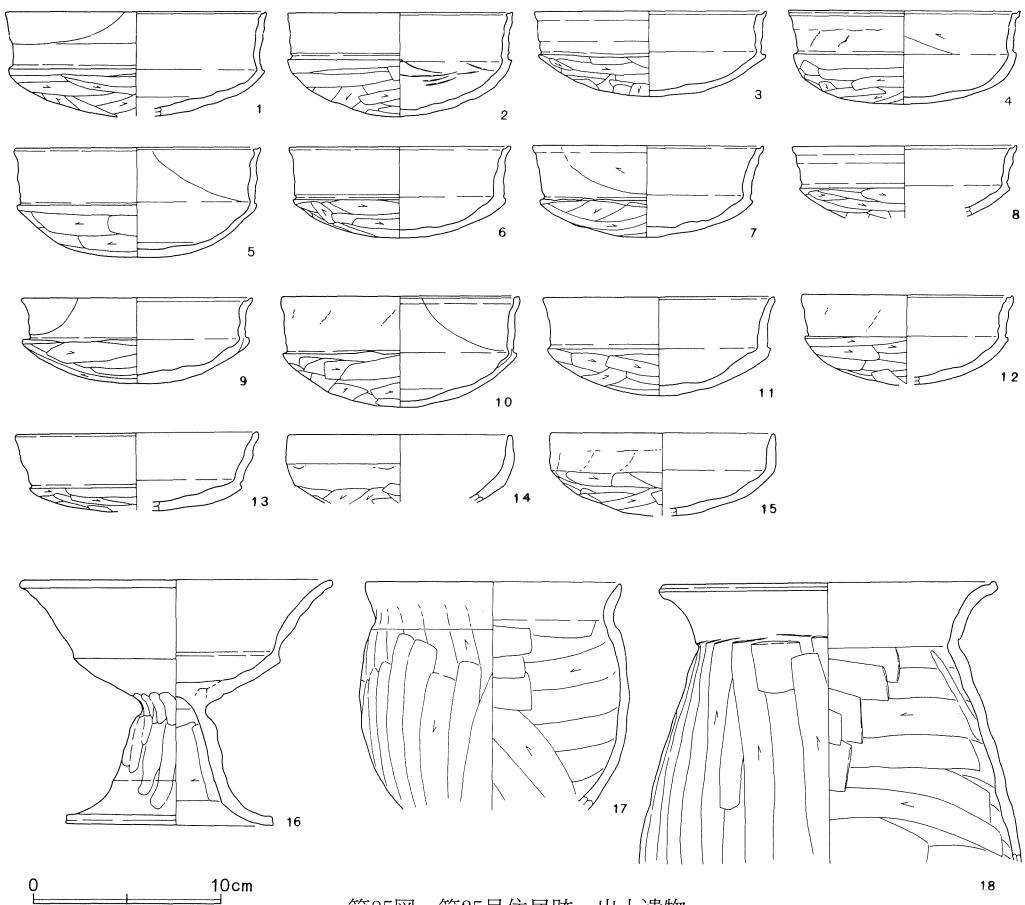
く－4 グリッドに位置する。第24号・第26号住居跡の2軒を切り込んでいた。規模は長軸長4.90m、短軸長4.79m、深さ0.20mで、主軸方向はN-66°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土3層中にはFAブロックが含まれていた。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは72cmで、燃焼部の幅は32cmである。

出土遺物のうち14・15の壺は稜がなく、客体的な存在である。また、17の小型甕は上下半で胎土が異なり、下半の方が砂の混合比率が大きい。



第84図 第25号住居跡



第85図 第25号住居跡 出土遺物

第25号住居跡出土土器観察表

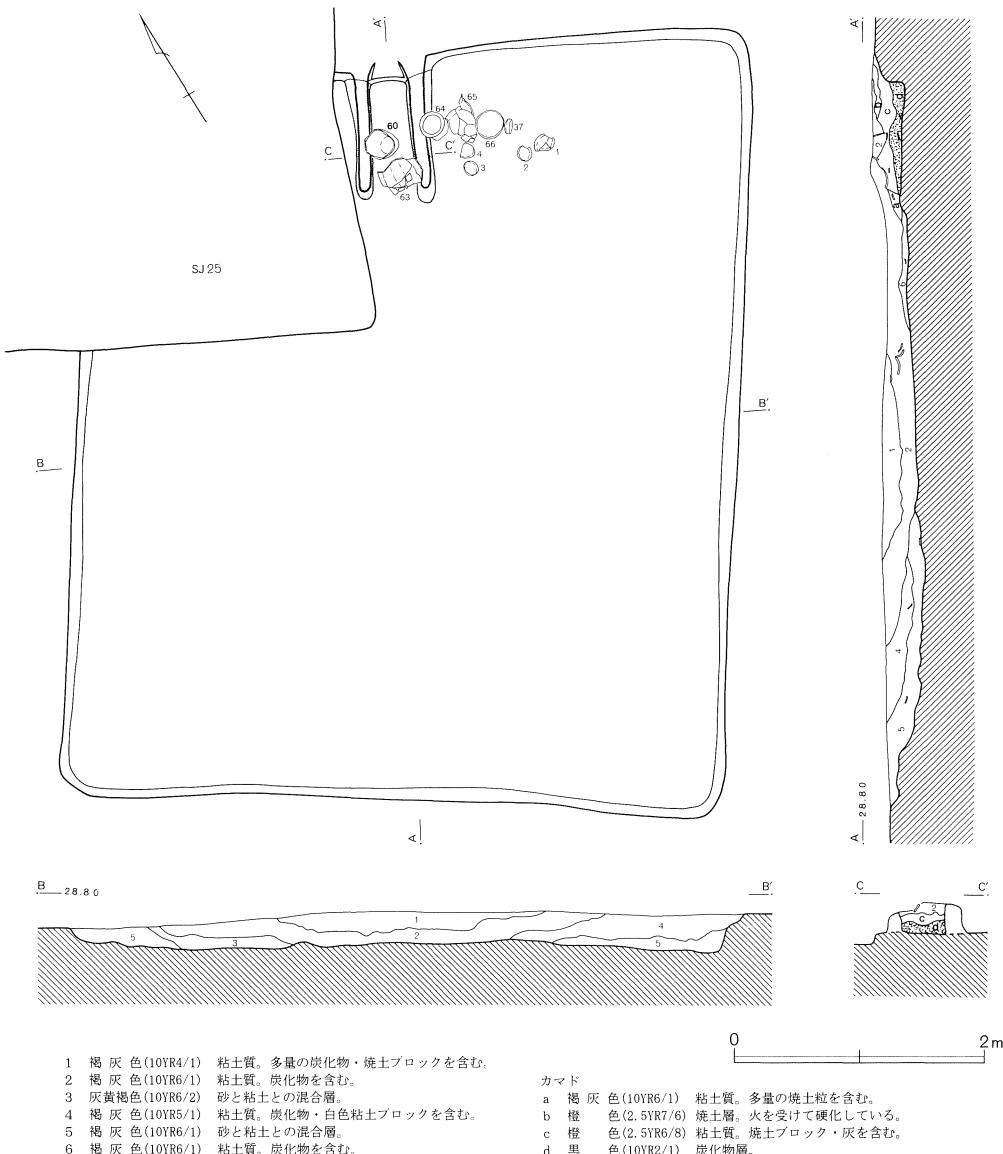
番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	壺	(13.9)	(5.5)		W	B	明赤褐	45	
2	壺	(12.0)	(5.5)		RW	A	橙	45	
3	壺	12.3	4.5		RW	B	鈍褐	60	
4	壺	12.3	4.9		W	A	橙	90	
5	壺	13.1	5.7		RWB	B	橙	90	
6	壺	11.8	4.8		WB	A	橙	70	
7	壺	12.3	4.8		RW	B	明赤褐	80	
8	壺	(11.9)	(3.8)		RW	B	明赤褐	30	
9	壺	12.3	4.5		RW	B	明赤褐	70	
10	壺	12.6	5.8		W	A	赤褐	60	
11	壺	12.3	5.2		RW	B	橙	100	
12	壺	(11.2)	(4.7)		W	A	橙	40	
13	壺	(13.0)	(4.1)		RW	B	橙	25	
14	壺	(11.9)	(3.5)		RW	A	明赤褐	40	
15	壺	(11.9)	(4.4)		RW	A	赤褐	30	
16	高 壺	16.6	12.9	11.0	RWW'	B	橙	80	
17	小 型 甕	(13.6)	(12.0)		B	B	鈍黃橙	30	上下半で胎土異質
18	甕	(17.9)	(14.8)		RWB	B	淺黃橙	20	

## 第26号住居跡

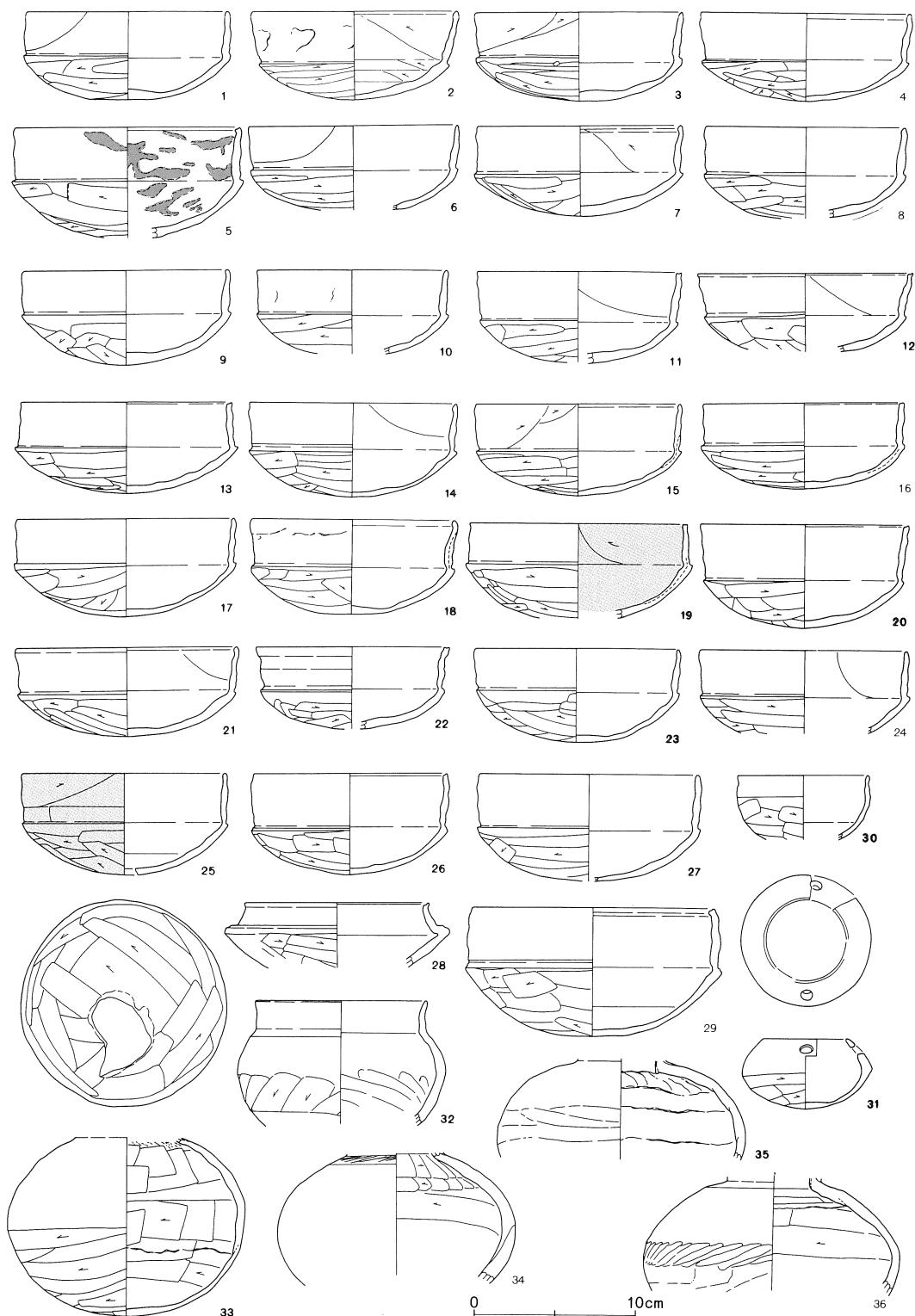
く-4 グリッドに位置する。第25号住居跡に切り込まれていた。規模は長軸長5.92m、短軸長5.11m、深さ0.26mで、主軸方向はN-30°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは96cmで、燃焼部の幅は35cmである。支脚位置は左寄りであり、土製支脚が使用されていた。右袖の外側には灰層があった。

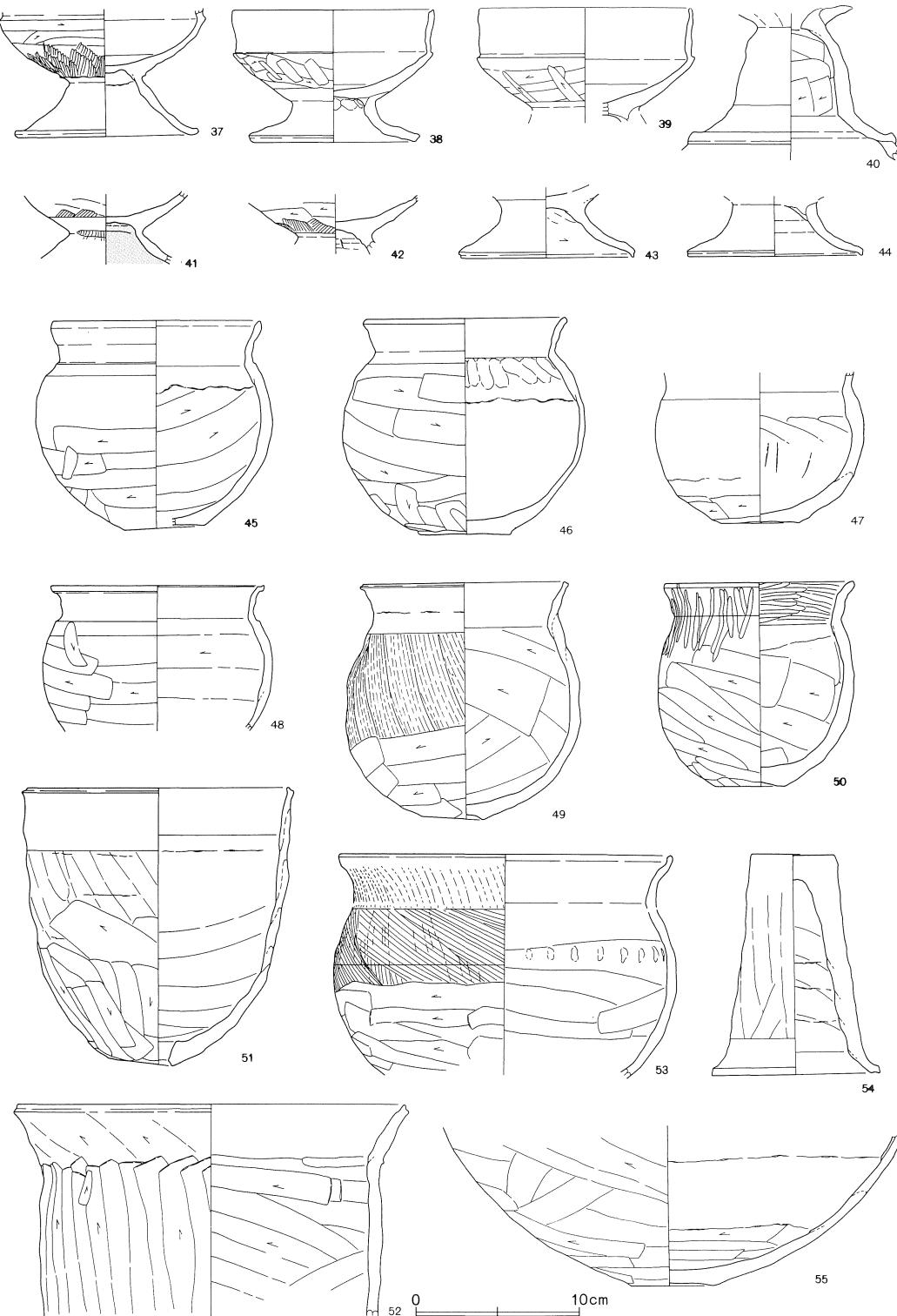
遺物はカマド周辺に集中して出土した。燃焼部から出土した60・63の甕のうち、60は支脚にのっていた。またカマド右脇から出土した64・65・66の3点の甕のうち、64は底部を欠損しているもの



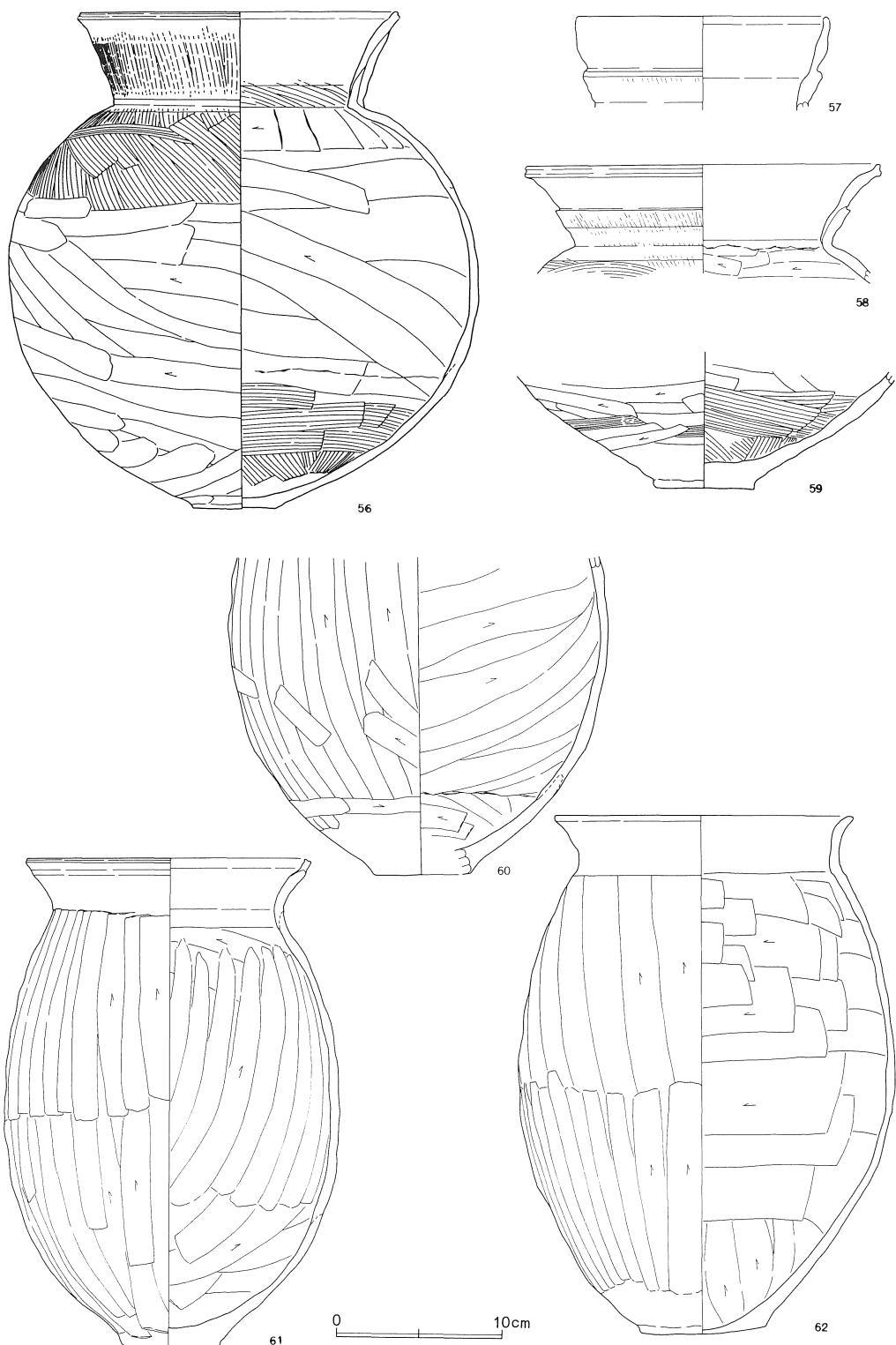
第86図 第26号住居跡



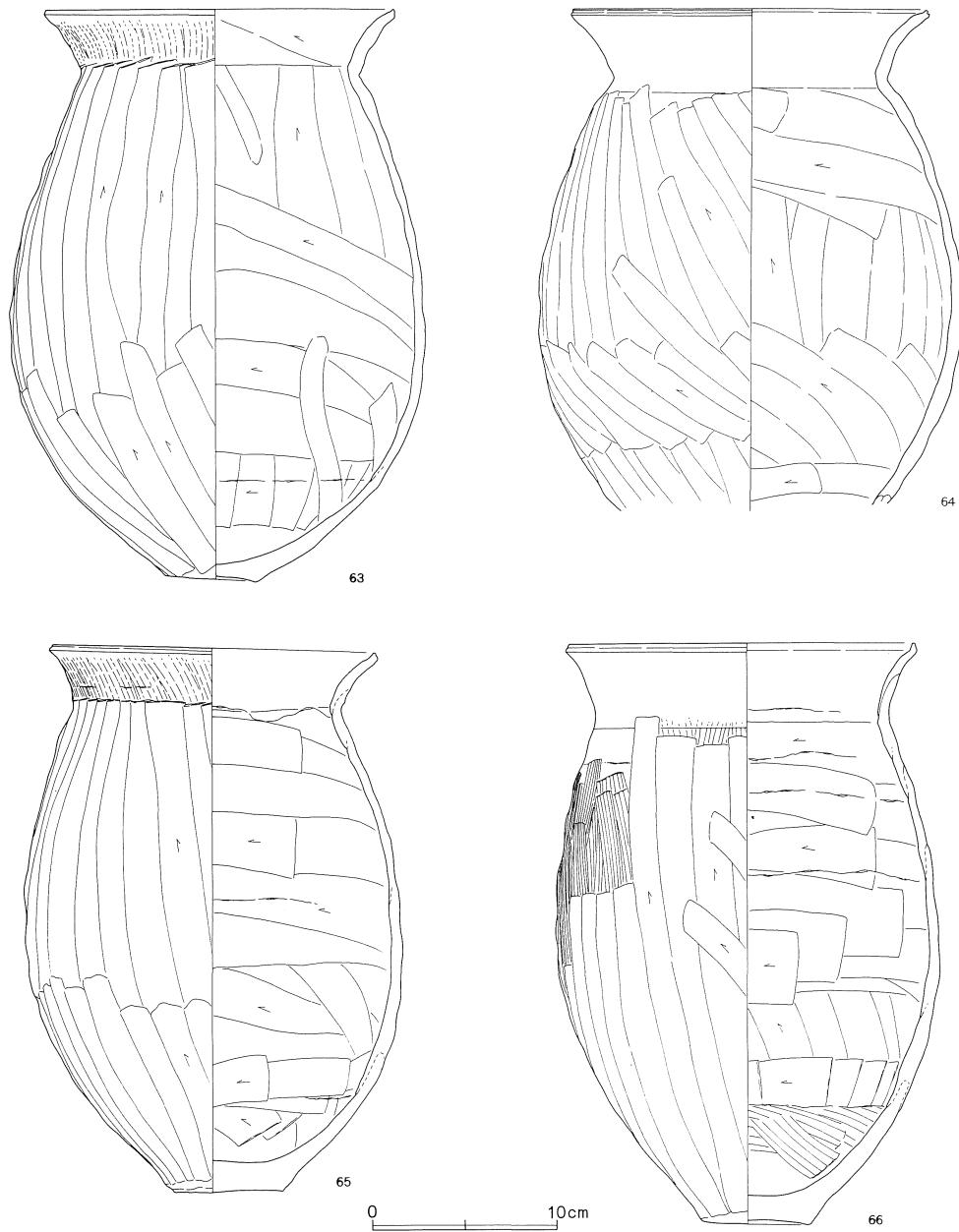
第87図 第26号住居跡 出土遺物 (1)



第88図 第26号住居跡 出土遺物（2）



第89図 第26号住居跡 出土遺物（3）



第90図 第26号住居跡 出土遺物（4）

の正立した状態であり転用器台の可能性が考えられる。これに対して、1・2・3・4の4点の壺は床面直上の出土ではないが、カマド右脇の灰層中で検出され本住居跡に直接伴う土器と考えられる。25の壺は外面を黒色処理され、体部を穿孔されている。28の壺は覆土中への混入と見られる。51の甌は上下半で胎土が異なり、下半は砂粒の混合比率が高く橙色である。全体的に器面調整のハケメが顕著で器種を限定せず、37・41・42の高壺の脚接合部、49の小型甌、53の鉢、56・57・58・59の壺、63・65・66の甌と個体数の多いことが特筆される。

第26号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	5.4		RW	B	橙	80	No.7
2	壺	12.7	5.4		RWB	B	橙	80	No.8 被熱による器面剥離顯著
3	壺	12.9	5.4		WW'	A	明褐	90	No.9
4	壺	13.0	5.4		B	B	橙	60	No.10 体部に砂粒脱落による小孔有り 外外面に樹脂付着
5	壺	(13.9)	(6.8)		RWB	B	橙	25	
6	壺	12.9	(5.2)		RW	B	橙	50	
7	壺	12.7	5.5		RW	B	橙	95	
8	壺	12.3	(5.6)		RW	C	橙	70	
9	壺	12.7	5.8		RWB	B	橙	90	
10	壺	(11.7)	(5.1)		RB	B	鈍黃橙	40	
11	壺	(12.6)	(5.5)		RB	B	橙	40	
12	壺	(13.3)	(4.8)		RW	B	鈍黃橙	30	
13	壺	(13.0)	(5.6)		RWB	B	橙	40	
14	壺	12.8	5.7		RW	B	橙	80	
15	壺	(12.7)	(5.6)		WB	B	橙	45	
16	壺	12.4	5.2		RWB	B	橙	60	
17	壺	(13.4)	(6.0)		RW	B	鈍橙	40	
18	壺	12.5	5.8		RW	B	橙	90	
19	壺	(13.4)	(5.8)		RWW'	B	明赤褐	30	内面黑色処理
20	壺	12.8	6.3		RWB	C	明赤褐	80	
21	壺	(13.5)	(5.4)		RW	B	橙	40	
22	壺	(11.9)	(5.0)		RB	B	橙	25	
23	壺	12.7	5.7		RB	B	橙	90	
24	壺	(12.8)	(5.1)		R	B	橙	30	
25	壺	12.6	6.2		RWB	B	橙	100	穿孔土器 外面黑色処理
26	壺	11.9	6.2		RW	B	鈍赤褐	80	
27	壺	(13.6)	(6.5)		RW	C	橙	20	外面に被熱痕跡有り
28	壺	(11.4)	(4.0)		W	A	明赤褐	15	
29	大型 壺	15.0	17.8		RW	B	橙	50	
30	壺	(8.1)	(3.9)		RB	B	明赤褐	30	
31	無 頸 壺	5.2	4.3		RW	B	橙	70	2孔
32	短 頸 壺	(10.6)	(7.5)		RWW'B	B	鈍黃橙	25	火に掛けた痕跡有り 胎土粗
33	埴		(10.9)		RWB	A	橙	100	
34	埴		(7.5)		RW	A	橙	10	
35	埴		(6.1)		RWB	C	橙	70	
36	埴		(7.0)		B	A	明赤褐	40	
37	高 壺		(7.7)	11.2	W	A	橙	80	No.6 接合部にハケメ
38	高 壺	(12.3)	(8.0)	(10.0)	RW'B	A	橙	25	
39	高 壺	(13.0)	(7.0)		RW	B	橙	25	
40	高 壺		(8.9)		RB	A	明赤褐	70	
41	高 壺		(5.0)		RW	A	橙	40	脚部内面黑色処理 接合部にハケメ
42	高 壺		(3.1)		RWB	A	橙	60	接合部にハケメ
43	高 壺		(4.3)		RW	B	橙	50	
44	高 壺		(3.7)	(10.7)	RW	A	橙	30	
45	小型 甕	12.8	(12.5)		RW	B	橙	70	
46	小型 甕	12.5	13.0	5.5	RWB	B	鈍黃橙	70	

第26号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
47	小型甕		(9.1)	(4.7)	WW'U	B	鈍黄橙	30	
48	小型甕	(13.1)	(8.8)		RW	B	橙	30	
49	小型甕	12.8	14.2	3.3	W'	C	淡橙	80	ハケメ残る
50	小型甕	11.6	12.3	4.2	RW	B	鈍橙	70	火に掛けた痕跡有り
51	甕	16.6	16.4	2.1	R	A	鈍橙	95	上下半で胎土異質
52	甕	24.0	(12.9)		RWB	A	橙	80	
53	鉢	(20.4)	(13.3)		RW	A	橙	25	ハケメ残る
54	支脚		13.3	10.2	RWB	A	淡黄	100	No.11 外面に粘土付着
55	壺		(9.7)	(5.0)	RWW'B	A	橙	70	
56	壺	19.3	29.9	5.0	RWB	A	橙	80	内外面にハケメ残る
57	壺	(15.1)	(5.6)		RWB	A	橙	45	
58	壺	(21.3)	(6.5)		RW	A	橙	15	
59	壺		(8.2)	(6.0)	RW	A	明赤褐	30	
60	甕		(19.0)	(5.8)	WB	B	鈍橙	70	No.1
61	甕	17.1	29.4	5.0	RW'	B	鈍黄橙	70	
62	甕	18.0	30.9	7.6	RW	B	鈍橙	70	
63	甕	18.9	30.5	5.0	RWW'B	B	橙	90	No.2 ハケメ残る
64	甕	19.3	(26.5)		RW	A	鈍橙	60	No.3
65	甕	17.7	29.0	5.8	RWW'	A	橙	90	No.4 ハケメ残る
66	甕	19.0	31.1	5.9	RWB	A	橙	70	No.5 ハケメ残る

第27号住居跡

く-4 グリッドに位置する。規模は長軸長3.49m、短軸長3.02m、深さ0.24mで、主軸方向はN-41°-Eである。土層断面に表れたように壁際の各所は液状化現象の影響を受けて大きく乱されていた。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土2・3層中にはFAブロックが含まれ、その上の1層は炭化物層であった。

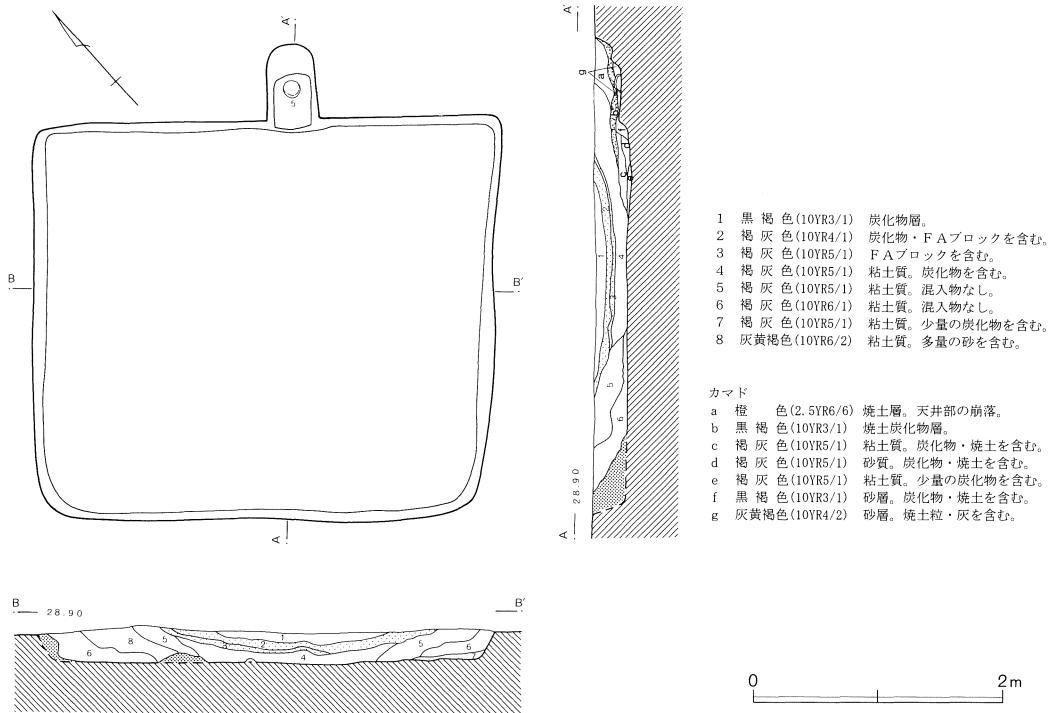
カマドは北東壁に造られていたが、他の住居跡とは違って幅30cm、奥行き60cmの燃焼部を壁外に掘り込み、袖をもたない特殊な構造である。燃焼部の主軸上には転用支脚として壺が伏せられた状態で存在した。本来的にはさらに煙道が外方に伸びていたものと思われる。

出土遺物は少量であり、壺を中心とする。1の壺は体部の内面上半に連続した弧状の痕跡が残る。これは工具を右から左に小さく動かす器面調整動作を重複させながら行なった結果である。5の壺

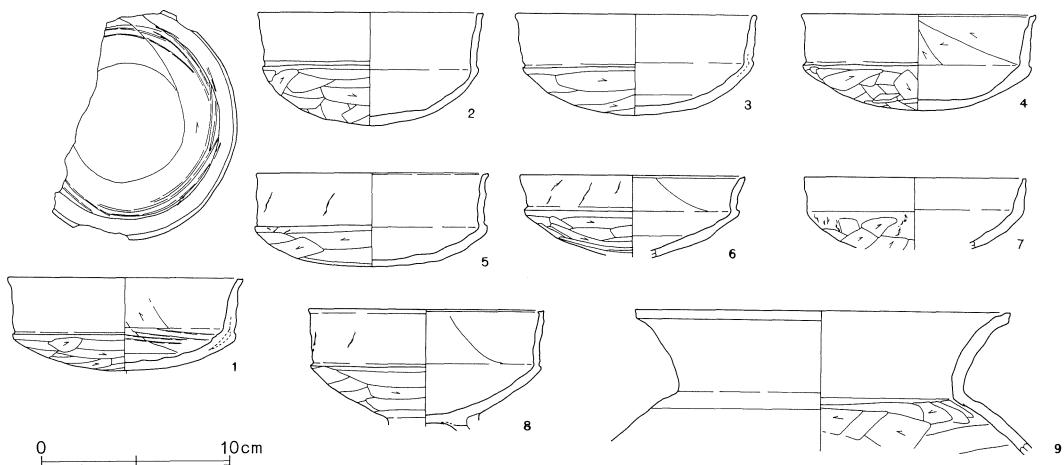
第27号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	4.9		RW	B	橙	60	内面に調整工具跡残る
2	壺	12.0	5.9		RWB	A	橙	60	
3	壺	12.8	5.3		RW	B	橙	60	
4	壺	12.4	5.0		W	A	鈍橙	80	
5	壺	12.3	4.9		RW	B	明赤褐	100	
6	壺	(12.0)	(4.3)		WW'	A	橙	40	
7	壺	(11.8)	(3.8)		RW	B	橙	25	
8	高壺	12.5	6.2		RW	A	鈍橙	100	
9	壺	(19.9)	(7.4)		W	B	橙	40	転用器台の可能性あり

はカマド支脚に転用されたものである。8の高壺は壺部のみの完形品であるが脚接合部はきれいに剥離しており、壺として転用されていたと見られる。9の壺は残存率が低いが口縁部に磨滅部分があり、転用器台の可能性も考えられる。6・7の壺は他の壺の形態と比べ後出的なものであり、混入品と考えられる。このほか滑石製の勾玉が1点出土した。



第91図 第27号住居跡



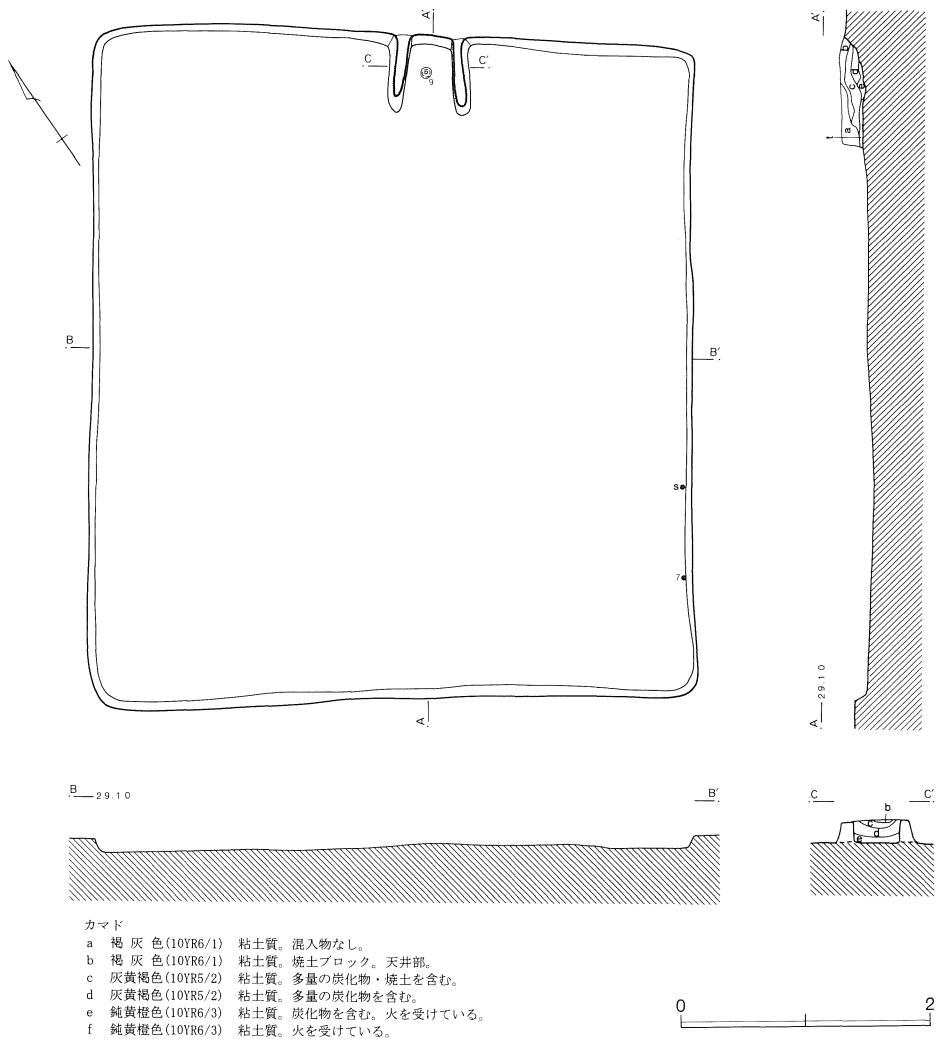
第92図 第27号住居跡 出土遺物

## 第28号住居跡

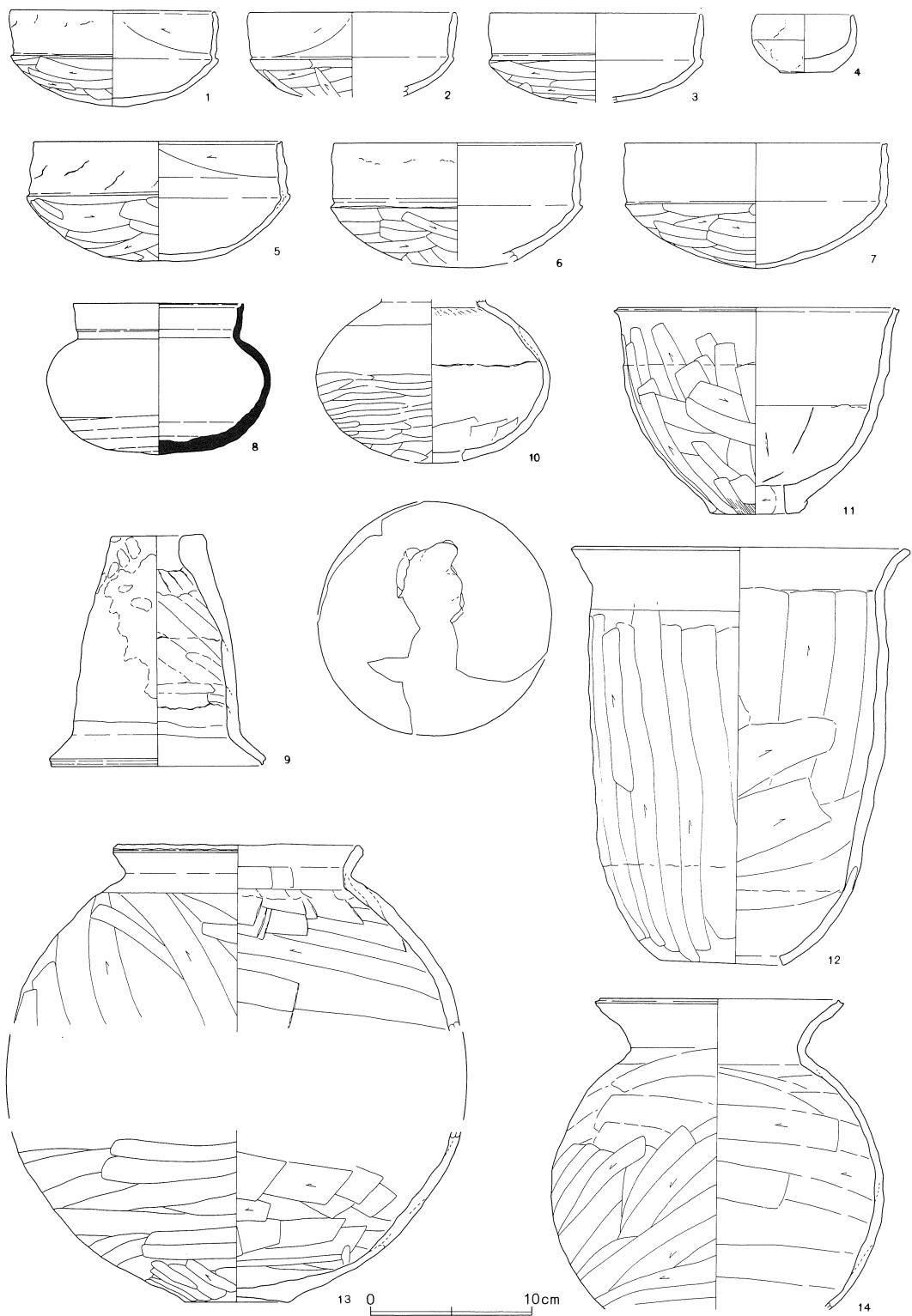
く－4 グリッドに位置する。規模は長軸長5.05m、短軸長4.70m、深さ0.10mで、主軸方向はN-31°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、液状化現象によって攪乱されていたため、7・16の土器等は当初想定した床面下の砂層中に埋没していた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは55cmで、燃焼部の幅は37cmである。支脚位置は中軸線上であり、土製支脚が使用されていた。

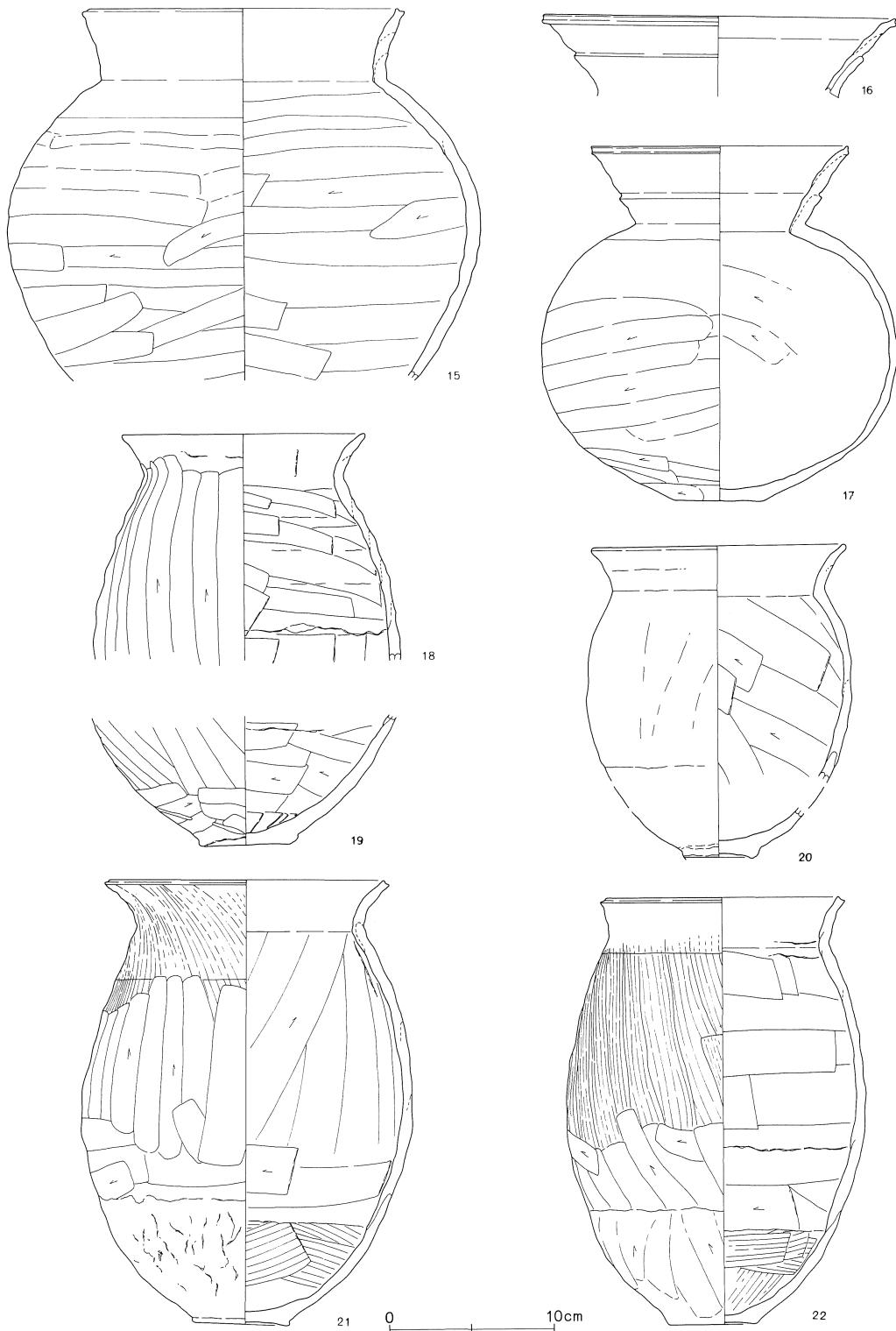
出土遺物のうち、7の大型壺は火に掛けた痕跡がある。8の須恵器短頸壺は33号住居跡出土の破片と接合した。9の土製支脚は外面上部に粘土が付着する。10の壺は底部を穿孔されている。13の壺は本来有段口縁のものが中段で水平に打ち欠かれている。21・22の甕はハケメが顕著に残るが21は胴部下半が未調整で小亀裂が目立つ。27の甕は大型である。



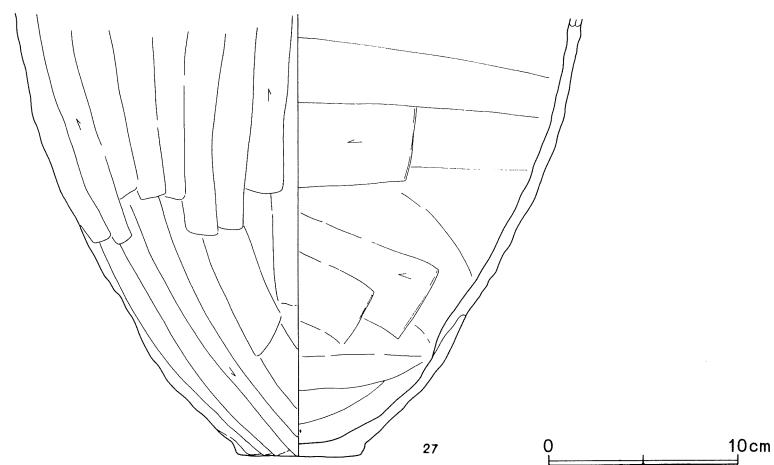
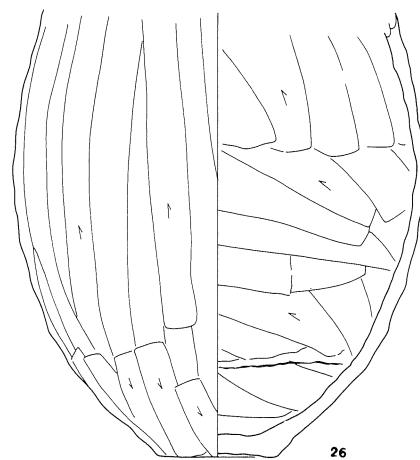
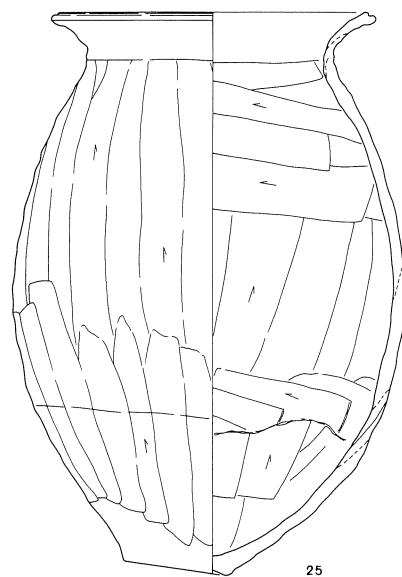
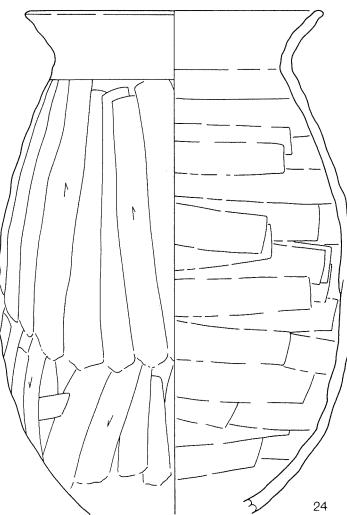
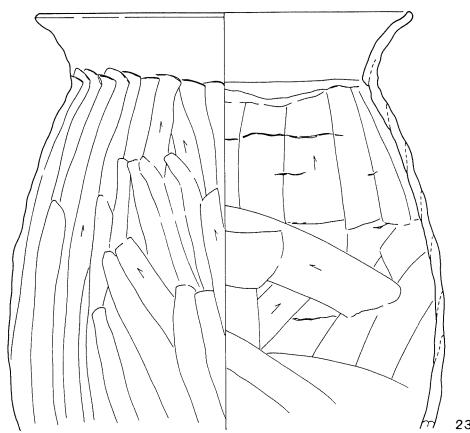
第93図 第28号住居跡



第94図 第28号住居跡 出土遺物（1）



第95図 第28号住居跡 出土遺物（2）



第96図 第28号住居跡 出土遺物（3）

第28号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.7	5.8		RWB	A	橙	80	
2	壺	12.9	(5.2)		RWB	A	橙	60	
3	壺	(13.2)	(5.5)		W	A	鈍橙	40	内面煤付着
4	ミニチュア	6.0	3.4		RWB	A	黄橙	40	
5	大型壺	15.3	7.3		RW	A	橙	70	
6	大型壺	15.3	7.2		RW	A	鈍橙	60	
7	大型壺	16.1	7.7		BU	B	橙	80	火に掛けた痕跡有り
8	短頸壺	10.5	9.3		WB	A	灰	50	須恵器 SJ33 の破片接合
9	支脚		14.2	13.2	RB	A	橙	100	No.1 外面に粘土付着
10	埴		(10.0)		RB	A	鈍橙	50	穿孔土器
11	甌	17.5	12.6	3.4	W	A	明赤褐	90	
12	甌	20.9	25.4	7.5	RWB	A	橙	70	
13	壺		(28.2)	(6.5)	RWB	A	橙	30	口縁部の割れ口を整えて使用
14	壺	(15.1)	(19.0)		R	A	橙	40	
15	壺	(19.4)	(22.4)		RW	A	橙	30	
16	壺	(21.3)	(4.8)		RW	A	橙	30	
17	壺	(15.5)	21.2	(5.3)	RW	A	鈍橙	40	
18	甌	14.7	(13.6)		RWW'	A	淡黄	90	
19	甌		(7.7)	5.5	RB	A	鈍黄橙	70	
20	甌	13.2	19.1	4.0	RW	C	鈍橙	60	
21	甌	17.2	26.5	5.9	RB	A	橙	70	内外面にハケメ残る
22	甌	14.8	25.5	5.3	RWB	A	明赤褐	80	内外面にハケメ残る
23	甌	(19.9)	(22.0)		RB	A	橙	40	
24	甌	15.8	(26.5)		RWW'	A	橙	70	
25	甌	17.1	29.2	5.4	RWB	A	鈍黄橙	70	
26	甌		(23.3)	(6.2)	RW	A	浅黄橙	30	
27	甌		(23.4)	(6.6)	W	A	橙	25	

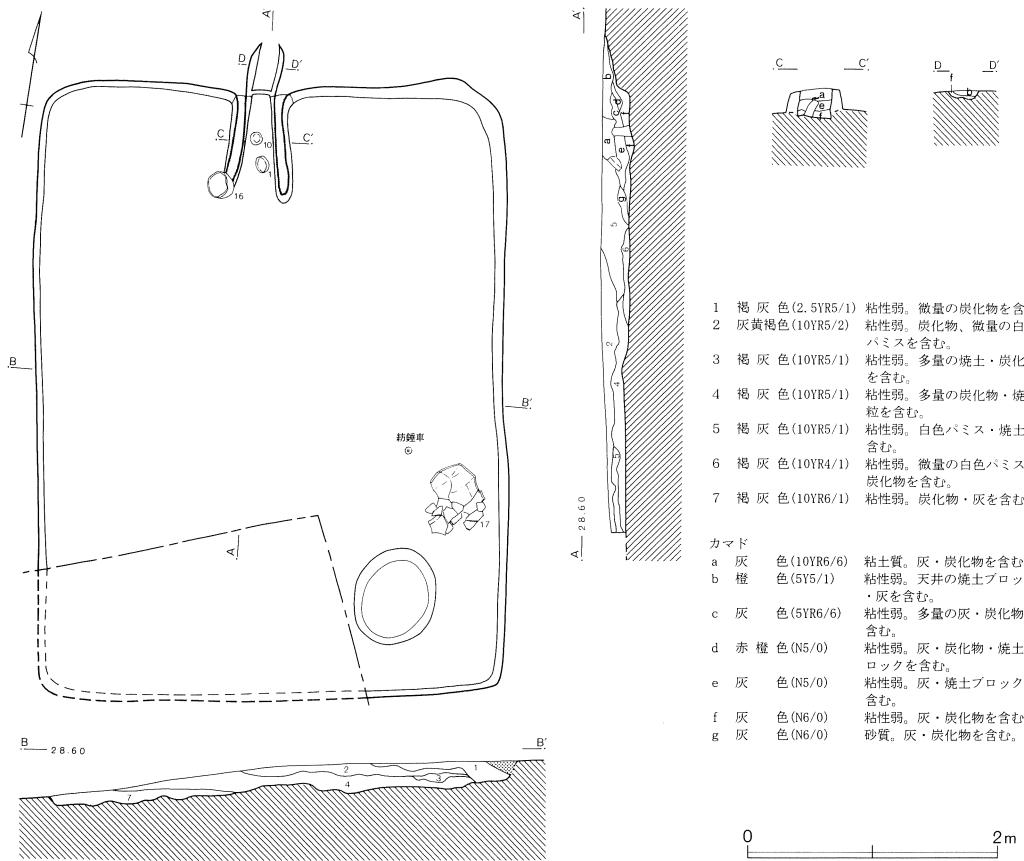
## 第29号住居跡

く-5グリッドに位置する。南西隅は試掘トレンチによって破壊されていた。規模は長軸長4.70m、短軸長3.60m、深さ0.24mで、主軸方向はN-9°-Wである。南東隅より、長径78cm、深さ9cmの皿状ピットを検出した。壁溝・柱穴等は確認できなかった。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が用いられ、左袖の先端には甌が構築材として倒立状態で使用されていた。右袖の長さは85cm、燃焼部の幅は25cmである。煙道は幅24cmで、傾斜をつけて掘り抜かれていた。支脚位置は左寄りであり、土製支脚が使用されていた。

遺物はカマドから出土した1の壺、10の支脚、16の甌のほか、ピット寄りからは17の壺と紡錘車が出土した。また、4層を中心とした覆土中からは、11・12の甌、13の壺、14・15の甌が出土した。

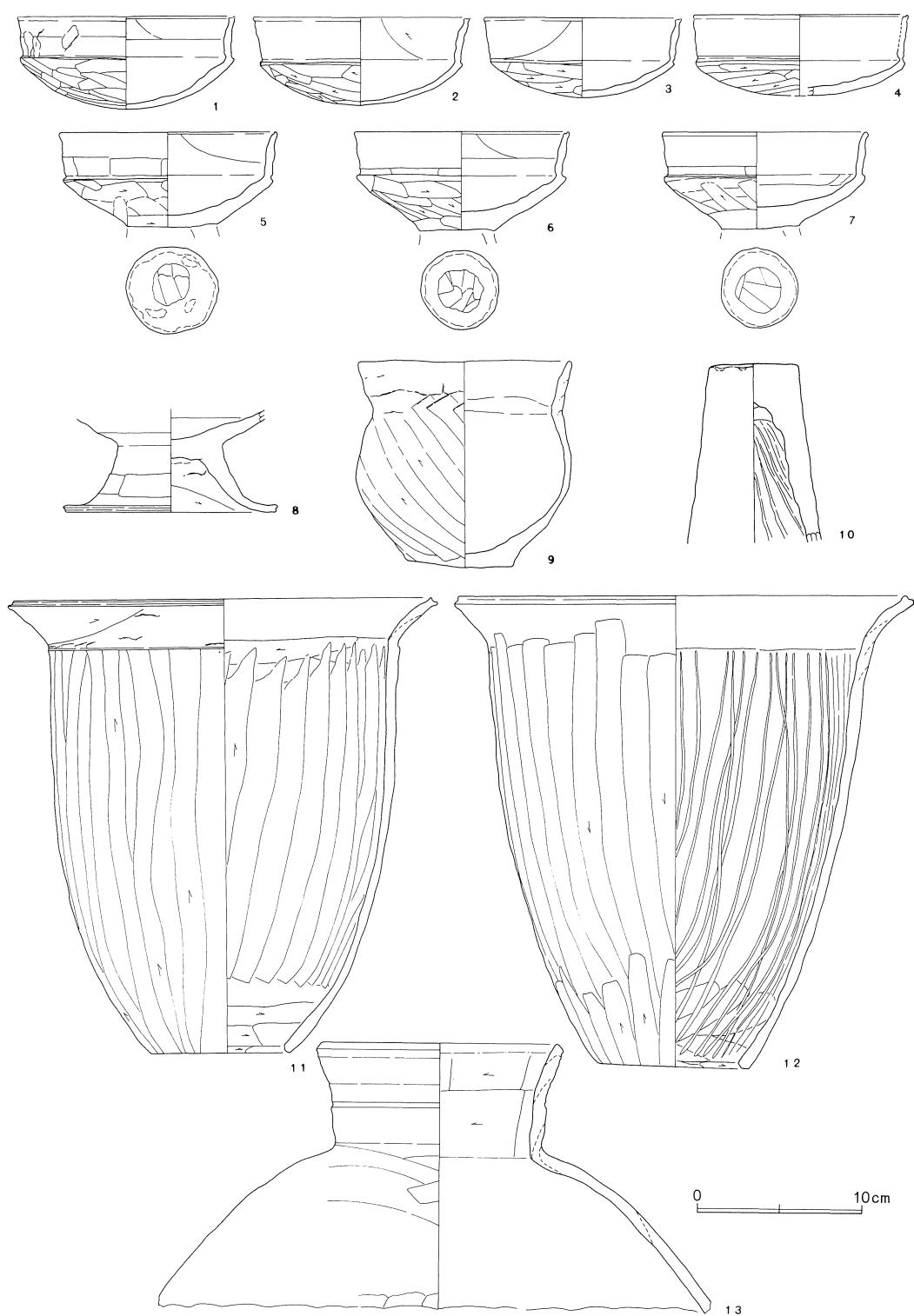
5・6・7の高壺3点はいずれも脚部がきれいに剥離しているが剥離面は磨滅しており、転用壺として使用されたと見られる。13の壺は口縁部内面が磨滅するほか胴部も意図的に打ち欠かれた転用器台である。



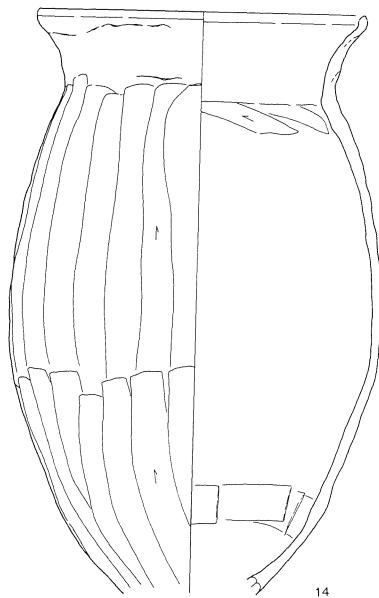
第97図 第29号住居跡

第29号住居跡出土土器観察表

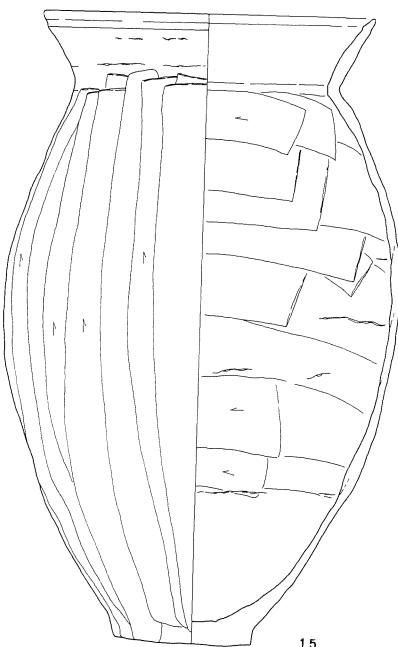
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.3	5.6		RW	A	鈍橙	100	No. 4
2	壺	13.2	5.3		RWB	B	鈍黄橙	70	
3	壺	12.0	4.8		RWB	A	鈍橙	100	
4	壺	(13.1)	(4.9)		RW	A	明赤褐	40	
5	高 壺	13.2	(5.8)		RW	B	橙	70	転用壺
6	高 壺	13.1	(6.0)		RW'	A	橙	70	転用壺
7	高 壺	12.5	(6.0)		R	B	橙	70	転用壺
8	高 壺		(6.3)	12.8	RWB	A	鈍橙	80	カマド
9	小 型 甕	13.0	12.4	6.5	RWW'B	C	鈍橙	80	
10	支 脚		(10.8)		RW	C	鈍橙	80	No. 3
11	甕	26.1	27.5	8.5	RWW'B	A	明赤褐	80	
12	甕	28	28.5	9.2	RWB	A	橙	70	
13	壺	(15.0)	(16.1)		RW	B	鈍赤褐	30	転用器台
14	甕	17.5	(30.7)		RWB	B	鈍橙	80	
15	甕	17.6	33.2	7.2	RBU	A	鈍黄橙	70	
16	甕	18.9	(22.3)		RWB	B	橙	80	No. 5 カマド左袖先端に使用
17	壺		40.8	8.6	RW	C	淡黄	80	No. 1 口縁部割れ口全周磨滅



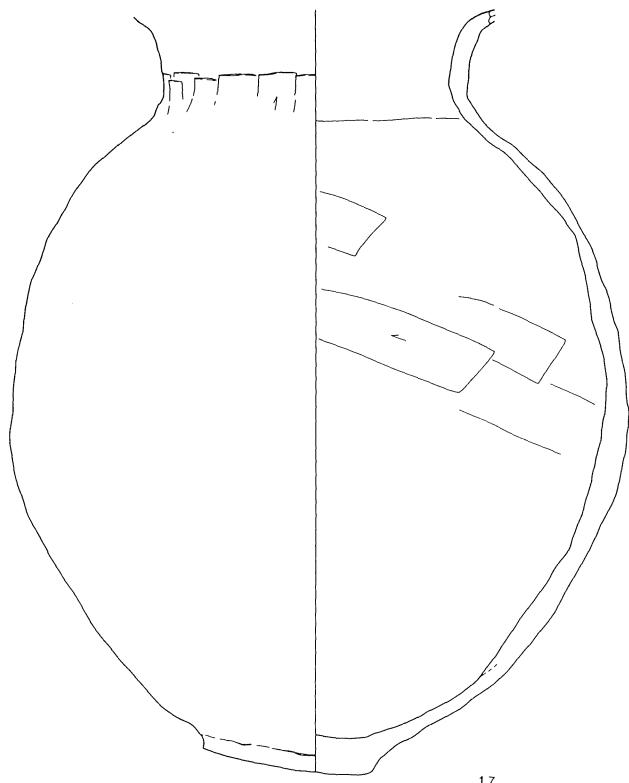
第98図 第29号住居跡 出土遺物（1）



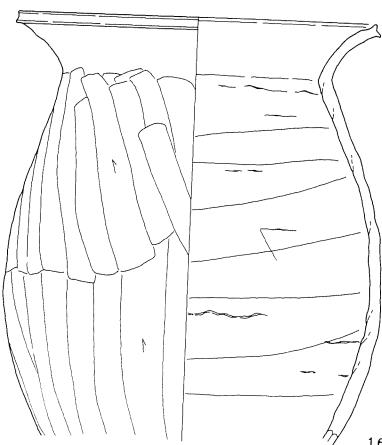
14



15



17



16



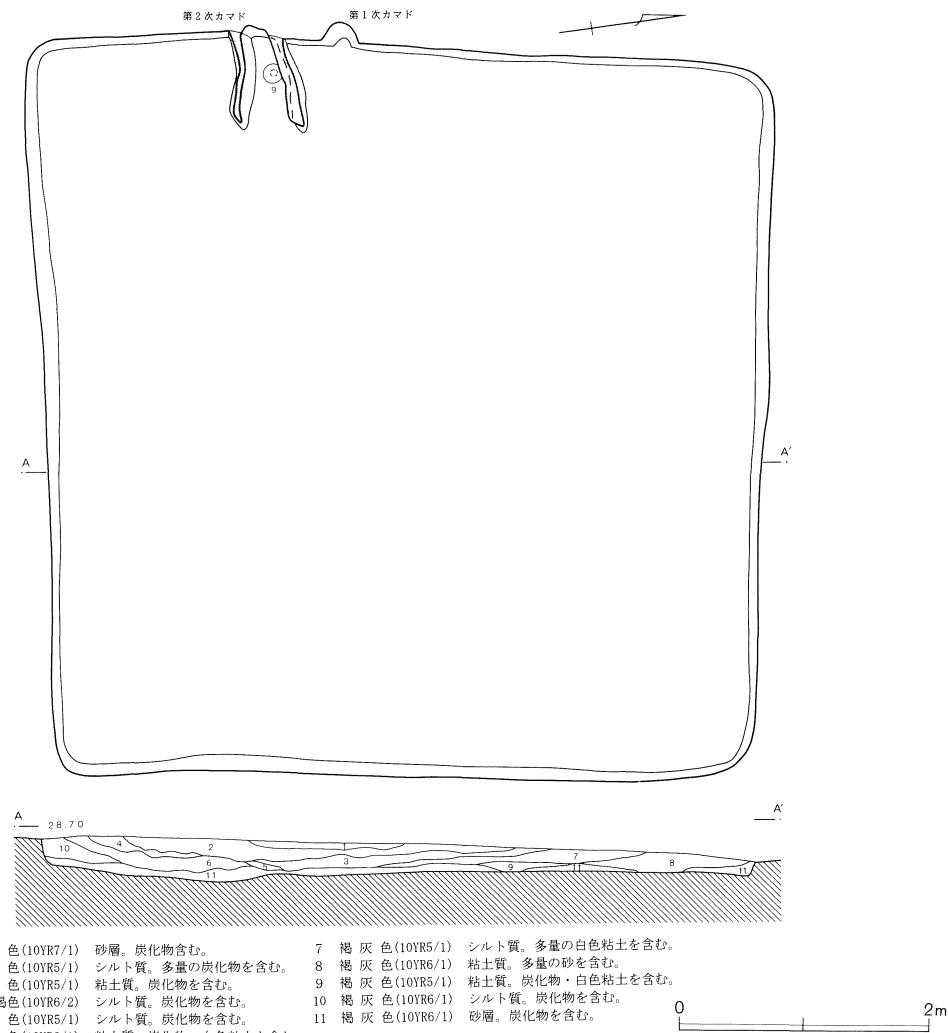
第99図 第29号住居跡 出土遺物 (2)

### 第30号住居跡

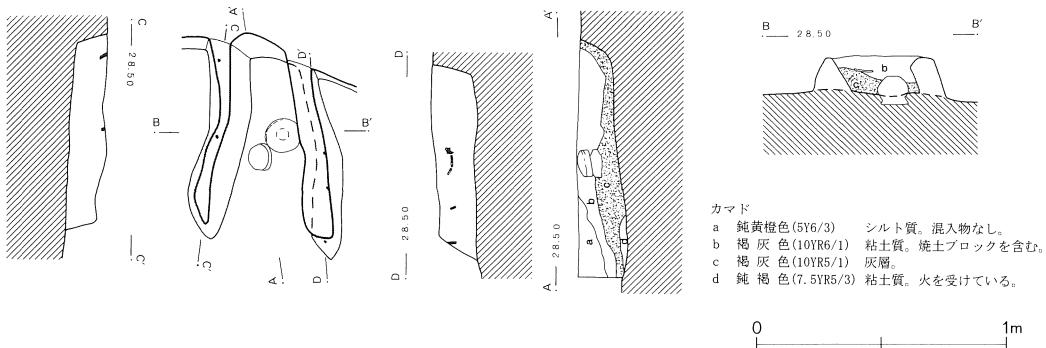
く－5 グリッドに位置する。規模は長軸長5.64m、短軸長5.58m、深さ0.23mで、主軸方向はN－82°－Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。

カマドは西壁南寄りに2度造られ、第1次カマドは、焼土化部分により燃焼部の一部がわずかに確認できただけだった。第2次カマドはその左に隣接して造られ。袖に灰白色粘土が使用され篠竹を用いた芯材も確認できた。床面の液状化現象のため袖が歪められ下端が北方向に流されたのに反して、壁状の左右両袖は南方向へ傾倒していた。右袖の長さは78cm、燃焼部の幅は28cmである。支脚位置は右寄りで、小型甕が倒立転用されていた。

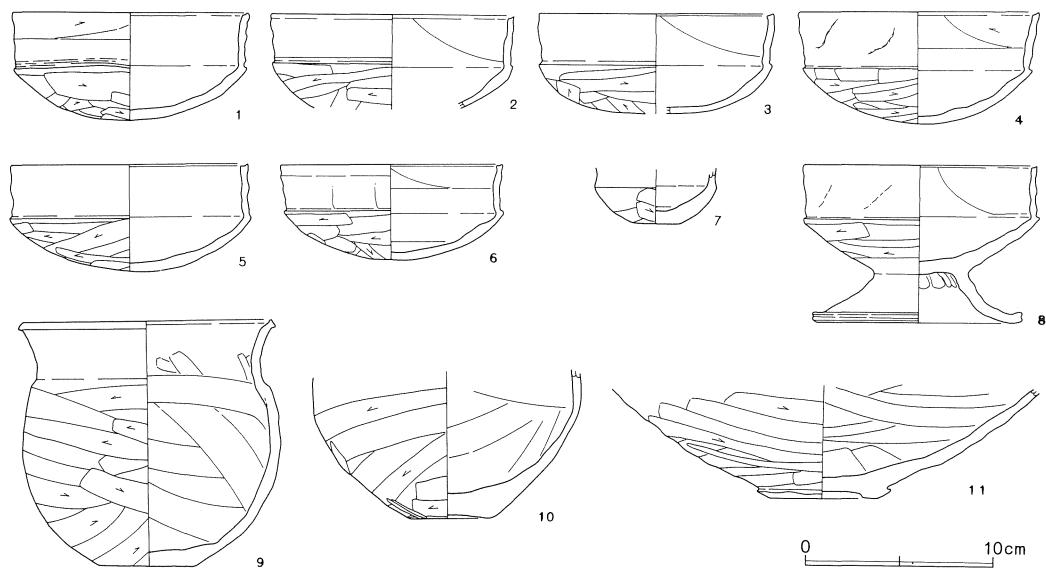
遺物は9の小型甕のほか、2・5の壺、8の高壺、10の小型甕がカマドから出土しているが、いずれも火を受けて器面が変質している。



第100図 第30号住居跡



第101図 第30号住居跡 カマド



第102図 第30号住居跡 出土遺物

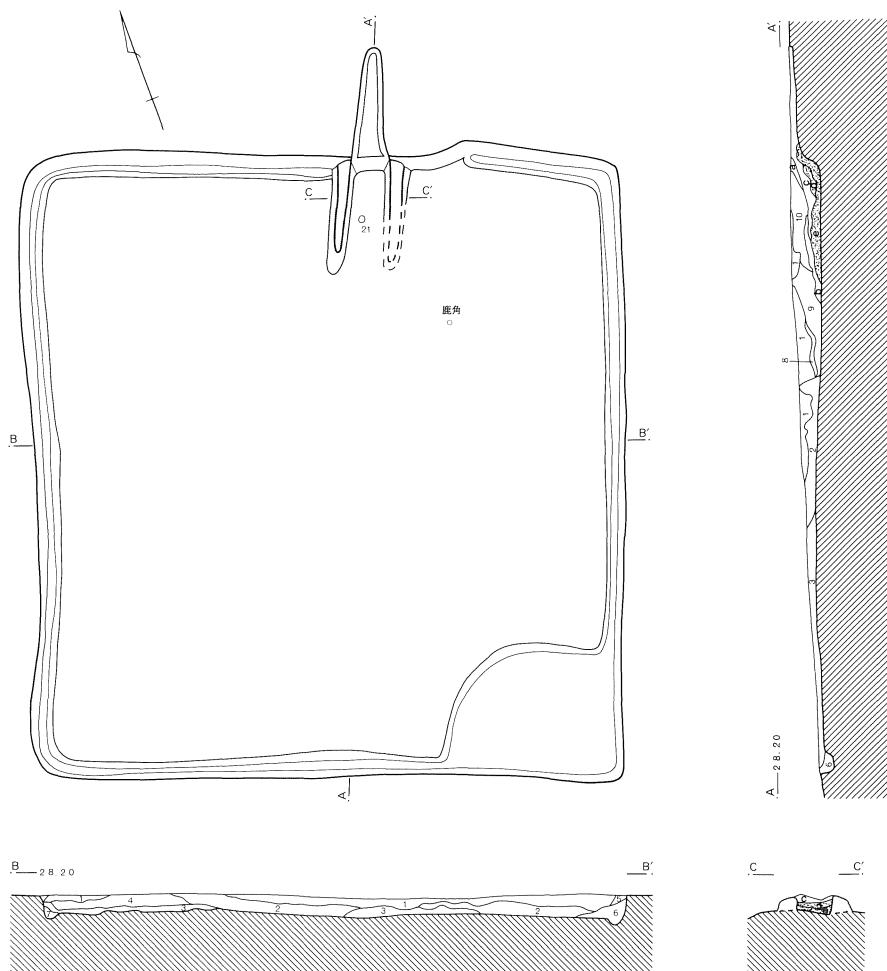
第30号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	5.6		R	B	明赤褐	90	
2	壺	12.9	(5.0)		RW	B	明赤褐	70	カマド
3	壺	12.4	(5.3)		RW	B	橙	50	
4	壺	12.7	5.8		RW	A	橙	90	
5	壺	12.6	5.6		RWB	B	明赤褐	80	カマド 火に掛けた痕跡有り
6	壺	11.8	5.0		RW	A	橙	90	
7	ミニチュア		(2.9)	2.5	RW	A	橙	20	
8	高壺	12.4	8.3	11.0	B	B	明赤褐	70	カマド
9	小型甕	13.6	12.8	5.0	B	A	鈍橙	100	No.1 転用支脚
10	小型甕		(7.7)	4.1	RWB	B	橙	70	カマド
11	壺		(6.0)	(5.7)	RWU	B	鈍黃橙	30	内面黒色

### 第31号住居跡

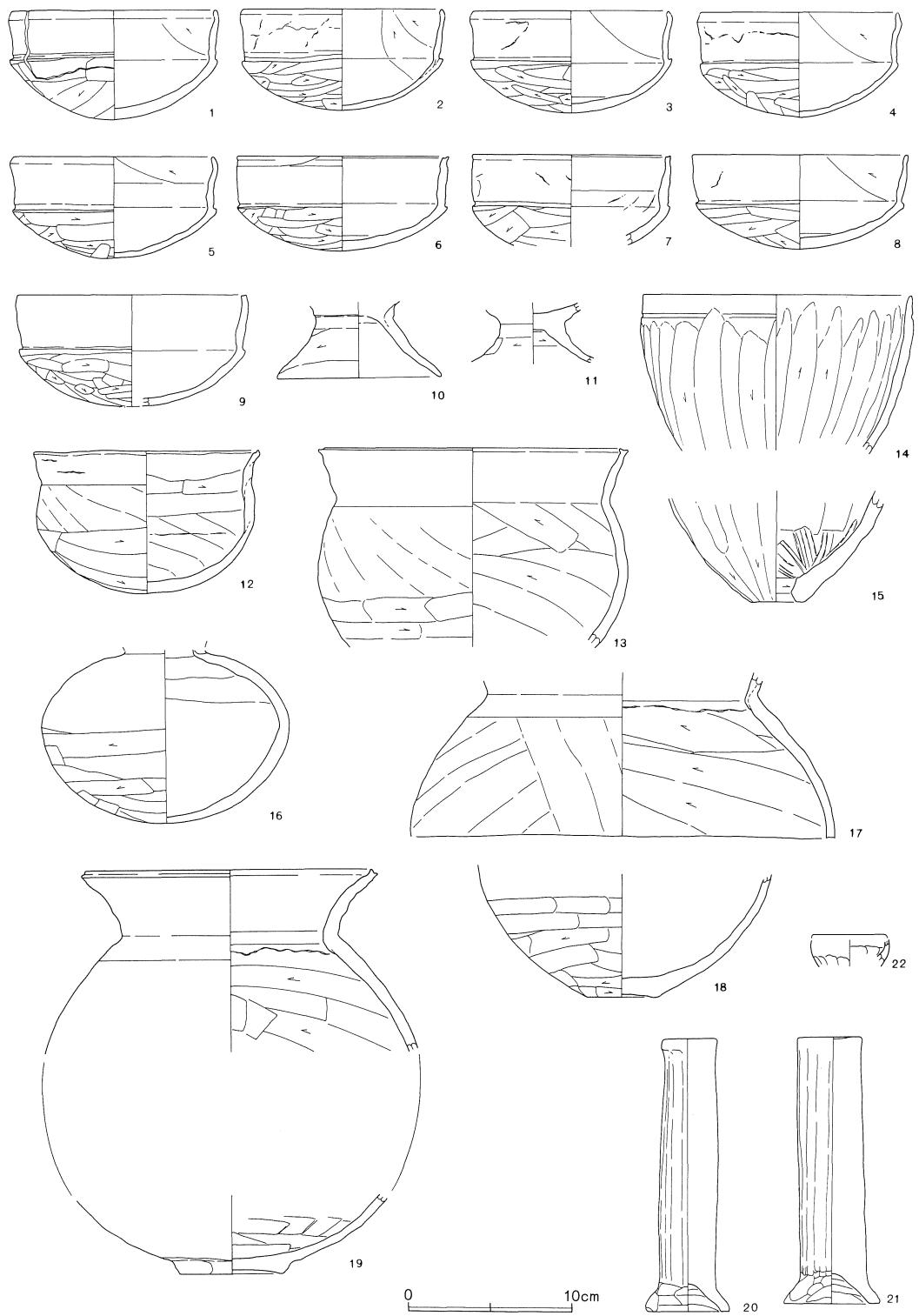
く－5 グリッドに位置する。規模は長軸長4.77m、短軸長4.60m、深さ0.15mである。主軸方向はN-22°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれていたが、壁溝幅18cm、深さ5cm程で全周し、これに連結するかたちで南東隅に長径102cm、深さ9cmの皿状ピットが存在した。柱穴は確認できなかった。

カマドは北東壁に造られて、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは83cmで、燃焼部の幅は30cmである。煙道は幅20cm、長さ87cm以上であり、水平に掘り抜かれていた。支脚位置は左

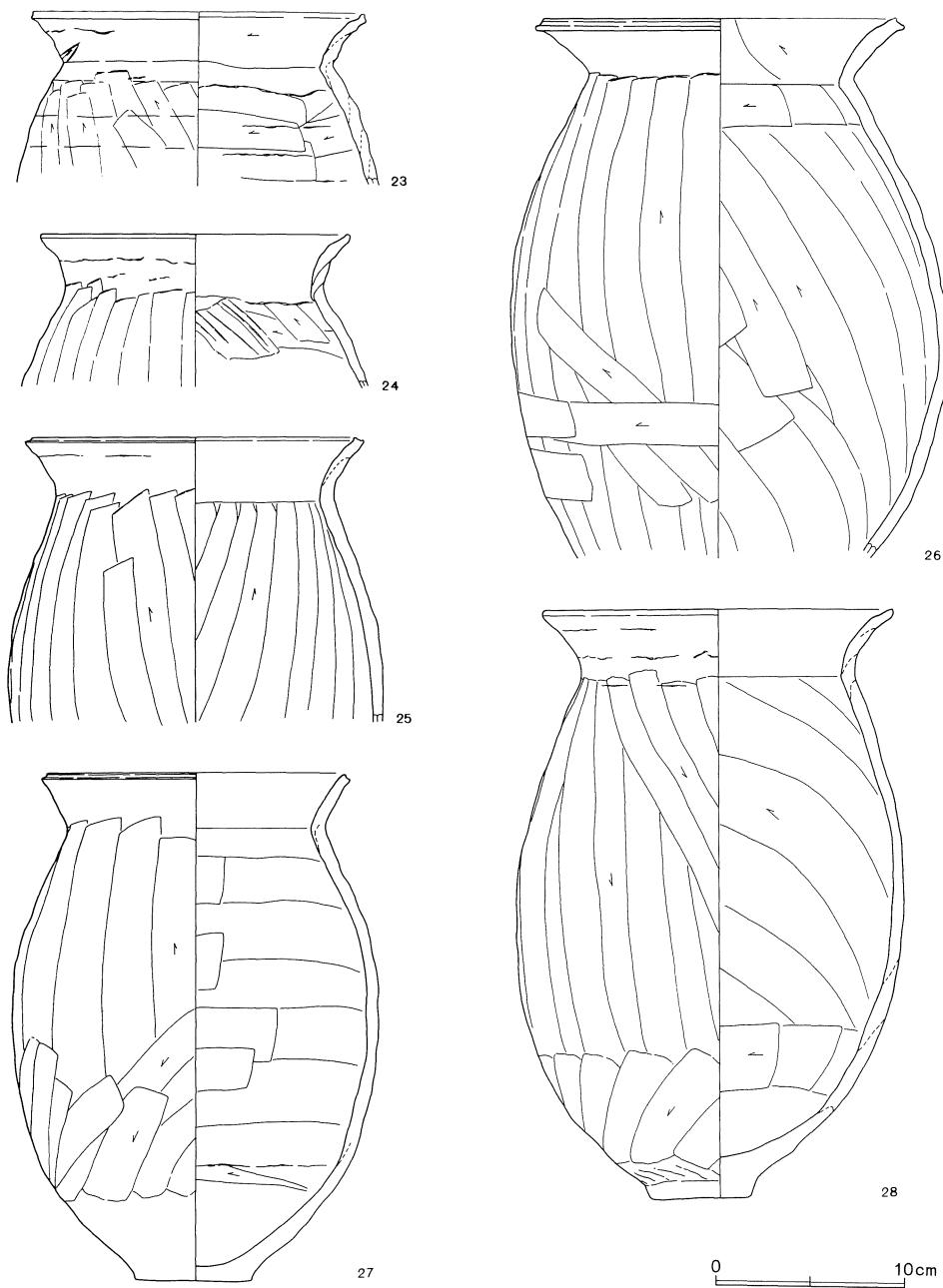


- |    |                                    |     |
|----|------------------------------------|-----|
| 1  | 褐色 灰色(10YR5/1) 砂質。微量の炭化物を含む。       | カマド |
| 2  | 褐色 灰色(10YR4/1) 粘性強。多量の炭化物を含む。      |     |
| 3  | 灰 褐色(10YR5/1) 砂質。灰褐色砂との混合層。        |     |
| 4  | 灰黄褐色(10YR5/2) 砂質。少量の炭化物を含む。        |     |
| 5  | 明黄褐色(10YR6/6) 焼土ブロック。              |     |
| 6  | 褐 灰色(10YR5/1) 粘性強。少量の炭化物を含む。       |     |
| 7  | 灰 褐色(7.5YR5/2) 砂層。                 |     |
| 8  | 黒 色(10YR2/1) 炭化物層。                 |     |
| 9  | 褐 灰色(10YR5/1) 粘性弱。灰褐色土との混合層。       |     |
| 10 | 褐 灰色(10YR6/1) 粘性弱。少量の炭化物を含む。       |     |
| a  | 褐 灰色(10YR4/1) 粘性弱。多量の炭化物・焼土粒を含む。   |     |
| b  | 褐 灰色(10YR5/1) 粘性弱。少量の炭化物を含む。       |     |
| c  | 橙 色(2.5YR7/6) 粘性弱。焼土ブロック・灰・炭化物を含む。 |     |
| d  | 黒 色(10YR2/1) 灰炭化物層。                |     |
| e  | 黒 色(10YR2/1) 灰層。                   |     |

第103図 第31号住居跡



第104図 第31号住居跡 出土遺物（1）



第105図 第31号住居跡 出土遺物（2）

寄りで、土製支脚が使用されていた。

出土遺物のうち、1の壺は完存するが、亀裂が入っている。焼成時に生じたものを、そのまま使用したものだろうか。12と13の鉢は火に掛けた痕跡が見られ、外面に煤が付着している。土製支脚は2点出土したが、21はカマド内に正立していた。このほかにカマド寄りの覆土中からは鹿角片が出土した。

第31号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	6.6		RW	A	橙	100	
2	壺	12.1	6.1		RWB	A	橙	80	
3	壺	12.0	6.2		RB	B	鈍黃橙	70	
4	壺	12.1	6.3		RWB	A	橙	100	
5	壺	(12.2)	6.1		R	B	鈍黃橙	40	
6	壺	12.9	5.7		RWB	A	明赤褐	70	
7	壺	(12.1)	(5.6)		RWB	A	橙	25	
8	壺	13.1	5.7		W	A	橙	50	
9	壺	(13.9)	(6.7)		RW	B	鈍赤褐	40	
10	高壺		(4.6)		RW	A	橙	90	
11	高壺		(3.7)		WB	B	鈍橙	20	
12	鉢	13.8	8.6		W	B	鈍赤褐	100	火に掛けた痕跡有り
13	鉢	(19.8)	(11.7)		BWW'	A	明赤褐	25	外面煤付着
14	甌	(20.4)	(9.6)		WB	A	橙	10	
15	甌		(6.7)	(3.2)	R	A	橙	40	
16	埴		(10.4)		RWB	A	橙	70	
17	壺		(10.0)		RWW'	A	鈍赤褐	30	転用器台
18	壺		(7.4)	(4.3)	R	A	橙	25	
19	壺	(17.9)	(24.4)	(6.3)	W	A	橙	30	
20	支脚		16.4	(4.9)	RW	A	鈍黃橙	100	
21	支脚		15.9	5.9	RWB	B	明赤褐	100	No 1
22	手捏土器		(1.6)		R	A	橙	20	
23	甕	(17.6)	(9.2)		R	B	明赤褐	25	
24	甕	16.4	(8.0)		RWB	B	明赤褐	50	
25	甕	(17.9)	(15.0)		RW	A	鈍橙	30	
26	甕	19.6	(28.5)		RWW'B	B	橙	50	
27	甕	16.3	26.8	6.1	RWB	A	橙	70	
28	甕	18.6	31.0	5.0	RW'B	A	鈍橙	60	

## 第32号住居跡

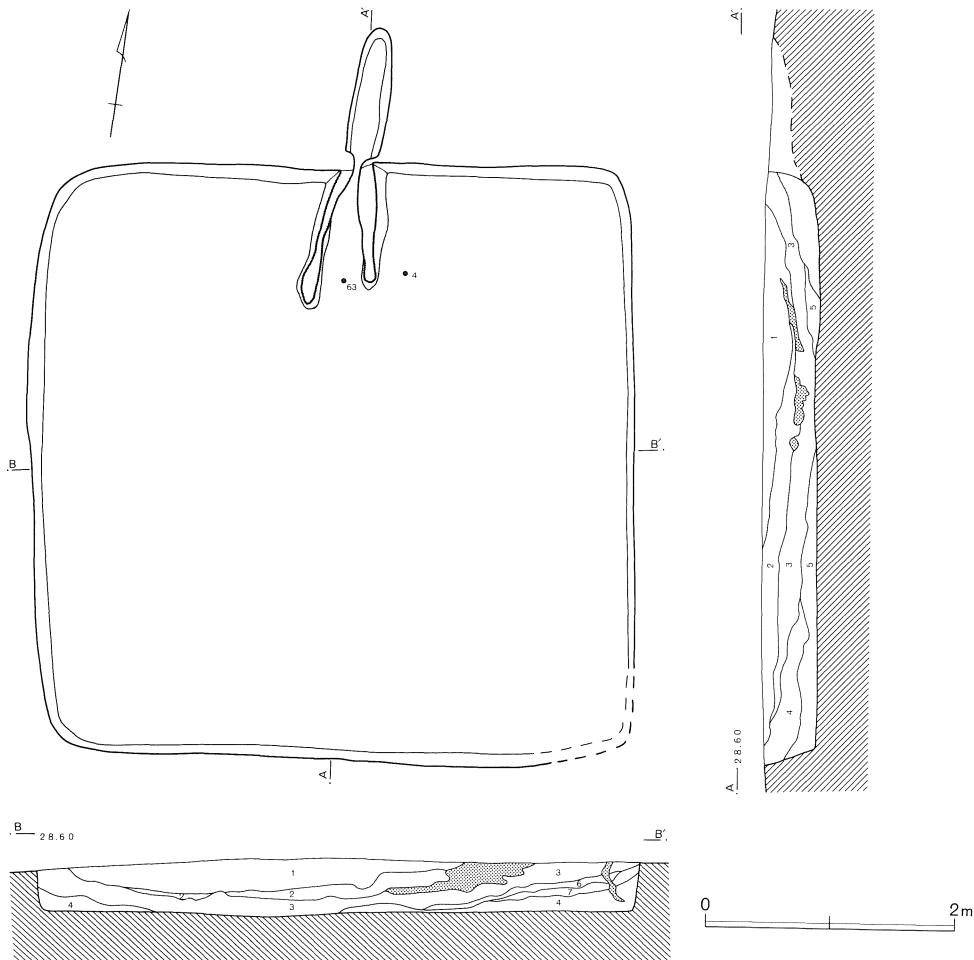
く－5 グリッドに位置する。規模は長軸長4.67m、短軸長4.50m、深さ0.45mである。主軸方向はN－6°－Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北壁に造られて、袖には灰白色粘土が使用され、篠竹を使った芯材も確認できた。左袖の長さは100cmで、燃焼部の幅は35cmである。煙道は幅27cm、長さ120cmで、傾斜をつけて掘り抜かれていた。

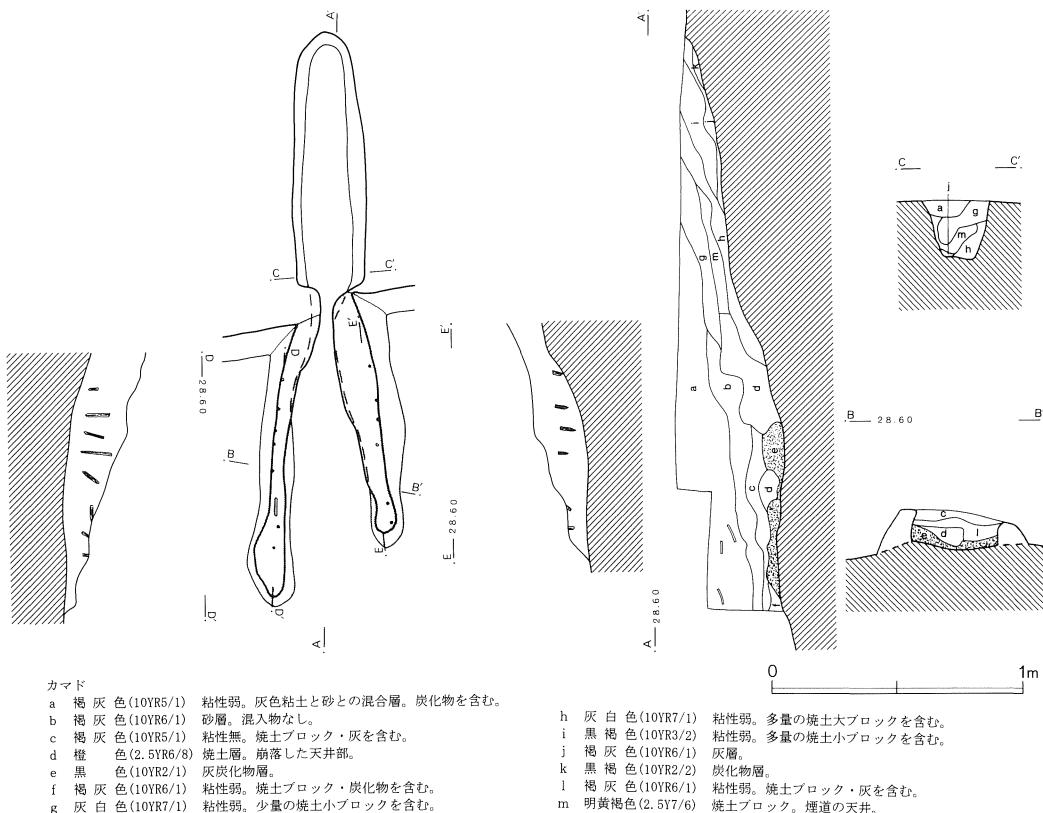
遺物は63の高壺脚部と4のミニチュア甌以外は、すべて2層を中心とする覆土中から多量に出土した。土器の中には埋没途中に火を受けた痕跡があるものもあり、炭化物・灰を主体とする2層と考えあわせると、窪地状になった廃絶住居跡に土器を投棄し、火を燃やしたと見ることができる。器種の上では、壺の比率が大きく、さらに、いくつかのタイプに分けることができる。10～21は口唇部に面もしくは凹線をもつ。25～29は口辺部が比較的短く、口唇部が丸くわずかに内側に肥厚する。30～35は口辺部が長く直立ぎみで口唇部がわずかに内湾する。36・37は稜を持たない楕形である。

るが基本的な技法は有稜壺と同様である。38~42は明瞭な稜を持たず直立した口辺部が中段から外反する。43・44も稜を持たずヨコナデされた口辺部は大きく内湾する。壺は以上のように大きく分けられるが、このほか45では、口辺部ヨコナデ後の亀裂を指頭でナデ消した痕跡が認められる。73・74・75は壺の口縁部から胴部上半を転用した器台である。いずれも口縁部内面の磨滅帯はないが、胴部の割れ口は安定して据えられるように打ち欠かれている。77の壺は胎土が粗く、火に掛けた痕跡も認められる。85の甕には片岩粒が顕著に含まれ、小山川上流域での製品と考えられる。8は擦切痕をもつ壺片である。

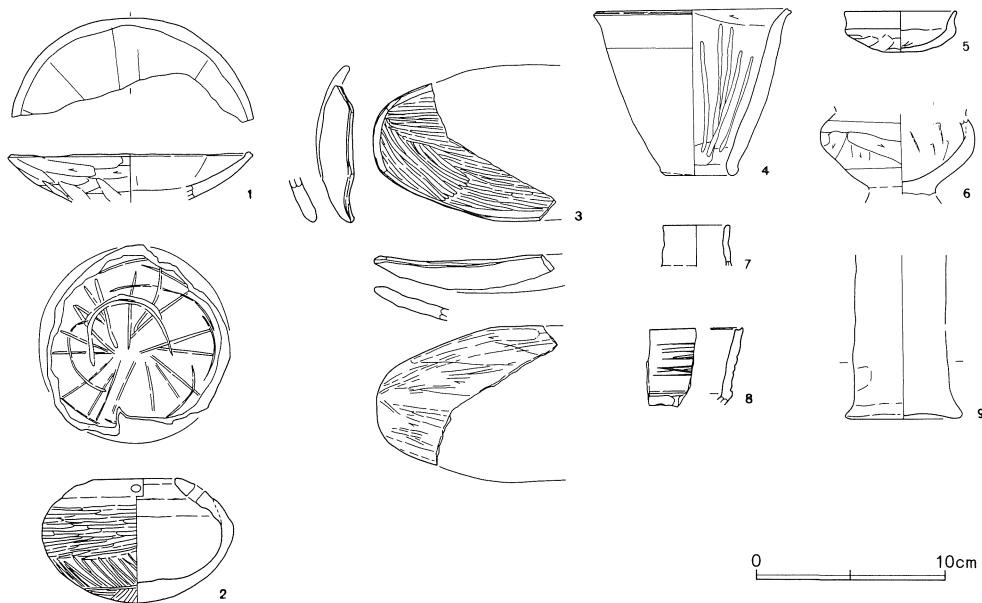
このほか特殊な土器、ミニチュア製品、土製品などの集中が特筆される。46の壺と67の壺は焼成後に穿孔されている。1・2・66の土器は線刻文や暗文をもつ。4~7はミニチュア製品だが、4の甕は実用サイズのものと比べても遜色のない精緻なつくりである。3は橢円形の皿状製品であるが表裏面のみならず、端部にもミガキが施されている。このほか覆土中から土玉11点、滑石製品1点、多数の扁平土製品、獸骨片が出土した。



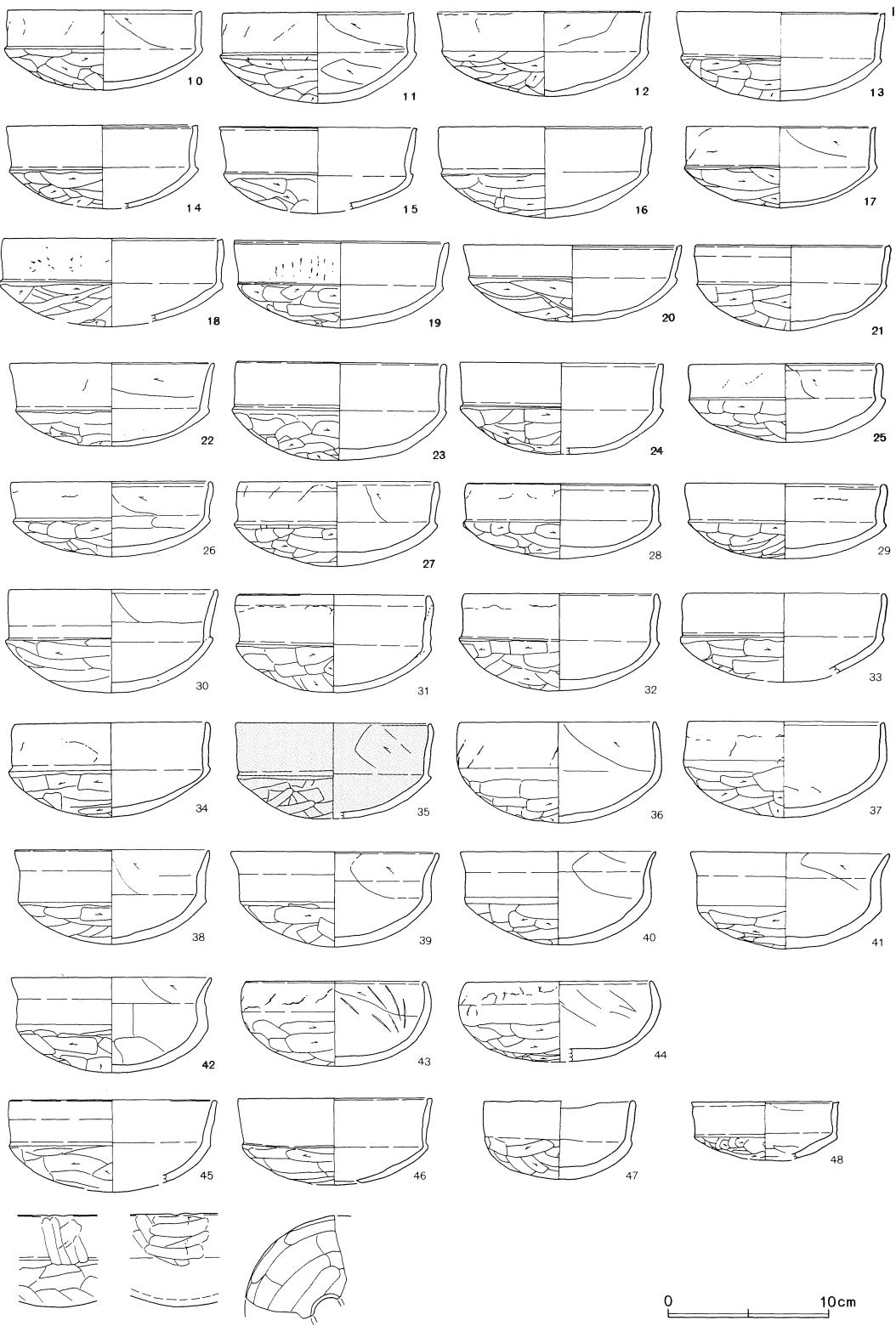
第106図 第32号住居跡



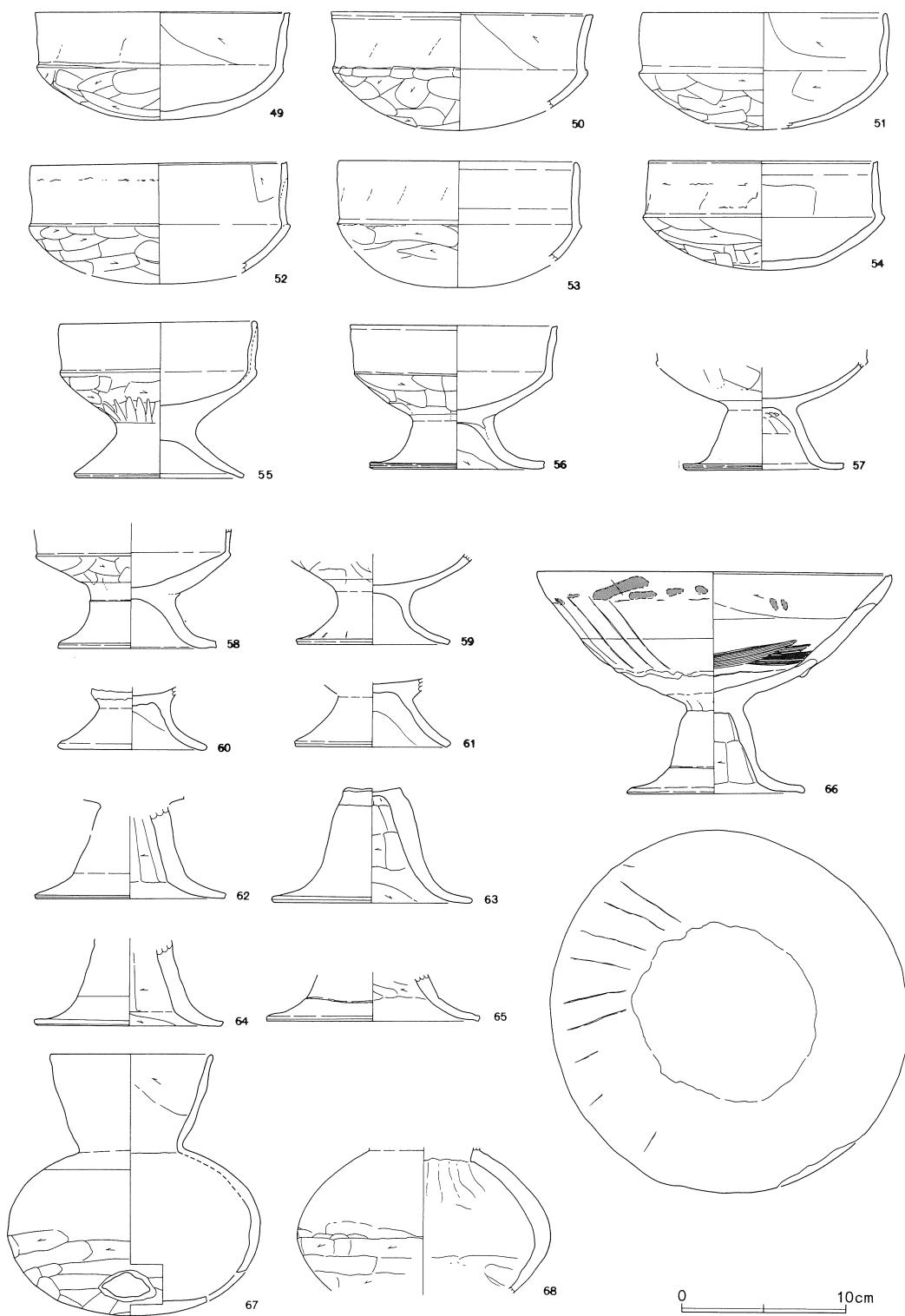
第107図 第32号住居跡 カマド



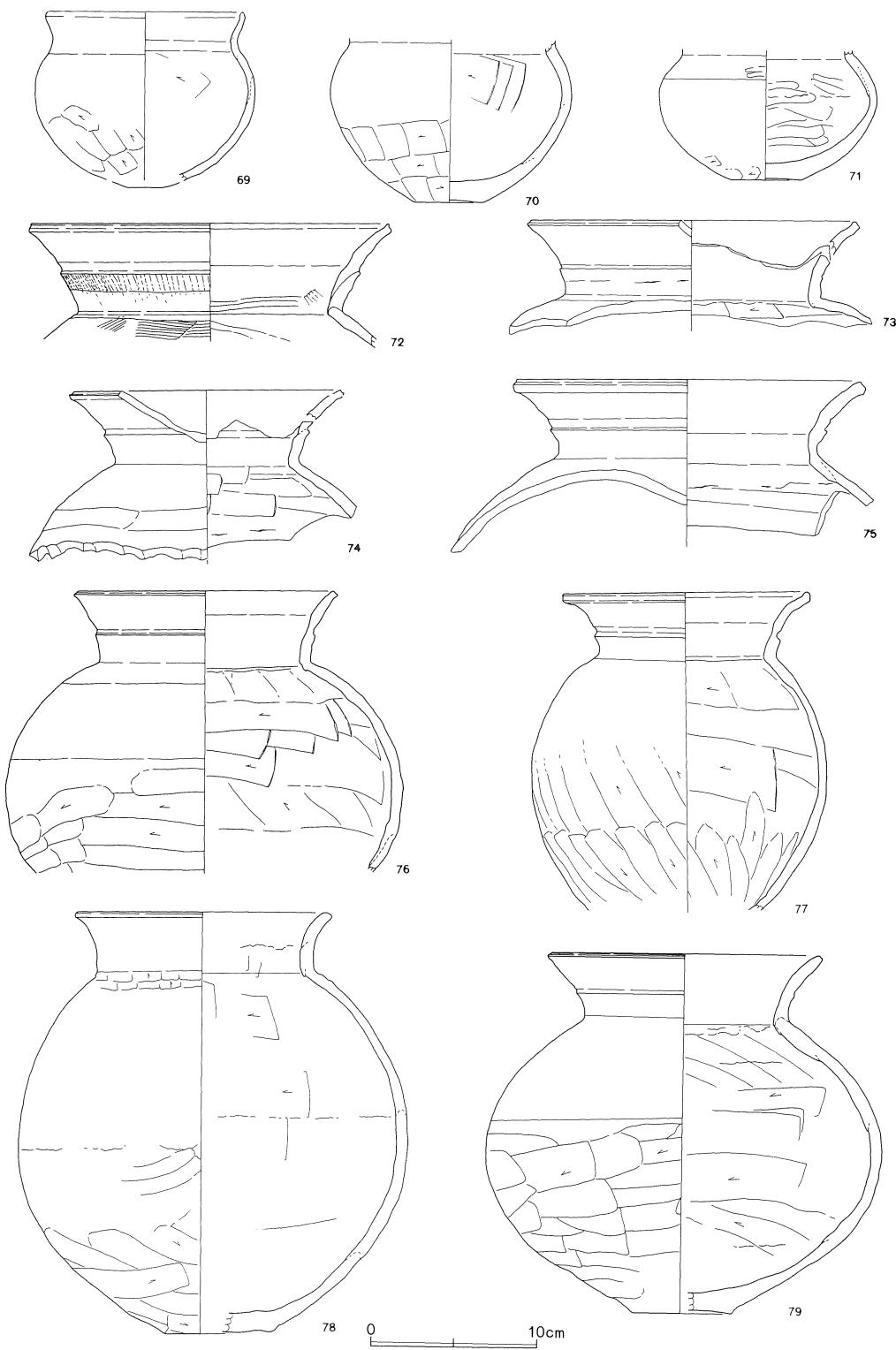
第108図 第32号住居跡 出土遺物 (1)



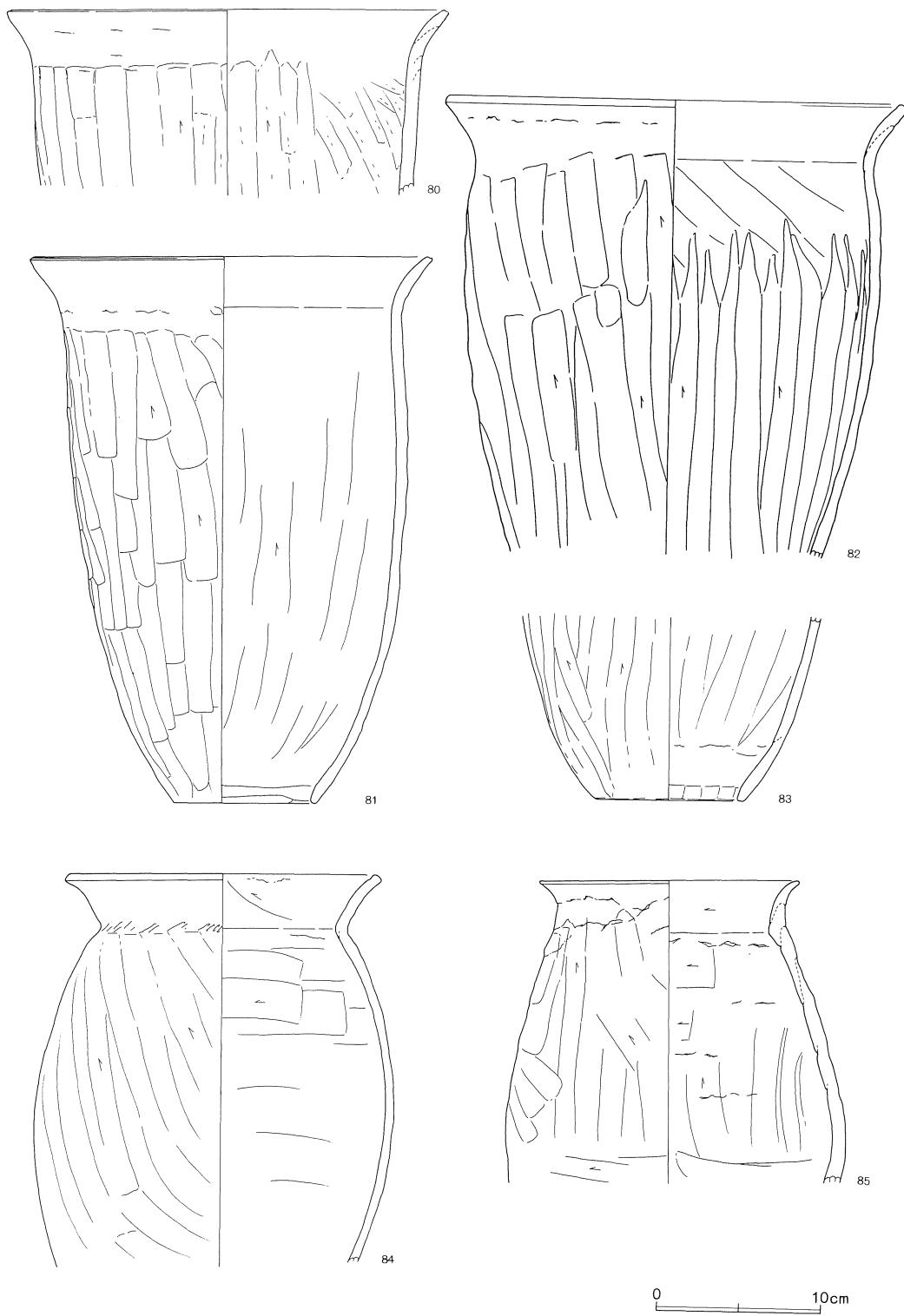
第109図 第32号住居跡 出土遺物 (2)



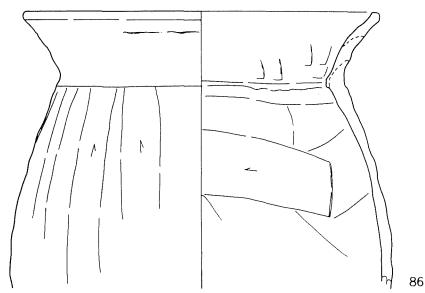
第110図 第32号住居跡 出土遺物（3）



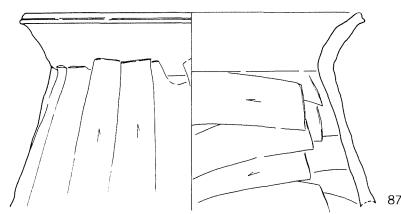
第111図 第32号住居跡 出土遺物 (4)



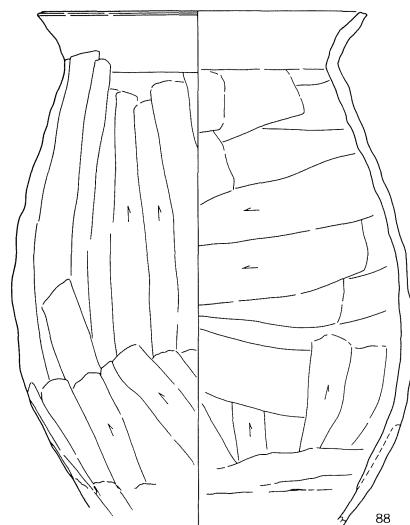
第112図 第32号住居跡 出土遺物（5）



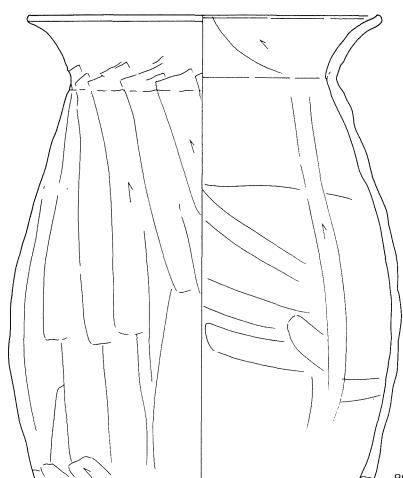
86



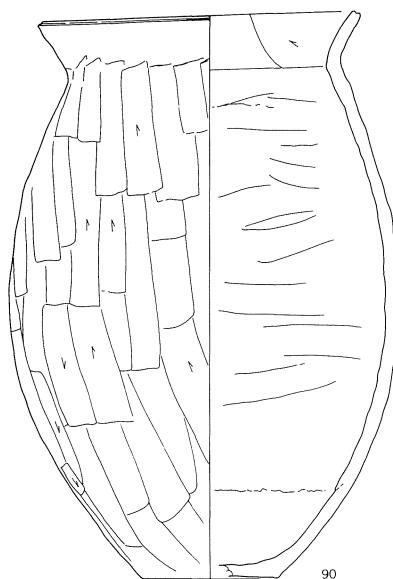
87



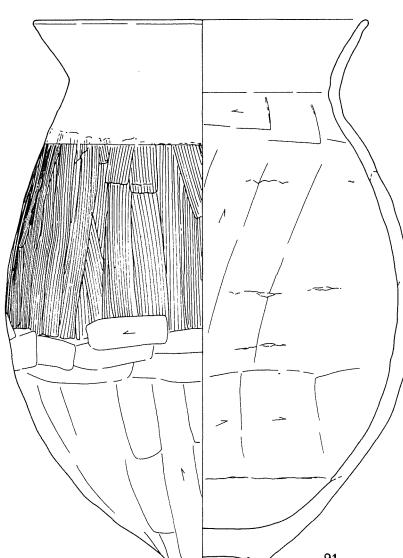
88



89



90



91

0 10cm

第113図 第32号住居跡 出土遺物（6）

第32号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高 坏	(13.0)	(2.6)		RB	A	橙	30	転用皿 内面に放射状線刻文
2	無 頸 壺		(3.8)		RWB	A	明赤褐	80	
3	土 製 品				RW	A	橙	破片	全面へラミガキの丁寧な作り
4	ミニチュア	10.5	8.6	3.8	RWB	A	橙	100	No.1
5	ミニチュア	(5.9)	2.1		RB	A	鈍橙	20	
6	ミニチュア		(4.1)		RWB	B	橙	100	覆土
7	ミニチュア	(3.6)	(2.1)		R	B	橙	20	
8	坏				RW	B	鈍橙	破片	擦切痕破片
9	支 脚		(8.6)	6.2	RWB	A	橙	60	
10	坏	12.1	4.9		RWW'B	A	鈍橙	100	覆土 口辺部内外面煤付着
11	坏	11.9	5.6		RWB	B	淡赤橙	100	覆土 口辺部内外面煤付着
12	坏	13.3	5.2		RWB	A	橙	95	覆土
13	坏	13.0	5.5		RWB	A	橙	90	覆土
14	坏	11.9	(5.1)		RWB	A	鈍橙	50	覆土
15	坏	(12.3)	(5.3)		RWB	A	橙	30	覆土
16	坏	13.2	5.6		RWB	B	橙	60	
17	坏	(11.8)	5.0		RWB	B	橙	40	
18	坏	(13.6)	(5.4)		RWB	A	橙	40	覆土 口辺部外面に細かい亀裂
19	坏	13.4	5.3		RWB	A	明赤褐	60	覆土 口辺部に細かい亀裂
20	坏	(13.5)	(4.7)		RWB	B	橙	45	覆土
21	坏	(12.2)	5.2		RWB	A	鈍橙	40	覆土
22	坏	(12.7)	5.1		RW	A	鈍橙	40	覆土
23	坏	13.1	6.0		RWB	A	橙	60	覆土
24	坏	(12.6)	(5.6)		RWB	B	橙	40	覆土
25	坏	11.9	4.8		RW'B	A	淡赤褐	100	覆土
26	坏	12.5	4.6		RWW'B	A	橙	100	
27	坏	12.4	5.2		RWB	A	橙	100	覆土
28	坏	11.8	4.6		RWB	A	橙	90	
29	坏	12.4	4.6		RWB	A	橙	70	覆土
30	坏	12.9	6.4		RWB	A	橙	60	
31	坏	11.8	6.0		RWB	A	橙	80	覆土
32	坏	12.0	6.0		RWB	A	橙	70	覆土
33	坏	12.4	(5.5)		RWB	A	橙	60	覆土
34	坏	12.1	5.8		RWB	A	橙	50	
35	坏	(12.2)	(5.9)		RB	A	黒	30	内外面黒色処理
36	坏	12.2	6.2		RWB	A	橙	50	覆土
37	坏	12.2	5.9		RWB	A	橙	70	覆土
38	坏	12.1	5.8		RW	A	橙	100	被熱赤変
39	坏	13.0	5.8		RWB	A	橙	100	
40	坏	12.1	5.7		RWB	A	橙	100	覆土 被熱赤変
41	坏	12.4	5.9		RWB	A	橙	95	覆土 内面炭化物付着
42	坏	12.5	5.8		RW	A	橙	90	覆土 内面炭化物付着
43	坏	11.3	5.2		RWB	A	鈍橙	85	覆土 内面に放射状調整痕 被熱赤変
44	坏	(11.5)	(4.9)		RWB	B	鈍橙	40	覆土 内面に放射状調整痕
45	坏	12.9	(5.7)		RWB	A	淡褐	50	覆土 口辺部調整後の亀裂補修
46	坏	(12.1)	(5.3)		RWB	B	橙	25	穿孔土器

第32号住居跡出土土器観察表(2)

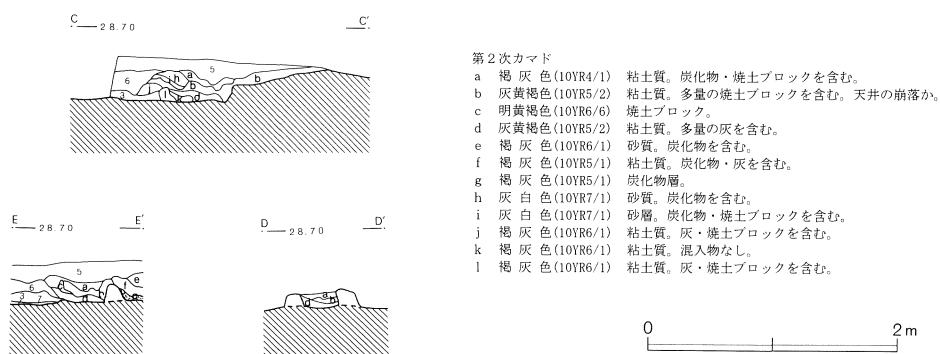
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
47	壺	9.4	4.8		RW	A	橙	90	覆土 ミニチュア風 口辺端部不整形
48	壺	(9.2)	(3.6)		RWB	A	鈍橙	40	覆土 ミニチュア風
49	大型壺	15.5	6.5		RW	A	橙	70	覆土
50	大型壺	16.0 (7.1)			RWB	A	橙	50	覆土
51	大型壺	14.9 (7.1)			RWB	A	橙	90	覆土
52	大型壺	15.6 (7.2)			RWB	A	橙	40	覆土
53	大型壺	14.5 (7.6)			RWB	A	橙	30	覆土
54	大型壺	(13.9)	6.6		RWB	A	橙	40	覆土
55	高壺	12.0	9.4	10.3	RWB	A	淡橙褐	60	覆土
56	高壺	12.6	8.7	10.7	RWB	B	橙	70	
57	高壺		(6.2)	9.8	RWB	A	橙	70	
58	高壺		(7.6)	9.7	RWB	A	橙	70	
59	高壺		(5.5)	9.4	RWB	B	橙	90	
60	高壺		(3.8)	9.9	RWB	A	橙	90	
61	高壺		(3.9)	9.5	RWB	A	橙	80	
62	高壺		(5.0)	11.6	RWB	A	橙	95	
63	高壺		(6.9)	12.2	RWB	A	橙	90	
64	高壺		(5.3)	11.6	RWB	A	鈍橙	60	
65	高壺		(3.0)	(13.1)	RB	B	橙	30	
66	高壺	21.6	13.3	10.9	RWB	A	橙	95	覆土 外面に線刻文 樹脂付着
67	壺	9.9	15.8		RWB	A	橙	90	覆土 穿孔土器
68	壺		(8.9)		R	A	橙	30	覆土
69	小型甕	(11.7)	(10.0)		RWB	C	鈍橙	25	
70	小型甕		(9.7)	4.2	RWB	B	橙	50	
71	小型甕		(7.7)	(4.2)	RWB	A	橙	30	
72	壺	(21.6)	(7.0)		RWB	A	橙	25	覆土
73	壺	(19.7)	(6.5)		RWB	C	鈍黃橙	100	覆土 転用器台
74	壺	(16.2)	(10.3)		WB	A	橙	100	転用器台
75	壺	21.0	(9.9)		WBU	B	橙	70	転用器台
76	壺	(15.7)	(16.8)		RW	A	橙	40	覆土
77	壺	14.8	(19.0)		RWB	B	橙	90	覆土 火に掛けた痕跡有り 胎土荒い
78	壺	15.2	25.0	8.5	RWB	A	橙	90	
79	壺	(16.1)	(21.4)	(5.9)	RWB	A	橙	45	覆土
80	甕	(26.8)	(11.2)		RWB	A	橙	20	
81	甕	24.5	33.0	8.7	RWB	A	橙	95	覆土
82	甕	(27.9)	(27.8)		RWB	A	橙	20	覆土
83	甕		(11.0)	(9.0)	RWB	A	橙	20	
84	甕	17.8	(8.5)		RWU	B	鈍黃橙	60	覆土
85	甕	15.9	(18.3)		RWBH	B	橙	60	胎土中の片岩粒顯著
86	甕	(18.8)	(14.6)		WW'	B	鈍橙	25	覆土
87	甕	(17.8)	(10.4)		R	B	鈍黃橙	40	覆土
88	甕	16.9	(27.0)		RWW'B	B	橙	80	覆土
89	甕	18.2	(24.5)		RWB	A	鈍橙	80	覆土
90	甕	16.9	29.5	7.1	RWBHU	A	橙	80	覆土
91	甕	17.8	28.4	5.0	RWB	A	鈍黃橙	90	

### 第33号住居跡

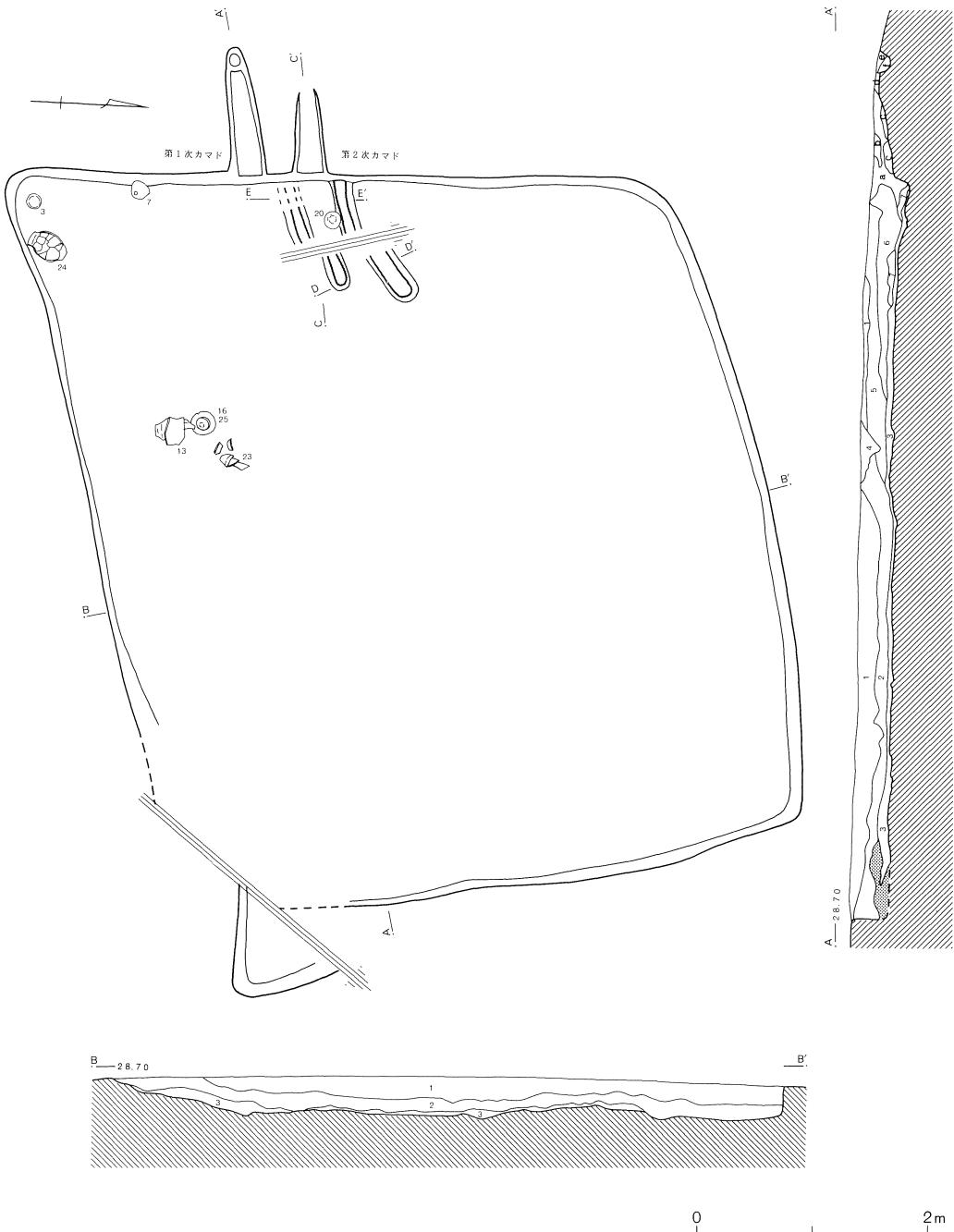
く－5グリッドに位置する。検出した平面プランは変則的な平行四辺形である。これは地山砂層に掘り込まれた住居が地震による液状化により南から北へ向かう大きな力を受けた結果歪んだものである。南東隅は島状に分離して本来の位置から大きく流され、第2カマドの袖は途中で分断されてズレていた。変形しながらも残った壁から復原すると本来は西壁長、北壁長とも5.58m、深さ0.45mの正方形プランで主軸方向はN-90°-Wであったと考えられる。床面も液状化現象の影響で乱され、土器がもぐり込んでいた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは西壁で2基を検出した。第1次カマドは袖が残存せず、煙道は幅25cm、長さ111cmで傾斜をつけて掘り抜かれ、先端に煙出ピットを持っていた。第2次カマドは袖に灰白色粘土が使用されていた。液状化現象は矢印の方向に作用し、袖を分断しただけでなく、直立すべき壁を南方へ傾倒させた。同様の現象は第30号住居跡で見られた。復原すると右袖の長さ約90cm、燃焼部の幅25cmほどになると考えられる。煙道は幅21cm、長さ78cm以上で傾斜をつけて掘り抜かれていた。支脚位置は右寄りで小型甕が倒立転用されていた。右袖の外側には灰層があった。

遺物はカマド左側の南西隅寄りとその東方の中央寄りの2か所に集中して出土した。7の小型甕は西壁際に転倒した状態で出土したが、その上位には同じく転倒して8の短頸壺が存在した。この短頸壺の口縁部内面が磨滅していることから、7の小型甕と8の短頸壺は本来2段重ねでカマド脇の壁上に置かれていたものが転落したものと考えられる。3の壺と24の甕は南西隅の床面上の出土であるが、壺は外面に煤が付着し、火に掛けられたと見られる。中央寄りからは13の甕、16の壺、23・25の甕が出土したが、本来は床面上にあったものが床面の砂層中にもぐり込んでいた。16は壺の口縁部からの転用器台で正立して出土したが、使用による磨滅帯は頸部の内面にあり、その位置から考えて使用時には倒立していたものと見られる。近接して出土した甕をのせた可能性が大きい。また25の甕は底部のみが16の転用器台の中に入れ子状に伏せられていたため、この一群の土器は本来ここにあったものではなく2次的に置かれたと考えられる。20の小型甕はカマドの支脚として転用されていた。以上のほかの土器は覆土中からの出土だが18・19・21の甕は口縁端部が面取りされている。15は壺からの、19は甕からの転用器台である。17は壺の胴下半部からの転用鉢で内外面に樹脂が付着している。このほか、9・10・11はミニチュア土器である。

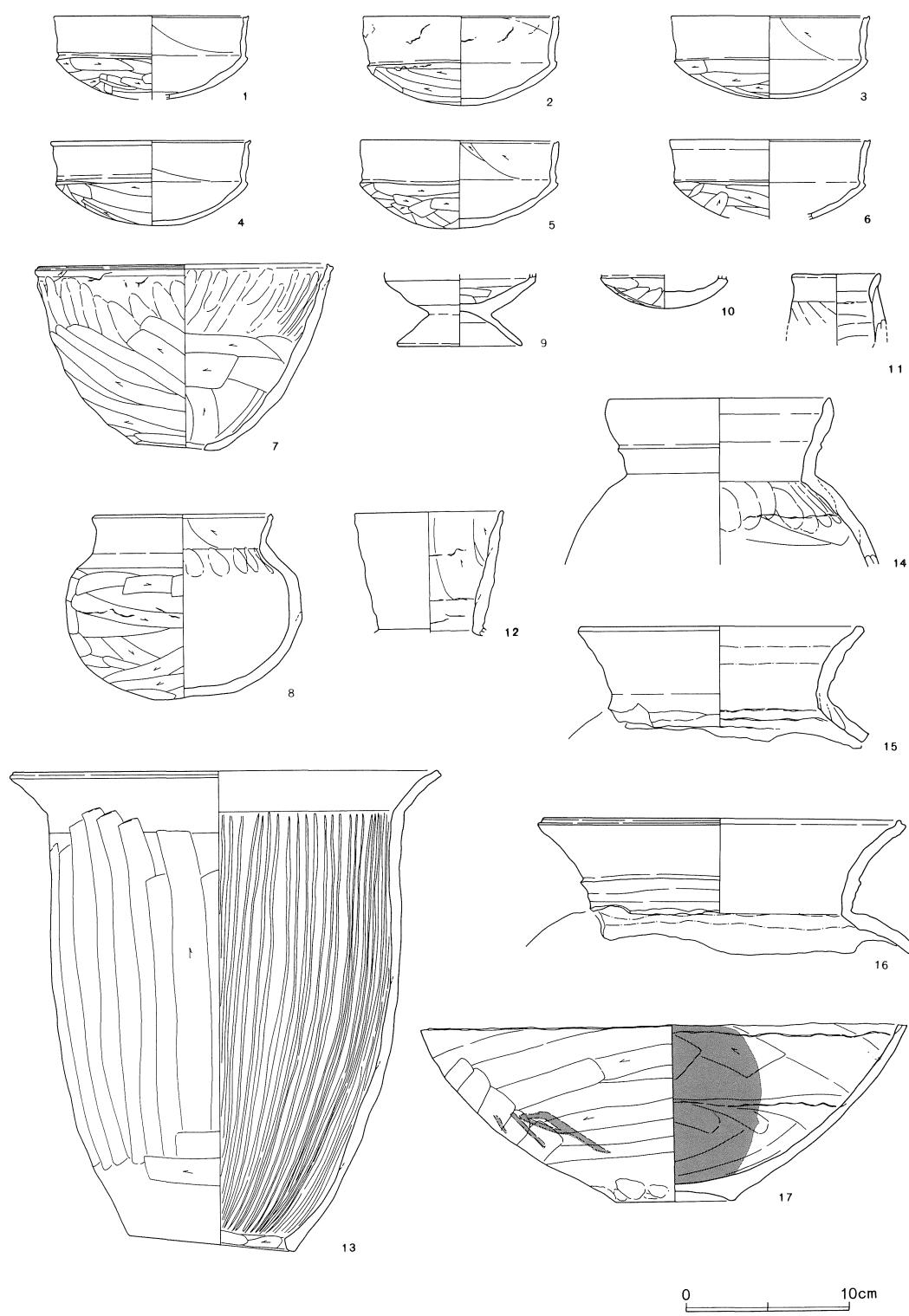


第114図 第33号住居跡 カマド

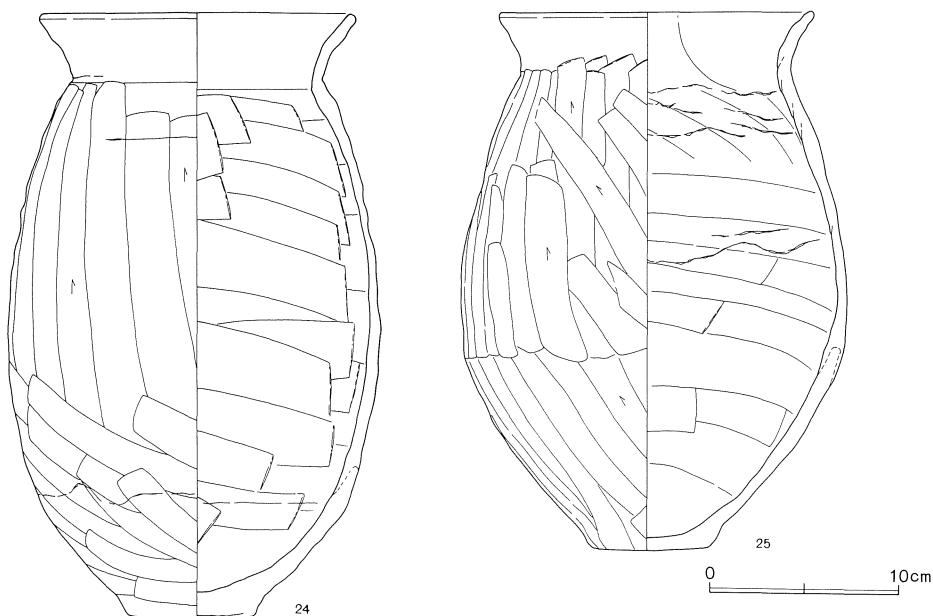
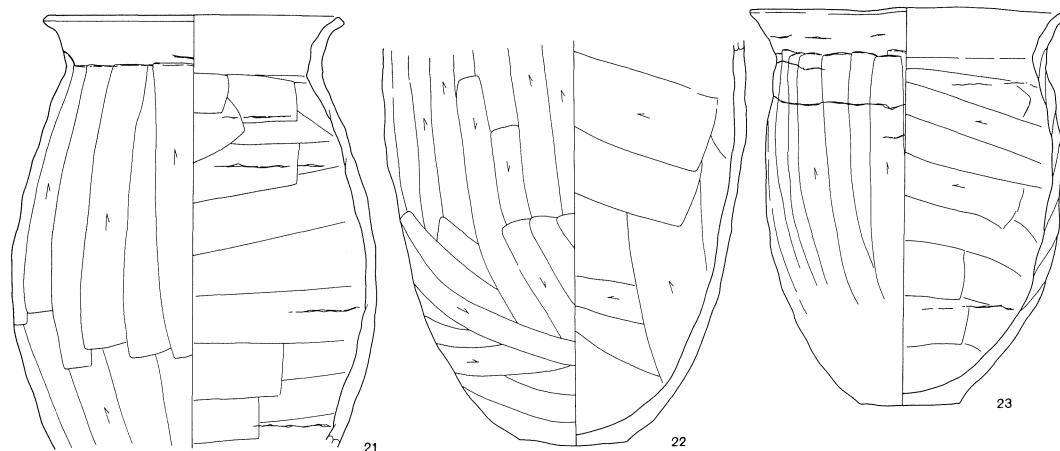
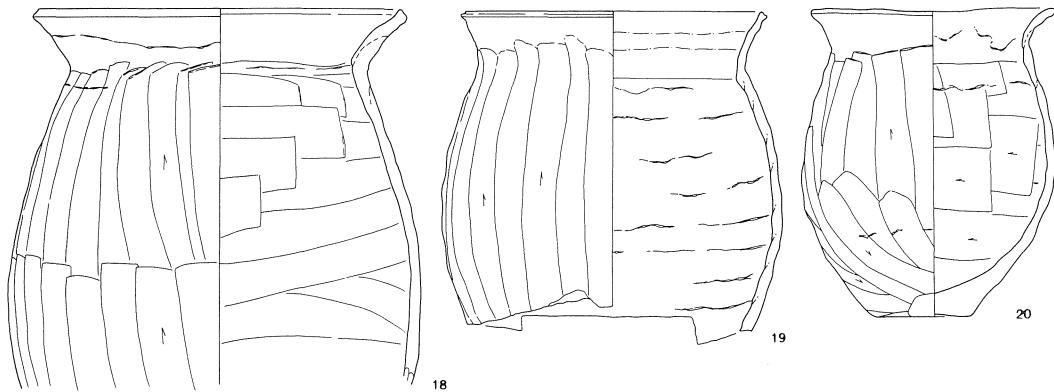


- |                |                          |                                      |
|----------------|--------------------------|--------------------------------------|
| 1 暗灰色(10YR5/1) | 粘土質。少量の炭化物を含む。           | 第1次カマド                               |
| 2 暗灰色(10YR4/1) | 粘性弱。少量の炭化物を含む。砂と粘土との混合層。 | a 暗灰色(10YR5/1) 粘土質。大型の焼土ブロック・炭化物を含む。 |
| 3 暗灰色(10YR5/1) | 粘土質。多量の炭化物を含む。本来の床面。     | b 橙色(2.5YR7/6) 焼土ブロック                |
| 4 黒色(10YR2/1)  | 粘性弱。多量の炭化物を含む。           | c 暗灰色(10YR5/1) 焼土・炭化物層。              |
| 5 暗灰色(10YR5/1) | 粘土質。微量の炭化物・焼土粒を含む。       | d 黑褐色(10YR3/1) 粘土質。多量の炭化物を含む。        |
| 6 暗灰色(10YR6/1) | 粘土質。炭化物・微量の焼土ブロックを含む。    | e 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。炭化物・焼土粒を含む。       |
| 7 暗灰色(10YR5/1) | 砂質。多量の砂、微量の炭化物・焼土を含む。    | f 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。        |

第115図 第33号住居跡



第116図 第33号住居跡 出土遺物（1）



第117図 第33号住居跡 出土遺物（2）

第33号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(11.9)	(5.1)		RW	A	鈍褐	25	カマド
2	壺	12.0	5.4		RW'	A	橙	80	覆土
3	壺	12.2	5.0		RW	B	橙	70	No.3 外面煤付着
4	壺	12.2	5.1		RW	A	橙	80	覆土
5	壺	12.1	5.4		RW	A	明赤褐	95	覆土
6	壺	(12.3)	(4.8)		RW	A	明赤褐	40	覆土
7	甌	18.1	11.1	4.0	RW	A	橙	100	No.2
8	短頸壺	10.9	11.1	4.7	RWB	A	橙	90	覆土
9	ミニチュア		(4.4)	7.7	RB	B	橙	70	覆土
10	ミニチュア		(2.0)		R	B	鈍橙	40	
11	ミニチュア	(5.4)	(4.2)		W	A	黒	20	
12	壠	9.2	(7.4)		RW	A	橙	90	覆土
13	甌	26.3	28.6	10.2	RWB	A	橙	80	No.5・6・7
14	壺	(13.5)	(10.2)		RW	C	明赤褐	40	覆土
15	壺	17.4	(7.0)		RWB	A	浅黄橙	80	覆土 転用器台
16	壺	22.2	(8.2)		WW'	A	鈍橙	70	No.6 転用器台 倒立使用
17	壺		(10.8)	(7.3)	RW	A	赤褐	70	覆土転用鉢内面と外面の一部に樹脂付着
18	甌	19.6	(19.8)		RWB	A	鈍橙	90	
19	甌	16.1	(17.0)		WBU	A	橙	100	転用器台
20	小型甌	13.0	16.0	5.2	RWB	B	鈍橙	90	No.1 転用支脚
21	甌	(15.8)	(22.8)		RWH	B	鈍黄橙	30	覆土
22	甌		(21.3)	(5.8)	WB	B	鈍黄橙	40	
23	甌	16.8	20.9	5.3	B	C	鈍黄橙	70	No.7
24	甌	16.7	31.8	6.6	RW	C	鈍橙	70	No.4
25	甌	16.7	28.3	6.3	RWB	A	橙	90	No.6

第34号住居跡

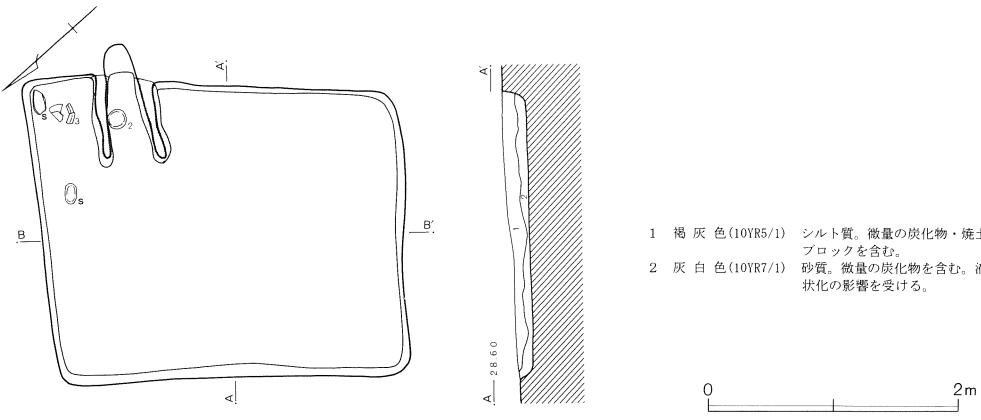
きー5グリッドに位置する。規模は長軸長2.83m、短軸長2.35m、深さ0.16mで、主軸方向はNおー128°—Eである。床面は地山砂層に掘り込まれて、液状化現象の影響を受け、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは南東壁東隅寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されて、篠竹を使った芯材も両袖で確認できた。右袖の長さは76cmで、燃焼部の幅は30cmである。

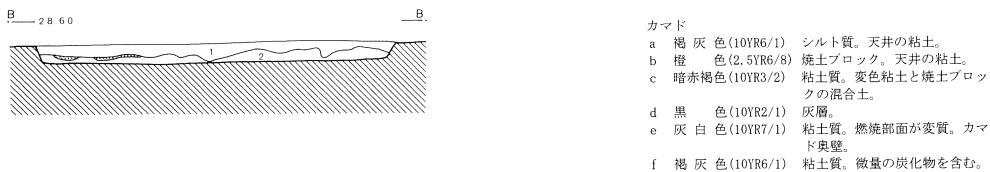
遺物はカマド周辺で数点を検出し、燃焼部内からは2の鉢が、また、カマド左側の東隅からは3の甌が出土した。カマド左袖先端寄りで出土した石は、磨り面をもった安山岩である。この他に遺物の出土はなかった。

第34号住居跡出土土器観察表

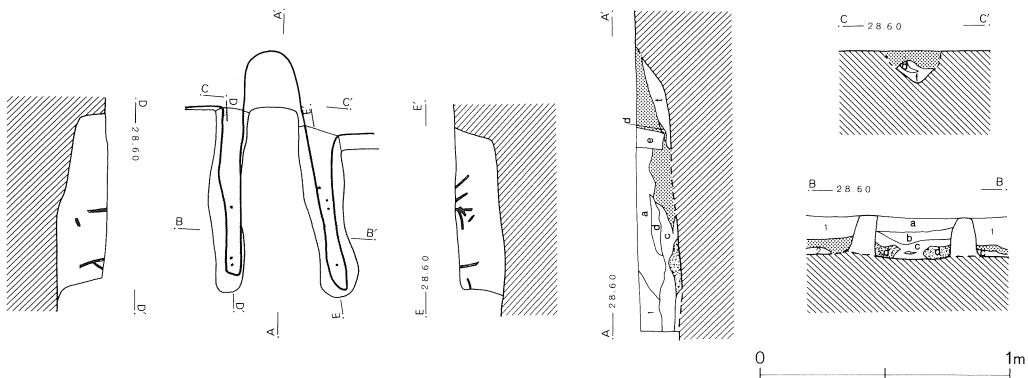
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	4.7		RWB	A	橙	100	
2	鉢	16.3	11.3	6.8	RW	A	橙	70	No.1 外面煤付着
3	甌	18.6	(12.2)		RWB	A	橙	60	No.2



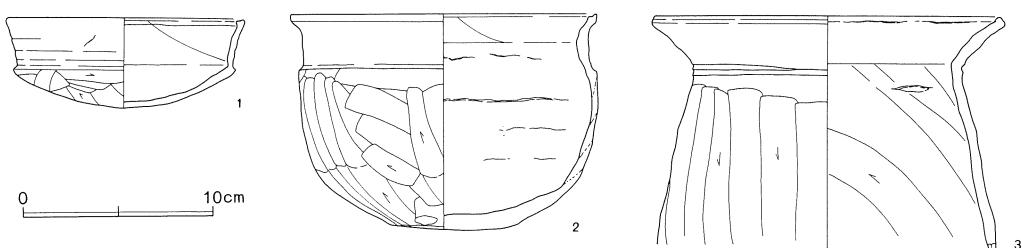
1 暗褐色(10YR5/1) シルト質。微量の炭化物・焼土ブロックを含む。  
2 灰白色(10YR7/1) 砂質。微量の炭化物を含む。液状化の影響を受ける。



カマド  
a 暗褐色(10YR6/1) シルト質。天井の粘土。  
b 橙色(2.5YR6/8) 粘土ブロック。天井の粘土。  
c 暗赤褐色(10YR3/2) 粘土質。変色粘土と焼土ブロックの混合土。  
d 黒色(10YR2/1) 灰層。  
e 灰白色(10YR7/1) 粘土質。燃焼部面が変質。カマド奥壁。  
f 暗褐色(10YR6/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。



第118図 第34号住居跡 カマド



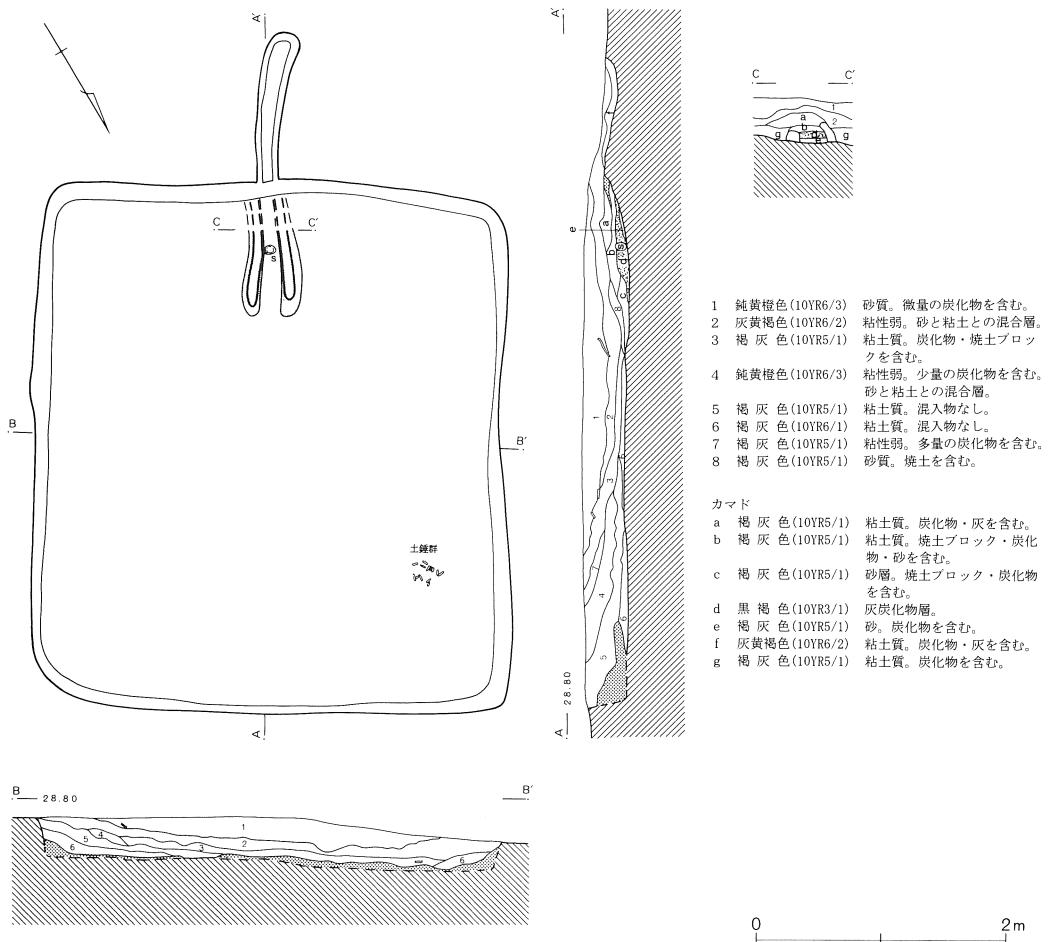
第119図 第34号住居跡 出土遺物

## 第35住居跡

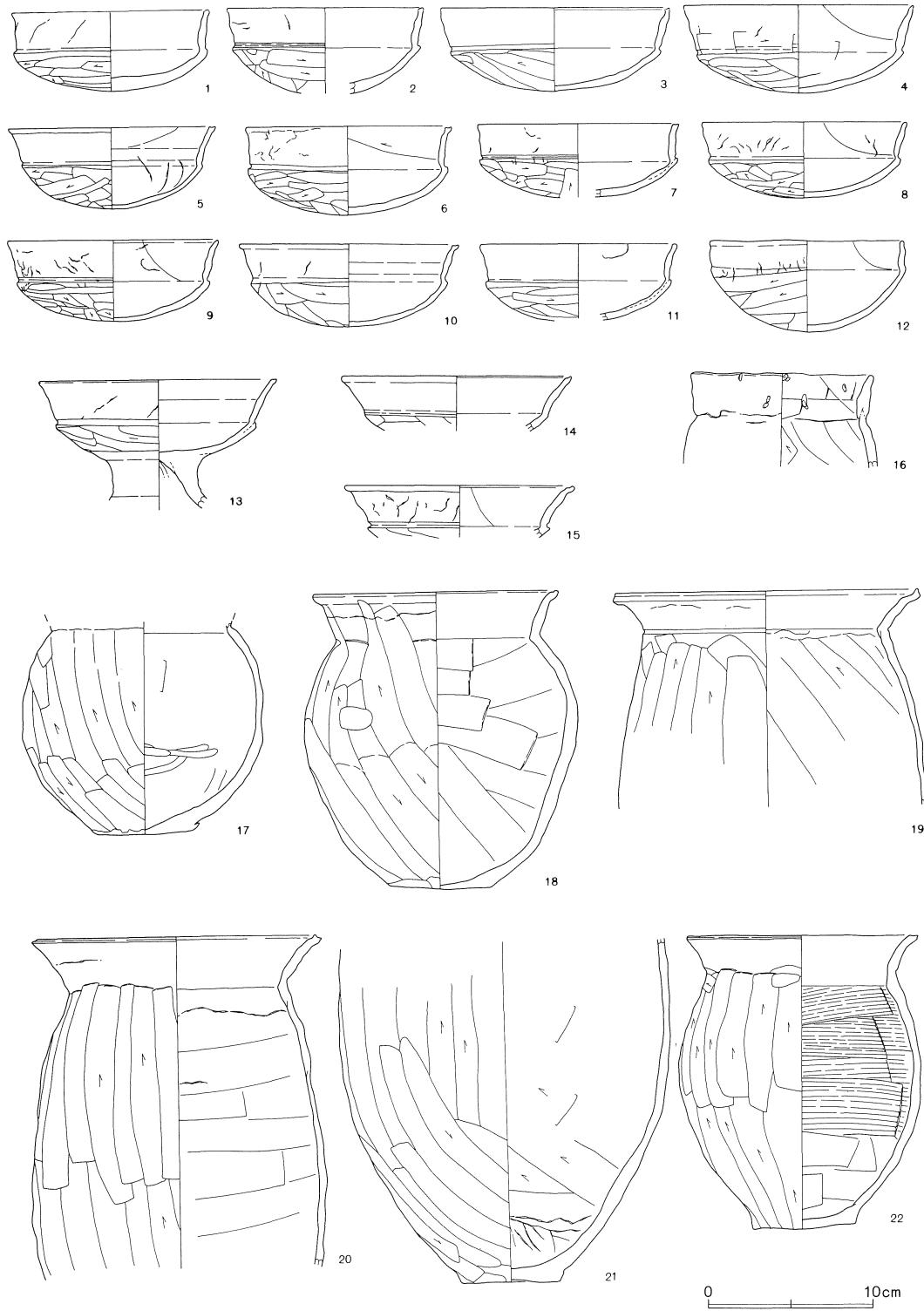
き-5グリッドに位置する。規模は長軸長3.90m、短軸長3.54m、深さ0.35mで、主軸方向はN-147°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、液状化現象によって攪乱を受けていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは南西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは95cmで、燃焼部の幅は21cmである。煙道は幅20cm、長さ118cmで、水平に掘り抜かれている。支脚位置は左寄りであり、礫を倒立させていた。

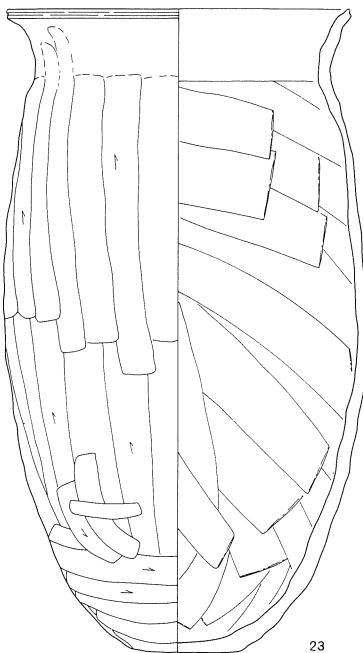
特筆すべきは北隅寄りの床面直上より出土した土錐群だが、26点が集中して紐に連ねられたような状態であり、投網に装着されたまま埋没した可能性が強い。出土遺物の大部分は覆土中のものである。12の壺は短く直立する口辺部と深い半球形体部が特徴的である。16は小型甕だが、火に掛けられ外面に煤が付着している。大型甕が3点存在するのも特徴的である。土玉も1点出土した。



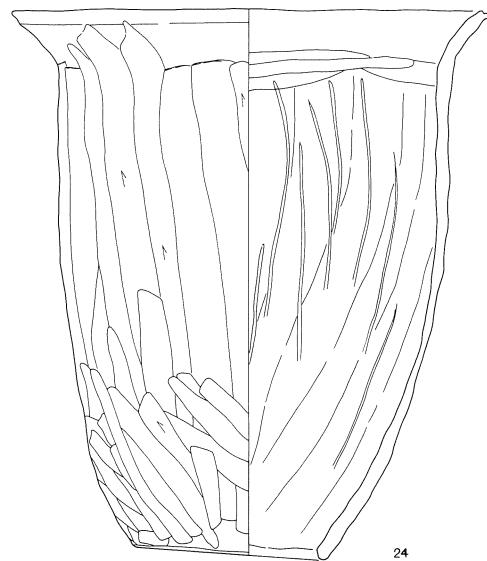
第120図 第35号住居跡



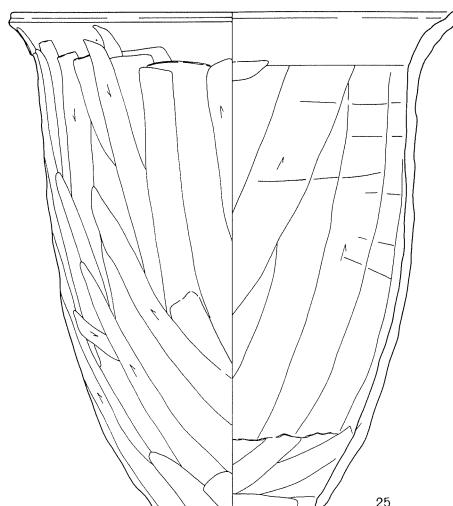
第121図 第35号住居跡 出土遺物（1）



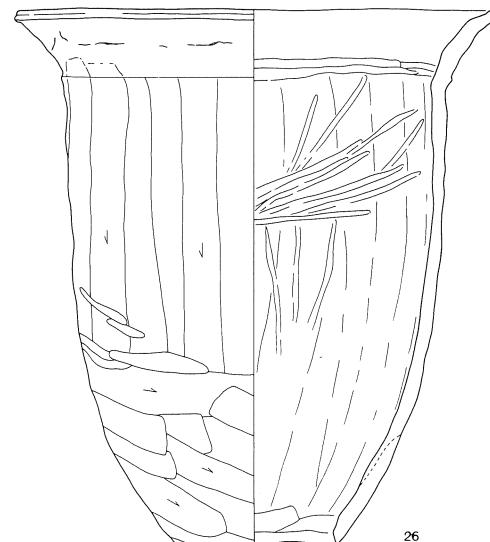
23



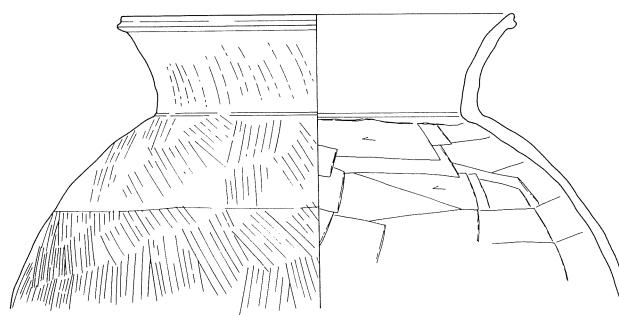
24



25



26



27

0 10cm

第122図 第35号住居跡 出土遺物（2）

第35号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.0	4.8		W	B	橙	95	
2	壺	(12.0)	(5.2)		BW	A	鈍橙	40	
3	壺	14.0	5.0		BW	B	鈍黃橙	60	
4	壺	14.0	5.3		RW	A	橙	70	
5	壺	12.6	4.9		R	A	鈍橙	100	
6	壺	12.6	5.5		WB	A	橙	60	
7	壺	(12.2)	(4.5)		W	A	鈍褐	40	
8	壺	(12.5)	4.6		RW	A	明赤褐	80	
9	壺	12.8	4.8		RWB	B	明赤褐	100	
10	壺	13.4	5.0		RW	B	明赤褐	50	
11	壺	(12.0)	(4.5)		RW	A	橙	30	
12	壺	11.8	5.5		WW'B	B	明赤褐	90	
13	高 壺	14.4	(7.8)		WB	B	橙	80	
14	高 壺	(14.0)	(3.3)		RWB	A	褐	10	
15	高 壺	(14.0)	(3.1)		RW	B	鈍赤褐	10	
16	小型甕	(11.1)	(5.5)		RW	C	橙	25	外面煤付着
17	小型甕			12.8	6.0	WB	鈍橙	80	
18	小型甕	15.0	17.9	6.1	W'BH	C	橙	90	
19	甕	18.6	(13.0)		RWB	A	鈍橙	70	
20	甕	17.3	(20.0)		RWB	B	鈍黃橙	50	
21	甕		(20.5)	(6.0)	B	A	鈍黃橙	40	
22	小型甕	14.0	17.7	6.2	BH	A	鈍黃橙	100	
23	甕	18.2	33.9	5.6	RWB	A	鈍黃橙	80	
24	甕	25.2	28.7	10.0	RWB	A	橙	90	
25	甕	23.6	26.1	8.8	RW'	A	橙	95	
26	甕	25.3	28.1	8.5	WB	A	鈍黃橙	90	
27	壺	(21.0)	(15.5)		W'B	A	橙	30	

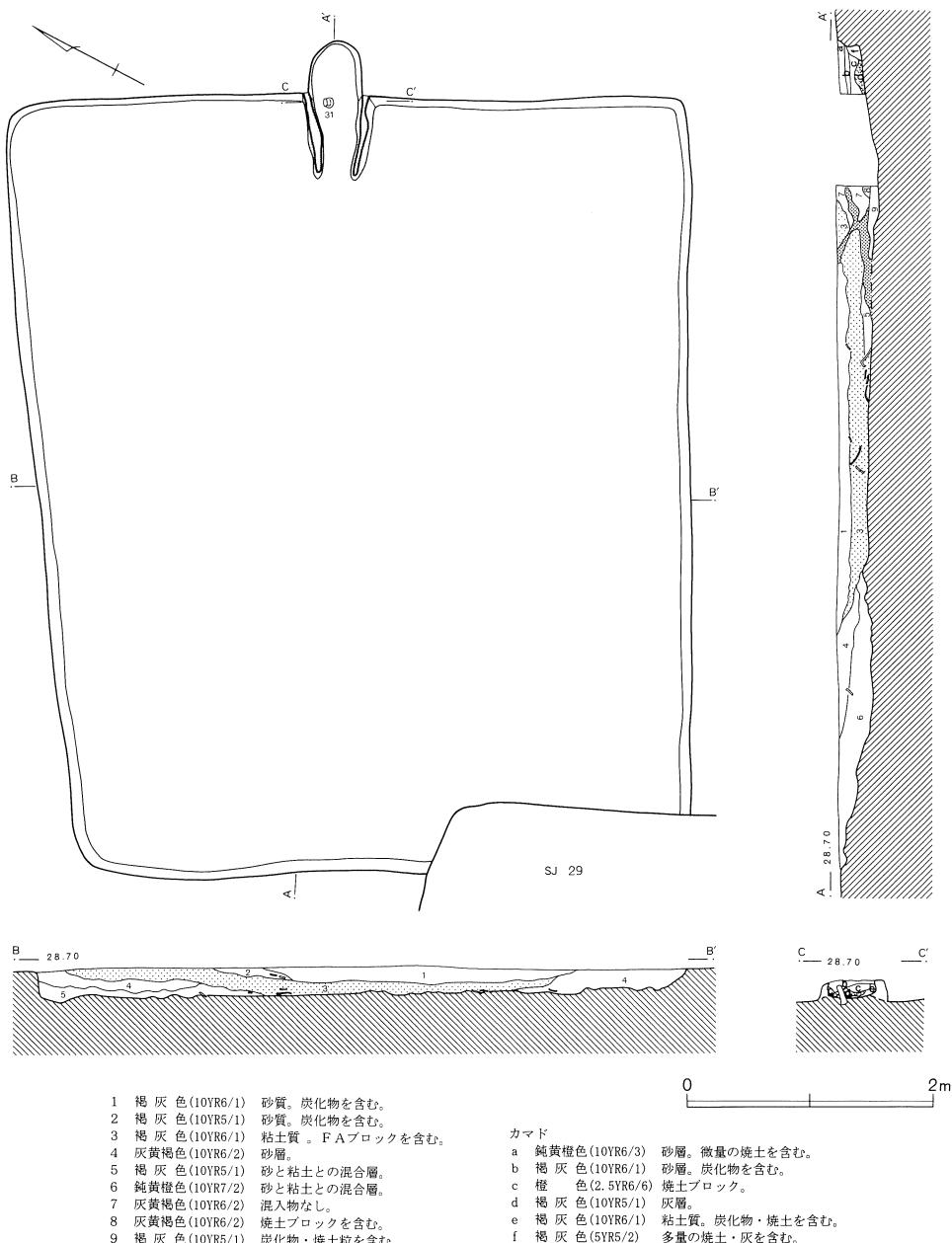
## 第36号住居跡

くー5グリッドに位置する。第37号住居跡に切り込まれていた。規模は長軸長7.00m、短軸長4.87m、深さ0.25mで、主軸方向はN-63°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。第3層にはFAブロックが含まれていたが、多量の土器も混入していた。

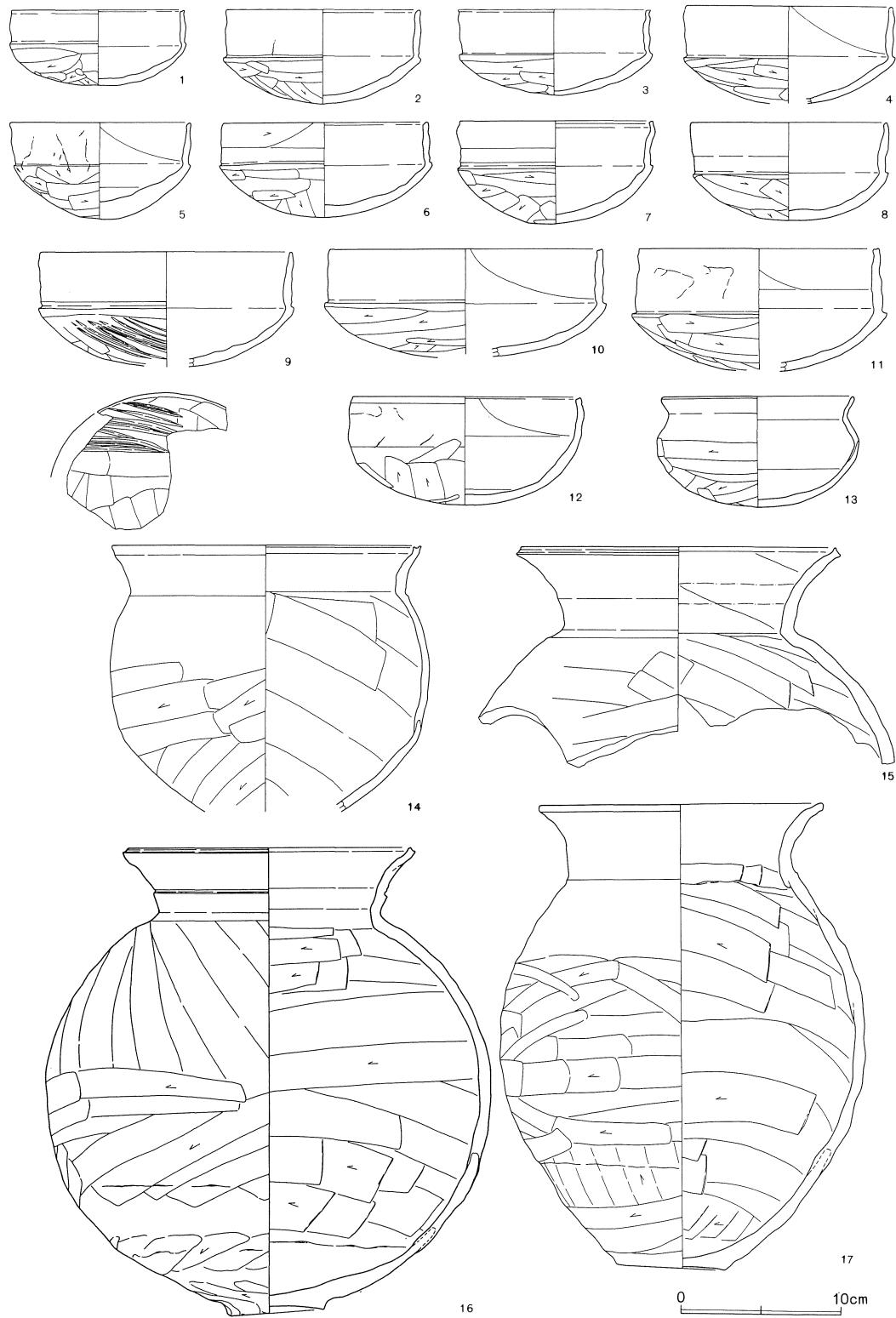
カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは60cmだが、燃焼部は壁外に拡張され、袖先端から奥壁まで107cmとなり、燃焼部の幅は39cmである。支脚位置は左寄りであり、土製支脚が使用されていた。

遺物は第3層を中心とした覆土中から多量に出土した。9の大型壺は体部外面に擦切痕をもつ。12の大型壺は外面に煤が付着し、火に掛けられた痕跡がある。13の甕は内面と外面上半部を黒色処理されている。18の高壺は脚部はきれいに剥離し、壺として転用されたと見られる。19は大型壺を壺部とする高壺である。15と30は壺の口縁部を転用した器台である。甕の出土量が多く、口縁端部に面取り凹線をもつものが主流で、同様のプロポーションで口縁端部を丸く仕上げるもののがこれに

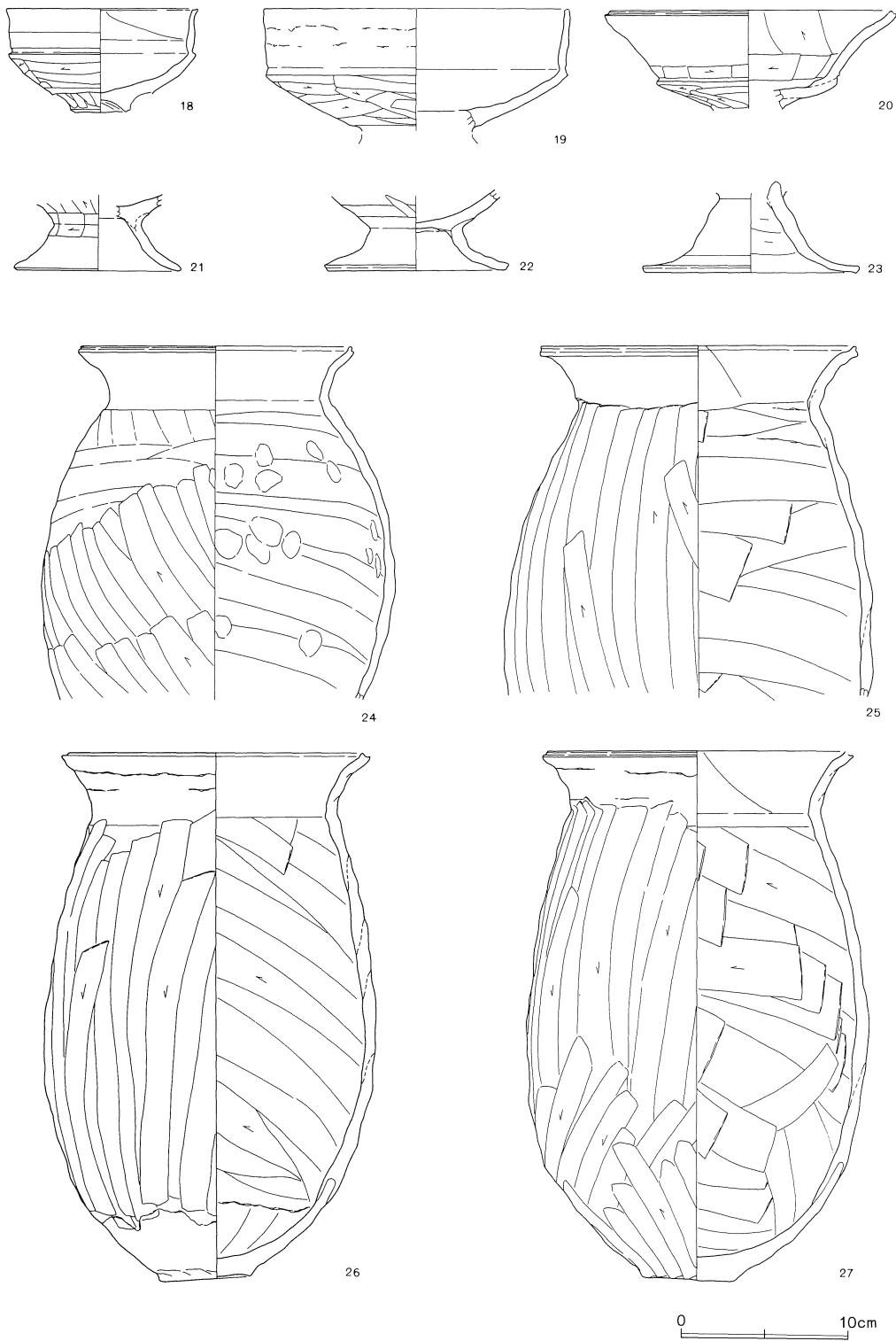
次ぐが、17・36・44が特徴的で17は壺的な口縁部をもつ。36は直立ぎみの口縁部が上半で外反する。胎土も白色砂粒が顕著で他地域でつくられた可能性が高い。44は径の大きめな底部と最大径をやや上方にもちハケメ調整される胴部が特徴的である。このほか32の土製品は性格不明であるが、竹管内に充填された粘土が焼かれたものであり、上端は丸く整えられ、下端を欠損している。ほかに土玉1点と砥石1点が出土した。



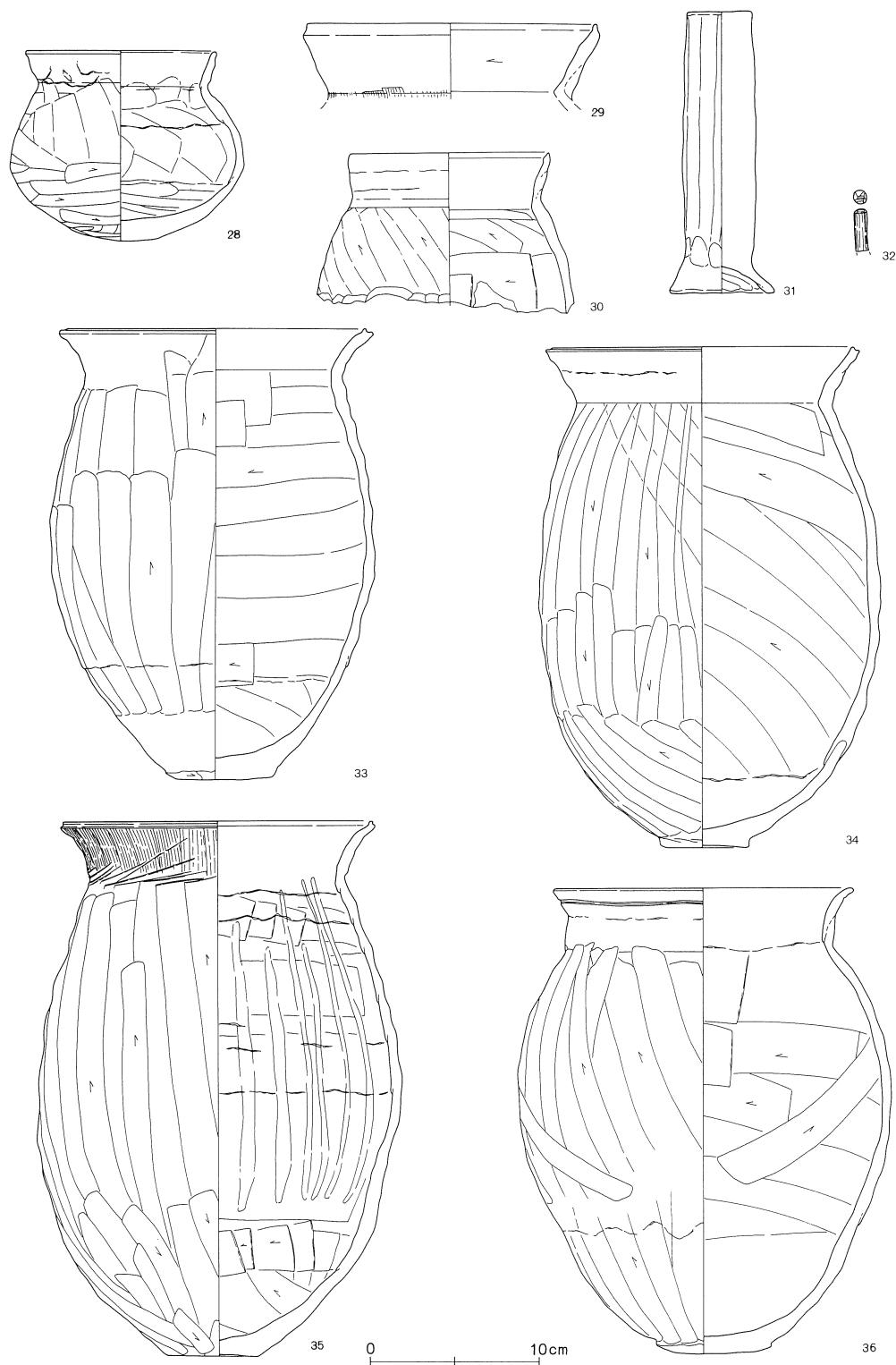
第123図 第36号住居跡



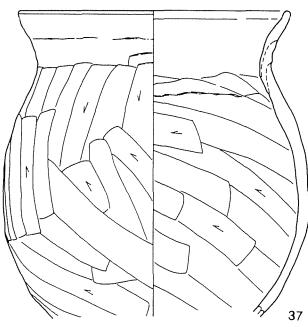
第124図 第36号住居跡 出土遺物（1）



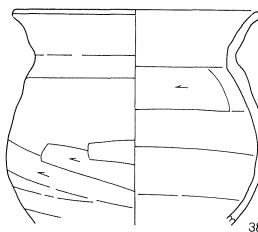
第125図 第36号住居跡 出土遺物（2）



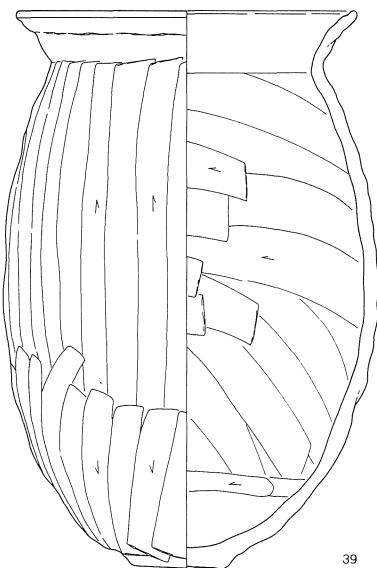
第126図 第36号住居跡 出土遺物（3）



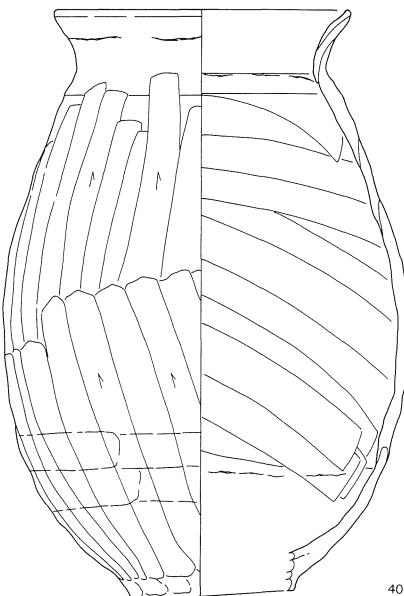
37



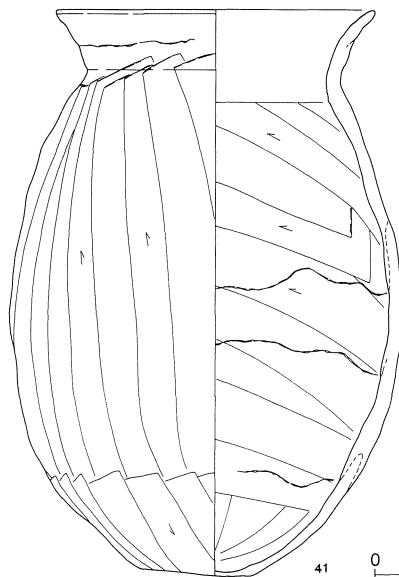
38



39

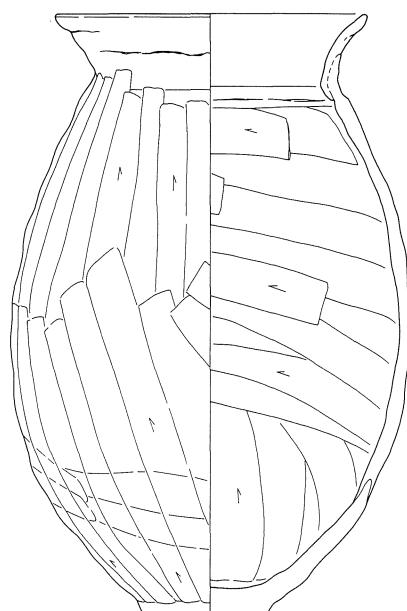


40



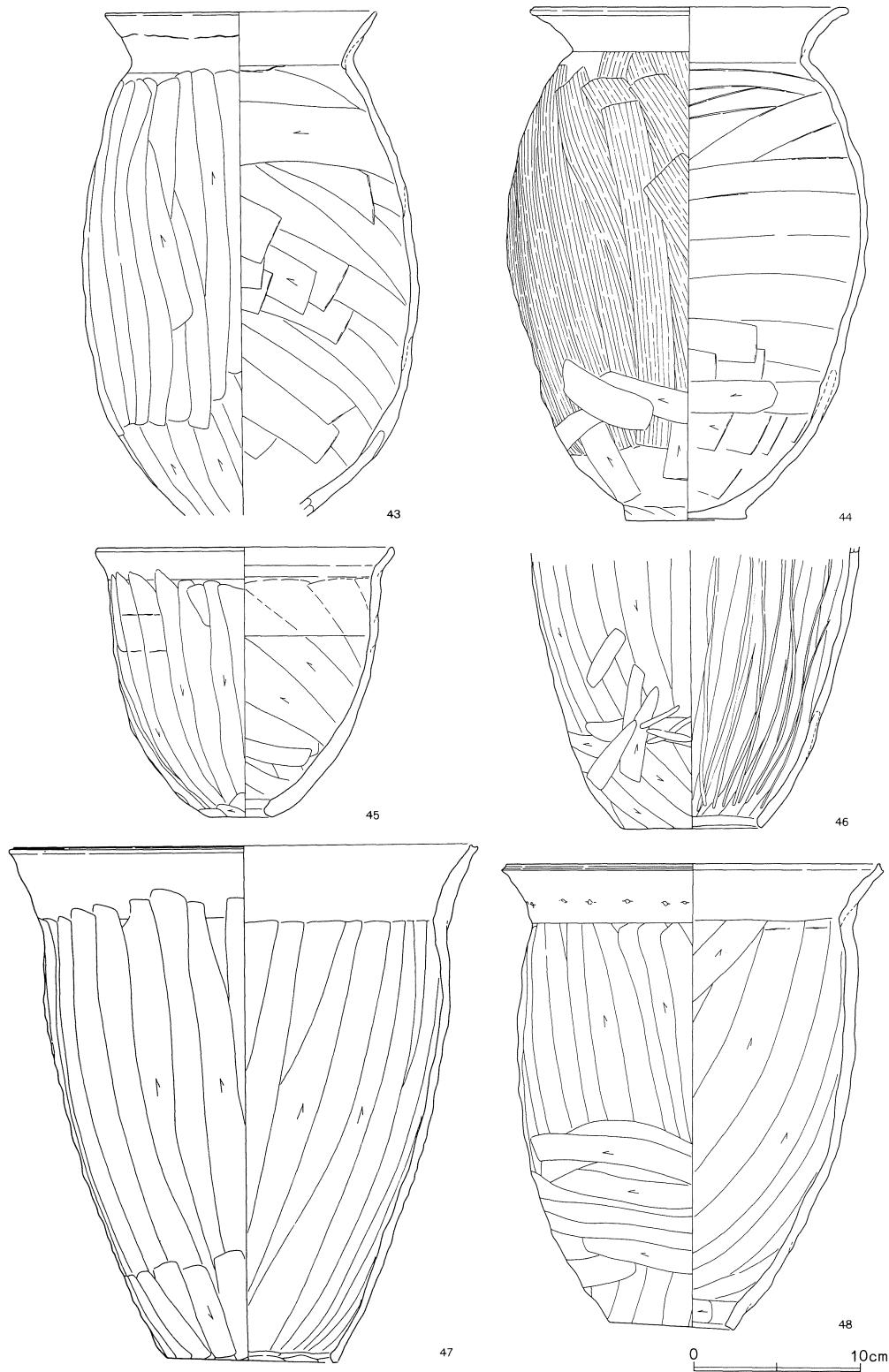
41

0 10cm



42

第127図 第36号住居跡 出土遺物 (4)



第128図 第36号住居跡 出土遺物（5）

第36号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	10.8	4.6		RWB	B	橙	60	
2	壺	(12.1)	(5.8)		RW	B	鈍橙	25	
3	壺	12.0	5.3		R	B	橙	80	
4	壺	12.8	(6.0)		RW	A	橙	50	
5	壺	11.2	6.0		RWBU	A	橙	80	
6	壺	12.9	5.9		RWB	A	橙	95	
7	壺	12.1	6.3		RWB	A	橙	90	正立出土
8	壺	12.2	6.0		RWB	B	橙	70	
9	大型壺	(15.7)	(7.1)		RWB	C	橙	25	擦切痕壺片
10	大型壺	17.0	6.5		RWB	B	橙	60	
11	大型壺	(15.0)	(7.5)		RW	B	明赤褐	40	
12	大型壺	14.3	6.6		RWB	A	橙	100	カマド 外面煤付着
13	椀	12.0	6.8		RWB	B	橙	70	内外面黒色処理
14	鉢	19.2	(16.4)		RWB	A	橙	70	
15	壺	20.2	(11.4)		RWB	A	橙	100	転用器台
16	壺	18.2	(28.9)	5.9	RB	A	橙	70	火に掛けた痕跡有り
17	甕	17.7	28.6	6.8	RW	A	鈍黃橙	70	
18	高壺	11.5	(6.2)		RW	B	鈍黃橙	70	転用壺
19	大型高壺	(18.4)	(7.3)		RWW'B	B	橙	40	
20	高壺	17.3	(5.8)		RW	A	橙	70	
21	高壺		(4.5)	10.0	RWB	A	橙	70	
22	高壺		(4.5)	(10.5)	WW'	A	鈍橙	30	
23	高壺		(5.5)	(12.9)	RW	B	明赤褐	40	被熱変質 転用支脚か
24	甕	(16.5)	(21.0)		WB	A	鈍黃橙	40	
25	甕	18.8	(20.8)		RWW'	B	鈍黃橙	80	
26	甕	18.5	31.5	5.5	WB	A	橙	70	
27	甕	18.6	31.4	5.5	WB	A	鈍黃橙	80	
28	短頸壺	11.3	11.1		RW	B	橙	70	
29	壺	17.2	(4.5)		RW	A	橙	100	
30	壺	12.0	(9.0)		RWB	A	橙	95	転用器台
31	支脚		16.6	6.2	R	A	橙	100	
32	土製品				RW	A	鈍橙	破片	竹管内充填粘土を焼成した
33	甕	18.5	26.5	5.7	RW'B	A	橙	95	
34	甕	18.5	29.4	5.2	W'U	B	鈍黃橙	70	
35	甕	18.6	31.4	5.3	RWB	A	橙	70	
36	甕	17.8	27.4	6.8	RW	A	鈍橙	80	床直 形態・胎土特徴的
37	小型甕	14.4	(16.1)		RW	A	鈍黃橙	50	
38	小型甕	13.1	(11.3)		RWW'	B	明赤褐	60	
39	甕	18.0	29.3	4.9	RW	A	明黃橙	70	
40	甕	15.7	(30.8)		RW	A	浅黃橙	70	
41	甕	16.9	29.8	5.9	RW	A	鈍黃橙	70	
42	甕	16.5	31.6	6.5	WB	A	浅黃橙	70	
43	甕	16.2	(30.0)		RWB	A	灰白	80	
44	甕	19.1	30.6	7.2	RW	B	鈍黃橙	80	外面ハケメ
45	甌	17.9	16.0	3.7	RW	B	橙	90	
46	甌		(16.5)	8.3	RW	A	明赤褐	80	
47	甌	28.0	30.0	9.9	RW	A	橙	70	
48	甌	22.9	27.5	7.5	RWB	A	橙	90	

### 第37号住居跡

きー5グリッドに位置する。第36号・第38号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長4.36m、短軸長4.15m、深さ0.40mで、主軸方向はN-21°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。第1・2・3層中にFAブロックが包含されていた。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは81cmで、燃焼部の幅は33cmである。煙道は幅29cm、長さ74cmで、やや傾斜をもって掘り抜かれていた。左袖の外側には灰層があった。

出土遺物のうち、8の壺は口辺部内面に煤が付着している。14は甕から転用した器台と考えられる。ほかに土玉が1点出土した。

### 第37号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	10.7	4.3		RWB	A	橙	80	
2	壺	11.4	4.9		R	C	鈍橙	95	
3	壺	12.1	5.3		RW	A	鈍橙	80	
4	壺	12.4	4.5		RWB	A	橙	80	
5	壺	13.3	5.0		RW	A	橙	90	
6	壺	12.4	5.2		RWB	C	橙	80	
7	壺	12.5	5.2		RW	A	橙	80	
8	壺	12.9	5.4		R	B	鈍赤褐	70	口辺部内面煤付着
9	高壺	(12.1)	8.5	(10.2)	RB	A	橙	30	
10	高壺	12.6	8.6	10.8	RWB	A	橙	100	
11	大型壺	15.4	6.6		RB	A	橙	60	
12	大型壺	(16.4)	(6.6)		RWB	A	橙	40	
13	壺	(13.8)	(9.9)		RWB	A	橙	25	
14	甕	17.6	(11.6)		W	A	鈍橙	80	転用器台
15	壺	(19.7)	(27.0)		RB	A	橙	30	
16	壺	(22.5)	(30.6)		WB	A	橙	30	

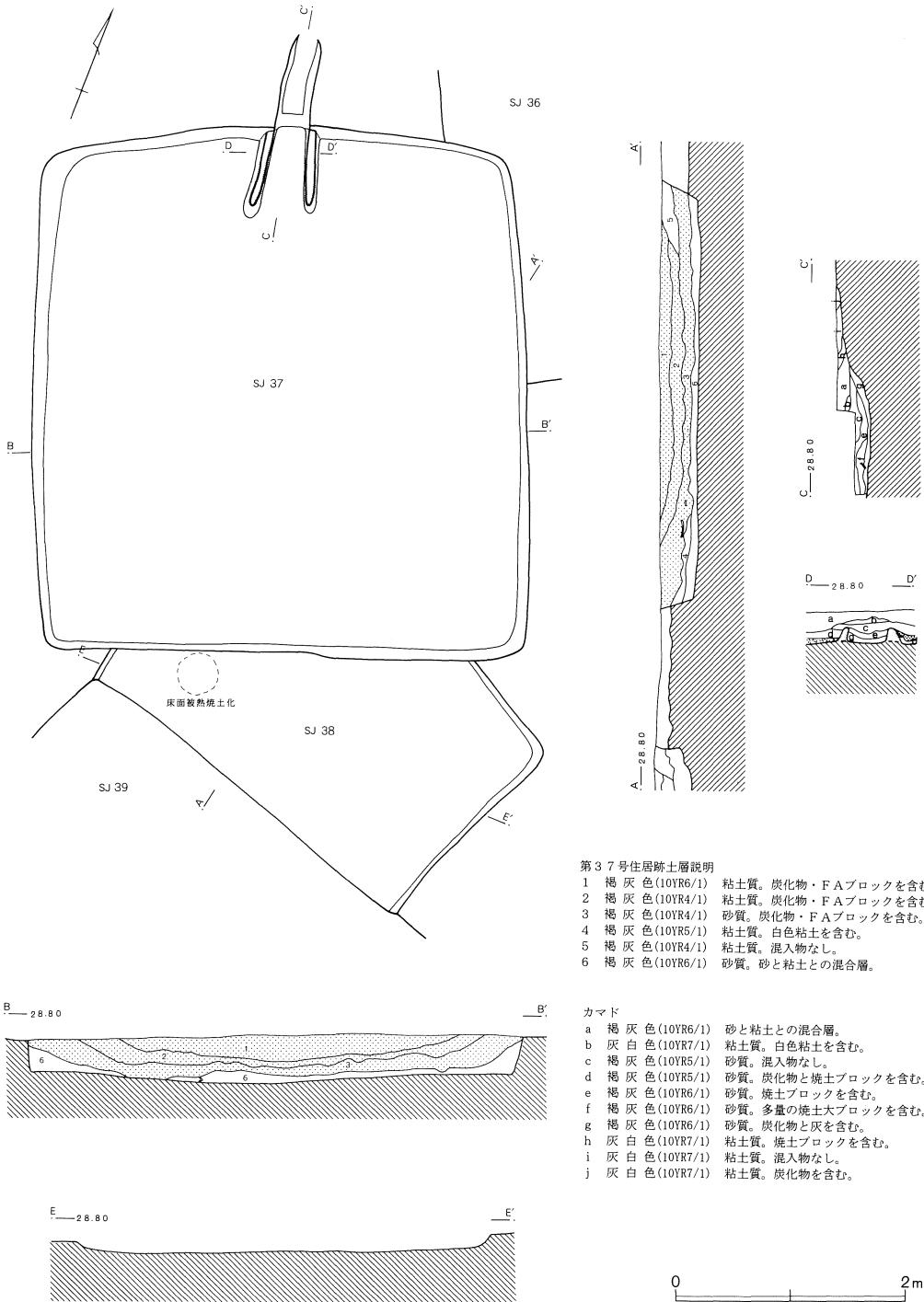
### 第38号住居跡

きー5グリッドに位置する。第37号・第39号住居跡の両方に切り込まれていた。規模は東西軸長3.26m、深さ0.11mである。床面は地山砂層に掘り込まれ、カマドの痕跡・壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかったが、北西壁寄りで被熱焼土化した部分がみとめられた。

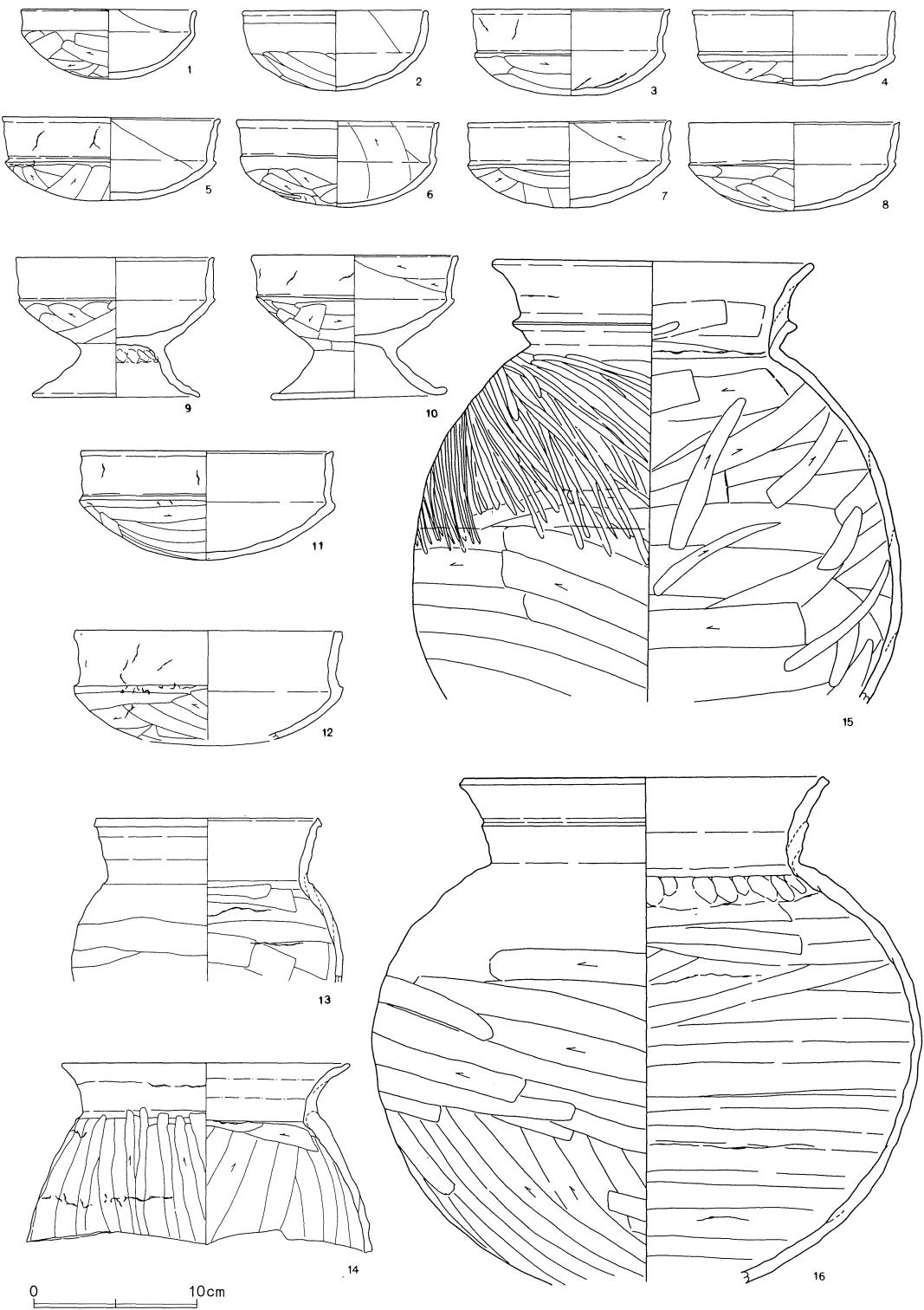
遺物の量は僅少だが、有稜の模倣壺出現以前の段階と考えられる。4の壺は擦切痕をもつものの、時期差があるため、本住居跡廃絶後に覆土中に混入したものと考えられる。

### 第38号住居跡出土土器観察表

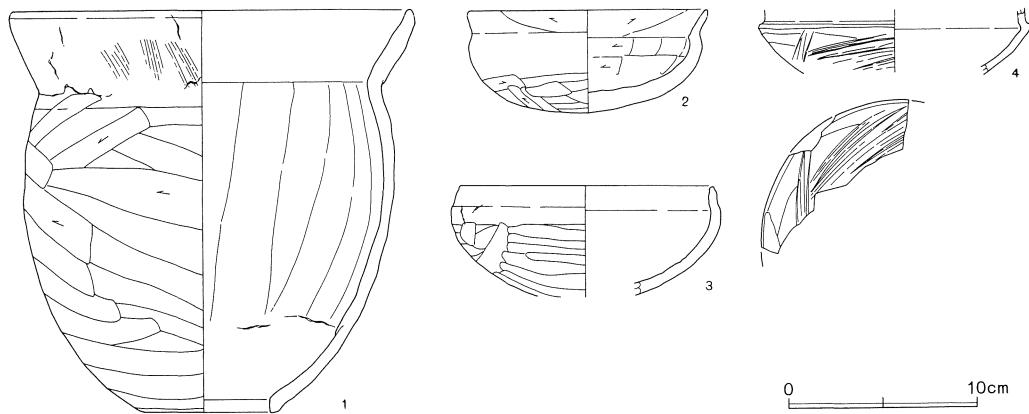
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	21.4	21.1	6.9	RB	A	橙	80	
2	椀	12.7	5.4		RWB	A	橙	100	
3	壺	(13.5)	(5.9)		RB	A	明赤褐	40	
4	壺		(3.4)		RW	A	橙	25	擦切痕壺片 覆土混入



第129図 第37・38号住居跡



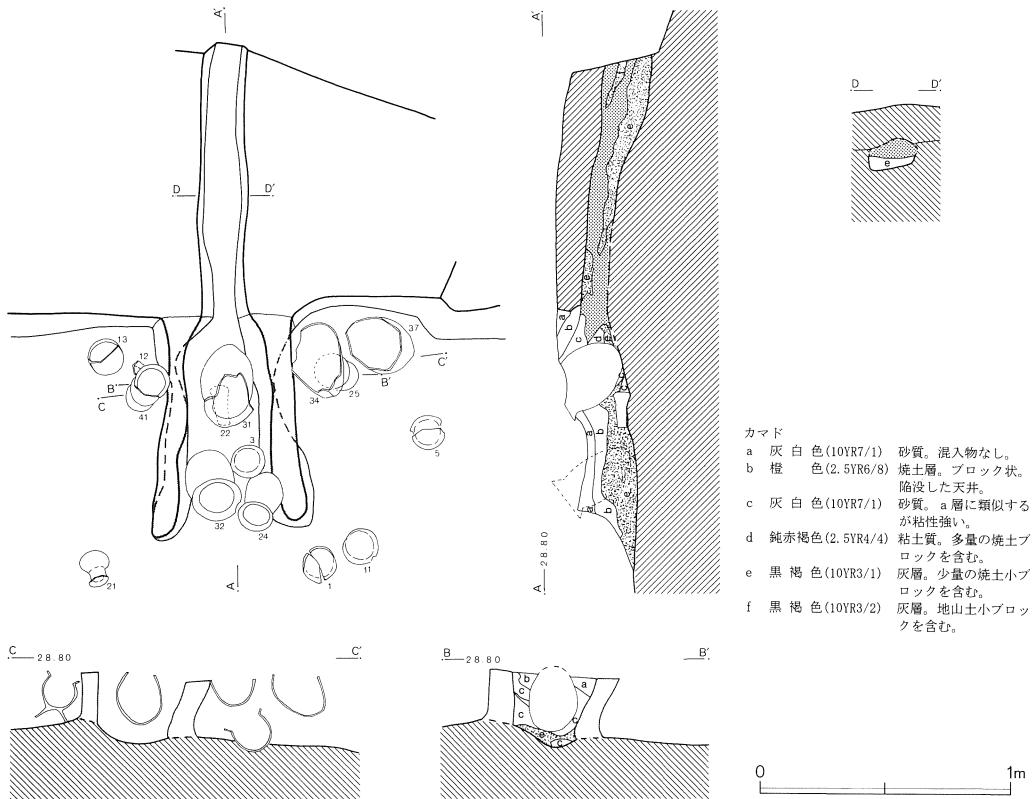
第130図 第37号住居跡 出土遺物



第131図 第38号住居跡 出土遺物

### 第39号住居跡

きー5グリッドに位置する。第38号・第40号・第41号・第42号住居跡を切り込んでいたが、FA降下前のこの4軒に対して、本住居跡は降下後のものと考えられる。規模は長軸長4.95m、短軸長4.88m、深さ0.25mで、主軸方向はN-160°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、柱穴・ピッ

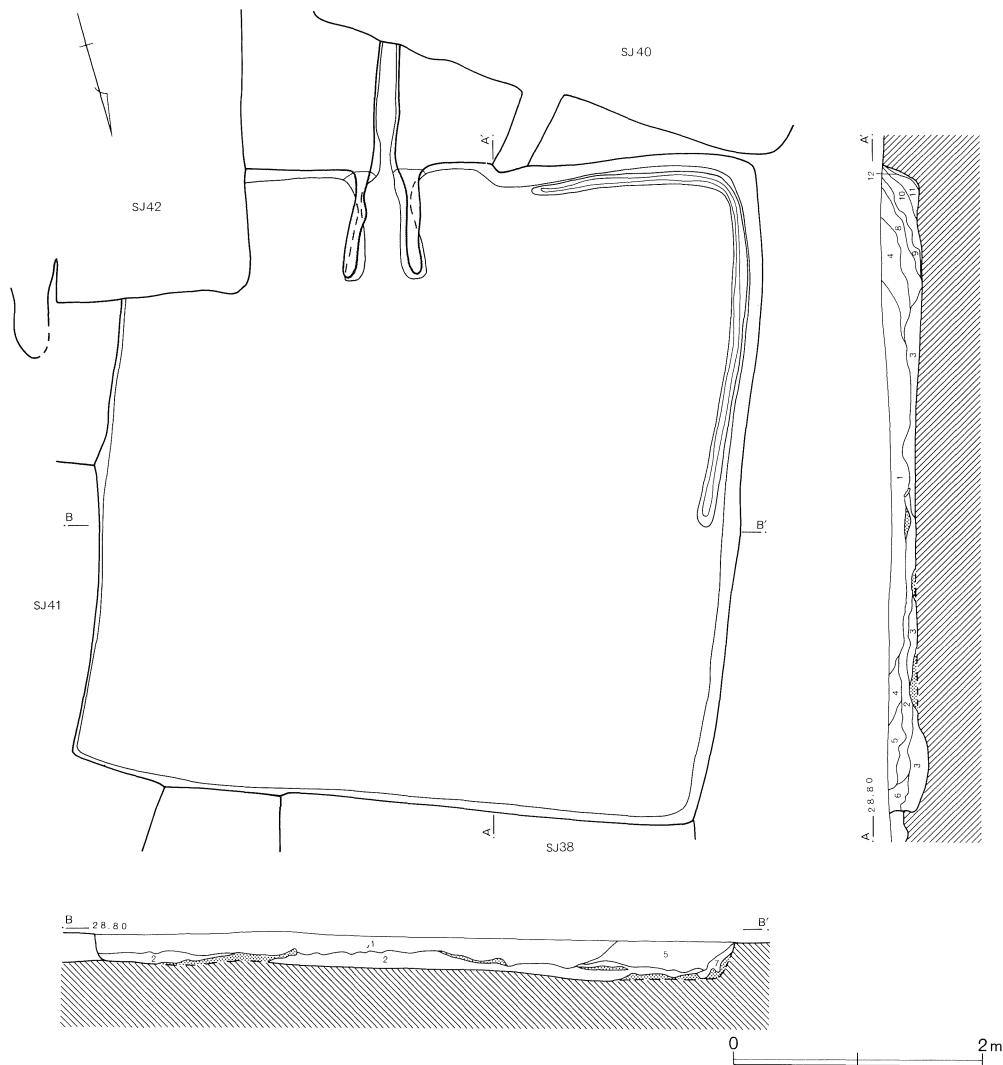


第132図 第39号住居跡 カマド

トは確認できなかつたが、南壁西半から西壁南半にかけて幅10cm、深さ7cmの壁溝を検出した。

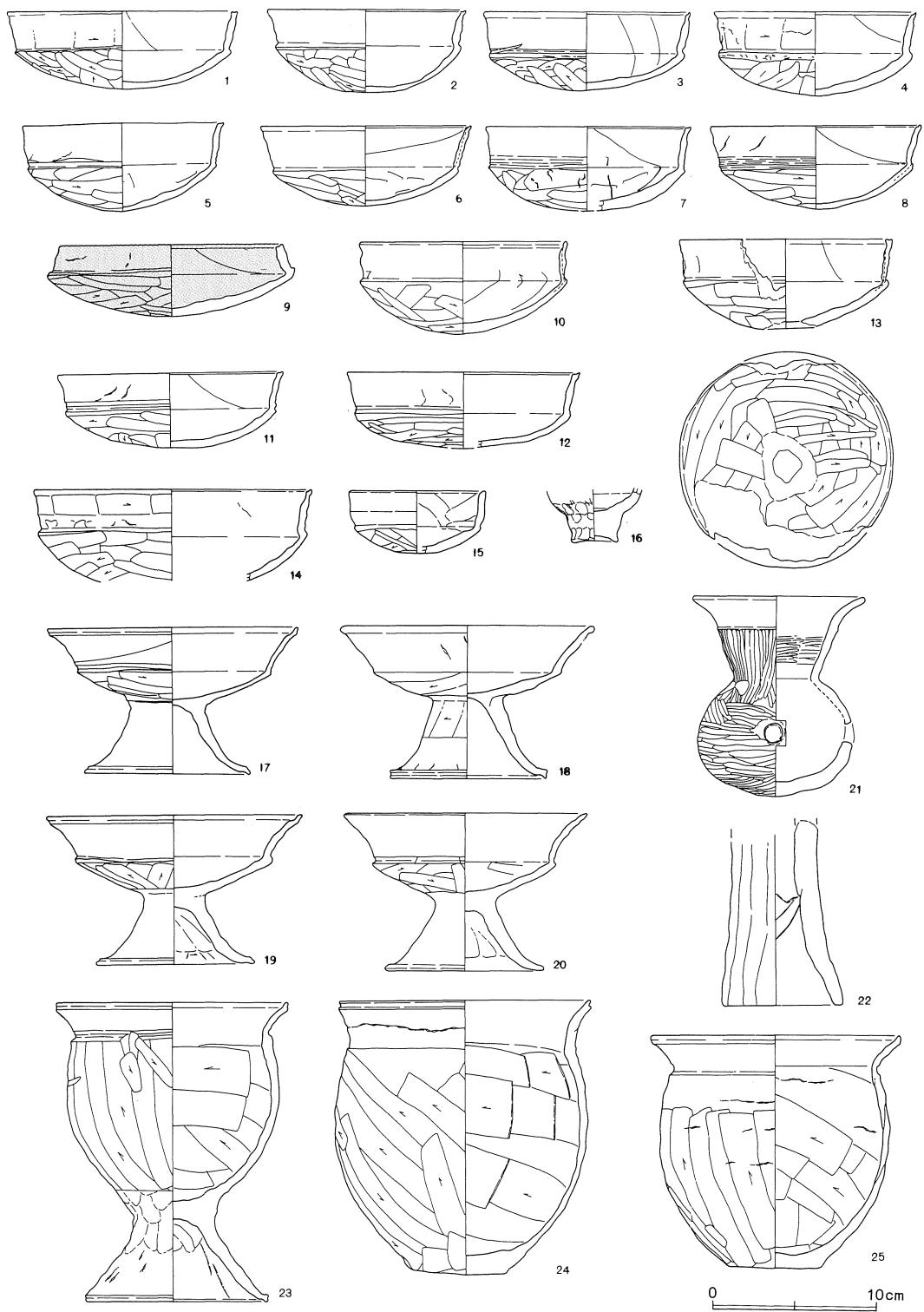
カマドは南壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは86cm、燃焼部の幅は33cmである。煙道幅は19cm、長さ105cm以上で、地山を水平に掘り抜いていた。支脚位置は中軸線上であり、土製支脚が使用されていた。

遺物はカマド内とその周辺部に集中して出土した。燃焼部では31の甕が支脚にのせられ、32の甕と24の小型甕が焚き口寄りに掛けられ、さらに3の壺が天井の上に置かれた状態で出土した。カマド右側からは34・37の甕と25の小型甕が出土したが、34は25の上にのっていた。一方カマド左側か

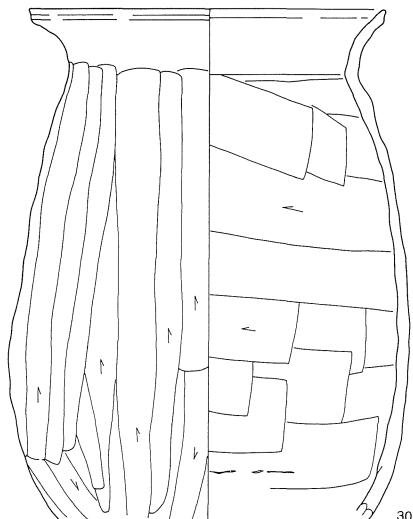
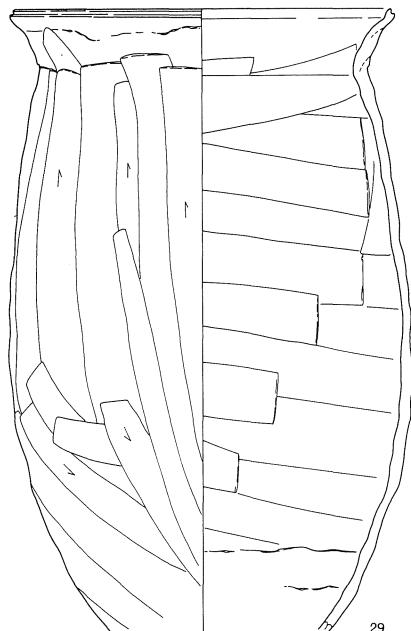
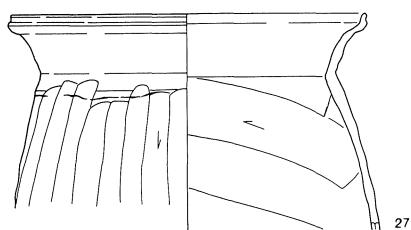
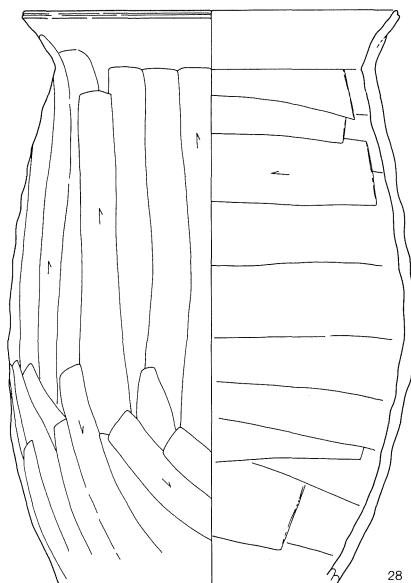
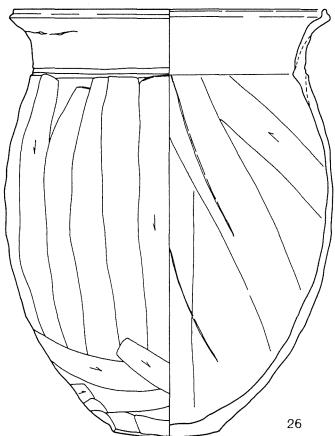


- |                                      |                                      |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 暗灰褐色(10YR6/1) 炭化物を含む。              | 7 暗灰褐色(10YR5/1) 多量に炭化物を含む。粘土と砂との混合層。 |
| 2 暗灰褐色(10YR6/1) 炭化物を含む。              | 8 灰黄褐色(10YR6/2) 砂層。炭化物を含む。           |
| 3 灰黄褐色(10YR6/2) 微量の炭化物を含む。粘土と砂との混合層。 | 9 黒褐色(10YR3/1) 炭化物層。                 |
| 4 暗灰褐色(10YR6/1) 微量の炭化物を含む。           | 10 灰黄褐色(10YR6/2) 砂層。炭化物・灰を含む。        |
| 5 暗灰褐色(10YR6/1) 粘土と砂との混合層。           | 11 灰黄褐色(10YR6/2) 砂層。炭化物・灰・焼けた砂を含む。   |
| 6 鈍橙色(7.5YR6/4) 焼土・炭化物を含む。           | 12 灰褐色(7.5YR6/2) 炭化物・焼土を含む。          |

第133図 第39号住居跡

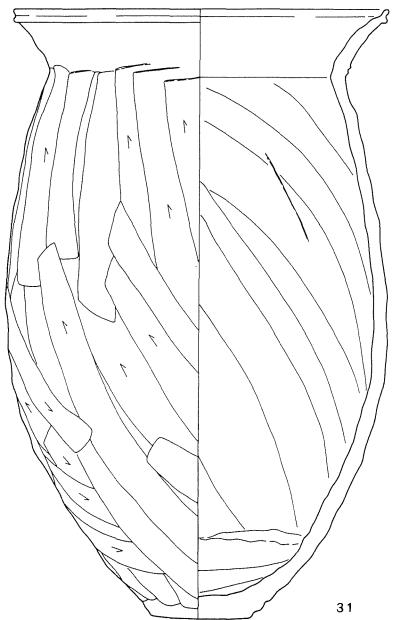


第134図 第39号住居跡 出土遺物（1）

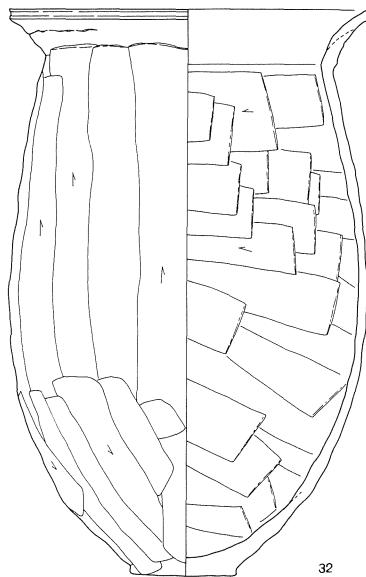


0 10cm

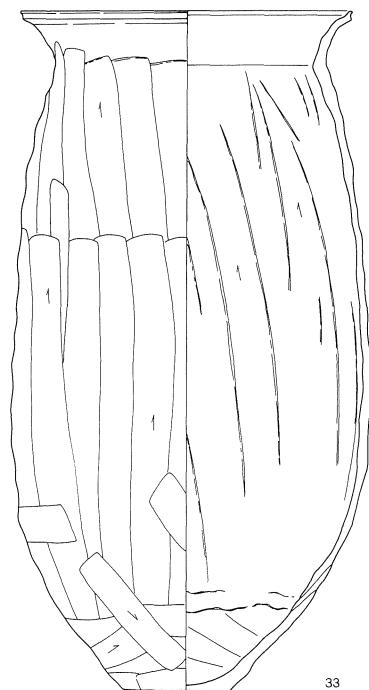
第135図 第39号住居跡 出土遺物（2）



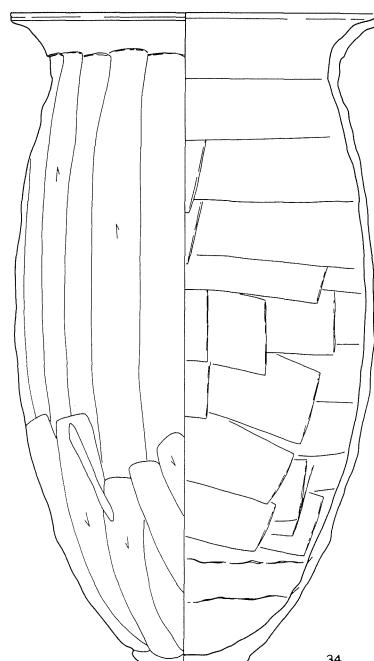
31



32



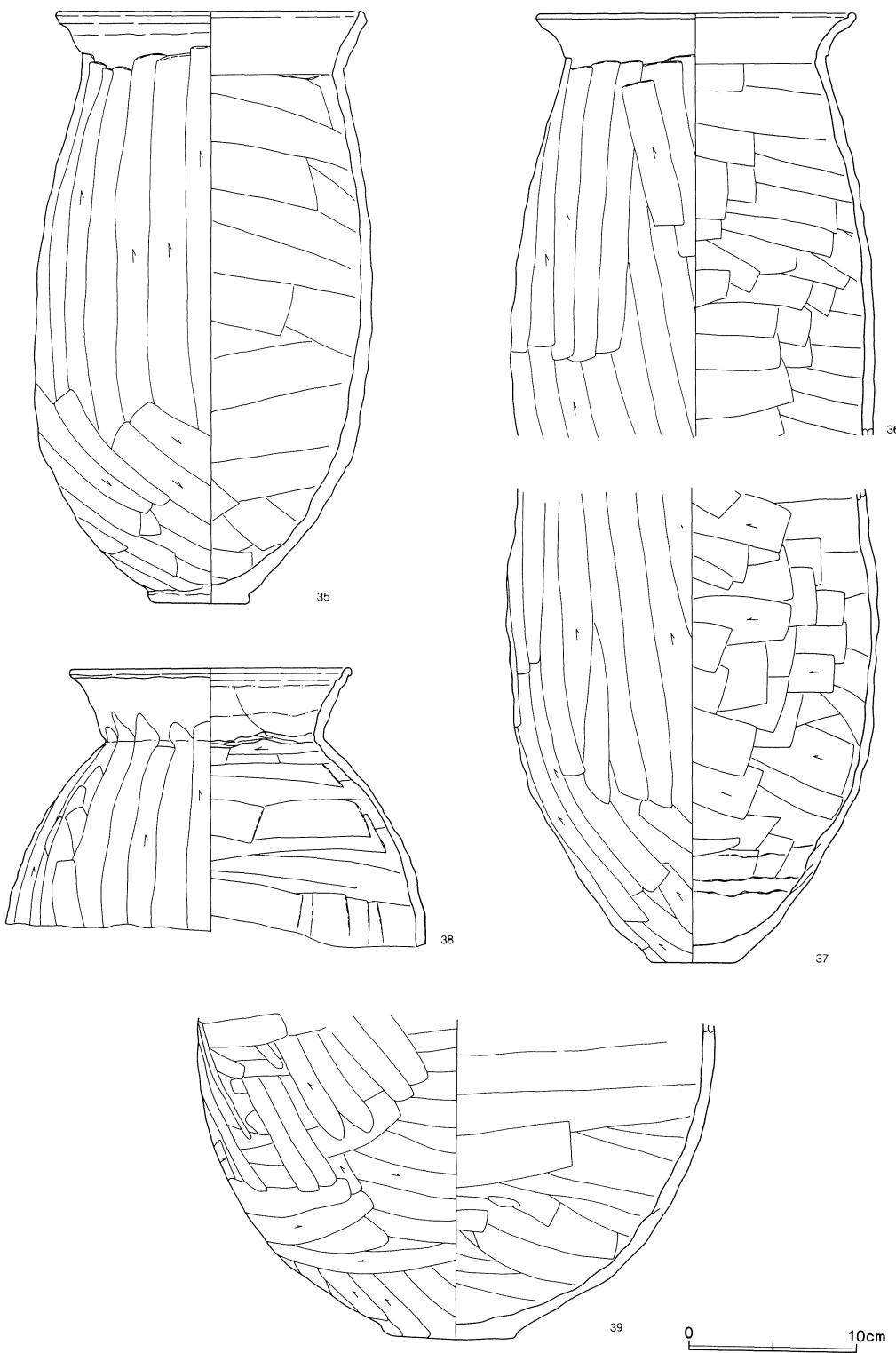
33



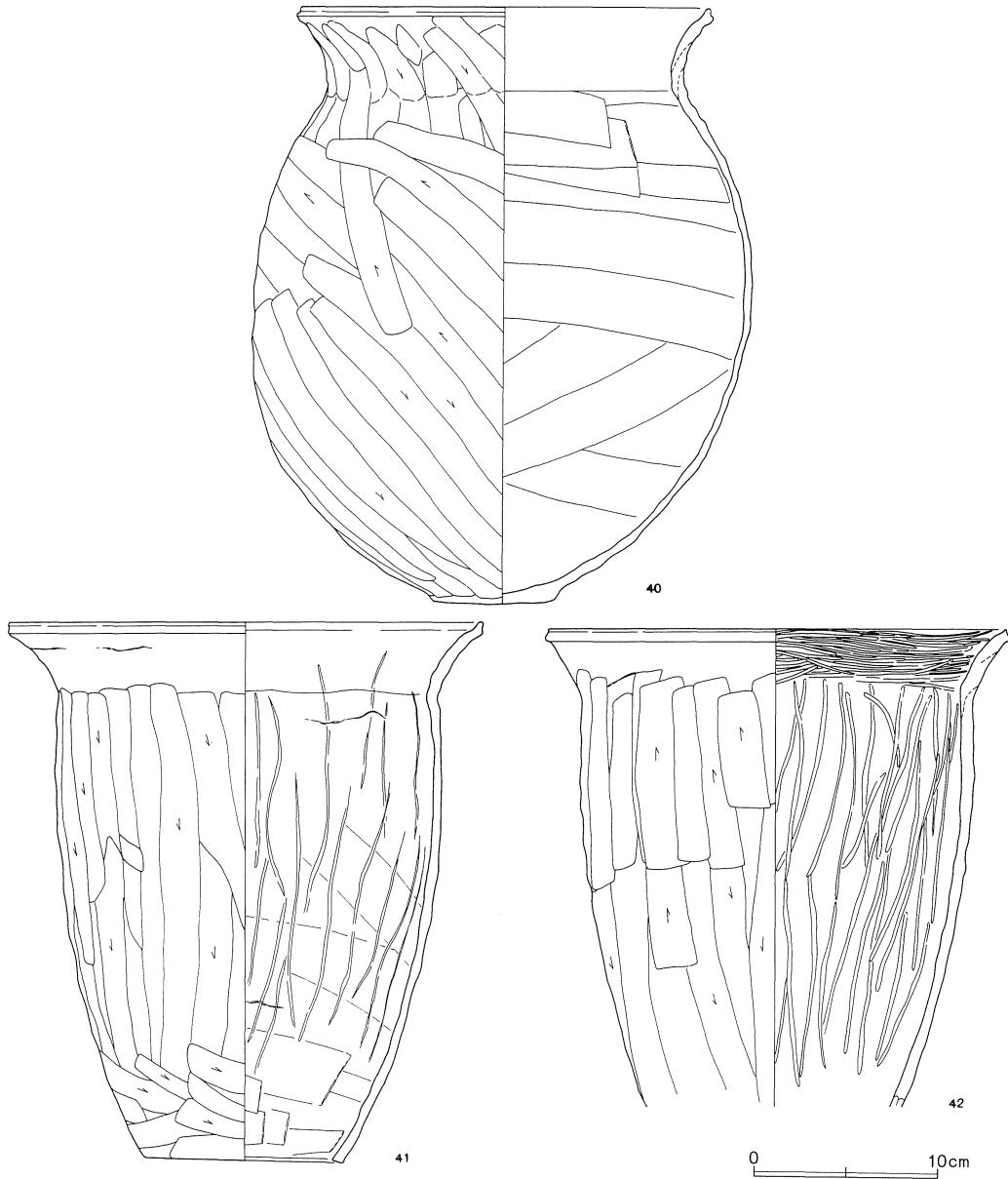
34

0 10cm

第136図 第39号住居跡 出土遺物（3）



第137図 第39号住居跡 出土遺物 (4)



第138図 第39号住居跡 出土遺物（5）

らは23の台付甕と13の底部穿孔坏が出土した。カマド前面からは、1・5・11の坏と21の甕が出土した。38は壺から転用した器台で、南隅から出土した。全体的にみて点数の多い甕類の口縁端部が面もしくは凹線をもつのが特徴的である。このほか敲石・磨石・台石・石皿などの石器類が出土した。

第39号住居跡出土土器観察表

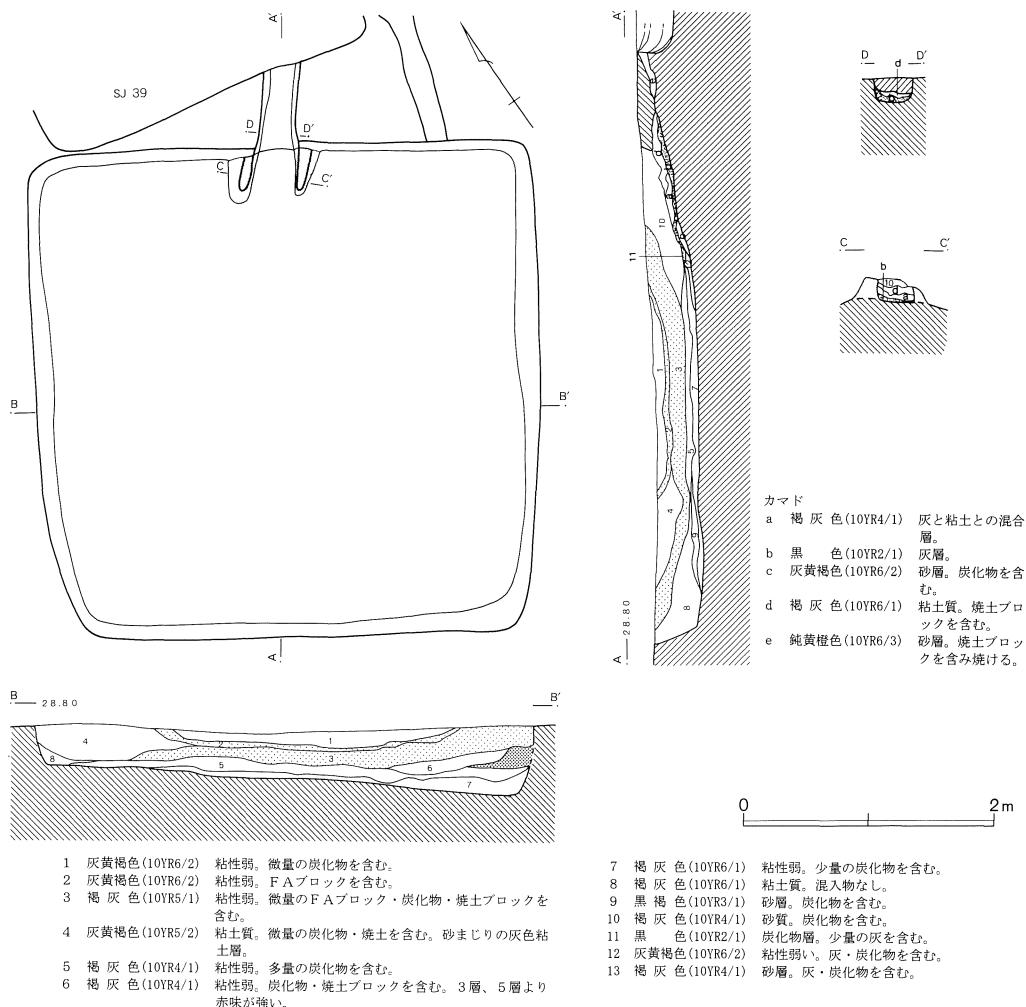
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	14.0	4.7		RW	A	灰黄	100	No.3 2次被熱で還元化
2	壺	12.1	5.0		RWB	A	明褐	80	
3	壺	12.6	4.8		WB	A	橙	100	No.11
4	壺	12.3	5.1		RW'	A	橙	60	
5	壺	12.3	5.4		RWW'	A	鈍橙	100	No.1
6	壺	12.9	4.9		RW	A	橙	90	
7	壺	12.5	(5.1)		RW	A	鈍橙	50	
8	壺	12.9	5.0		RW	C	鈍黃橙	80	
9	壺	13.2	4.3		R	A	鈍橙	80	内外面黒色処理
10	壺	12.8	5.6		W	B	明赤褐	70	
11	壺	13.8	4.5		WB	A	鈍橙	100	No.2
12	壺	(14.2)	(4.6)		W'B	A	鈍褐	40	No.10
13	壺	13.0	(5.4)		RB	B	鈍黃橙	70	No.5 穿孔土器
14	大型壺	(17.1)	(5.5)		WB	A	橙	25	
15	ミニチュア	(8.3)	(3.7)		RWB	A	橙	25	
16	手捏土器		(3.1)	(2.9)	RW	A	橙	40	
17	高壺	15.3	8.8		W	A	橙	90	
18	高壺	15.4	9.2	9.5	RWB	B	鈍橙	40	
19	高壺	15.6	9.0	9.7	B	A	橙	50	
20	高壺	(14.8)	(19.5)	(9.8)	RW	A	鈍橙	30	No.5
21	甌	15.5	12.1		W	A	橙	80	No.4
22	支脚		10.3	7.4	WB	A	鈍褐	90	No.15
23	台付甌	14.2	18.0	11.1	WBU	A	鈍橙	90	No.9
24	小型甌	15.4	16.5	6.0	B	C	鈍橙	100	No.12
25	小型甌	15.3	14.0	5.6	W	A	橙	100	No.8
26	甌	16.9	22.4	5.8	RWB	A	鈍橙	60	
27	甌	19.0	(11.4)		WB	A	鈍黃橙	50	
28	甌	20.0	(30.3)		B	A	鈍黃橙	70	
29	甌	20.1	32.7		RB	A	鈍黃橙	70	
30	甌	(18.9)	(26.9)		W'B	A	鈍黃橙	30	
31	甌	19.9	32.0	5.2	B	A	灰白	80	No.13
32	甌	19.0	29.7	5.7	W	A	明黄褐	100	No.14
33	甌	17.6	35.7	5.7	B	C	鈍橙	70	
34	甌	(19.7)	(34.2)	(5.6)	B	A	橙	40	No.17
35	甌	18.5	35.0	5.8	RWB	A	鈍褐	70	
36	甌	19.0	(25.0)		RB	A	鈍黃橙	70	
37	甌		(28.0)	5.2	B	A	鈍橙	70	No.6
38	壺	16.8	(15.5)		RWB	A	浅黄	80	転用器台
39	壺		(19.0)	7.5	RWB	A	鈍黃橙	70	
40	甌	22.4	32.2	6.6	W'B	A	浅黃橙	80	
41	甌	25.8	28.9	10.8	RWB	A	浅黃橙	90	
42	甌	25.1	(25.6)		RW	A	橙	80	

## 第40号住居跡

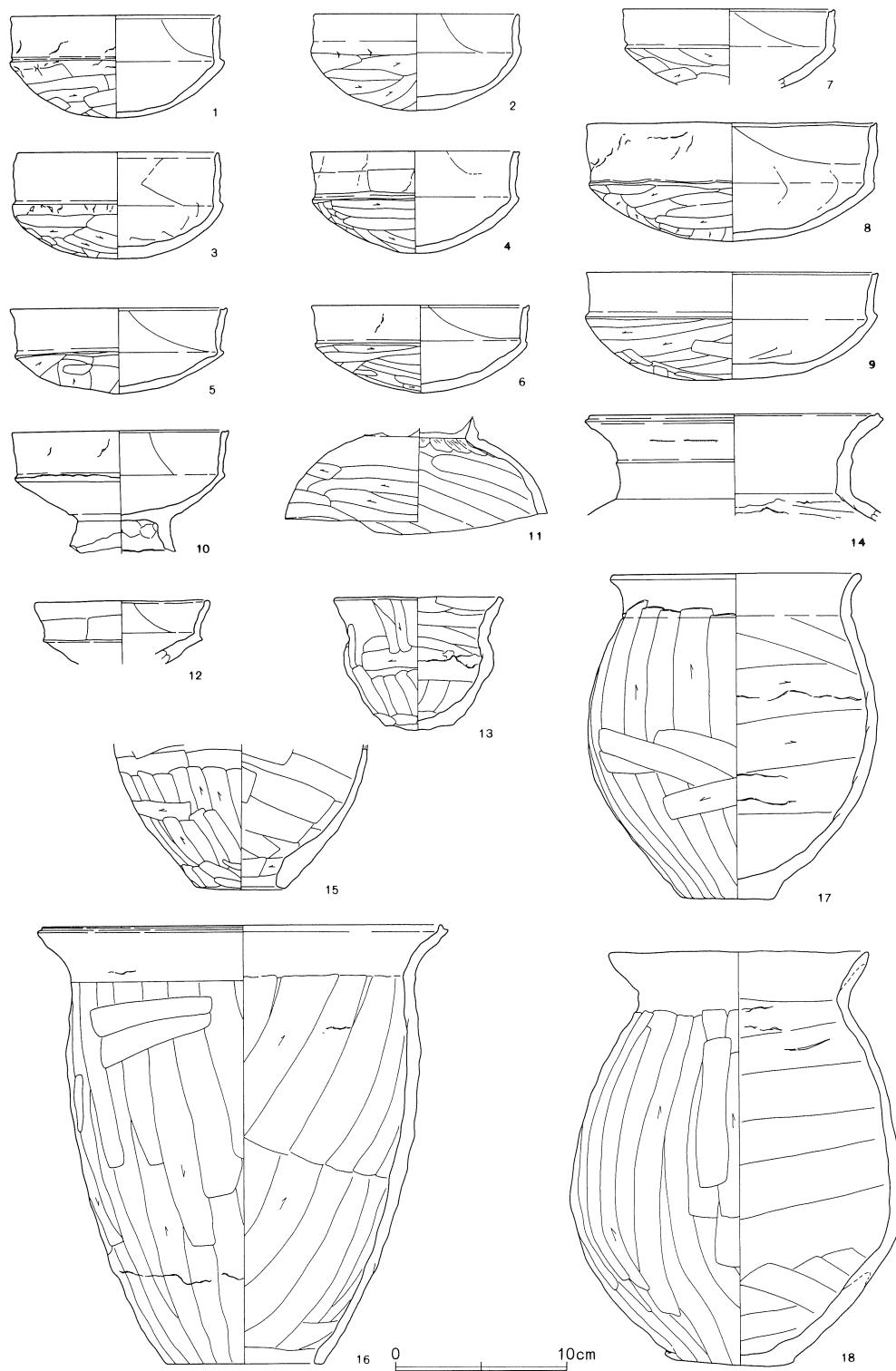
きー5グリッドに位置する。第39号住居跡に切られていた。規模は長軸長3.73m、短軸長3.68m、深さ0.41mで、主軸方向はN-34°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱等は確認できなかった。覆土第2・3層中にFAブロックが含まれていた。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは40cmで、燃焼部の幅は29cmである。煙道の幅は34cm、長さ70cm以上で、傾斜をつけて地山を掘り抜いていた。

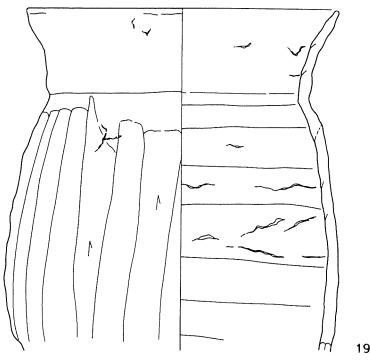
出土遺物のうち、10の高壙は脚裾部を水平に据えられるように打ち欠かれている。11の壙は口縁部を欠損するが胴部の割れ口は平滑に擦られており、器台への転用が考えられる。12はミニチュアの壙であるが体部のケズリはない。13は鉢形の手捏土器で内外面とも荒く指頭ナデされている。甕は多数出土したが他に比べてわずかに長目に外反するのが特徴である。



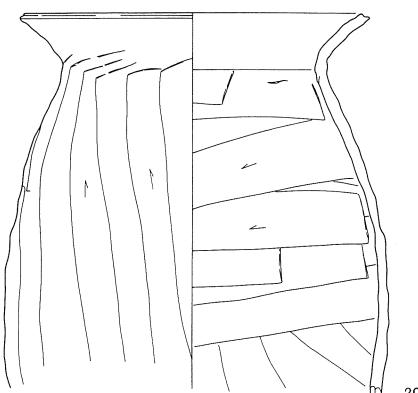
第139図 第40号住居跡



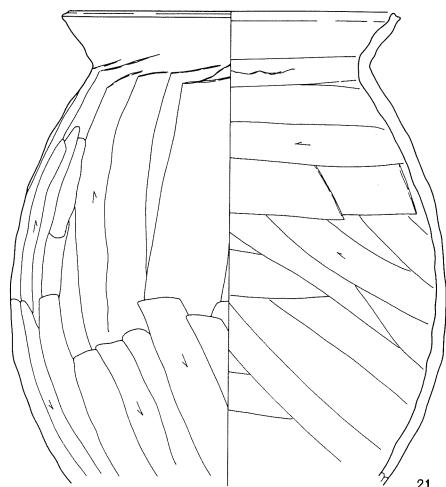
第140図 第40号住居跡 出土遺物（1）



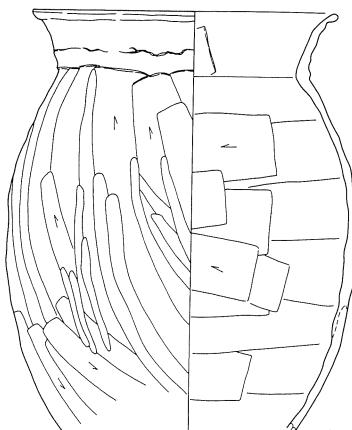
19



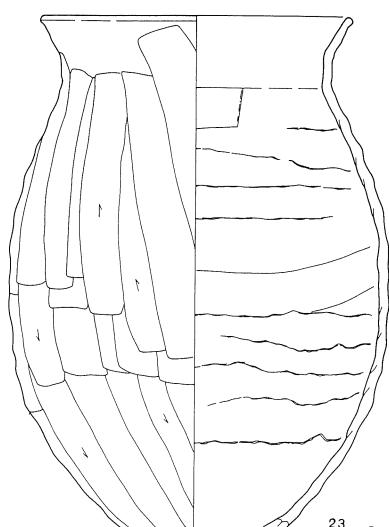
20



21



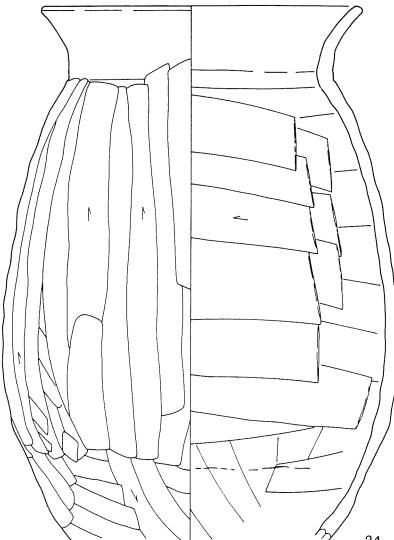
22



23

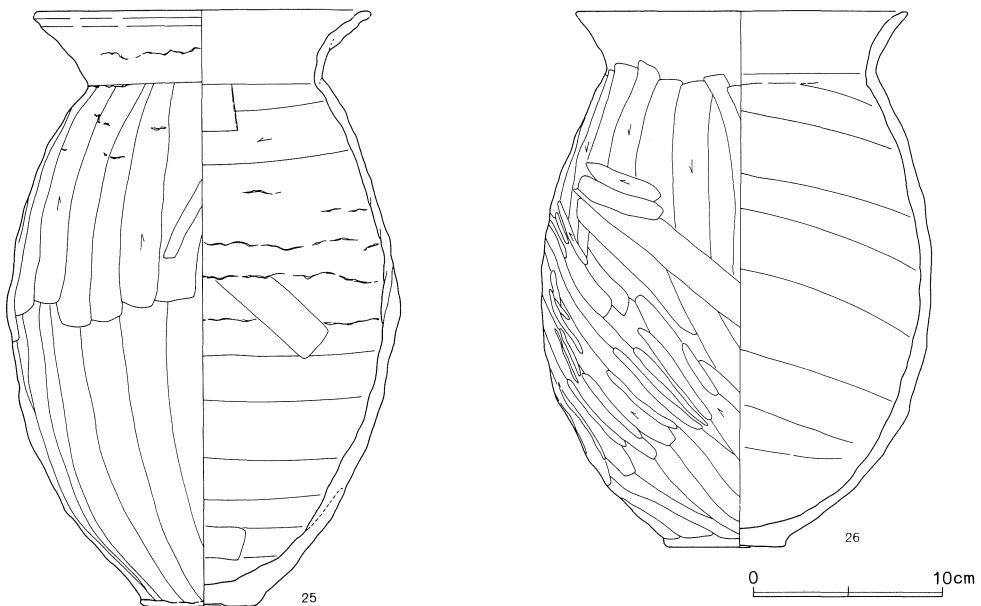
0

10 cm



24

第141図 第40号住居跡 出土遺物（2）



第142図 第40号住居跡 出土遺物（3）

第40号住居跡出土土器観察表

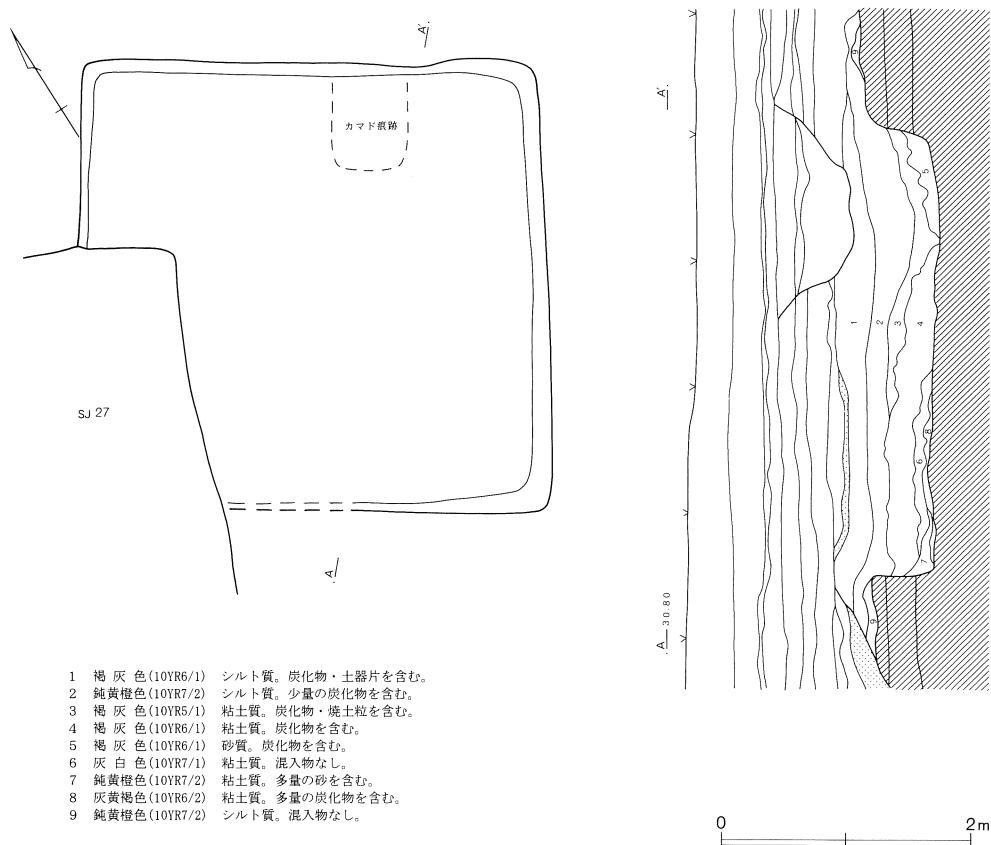
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.2	5.9		WB	B	橙	80	
2	壺	12.0	5.6		RWB	B	橙	80	
3	壺	11.7	6.2		RB	A	鈍橙	70	
4	壺	12.2	5.9		RW	A	橙	50	
5	壺	12.7	5.0		RWB	A	橙	100	
6	壺	12.7	5.1		RW	A	鈍橙	50	
7	壺	12.4	4.4		RWB	B	橙	70	
8	大型壺	(17.0)	6.7		RW	A	鈍橙	40	
9	大型壺	(17.0)	6.3		RW	A	鈍橙	40	
10	高壺	12.6	(7.1)		RW	C	橙	90	意図的に脚部を打ち欠く
11	壇		(5.3)		RWB	A	橙	90	転用器台 胴部割口を平らに擦る
12	壺	(10.3)	(3.6)		R	A	黒	40	ミニチュア風
13	手捏土器	(9.9)	7.7		WB	A	赤褐	25	指頭ナデ顯著 粗製
14	壺	(17.2)	(5.8)		RW	A	橙	30	
15	甌		(8.4)		W	A	橙	60	
16	甌	23.7	25.3	9.1	RW	A	明赤褐	60	
17	小型甌	14.6	18.8		RWB	B	鈍黃橙	90	
18	甌	15.2	23.9	7.3	B	A	浅黄	70	
19	甌	16.5	(18.0)		RWB	A	鈍黃橙	60	
20	甌	18.3	(19.8)		RWB	A	灰白	70	
21	甌	17.6	(25)		RB	A	鈍黃橙	70	
22	甌	16.2	(22.2)		WW'	A	鈍黃橙	60	
23	甌	16.4	(27.0)		RWW'B	A	鈍黃橙	80	
24	甌	(17.0)	(28.3)		RB	A	橙	30	
25	甌	17.6	31.3	6.2	RWW'B	A	鈍黃橙	80	
26	甌	17.6	28.2	6.5	RWH	A	暗褐	80	

## 第41号住居跡

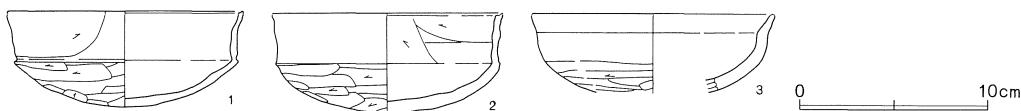
きー4グリッドに位置する。第39号住居跡に直接切り込まれていたが南側に存在する第42号住居跡は本住居跡の覆土上層部を切り込んでいた。カマドは北東壁際に焼土による痕跡をとどめるのみであった。規模は長軸長3.15m、短軸長3.39m、深さ0.48mで、主軸方向はN-30°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯藏穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

本住居跡は農道下の基本土層とあわせて土層観察をすることができた。自然堤防の河川へ向かう傾斜面に造られた住居であるため北東壁側と南西壁側の旧地表面では8cm程の比高差がある。また、両側の旧地表面上には鈍い黄褐色シルトの盛り土（9層）が認められ、周堤の残存と考えられる。覆土の状況は下層の分層ラインが乱れ、上層の1・2層の堆積によって一気に平坦化した後に南側の第42号住居跡が掘り込まれている。出土遺物が僅少なことと考えあわせると人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。1層の上面にはFAの分布がみとめられた。

図示できる遺物は壙3点のみであり、詳細な出土状況は不明である。3は口縁部が内湾する椀的なものだが、覆土中の混入土器であり、残存率も低い。このほかに砥石が1点出土した。



第143図 第41号住居跡



第144図 第41号住居跡 出土遺物

#### 第41号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	5.0		RW	A	橙	80	
2	壺	12.2	5.2		RW	B	明赤褐	80	
3	壺	(12.9)	(4.2)		W	A	橙	15	覆土中混入

#### 第42号住居跡

きー4 グリッドに位置する。第39号住居跡と第10号溝によって切られていた。一方、断面観察より、北側の第41号住居跡の覆土を切り込んでいることがみとめられた。カマドの煙道先端は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長2.73m、短軸長2.70m、深さ0.60mで、主軸方向はN-18°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1層中にはFAブロックが含まれていた。2層は炭化物層である。

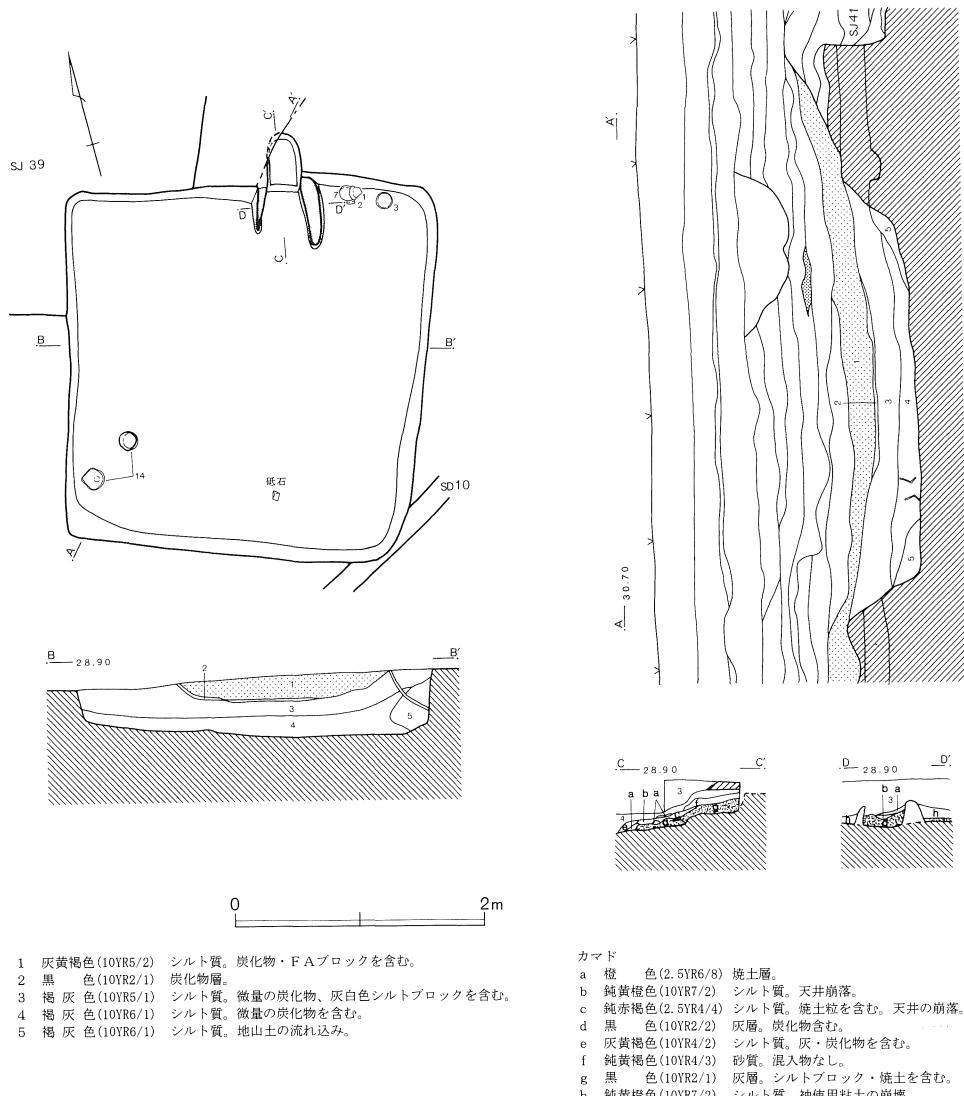
カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは44cmで、燃焼部の幅は32cmである。煙道は幅28cm、長さ40cm以上である。右袖の外側には灰層があった。

遺物は出土状態により2つのグループに分けることができる。1つは覆土下層の4・5層中に含まれた土器で、カマド右脇の1・2・3・7の壺と対角隅の14の甕および砥石などである。床面

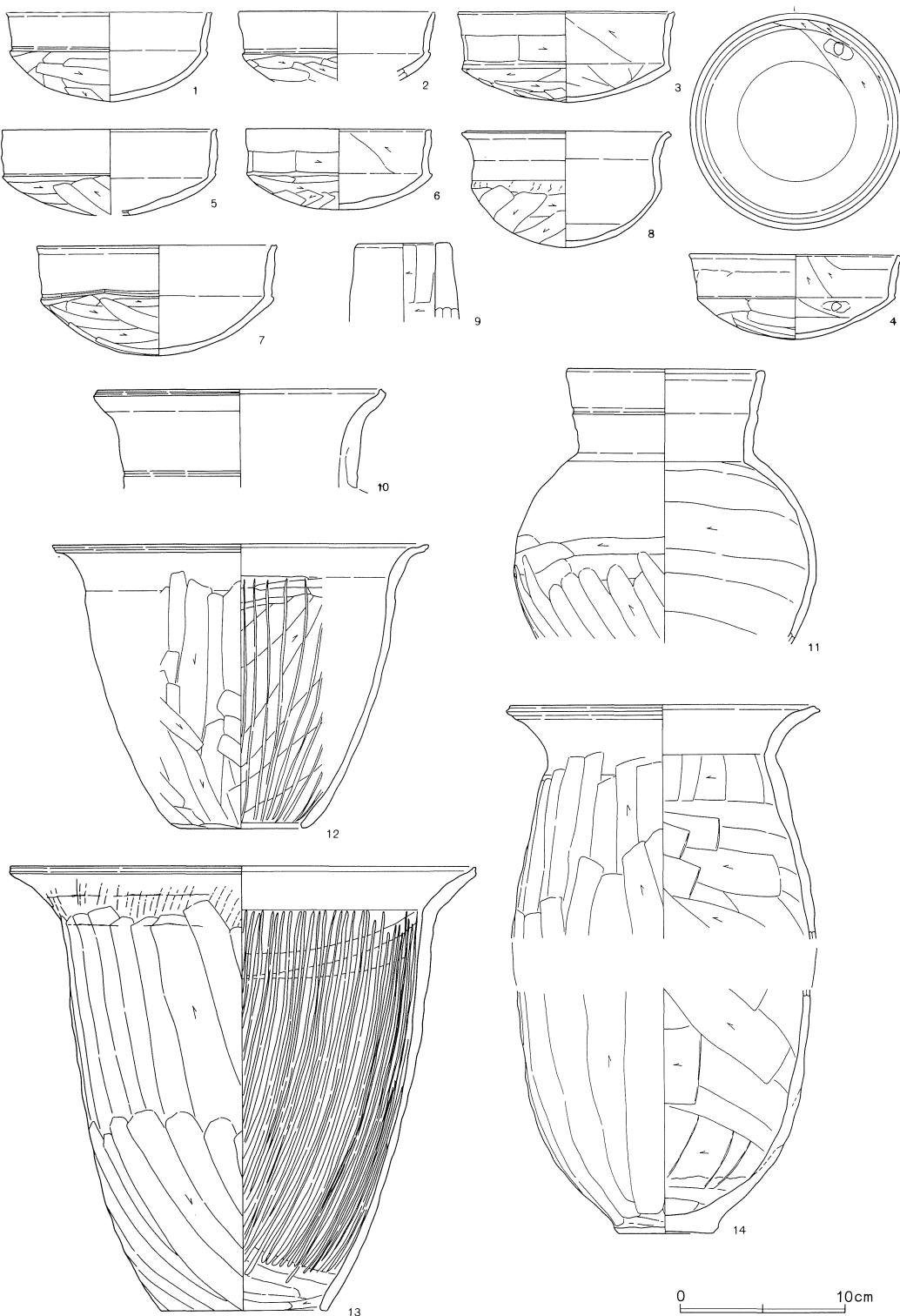
#### 第42号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	5.5		RW	A	橙	60	No.3 外面煤付着
2	壺	(12.0)	(4.3)		RW	A	橙	30	No.5
3	壺	13.2	5.5		RW	A	橙	75	No.6
4	壺	13.1	5.2		RW	A	橙	100	覆土 穿孔土器
5	壺	(13.2)	(5.2)		RW	B	鈍橙	45	覆土
6	壺	11.3	5.0		RWB	A	橙	75	
7	大型壺	(14.7)	(6.7)		RW	A	橙	40	No.4
8	椀	12.9	7.0		RW	A	橙	75	覆土
9	支脚	6.0	4.6		RW	C	鈍赤褐	25	覆土
10	壺	(17.4)	(5.9)		RW	A	橙	40	覆土
11	壺	12.0	(16.5)		RWB	B	橙	70	覆土
12	甕	(22.9)	(17.1)	(7.4)	RW	A	橙	15	覆土
13	甕	28.4	26.9	10.2	RWB	A	橙	95	覆土
14	甕	18.9	31.8	5.8	WW'B	A	明褐灰	60	No.1・2
15	甕	16.2	30.9	5.5	WW'B	A	灰白	95	覆土
16	甕	17.0	29.4	5.3	RWB	A	橙	95	覆土

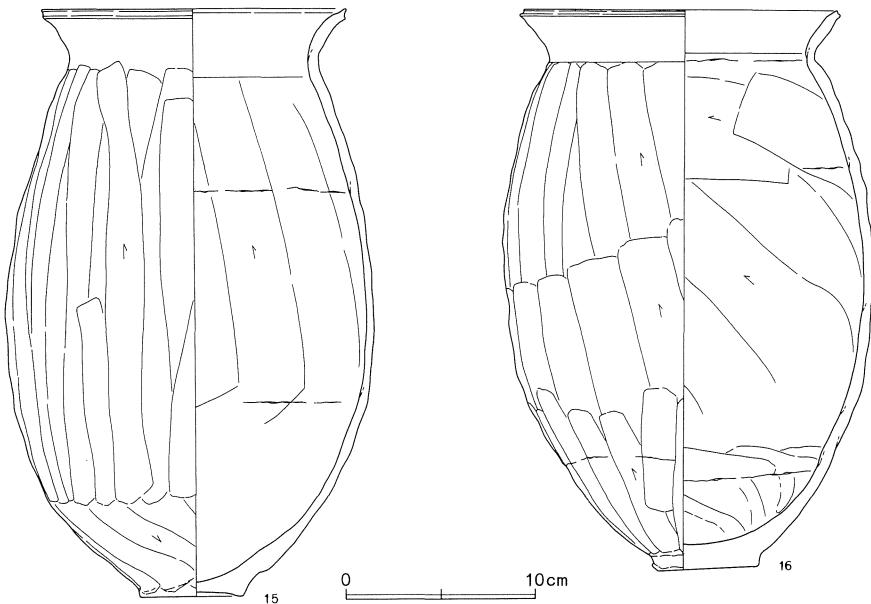
よりもやや浮き、14の甕は上半と下半が分離した状態だった。もう1つは上層の1層中から出土した土器群である。下層の一群が残存率が低いのに対して、上層土器群は4・6の壺、8の椀、13の甕、15・16の甕など比較的の残存率の高いものが多い。窪地状になった廃絶住居跡への投棄と考えられるが9の土製支脚片の存在などを考えあわせると、他住居のカマドの廃棄ないしは破壊行為に伴なって不用となった土器を投棄したと見ることもできる。4の壺は外側からの圧力によって体部に穿孔されている。12の甕は中型だが、同じ程度の容積をもつ甕の多くが底孔の小さな逆円錐形なのに対して、本例は基本的に大型甕と同一成形である点で類例が少ない。甕は上・下層のものとも口縁端部が面取りされているが、下層の14の方が重厚な成形である。



第145図 第42号住居跡



第146図 第42号住居跡 出土遺物（1）



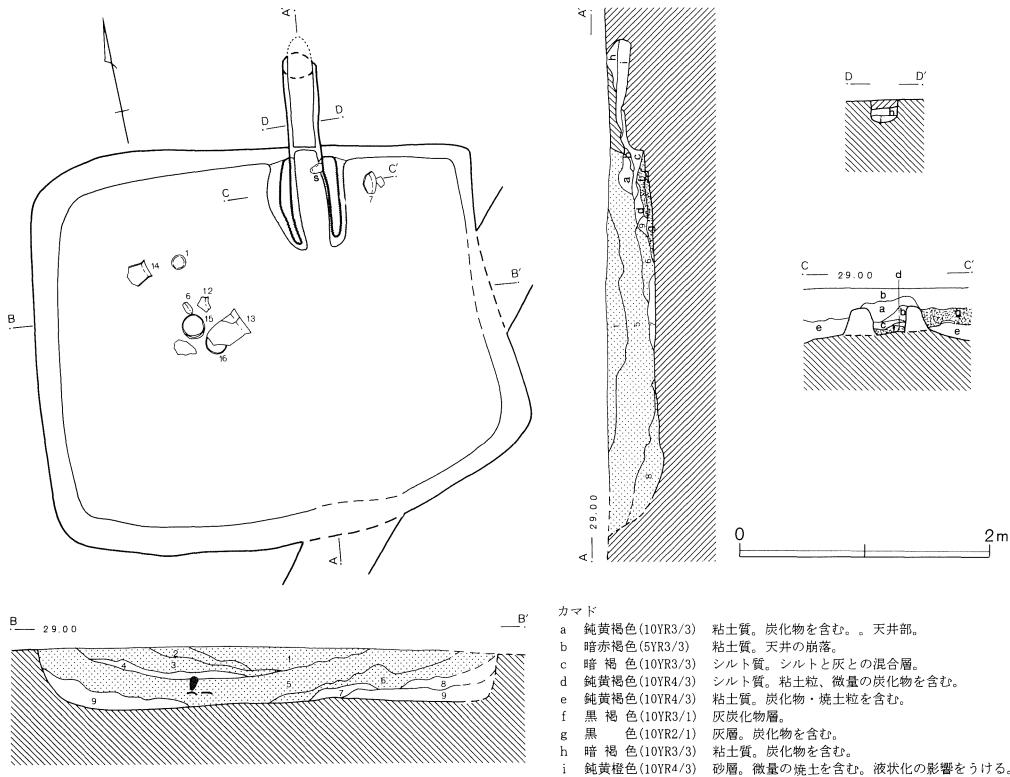
第147図 第42号住居跡 出土遺物（2）

#### 第43号住居跡

きー4グリッドに位置する。東壁、南壁の一部は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長3.15m、短軸長2.82m、深さ0.40mで、主軸方向はN-8°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土第4・7・9層をのぞく大部分の層にFAブロックが含まれていた。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは78cmで、燃焼部の幅は26cmである。煙道は幅22cm、長さ88cmで、水平に掘り抜かれ、燃焼部奥壁より63cm付近に煙出口をもつたと見られる。燃焼部内より礫が1点出土したが支脚に使用された可能性が考えられる。右袖の外側には灰層があった。

遺物は7がカマド右脇の灰層中から出土した以外はすべて第5層中からの出土である。5の大型壺は底部を穿孔されている。6の大型壺は体部の割れ口が直線的になるように意図的に打ち欠かれている。8の壺は2片に分かれているが体部外面に擦切痕がある。13の甕はほぼ完形だが口縁部から肩部にかけての範囲と底部をのぞいて、胴部外面には粘土が塗布され、火を受けて硬化しているために、その際使用された工具痕も明瞭に残っている。塗布の範囲は上下端とも水平で幅広の帯状であるが、全周のうちの5分の1程には塗布されていない部分もある。本来は他の住居のカマド袖先端に構築材として倒立転用され、袖粘土とともに塗り込められていたが、カマドの改築もしくは破壊によって除去・投棄されたものと考えられる。15は甕からの転用器台で、口縁部内面は磨滅帶をもち下端は安定して据えられるよう水平に打ち欠かれている。

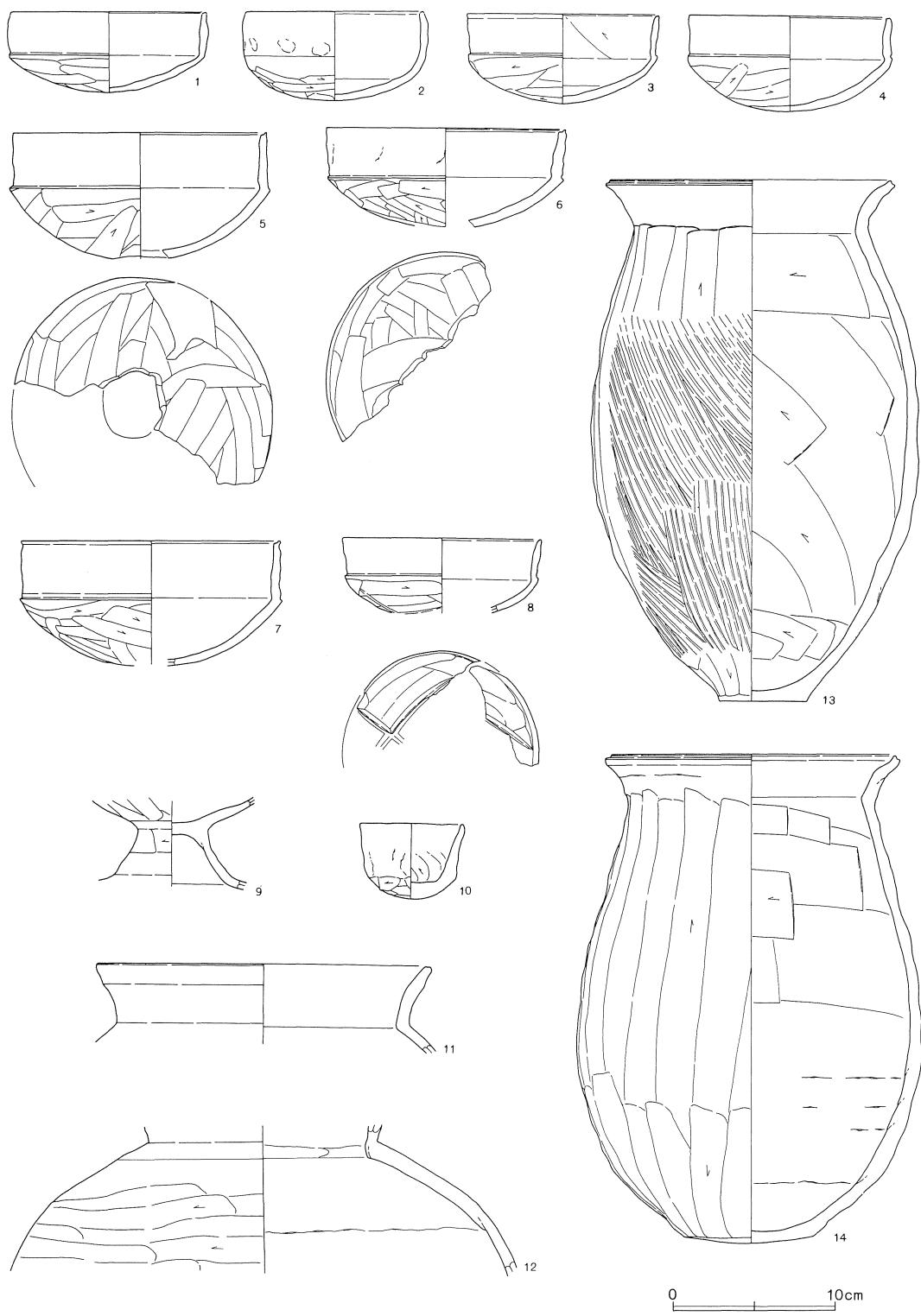


- 1 黒褐色(10YR3/2) 粘土質。微量の焼土粒、炭化物・FAブロックを含む。  
 2 黒褐色(10YR3/2) シルト質。微量のFAブロック・炭化物・焼土粒を含む。  
 3 純黄褐色(10YR4/3) シルト質。微量の炭化物・FAブロックを含む。  
 4 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。多量の炭化物を含む。  
 5 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。微量のFA粒を含む。  
 6 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。炭化物・FAブロック・焼土粒を含む。  
 7 黒褐色(10YR3/2) シルト質。微量の焼土粒を含む。  
 8 純黄褐色(10YR4/3) シルト質。微量のFAブロックを含む。  
 9 暗褐色(10YR3/3) 砂層。液状化による地山砂混合層。

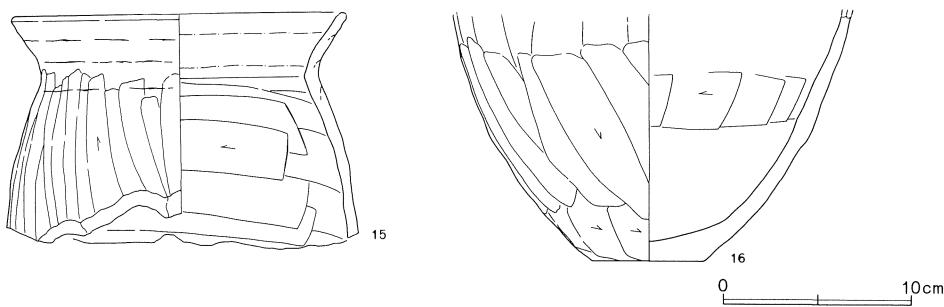
第148図 第43号住居跡

第43号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.0	5.0		RWB	A	橙	90	No.3 外面煤付着
2	壺	10.9	5.4		RWB	A	橙	80	
3	壺	11.8	5.5		RW	B	鈍橙	70	覆土
4	壺	12.4	5.8		RWW'B	C	橙	60	
5	大型壺	15.6	(7.5)		RW	A	橙	50	覆土 穿孔土器
6	大型壺	(14.7)	(6.0)		RW	A	淡赤橙	30	No.5 意図的な打ち欠き
7	大型壺	(15.9)	(7.5)		RWB	A	灰白	20	No.1
8	壺	(12.3)	(4.6)		RW	B	鈍赤褐	30	覆土 擦切痕
9	高壺		(5.2)		RW	A	橙	40	
10	手捏土器	6.5	4.6		RW	A	橙	50	
11	壺	(20.5)	(4.7)		RW	A	橙	25	覆土
12	壺		(9.0)		RWB	B	灰白	25	No.6
13	甕	17.8	31.7	5.4	RWB	A	橙	95	No.7 外面に粘土塗りつけ
14	甕	18.1	29.8	8.0	RWW'	A	橙	40	No.4
15	甕	17.7	(12)		RWW'	A	浅黄橙	100	No.8 転用器台
16	甕		(13)	6.0	RWB	B	灰白	90	No.9



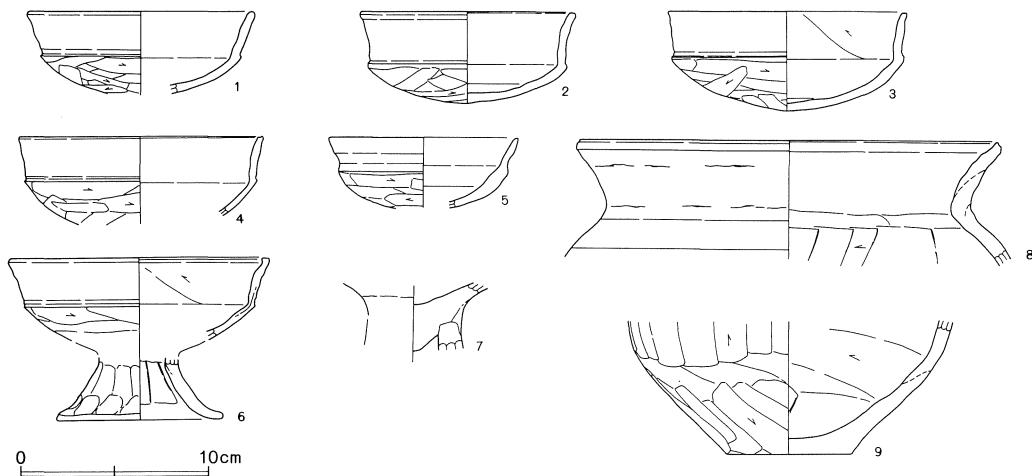
第149図 第43号住居跡 出土遺物（1）



第150図 第43号住居跡 出土遺物（2）

#### 第44号住居跡

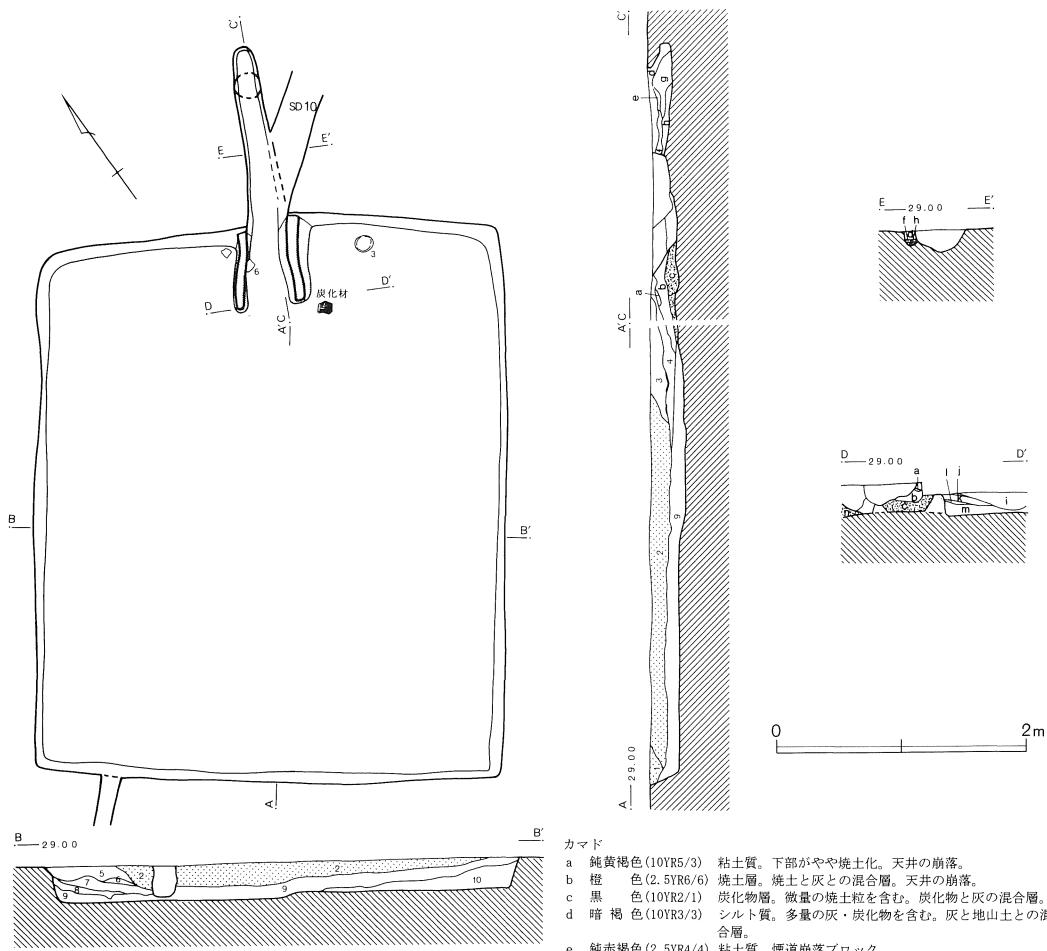
きー4 グリッドに位置する。第10号溝が本住居跡を切って縦断していた。カマドの煙道部と左袖先端が破壊されており、土層断面の詳細な観察に支障をきたした。規模は長軸長4.35m、短軸長3.59m、深さ0.26mで、主軸方向はN-38°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、壁溝・貯



第151図 第44号住居跡 出土遺物

#### 第44号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.0	(4.4)		RW	A	淡赤橙	50	
2	壺	11.5	4.8		RW	A	明赤褐	80	
3	壺	12.7	5.2		RW	A	淡赤橙	75	No. 3
4	壺	(13.0)	(4.6)		RW	A	鈍橙	25	体部内面に焦げ付着
5	壺	(10.1)	(3.7)		RW	A	橙	15	ミニチュア風
6	高壺	(13.8)	(8.5)	(8.7)	RW	A	橙	30	No. 1
7	高壺		(3.7)		RW	A	橙	80	
8	壺	(22.2)	(6.2)		RW	A	橙	25	
9	壺		(7.0)	(6.7)	RW	A	鈍橙	40	木葉底



カマド

- a 鈍赤褐色(10YR5/3) 粘土質。下部がやや焼土化。天井の崩落。
- b 橙色(2.5YR6/6) 焼土層。焼土と灰との混合層。天井の崩落。
- c 黒色(10VR2/1) 炭化物層。微量の焼土粒を含む。炭化物と灰の混合層。
- d 暗褐色(10YR3/3) シルト質。多量の灰・炭化物を含む。灰と地山土との混合層。
- e 鈍赤褐色(2.5YR4/4) 粘土質。煙道崩落ブロック。
- f 鈍赤褐色(2.5YR4/4) シルト質。多量の灰・炭化物ブロックを含む。煙道天井部崩落上。
- g 黑色(10VR2/1) 炭化物層。炭化物・灰・シルトの混合層。
- h 黑色(10VR2/1) 灰層。
- i 暗褐色(10YR3/3) シルト質。微量の炭化物を含む。
- j 褐色(10YR4/4) シルト質。やや焼土化したシルト層。
- k 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。混入物なし。
- l 黑色(10VR2/1) 灰層。
- m 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。細砂ブロック・炭化物を含む。
- n 黑色(10VR2/1) 炭化物層。炭化物と黒灰の混合層。

第152図 第44号住居跡

蔵穴・柱穴・ピット等は確認できなかった。覆土第1・2層中にはFAブロックが含まれていた。

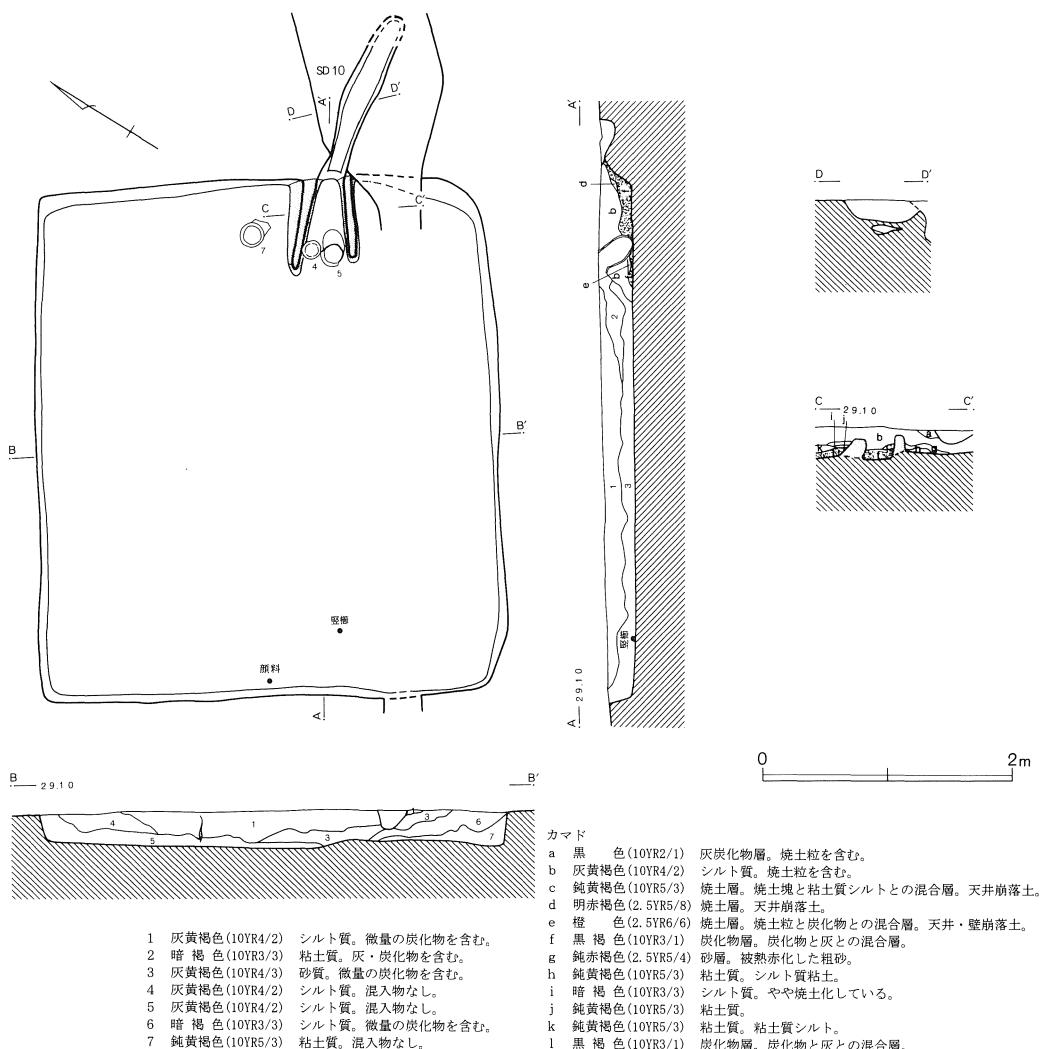
カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは30cmで、燃焼部の幅は37cmである。煙道は幅22cm、長さ148cmで、地山を水平に掘り抜いていたが、先端の土層の状況より見て燃焼部奥壁から118cmのところに煙出口をもっていたと思われる。左袖の外側には灰層があった。

遺物の量は少なく、カマド周辺から数点出土した。6の高壙は燃焼部内からの出土であり、3の壙はカマド右側の灰層に伴うものである。5はミニチュア的な小型壙である。カマド右袖先端付近には炭化材が存在した。

## 第45号住居跡

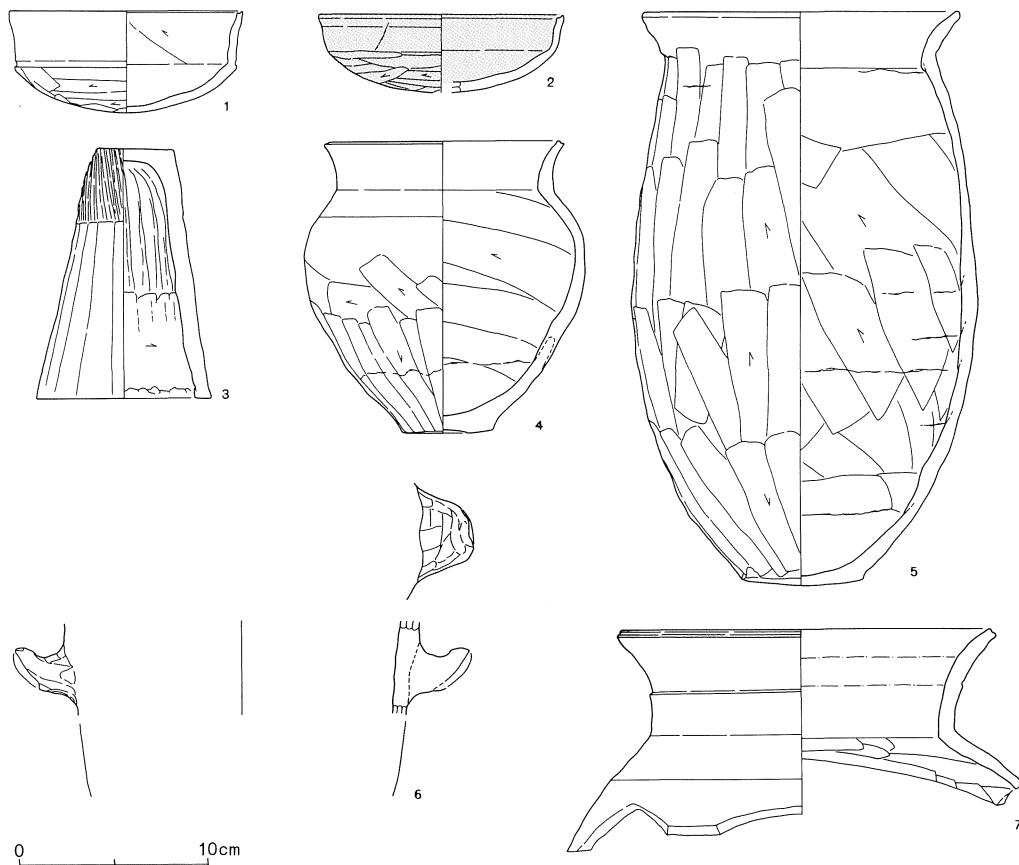
きー4グリッドに位置する。第10号溝が本住居跡を切って縦断するためカマド煙道部の先端と壁の一部が破壊されていた。規模は長軸長3.97m、短軸長3.60m、深さ0.25mで、主軸方向はN-58°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土は自然の堆積状況を示すが、後述するように堅櫛が出土したため、リン酸・カルシウム分析を試みたが骨の存在を示す結果は得られなかった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは75cm、燃焼部の幅は23cmである。煙道は幅20cm、長さ100cmで、地山を水平に掘り抜いているが、燃焼部の主軸とは一致せず燃焼部から見て右方向に大きく傾いていた。左袖の外側には灰層があり、7の土器の上に被っていた。



第153図 第45号住居跡

遺物の量は少なくカマド燃焼部内より、4の小型甕と5の甕が掛け口に掛けられた状態で横に並列して出土した。3の支脚はカマド内からの出土ではない。7は壺からの転用器台だが、カマド左側の床面上に据え置かれた状態で出土した。6は甕の把手だが幅の広い舌状であり、第121号住居跡や第141号住居跡出土の把手付甕に比べ形態が異なるとともに、胎土が精緻で焼成も良好である。土器以外で特筆されるのは竹製の堅櫛の存在で、南隅寄りの床面上で検出した。また南西壁下中央では赤色顔料の小ブロックが出土した。



第154図 第45号住居跡 出土遺物

#### 第45号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.3)	(5.3)		RW	A	橙	25	
2	壺	(12.9)	(4.2)		RW	A	鈍橙	25	内外面黒色処理
3	支脚	18.2	9.2	RWB	B	明赤褐	70	外面上部木口状工具による連続オサエ	
4	小型甕	12.6	15.2	4.8	RWB	B	灰白	95	
5	甕	16.8	30.2	6.5	RWB	A	灰白	95	No.3
6	甕		(5.0)		RWB	A	橙	15	甕把手
7	壺	20.0	(9.7)		RW	B	橙	90	No.1 転用器台

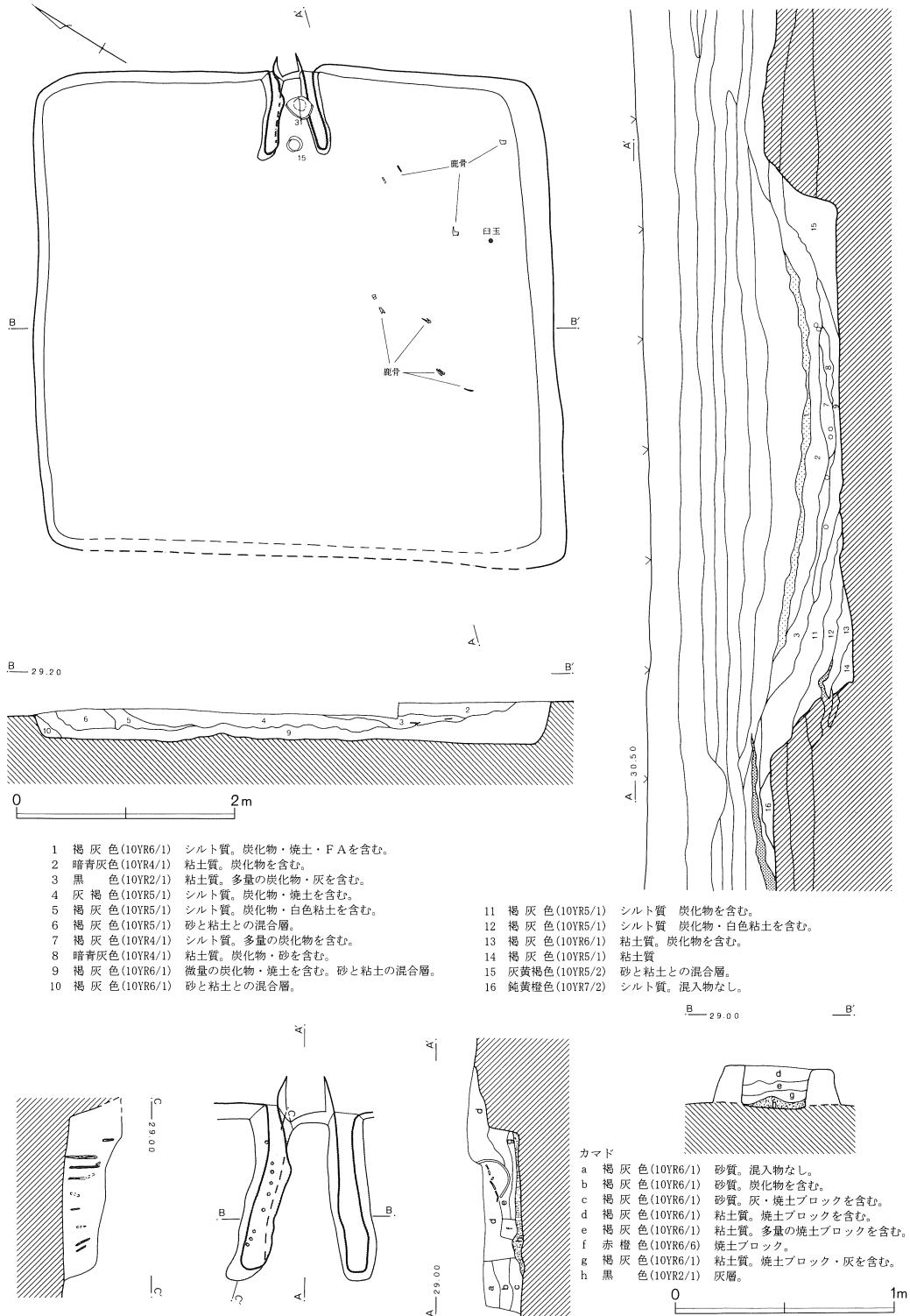
## 第46号住居跡

く－4 グリッドに位置する。規模は長軸長4.34m、短軸長4.09m、深さ0.65mで、主軸方向はN－56°－Eである。土層断面の観察の結果、A断面の南西壁上に、鈍い黄橙色シルトの盛り土（16層）がみとめられ、周堤の残存を考えることができる。床面は地山砂層に掘り込まれているため、特に南西壁が液状化現象によって大きく攪乱されていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。覆土第1層中にはFAブロックが包含されていた。

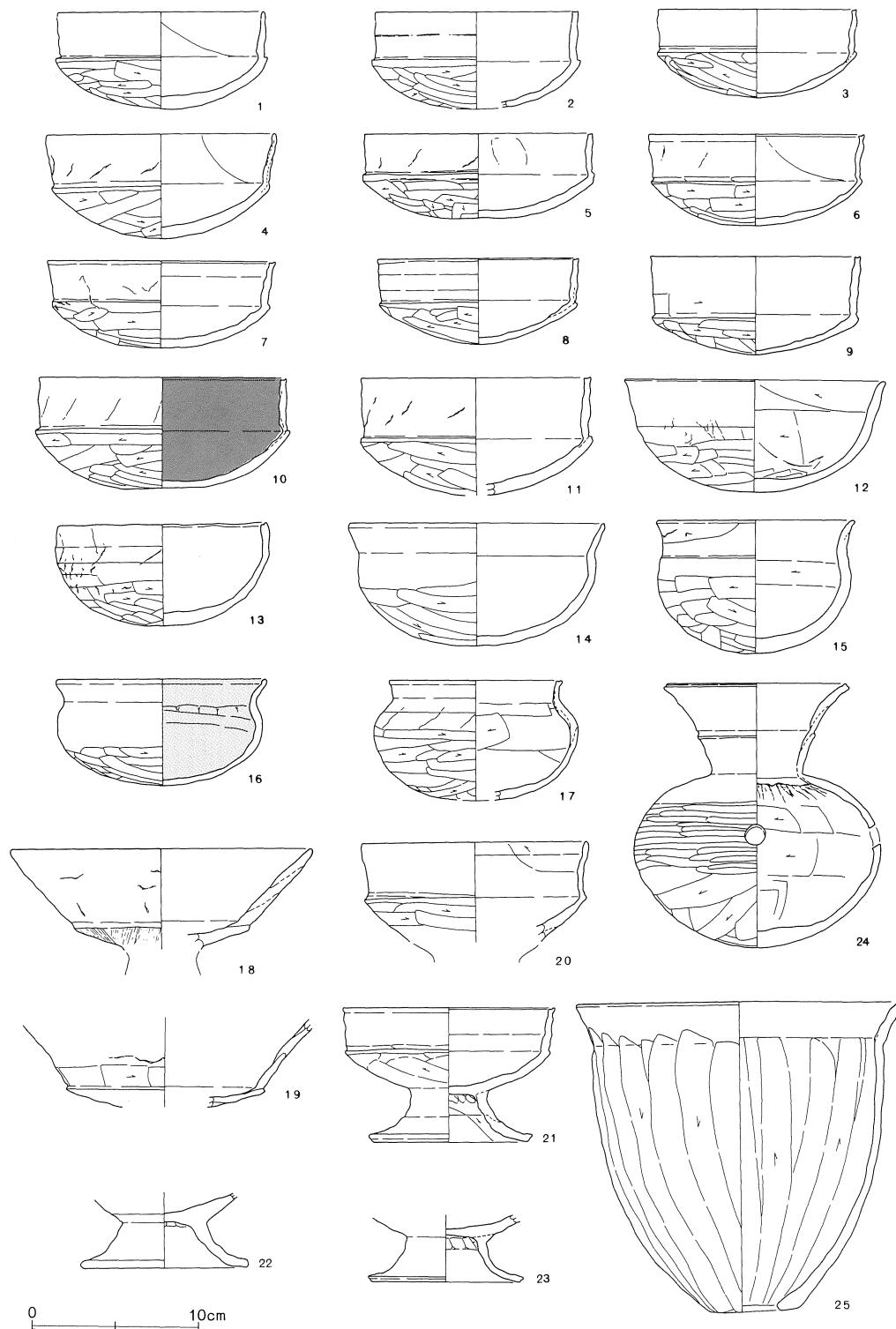
カマドは北東の壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用され、左袖内に篠竹を使った芯材を確認できた。左袖の長さは75cmで、燃焼部の幅は30cmである。支脚位置は31の甕の左側下部であり、小型甕が倒立転用されていた。

## 第46号住居跡出土土器観察表

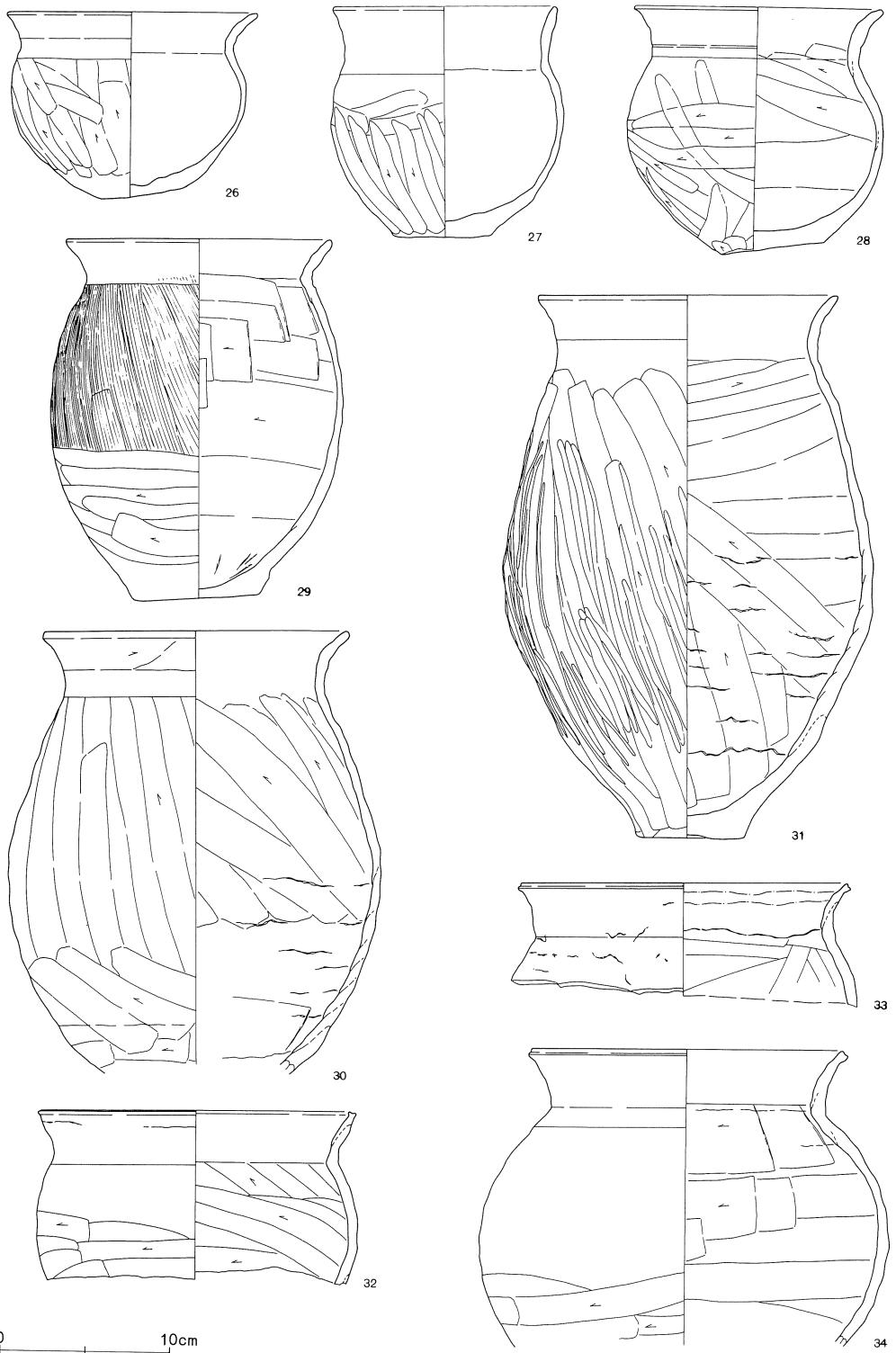
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.5	5.8		RWB	A	明赤褐	80	
2	壺	12.1	(5.8)		RWB	A	鈍黄橙	70	
3	壺	11.9	5.3		RWW'	A	橙	60	
4	壺	(13.9)	6.2		RB	B	鈍黄橙	40	
5	壺	13.7	5.1		R	A	橙	50	
6	壺	13.0	4.9		W'B	A	鈍黄橙	50	
7	壺	(13.7)	5.1		RWW'	B	鈍橙	30	
8	壺	12.1	5.1		RWW'B	A	橙	60	
9	壺	(12.6)	5.9		RW	A	鈍橙	30	
10	大型壺	4.9	6.6		RWW'	A	橙	80	内面樹脂付着
11	大型壺	(13.8)	(7.1)		RB	A	橙	30	
12	大型壺	(14.6)	6.9		RWB	A	橙	40	
13	壺	12.2	6.0		RW	A	明赤橙	90	カマド
14	椀	15.4	7.3		RB	C	橙	70	
15	椀	11.9	8.0		WW'B	A	鈍橙	100	No.1
16	椀	12.6	6.4		RWB	A	橙	95	内面黒色処理
17	短頸壺	(10.4)	(7.2)		RW	A	橙	30	
18	高壺	(18.1)	(6.0)		WB	A	橙	25	
19	高壺		(5.3)		RWB	A	橙	20	
20	高壺	(13.6)	(6.0)		W	B	橙	20	
21	高壺	12.7	8.0	9.8	RWB	A	橙	70	
22	高壺		4.5	10.0	RWB	C	橙	70	
23	高壺		(4.0)	(9.3)	RW	C	明赤褐	30	
24	甕	9.9	15.8		R	A	鈍黄橙	80	SJ36出土破片接合
25	甕	19.5	18.5	3.2	RWB	A	橙	70	
26	小型甕	14.7	10.9	5.0	RB	A	橙	70	No.3
27	小型甕	13.2	13.5	5.8	WU	A	鈍褐	100	金雲母多量に含む 内面に米粒状焦げ
28	小型甕	14.7	14.3	6.0	RB	A	鈍黄橙	100	
29	小型甕	15.7	21.0	7.4	WB	A	浅黄橙	100	
30	甕	(18.1)	(25.3)		RWB	C	浅黄橙	30	
31	甕	(17.7)	31.8	(6.4)	RWB	B	鈍橙	25	No.2
32	鉢	18.8	(10.1)		R	A	淡黄	90	転用器台の可能性有り
33	壺	19.3	(7.3)		RWB	A	橙	80	転用器台
34	壺	18.6	(17.3)		RB	A	橙	70	



第155図 第46号住居跡 カマド



第156図 第46号住居跡 出土遺物 (1)



0 10cm

第157図 第46号住居跡 出土遺物（2）

出土遺物のうち13の壺、15の椀、26の小型甕、31の甕はカマドからの出土であり、支脚として転用された小型甕の上に甕がのせられ、焚き口には椀が置かれていた。10の大型壺には内面に樹脂が付着している。16の椀は内面が黒色処理されている。24の甕は第36号住居跡出土の口縁部片が接合した。27の小型甕は胎土に多量の金雲母粒を含む特殊なもので、内面には米と見られる粒状の焦げが付着している。32と33は壺、鉢からの転用器台と考えられる。このほか第3・7層から鹿の歯や骨片が散乱した状態で出土したことが特筆される。平面的な出土状況から見て窪地状の廃絶住居に南東壁側から炭化物とともに投入されたと考えられる。このほかに、滑石製臼玉が1点と指頭圧によって扁平に押し広げられた小型土製品が出土した。

#### 第47号住居跡

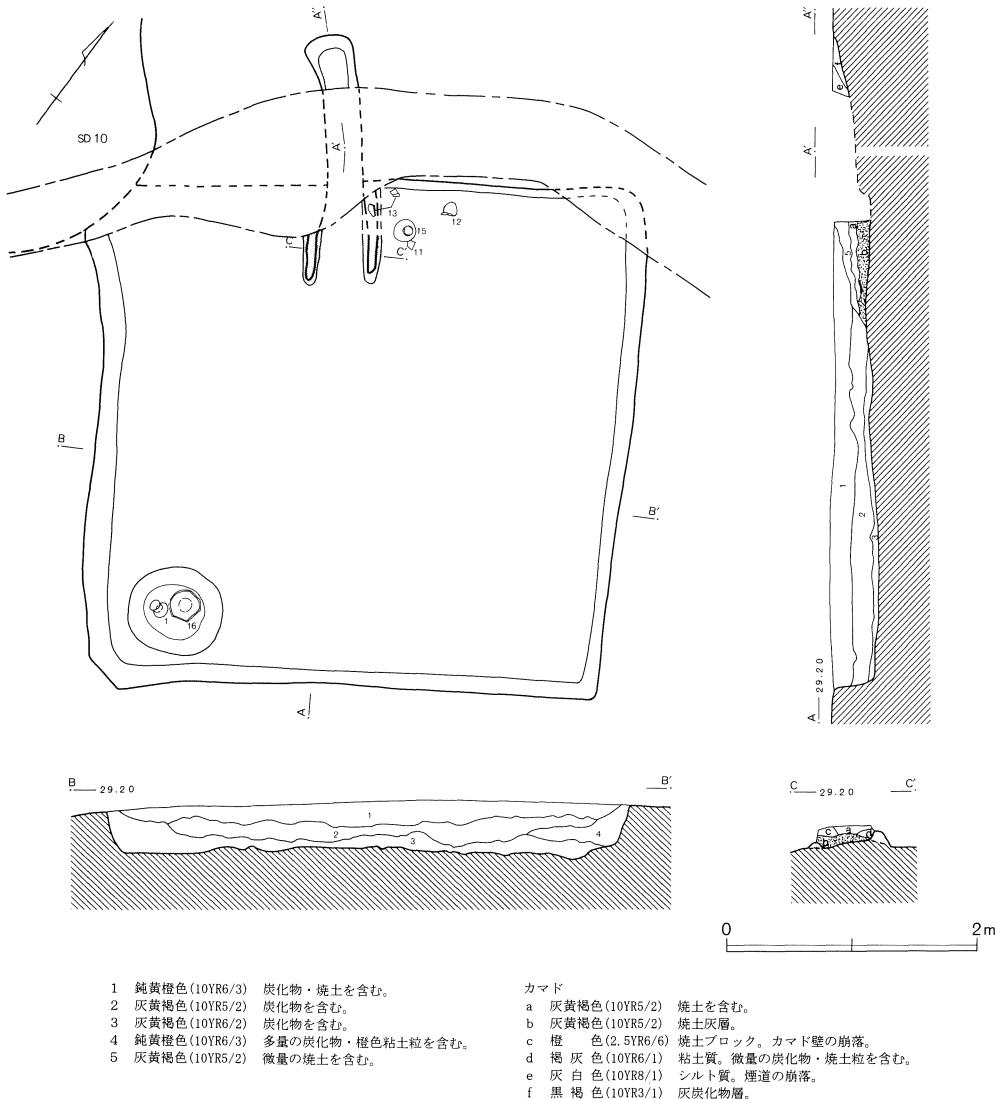
きー4グリッドに位置する。北西壁の大部分とカマドの燃焼部から煙道部にかけての大部分は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長3.98m、短軸長3.85m、深さ0.37mで、主軸方向はN-35°-Wである。南隅で径75cm、深さ19cmの皿状の円形ピットを検出した。床面は地山砂層にわずかに掘り込まれており、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていたが両袖とも下端をわずかに残すのみで、検出が難しかった。右袖の長さは76cmで、燃焼部の幅は41cmである。煙道は長さ124cm程で、傾斜をつけて掘り抜かれたと見られる。

遺物のうち、11の台付甕、12と13の小型甕、15の壺はカマド右側から出土し、8の壺と16の壺は南隅のピット内から出土した。11の台付甕と12・13・14の小型甕は火に掛けた痕跡があり、外面が変質している。台付甕は本体が鉢形であり、3点の小型甕のうち、12・13は小型壺的な成形、14は

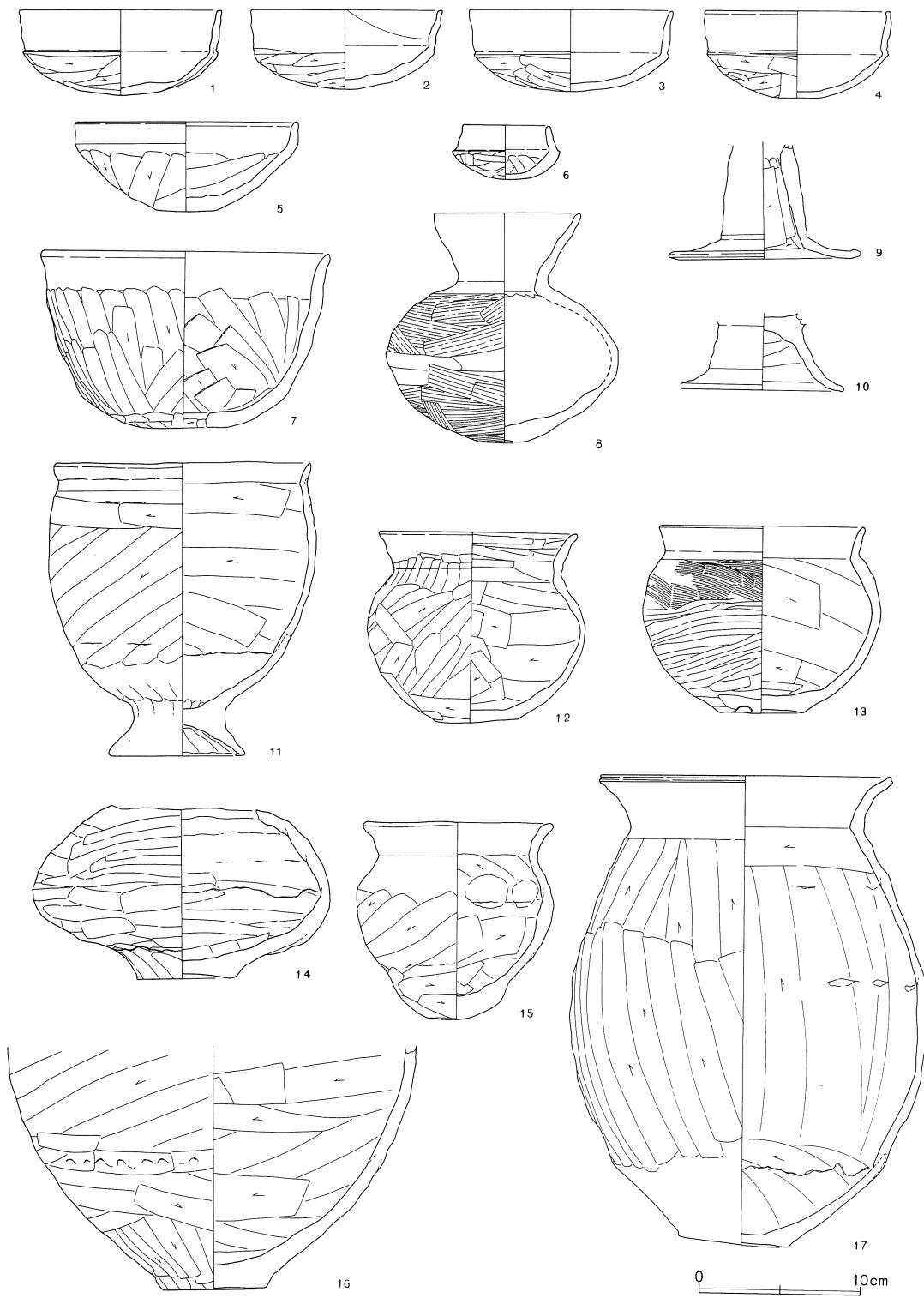
第47号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	5.2		RB	C	橙	70	
2	壺	11.9	4.9		RW	B	橙	80	
3	壺	12.6	5.0		RW	B	橙	70	
4	壺	(11.5)	(5.4)		RW	B	橙	40	
5	壺	(13.8)	(5.5)		RWB	B	鈍黄橙	30	
6	ミニチュア	5.5	3.3		RW'	A	橙	50	壺
7	甕	(17.8)	(10.7)	(3.0)	RB	A	橙	20	
8	壺	9.1	14.1	2.3	RB	B	浅黄橙	100	No.4
9	高壺		(7.2)	(11.9)	RWB	B	鈍橙	40	
10	高壺		(4.7)	10.1	RWB	B	明赤褐	70	
11	台付甕	15.9	18.0	8.5	RWB	B	橙	70	No.3 火に掛けた痕跡有り
12	小型甕	12.3	11.6	5.2	WB	B	鈍橙	80	No.2 火に掛けた痕跡有り
13	小型甕	12.7	11.4	5.2	W	A	橙	60	No.6・7 火に掛けた痕跡有り
14	小型甕	11.7	12.1	3.0	RW	C	明赤褐	70	粗製 火に掛けた痕跡有り
15	壺		(10.4)	6.2	RWBU	B	橙	100	No.1 口縁部欠損のまま使用
16	壺		(15.0)	6.4	RWB	A	灰白	70	No.5 外面煤付着
17	甕	18.2	28.8	6.8	RW	B	鈍黄橙	70	
18	甕	15.1	(25.5)		RWB	B	鈍黄橙	70	穿孔土器
19	壺	12.9	19.5	6.1	WW'B	B	明赤褐	90	穿孔土器

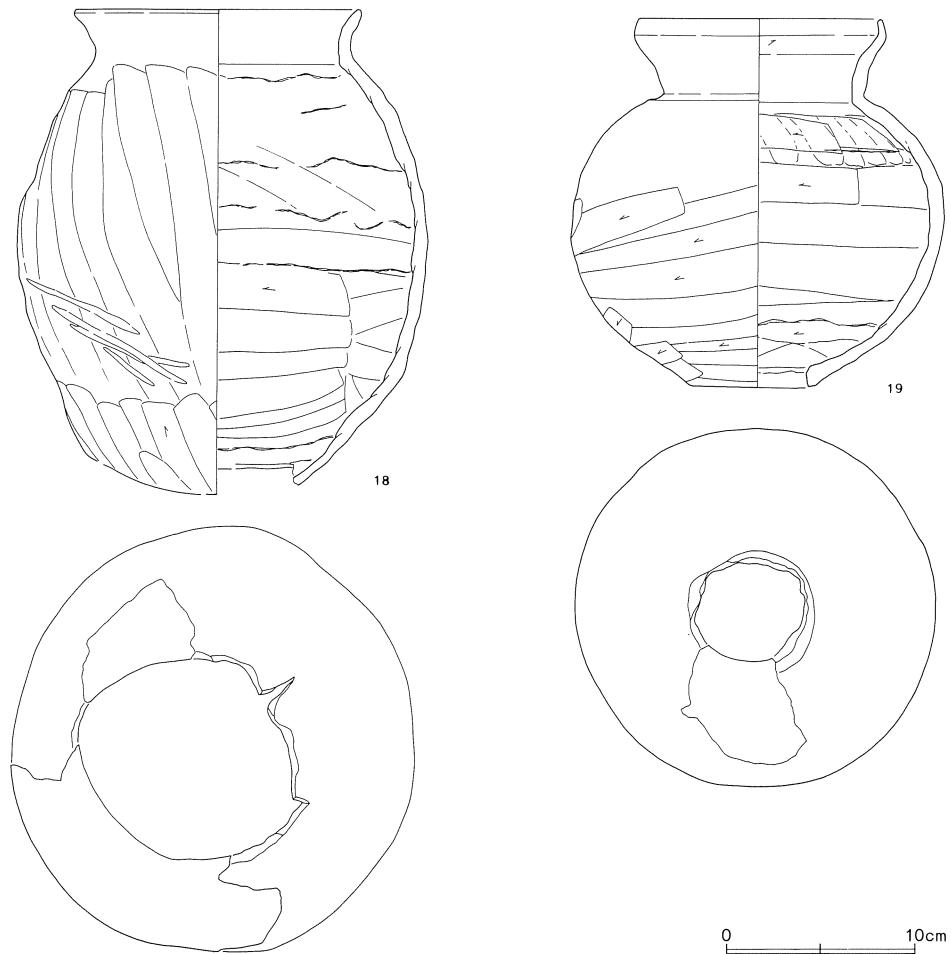


第158図 第47号住居跡

は丸底の粗製であるという点が単純な甕とは異なっている。また、15の壺は口縁部を欠損している一方で胴部のみが完存した状態で出土したため、無頸の状態で使用されていたと考えられる。16の壺は胴部下半のみで外面に煤が付着しているが、周辺に破片のない完結した状態で出土したこととピット内で共伴した坩が完形品であることから、鉢として転用され火に掛けて使用されたものと考えられる。18の甕と19の壺は底部を欠損するが、割れ口が磨滅しているため意図的に穿孔された土器と見られる。以上の土器に加えて、深い体部に無稜で短く直立する口辺部の5の壺、鉢形の7の甕、壺形の6のミニチュア土器など他の住居跡出土の土器に比べて類例の少ない特殊な要素をもつ土器の多いことが本住居跡の特徴と言うことができる。



第159図 第47号住居跡 出土遺物（1）

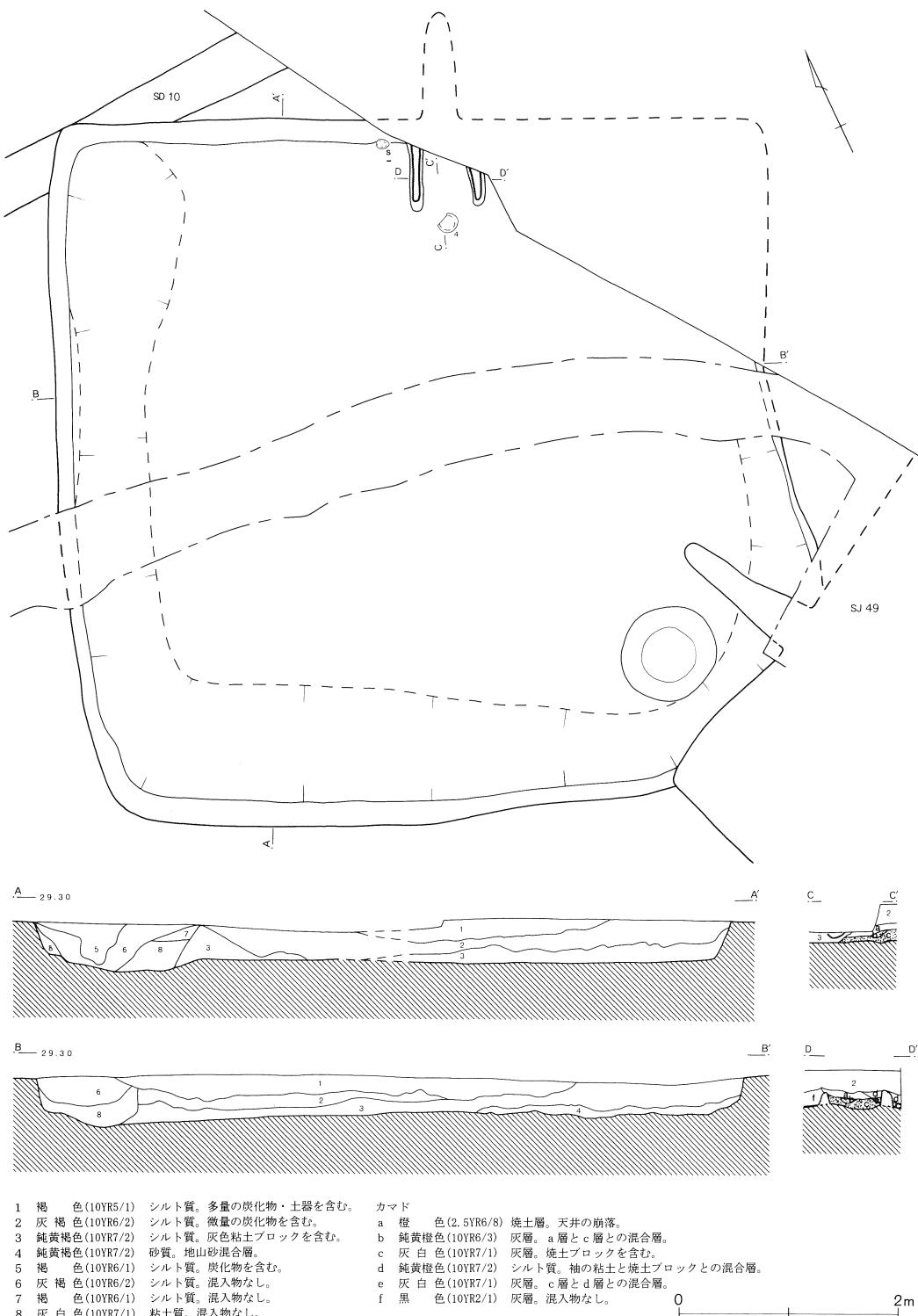


第160図 第47号住居跡 出土遺物（2）

#### 第48号住居跡

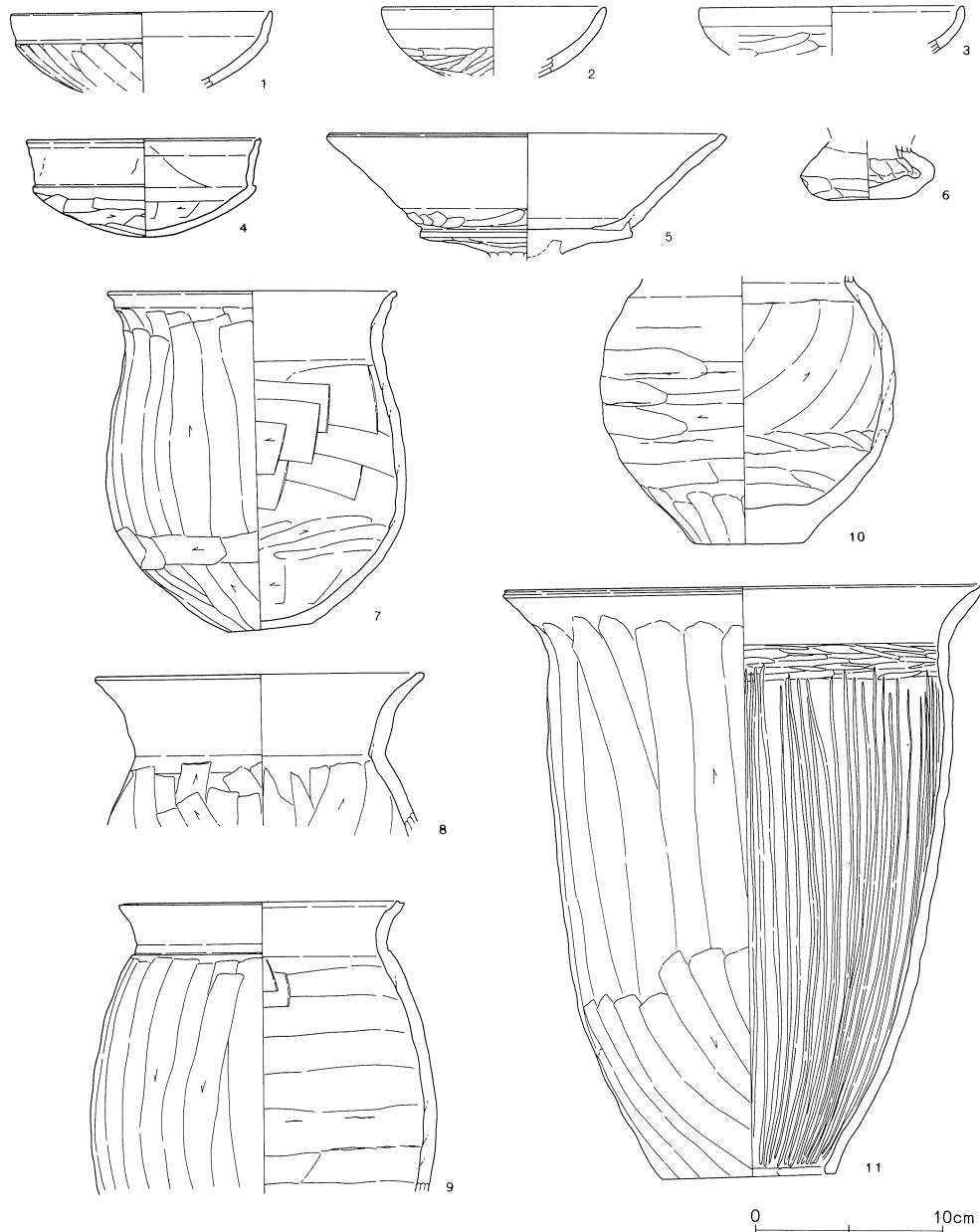
きー4グリッドに位置する。第49号住居跡に切られ、北隅を第10号溝がわずかに切り込んでいた。北東隅からカマド燃焼部は調査区外にあり、中央部を横断するかたちで側溝に破壊されていた。規模は長軸長6.21m、短軸長5.97m、深さ0.41mで、主軸方向はN-26°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、南隅寄りで径85cm、深さ15cmのピットを検出したが、その他に壁溝・柱穴は確認できなかった。また、北西壁際から南東壁際南半にかけての床面で幅64~107cmの溝状の緩い落込み帯を検出したが、土層断面の観察結果からは住居廃絶後、2・3層が堆積して窪地状になった段階で、壁のラインに沿って覆土が掘り返されたものと判明した。この落ち込み帯の覆土はほとんど混入物のないものであった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた、左袖の長さは60cmで、燃焼部の幅は47cmである。左右両袖の外側には灰層があった。



第161図 第48号住居跡

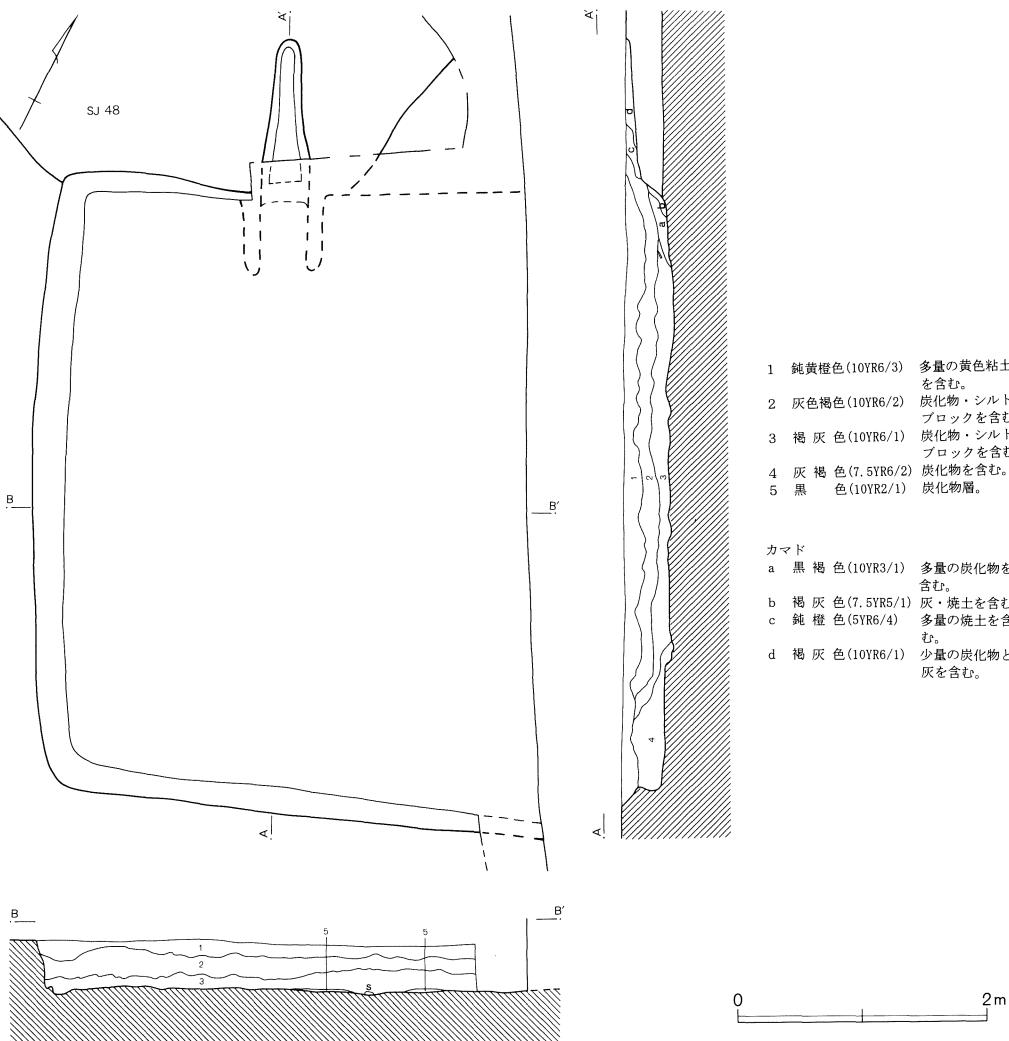
遺物は少量であり、カマドの前面から出土した4の壺以外は覆土上層の1層中からの出土である。1・2・3の壺3点はいずれも小片だが皿状のものである。7の小型甕は胴部に2か所の穿孔がある。10の壺は外面が火を受けて変質しており、火に掛けて使用されたと考えられる。6は埴形の手捏土器である。このほかに土玉が1点出土した。正確な出土位置は確認できなかったため、落ち込み帶と、穿孔土器や手捏土器・土玉などの特殊製品との関係は不明である。



第162図 第48号住居跡 出土遺物

第48号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(14.0)	(4.3)		RWW'	A	明褐灰	25	
2	壺	(12.0)	(3.7)		RWW'	A	橙	15	
3	壺	(14.2)	(2.7)		RWB	A	灰白	10	
4	壺	12.7	5.3		RWB	A	橙	90	No.1
5	高 壺	(21.2)	(6.7)		RW	B	橙	45	
6	手捏土器		3.1	7.0	RWW'	B	橙	100	
7	小 型 甕	15.4	17.9	4.6	RWB	B	淡赤橙	80	穿孔土器
8	甕	(17.5)	(8.0)		WW'B	B	淡橙	25	
9	甕	(15.2)	(15.0)		RWB	A	橙	25	
10	壺		(14.3)	(5.8)	RWB	B	橙	40	火に掛けた痕跡有り
11	甌	25.3	31.1	9.2	RWB	B	鈍黃橙	60	



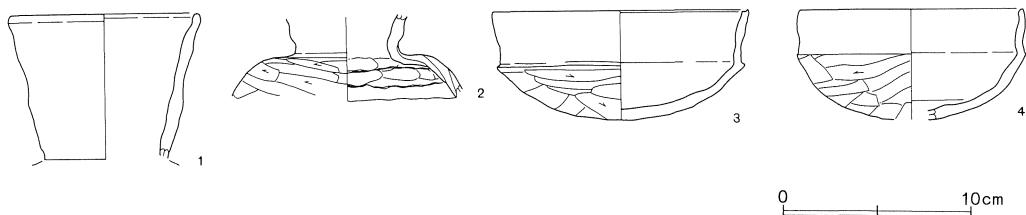
第163図 第49号住居跡

### 第49号住居跡

きー3グリッドに位置する。第48号住居跡を切り込んでいた。東壁は調査区外にありカマドと北壁の大部分はトレーナによって破壊されていた。規模は南北軸長4.55m、東西軸長3.73m以上、深さ0.35mで、主軸方向はN-27°-Wである。床面は地山砂層中に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、詳細は不明だが、煙道は幅28cm、長さ114cm程になると思われ、わずかに傾斜をつけて掘り抜かれていた。

出土遺物は少量であり、図化できたものは4点であるが、4の壺は覆土中への混入品と考えられる。



第164図 第49号住居跡 出土遺物

### 第49号住居跡出土土器観察表

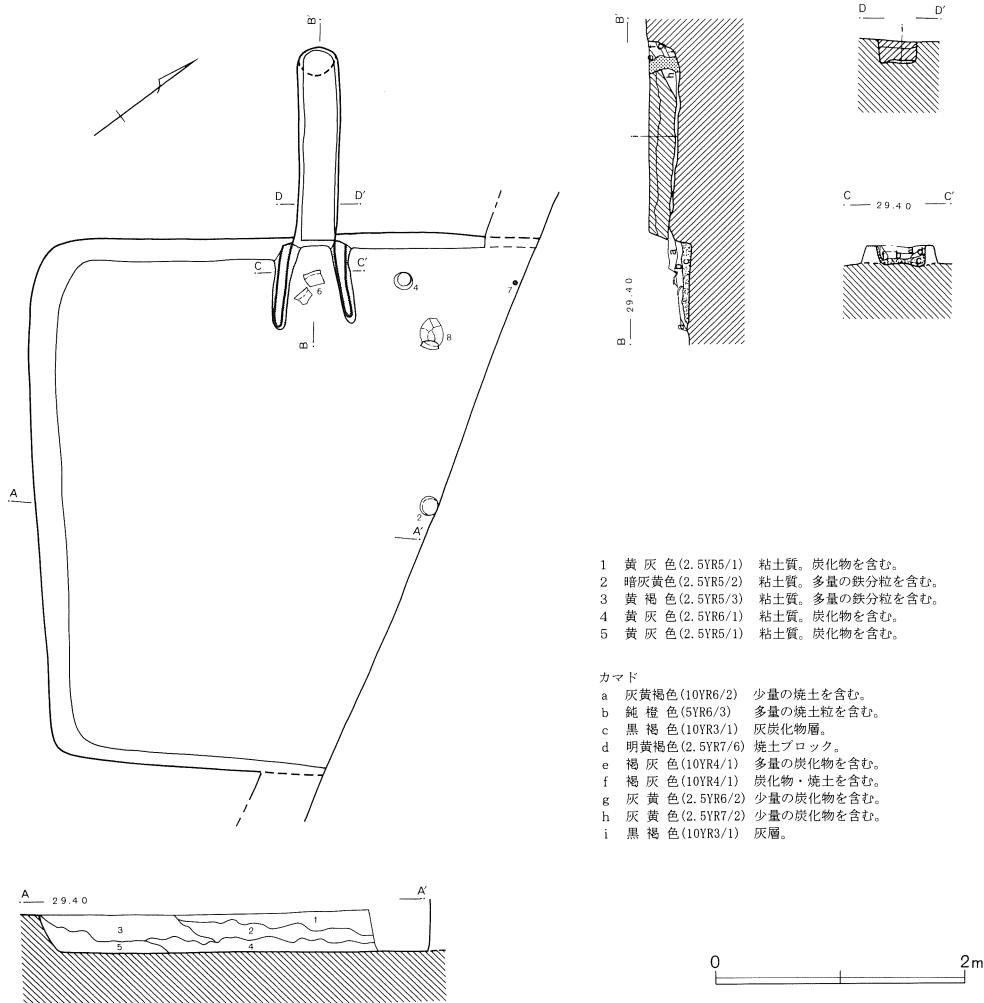
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	10.1	(7.6)		RWB	A	橙	50	
2	壺		(4.5)		RWB	B	橙	40	
3	壺	13.6	5.7		RW	C	橙	60	
4	壺	(11.7)	(5.8)		RWB	B	橙	30	2次的に火を受けた痕跡有り

### 第50号住居跡

きー3グリッドに位置する。北東壁および南東壁の北半は調査区外にある。規模は南西壁長3.93m、北西壁長3.13m、深さ0.30mで、主軸方向はN-54°-Wである。集落の最高所に位置する住居跡の一群に属するため地山砂層上面が床面となっていたが、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは65cm、燃焼部の幅は35cmである。煙道は幅30cm、長さ155cmで、地山を水平に掘り抜き、先端に煙出口をもっていた。煙道内の覆土の状態は床面上に薄く広がった灰層の直上に崩落した天井がのっているため、外部からの流入土がほとんどなく空洞化している時点では煙道部が埋没したものと考えられる。

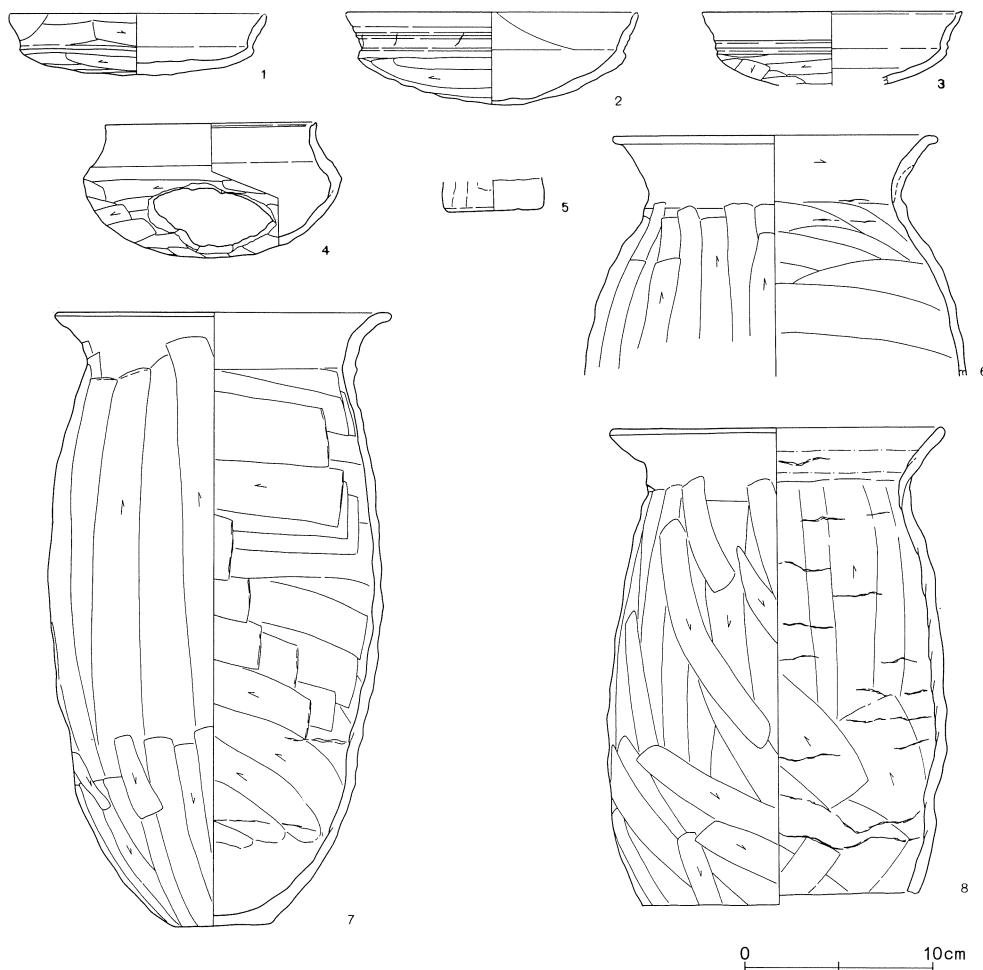
遺物は床面上からの出土のものが多く、4の短頸壺と7・8の甕がカマド右側から、2の壺が住居中央寄りから出土した。このうち4の短頸壺は穿孔され、8の底部を欠いた甕は転用器台である。壺は3点とも口辺部が大きく外反し、浅い体部であることが特徴的である。



第165図 第50号住居跡

第50号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.6	3.2		RW	B	橙	70	
2	壺	15.4	4.8		RWB	B	橙	90	No.5
3	壺	(13.7)	(3.9)		RWB	B	鈍黃橙	25	カマド
4	短頸壺	11.2	7.1		WB	A	橙	90	No.2 穿孔土器
5	支脚		1.7	5.4	RW	C	鈍橙	30	
6	甕	(17.3)	(12.9)		WB	A	浅黄	30	No.1
7	甕	17.9	32.2	5.0	RW	A	橙	80	No.4
8	甕	17.8	(25.1)		RW	B	鈍黃橙	80	No.3 転用器台



第166図 第50号住居跡 出土遺物

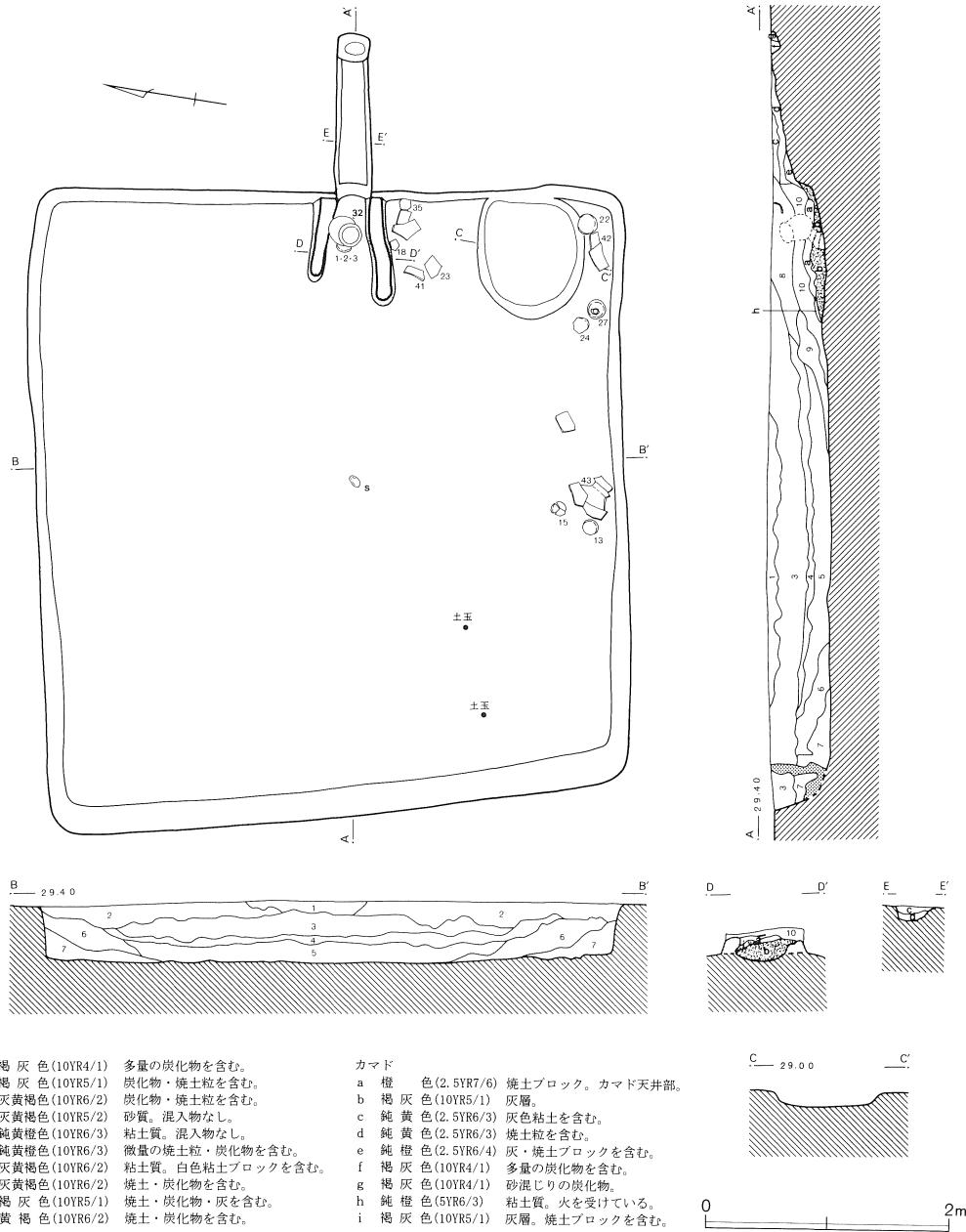
### 第51号住居跡

きー3グリッドに位置する。規模は長軸長4.80m、短軸長4.60m、深さ0.49mで、主軸方向はN-78°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。南東隅寄りの貯蔵穴は液状化現象によって不明瞭な状態であったが、砂中に埋没した土器の出土状況からみて長径98cm、深さ12cmの皿状のものと見られる。

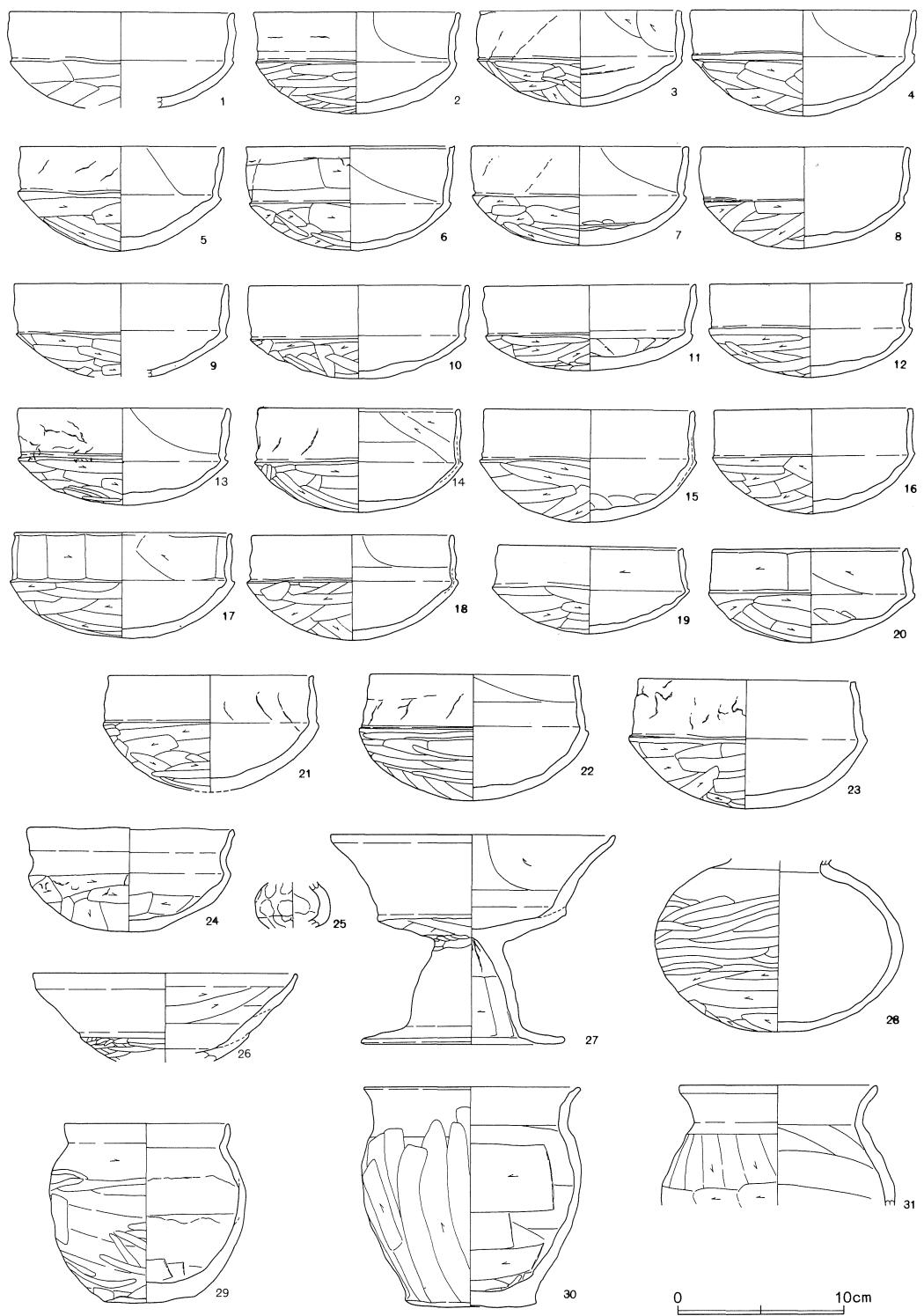
カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた、右袖の長さは91cm、燃焼部の幅は42cmである。煙道は幅32cm、長さ122cmで、傾斜をつけて地山を掘り抜き、先端に煙出ピットをもっていた。支脚位置は左寄りであり、伏せ重ねられた壙3点が転用されていた。

遺物はカマド周辺・貯蔵穴内・南壁下に集中して出土した。1・2・3の壙3点は支脚として上から順に伏せ重ねされ、その上に32の甕がのった状態で出土した。右袖脇からは35の甕、41の壺、18の壙、23の大型壙が、また貯蔵穴内からは8・20の壙、29の短頸壺、40の甕が出土した。南壁下

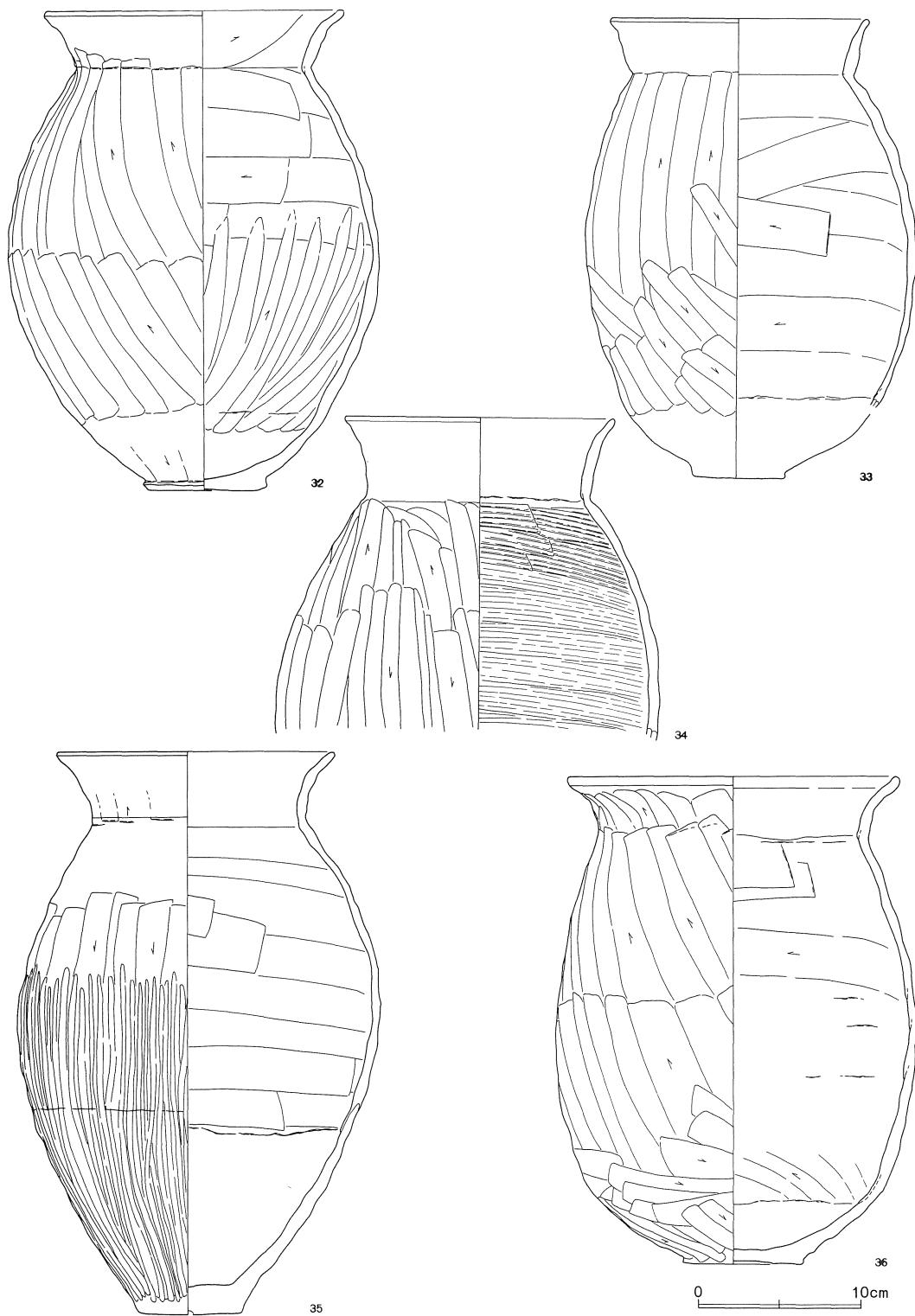
では13・15・22・24の壺、27の高壺、42・43の壺が出土した。このほかに、床面から10~15cm浮いた位置で土玉2点が出土した。24の壺は全体的に成形が粗雑である。28の壺は口縁部を欠損し、無頸状態で使用された可能性が高い。29の短頸壺は短く内湾する口縁部とヘラケズリによる平底が特徴的で、さらに胴部外面はヘラケズリ後平滑にナデられている。35の壺は壺的なプロポーションと胴部外面のヘラミガキが特徴的だが、火に掛けた痕跡がみとめられる。



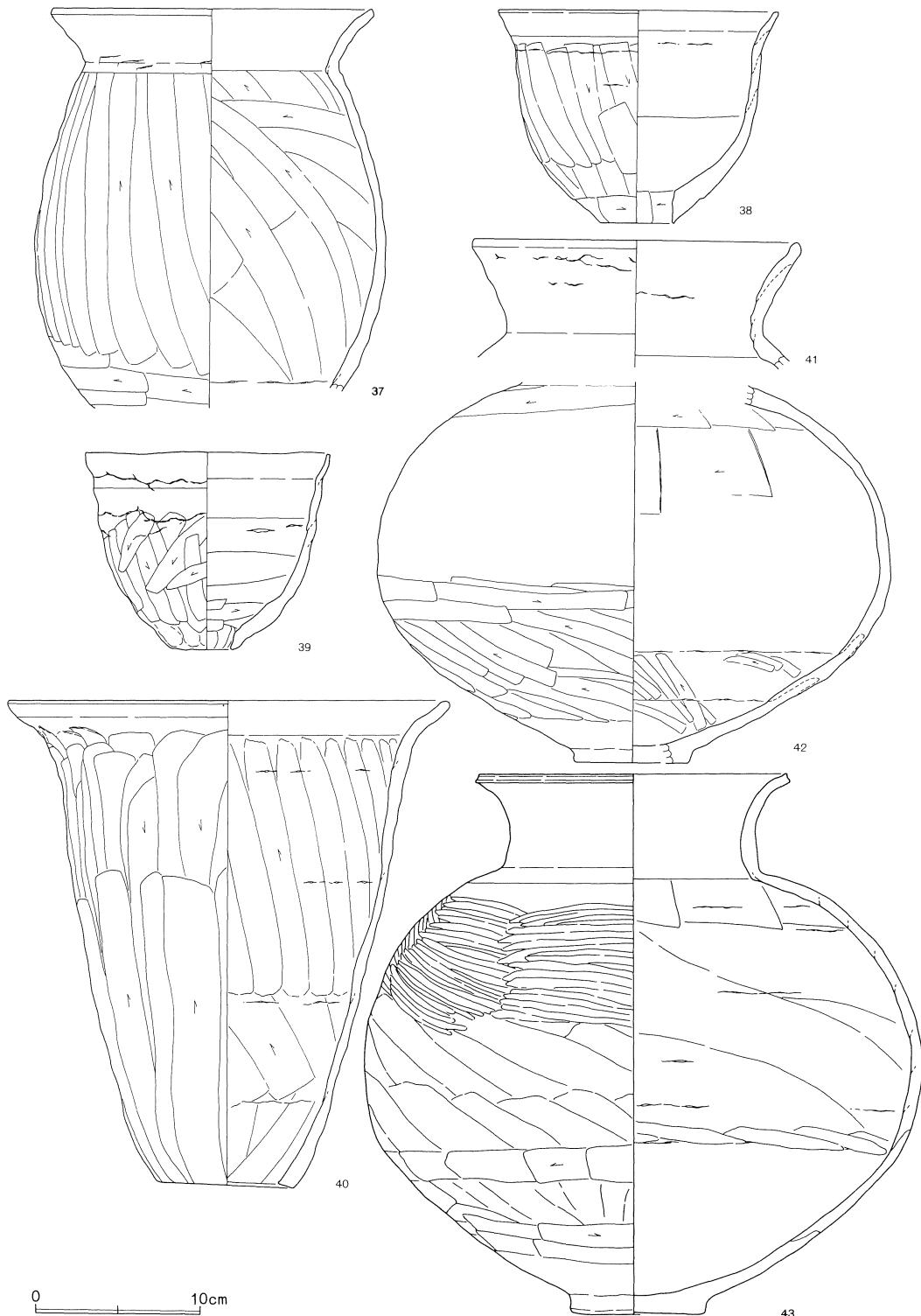
第167図 第51号住居跡



第168図 第51号住居跡 出土遺物（1）



第169図 第51号住居跡 出土遺物（2）



第170図 第51号住居跡 出土遺物（3）

第51号住居跡出土土器観察表

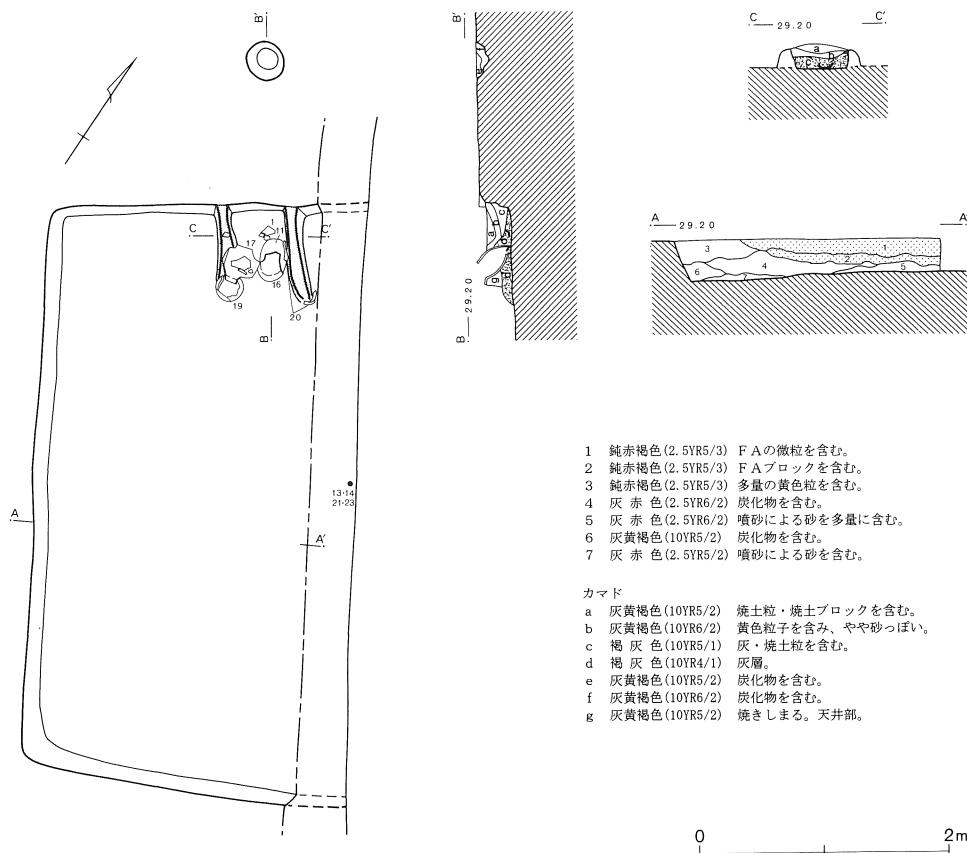
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.6	(5.8)		RW	C	明赤褐	50	No.2・3 転用支脚
2	壺	12.5	6.1		W	A	明赤褐	90	No.4 転用支脚
3	壺	12.2	5.7		RW	A	明赤褐	100	No.5 転用支脚
4	壺	13.6	6.3		R	B	橙	90	
5	壺	12.3	6.2		WB	A	橙	100	
6	壺	12.6	6.2		RWB	A	鈍橙	95	
7	壺	13.0	5.9		RB	A	橙	100	
8	壺	12.6	6.0		WB	B	橙	70	貯蔵穴
9	壺	12.9	(5.6)		RW	B	橙	80	
10	壺	13.3	5.5		RW	B	橙	50	
11	壺	12.8	5.1		WB	A	橙	70	
12	壺	12.1	5.6		RWB	C	橙	70	
13	壺	12.8	5.8		RW	A	橙	80	No.22
14	壺	12.3	6.2		RW'	B	橙	80	火を受けた痕跡有り
15	壺	12.7	6.7		RB	B	橙	80	火を受けた痕跡有り
16	壺	11.9	6.3		RWB	B	橙	70	
17	壺	13.2	6.3		RW	B	鈍橙	90	
18	壺	12.2	6.3		RWB	B	橙	50	No.7
19	壺	11.1	5.2		RWB	B	橙	80	
20	壺	11.7	5.6		RWW'B	C	橙	70	貯蔵穴
21	壺	12.4	7.0		RW	A	明赤褐	60	カマド
22	壺	12.6	7.5		RB	A	橙	80	No.12
23	大型壺	13.1	7.7		RWB	A	橙	70	No.9 貯蔵穴
24	壺	12.5	6.2		RWB	C	鈍黃橙	95	No.16
25	手捏土器	(2.7)			W	B	鈍橙	30	
26	高壺	16.0	(5.3)		R	A	橙	60	
27	高壺	17.2	12.5	12.3	RW	A	橙	90	No.15
28	埴		10.2		RWB	A	橙	100	口縁部意図的除去の可能性有り
29	短頸壺	10.0	10.7	5.5	W	A	明赤褐	90	貯蔵穴
30	小型甕	13.1	13.1	7.9	RWH	C	橙	70	火に掛けた痕跡有り
31	小型甕	12.0	(7.2)		RB	B	橙	50	
32	甕	18.3	(29.2)	6.6	RWB	A	橙	100	No.1
33	甕	15.9	28.0	5.7	RW	B	黒褐	50	貯蔵穴
34	甕	16.5	(19.0)		RW	B	明赤褐	50	
35	甕	17.0	34.3	6.2	RWB	A	明赤褐	70	No.6 脊部外面ヘラミガキ
36	甕	20.3	29.6	7.4	RWH	A	橙	90	
37	甕	19.1	(24.1)		RWB	A	橙	90	
38	甕	17.0	12.8	4.5	RW	B	明赤褐	40	
39	甕	14.8	11.8	3.8	R	A	明赤褐	70	No.20 粗製
40	甕	26.9	29.1	8.2	RWB	A	橙	90	貯蔵穴
41	壺	19.9	(7.6)		RW	A	橙	60	No.8
42	壺		(22.9)	(6.8)	R	A	橙	30	No.14・17 内面黑色処理
43	壺	19.4	33.0	8.3	RWW'	A	橙	80	No.21

## 第52号住居跡

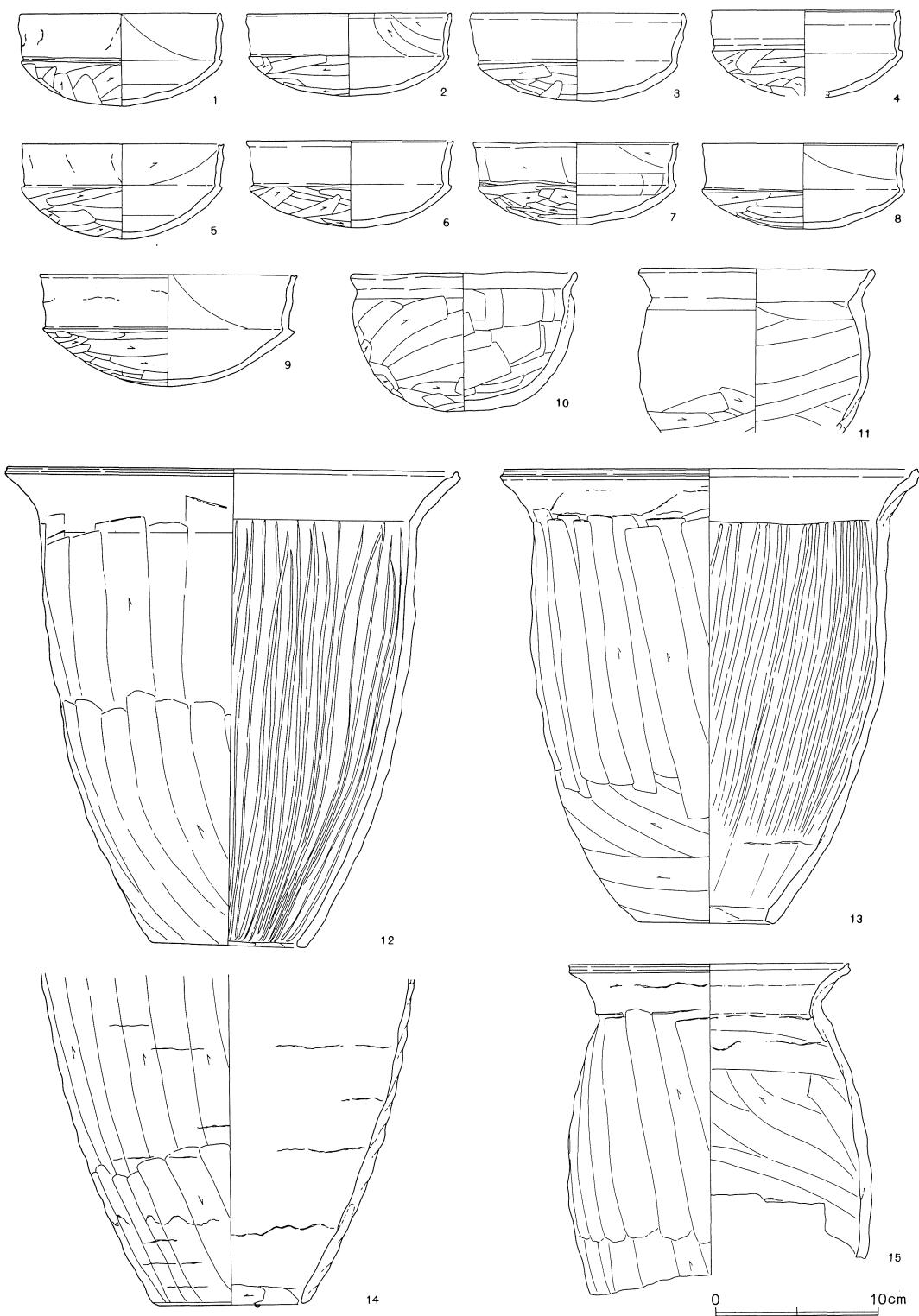
きー3グリッドに位置する。住居跡の東半は調査区外であり、調査区壁際は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長4.44m、短軸長2.10m、深さ0.28mで、主軸方向はN-30°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1・2層にはFAブロックが包含されていた。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは76cmで、燃焼部の幅は45cmである。左袖先端には甕を倒立させ、右袖先端には甕片を立てて補強していた。煙道は残存していないが燃焼部奥壁より129cmの位置で煙出ピットを検出した。支脚位置は右寄りであり、小型甕が倒立転用されていた。

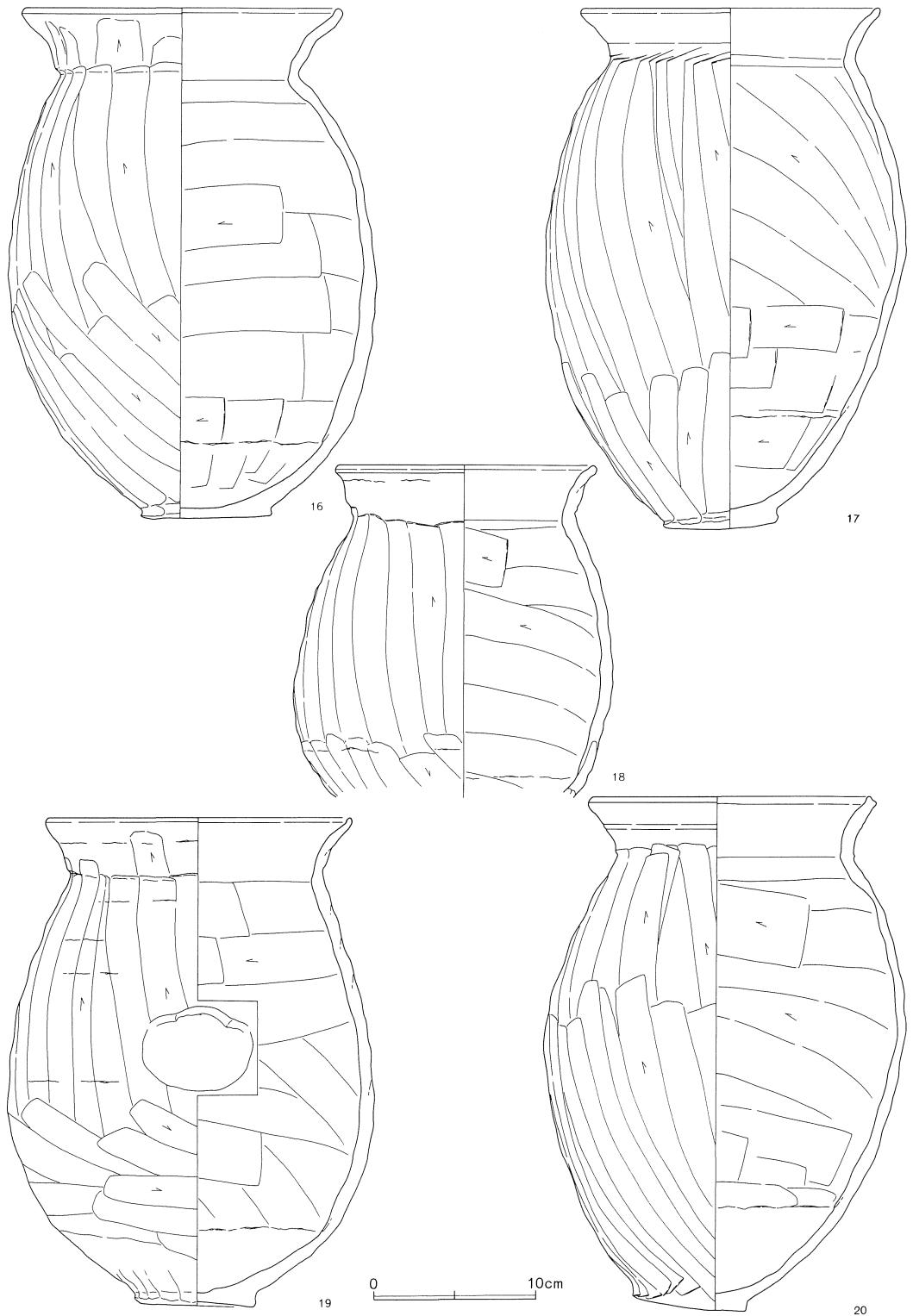
遺物はカマド周辺に集中して出土した。11は支脚に転用されていた小型甕であるが底部を欠損する。16と17の甕はカマドに掛けられた状態で横並列で出土したが、支脚上には16がのせられていた。19は左袖先端に倒立された甕である。胴部中位に穿孔されているが、内側からの打撃を受け、割れ口も磨滅しているため袖材として使用されている時点では孔は存在していたと思われる。出土状況から考えて、燃焼部から見て右前方に面する位置に穿孔されていたことになる。20の甕は口縁部破



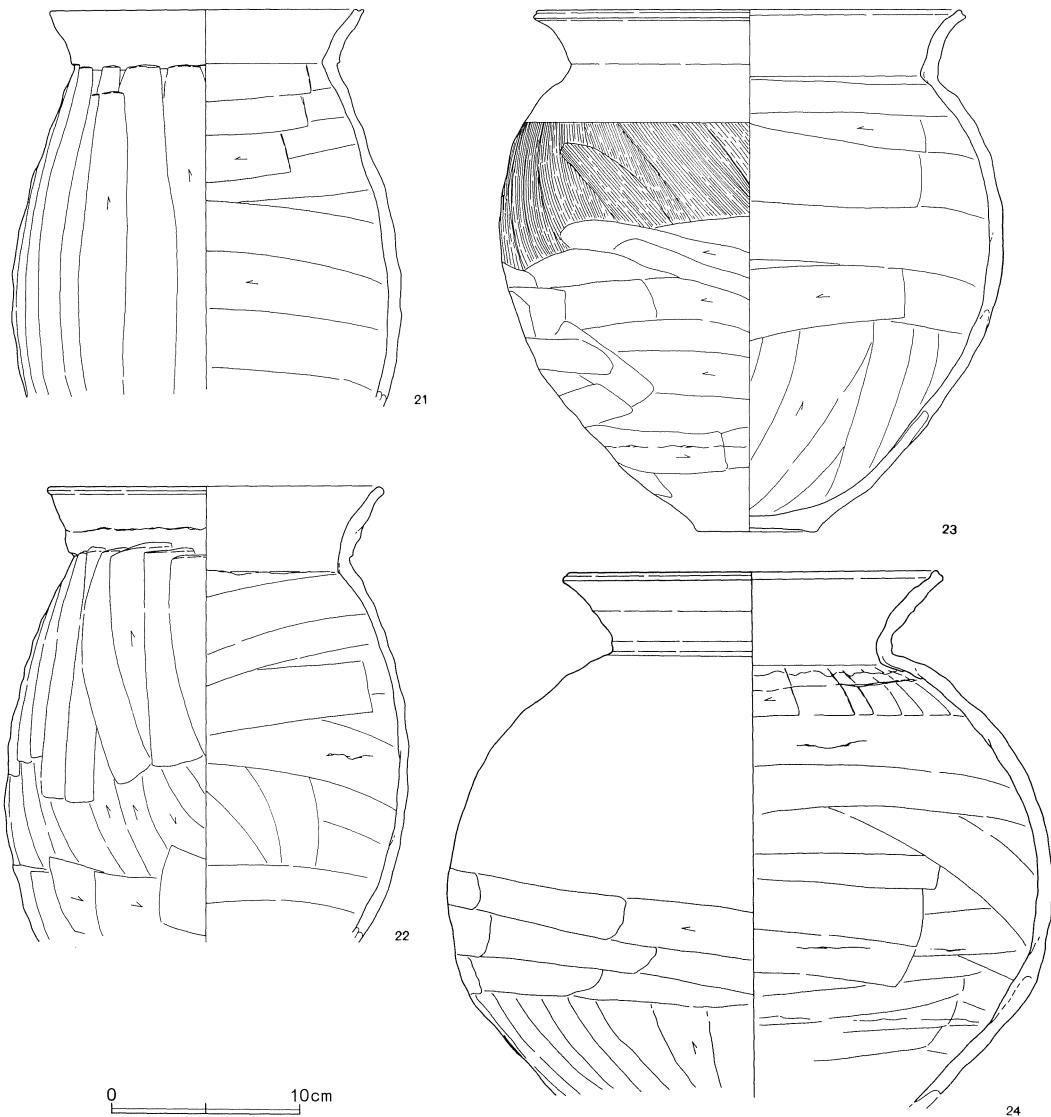
第171図 第52号住居跡



第172図 第52号住居跡 出土遺物（1）



第173図 第52号住居跡 出土遺物（2）



第174図 第52号住居跡 出土遺物（3）

片が右袖先端よりカマド材として検出され、胴部破片は右袖と16の甕の間に挟み込まれた状態で出土した。壊れた甕の破片を別々の位置に転用した例といえる。住居中央部の調査区壁際の1・2層からは13・14の甕、21・23の甕が集中して出土した。23の甕は壺的な胎土と成形であるが外面に付着した煤や、内面底部に付着した焦げなど、火に掛けた痕跡がみとめられる。15は甕からの転用器台で、口縁部内面には磨滅帶がみとめられるが下端は不整形である。

第52号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.3	5.6		RW	A	橙	75	No 1
2	壺	12.6	5.1		RW	A	明赤褐	90	
3	壺	13.0	5.3		RWB	B	橙	70	
4	壺	11.5	5.2		RWB	C	明褐	50	
5	壺	12.4	5.8		RW	A	明赤褐	90	
6	壺	12.7	5.3		RW	A	橙	70	
7	壺	12.6	5.0		RB	A	橙	90	
8	壺	12.3	5.2		RWB	B	橙	80	
9	大型壺	15.8	6.8		RWB	A	明赤褐	80	
10	椀	(13.9)	(8.4)		WH	B	鈍橙	30	
11	小型甕	14.4	(10.0)		WB	B	鈍赤褐	90	No. 9 転用支脚
12	甕	27.8	29.0	9.5	RWB	A	鈍黃橙	70	
13	甕	25.6	27.6		RWB	A	橙	90	No. 7
14	甕		(20.0)	(9.0)	RW	B	浅黃橙	40	No. 7
15	甕	17.2	(19.0)		RWB	C	橙	80	転用器台
16	甕	19.4	31.2	8.0	WH	A	鈍橙	80	No. 4 木葉底 カマド支脚上
17	甕	18.2	31.8	6.7	WB	B	鈍黃橙	80	No. 5
18	甕	15.8	(20.3)		RWH	B	鈍黃橙	60	
19	甕	18.7	29.7	7.0	RWH	A	鈍黃橙	90	No. 6 カマド左袖先端 穿孔土器
20	甕	17.5	31.4		WW'	B	明褐	70	No. 2・3 カマド右袖
21	甕	(16.6)	(20.0)		RWB	A	赤褐	30	No. 7
22	甕	17.5	(24.0)		RBH	A	鈍橙	80	
23	甕	22.4	27.5	6.4	RWW'B	B	鈍橙	40	No. 7 火に掛けた痕跡有り
24	壺	(19.2)	(28.0)		RWB	B	橙	30	

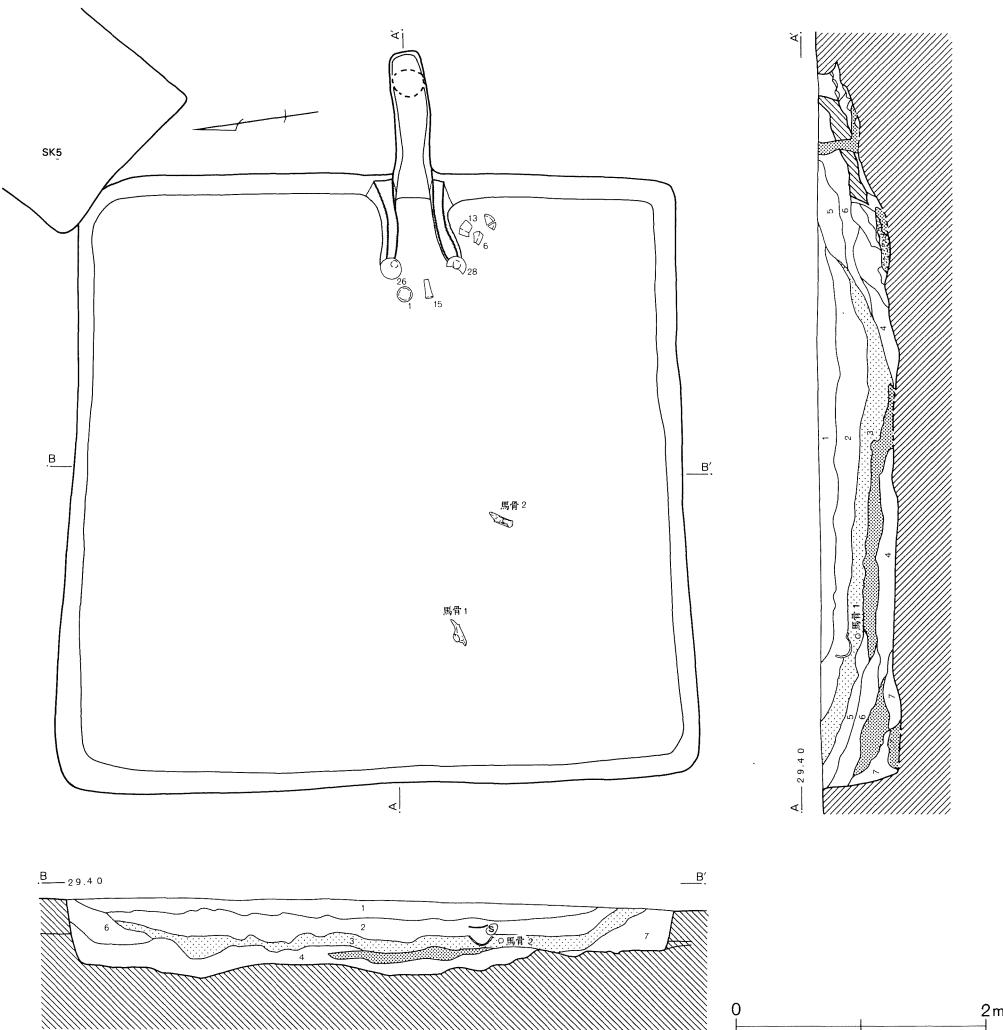
第53号住居跡

きー3グリッドに位置する。第5号土壙とわずかに重複しているが新旧関係は確認できなかった。規模は長軸長4.58m、短軸長4.50m、深さ0.63mで、主軸方向はN-98°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、液状化現象によって床面は攪乱された。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土3層中にFAブロックが含まれていた。

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは57cmで、燃焼部の幅は32cmである。煙道は幅25cm、長さ116cmで、傾斜をつけて地山を掘り抜き、燃焼部奥壁から90cmのところに煙出口をもつと見られる。支脚は正位置ではなく、焚き口部前面より転倒して出土した。右袖の外側には灰層があった。

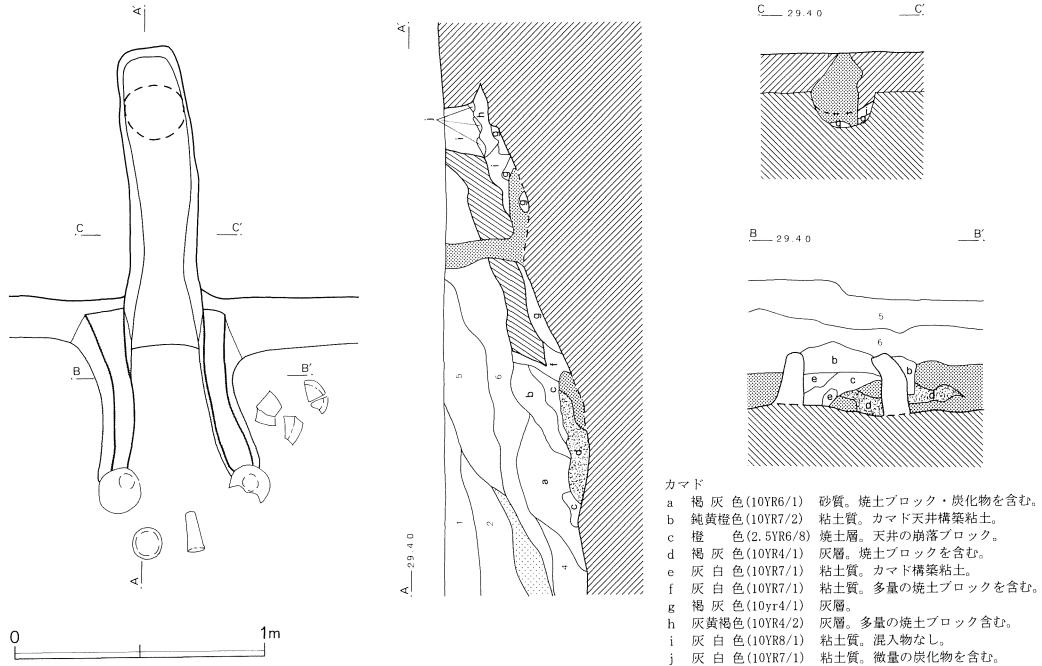
本住居跡に直接かかわる遺物はカマド周辺から出土した。1の壺はカマド焚口部前面から出土した完形品だが体部内面以外に煤が付着しており、カマドに掛けて使用されたものが15の支脚とともに放置されたと考えられる。6の壺と13の大型壺はカマド外灰層に伴うものである。26の甕は左袖先端に、また28の甕は右袖先端に使用されたものだが、26が口縁部まで存在するのに対して28は口縁部から胴部上半を欠損している。このほか3層上面から2層にかけて多量の土器が含まれ、4・

7の壺、18の埴、19の壺、21・22の小型甕、23の甕、30・32の甌などが出土した。この覆土中には馬骨2点も包含されていた。個々の土器で特記すべきは樹脂の付着した10の壺と20の壺である。10は口辺部の一部に付着している。また20は大型の壺の胴部片だが、幅16cm、長さ32cmの破片の中央に径17cm程の樹脂の付着範囲がある。光沢を持つ雲状部分もあることから、樹脂塗布のときに使用するパレットと考えられる。17は壺もしくは壺の内面の粘土貼付部分だが焼成前に平滑面に指頭によってナデつけられている。



- |                                             |                               |
|---------------------------------------------|-------------------------------|
| 1 灰黄褐色(10YR6/2) 粘土質。白色バニスを含む。               | 4 灰白色(10YR7/1) 粘土質。微量の炭化物を含む。 |
| 2 灰黄褐色(10YR5/2) 粘土質。多量の炭化物、土器・獸骨・焼土粒・小礫を含む。 | 5 鈍黃橙色(10YR7/2) 砂質。混入物なし。     |
| 3 暗灰色(10YR6/1) 粘土質。多量のFA小ブロックを含む。           | 6 褐灰色(10YR6/1) 粘土質。混入物なし。     |
|                                             | 7 褐灰色(10YR6/1) 粘土質。混入物なし。     |

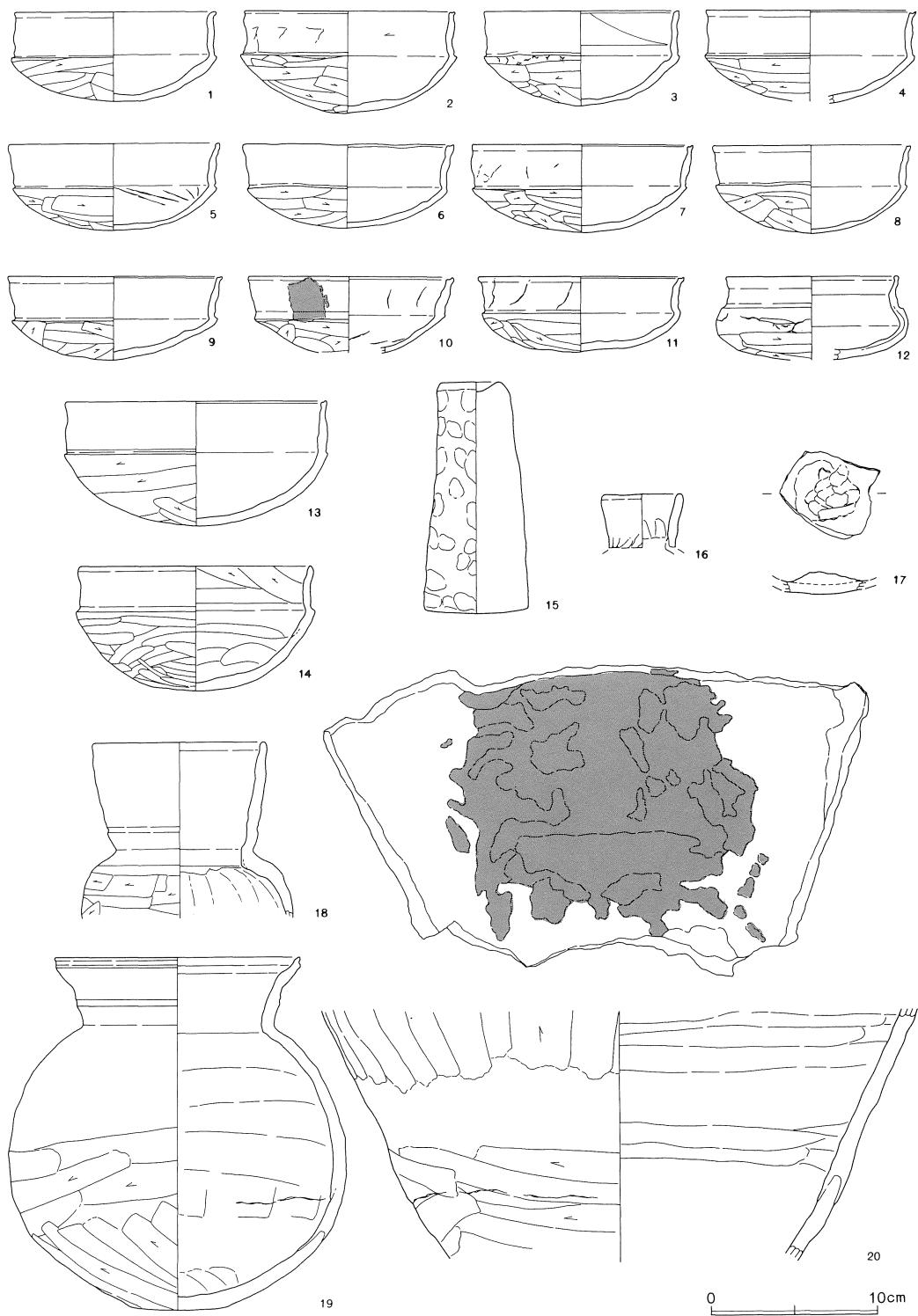
第175図 第53号住居跡



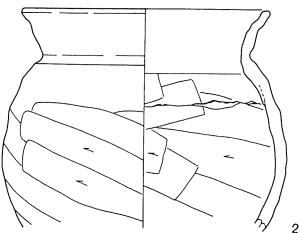
第176図 第53号住居跡 カマド

第53号住居跡出土土器観察表(1)

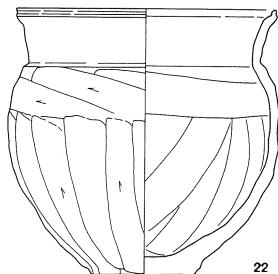
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.2	5.3		RW	C	橙	100	No.2 外面煤付着
2	壺	12.7	6.1		RWB	B	橙	95	カマド 外面煤付着
3	壺	11.7	5.7		RWB	B	明赤褐	90	外面煤付着
4	壺	12.7	(5.4)		RWB	A	黄橙	50	2層
5	壺	12.8	5.2		RWB	B	橙	70	内面に成形工具痕
6	壺	(12.7)	(5.0)		RW	B	橙	40	No.7
7	壺	13.3	5.2		RW	B	橙	80	2層
8	壺	11.9	5.3		RWB	C	橙	70	
9	壺	12.9	5.0		RWB	C	橙	70	
10	壺	12.5	(4.5)		WW'	A	橙	70	外面に樹脂付着
11	壺	12.4	4.5		RW	A	明赤褐	95	
12	短頸壺	(10.4)	(5.0)		RW	B	橙	30	
13	大型壺	(15.8)	(7.4)		RWB	B	橙	20	No.6
14	大型壺	14.0	7.4		RWB	C	橙	50	
15	支脚		13.8	6.3	RW	C	明赤褐	100	No.4
16	ミニチュア	(3.0)	(3.2)		RW'	A	橙	20	
17	壺?				RW	B	橙	破片	内面に粘土貼り付け
18	壺	10.5	(10.5)		W	A	鈍橙	95	2層 転用器台の可能性有り
19	壺	14.8	21.0	6.0	RWW'B	A	橙	80	2層 火に掛けた痕跡有り
20	壺				RWB	B	灰白	破片	内面に樹脂付着
21	小型甕	13.1	(11.6)		RB	A	浅黄	70	2層
22	小型甕	13.8	14.0	5.5	RB	B	灰白	80	2層
23	甕	23.0	31.5	6.4	WB	A	鈍黄橙	70	2層
24	甕	(18.0)	(26.8)	(5.3)	RB	A	鈍黄橙	40	环形焼成斑2か所有り



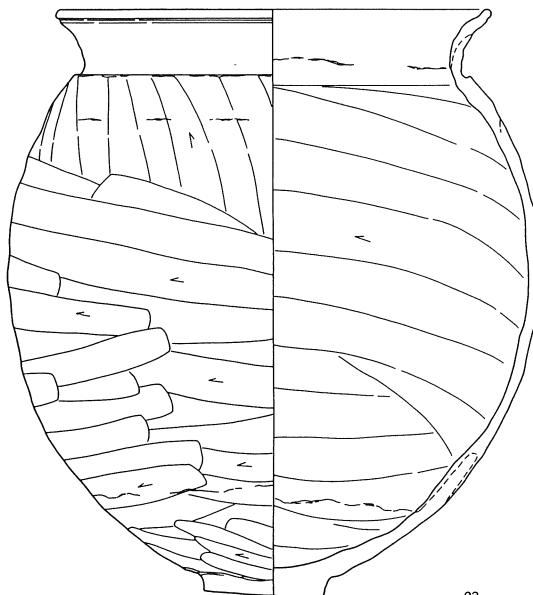
第177図 第53号住居跡 出土遺物（1）



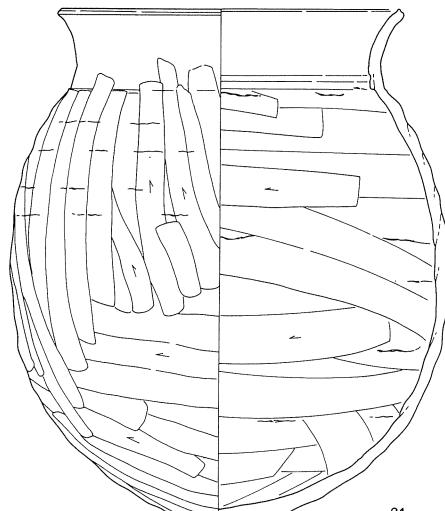
21



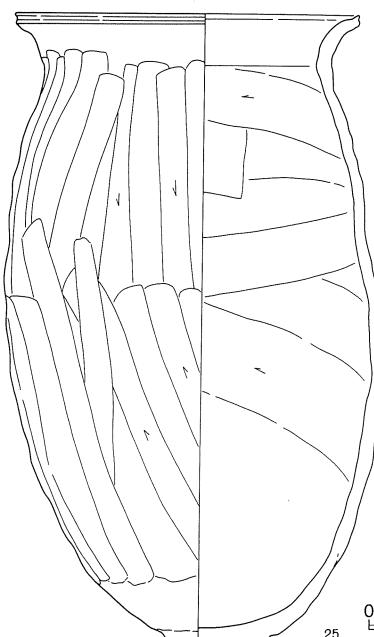
22



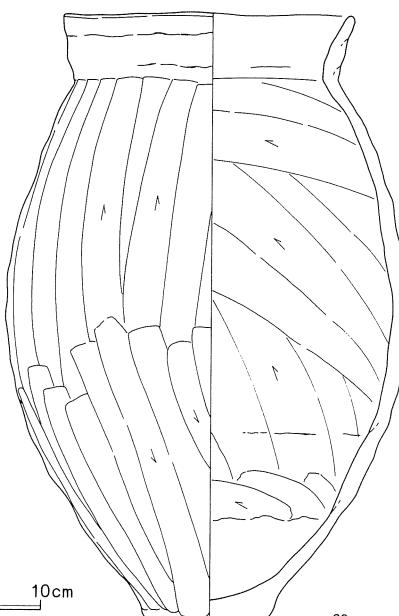
23



24



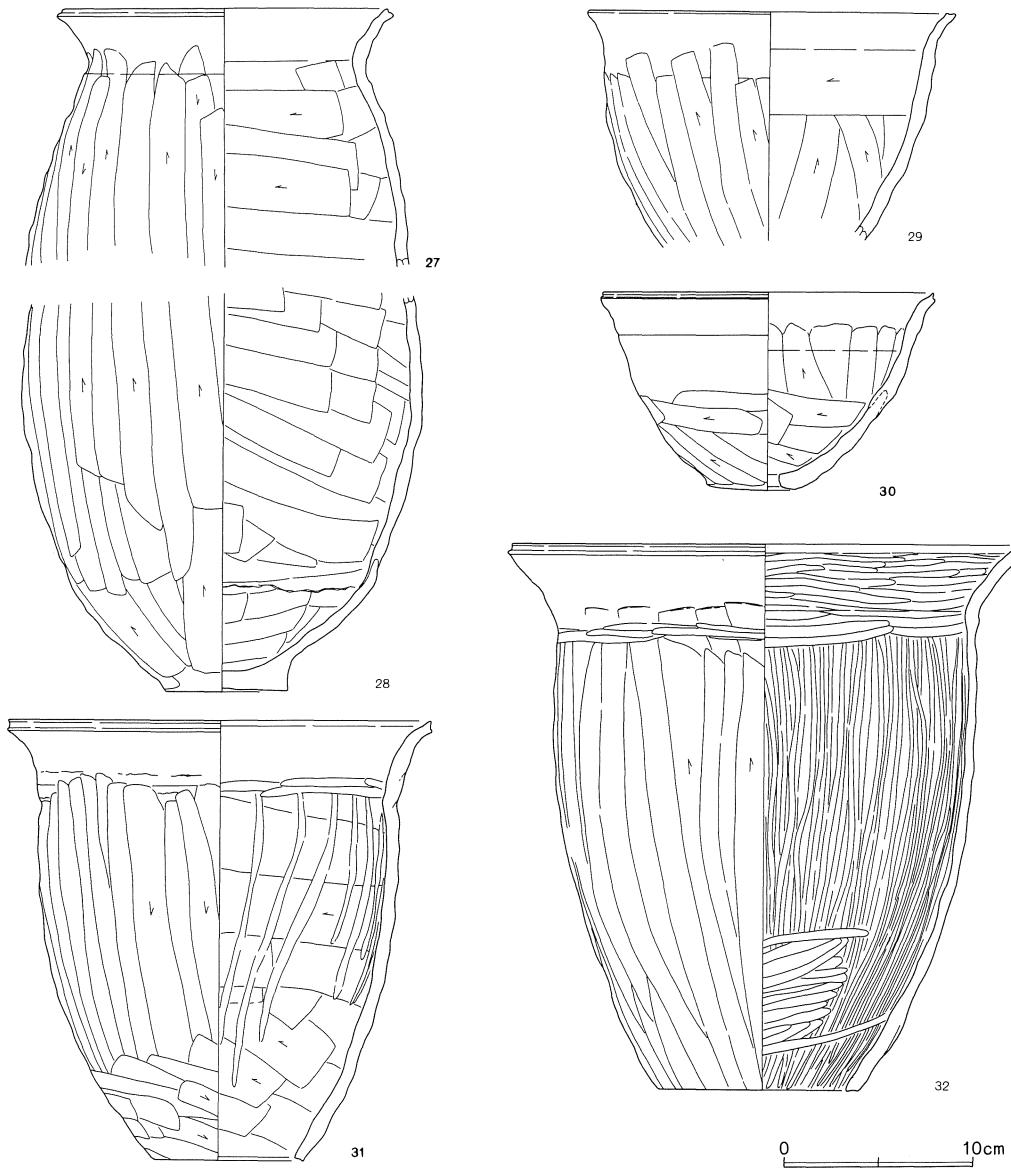
25



26

0 10cm

第178図 第53号住居跡 出土遺物（2）



第179図 第53号住居跡 出土遺物（3）

第53号住居跡出土土器観察表(2)

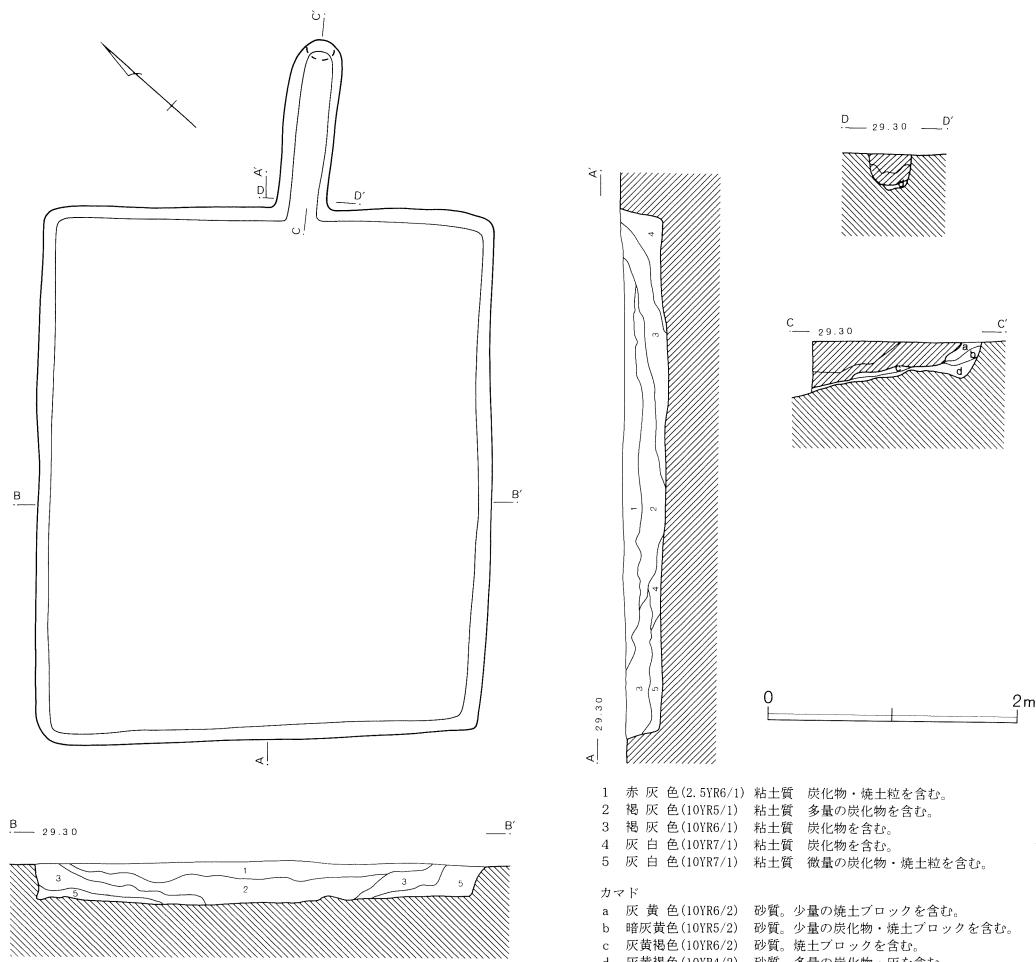
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
25	甕	(18.3)	33.0	(5.5)	W	A	鈍橙	40	
26	甕	15.4	32.0	6.4	RWW'	B	明褐	70	No.1 カマド左袖先端
27	甕	17.6	(13.6)		RWB	A	鈍黄橙	60	
28	甕		(20.9)	6.5	RBH	B	鈍黄橙	50	No.5 カマド右袖先端
29	甕	19.5	(12.0)		RWB	A	赤褐	70	
30	甕	17.5	10.4	4.6	WW'B	A	灰黃	95	2層
31	甕	22.4	23.0	7.9	RW	A	明赤褐	70	
32	甕	26.9	28.6	10.5	RWB	A	橙	95	2層

## 第54号住居跡

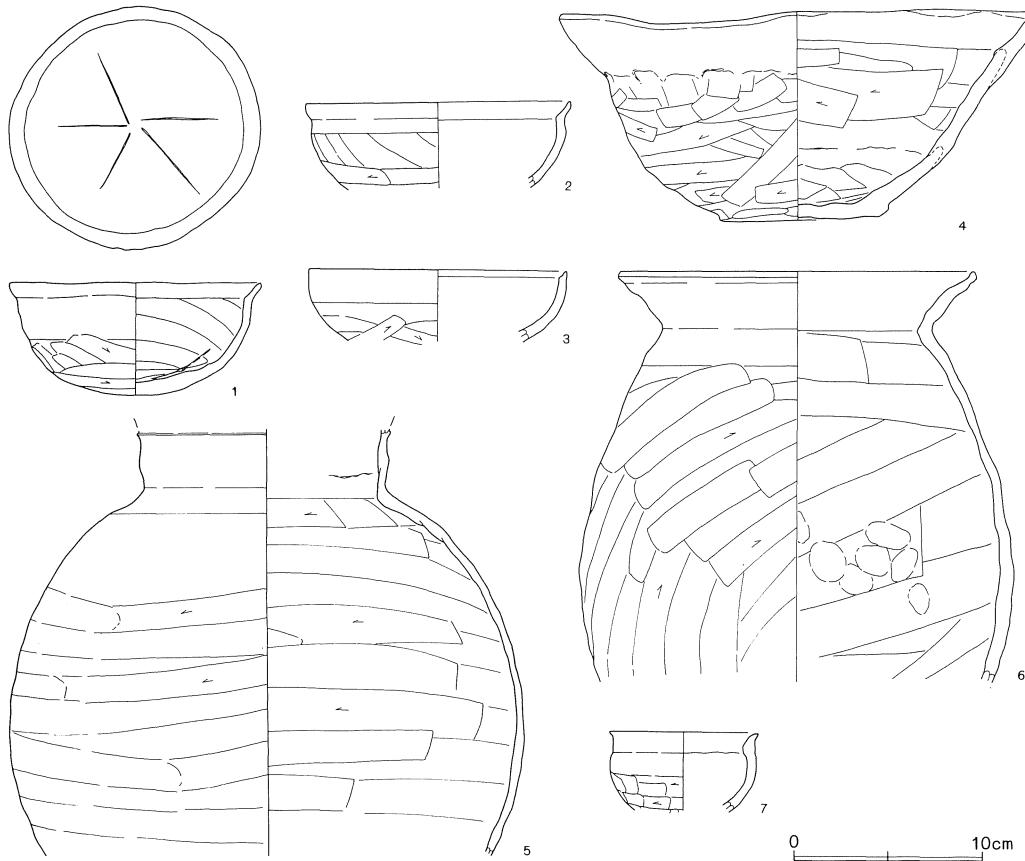
き-4 グリッドに位置する。規模は長軸長4.04m、短軸長3.37m、深さ0.35mで、主軸方向はN-50°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北東壁に造られていたが、袖および燃焼部は残存せず、煙道のみを検出した。煙道は幅36cm、長さ144cmで、わずかな傾斜をつけて地山を掘り抜き、先端に煙出口をもっていた。

遺物の出土は少量であった。1・2の壺はわずかに湾曲する内斜口縁であるが、1の内面には5本の放射状暗文がある。3の壺は胎土中に雲母細粒が含まれ、色調もやや白っぽいが口縁端部に内斜するシャープな面をもつ点でも1・2と異なる。壺には有稜の模倣壺は含まれていない。4の鉢は多量の砂粒を含む胎土を用いた粗製のものであり、火に掛けられたため器面が荒れている。7は椀形のミニチュア土器である。



第180図 第54号住居跡



第181図 第54号住居跡 出土遺物

#### 第54号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.3	5.9		RW	B	橙	100	内面に暗文有り
2	壺	(14.0)	(4.6)		RWW'	C	橙	25	
3	壺	(13.7)	(3.8)		WBU	B	鈍橙	15	
4	鉢	25.1	10.9	8.4	RW	C	鈍黄橙	90	粗製 火に掛けた痕跡有り
5	壺		22.5		RWB	B	橙	20	
6	甕	(18.9)	(21.7)		RB	B	浅黄	30	
7	ミニチュア	(8.0)	(4.1)		RW	B	明赤褐	40	

#### 第55号住居跡

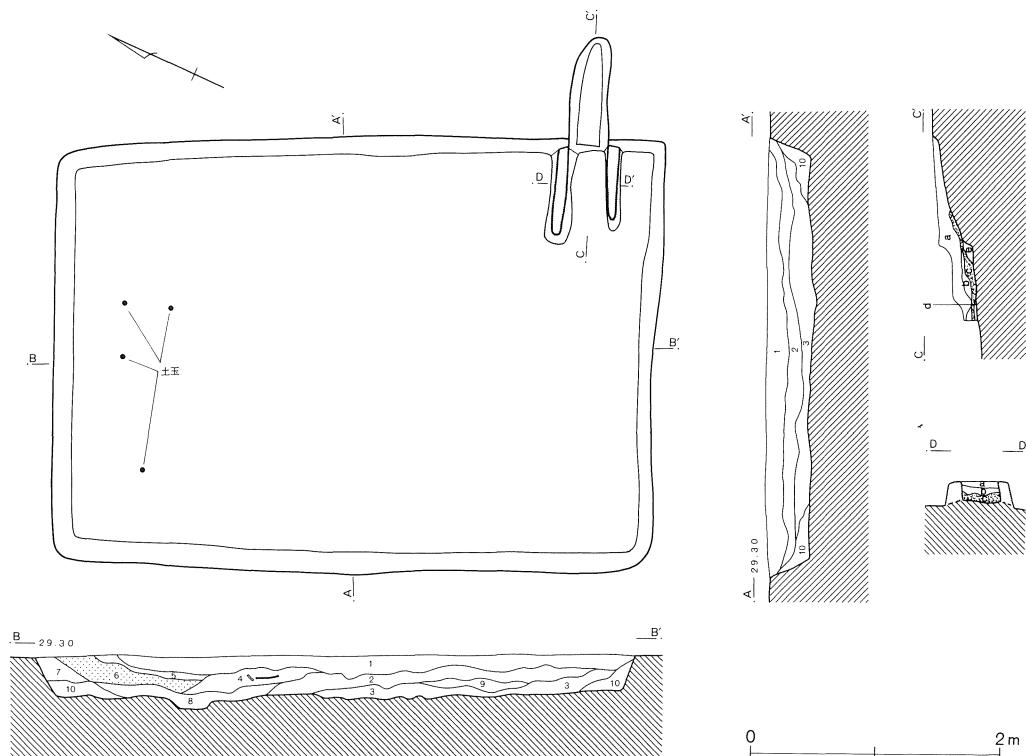
きー4グリッドに位置する。規模は長軸長4.53m、短軸長3.16m、深さ0.32mで、主軸方向はN-68°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土6層中にはFAブロックが含まれていた。

カマドは東壁の南東隅よりに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは73cmで、

燃焼部の幅は30cmである。煙道は幅32cm、長さ86cm以上で、傾斜をもって掘り抜かれていた。

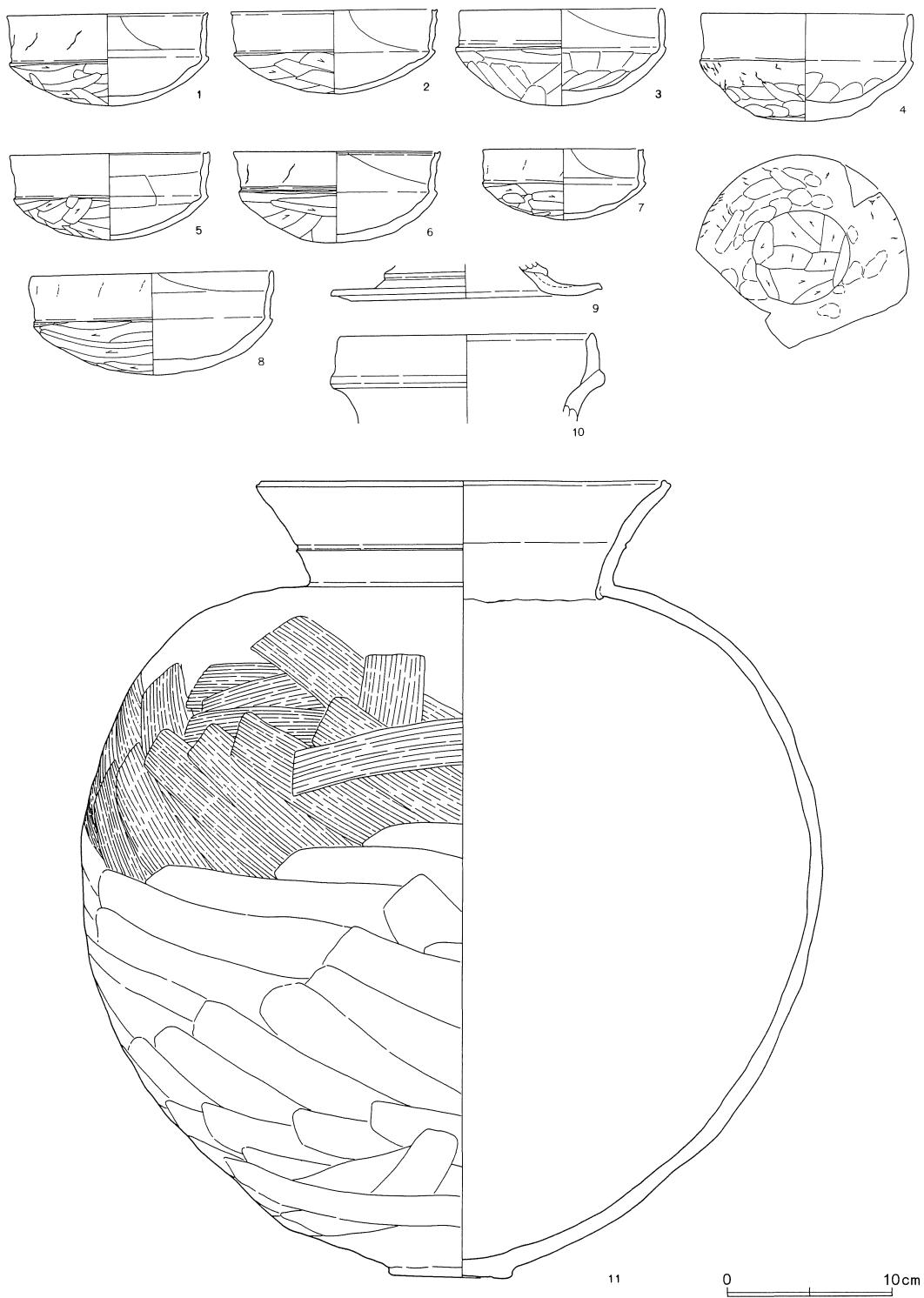
長方形プランで住居隅寄りにカマドを設置する同規模のものは遺跡内では他に例がなく、小型のもので第34号・第124号住居跡の2軒があるのみである。

出土遺物の量は少ない。4の壺は体部の器面調整が未完であり、全体の成形段階から口辺部のヨコナデ調整まで残していた底部の突起を削り落とした以外には、成形時の面を残し、指頭痕や小亀裂がみとめられる。5の壺は体部に径3mmの小礫脱落孔が貫通している。9・10は小破片からの復原図である。9は高壺の有段脚裾部で、10は受け口状の有段口縁である。11は大型壺であるが欠損部が多いことと個々の破片が別々に火を受け変質していることから、覆土中へ投棄されたものと見られる。このほか土玉4点が出土している。

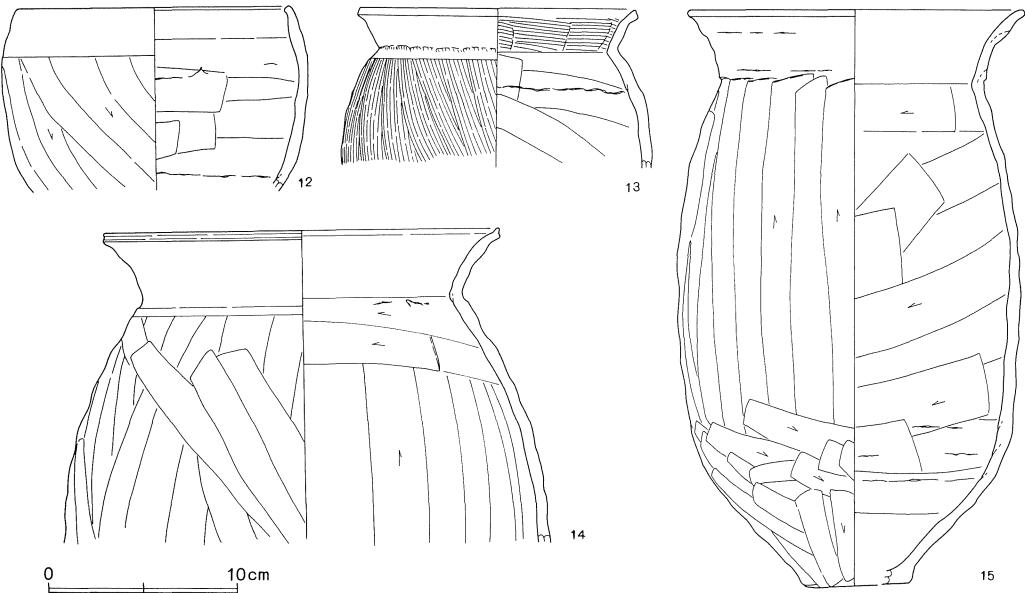


- |                                       |                                      |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 褐 灰 色(10YR5/1) 塩化物・焼土粒を含む。          | カマド                                  |
| 2 灰 赤 色(2.5YR5/2) 多量の鉄分粒・微量の炭化物を含む。   | a 褐 灰 色(10YR5/1) 焼土粒・炭化物を含む。         |
| 3 赤 灰 色(2.5YR5/1) 塩化物・白色シルトを含む。       | b 鈍赤褐色(2.5YR5/3) 粘土質・焼土粒・ブロックを含む。    |
| 4 褐 灰 色(10YR4/1) 粘土質・多量の炭化物を含む。       | c 褐 灰 色(10YR4/1) 灰炭化物層。              |
| 5 灰 色(10YR5/1) 粘土質・多量の炭化物を含む。         | d 橙 色(2.5YR6/6) 粘土質・火を受けている。         |
| 6 褐 灰 色(10YR5/1) 粘土質・炭化物・F.A.ブロックを含む。 | e 灰 黄 色(2.5YR6/2) 砂質・焼土粒を含む・填砂と混合する。 |
| 7 褐 灰 色(10YR6/1) 粘土質・微量の炭化物を含む。       |                                      |
| 8 灰黄褐色(10YR5/2) 粘土質・炭化物・白色シルトを含む。     |                                      |
| 9 灰 赤 色(2.5YR5/2) 塩化物を含む。             |                                      |
| 10 灰 赤 色(2.5YR6/2) 微量の炭化物を含む。         |                                      |

第182図 第55号住居跡



第183図 第55号住居跡 出土遺物（1）



第184図 第55号住居跡 出土遺物（2）

第55号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.2	5.5		RW	B	橙	80	
2	壺	12.6	5.0		RWB	B	橙	95	
3	壺	12.4	5.8		RW	B	明赤褐	60	体部外面ヘラナデ
4	壺	12.3	6.5		RB	C	橙	70	底部ヘラケズリ以外未調整
5	壺	12.2	5.2		RW	A	明赤褐	100	小礫脱落小孔有り
6	壺	12.6	5.5		RB	B	橙	70	
7	壺	9.8	4.3		RWB	A	橙	100	
8	大型壺	14.8	6.1		RW	B	橙	50	
9	高壺		(2.0)	(16.6)	RWB	B	橙	10	
10	壺	(15.0)	(5.4)		RW	B	鈍黄橙	10	
11	壺	25.7	48.6		RWW'	C	鈍褐	65	
12	鉢	(14.4)	(9.6)		RWB	C	鈍赤褐	30	火に掛けた痕跡有り
13	小型甕	(14.8)	(8.4)		RWB	B	明褐	40	
14	甕	(20.9)	(16.3)		R	A	浅黄橙	40	壺的な成形
15	甕	17.9	30.4		RW	A	鈍橙	80	

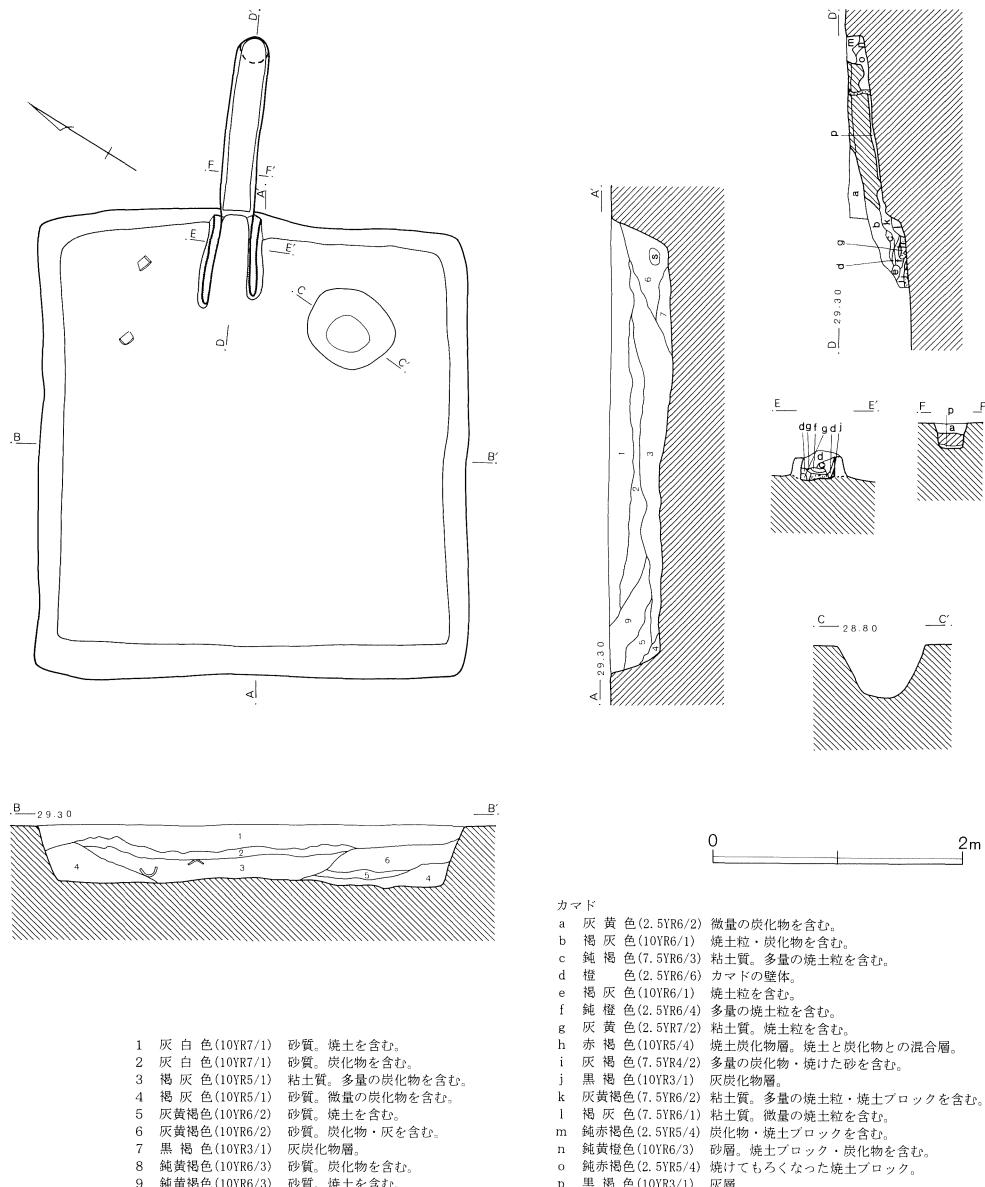
第56号住居跡

きー4グリッドに位置する。規模は長軸長3.31m、短軸長3.07m、深さ0.46mで、主軸方向はN-60°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれていたが、カマド右側で径70cm、深さ42cmの貯蔵穴を検出した。このほか、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

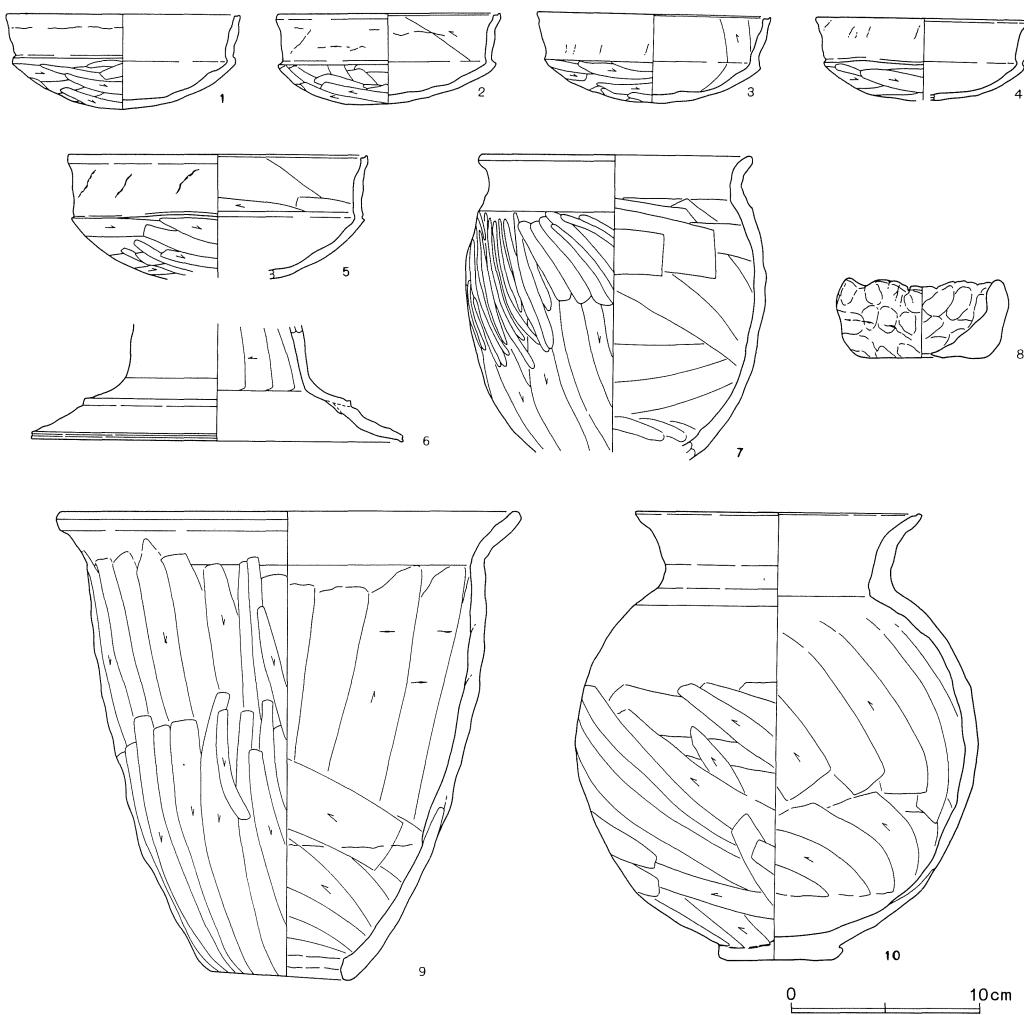
カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは75cmで、燃焼部の幅

は27cmである。煙道は幅25cm、長さ138cmで、ほぼ水平に地山を掘り抜き、先端には煙出口をもっていた。

遺物の出土は少量だった。6は有段の高壊脚裾部であるが底径19.8cm、脚柱部下端径9.8cmの大型の高壊と考えられる。8の手捏土器は25%の残存部で見る限り、底部中央に穴があいていたと考えられる。9の甌は底孔の内縁が磨滅している。このほか、西壁寄りの床面上で径20cmの範囲に赤色顔料が薄く分布しているのを確認した。また、滑石の剝片が2点出土した。



第185図 第56号住居跡



第186図 第56号住居跡 出土遺物

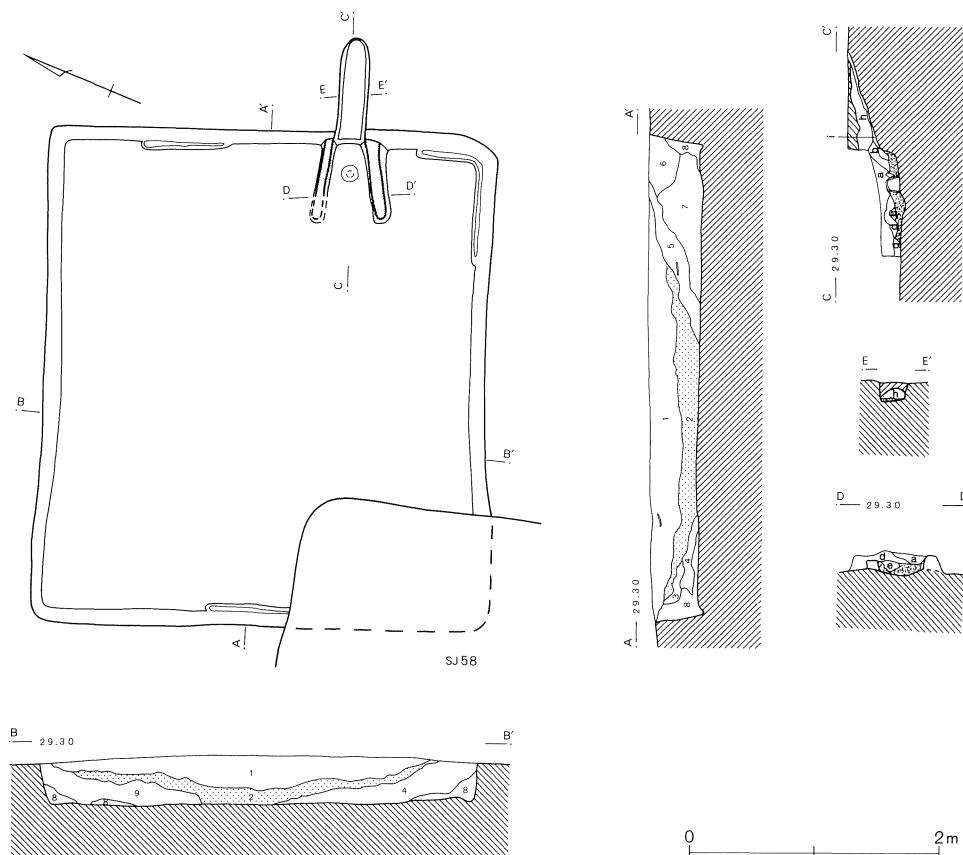
第56号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	5.0		RW	B	橙	100	
2	坏	11.9	4.8		RW	A	橙	80	
3	坏	12.4	4.6		RW	B	鈍橙	100	
4	坏	(11.6)	(4.3)		RW	C	橙	30	
5	大型 坏	(15.9)	(6.5)		RWB	B	明赤褐	40	
6	高 坏		(6.2)	(19.8)	RWB	A	橙	25	
7	小型 甕	14.4	(15.6)		RWB	B	橙	80	
8	手捏土器	4.1	(8.0)	(7.0)	W'	B	褐灰	25	底部孔有り
9	甕	24.7	24.3	7.3	RWB	A	鈍橙	70	底孔内縁磨滅
10	壺	15.2	23.5	5.6	WB	A	橙	60	

## 第57号住居跡

き-4 グリッドに位置する。第58号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長3.71m、短軸長3.22m、深さ0.40mで、主軸方向はN-72°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、東壁、西壁の一部と南東隅で幅13cm、深さ4cmの壁溝を検出した。そのほか、貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。覆土2層中にはFAブロックが含まれていた。また、6・7・8層は不自然な堆積状態であり、人為的な埋土と考えられる。

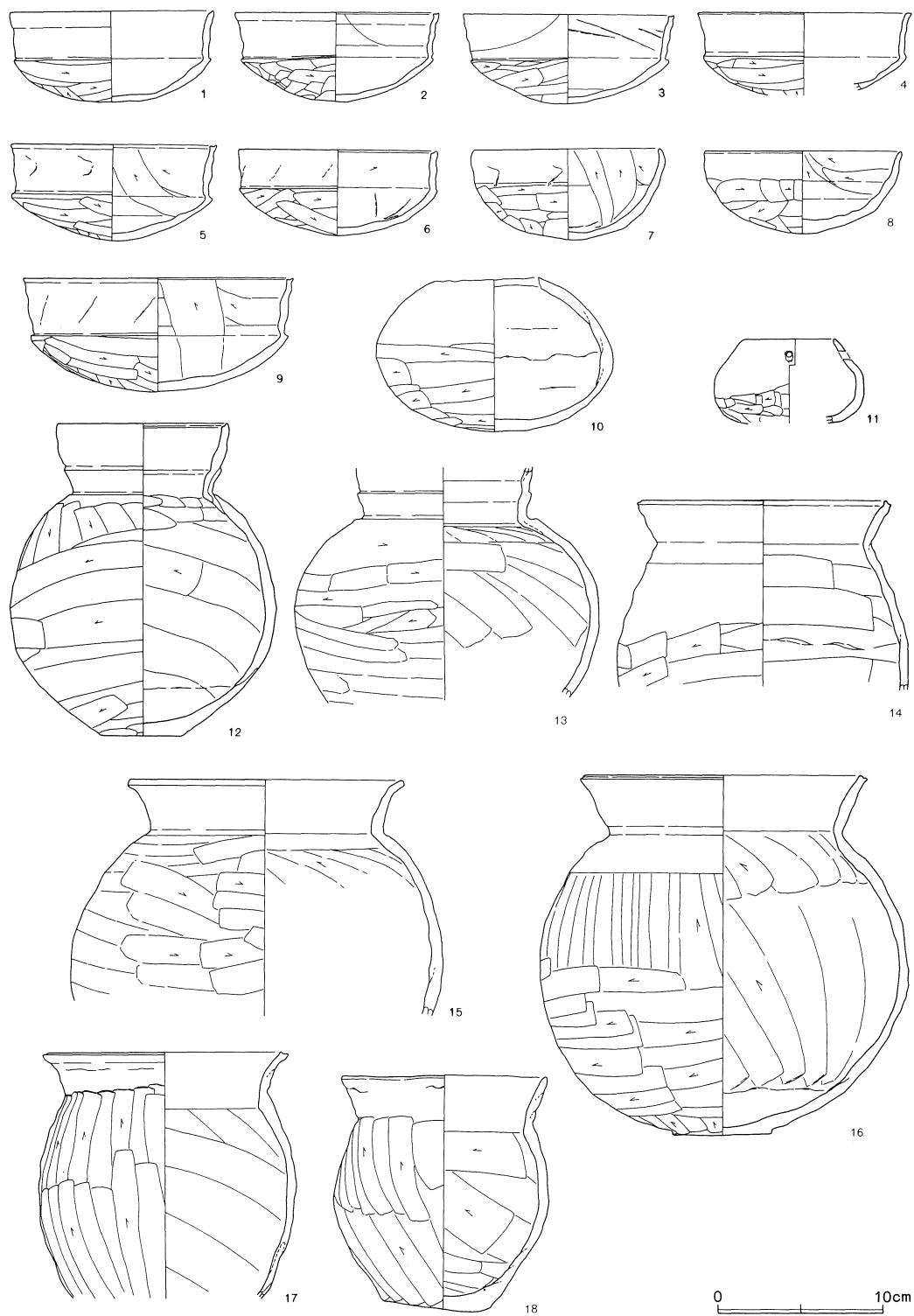
カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは63cmで、燃焼部の幅は36cmである。煙道は幅22cm、長さ78cm以上で、傾斜をつけて地山を掘り抜いていた。支脚位置は中軸線上であり、小型甕が倒立転用されていた。



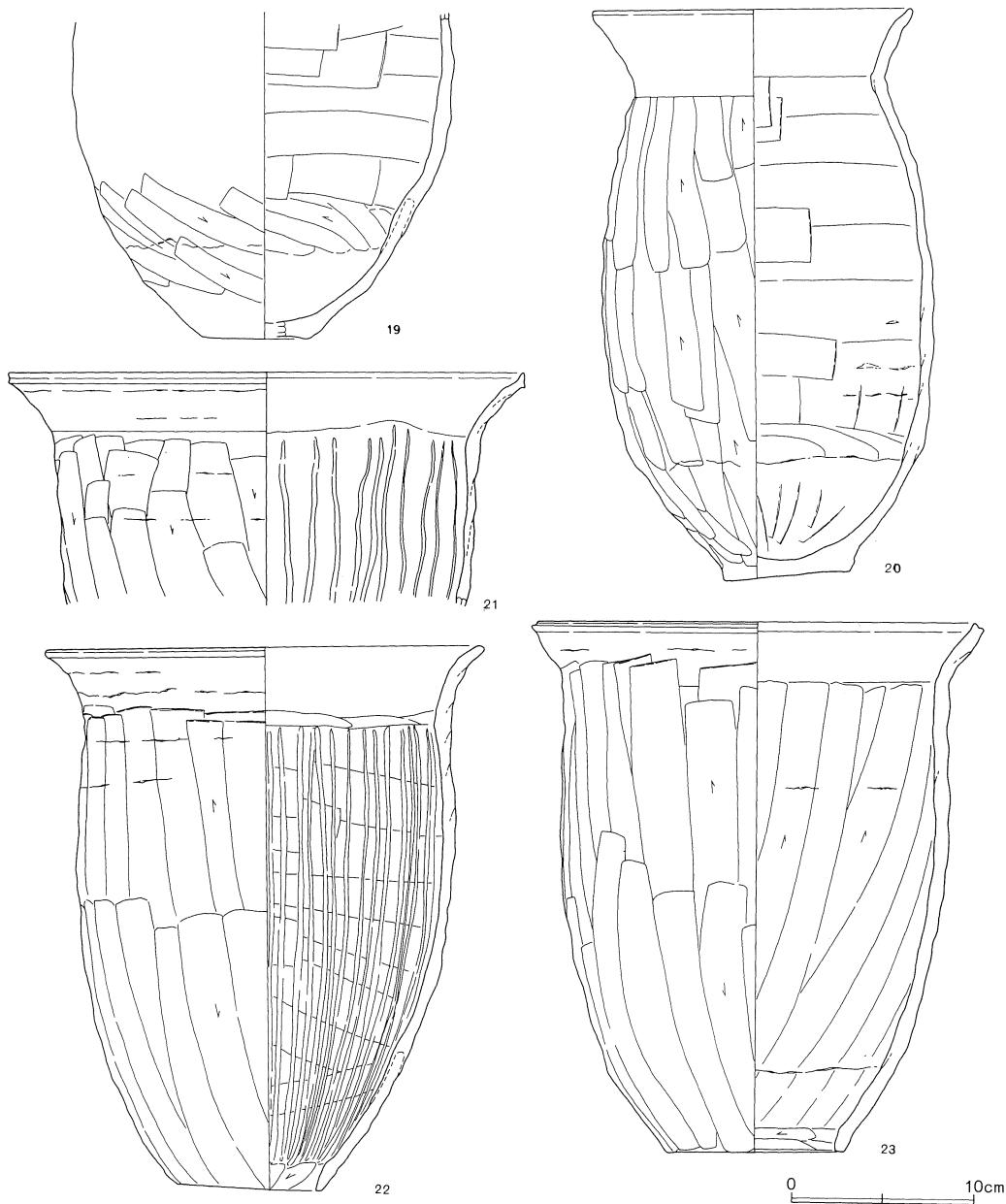
- 1 灰黄褐色(10YR6/2) 炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色(10YR6/2) 炭化物・FAブロックを含む。
- 3 灰黄褐色(10YR6/2) 燃土粒を含む。
- 4 灰黄褐色(10YR5/2) 炭化物を含む。
- 5 暗灰褐色(10VR4/1) 灰・炭化物を含む。
- 6 灰黄褐色(10YR6/2) 炭化物・燃土粒を含む。
- 7 鈍黄橙色(10YR6/3) 炭化物・燃土粒を含む。
- 8 鈍黄色(2.5YR6/3) 炭化物を含む。
- 9 鈍黄橙色(10YR6/3) 多量の炭化物・燃土粒を含む。

- a 鈍黄橙色(5Y6/3) 炭化物・燃土粒を含む。
- b 鈍橙色(2.5YR6/4) 多量の燃土粒を含む。
- c 黄色(2.5YR4/3) 少量の燃土粒を含む。
- d 灰黄褐色(7.5YR5/2) 粒土質。火を受けている。
- e 橙色(2.5YR6/6) 燃土ブロック。崩落した天井部。
- f 暗灰色(10VR4/1) 灰層。
- g 鈍黄橙色(10YR6/3) 灰・燃土を含む。
- h 灰黄色(2.5YR6/2) 燃土粒を含む。
- i 暗灰色(10YR4/1) 灰層。

第187図 第57号住居跡



第188図 第57号住居跡 出土遺物（1）



第189図 第57号住居跡 出土遺物（2）

遺物は大部分が覆土中からの出土である。7・8の壺は稜をつくり出さず、口辺端部にも面取りがなされていない。10の壺は胴部のみ完存しており、口縁部欠損後、無頸のまま使用されていたと考えられる。11の無頸壺は小孔をもつが孔数は不明である。3・7の壺、12・13・16の壺は覆土中へ投棄された土器であり、埋没途中で火を受けた煤の痕跡がみとめられる。

第57号住居跡出土土器観察表

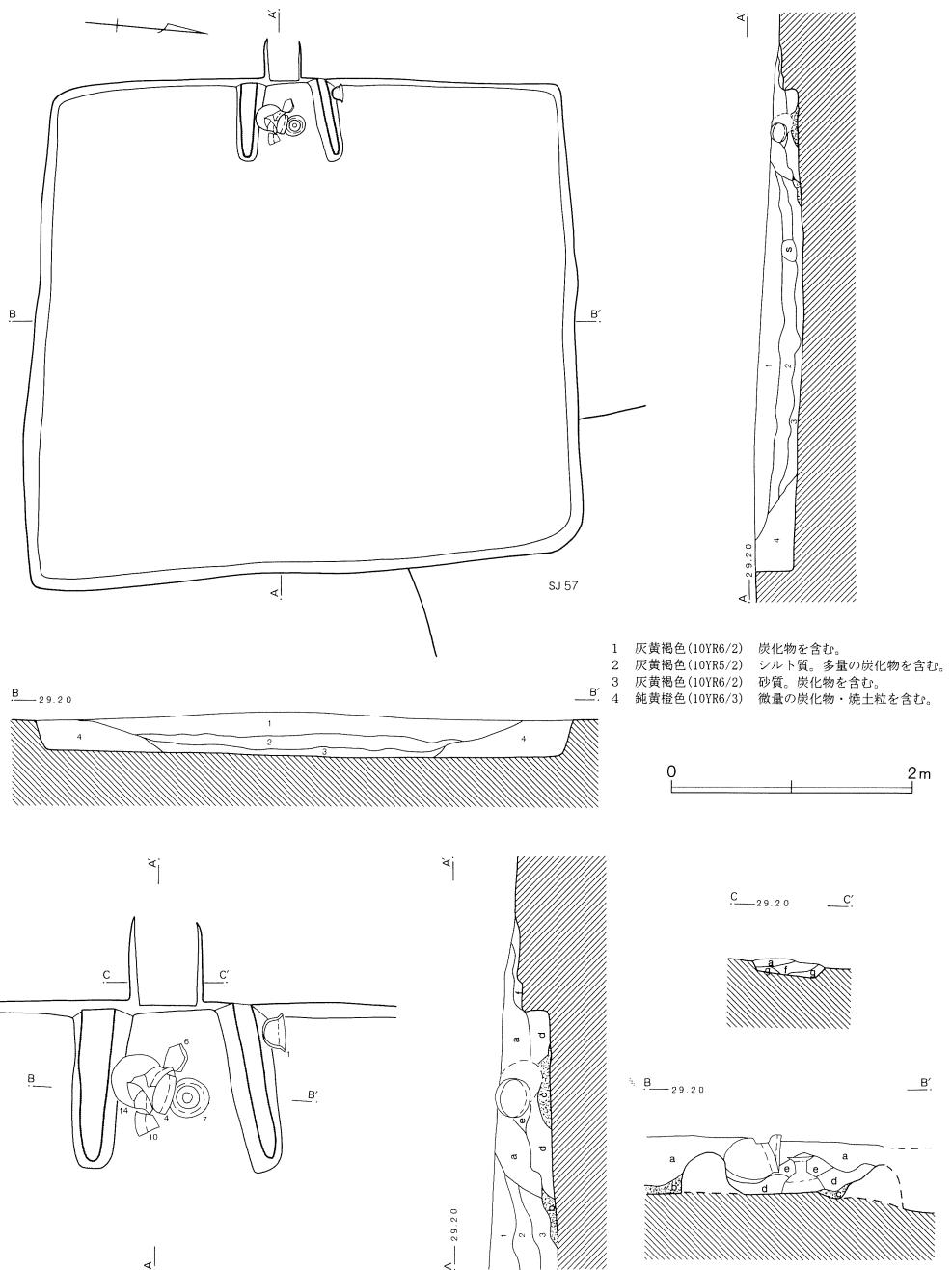
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	5.5		RWW'	B	橙	60	
2	壺	12.4	5.3		RW	A	鈍黃橙	100	
3	壺	12.8	5.4		RWB	B	橙	80	
4	壺	12.9	(5.0)		RW	B	橙	50	
5	壺	12.5	5.8		RWB	B	橙	90	
6	壺	12.1	5.1		RW	B	橙	90	
7	壺	11.3	5.5		RW	A	橙	100	
8	壺	11.9	5.0		RWB	B	橙	90	
9	大型 壺	16.4	6.8		RWB	A	橙	100	
10	埴		(9.1)		RWB	A	橙	100	無頸のまま使用
11	無頸壺	(5.4)	(5.1)		RW	A	橙	25	孔数不明
12	壺	10.3	18.7	4.9	RWB	B	橙	60	
13	壺		(14.0)		RWB	A	橙	70	
14	壺	(15.4)	(11.2)		RW	A	橙	40	
15	壺	16.8	(14.2)		RW	B	鈍黃橙	60	
16	壺	17.2	21.6	6.0	RW	A	橙	80	
17	甕	14.9	14.8		RWW'B	B	橙	70	
18	小型 甕	12.5	13.9	5.8	RWH	A	橙	100	No.1 転用支脚
19	甕		(17.7)	(5.8)	WB	A	鈍褐	90	外表面接合部以外ナデ
20	甕	17.5	30.9	6.9	RW	A	灰黃	95	
21	甕	28.0	(12.7)		RW	B	橙	70	
22	甕	23.9	29.2	7.9	RW	B	鈍黃橙	80	
23	甕	23.6	28.7	9.7	RW	A	橙	90	

## 第58号住居跡

きー4グリッドに位置する。第57号住居跡に切られていた。規模は長軸長4.26m、短軸長3.91m、深さ0.35mで、主軸方向はN-97°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは64cmで、燃焼部の幅は51cmである。土層断面の観察から崩落した天井d層が明瞭に判別できる。煙道は幅30cm、長さ39cm以上で、水平に掘り抜かれたと見られる。支脚位置は中軸線上であり、高壺が倒立転用されていた。左袖の外側には灰層があった。

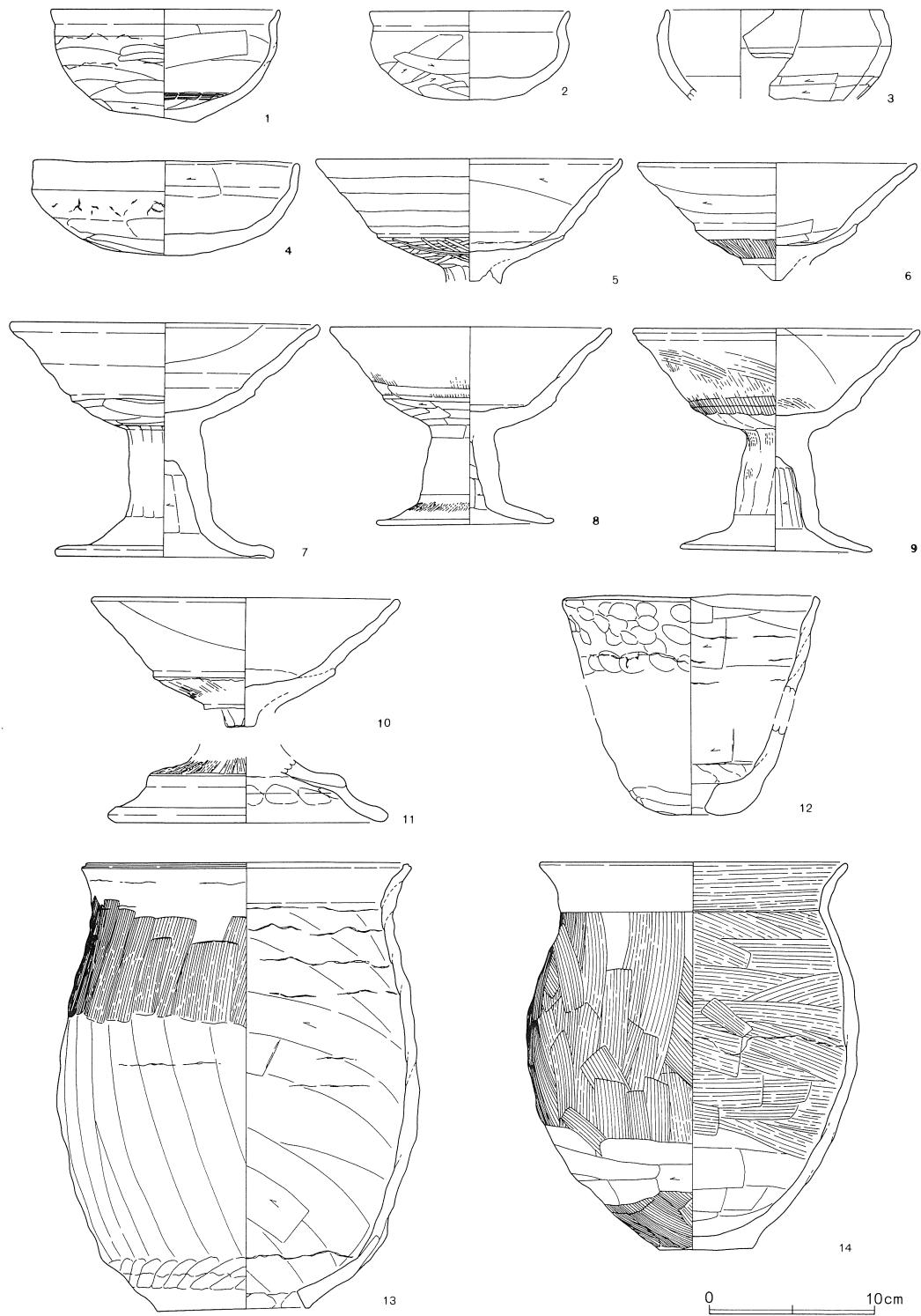
7の高壺は支脚に転用されていた。14の甕は燃焼部で横転して出土したが、4の壺に口を塞がれており、下部に支脚はなかった。燃焼部内からはこのほかに2の椀、6・10の高壺壺部が、またカマド右脇からは1の椀が出土した。11の高壺脚裾部は有段で重厚なつくりだが、調整や胎土などから見て10の壺部と同一個体になる可能性が強い。3の壺は接合する2破片からの復原図だが、大破片の方は口縁端部以外がすべて割れ口であるのに対し、小破片には口縁端と平行する平滑面がある。これは、本来この壺に透し孔があったのではなく、小破片のみ2次利用された結果、平滑面が形成されたものと考えられる。



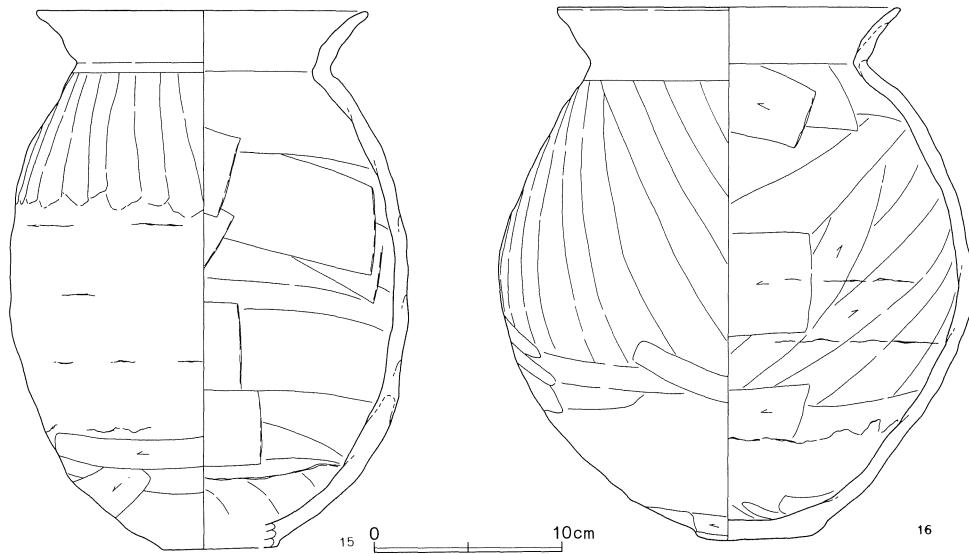
**カマド**

- a 純黄橙色(10YR7/2) シルト質。焼土ブロック含む。
- b 黒褐色(10YR6/2) 灰層。多量の炭化物・焼土ブロック含む。
- c 灰白色(10YR3/1) 灰層。きめのこまかい灰白色。
- d 明赤褐色(2.5YR5/8) 烧土層。天井及び壁面の崩落。
- e 灰黄褐色(10YR7/1) シルト質。焼土ブロックを含む。
- f 橙色(2.5YR6/6) 烧土層。煙道の天井、側壁の崩落。
- g 純黄橙色(10YR7/2) 粘土質。地山が加热され変質した部分。

第190図 第58号住居跡 カマド



第191図 第58号住居跡 出土遺物（1）



第192図 第58号住居跡 出土遺物（2）

第58号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	椀	13.8	6.5		RW	A	橙	80	No. 9・11
2	椀	12.1	5.3		RWB	B	鈍橙	70	カマド
3	壺	(13.0)	(5.4)		RWB	A	鈍橙	25	2次利用破片
4	壺	16.1	5.6		RWB	A	鈍橙	80	No. 2 不整形
5	高壺	18.5	(7.3)		RW	A	橙	70	
6	高壺	16.9	(7.0)		BU	A	橙	50	No. 4
7	高壺	18.7	14.0	13.2	WW'B	B	明赤褐	90	No. 5 転用支脚
8	高壺	17.0	11.7	10.8	RWB	A	橙	95	
9	高壺	17.3	13.2	11.6	RWW'B	A	橙	80	
10	高壺	18.6	(7.7)		RWB	B	明赤褐	80	No. 3
11	高壺		(4.0)	16.9	RWB	B	明赤褐	60	
12	甌	15.5	12.9	3.5	RWB	A	橙	70	粗製
13	甌	19.6	26.5	8.9	RWW'B	B	橙	70	粗製形 外面ナデ調整
14	甌	18.5	23.1	5.7	RWB	B	明赤褐	95	No. 1
15	甌	17.5	(28.3)	(6.0)	RWW'B	B	浅黄橙	80	外面ナデ調整
16	甌	18.2	28.0	6.2	RWW'B	B	淡黄	50	外面ナデ調整

第59号住居跡出土土器観察表(1)

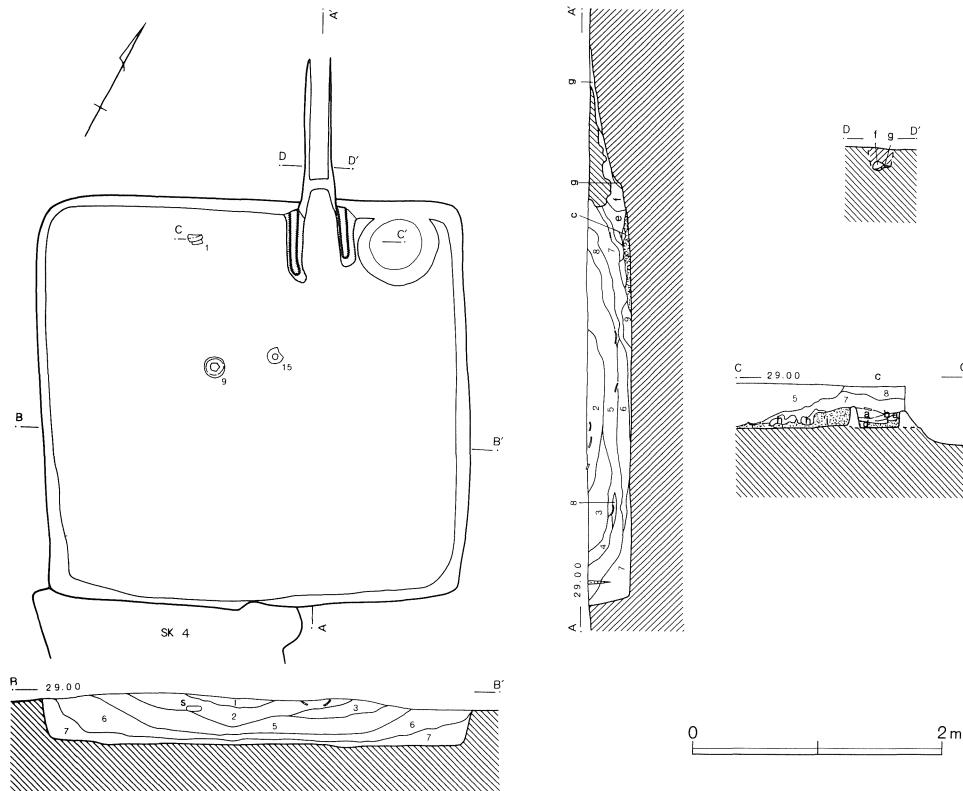
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.7	4.9		RW	B	橙	80	No. 1
2	壺	12.1	4.7		RW	B	橙	80	5層
3	壺	12.8	4.5		RW	A	橙	60	
4	壺	12.8	(5.0)		WW'	A	橙	50	
5	壺	12.2	4.8		W	B	鈍褐	90	
6	壺	12.0	5.4		RW	B	橙	70	2層
7	壺	(12.9)	(3.2)		RW	A	鈍赤褐	15	内外面黒色処理
8	壺	(10.9)	(3.9)		WB	B	鈍赤褐	40	内外面黒色処理

## 第59号住居跡

きー4グリッドに位置する。第4号土壙を切り込んでいた。規模は長軸長3.25m、短軸長3.09m、深さ0.36mで、主軸方向はN-29°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、カマド右側で径64cm、深さ14cmの皿状の貯蔵穴を検出したが壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは0.75mで、燃焼部の幅は33cmである。煙道は幅20cm、長さ111cm以上で、傾斜をつけて地山を掘り抜いていた。左袖の外側には灰層があった。

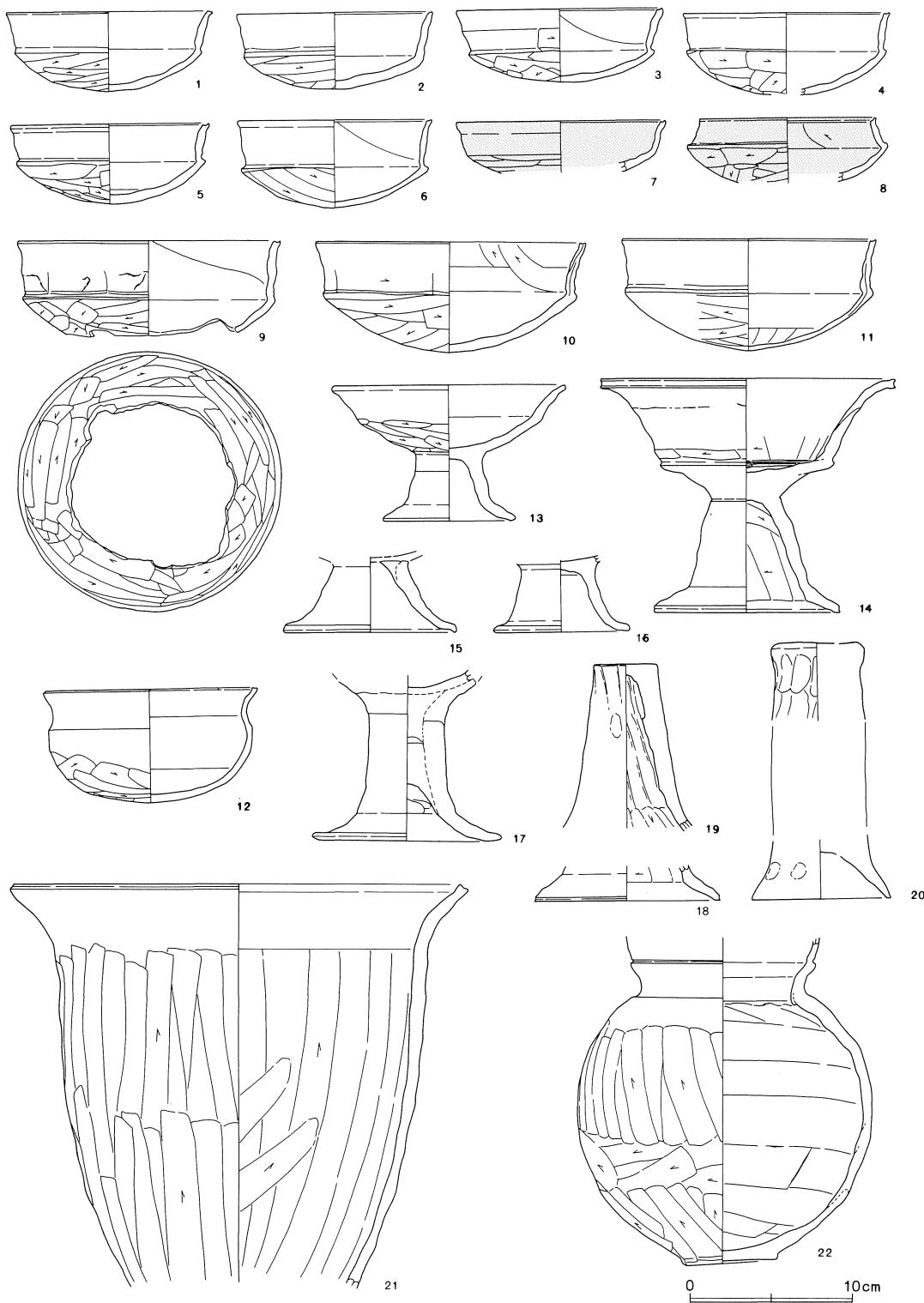
遺物は、床面上、5層中、2層中、の3面から出土した。床面上のものは9の体部を大きく穿孔した大型壺と15の高壺脚部であり、正位で出土した。また、1の壺と10の大型壺はカマド左脇の灰層に伴うものであり、床面上と同等に扱うことができる。5層中からは2の壺が出土した。さらに2層中からは6の壺、14・16・17の高壺、22の壺、23・25の甕などが出土した。



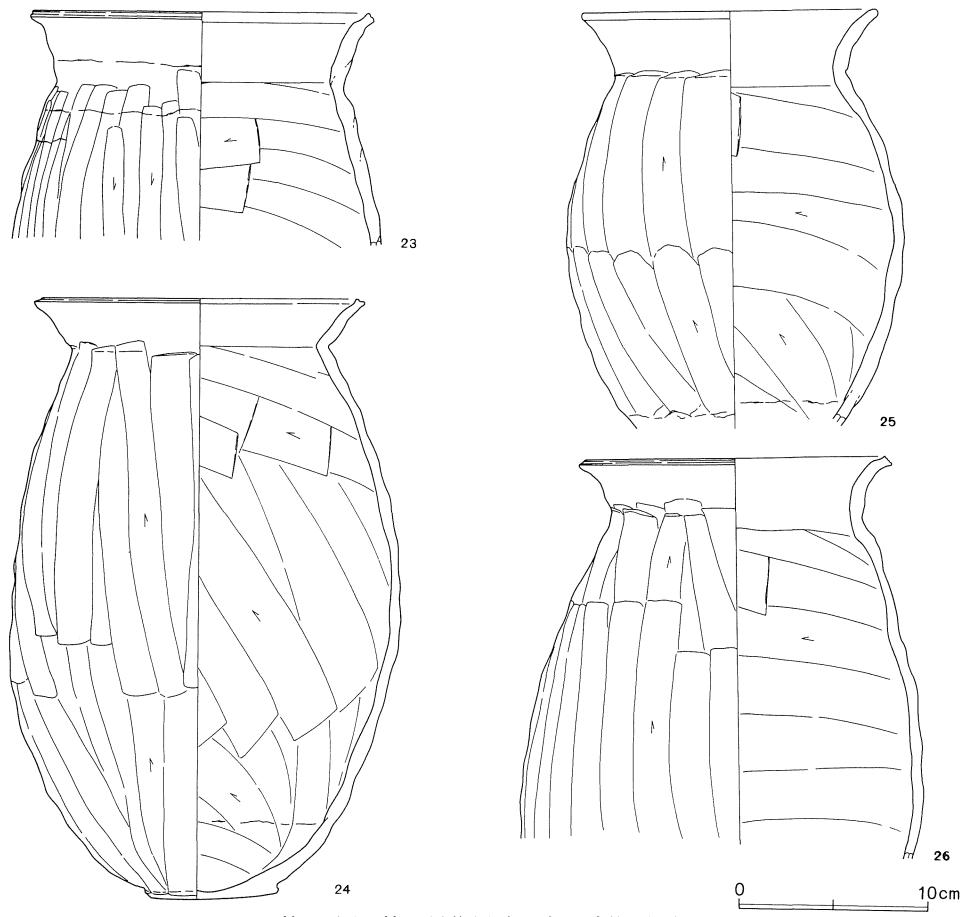
- 1 鈍黄橙色(10YR7/2) シルト質。微量の炭化物を含む。
- 2 褐灰色(10YR5/1) シルト質。多量の炭化物、土器・礫を含む。
- 3 灰白色(10YR8/1) シルト質。微量の炭化物を含む。
- 4 褐灰色(10YR5/1) シルト質。多量の炭化物を含む。
- 5 褐灰色(10YR6/1) 砂質。多量の土器、炭化物を含む。
- 6 灰黃褐色(10YR6/2) 砂質。少量の炭化物、土器片を含む。
- 7 褐灰色(10YR6/1) シルト質。少量の炭化物を含む。
- 8 褐灰色(10YR5/1) 灰層。多量の炭化物を含む。
- 9 褐灰色(10YR5/1) 灰層。焼土ブロックを含む。

- カマド**
- a 鈍黄橙色(10YR7/2) 粘土質。軟質で混入物なし。
  - b 褐灰色(10YR6/1) シルト質。灰を含む。
  - c 橙色(2.5YR6/8) 焼土層。カマド中央部にあり全体に広がらない。
  - d 褐灰色(10YR4/1) 灰層。
  - e 灰黃褐色(10YR6/2) シルト層。加熱粘土ブロックとf層との混合層。
  - f 灰白色(10YR7/1) シルト層。煙道外からの流入土。
  - g 黒色(10YR2/1) 灰層。カマド内の灰より目が細かく黒い。
  - h 鈍黄橙色(10YR7/2) シルト質。地山土のブロック。
  - i 黑褐色(10YR3/1) 灰層。カマド粘土ブロックを含む。

第193図 第59号住居跡



第194図 第59号住居跡 出土遺物（1）



第195図 第59号住居跡 出土遺物（2）

第59号住居跡出土土器観察表（2）

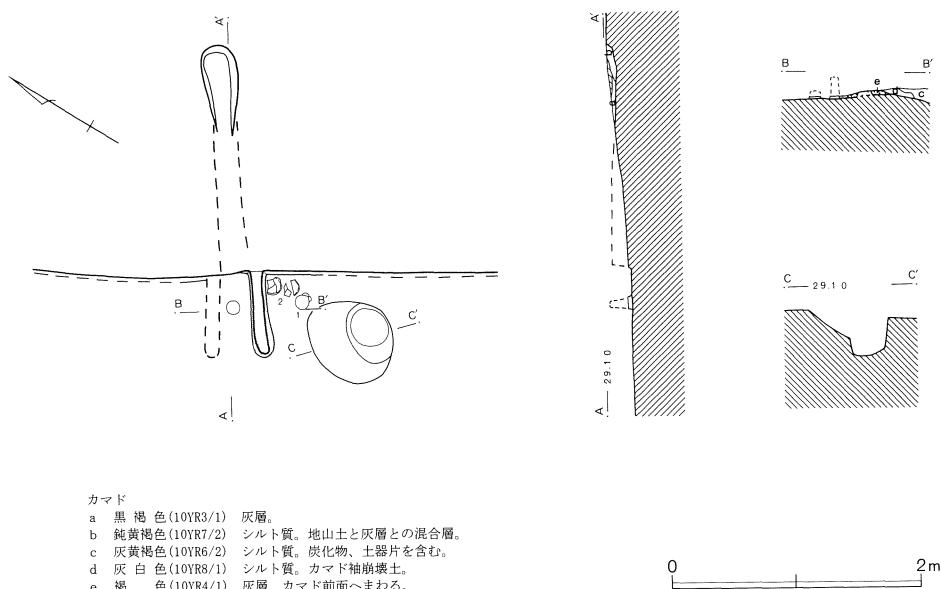
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	大型 坏	16.2	(5.8)		RW	A	明赤褐	80	No.3 穿孔土器
10	大型 坏	16.7	6.7		RW	C	明赤褐	60	カマド左脇灰層
11	大型 坏	15.7	6.8		RWB	C	明赤褐	30	
12	椀	(13.2)	(7.0)		B	B	鈍橙	40	2層 火に掛けた痕跡有り
13	高 坏	14.4	8.3	8.2	RWB	B	橙	60	
14	高 坏	18.2	14.3	11.5	RW	A	橙	70	2層
15	高 坏		(4.6)	(10.7)	RWW'	A	橙	40	No.2
16	高 坏		(4.4)	8.5	RW	B	橙	80	2層
17	高 坏		(10.1)	11.7	RWB	A	鈍橙	70	2層
18	高 坏		(2.1)	11.4	W	B	鈍橙	50	
19	支 脚		(10.0)		RW	C	赤灰	40	
20	支 脚		(15.7)	(8.8)	RW	C	明赤灰	30	
21	甌	28.1	(24.6)		RW	A	鈍橙	50	2層
22	壺		(20.0)	5.7	RWB	A	橙	70	2層
23	甌	17.8	(12.0)		WB	A	灰黄	60	2層
24	甌	17.2	31.6	6.8	WB	A	灰白	70	
25	甌	(15.6)	(22.0)		WB	A	明褐	40	2層
26	甌	(16.3)	(20.3)		WB	A	鈍黄橙	30	

## 第60号住居跡

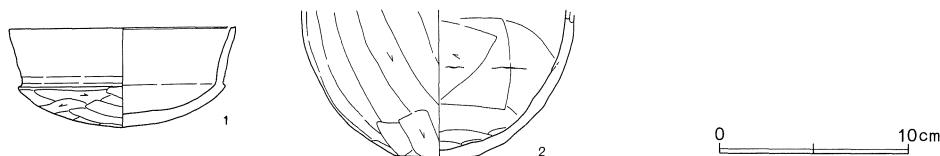
きー4グリッドに位置する。主軸方向はN-49°Eである。本住居跡は他の住居跡に比べて、掘り込みが浅かったため、検出できたのはカマドとその右側の径62cm、深さ30cmの貯蔵穴にとどまつた。このほか、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは65cmだが、わずかに残った左袖の痕跡から燃焼部の幅は28cmと見られる。煙道は長さ179cmで、水平に掘り抜かれたと考えられる。支脚位置は中軸線上であり、粘土棒が使用され、基根部のみが残っていた。右袖の外側には灰層があった。

遺物はカマド周辺から少量出土した。貯蔵穴内に遺物はなかった。



第196図 第60号住居跡



第197図 第60号住居跡 出土遺物

## 第60号住居跡出土土器観察表

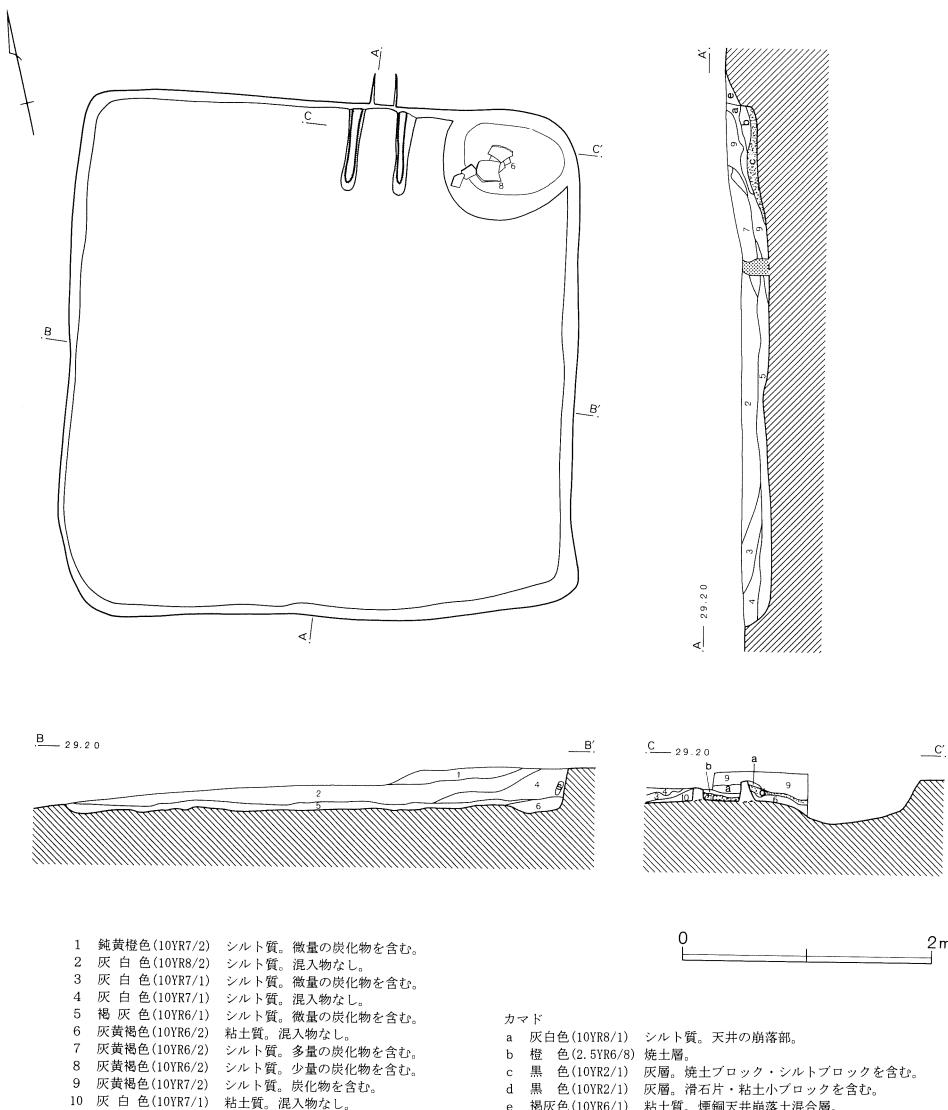
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.2)	(5.2)		RWW'	A	淡赤橙	45	No.3
2	小型甕		(7.7)	(4.4)	WB	A	淡赤橙	30	No.2

## 第61号住居跡

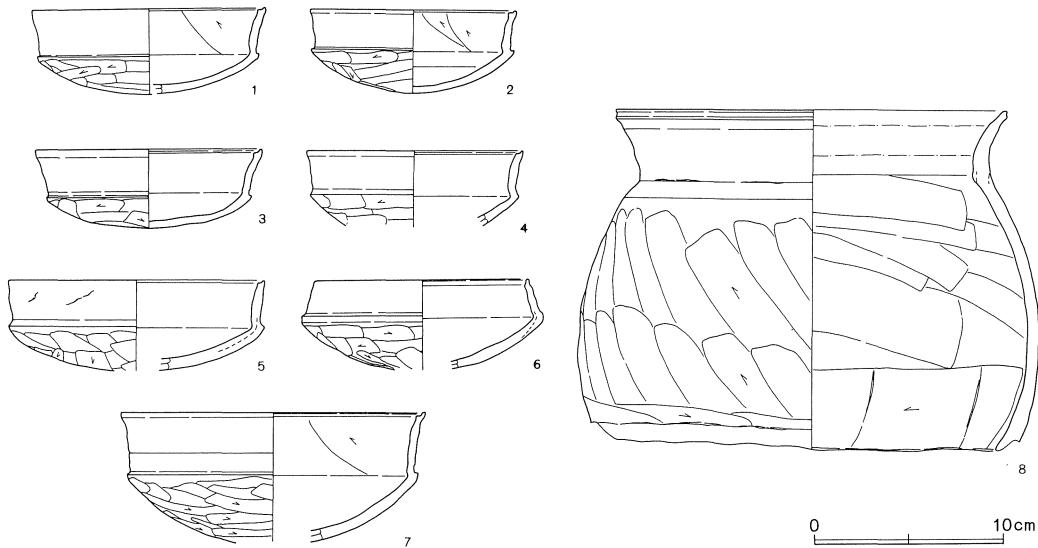
き—4 グリッドに位置する。規模は長軸長4.01m、短軸長3.59m、深さ0.20mで、主軸方向はN—16°—Eである。床面は地山砂層に掘り込まれていたが、北東隅で長径102cm、深さ17cmの皿状の貯蔵穴を検出した。壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは69cm、燃焼部の幅は29cmである。a・b層は燃焼部の天井として明確に判別できるものだった。煙道は幅20cmで傾斜をつけて掘られていた。右袖の外側には灰層があった。

遺物は貯蔵穴から6の壺と8の壺が出土したが、壺は胴部下位の擬口縁から下を除去して器台に



第198図 第61号住居跡



第199図 第61号住居跡 出土遺物

第61号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	4.5		RWW'	A	橙	50	
2	壺	11.0	4.4		RW	A	橙	80	
3	壺	12.0	4.2		RWB	A	明赤褐	50	
4	壺	(11.6)	(4.0)		RW	A	明赤褐	20	
5	壺	(13.6)	(4.8)		RWB	A	明赤褐	20	
6	壺	(11.4)	(4.8)		RWW'B	A	橙	25	No. 2
7	大型壺	(16.2)	(6.8)		RWW'B	A	明赤褐	40	
8	壺	20.7	(17.8)		RWW'B	A	橙	20	転用器台

転用されている。また覆土中からは滑石の剝片3点が出土した。表面は平滑で擦痕もあることから模造品が欠損したものか製作途中の失敗品と見られる。

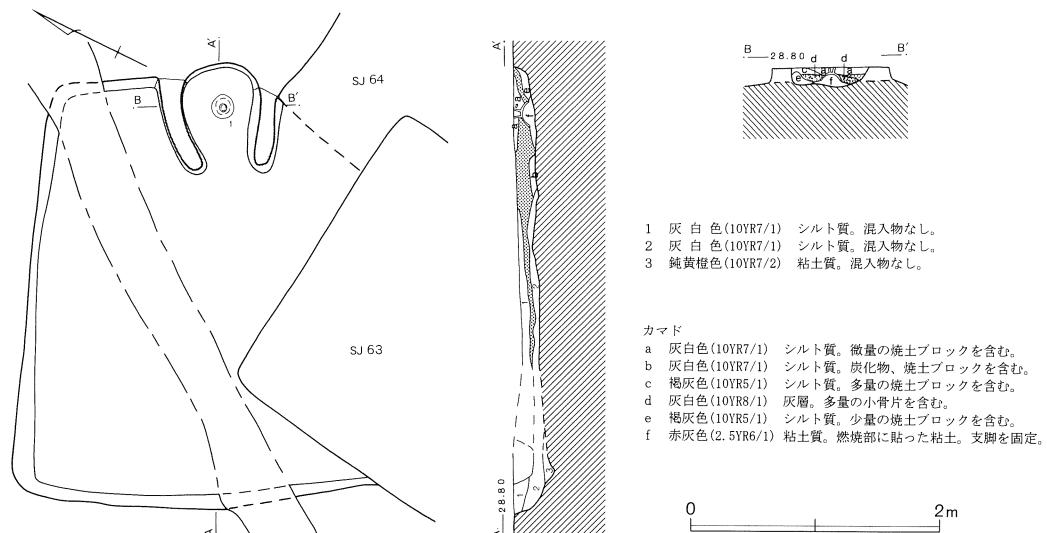
### 第62号住居跡

きー4グリッドに位置する。第63号・第64号住居跡に切られていた。また北隅から南東壁にかけて床面と壁は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長3.22m、短軸長2.50m、深さ0.18mの小型住居で、主軸方向はN-71°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

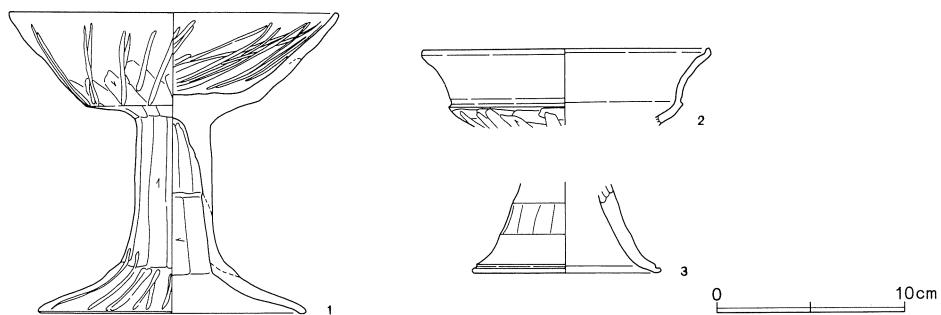
カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは72cm、燃焼部の幅は57cmである。袖は内壁の焼土化がすんでおらず、燃焼部内の灰層の状態からプランを確定したが、両袖とも壁に直角ではなく焚口が狭くなる角度に造り付けられていた。燃焼部奥壁も住居東壁ラインの外側へ湾曲気味に抉り込まれているため、燃焼部全体としては円形に近いプランとなっていた。

本住居跡は集落内でも最古段階の時期のものと考えられるが、後に続く模倣壺出現期以降のカマドが壁と垂直に袖が造り付けられ、なおかつ燃焼部幅が狭くなるとの対照的である。支脚位置は中軸線上であり、高壺が倒立転用されていたが、灰白色粘土塊によって床面に固定されていた。

遺物は僅かで、本住居跡に伴うものは1の高壺のみであり、2・3の高壺は第64号住居跡からの混入の可能性が高い。1の高壺は壺部の内外面と脚裾部に放射状の暗文がほどこされている。



第200図 第62号住居跡



第201図 第62号住居跡 出土遺物

#### 第62号住居跡出土土器観察表

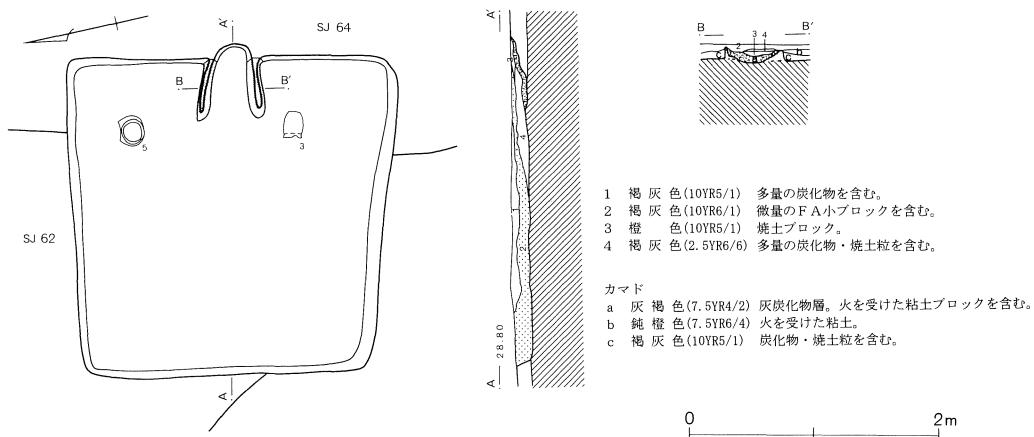
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高壺	17.6	15.8	14.2	RWB	A	橙	80	転用支脚 壺部と脚部に暗文
2	高壺	(15.3)	(4.0)		RWB	A	橙	25	
3	高壺	(4.7)	(10.0)		RWB	A	橙	25	

### 第63号住居跡

きー4グリッドに位置する。第62号住居跡と第64号住居跡の覆土を切り込んでいた。規模は長軸長2.50m、短軸長2.43m、深さ0.15mの小型住居で、主軸方向はN-102°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土2層にFAブロックが含まれていた。

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは58cmで、燃焼部の幅は38cmである。袖内壁の焼土化はすくなく、やや不明瞭であったが、外壁が直立気味であるのに対して内壁は傾斜面をもっていた。同時に焚口から奥壁に向かっても緩く上がる傾斜面をもっており、燃焼部床面は匙状を呈していた。

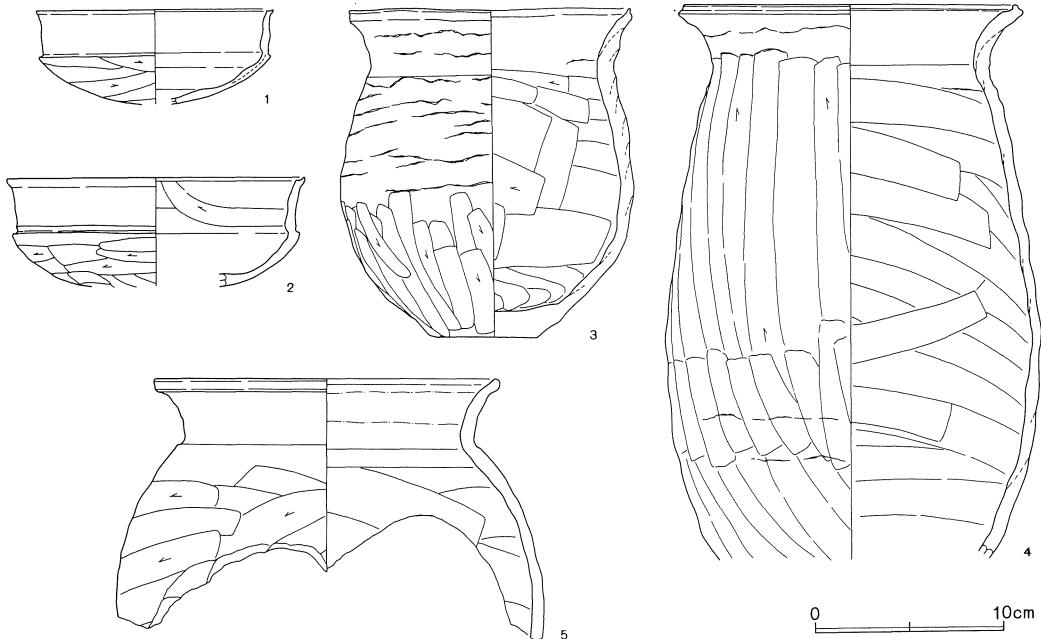
遺物は少量であったが、カマド前面右の床面上からは3の小型甕が、また同左の床面上からは5の転用器台が出土した。小型甕は外面の胴部下半のみにケズリが施されているため、輪積痕が顕著に残り、厚手で重量感がある。転用器台は壺の胴部下半を打ち欠いたものだが、下端は水平に整っておらず、突出気味の3点が接地して水平に据えられるようになっている。



第202図 第63号住居跡

### 第63号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.6)	(5.0)		RW	A	橙	40	
2	大型壺	(15.8)	(5.7)		RWB	A	橙	30	
3	小型甕	15.0	17.2	5.6	RWB	B	鈍橙	90	No 2 粗製
4	甕	(18.0)	(29.2)		RWB	B	淡黄	30	
5	壺	18.2	(10.2)		WB	A	淡黄	100	No 1 転用器台



第203図 第63号住居跡 出土遺物

#### 第64号住居跡

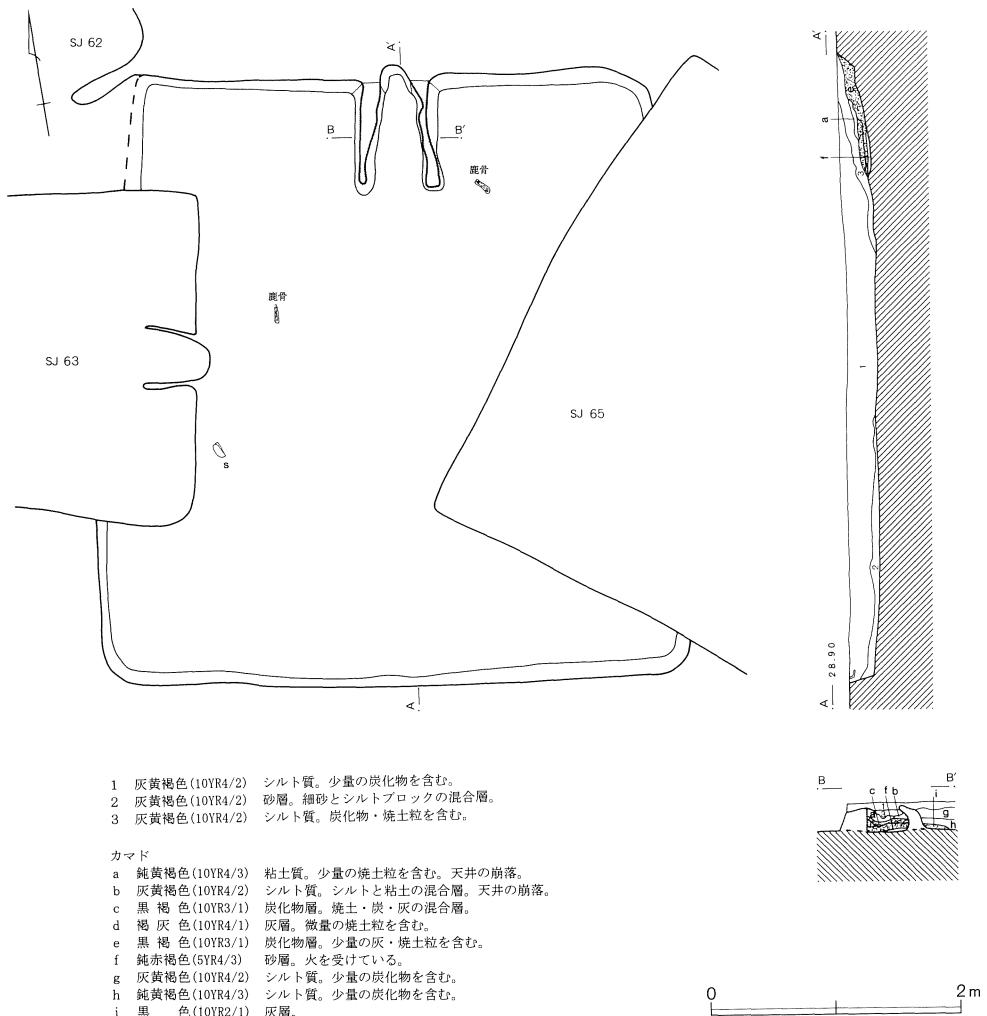
きー4グリッドに位置する。第62号住居跡を切り込み、第63号・第65号住居跡に切られていた。規模は長軸長4.66m、短軸長4.50m、深さ0.25mで、主軸方向はN-10°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土はほとんど1層のみの単一層であり、出土遺物の少なさと考えあわせると人為的な埋め戻しが考えられる。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは95cm、燃焼部の幅は33cmである。右袖の外側には灰層があった。

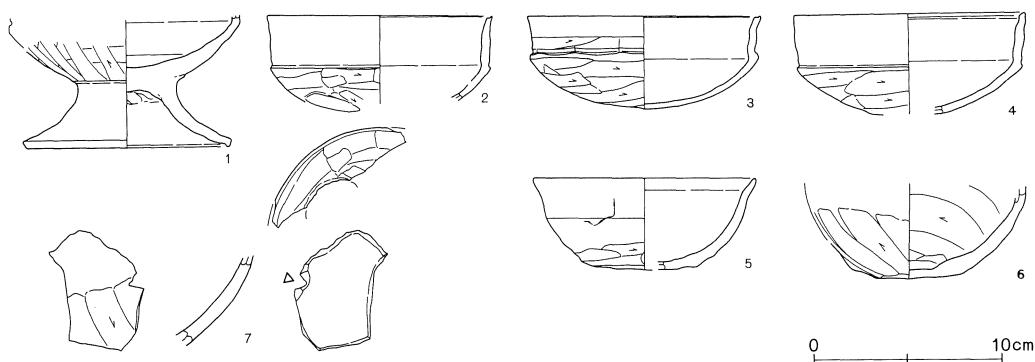
遺物の出土は少量であり、図化した土器はいずれも残存率が低い。2の壺は体部に穿孔されている。7は塙の破片であるが、一端に刃物による打撃痕がみとめられる。1の高壺も脚裾部に同様の痕跡がある。また、床面上から鹿骨片2点、カマド灰層中から鳥の焼骨が出土した。

#### 第64号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高壺		(6.7)	11.0	RW	A	橙	60	脚端部に打撃痕
2	壺	(12.0)	(4.7)		RW	A	橙	20	穿孔土器
3	壺	12.4	4.9		RW	A	鈍橙	75	
4	壺	(12.3)	(5.3)		RWB	B	淡橙	30	
5	壺	(11.8)	(4.8)	(5.5)	RW	A	橙	20	
6	壺		(5.0)	(4.4)	RW	A	鈍黃橙	40	
7	塙				RW	B	淡赤橙	破片	打撃痕土器片



第204図 第64号住居跡

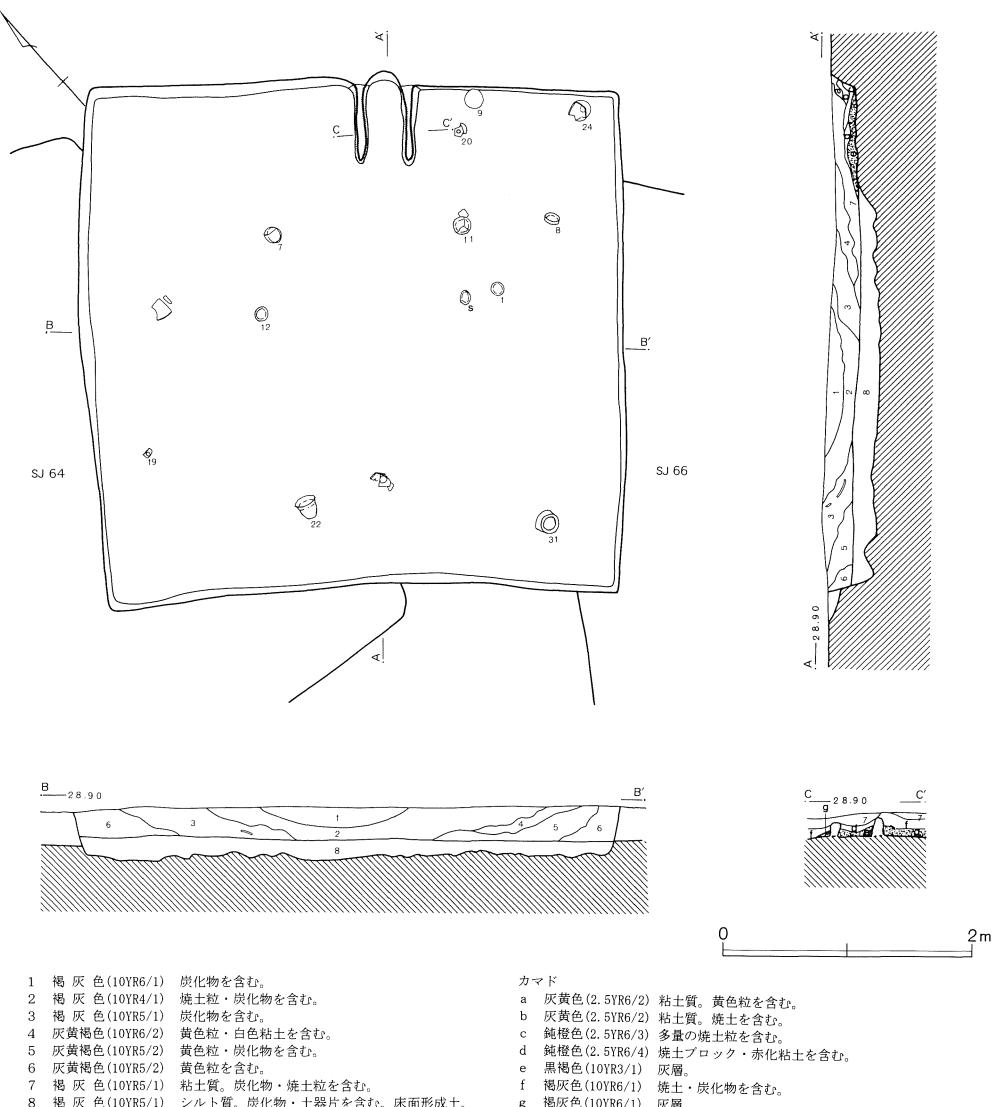


第205図 第64号住居跡 出土遺物

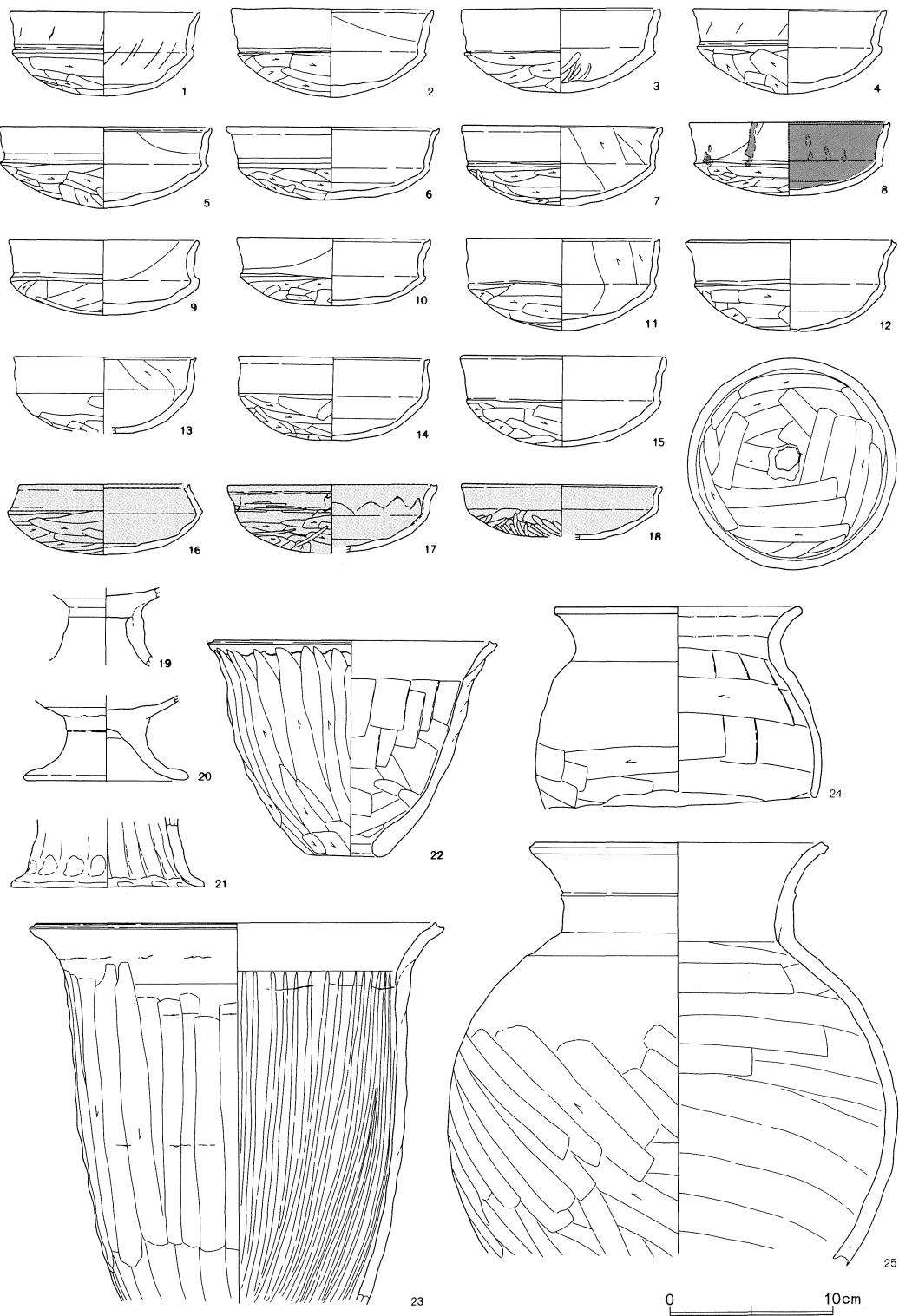
## 第65号住居跡

きー4グリッドに位置する。第64号・第66号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長4.20m、短軸長3.88m、床面までの深さ0.28mで、主軸方向はN-41°-Eである。床面下には約15cmの厚さで均一なシルト（8層）がみとめられた。カマド部分を除いて掘り方底面を一段低く掘り込み、シルトを均質に敷き込んで床面を形成したと考えられる。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。貼り床的な構築方法であるが、本遺跡の中で明確に本例のような方法がみとめられる住居跡は他にはない。

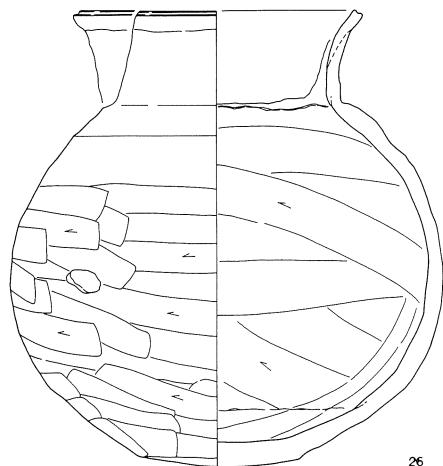
カマドは北東壁に造られ、袖には白色粘土が使用されていた。右袖の長さは68cm、燃焼部の幅は26cmである。左右両袖の外側には灰層があった。



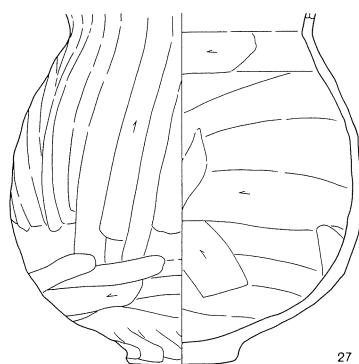
第206図 第65号住居跡



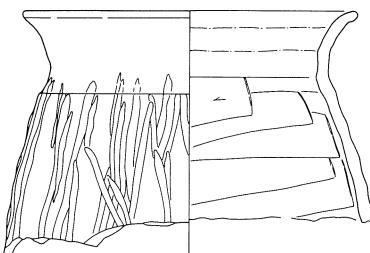
第207図 第65号住居跡 出土遺物（1）



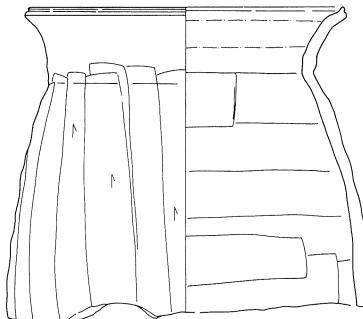
26



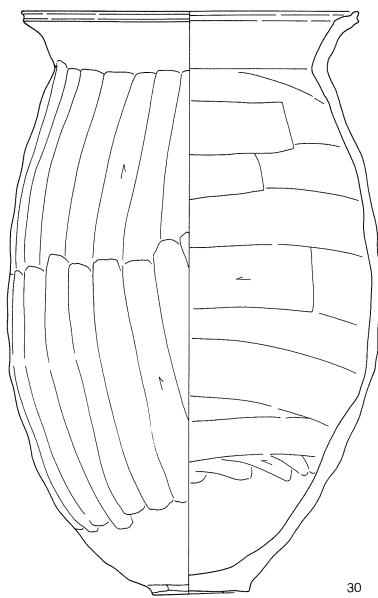
27



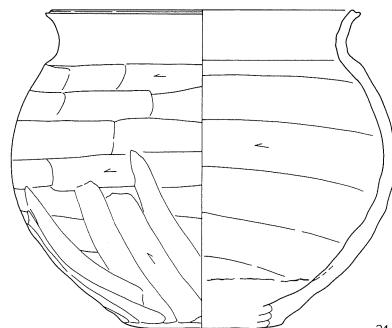
28



29



30



31



第208図 第65号住居跡 出土遺物（2）

第65号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.6	5.1		RWB	B	橙	100	No.9
2	壺	12.4	5.3		RW	A	鈍橙	100	
3	壺	12.1	5.1		WB	B	橙	80	
4	壺	10.8	5.1		RWW'B	B	橙	70	
5	壺	13.0	4.9		RW	A	橙	80	
6	壺	13.0	4.4		RWW'B	B	橙	50	
7	壺	12.3	4.8		RW	B	橙	100	No.7
8	壺	12.2	4.5		W	A	橙	100	No.11 樹脂付着
9	壺	11.6	4.5		RWB	B	橙	100	No.14 ナデ方向が内外で反対
10	壺	11.9	4.1		RWW'	B	明赤褐	50	
11	壺	11.8	5.6		RW	B	橙	80	No.10
12	壺	12.9	5.5		RWB	A	橙	100	No.6 穿孔土器
13	壺	11.2	(4.7)		RW	B	橙	70	
14	壺	11.7	5.0		RW	B	明赤褐	50	
15	壺	12.6	5.5		RWB	B	橙	90	
16	壺	10.4	4.2		RWB	A	暗赤褐	50	内外面黒色処理
17	壺	(12.9)	(4.2)		W	A	黒	40	内外面黒色処理
18	壺	12.3	(3.2)		W	A	鈍赤褐	60	内外面黒色処理
19	高壺		(4.7)		RW	A	鈍橙	80	No.4
20	高壺		(5.2)	10.1	RWW'	A	橙	70	No.13
21	支脚		(4.1)	(11.8)	R	B	橙	25	
22	甌	17.8	13.0	4.6	RW	A	橙	100	No.3
23	甌	(25.0)	(23.1)		RWB	A	鈍黃橙	30	
24	壺	15.1	(11.2)		W	A	鈍赤褐	95	No.12 転用器台
25	壺	17.9	24.9		RWB	A	橙	60	
26	壺	14.9	24.0	8.5	RW	A	橙	80	穿孔土器 口縁部一部欠損
27	壺		(18.5)	5.6	WB	B	灰黃	50	
28	甌	17.7	(13.0)		RWB	B	橙	70	転用器台
29	甌	16.7	(16.0)		WB	B	橙	90	転用器台
30	甌	17.9	30.7	5.1	RWB	A	浅黄	70	
31	甌	16.4	(16.7)	(8.4)	WB	A	橙	50	No.1

遺物の出土量は多かったが、床面上のものは8・9の壺と、19・20の高壺脚部のみであり他は3層を中心とする覆土中からの出土であった。8の壺は内側全面と口辺部外面に樹脂が付着している。12は底部に焼成後穿孔されている。26の壺は、口縁部の半分程を欠損する以外は残存良好である。胴部中位に外方からの打撃によって穿孔が施されているとともに、口縁部割れ口の磨耗度からみて、口縁部を欠損した状態で使用された可能性が強い。24の壺と28・29の甌は胴部下半を打ち欠き器台に転用されている。9の壺は口辺部のナデが内外面とも右回りで同時になわれることから見ると異例である。このほか磨石が1点出土したが、表裏両面に明瞭な擦痕がつくとともに全面に炭化物が付着している。

### 第66号住居跡

きー4グリッドに位置する。第65号・第67号住居跡に切られていた。規模は北東壁・南西壁間で4.20m、深さ0.15mである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土はほぼ2層のみであり、人為的な埋め戻しの可能性も考えられる。

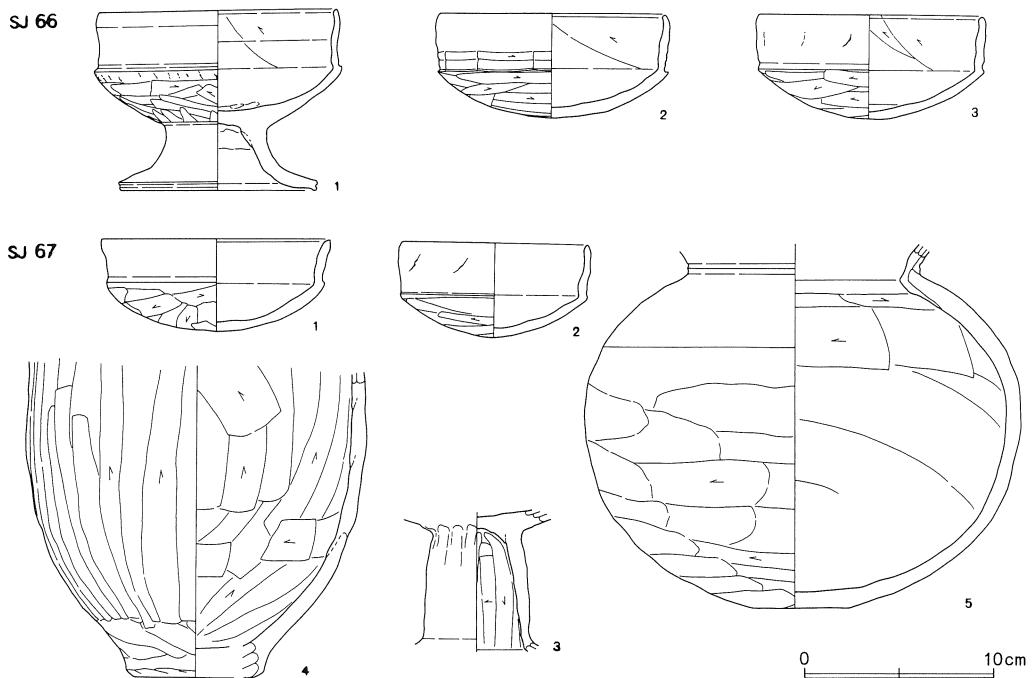
遺物は床面上より3点が出土し、2の壺は伏せられていたが、1の高壺と3の壺は正立していた。いずれもほぼ完形である。

### 第67号住居跡

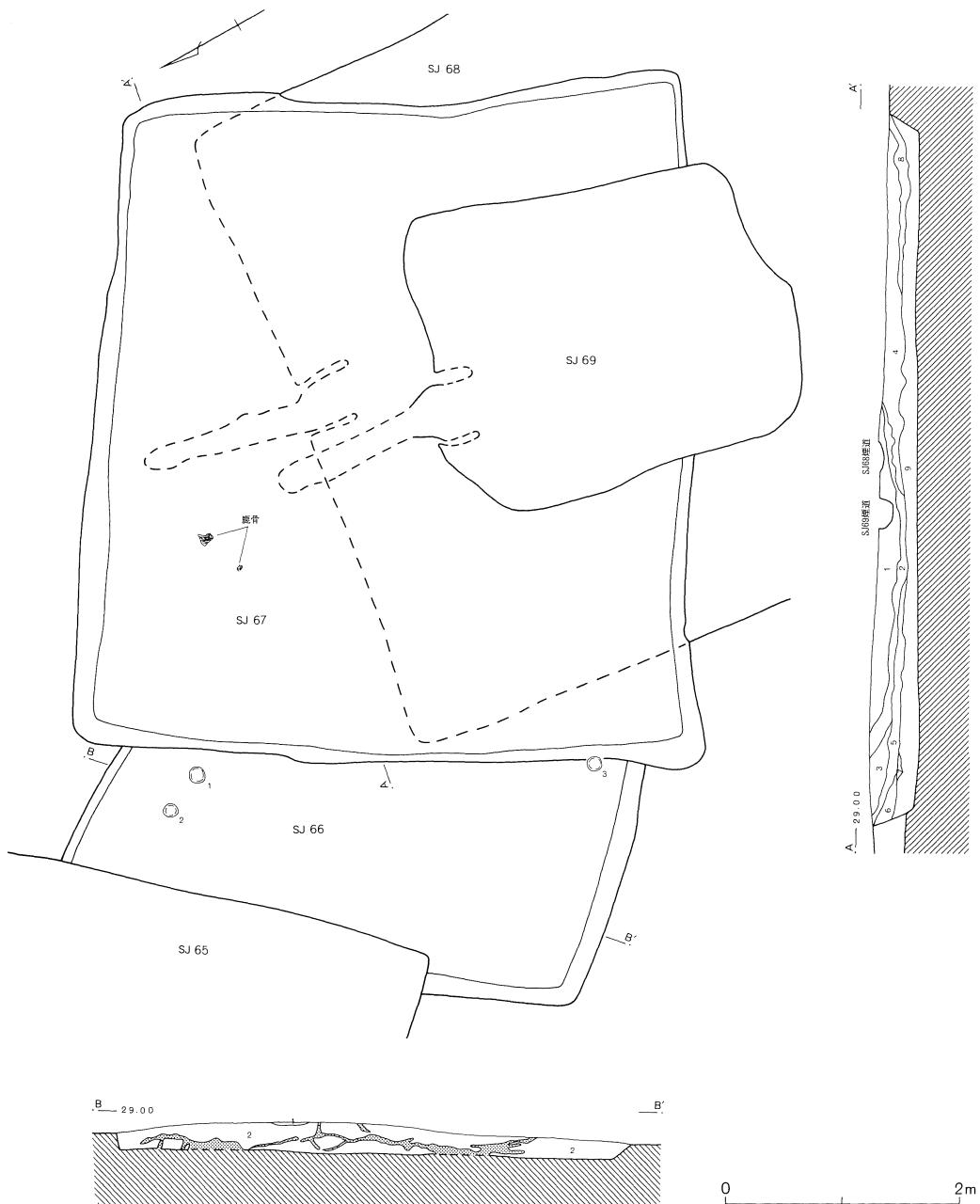
きー4グリッドに位置する。第66号住居跡を切り込み、第68号・第69号住居跡に切られていた。第68号住居跡の床面下からは、東壁と南壁の一部を検出したが、大部分は破壊されていた。規模は長軸長5.26m、短軸長4.64m、深さ0.39mで、長軸方向はN-61°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1・2・5層中に多量の炭化物や焼土が含まれていた。

カマドは痕跡すら確認できなかったが、第68・69号住居跡に破壊された南東壁か南西壁に造られていたと考えられる。

出土遺物の量は少なく、1の壺以外は残存率も低い。覆土1層中からは鹿の下顎骨片と臼歯が出土した。



第209図 第66・67号住居跡 出土遺物



第66号住居跡

1 純黄褐色(10YR4/3) シルト質。混入物なし。  
2 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。下部に多量の炭化物を含む。

第67号住居跡

- 1 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質。焼土粒・多量の炭化物を含む。
- 2 黒褐色(10YR3/2) 砂質。多量の炭化物・灰を含む。
- 3 灰黄褐色(10YR4/3) 砂質。微量の焼土粒・炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質。炭化物・焼土粒を含む。
- 5 黑褐色(10YR3/2) 砂質。焼土粒・多量の炭化物、焼土粒・灰を含む。
- 6 純黄褐色(10YR4/3) 粘質。炭化物を含む。
- 7 黑褐色(10YR3/2) 砂質。微量の炭化物を含む。
- 8 純黄褐色(10YR4/3) 砂質。シルトブロックを含む。
- 9 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。微量の焼土、炭化物を含む。

第210図 第66・67号住居跡

第66号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高 坯	12.6	9.6	10.3	RW	A	橙	100	No. 2
2	坯	12.0	5.5		RW	A	橙	100	No. 1
3	坯	11.8	5.5		RWB	A	橙	90	No. 3

第67号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坯	12.1	4.9		ARWB	B	淡赤褐	80	
2	坯	(9.9)	(5.0)		RW	A	橙	25	
3	高 坯		7.4		RW	A	橙	40	
4	甕 壺		(16.4)	(6.3)	RW	A	橙	30	
5	壺		(19.1)	(5.0)	RWW'	A	橙	20	頸部突帶

### 第68号住居跡

きー4グリッドに位置する。第67号・第69号住居跡を切込み、第70号住居跡に切られていた。第69号住居跡は本住居跡の中央に入れ子状になり、カマド位置も相似しているため、意図的に拡張された可能性も考えられる。規模は長軸長5.56m、短軸長4.73m、深さ0.18mで、主軸方向はN-9°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北壁中央に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは51cm、燃焼部の幅は37cmである。煙道は幅24cm、長さ141cmで、水平に掘り抜かれていた。右袖の外側には厚さ10cmほどの灰層があった。

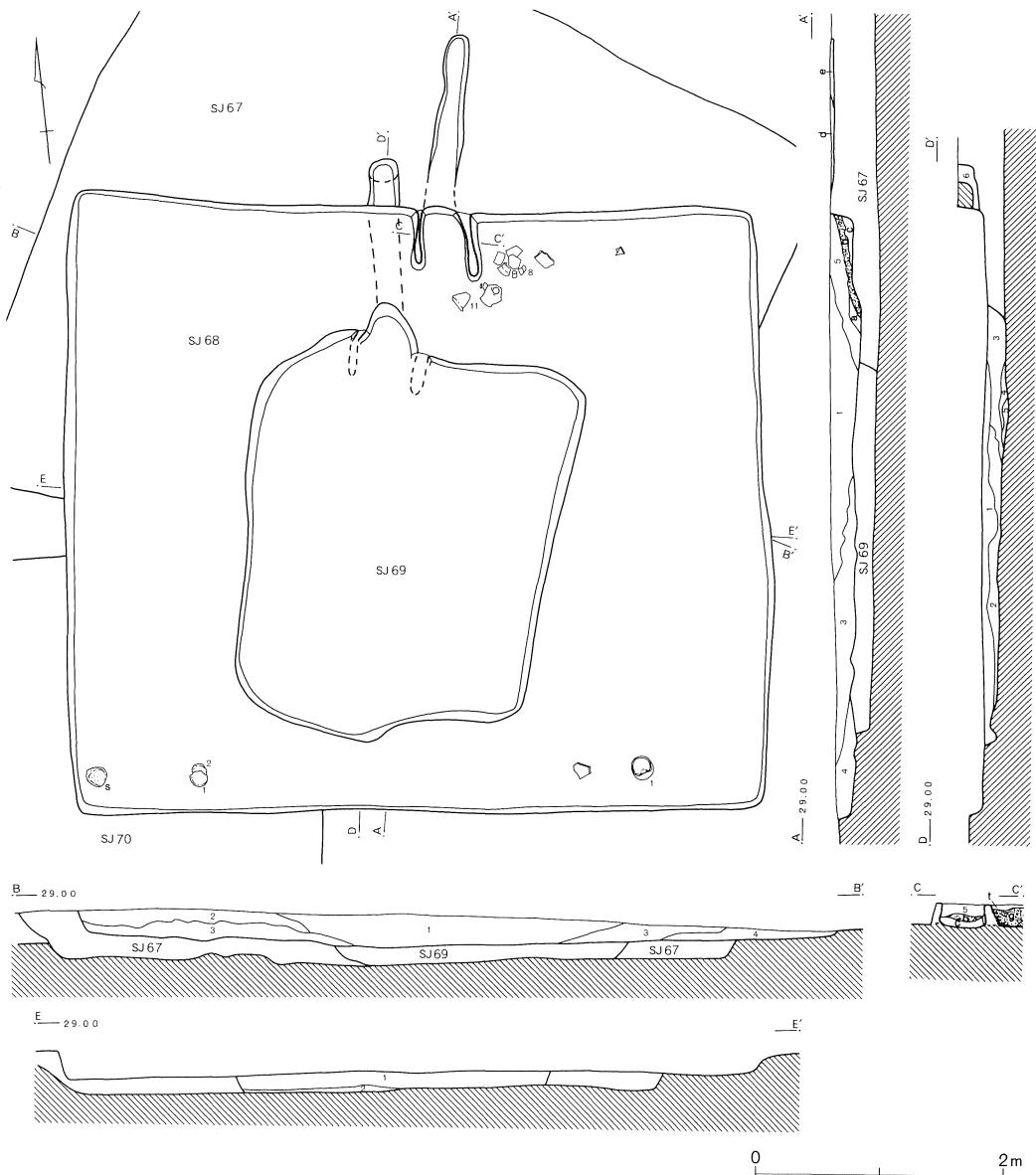
遺物はカマド周辺と南壁下から出土した。8の大型壺以外は覆土中のものである。8の大型壺はカマド右脇の灰層に伴うものだが、内側全面と口辺外面に樹脂が付着している。4の壺は小型で、体部外面では中央にヘラケズリが見られるほかは未調整で亀裂が目立つ。10は甕からの転用器台である。ほかに南西隅から円板状の台石が出土した。

### 第69号住居跡

きー4グリッドに位置する。第67号住居跡を切り、第68号住居跡に切られていた。地山砂層中に掘り込まれていたため、液状化現象の影響を受けてプランが歪み正確な値を得ることができなかつたが、規模は長軸長2.82m、短軸長2.38mで、深さは第68号住居跡の床下0.13cmである。主軸方向はN-16°-Eである。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。

カマドは北壁に造られていた。燃焼部の粘土や灰などがわずかに確認できたが、第68号住居跡の建築に先だって破壊された可能性も考えられる。煙道の大部分は第68号住居跡によって破壊されていたが、幅16cm、長さ116cmで、地山を水平に掘り抜き先端に煙出口をもっていた。

遺物は壺片が数点出土したのみである。



第68号住居跡

- 1 暗灰色(10YR4/1) 焼土粒・炭化物・灰を含む。
- 2 黄灰色(10YR4/1) 少量の炭化物を含む。
- 3 黄灰色(10YR4/1) 炭化物・焼土粒を含む。
- 4 暗褐色(10YR5/1) 炭化物・焼土粒を含む。
- 5 灰黄褐色(10YR5/2) 炭化物を含む。

第69号住居跡(D-D', E-E')

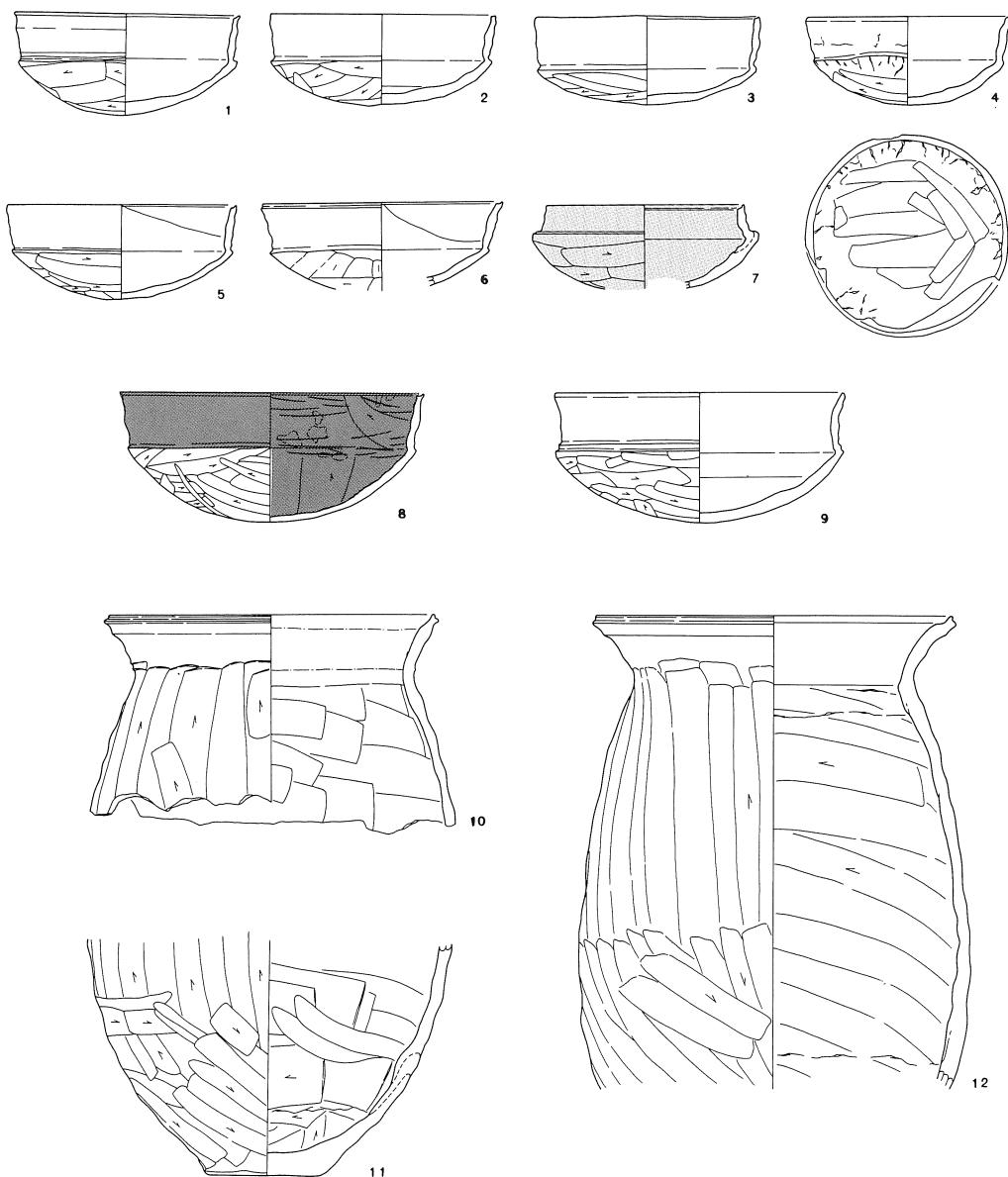
- 1 鈍黄褐色(10YR4/3) 砂質。少量の焼土粒を含む。粘土質シルトとの混合層。
- 2 暗褐色(10YR3/3) 粘土質。微量の炭化物を含む。
- 3 暗褐色(10YR3/3) 粘土質。多量の炭化物・焼土粒を含む。
- 4 暗灰色(10YR5/1) 炭化物・灰・焼土の混合層。
- 5 鈍赤褐色(2,5YR3/3) シルト質。焼土化している。
- 6 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。灰・焼土粒の混合層。上面焼土化。

第68号住居跡カマト

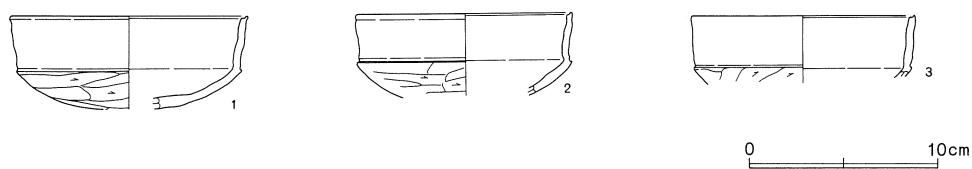
- a 灰色(10YR6/2) 灰層
- b 暗灰色(10YR4/0) 灰・焼土ブロックを含む。
- c 灰黄褐色(10YR5/1) 炭化物・焼土粒を含む。
- d 黒褐色(10YR3/1) 灰層。
- e 灰黄褐色(10YR4/2) 烧土粒を含む。
- f 暗灰色(10YR6/1) 少量の炭化物を含む。
- g 黑褐色(10YR3/1) 炭化物層。
- h 暗灰色(10YR5/1) 炭化物を含む。

第211図 第68・69号住居跡

SJ 68



SJ 69



第212図 第68・69号住居跡出土遺物

第68号住居跡出土土器観察表

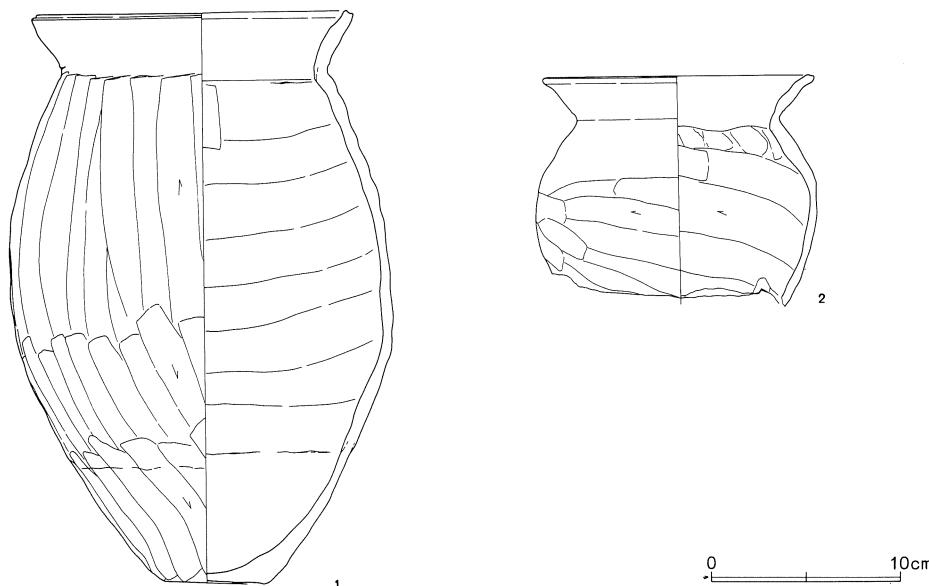
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.1	5.4		W	A	橙	80	No.3
2	壺	12.1	4.8		RWW'	A	橙	90	No.11
3	壺	12.0	4.7		W	A	橙	80	
4	壺	11.0	4.7		RWB	B	明赤褐	70	外面調整未完
5	壺	12.3	5.0		WB	B	橙	50	
6	壺	12.9	(4.7)		W	B	橙	50	
7	壺	(10.6)	(4.5)		RW	A	黒褐	30	外面黑色処理
8	大型壺	16.3	6.9		W	B	鈍赤褐	90	No.7 樹脂付着
9	大型壺	15.6	6.8		RW	B	橙	70	
10	甕	17.9	(11.0)		RW	A	鈍黃橙	80	No.3 転用器台
11	甕		(12.5)	(6.2)	WB	B	鈍橙	40	No.5・6
12	甕	(19.2)	(25)		WB	A	浅黄	30	

第69号住居跡出土土器観察表

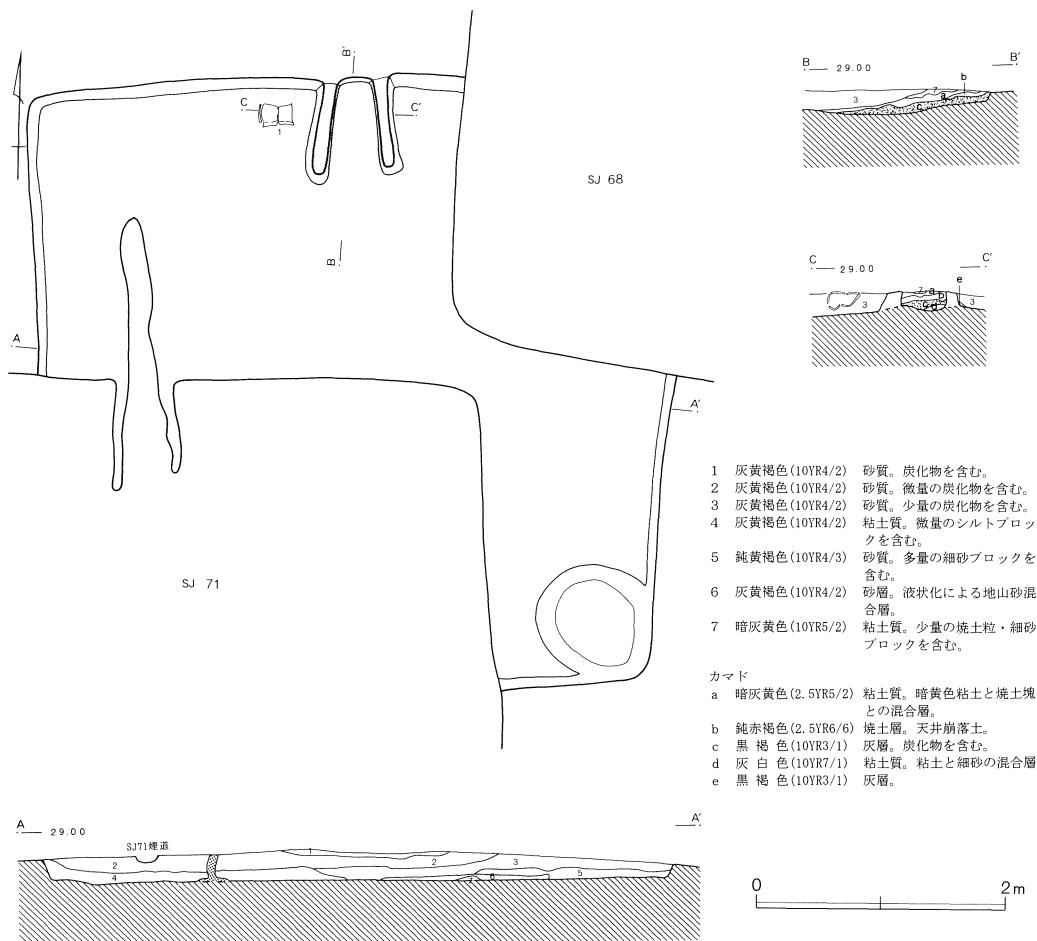
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.7)	(4.9)		RW	A	橙	20	
2	壺	(11.6)	(4.3)		RW	A	橙	15	
3	壺	(12.0)	(3.6)		RW	A	鈍橙	25	

第70号住居跡

かー4グリッドに位置する。第68号住居跡を切り込み、第71号住居跡に切られていた。規模は長軸長4.93m、短軸長4.60m、深さ0.24mで、主軸方向はN-4°-Wである。床面は地山砂層に掘り



第213図 第70号住居跡 出土遺物



第214図 第70号住居跡

込まれていたが、南東隅において長径93cm、深さ26cmのピットを検出した。ほかに壁溝・柱穴は確認できなかった。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは73cm、燃焼部の幅は35cmである。右袖の外側にはわずかな灰層があった。

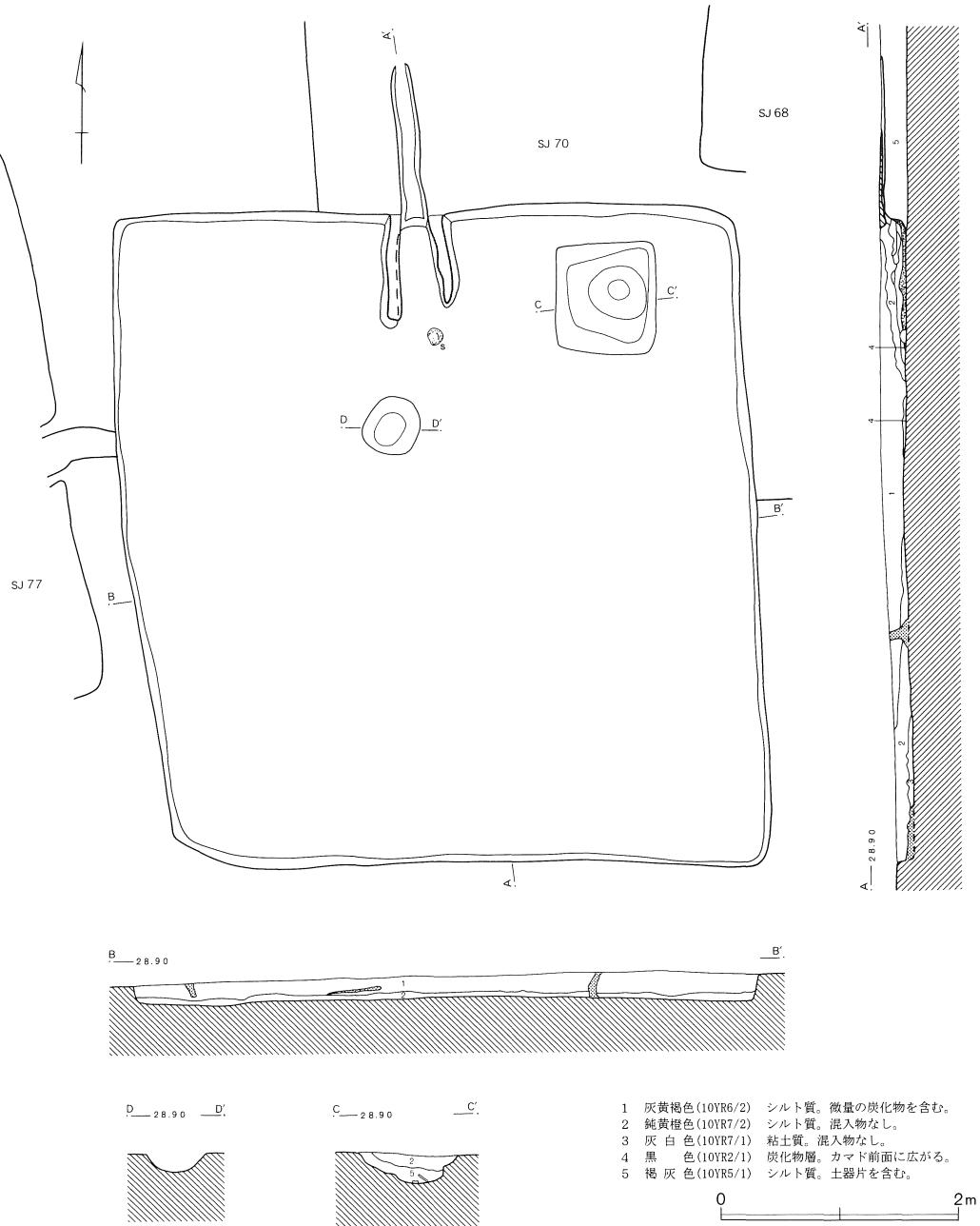
遺物は僅かであり、カマド左脇より1の甕が床面よりやや浮いて出土した。2は壺からの転用器台である。カマド内の灰層中からは鳥の大腿骨や肩甲骨、タイ型魚類の歯などが焼けた状態で出土した。内陸部の本遺跡に海棲魚類の骨が存在したことは注目にあたいする。

#### 第70号住居跡出土土器観察表

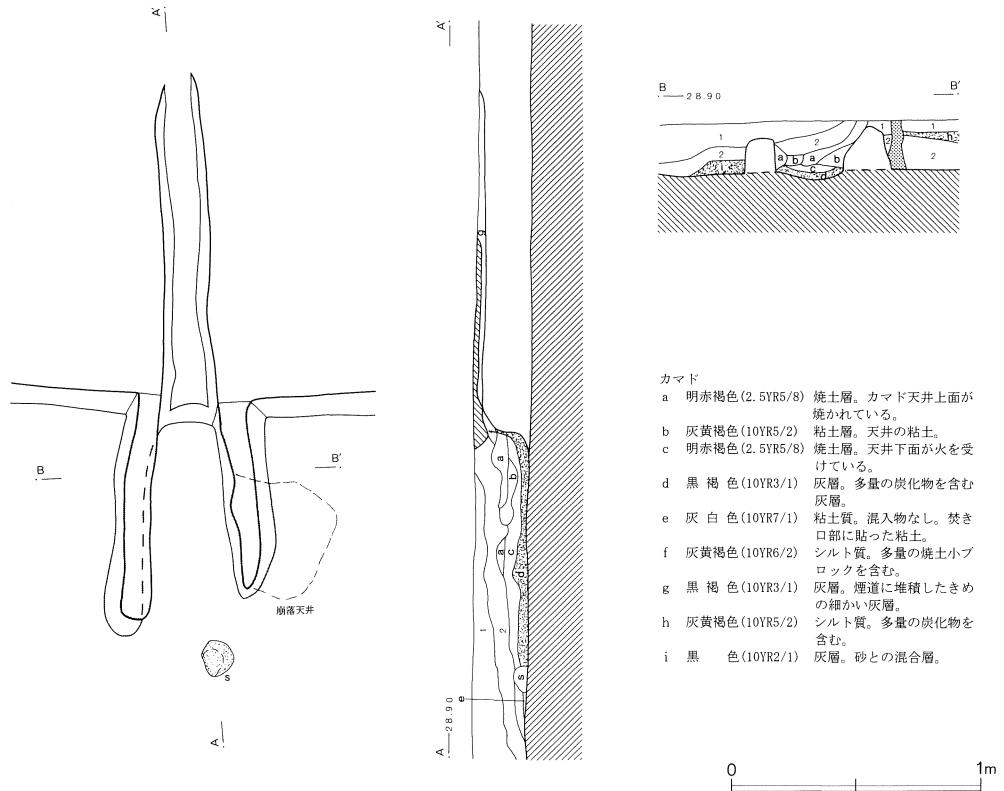
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	17	30	5.4	RWU	B	淡赤褐	80	No.1
2	壺	14.4	(12)		RW	A	橙	60	転用器台

## 第71号住居跡

かー4グリッドに位置する。第70号住居跡の南半部、および第77号住居跡のカマド煙道部と重複する。本跡は埋没後の第70号住居跡を切り込み、第77号住居跡の煙道に切り入まれていた。規模は長軸長5.30m、短軸長5.16m、面積約27.40m<sup>2</sup>、深さ0.19mで、主軸方向はN-5°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、これより貯蔵穴とピットを検出した。貯蔵穴は北東隅部のやや内側寄り、カマドの右側にある。上面は93cm×84cmの方形プランで、その中を径48cmの円形に掘り込



第215図 第71号住居跡

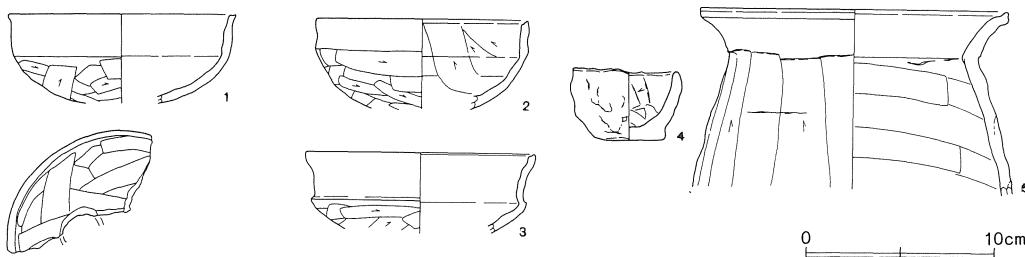


第216図 第71号住居跡 カマド

む有段のものである。床面からの深さは27cmで、底面は丸みを有している。カマド前面には径49cm、深さ15cmの掘り鉢状ピットがあり、炭化物がつまっていた。このほか、壁溝・柱穴は確認できなかった。

カマドは北壁中央部に造られ、ほぼ平行して垂下する袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは83cm、燃焼部の幅は27cmである。燃焼部の天井は崩落していたが、断面観察の結果、a・b・cの3層が本来の天井構築土層であることを確認した。粘土部分のb層を焼土化したa・c層が挟む状況から見て、直接火を受ける天井下面だけでなく、その上面も意図的に加熱して硬化させていたことが判明した。カマド平面図で右袖の外面にはみ出した焼土は崩落したa層である。また、焚き口部で自然礫が出土したが、この礫付近には帶状に粘土が貼られていた。この礫より外側には灰層がおよんでいないことから、焚き口には粘土で土手を造っていたものと思われる。煙道は幅19cm、長さ135cmの溝状で、底面は水平に掘られていた。なお、左袖の外側床面上には灰層の堆積が認められた。

出土した遺物の量は僅かである。3の壺と5の甕は貯蔵穴から出土した。1の壺は底部を焼成後に穿孔されている。4は手捏土器である。



第217図 第71号住居跡 出土遺物

第71号住居跡出土土器観察表

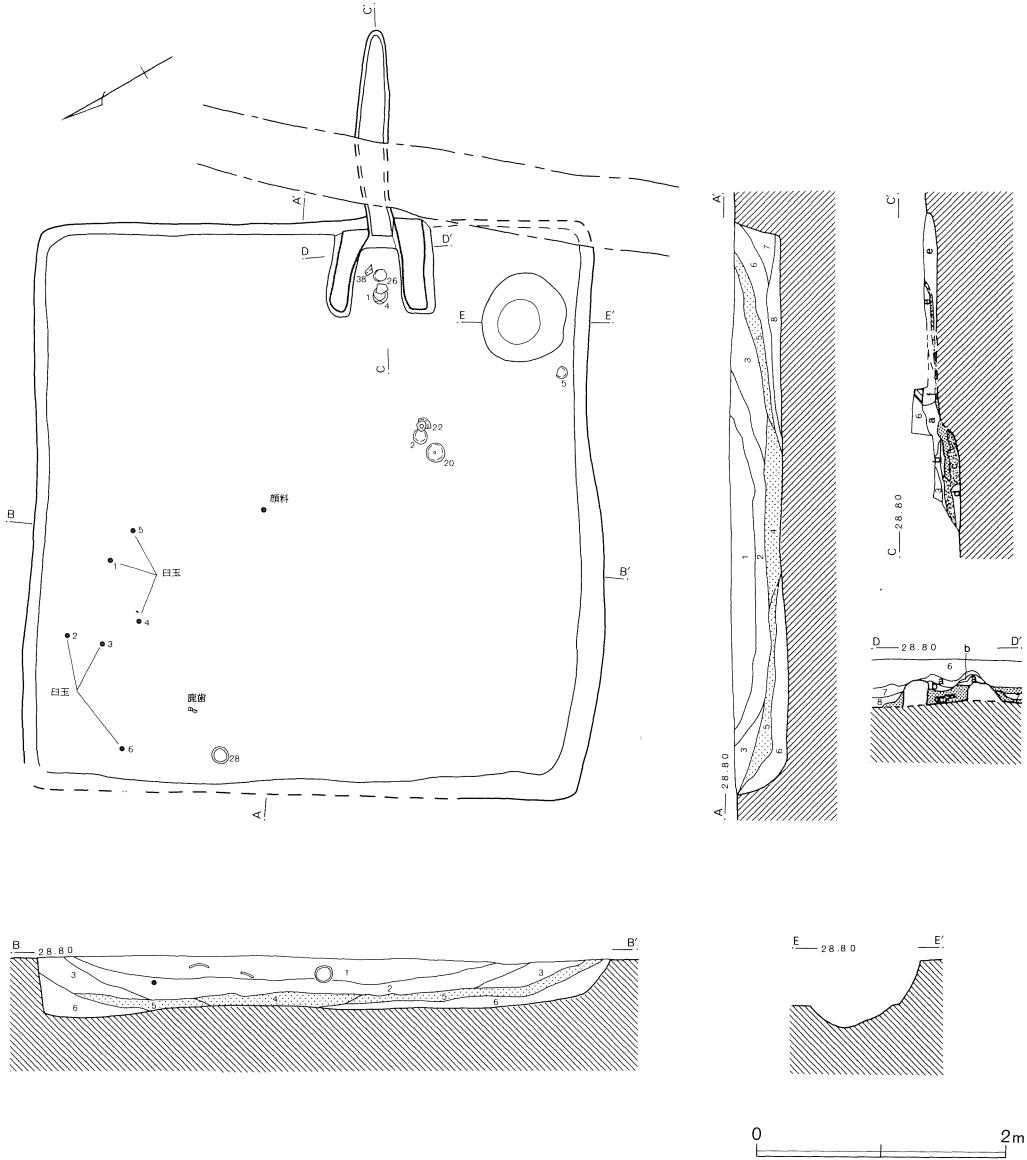
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.1)	(4.7)		W	B	橙	25	穿孔土器
2	壺	11.3	(4.7)		R	A	明赤褐	70	
3	壺	(12.2)	(4.3)		RW	B	明赤褐	40	貯蔵穴
4	手捏土器	5.7	3.8	3.8	RW	A	橙	95	
5	甕	16.3	(9.5)		RB	A	鈍黃橙	70	貯蔵穴

### 第72号住居跡

き-4グリッドに位置する。煙道中央部と住居南隅は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長4.35m、短軸長4.22m、深さ0.40mで、主軸方向はN-118°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、液状化現象による攪乱を受けていたが、カマド右側で径66cm、深さ19cmの掘り鉢状の貯蔵穴を検出した。このほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土4・5層中にはFAブロックが含まれていた。

カマドは南東壁のやや南寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。しかし、液状化によって大きく攪乱され、遺存状態は悪かった。左袖の長さは57cm、燃焼部の幅は32cmである。煙道は幅25cm、長さ164cmで、底面は水平に掘り抜かれていた。支脚位置は中軸線上であり、伏せられた壺2点が転用されていた。

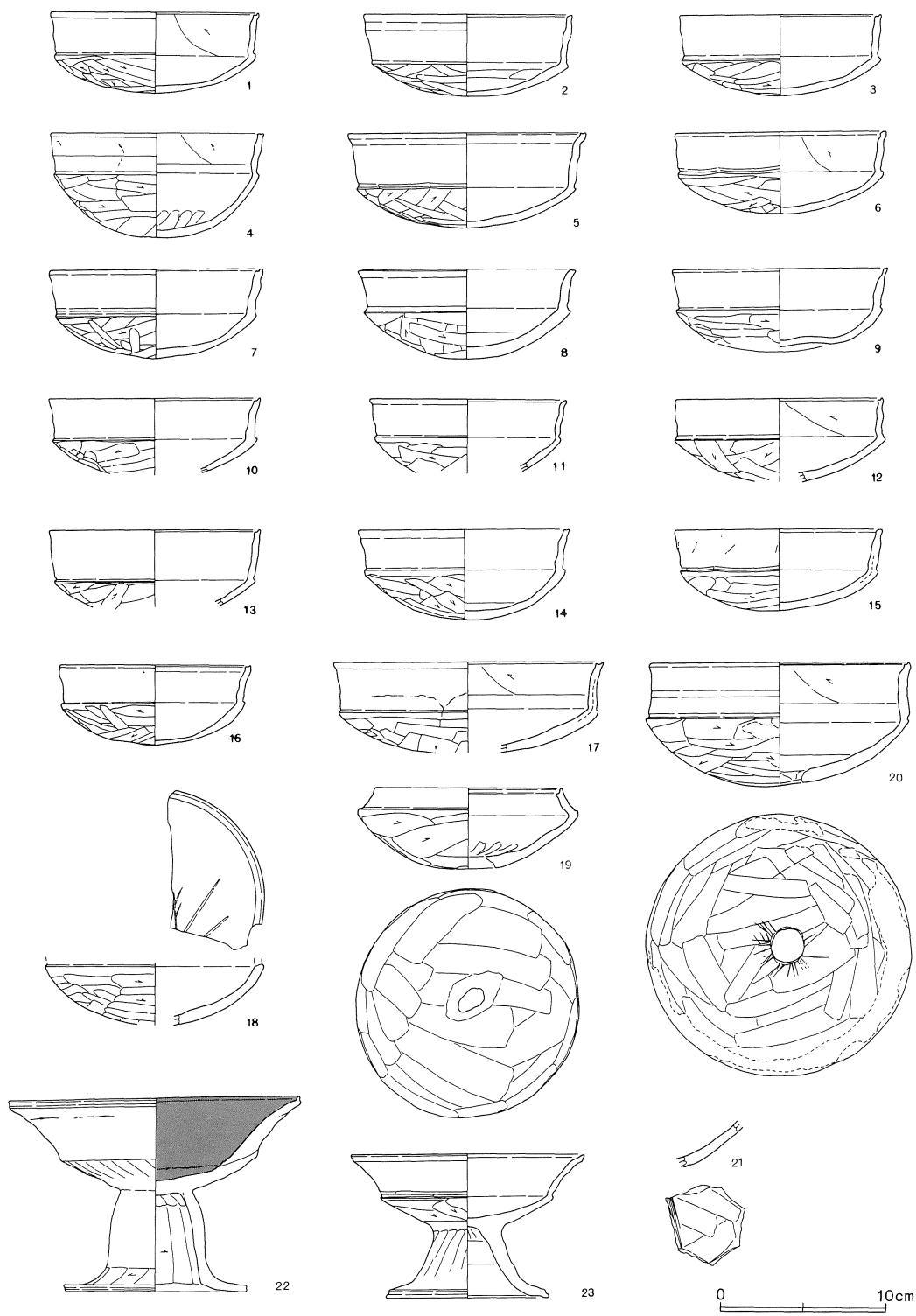
遺物はカマド、床面上、および覆土中から出土した。カマド燃焼部からは1・4・26・38が出土した。カマド燃焼部から出土した1・4の壺は4を下にして2点が伏せ重ねられ支脚となっていた。26の短頸壺は間層を挟みその直上にあった。床面上からは住居中央寄りで、2の壺、20の大型壺、22の高壺が、また、貯蔵穴寄りで3の壺、北西壁寄りで28の壺がそれぞれ出土した。3の大型壺は底部穿孔されているが、他の同様の壺に比べ、丁寧に穿孔されており、体部外縁に磨滅部分が見られることから、小型の甕のように転用されていたものと考えられる。22の高壺は壺部内面に樹脂が付着している。28は壺からの転用器台だが頸部内面が磨滅しており、口縁部を下にして使用されたと見られる。覆土1・2層中からは多量の土器が出土した。特筆すべきは33の甕や40の甕をはじめ完形あるいは高残存率の土器が多いことである。19は穿孔壺である。18は内面に放射状の線刻がある。29・30は壺からの転用器台である。41は短頸の特殊な甕である。以上のほか1・2層中からは中央寄りで顔料ブロックが、また北隅寄りで滑石製臼玉6点と鹿歯が出土した。



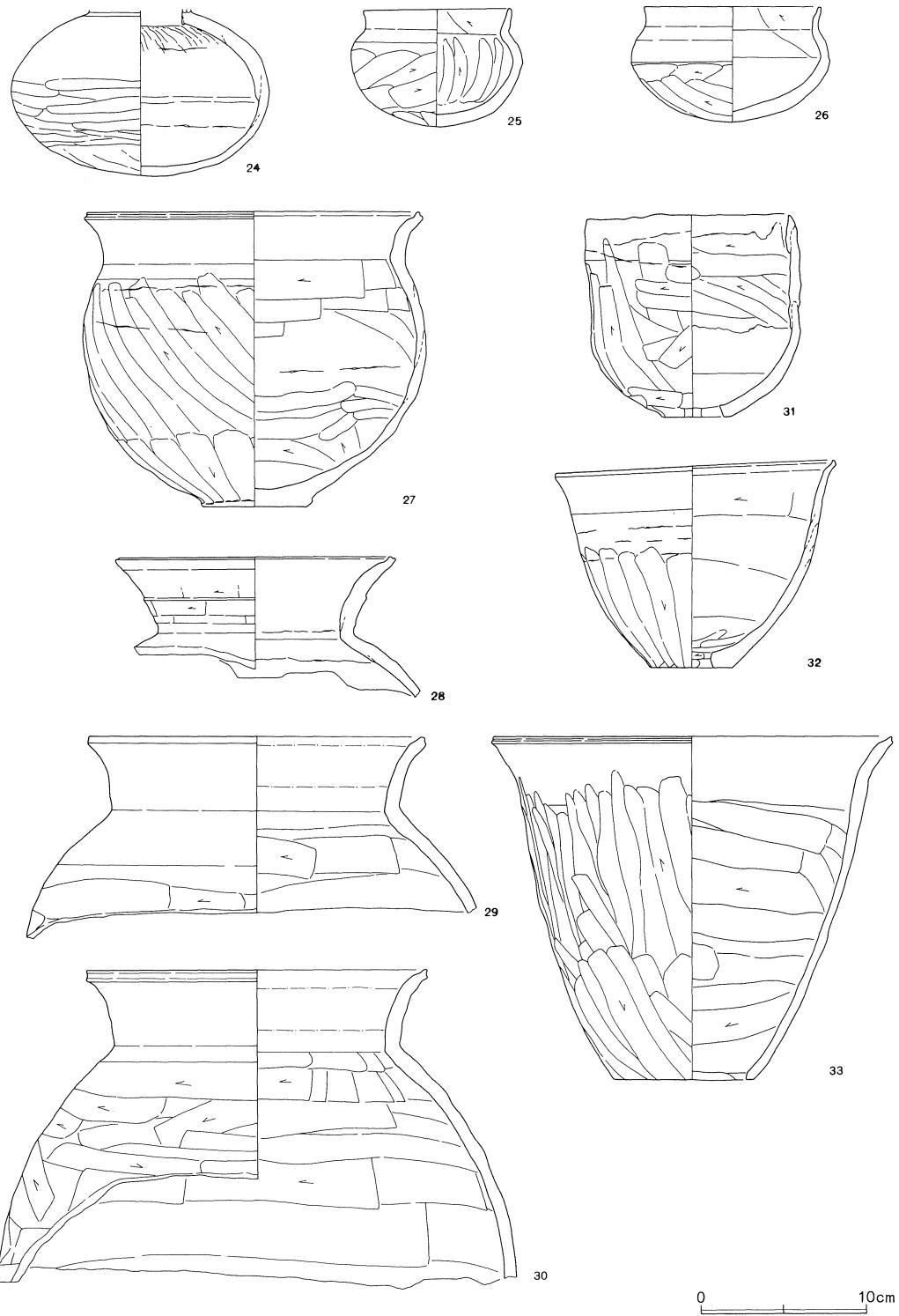
1 鈍黄褐色(10YR7/2) シルト質。多量の炭化物・焼土粒・土器片を含む。  
 2 純灰色(10YR5/1) シルト質。多量の炭化物を含む。  
 3 灰黄褐色(10YR6/2) シルト質。微量の炭化物を含む。  
 4 純灰色(10YR5/1) シルト質。微量のFA小ブロック・炭化物を含む。  
 5 純灰色(10YR6/1) シルト質。多量のFAブロックを含む。  
 6 灰白色(10YR7/1) シルト質。混入物なし。  
 7 純灰色(10YR6/1) シルト質。混入物なし。  
 8 純灰色(10YR5/1) シルト質。微量の炭化物・粘土粒を含む。

カマド  
 a 純褐色(10YR8/2) シルト質。天井形成粘土。  
 b 橙色(2.5YR6/8) 焼土層。天井の崩落。  
 c 黒色(10YR2/1) 灰層。焼土ブロックを含む。埴砂で乱れる。  
 d 鈍赤褐色(2.5YR5/4) シルト質。燃焼部に貼られた粘性シルト。  
 e 灰白色(10YR7/1) シルト質。煙道への流れ込み。  
 f 橙色(2.5YR6/6) 粘土質。煙道天井の崩落ブロックを含む。

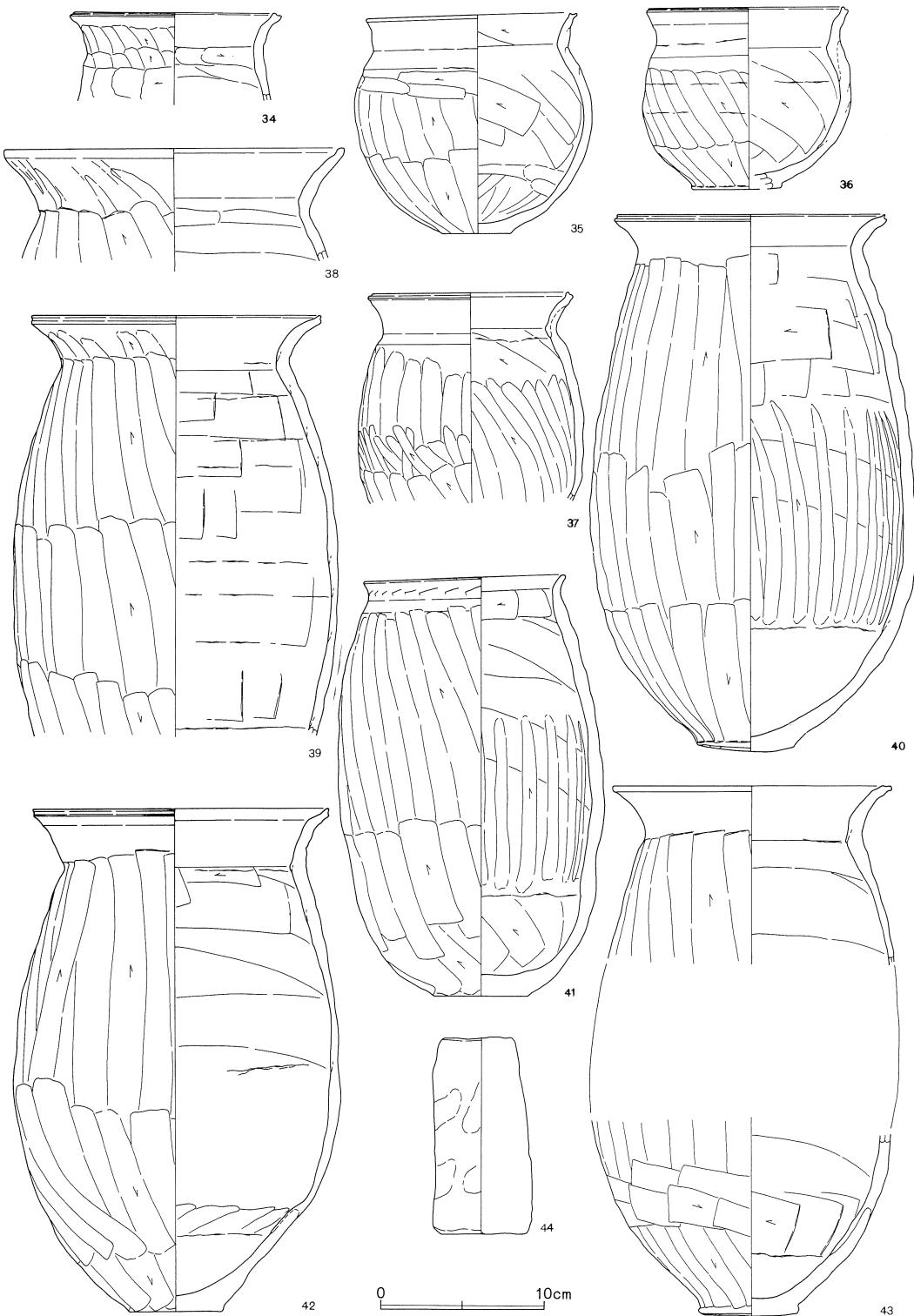
第218図 第72号住居跡



第219図 第72号住居跡 出土遺物（1）



第220図 第72号住居跡 出土遺物（2）



第221図 第72号住居跡 出土遺物（3）

第72号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	4.9		RWW'	A	橙	90	No. 4
2	壺	12.6	5.0		RWW'B	A	橙	100	No. 7
3	壺	12.2	4.9		RWW'	A	明赤褐	65	
4	壺	13.0	6.3		RWW'B	A	橙	90	No. 5
5	壺	14.5	5.7		RWW'	A	明赤褐	100	1・2層
6	壺	12.8	4.9		RWW'	A	橙	90	
7	壺	12.9	5.3		RWW'	A	明赤褐	80	
8	壺	(13.2)	(5.4)		RWB	A	鈍橙	35	
9	壺	(13.0)	(5.0)		RWB	A	橙	25	体部歪む
10	壺	(12.8)	(4.5)		RW	A	橙	25	
11	壺	(11.9)	(4.5)		RWW'B	A	橙	20	
12	壺	(12.6)	(5.0)		RWB	A	鈍橙	25	1・2層
13	壺	(12.8)	(4.6)		RWW'	A	橙	20	
14	壺	12.8	5.4		RWW'B	A	橙	100	
15	壺	12.6	4.9		RWW'	A	橙	90	1・2層
16	壺	11.6	4.8		RWW'B	A	明赤褐	80	1・2層
17	大型 壺	(16.4)	(5.4)		RWB	A	橙	40	1・2層
18	壺		(3.8)		RW	A	橙	20	内面に放射状線刻文
19	壺	11.5	4.8		RWW'	A	鈍橙	95	1・2層 穿孔土器
20	大型 壺	15.7	7.4		RWW'	A	橙	100	No. 8 穿孔土器 外縁磨滅
21	壺				RW	A	淡赤橙	破片	擦切痕土器片
22	高 壺	17.7	11.6	11.0	RWW'B	A	橙	100	No. 6 壺部内面樹脂付着
23	高 壺	14.2	8.6	9.9	RWB	A	橙	75	1・2層
24	壠		9.8		RWW'	A	明赤褐	95	1・2層
25	短 頸 壺	8.9	7.0		RWB	A	橙	59	
26	短 頸 壺	10.7	6.9		RWW'	A	橙	100	No. 1
27	鉢	20.3	17.6	6.2	RWB	A	橙	80	1・2層
28	壺	16.7	6.7		RWW'	A	橙	80	No. 10 転用器台 倒立使用
29	壺	(20.3)	(10.5)		RWW'	A	橙	40	1・2層 転用器台
30	壺	20.5	(18.3)		RWW'B	A	橙	80	1・2層 転用器台
31	甌	12.2	12.0	4.2	RWW'	A	明赤褐	100	1・2層
32	甌	17.0	12.0	5.0	RWB	A	橙	80	1・2層
33	甌	24.1	20.5	8.5	RWB	A	明赤褐	100	1・2層
34	小型 甌	(12.9)	(5.3)		RW	A	橙	30	1・2層
35	小型 甌	12.8	13.2	4.2	RWW'	A	橙	85	1・2層
36	小型 甌	12.3	11.0	(5.4)	RWB	A	橙	80	1・2層
37	小型 甌	(12.6)	(12.7)		WB	A	鈍黃橙	15	
38	甌	(20.7)	(7.3)		RW	A	鈍褐	15	No. 2 還元焰焼成
39	甌	(17.7)	(25.5)		RWW'B	A	明赤褐	40	1・2層
40	甌	16.6	32.5	5.8	RWW'B	A	鈍橙	100	1・2層
41	甌	12.3	25.2	5.7	RWW'B	A	橙	85	1・2層
42	甌	18.0	30.4	5.6	RWB	A	浅黃橙	75	1・2層
43	甌	17.0	(32.0)	6.0	RWW'B	A	鈍黃橙	60	1・2層 木葉底
44	支 脚		11.8	5.2	R	A	鈍黃橙	100	1・2層

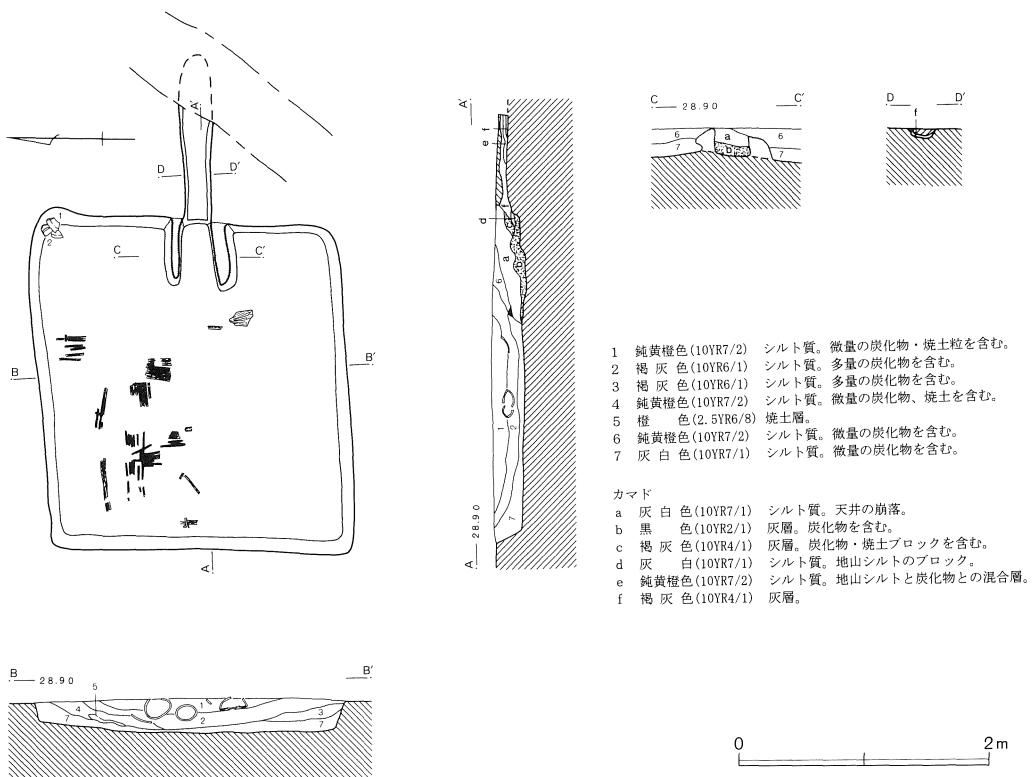
### 第73号住居跡

きー5グリッドに位置する。煙道先端部は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長2.45m、短軸長2.29m、面積約5.60m<sup>2</sup>、深さ0.14mで、主軸方向はN-61°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、中央部に向けてわずかに傾斜していた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかつた。住居の北東4分の1程の範囲では、覆土2層下面で屋根材と見られる編まれた篠竹が炭化して出土した。

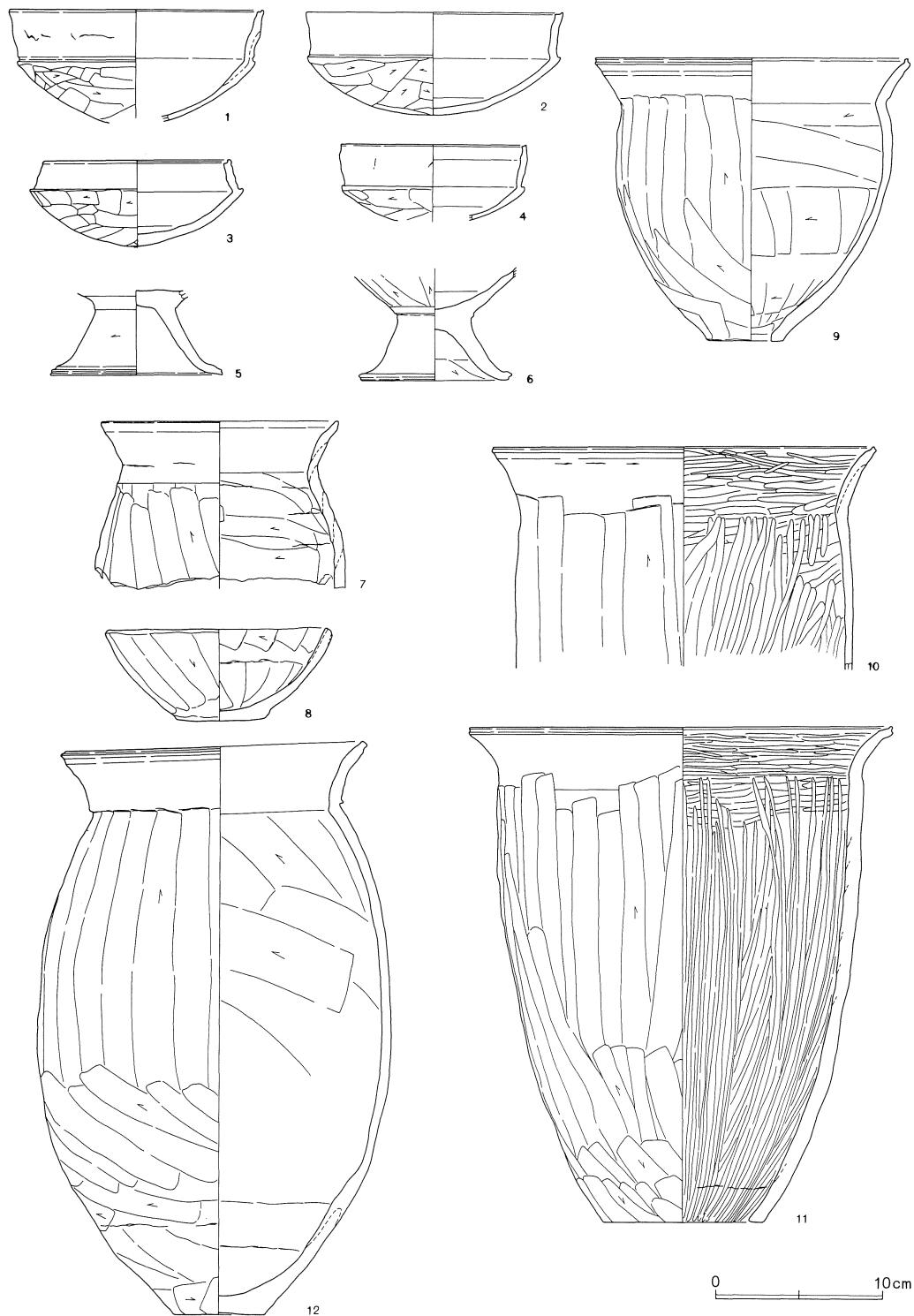
カマドは東壁中央部に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは53cm、燃焼部の幅は27cmである。火床面は床面よりわずかに低く、厚く灰の堆積が見られた。煙道は幅20cm、検出長90cmで、底面は水平に掘られていた。

遺物は1・2の大型壺が北東隅からの出土であるが、それ以外は覆土1・2層中からの出土である。出土状況としては隣接する第72号住居跡と類似し、16の甕には第72号住居跡出土の土器片が接合した。7は小型甕の上半部で、器台への転用品である。8は同じく小型甕の底部を利用した転用鉢であり、擬口縁をそのまま口縁部としている

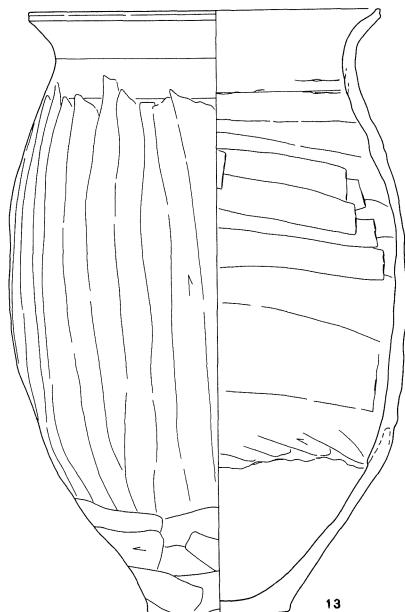
なお、本跡では覆土のリン酸、およびカルシウム抽出分析を実施したが、人骨などの遺存反応は認められなかった。



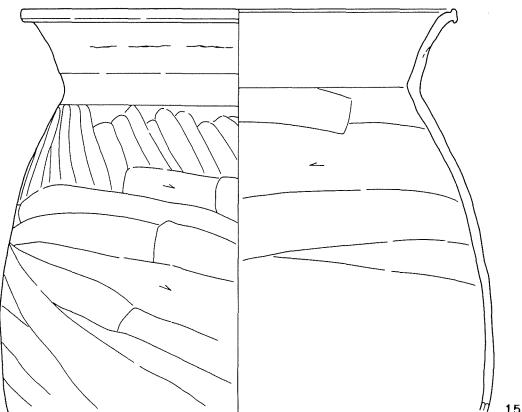
第222図 第73号住居跡



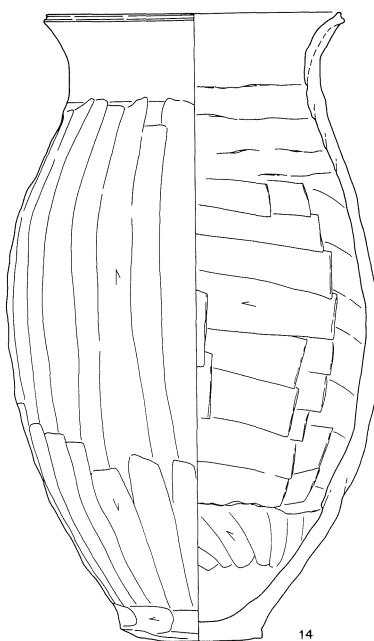
第223図 第73号住居跡 出土遺物（1）



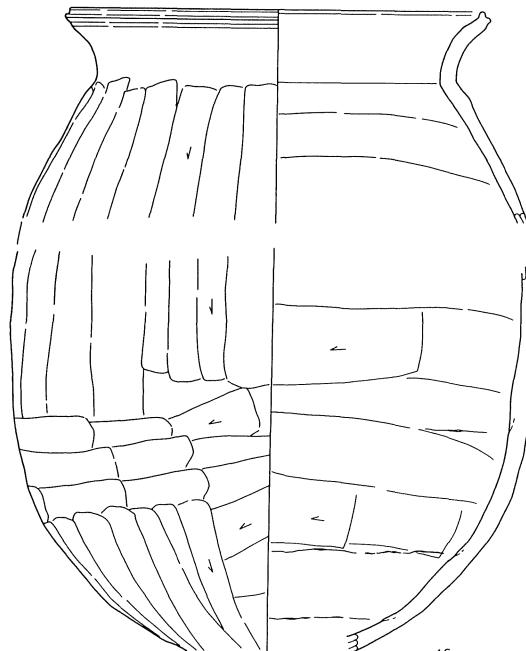
13



15



14



16

0 10cm

第224図 第73号住跡 出土遺物（2）

第73号住居跡出土土器観察表

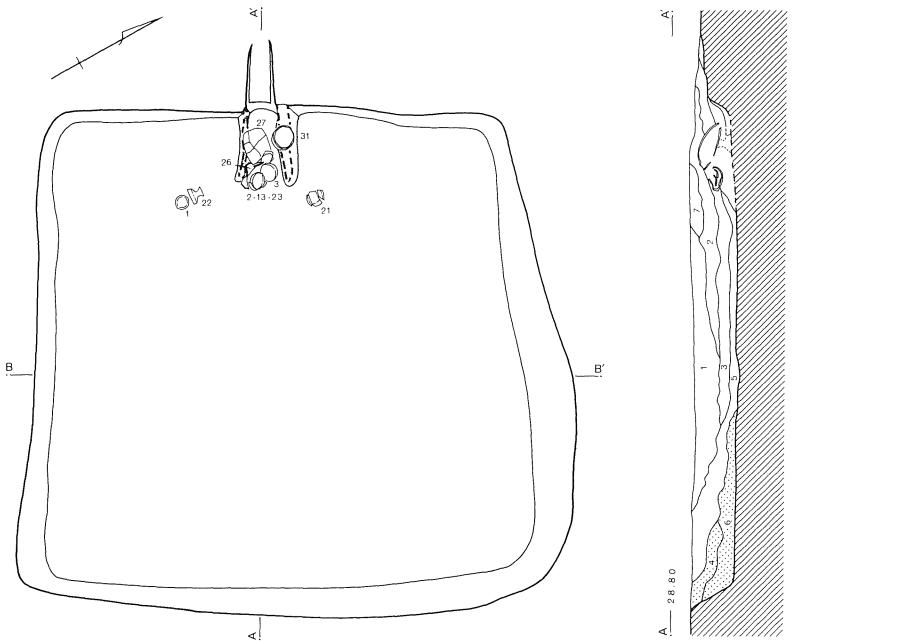
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	大型 坯	(15.3)	(6.4)		RWW'	A	明赤褐	45	No.1
2	大型 坯	15.5	6.1		RWW'	A	橙	60	No.2・3・4
3	坯	11.2	5.1		RWW'	A	橙	95	1・2層
4	坯	(11.2)	(4.5)		RWW'	A	橙	20	
5	高 坯		(5.0)	10.4	RWW'B	A	橙	80	1層
6	高 坯		(6.6)	8.8	RWW'B	A	橙	80	1・2層
7	小型 甕	14.3	(6.4)		RWW'B	A	橙	95	1・2層 転用器台
8	小型 甕	13.7	5.5	5.3	RWW'B	A	明赤褐	90	1・2層 転用鉢
9	甕	18.8	16.8	4.5	RW'B	A	鈍黃橙	85	1・2層
10	甕	(23.0)	(13.3)		RWW'	A	橙	25	1層
11	甕	25.4	29.5	9.7	RWB	A	橙	90	1・2層
12	甕	18.4	33.9	5.5	RWW'B	A	浅黃橙	80	1・2層 木葉底
13	甕	18.6	31.7	7.4	RWB	A	浅黃橙	90	1・2層
14	甕	15.7	33.0	6.5	RWW'B	A	浅黃橙	80	1・2層
15	甕	23.1	(21.0)		RWW'B	A	橙	70	1・2層
16	甕	(22.2)	(34.7)		RWW'B	A	浅黃橙	25	2層 SJ72の土器片接合

## 第74号住居跡

きー4グリッドに位置する。規模は長軸長3.80m、短軸長3.75m、面積約14.25m<sup>2</sup>、深さ0.36mで、主軸方向はN-85°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、基本的には長方形であるが、液状化現象によって北東壁は大きく歪んでいた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土4・6層中にはFAブロックが含まれていた。床面はやや起伏を有し、中央部へ向けて低くなっていた。壁の立ち上がりは北西壁が急であるものの、液状化のため全体的にはかなり緩やかである。

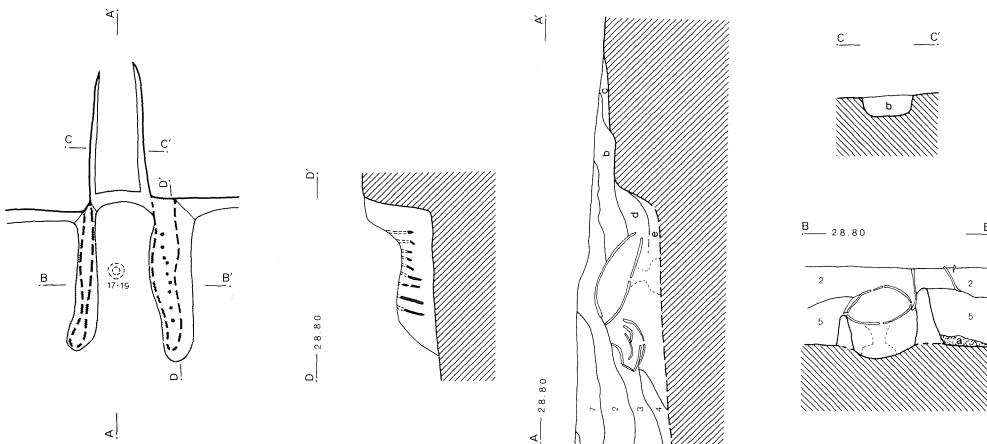
カマドは北西中央部に造られる。袖には灰白色粘土が使用されており、右袖で篠竹を利用した芯材を確認した。芯材はほぼ等間隔に一列に並び、概ね直立していた。あまり密に立てられた様子はなく、火熱のためか炭化していた。右袖の長さは64cmで、燃焼部の幅は25cmである。燃焼部はいくぶん掘り窪められていたが、床面からは煙道に向かってやや立ち上がり気味である。煙道は幅19cm、長さ55cm以上の溝状で、なだらかながらも傾斜をつけて掘られていた。支脚の位置は燃焼部中央からわずかに左寄りであり、堀の口縁部と高壙が倒立転用されていた。なお、右袖の外側には薄く灰の堆積が認められた。

遺物はカマド周辺より集中して出土した。17の堀の口縁部と19の高壙はセットで支脚に転用されたものである。倒立させられた17の上にさらに19の高壙が伏せ重ねられており、上には27の甕が口縁を手前に掛けられていた。また、焚き口部寄りには2・13の壙と23の高壙が重ねられ、これに接して3の壙も出土した。31の甕は右袖上に倒立していた。カマド前面の床面上では左側より1の壙と22の高壙が、また右側より21の高壙が出土した。このほか、覆土中より出土した15の壙は内外面赤色塗彩され、16の大型壙の内面には樹脂が零状に付着している。30の甕には外面の下位に磨滅帯がみとめられる。



- 1 灰黄褐色(10YR6/2) 多量の炭化物・焼土粒を含む。  
 2 灰黄褐色(10YR6/2) 多量の炭化物を帯状に含む。  
 3 鈍黄橙色(10YR6/3) 混入物なし。  
 4 鈍黄橙色(10YR6/3) 微量のFAブロックを含む。  
 5 灰黄褐色(10YR5/2) 粘土質。混入物なし。  
 6 橙灰褐色(10YR6/1) 微量の炭化物・FAを含む。  
 7 鈍黄橙色(10YR6/3) 少量の炭化物・焼土粒を含む。

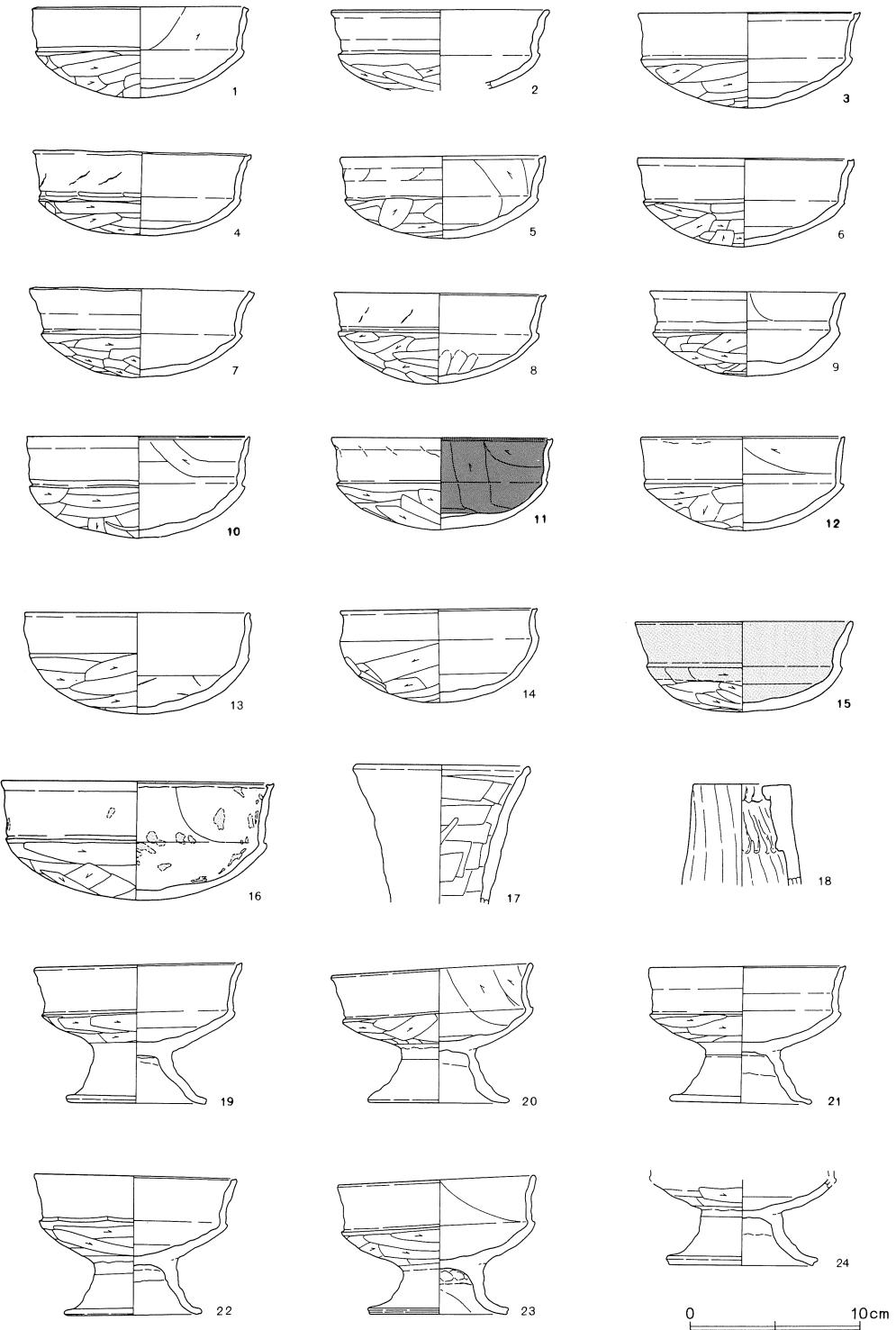
0 2m



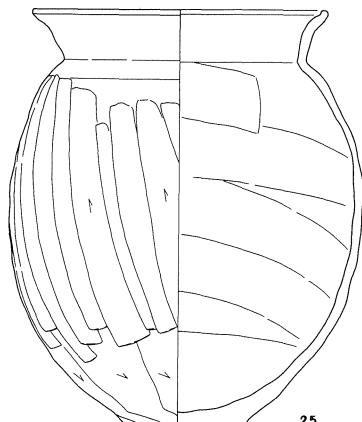
- カマド  
 a 純黄橙色(10YR3/1) 炭化物層。  
 b 橙灰褐色(10YR6/1) 焼けた粘土ブロックを含む。  
 c 橙灰褐色(10YR6/1) 多量の炭化物を含む。  
 d 橙灰褐色(10YR6/1) 烧土粒・焼土ブロックを含む。  
 e 灰黄褐色(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。

0 1m

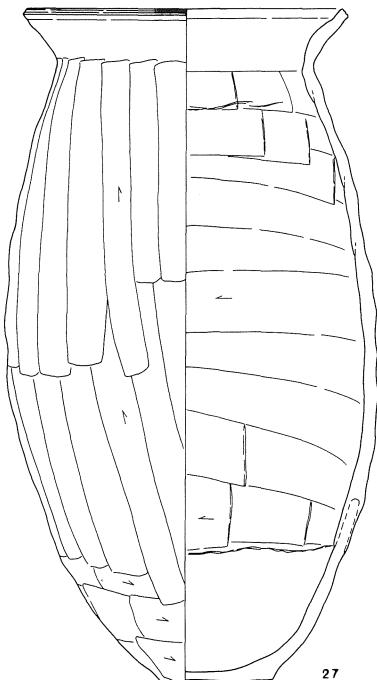
第225図 第74号住居跡 カマド



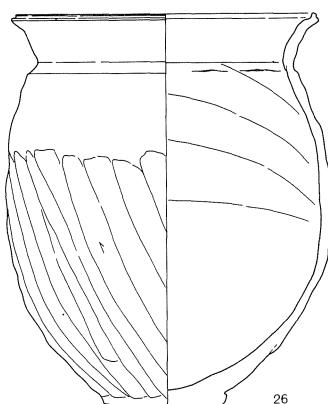
第226図 第74号住居跡 出土遺物（1）



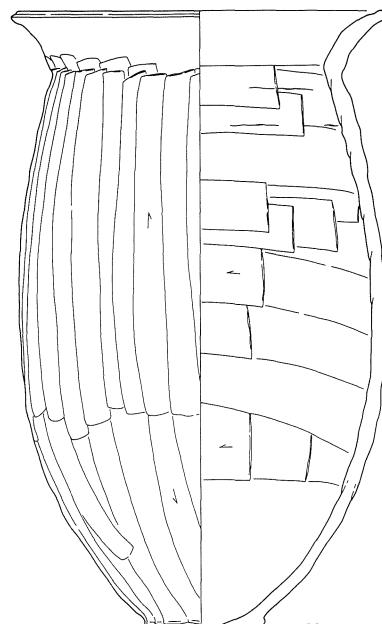
25



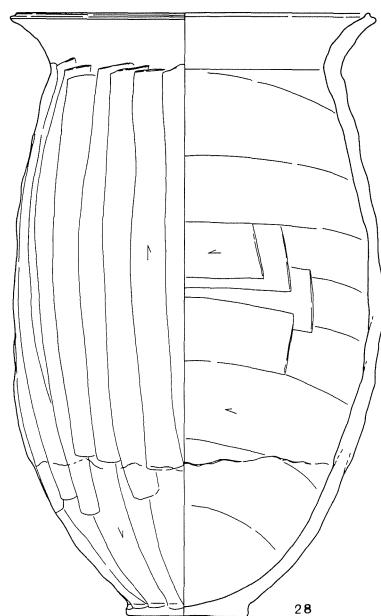
27



26



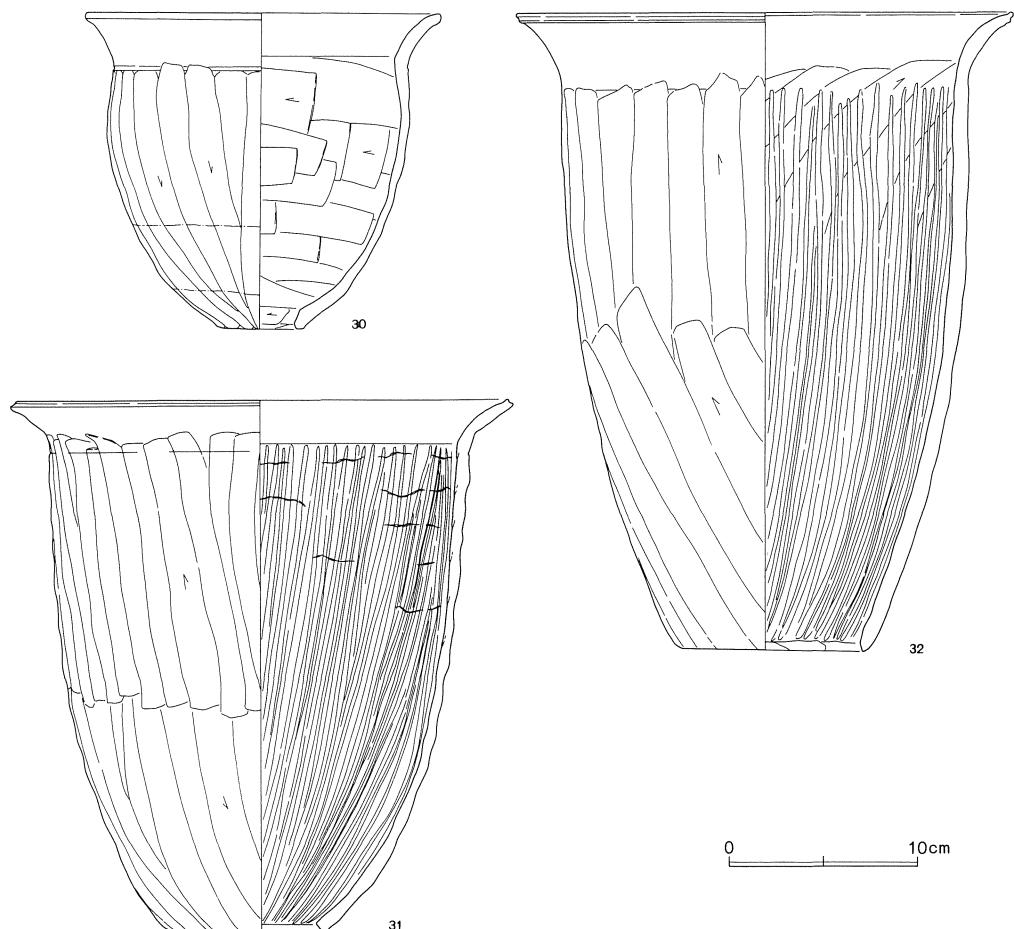
29



28

0 10cm

第227図 第74号住居跡 出土遺物（2）



第228図 第74号住居跡 出土遺物（3）

第74号住居跡出土土器観察表(1)

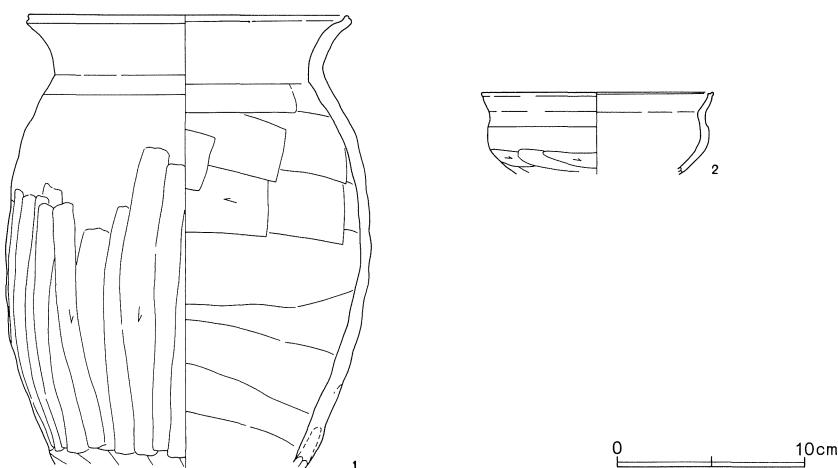
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.7	5.3		RWW'B	B	橙	100	No.1
2	壺	12.9	(4.7)		RWB	C	橙	50	No.6
3	壺	13.1	5.6		RW	A	橙	90	No.4
4	壺	12.8	4.8		RWB	A	橙	70	
5	壺	12.1	4.8		RWB	A	橙	100	
6	壺	12.7	5.2		RW	A	明赤褐	90	
7	壺	13.2	5.1		RW	C	橙	80	カマド
8	壺	12.5	5.3		RWB	B	橙	70	
9	壺	11.5	4.9		RW	B	橙	60	
10	壺	13.1	6.0		RW	A	鈍橙	100	
11	壺	13.0	5.4		RWB	B	黃橙	80	内面樹脂付着
12	壺	12.1	5.5		RW	A	橙	95	
13	壺	13.3	5.9		RWB	B	橙	100	No.5
14	壺	11.6	5.5		RWB	B	橙	80	

第74号住居跡出土土器観察表(2)

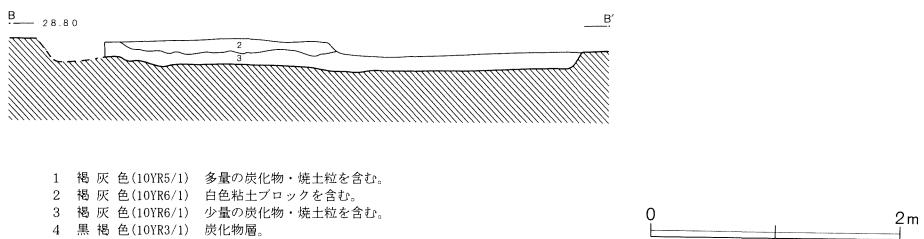
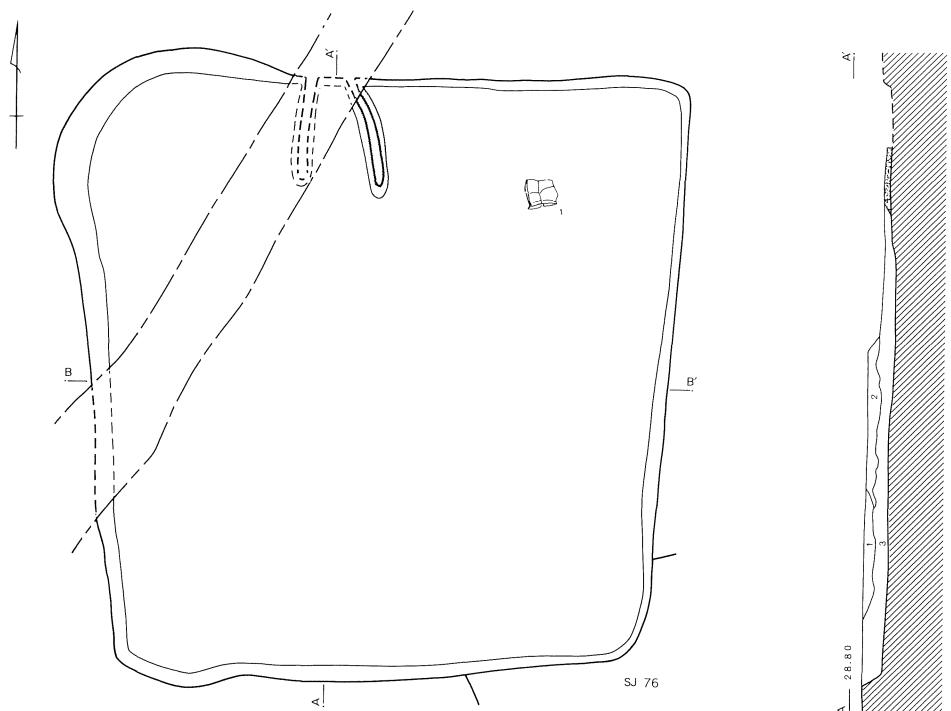
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
15	壺	13.0	5.3		RW	B	鈍橙	100	赤彩
16	大型壺	16.1	6.9		RW	A	橙	100	外面に雲状樹脂付着
17	壺	10.5	(8.1)		RWB	A	橙	100	No.12
18	支脚	(5.8)	(5.9)		RW	B	鈍橙	25	
19	高壺	12.3	8.0		WB	B	橙	80	No.11 カマド支脚
20	高壺	11.9	7.8		RWW'B	B	橙	100	
21	高壺	11.6	8.0		RWB	B	鈍黃橙	80	No.10
22	高壺	11.9	8.1		RWB	B	鈍黃橙	90	No.2
23	高壺	11.7	7.8		RWB	B	鈍黃橙	80	No.7
24	高壺		(5.0)	8.9	RWW'B	B	鈍黃橙	70	
25	甕	15.5	21.8	6.5	RWB	A	鈍黃橙	80	
26	甕	(15.9)	(20.6)	(6.2)	WW'B	B	灰黃	40	No.8
27	甕	17.0	35.5	(6.0)	RW	A	淡黃	80	No.3
28	甕	19.0	31.7	6.3	WB	A	鈍黃橙	60	
29	甕	19.7	33.0	6.1	RWB	A	鈍黃橙	70	
30	甕	18.8	16.6	4.6	RWB	A	鈍黃橙	80	外面胴部下位に磨滅帶
31	甕	26.4	28.0	8.0	RWB	A	鈍橙	70	No.9
32	甕	26.3	33.4	9.7	RWB	B	鈍橙	60	

### 第75号住居跡

きー5グリッドに位置する。北壁中央部より南西部は側溝によって破壊された。南東隅部は第76号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長4.57m、短軸長4.42m、面積約20.20m<sup>2</sup>、深さ0.19mで、主軸方向はN-1°-Eである。全体は南辺の短い台形様で、北西隅部は大きく崩壊していた。床面は地山砂層に掘り込まれ、カマド全面がわずかに窪んでいた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。



第229図 第75号住居跡 出土遺物



第230図 第75号住居跡

第75号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	17.2	24.0		RWW'B	A	灰白	70	No. 1
2	椀	(12.4)	(4.3)		RW	B	明赤褐	30	

カマドは北壁に造られていたが、大部分は破壊されていた。袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは88cmである。

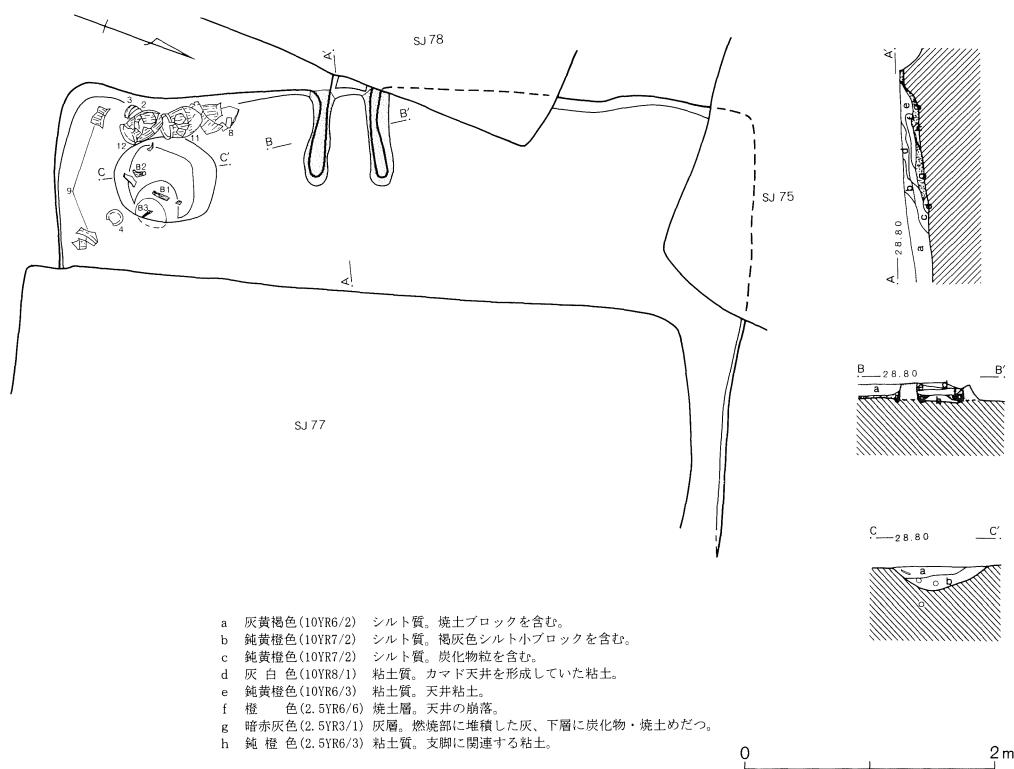
遺物は非常に少量であり、床面上より出土した1の甕のほか、図化可能なものは椀が1点のみである。甕は肩部にケズリが及ばず、未調整のものである。

## 第76号住居跡

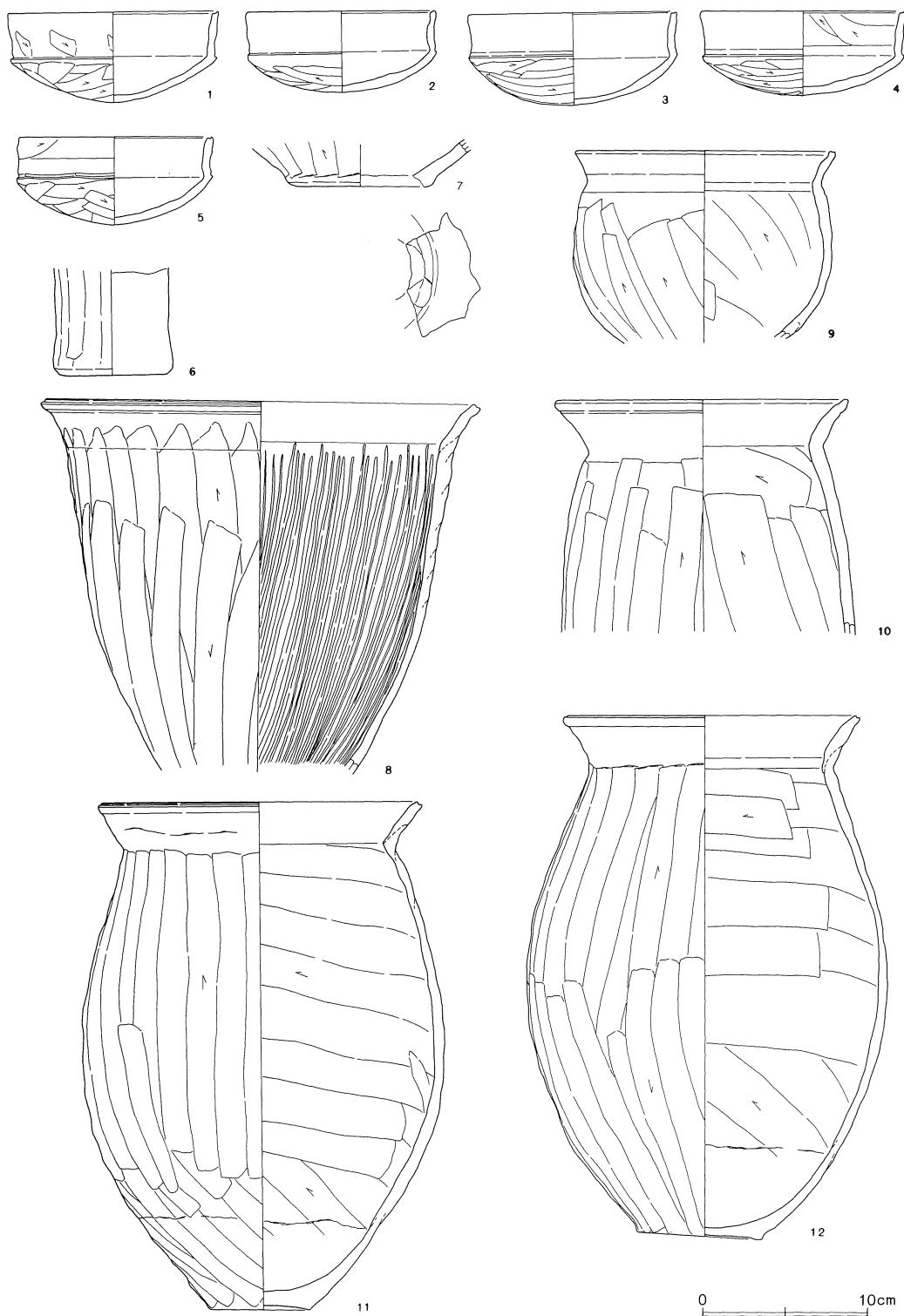
かー4グリッドに位置する。第75号・第77号・第78号住居跡に著しく切られていたため、全体の規模や形状は明確としえなかった。検出規模は南北長5.42m、深さ0.16mで、主軸方向はN-109°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、概ね平坦である。貯蔵穴は南西隅部のやや内側、カマド左側で確認した。径82cm、深さ19cmの円形ピットの底面に、さらに径38cmのピットを斜め方向に掘り込み、有段としている。このほか、床面から壁溝・柱穴の検出はできなかった。

カマドは西壁やや南寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは73cmで、燃焼部の幅は36cmである。火床面は焚き口部から次第に上昇し、段をもって煙道へと移行する。その中央部には、支脚にかかると考えられる粘土の高まりが認められた。煙道は溝状に掘り込まれていたものと思われるが、大部分は第78号住居跡によって破壊されていた。左袖の外側には灰層があった。

遺物は貯蔵穴周辺に集中して出土した。このうち、西壁と貯蔵穴の間に並べられたように出土した2・3・4の壺、および11・12の甕は完形に近いものであるが、他は床面上の出土にもかかわらず欠損部分が大きかった。7は壺の底部片で、焼成後に穿孔が加えられたものである。このほか、貯蔵穴内からは獸骨片が3点出土した。うちB2は雄鹿の角座骨である。



第231図 第76号住居跡



第232図 第76号住居跡 出土遺物

第76号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(12.9)	(5.5)		RW	A	橙	40	No.2
2	壺	11.6	5.0		RWW'	B	橙	95	No.5
3	壺	12.8	5.6		RW	A	橙	95	No.6
4	壺	12.6	5.1		RW	A	橙	90	No.8
5	壺	11.9	5.4		RW	A	橙	50	
6	支脚		(6.4)	(7.6)	W	C	赤灰	30	No.10 粘土製未焼成
7	壺		(2.3)	(9.1)	RW	B	橙	破片	穿孔土器
8	甌	26.6	(22.5)		RW	A	橙	60	No.1
9	小型甌	15.8	(11.8)		RWB	B	橙	70	No.7・9
10	甌	(17.9)	(14.0)		RWB	A	橙	40	
11	甌	19.7	30.5	6.0	RWBU	A	浅黄橙	95	No.3
12	甌	18.0	31.4	7.5	RWBU	A	浅黄橙	95	No.4

## 第77号住居跡

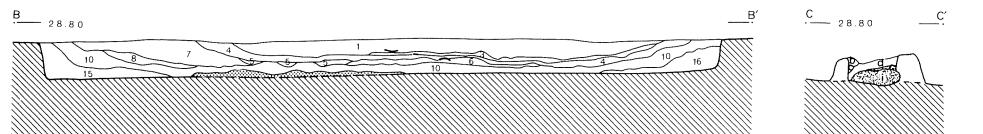
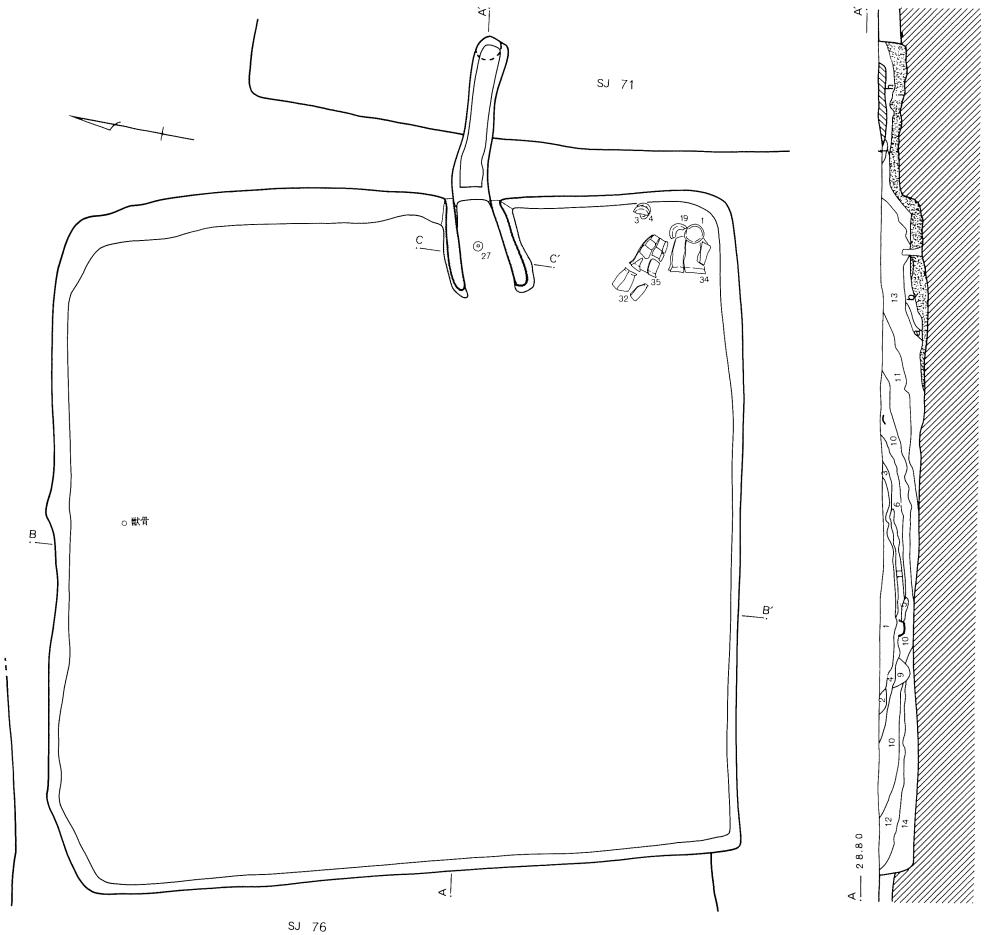
かー4グリッドに位置する。第71号・第76号住居跡と重複し、第71・76号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長5.29m、短軸長5.14m、深さ0.28mで、主軸方向はN-67°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ南東隅がわずかに窪んだが貯蔵穴とみとめるにはいたらなかった。壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは80cmで、燃焼部の幅は32cmである。煙道は幅25cm、長さ122cmで、地山を水平に堀り抜き、先端に煙出口をもっていた。支脚位置は左寄りであり、土製支脚が使用されていた。

遺物は南東隅からまとめて出土したが、いずれも直接本住居跡に伴うもの思われる。32の甌は胴部下半が伴わらず、転用器台の可能性も考えられる。35・34の大型の甌は並列して出土した。34の甌の直下には10の壺と、29の小型甌片があり、底部付近から壁下にかけて、1・19と3・4の壺2点が重なったものが2セットと20の大型壺が出土した。このほかの土器は5層以上の炭化物、焼土を多量に含む覆土中に投棄されたような状態で出土した。ほかに北壁寄りの床面上から獸骨片が1点出土した。

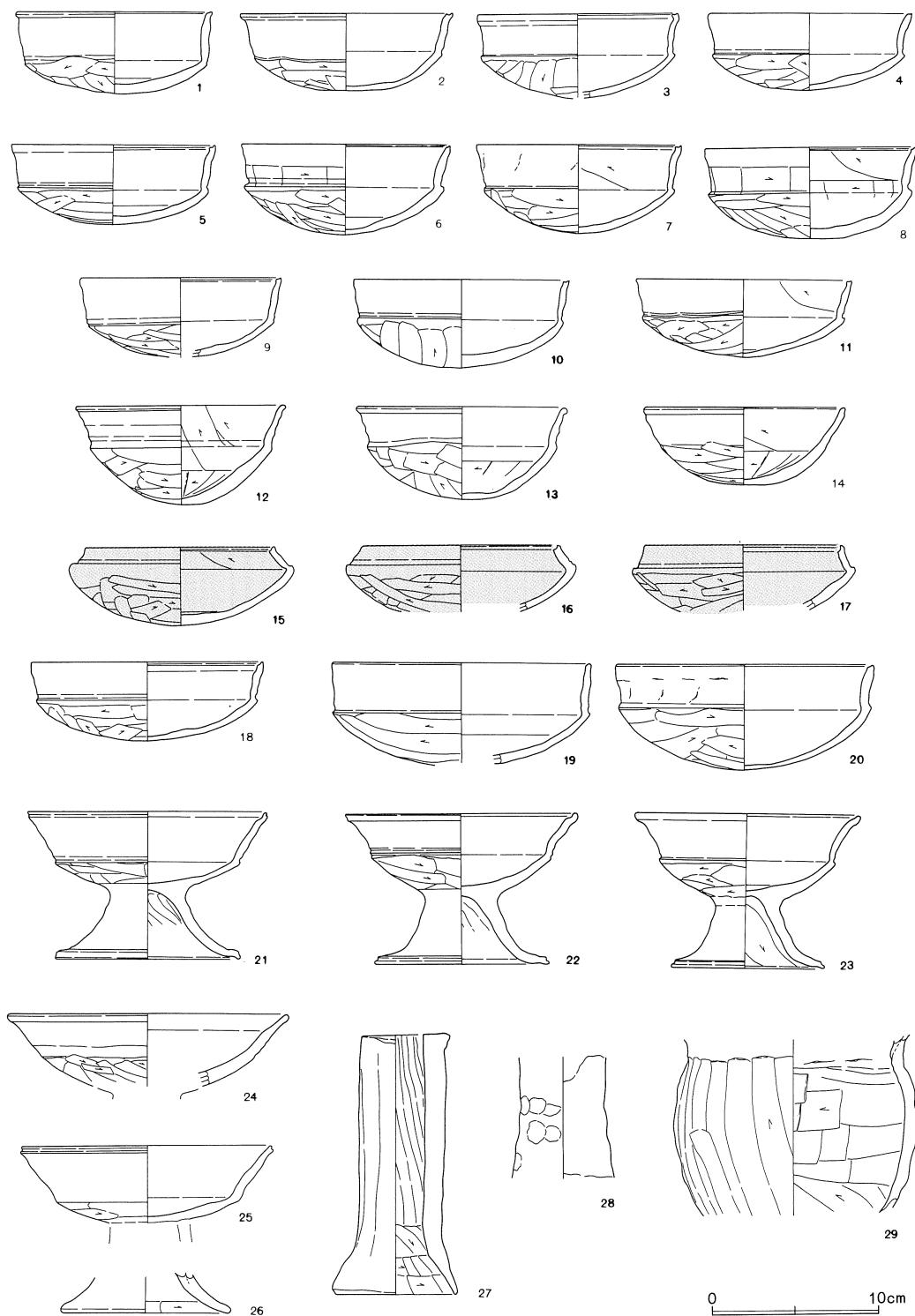
第77号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.8	4.9		RW	A	橙	95	No.5
2	壺	12.8	4.6		RW	A	橙	70	No.9
3	壺	(12.0)	(5.1)		RW	A	淡赤橙	40	No.7
4	壺	12.2	4.6		RW	A	橙	80	No.8
5	壺	12.3	4.9		RWB	A	淡赤橙	95	
6	壺	12.5	5.5		RW	A	橙	75	No.8
7	壺	12.3	5.3		RW	A	橙	100	
8	壺	12.8	5.5		RW	A	淡赤橙	100	
9	壺	(12.1)	(4.9)		RW	A	淡橙	40	
10	壺	13.0	5.3		RW	A	橙	70	No.10
11	壺	13.0	4.6		RW	A	橙	70	

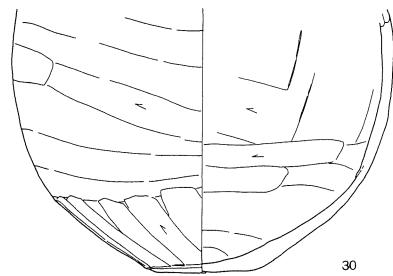


- 1 鈍黄褐色(10YR4/3) 粘土質。微量の炭化物を含む。  
 2 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質。炭化物を含む。  
 3 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。炭化物・シルトブロックを含む。  
 4 黒褐色(10YR3/2) 炭化物層。灰・焼土を含む。  
 5 黑褐色(10YR3/1) 灰炭化物層。焼土を含む。  
 6 鈍黄褐色(10YR4/3) シルト質。微量の炭化物を含む。  
 7 灰黄褐色(10YR4/3) 砂質。微量の焼土粒、炭化物を含む。  
 8 鈍黄褐色(10YR4/2) 砂質。シルトと粗砂との混合層。  
 9 灰黄褐色(10YR4/2) 砂質。多量の炭化物を含む。  
 10 暗赤褐色(2.5YR3/2) シルト質。微量の炭化物を含む。やや焼土化している。  
 11 鈍黄褐色(10YR4/3) 砂質。シルトと細砂ブロックとの混合層。  
 12 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。少量の炭化物を含む。  
 13 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。炭化物を含む。  
 14 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。微量の炭化物を含む。波状化による地山砂混  
合層。  
 15 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。微量の炭化物を含む。  
 16 鈍黄褐色(10YR4/3) 粘土質。微量の炭化物を含む。
- カマド  
 a 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。部分的に焼土化。カマド天井崩落土。  
 b 橙色(2.5YR6/6) 烧土層。焼土粒と灰との混合層。天井崩落土。  
 c 黑褐色(10YR3/1) 炭化物層。炭化物と灰との混合層。  
 d 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。焼土ブロックを含む。天井崩落土。  
 e 鈍黄褐色(10YR5/3) シルト質。微量の焼土粒を含む。  
 f 鈍黄褐色(10YR4/3) シルト質。地山とg層の亀裂部陥入土。  
 g 鈍黄褐色(10YR4/3) シルト質。炭化物・焼土ブロックを含む。  
 h 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。混入物なし。  
 i 黑褐色(10YR3/1) 炭化物層。焼土粒を含む。

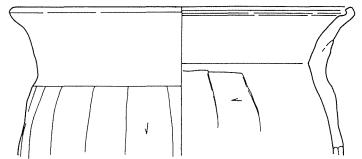
第233図 第77号住居跡



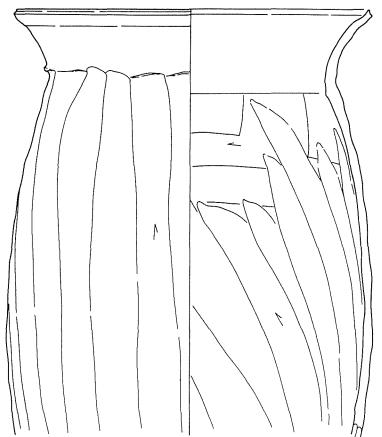
第234図 第77号住居跡 出土遺物（1）



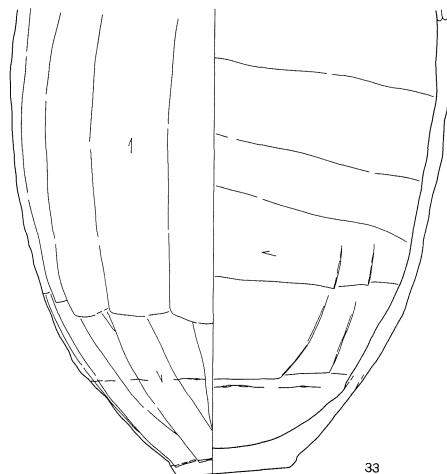
30



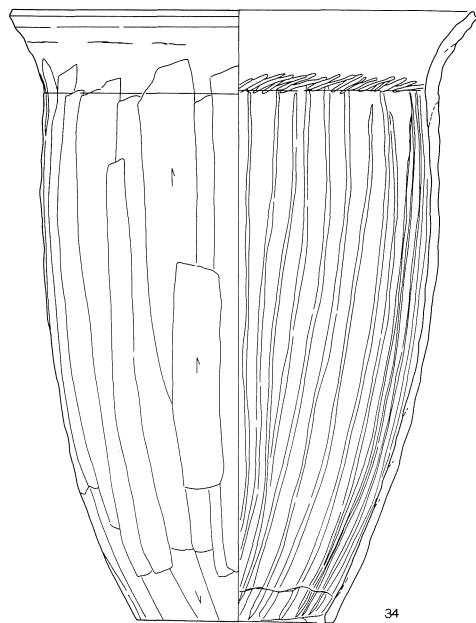
31



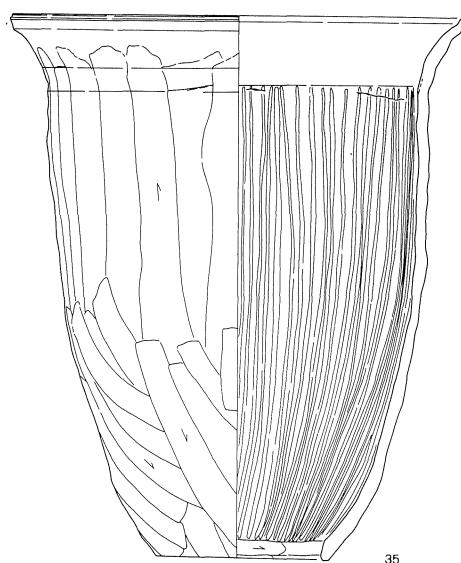
32



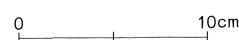
33



34



35



第235図 第77号住居跡 出土遺物（2）

第77号住居跡出土土器観察表(2)

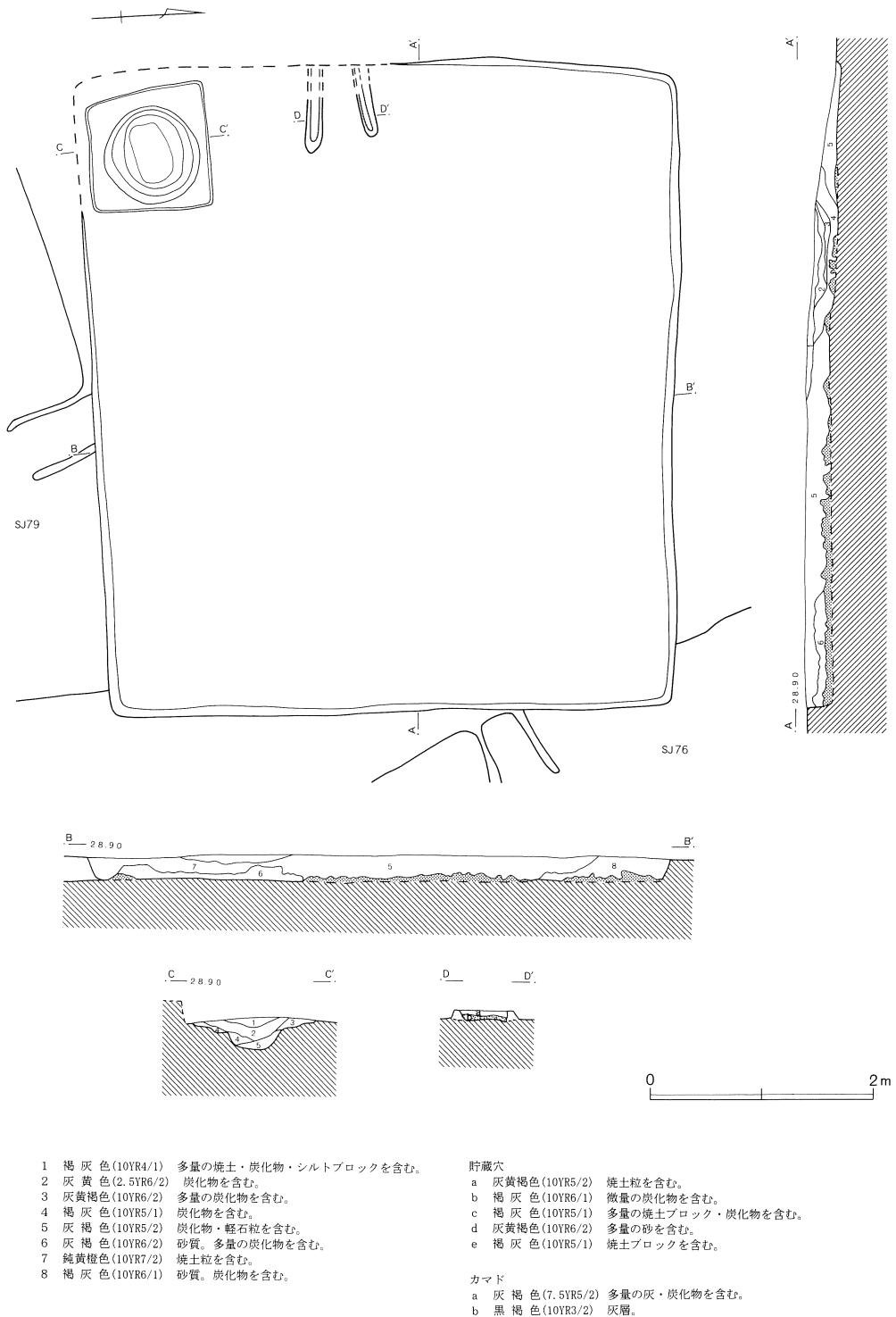
番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
12	壺	12.6	6.0		RW	A	橙	90	
13	壺	12.6	5.5		RW	A	橙	50	
14	壺	12.1	4.6		RW	A	橙	70	
15	壺	11.4	4.9		RW	B	鈍橙	80	No.4 内外面黒色処理
16	壺	(11.9)	(4.0)		W	B	橙	30	内外面黒色処理
17	壺	(11.9)	(4.0)		RW	B	淡赤橙	30	内外面黒色処理
18	壺	14.0	4.7		RW	A	橙	50	
19	大型壺	(15.5)	(6.0)		RW	A	橙	30	No.6
20	大型壺	15.5	6.3		RW	A	橙	50	
21	高 壺	(14.4)	(8.8)	(11.2)	RW	A	橙	40	
22	高 壺	14.0	9.0	10.6	RW	A	橙	70	
23	高 壺	13.5	9.2	9.3	RW	A	橙	60	
24	高 壺	(16.9)	(4.4)		RW	B	橙	20	
25	高 壺	15.0	(4.7)		RW	B	淡赤橙	75	脚部剝離
26	高 壺	(2.2)	10.2		RW	B	橙	70	
27	支 脚	5.3	15.6	7.6	RW	A	橙	100	No.1
28	支 脚		(7.2)		RW	C	鈍橙	30	
29	小型甕		(10.6)		RWB	A	灰白	50	No.11
30	壺		(14.0)	(4.7)	RW	A	橙	25	
31	甕	(18.0)	(7.8)		RW	B	灰白	30	
32	甕	19.0	(22.5)		RWB	A	灰白	80	No.2
33	甕		(24.5)	(5.9)	RWB	B	鈍橙	25	
34	甕	24.7	32.2	10.5	RW	B	橙	95	No.3 外面胴部下位に磨滅帶
35	甕	24.2	28.5	9.2	RW	A	橙	95	No.4

## 第78号住居跡

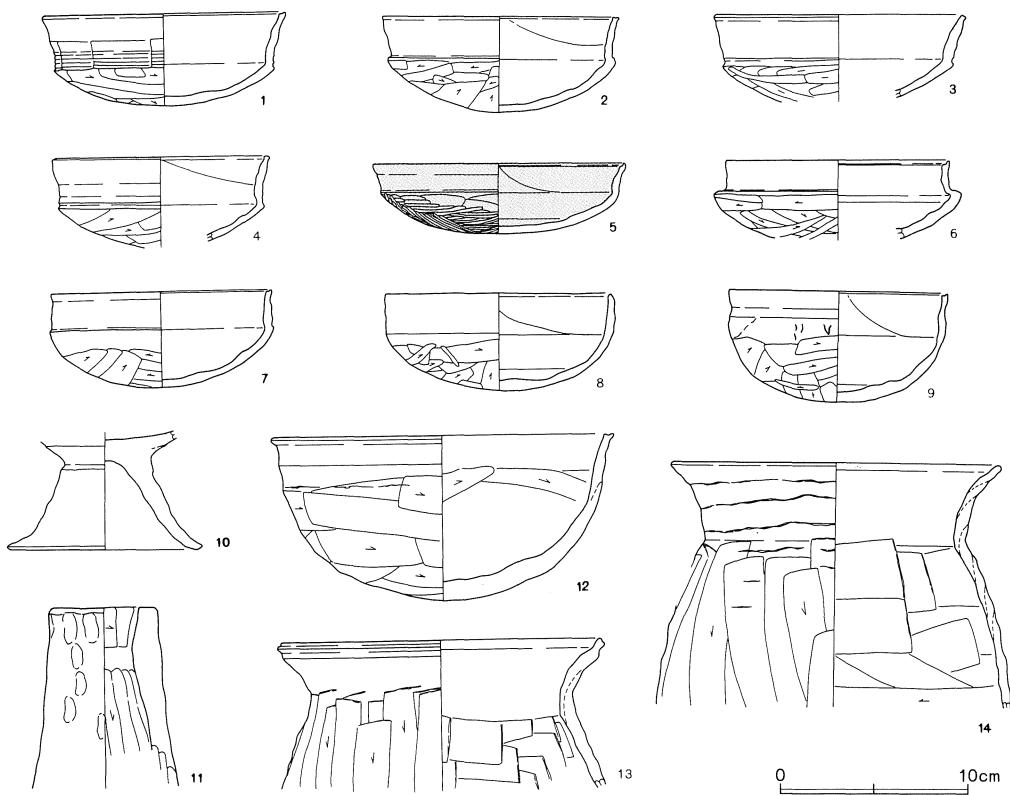
かー5グリッドに位置する。第76号・第79号住居跡と重複し両者を切り込んでいた。全体は整った方形であるが、西壁の流失が大きくカマドにまで及んでいた。規模は長軸長5.68m、短軸長5.10m、面積約28.8m<sup>2</sup>、深さ0.22mで、主軸方向はN-89°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、液状化現象による攪乱を受けていた。このため、大部分は床面としての把握が困難であった。したがって、壁溝・柱穴・ピットの確認はできなかつたが、カマド左側で貯蔵穴を検出した。上面は112cm×106cmの方形プランで、浅いテラス状となっていた。この中には径86cmの円形ピットが掘り込まれ、さらに段を有して丸味の強い底面へと移行していた。床面から底面までの深さは約25cmである。

カマドは西壁の中央部、やや南寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは約80cmで、燃焼部の幅は41cmである。火床面は平坦で、特に床面から掘り込まれたような様子は窺えなかった。

遺物の出土量は少ない。隣接住居跡との切り合い関係から、1・2の壺が本住居跡の時期を表わすものと考えられるが、7・8の稜の不明瞭な壺も径が小さく口辺部も短いことから古く遡ることもないと見られる。



第236図 第78号住居跡



第237図 第78号住居跡 出土遺物

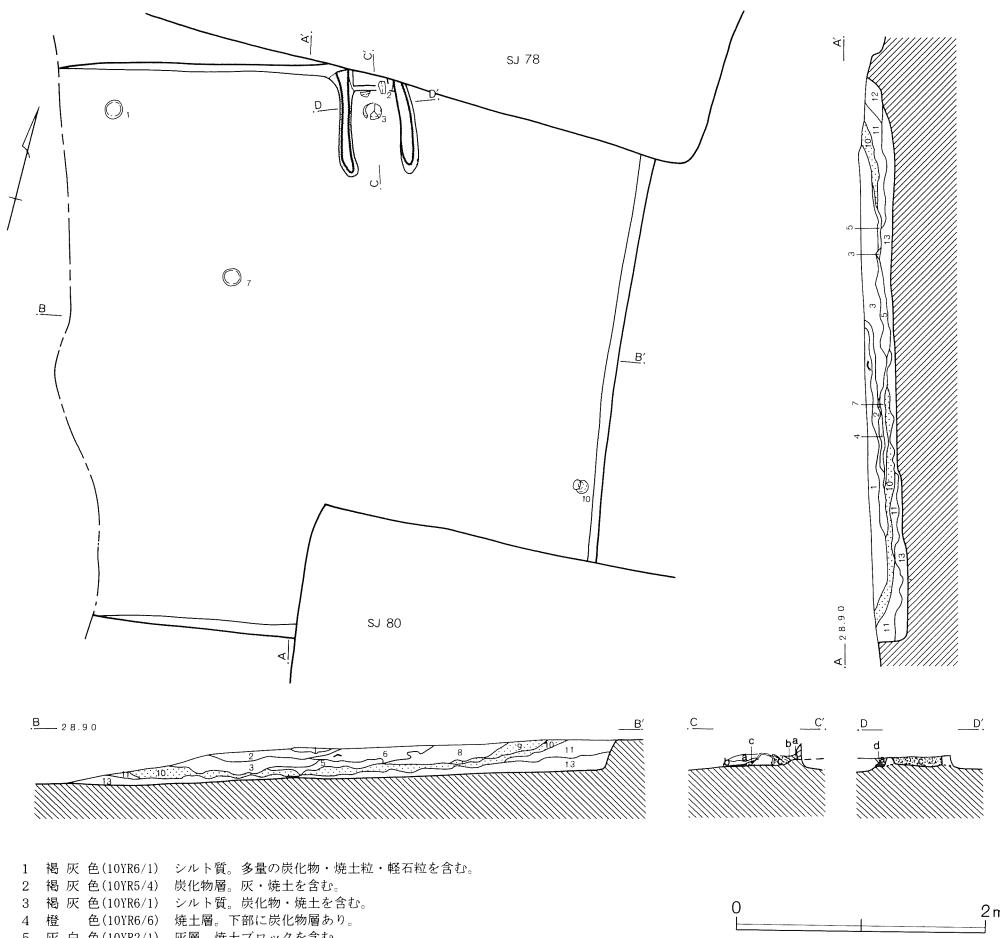
第78号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.9	4.8		RW	B	鈍赤褐	60	
2	壺	12.6	5.0		WB	B	橙	80	
3	壺	13.3	(4.6)		RW	B	橙	70	
4	壺	11.6	(4.8)		W	B	明赤褐	80	
5	壺	13.5	3.7		RW	B	橙	50	内外面黒色処理
6	壺	(11.9)	(4.2)		W	B	橙	30	
7	壺	11.8	5.0		RWB	B	橙	90	
8	壺	12.1	5.1		RW	A	鈍橙	100	
9	椀	11.7	5.8		RWB	A	橙	90	
10	高壺		(6.2)	10.3	WB	A	橙	60	
11	支脚	5.8	9.4		RW	B	鈍橙	40	
12	鉢	18.2	8.7		RWB	B	橙	70	わずかに火を受ける
13	甕	(17.4)	(7.9)		RW	A	橙	30	
14	甕	(17.5)	(12.8)		RW	B	明褐灰	40	

## 第79号住居跡

かー5グリッドに位置する。北側の両隅部は第78号・第80号住居跡に切られ、埋没河川の肩部にあたる西壁は流失していた。このため全体の規模は明らかとしえないが、検出規模は長軸長4.40m、短軸長4.43m、深さ0.25mで、主軸方向はN-16°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、中央部がわずかに高まっていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1層～7層は炭化物層、焼土層、灰層が入り込み、堆積状態も乱れているため、人為的な埋め戻しが考えられる。また、9・10層中にFAブロックが含まれていた。

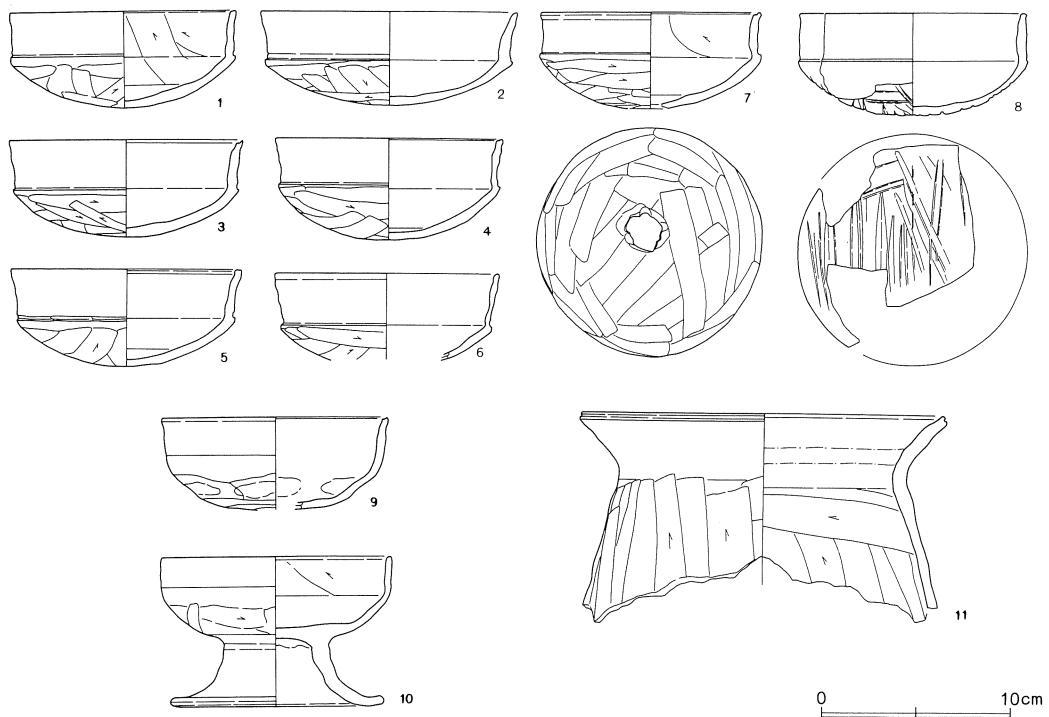
カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは68cmで、燃焼部の幅は38cmである。煙道部は第78号住居跡に破壊されていた。支脚位置は中軸線上であり、粘土塊の上



- 1 暗灰色(10YR6/1) シルト質。多量の炭化物・焼土粒・砾石粒を含む。
- 2 暗灰色(10YR6/4) 炭化物層。灰・焼土を含む。
- 3 暗灰色(10YR6/1) シルト質。炭化物・焼土を含む。
- 4 橙色(10YR6/6) 焼土層。下部に炭化物層あり。
- 5 灰白色(10VR2/1) 灰層。焼土ブロックを含む。
- 6 灰黄色(10YR6/2) シルト質。多量の灰・炭化物を含む。
- 7 灰黄色(10YR6/2) シルト質。多量の炭化物を含む。
- 8 鋼黃橙色(10YR7/2) シルト質。灰白色シルトブロックを含む。
- 9 灰黄色(10YR7/2) シルト質。FAブロックを含む。
- 10 灰黄色(10YR6/2) シルト質。多量のFAブロックを含む。
- 11 灰黄色(10YR6/2) シルト質。少量の炭化物・焼土粒を含む。
- 12 灰白色(10YR7/1) 粘土質。混入物なし。
- 13 鋼黃橙色(10YR6/3) 砂質。地山砂混合層。

- カマド
- a 灰白色(10YR8/1) 粘土質。天井を形成した粘土。
  - b 橙色(2.5YR6/8) 烧土層。天井内面の崩落。
  - c 黑褐色(10VR3/1) 灰層。
  - d 黑褐色(10VR3/1) 灰層。カマド外灰層。

第238図 第79号住居跡



第239図 第79号住居跡 出土遺物

第79号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.0	5.1		RW	A	橙	80	No. 1
2	坏	13.7	4.9		RW	B	橙	40	No. 5
3	坏	12.4	5.1		RW	A	橙	75	No. 4
4	坏	(12.2)	(5.4)		RW	B	淡橙	40	
5	坏	12.3	5.1		RW	B	淡赤橙	60	
6	坏	(12.0)	(4.6)		RW	C	淡赤橙	40	
7	坏	11.7	5.1		RW	A	鈍橙	100	No. 2 穿孔土器
8	坏	(12.1)	(5.4)		RW	C	橙	25	擦切痕有り
9	坏	(12.1)	(5.0)		RW	A	橙	30	体部中位に指頭圧痕
10	高 坏	12.3	7.9	11.4	RW	A	淡赤橙	60	No. 3
11	甕	(19.3)	(9.0)		RWB	A	鈍黄橙	30	転用器台

に坏が伏せられていた。左袖の外側には灰層があった。

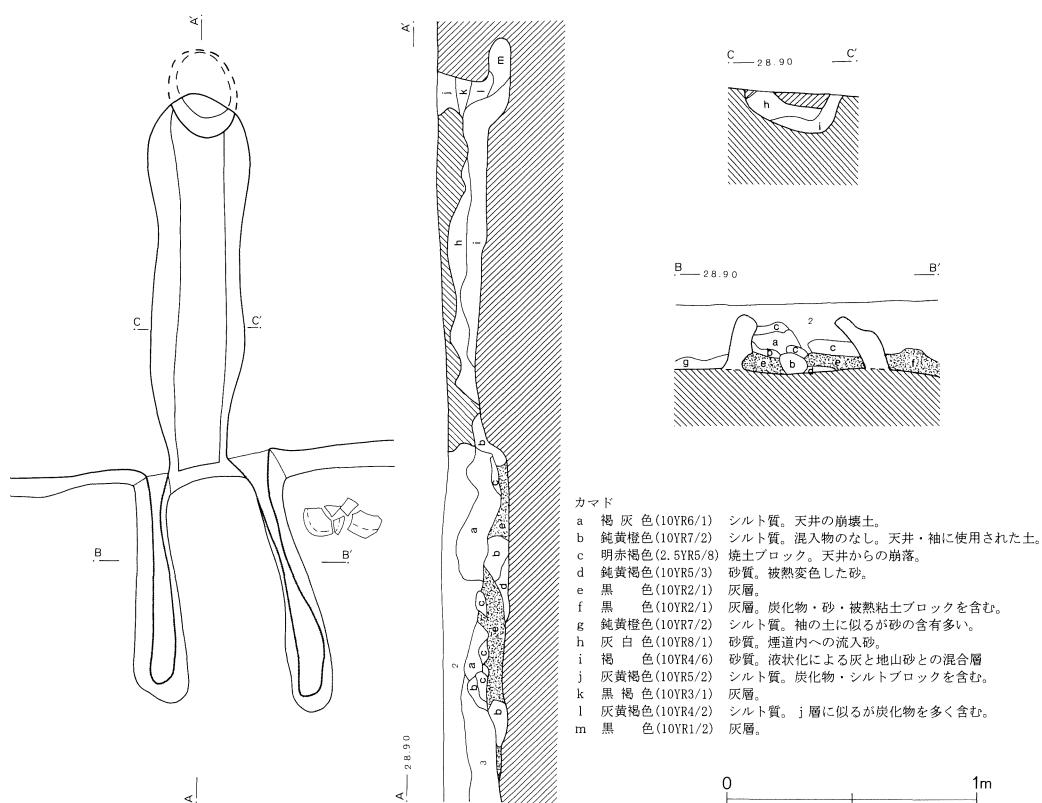
遺物の出土量は少ない。1・7の坏は床面上、支脚に転用された3と2の坏はカマド内の出土で、10の高坏は壁上からの転落状態だった。7の坏は底部穿孔され、8の坏は残存度は低いが、体部外面に多数の擦切痕がある。9の坏は10の高坏坏部に類似するが、ヘラケズリは底面のみで成形時の指頭圧痕が顕著である。11は甕からの転用器台である。

## 第80号住居跡

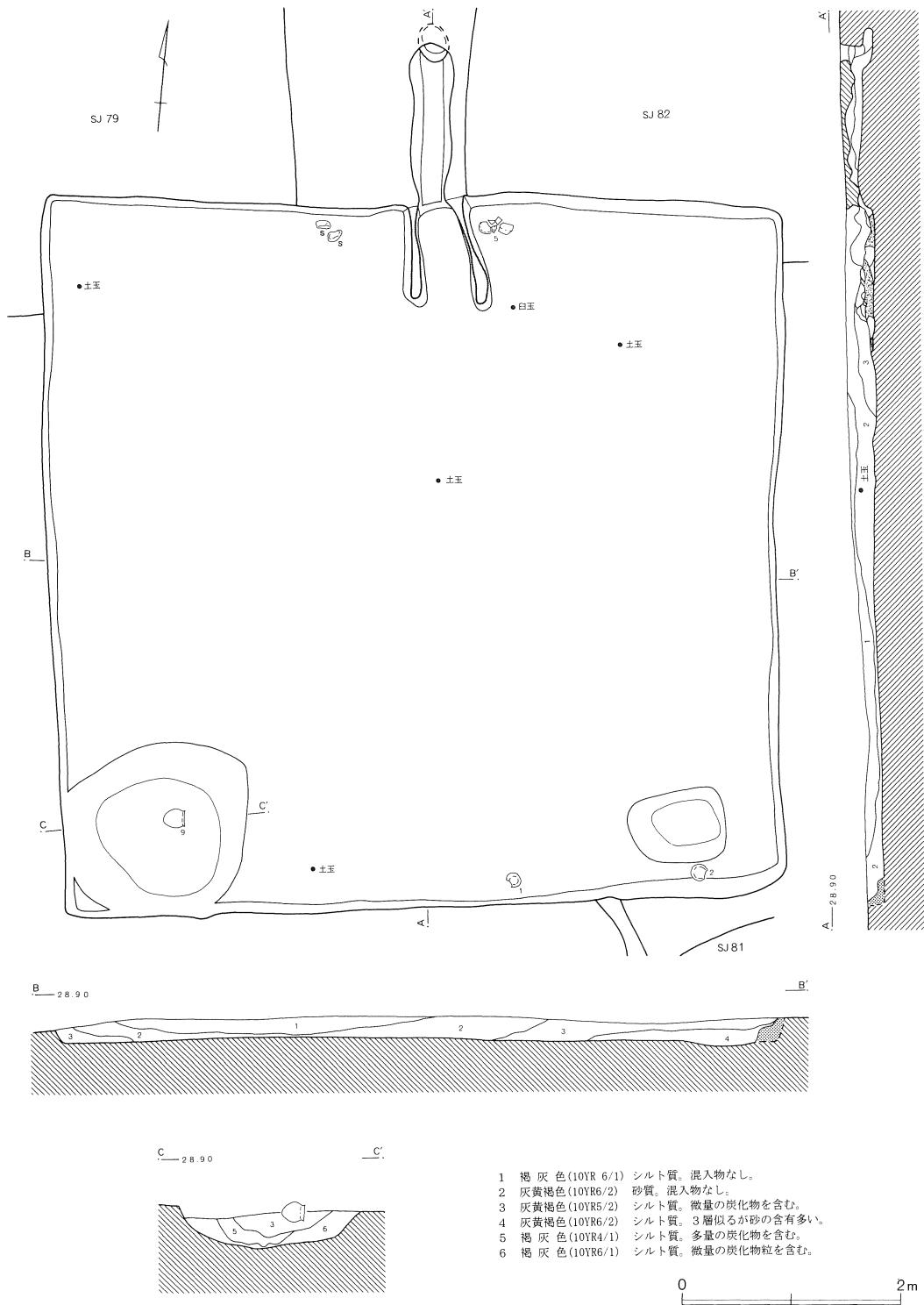
かー4グリッドに位置する。第79号・第81号・第82号住居跡を切り込んでいた。全体は隅部の鋭い、整った方形である。規模は長軸長6.50m、短軸長6.25m、面積約40.6m<sup>2</sup>、深さ0.19mで、主軸方向はN-5°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、中央部がやや高まり、カマド前面がわずかに窪んでいた。床面の南西隅、および南東隅には大型のピットが穿たれていた。南西のものは径160cm程の円形で、立ち上がりの緩やかな浅い土壌状である。壁溝・柱穴については、これを確認できなかった。

カマドは北壁中央に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。内傾する右袖の長さは92cm、燃焼部の幅は42cmである。火床面は概ね平坦で、厚く灰の堆積が観察された。煙道は幅39cm、長さ162cmのトンネル状で、地山を水平に掘り抜き、先端に煙出口をもっていた。なお、右袖の外側にはやはり厚く灰の堆積があった。

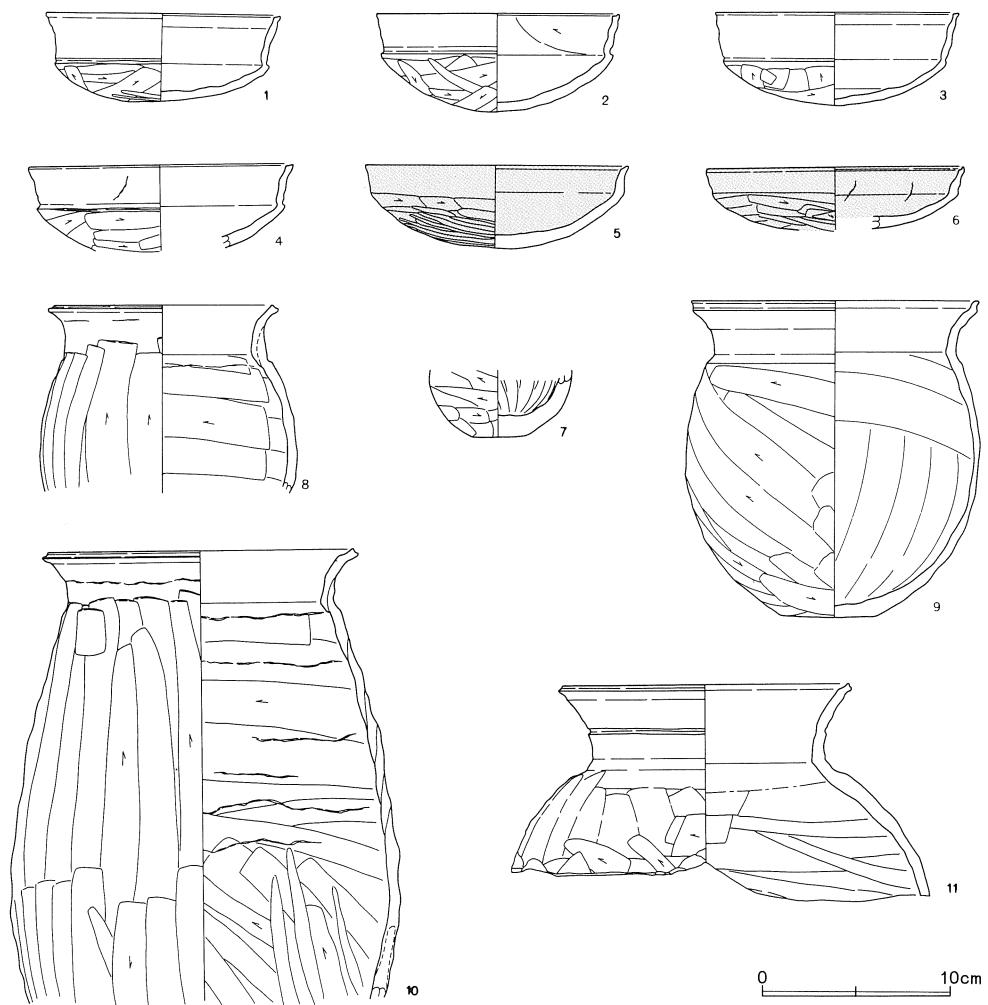
遺物の量は少ない。5の壺はカマド右側から出土し、1・2の壺2点は南壁下より出土した。また、9の小型甕は南西隅ピットの上層より出土した。11は壺からの転用器台であるが、頸部内面が非常に磨滅しており、倒立して使用されたものと考えられる。このほか、カマド右袖の先端部からは滑石製白玉1点、覆土中からは土玉3点が出土した。



第240図 第80号住居跡 カマド



第241図 第80号住居跡



第242図 第80号住居跡 出土遺物

第80号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	4.6		WW'B	B	橙	90	No. 4
2	壺	12.9	5.2		RWB	B	橙	90	No. 3
3	壺	12.9	4.9		RB	B	橙	60	
4	壺	14.0	(4.5)		RW	B	橙	50	
5	壺	14.0	4.4		RWB	B	鈍橙	80	No. 1 内外面黒色処理
6	壺	(13.6)	(3.3)		RW	B	黒	25	内外面黒色処理
7	ミニチュア		3.5		RW	A	橙	60	壺形
8	小型壺	11.6	(9.9)		RWB	B	鈍橙	60	
9	小型壺	15.2	16.1	5.1	RWB	A	鈍黄橙	70	南西隅ピット上層
10	壺	(16.3)	(23.7)		RW	B	鈍橙	30	
11	壺	15.2	(9.3)		W	B	橙	70	転用器台 倒立使用

## 第81号住居跡

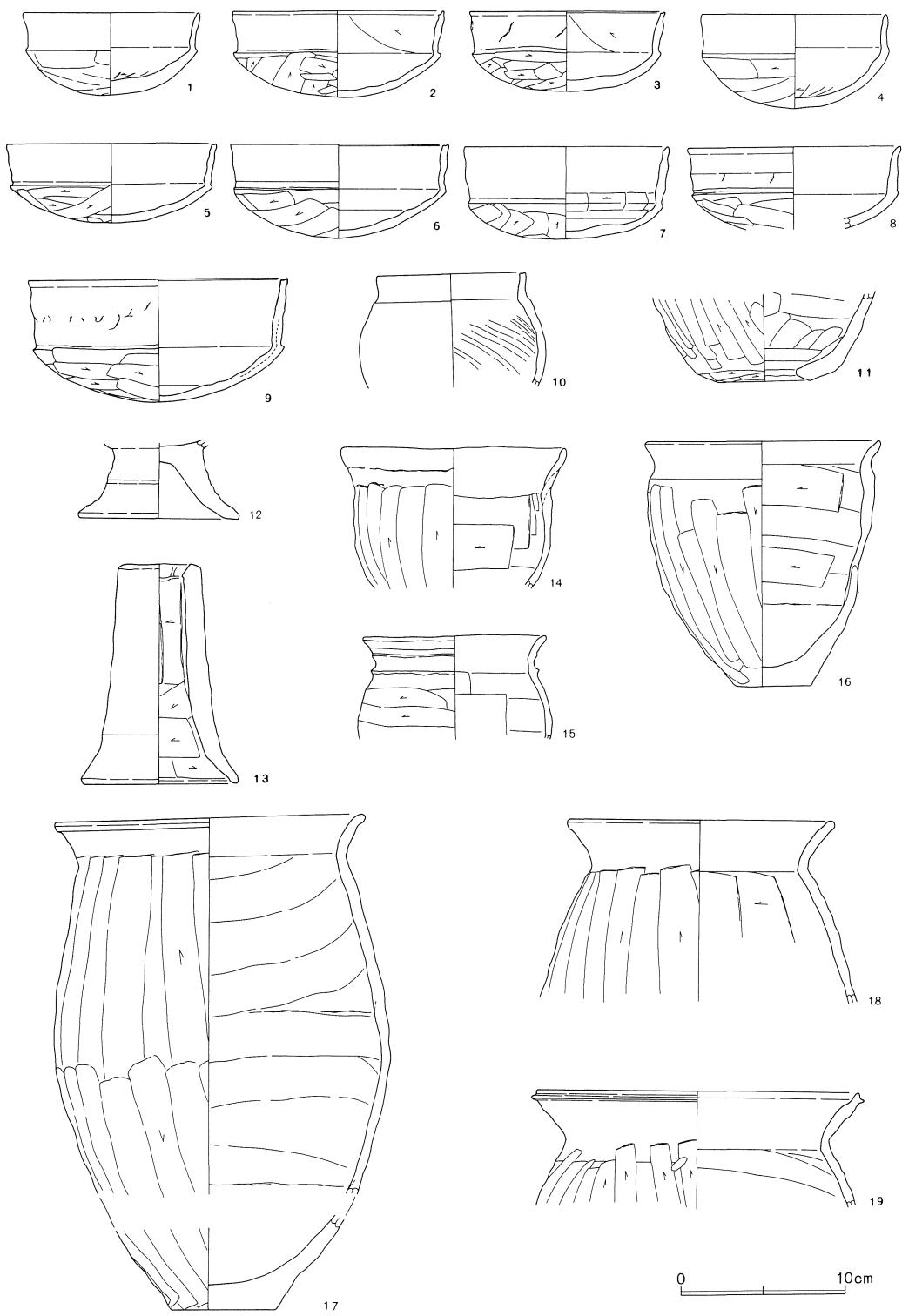
かー4グリッドに位置する。第80号住居跡に煙道の先端部を切られていた。東壁はいくぶん乱れるものの、全体は整った長方形である。規模は長軸長3.90m、短軸長3.78m、面積約14.7m<sup>2</sup>、深さ0.25mで、主軸方向はN-30°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、南壁下が浅く窪むほかは、概ね平坦である。東隅やや北寄りで径76cm、深さ10cmの皿状ピットを検出したが、ほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土最上位の1・2層中には、FAブロックが含まれていた。

カマドは北西壁の中央部に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。袖は他住居跡に比して開き気味で、特に左袖の先端は大きく屈曲していた。左袖の長さは58cmで、燃焼部の幅は31cmであ



- |                 |                           |                 |                             |
|-----------------|---------------------------|-----------------|-----------------------------|
| 1 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量のFA・炭化物粒を含む。        | a 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量の焼土ブロック・炭化物を含む。天井崩落。  |
| 2 褐灰色(10YR4/1)  | 粘性弱。多量のFA・炭化物を含む。         | b 鈍黄橙色(10YR7/2) | 粘性強。粘土層の単一ブロック。天井崩落。        |
| 3 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量の炭化物ブロックを含む。        | c 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性弱。多量の灰、微量の灰白色土粒・焼土粒を含む。   |
| 4 鈍黄橙色(10YR7/4) | 粘土質。混入物なし。                | d 灰白色(10YR7/1)  | 粘性弱。多量の焼土粒、微量の炭化物粒を含む。      |
| 5 褐灰色(10YR5/1)  | 粘性強。微量の粘土・焼土・炭化物各ブロックを含む。 | e 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性弱。多量の灰、微量の焼土粒・炭化物ブロックを含む。 |
| 6 褐灰色(10YR5/1)  | 粘性弱。多量の白色粘土粒を含む。          | f 灰黄褐色(10YR6/2) | 粘性弱。多量の焼土ブロック・炭化物ブロック・灰を含む。 |
| 7 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。少量の炭化物・灰白色粘土を含む。      | g 褐灰色(10YR5/1)  | 多量の焼土ブロックを含み、堅敏。            |
| 8 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。多量の炭化物・灰白色粘土を含む。      | h 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量の黄灰色砂ブロックを含む。         |
| 9 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量の灰白色粘土ブロックを含む。      | i 褐灰色(10YR7/1)  | 粘性弱。微量の黄灰色砂質ブロックを含む。        |
| 10 灰白色(10YR7/1) | 粘性強。微量の炭化物粒を含む。           | j 褐灰色(10YR6/1)  | 粘性強。微量の明黄橙色粘土ブロックを含む。       |
| 11 褐灰色(10YR6/1) | 粘性弱。微量の炭化物粒を含む。           |                 |                             |
| 12 褐灰色(10YR6/1) | 粘性弱。微量の灰白色粘土粒を含む。         |                 |                             |

第243図 第81号住居跡



第244図 第81号住居跡 出土遺物

第81号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	10.8	5.0		RWW'	B	橙	95	No.1
2	壺	12.9	5.2		RWB	A	橙	100	No.2
3	壺	11.9	4.8		RWB	B	橙	100	
4	壺	11.3	5.7		RWB	B	橙	90	床直
5	壺	12.8	4.8		RW	B	橙	50	
6	壺	13.3	5.6		RW	B	鈍橙	60	
7	壺	12.5	5.6		RWW'	B	明赤褐	50	
8	壺	(12.9)	(4.4)		RWB	C	鈍橙	40	
9	大型壺	(15.8)	(7.4)		RW	A	橙	40	貯蔵穴
10	短頸壺	(9.1)	(6.8)		RW	C	橙	30	
11	甌		(5.3)	5.5	B	B	鈍橙	70	
12	高壺		(4.5)	9.8	WB	B	橙	70	
13	支脚		13.3	9.7	RW	A	鈍橙	70	
14	小型甌	(13.8)	(8.5)		RW	B	明褐灰	30	
15	小型甌	(11.2)	(6.3)		RW	B	明褐灰	30	
16	小型甌	14.3	14.8	4.5	RW	B	橙	60	床直
17	甌	19.0	29.8	6.4	RW	B	橙	60	
18	甌	(16.2)	(10.9)		RWB	B	鈍橙	40	
19	甌	19.7	(7.1)		RW	B	明褐灰	70	

る。火床面は平坦で、厚く灰の堆積が認められた。床面からはわずかに低くなるが、明瞭な掘り込みはみとめられなかった。煙道は幅17cm、長さ74cm以上で、崩落した天井部が遺存していた。底面は水平に掘り抜かれるが、先端部では段を有して深くなっていた。なお、右袖の外側には薄く灰の堆積があった。

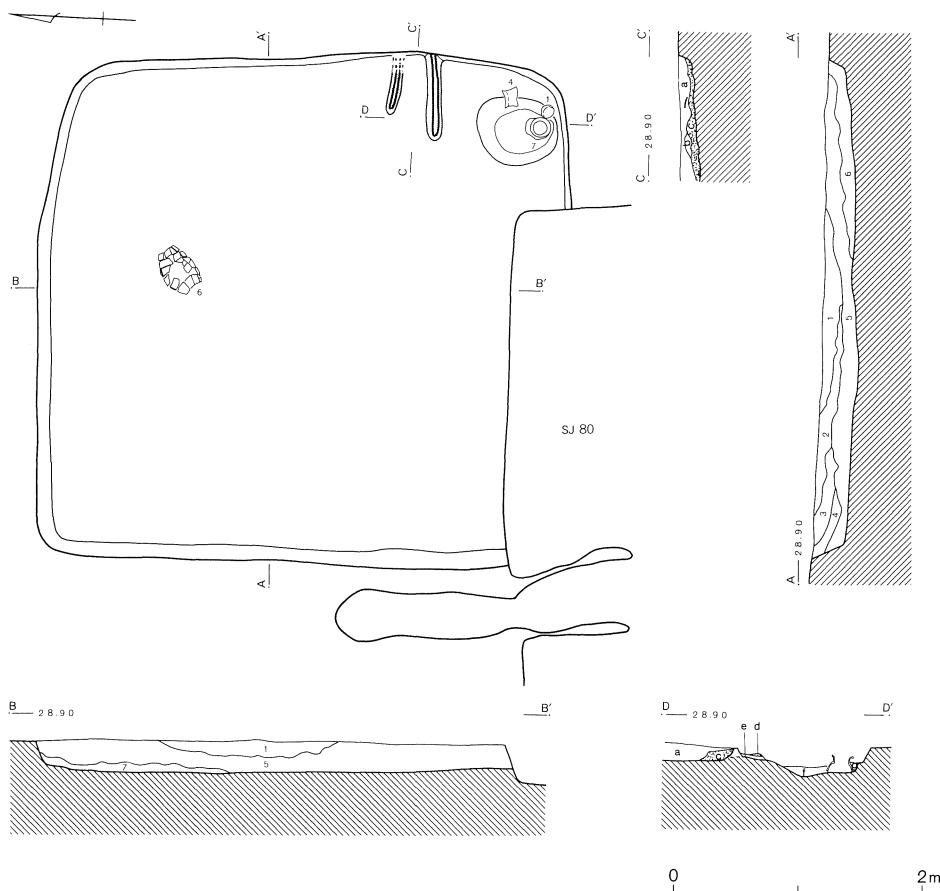
遺物の出土は床面上と覆土中からとにわけられる。床面上からは西隅で16の小型甌、東隅のピット周辺で1・2の壺、9の大型壺が出土した。これ以外に、カマド前面左側では赤色顔料の散布がみとめられ、南西隅には台石が据えられていた。これに対して住居跡東半には炭化した上屋材が床面よりやや浮いて広がり、遺物はその上層から投棄された状態で出土した。13の支脚もカマドからの出土ではなく、後者のうちに含まれる。土器以外にも同様な状態で獸骨片が3点出土したことが特記される。

### 第82号住居跡

かー4グリッドに位置する。第80号住居跡に南壁の大半を切られていた。規模は長軸長4.00m、短軸長3.80m、面積約15.2m<sup>2</sup>、深さ0.25mで、主軸方向はN-84°-Eである。全体的には各壁がわずかに膨らみ、隅丸長方形様である。壁の立ち上がりは急であるが、床面は地山砂層に掘り込まれており、四壁から中央へ向かって緩やかな傾斜を有していた。カマド右側の南東隅で径64cm、深さ11cmとごく浅い皿状の貯蔵穴を検出した。しかし、壁溝・柱穴・ピットについては、これを確認できなかった。

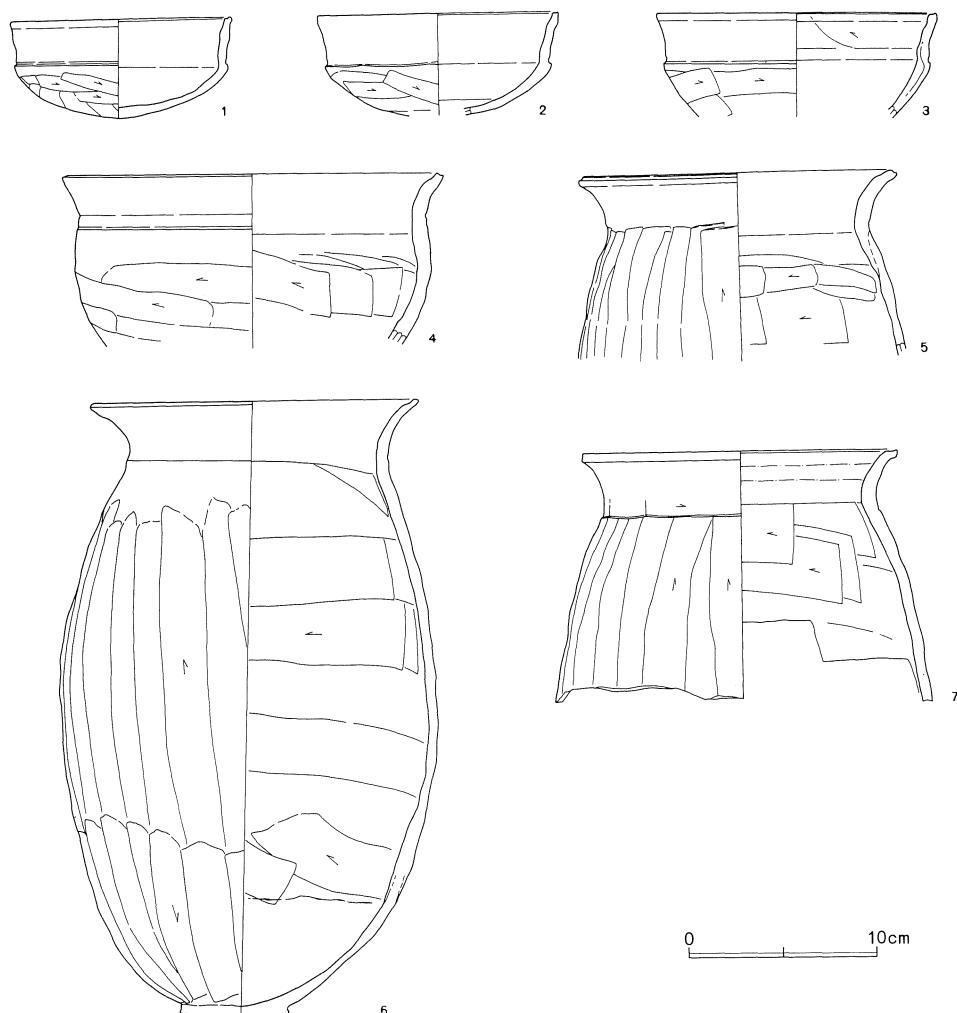
カマドは東壁のかなり南寄りに造られていた。袖は造り付けで、灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは68cmとかなり長いのに対し、燃焼部の幅は21cmときわめて狭い。火床面は壁外に向かってだらだらと上昇し、直立する奥壁に達する。火床面全体には灰の堆積が見られた。煙道部は検出できなかったが、これは本来的に備わらなかつものではなく、流失してしまったものと思われる。右袖の外側には薄く灰の堆積が観察された。

遺物は少量であり、かつ完存するものは見られない。貯蔵穴周辺からは、これに落ち込むような状態で1の壺、7の甕、4の鉢破片が出土した。これら以外では、住居の中央寄りで6の甕が床面よりやや浮いて出土したにすぎない。7の甕は上半部を器台に転用したものである。また、4の鉢は2次加熱を受けている。



- |                 |                   |                                           |
|-----------------|-------------------|-------------------------------------------|
| 1 純黄褐色(10YR4/3) | 砂質。微量の炭化物・焼土粒を含む。 | カマド                                       |
| 2 鈍黄褐色(10YR4/3) | シルト質。微量の炭化物を含む。   | a 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。炭化物、少量の焼土粒を含む。全体に暗い。 |
| 3 灰黄褐色(10YR4/2) | シルト質。微量の炭化物を含む。   | b 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。焼土ブロックを含む。天井の崩落。     |
| 4 純黄褐色(10YR4/3) | シルト質。細砂ブロックを含む。   | c 灰黄褐色(10YR4/2) 炭化物層。砂質シルトとの混合層。          |
| 5 鈍黄褐色(10YR4/3) | 砂質。微量の炭化物・焼土粒を含む。 | d 黒褐色(10YR3/1) 灰層。微量の炭化物を含む。              |
| 6 灰黄褐色(10YR4/2) | 砂層。少量の炭化物を含む。     | e 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。混入物なし。               |
| 7 灰黄褐色(10YR4/2) | 砂層。炭化物を含む。        | f 黑褐色(10YR3/1) 砂層。焼土ブロックと黒色との混合層。         |
|                 |                   | g 灰白色(10YR8/1) 砂質。壁面からの崩落。                |

第245図 第82号住居跡



第246図 第82号住居跡 出土遺物

第82号住居跡出土土器観察表

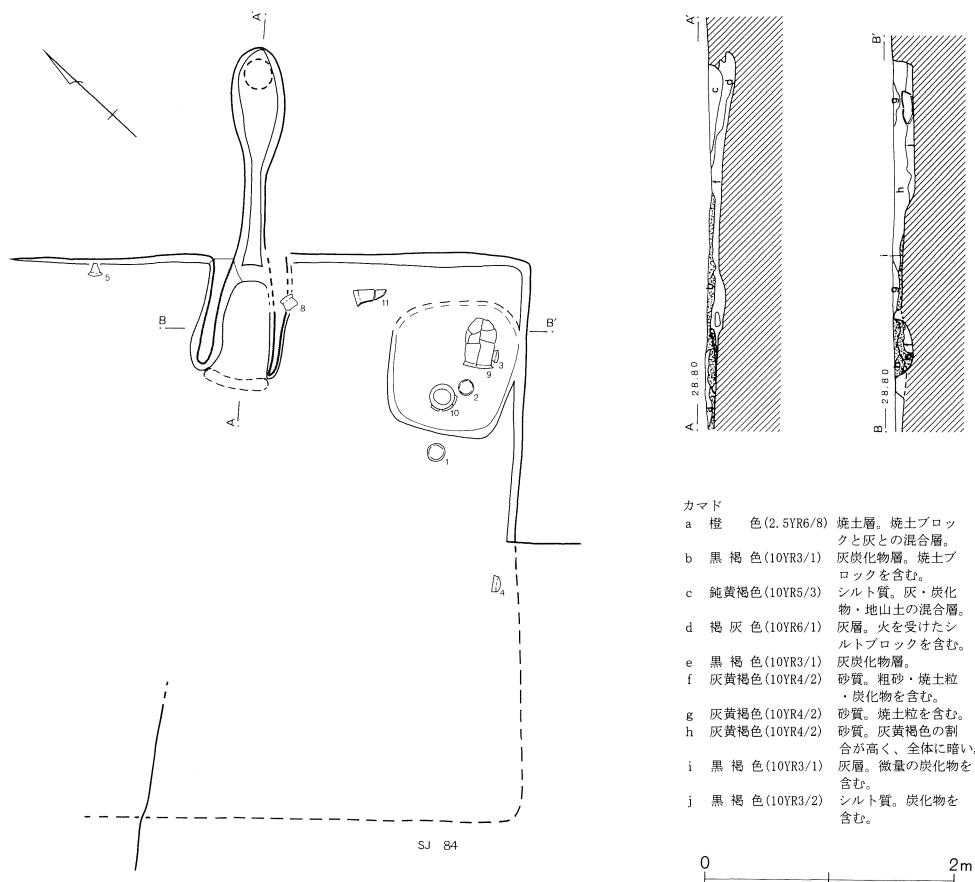
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	
1	壺	11.7	5.2		RW	A	淡赤橙	90	No. 2	
2	壺	(12.8)	(5.5)		RWW'	B	浅黄橙	40		
3	壺	(14.8)	(5.5)		RW	A	橙	25		
4	鉢	(20.2)	(9.2)		RWBH	A	淡橙	30	No. 1 火に掛けた痕跡有り	
5	甕	(16.9)	(10.0)		RWB	A	淡橙	40		
6	甕	17.4	32.2	5.6	RW	A	灰白	80	No. 4	
7	甕	16.7	(13.0)		RWB	A	橙	100	No. 3 転用器台	

### 第83号住居跡

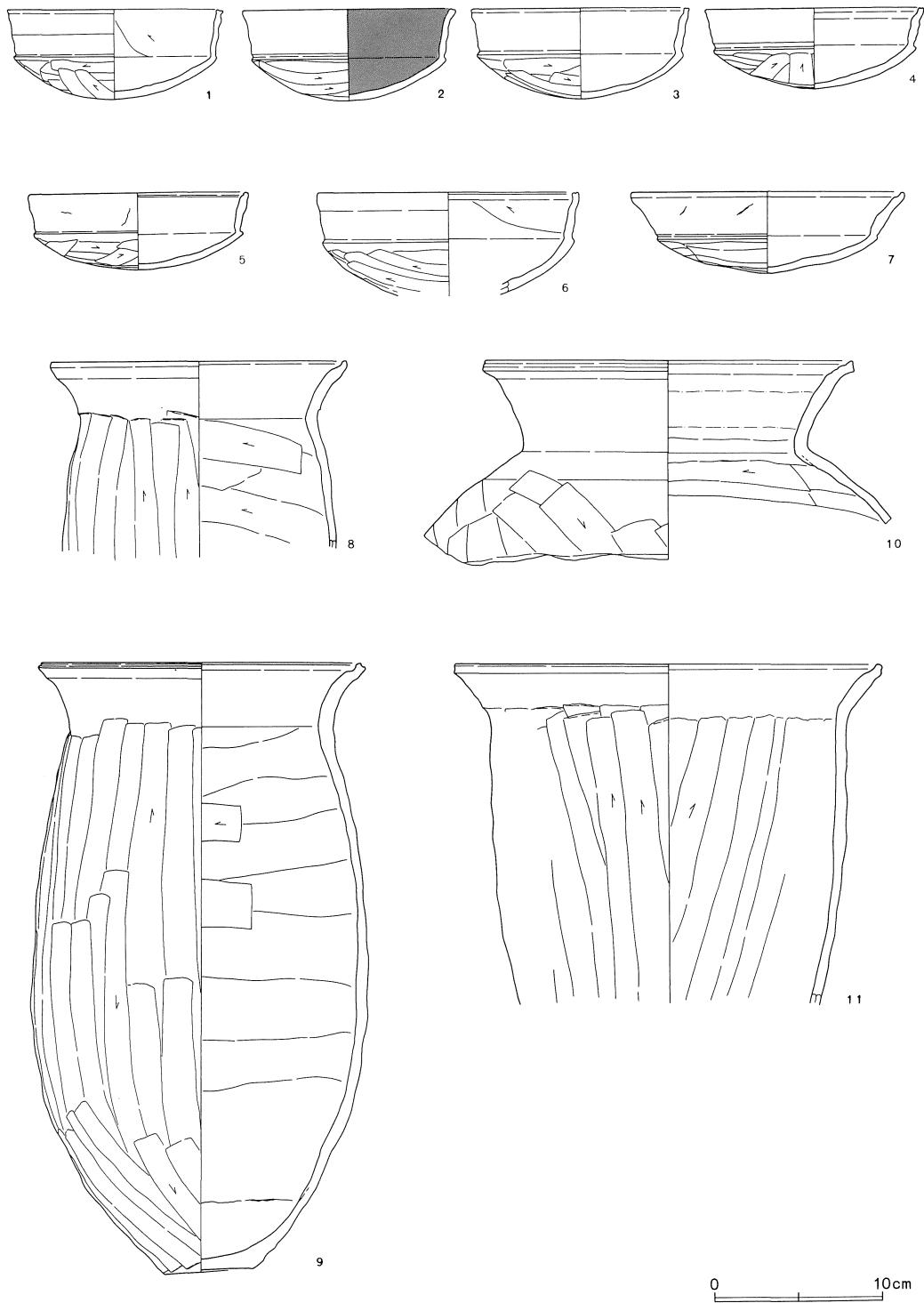
かー4グリッドに位置する。第84号住居跡の北隅部を切っていた。北東壁と南東壁の東半をのぞいて壁面の大部分を消失するが、カマドの並行軸長4.40m、深さ0.10mで、主軸方向はN-49°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、カマド右側の東隅において東側の掘り込みが不明瞭な貯蔵穴を検出した。径103cm、深さ8cmで、底面は平坦である。このほかに、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北東壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。中軸線は壁に対して直交せず、南に偏向していた。左袖の長さは75cmで、燃焼部の幅は45cmである。底面に粘土は貼っていなかつたが、焚口部には粘土による低い土手がみとめられた。煙道は幅19cm、長さ172cmで、地山を水平に堀り抜き、燃焼部奥壁から152cmのところに煙出口をもつものと考えられる。右袖の外側には灰層があった。

遺物はカマド周辺と貯蔵穴周辺から出土した。特に貯蔵穴内からは2の壺、10の壺、9の甕がセットで出土したが、10は壺からの転用器台である。2の壺は正立して出土したが内面に樹脂が付着している。



第247図 第83号住居跡



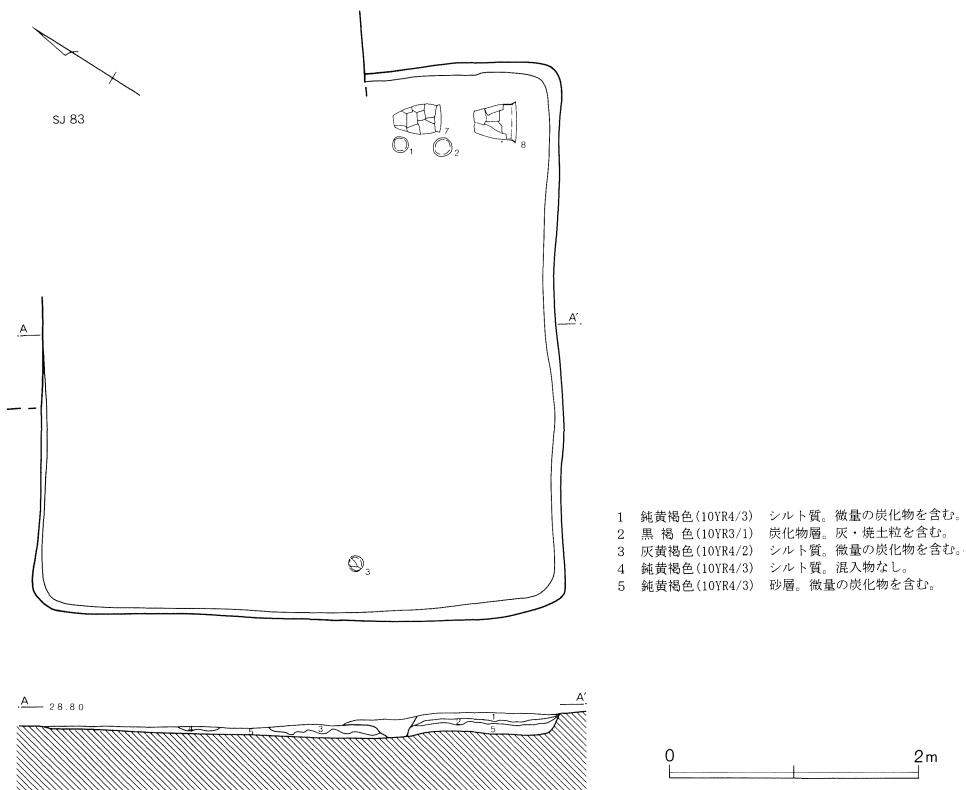
第248図 第83号住居跡 出土遺物

### 第83号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.9	5.4		RW	A	鈍橙	100	No.4
2	壺	12.8	5.5		RWB	A	橙	100	No.6 内側全面樹脂付着
3	壺	13.1	4.5		RW	A	橙	60	No.8
4	壺	(13.1)	(4.8)		RW	A	橙	30	
5	壺	(13.0)	(5.4)		RWB	A	橙	30	No.1
6	大型壺	(15.7)	(6.2)		RW	A	橙	30	
7	壺	(16.2)	(4.8)		RW	A	橙	25	
8	甕	(17.6)	(11.5)		WB	A	灰白	20	No.2
9	甕	19.5	36.1	5.3	RWB	A	淡橙	95	No.7 木葉底
10	壺	22.2	(11.8)		RWB	B	橙	90	No.5 転用器台
11	甕	(25.5)	(20.1)		RWB	A	橙	10	No.3

### 第84号住居跡

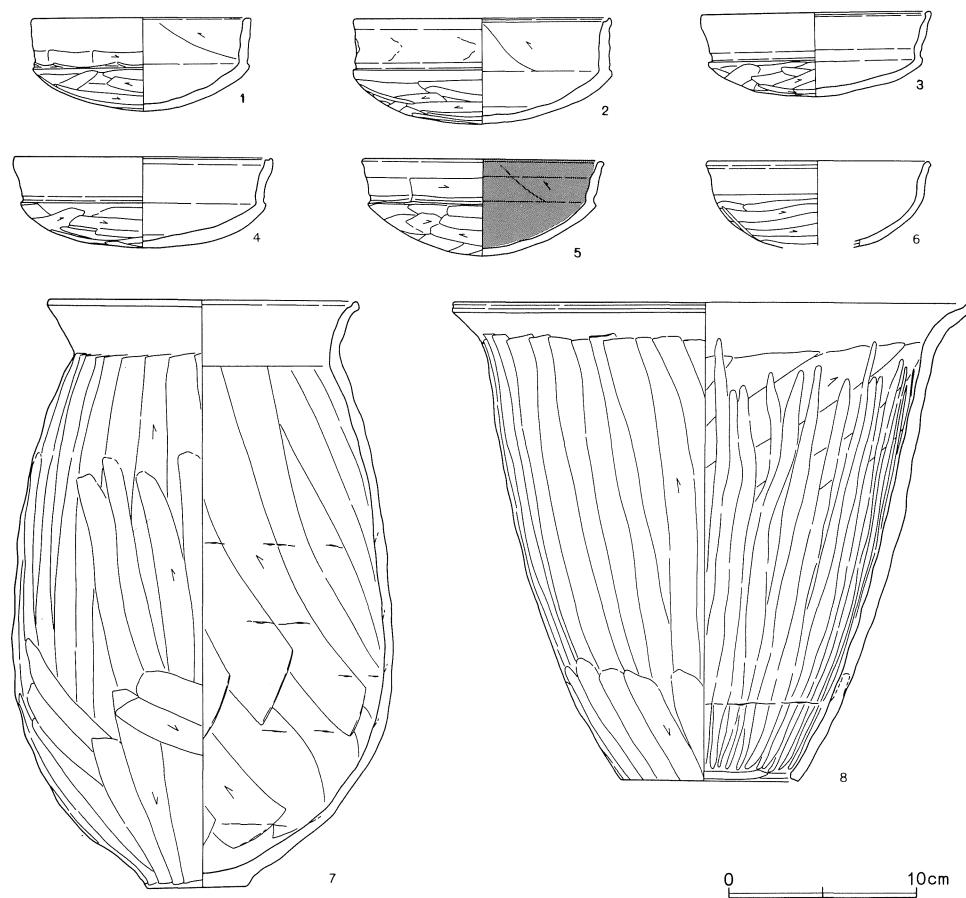
か-4 グリッドに位置する。第83号住居跡に北隅 4 分の 1 を切られていた。規模は長軸長 4.20 m、短軸長 4.10 m、深さ 0.17 m で、面積は 17.2m<sup>2</sup> 程となろう。カマドは第83号住居跡に破壊されたためか、その痕跡すら確認できなかった。仮に、北東壁に造られていたものと考えると、主軸方向は N -57° - E となる。床面は地山砂層中に掘り込まれ、わずかに南へ傾斜していた。壁溝・貯蔵穴・柱



第249図 第84号住居跡

穴・ピットは確認できなかった。

遺物は東壁下より1・2の壺、7の甕、8の甌がまとまって出土した。3の壺は覆土中からの出土である。5の壺も覆土中からの出土であるが内面に樹脂が付着しており、第83号住居跡との関連を考えられる。



第250図 第84号住居跡 出土遺物

#### 第84号住居跡出土土器観察表

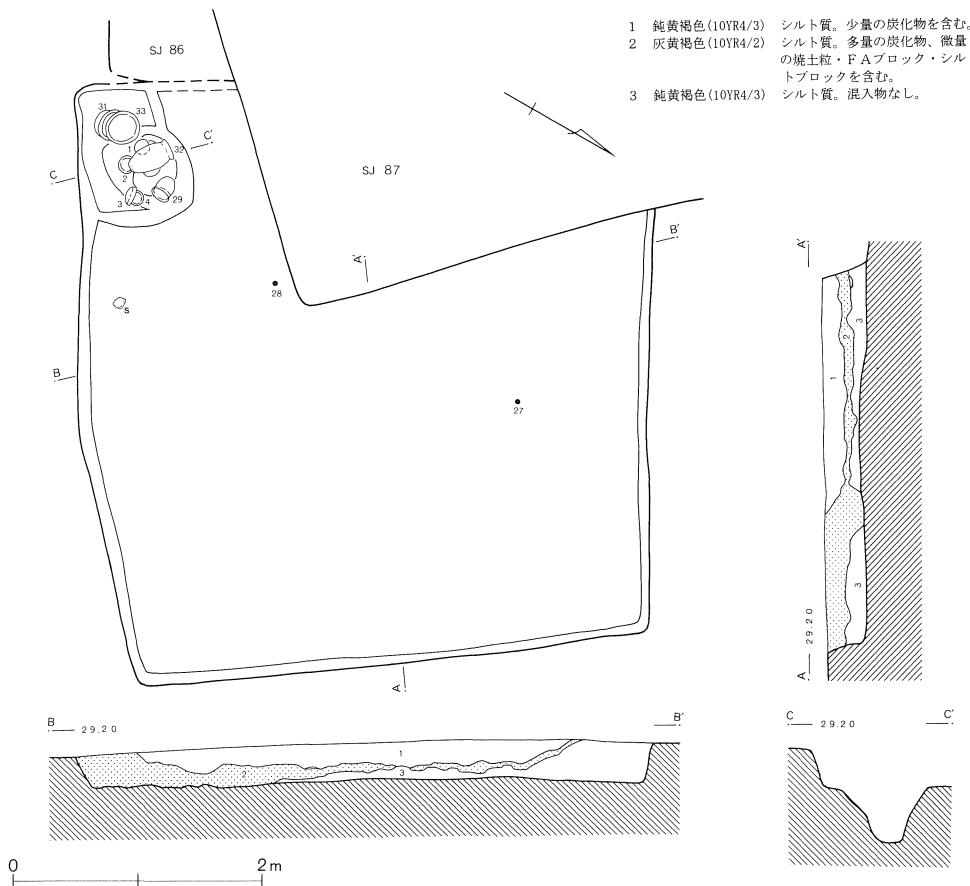
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	11.7	5.0		RW	A	橙	100	No. 2
2	壺	13.6	5.6		RW	A	橙	100	No. 3
3	壺	12.2	4.4		WB	A	橙	100	No. 6
4	壺	13.6	4.8		RW	A	淡赤橙	60	
5	壺	(12.8)	(5.1)		RW	A	淡赤橙	45	内面に樹脂付着
6	壺	(11.8)	(4.5)		RWB	A	橙	25	
7	甕	16.6	30.8	5.2	RW	A	灰白	95	No. 4
8	甌	27.5	25.0	9.4	RW	A	橙	80	No. 5

## 第85号住居跡

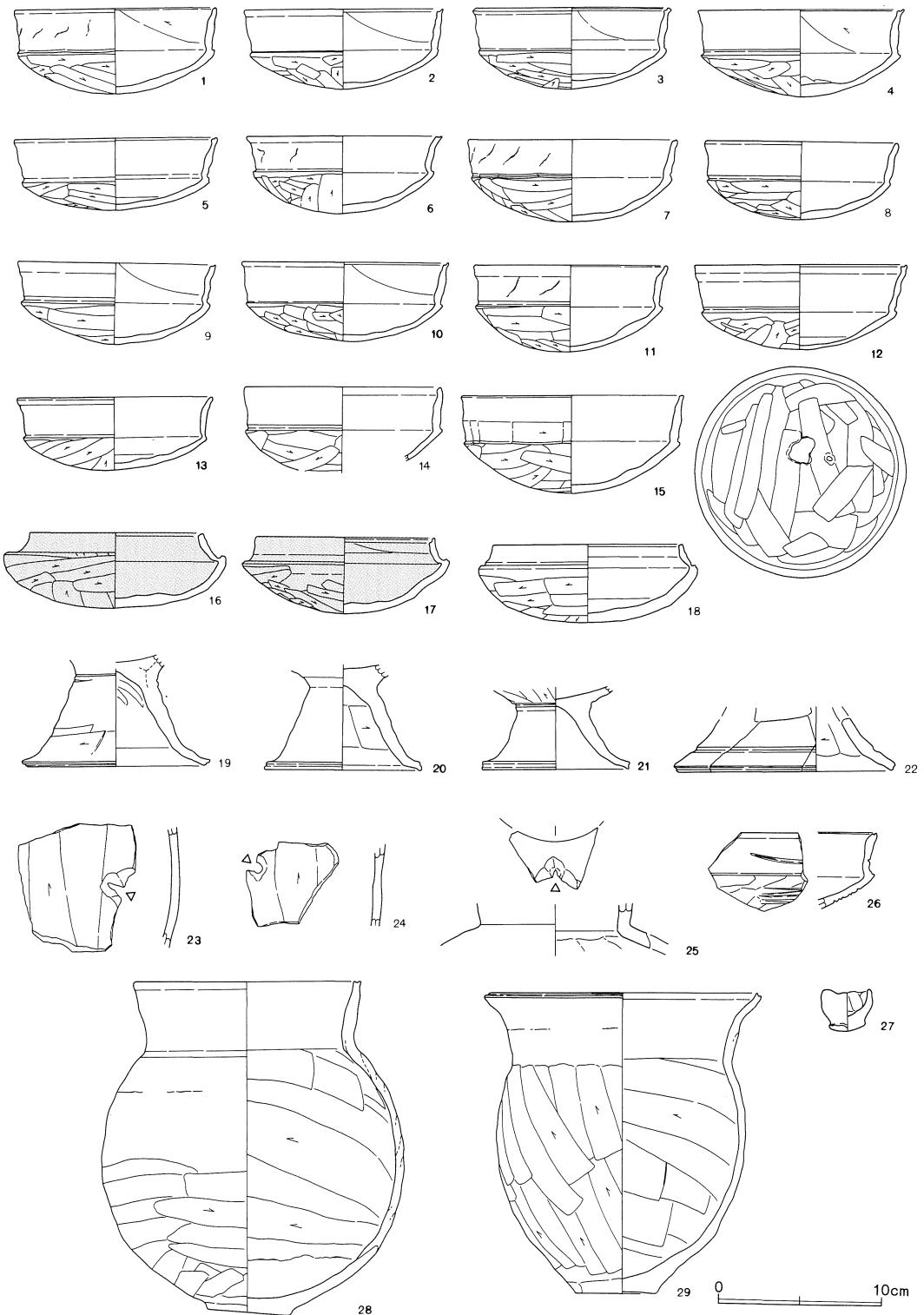
かー4グリッドに位置する。第86号住居跡を切り、第87号住居跡に切られていた。規模は長軸長4.56m、短軸長4.37m、深さ0.31mで、主軸方向はN-121°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、南隅において径82cm、深さ45cmで、壁との間にテラスをもつ貯蔵穴を検出したが、そのほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土は2層中にFAブロックが含まれていたが、堆積が乱れており、人為的な埋め戻しが考えられる。

カマドは第87号住居跡によって破壊された南西壁に造られたと見られる。

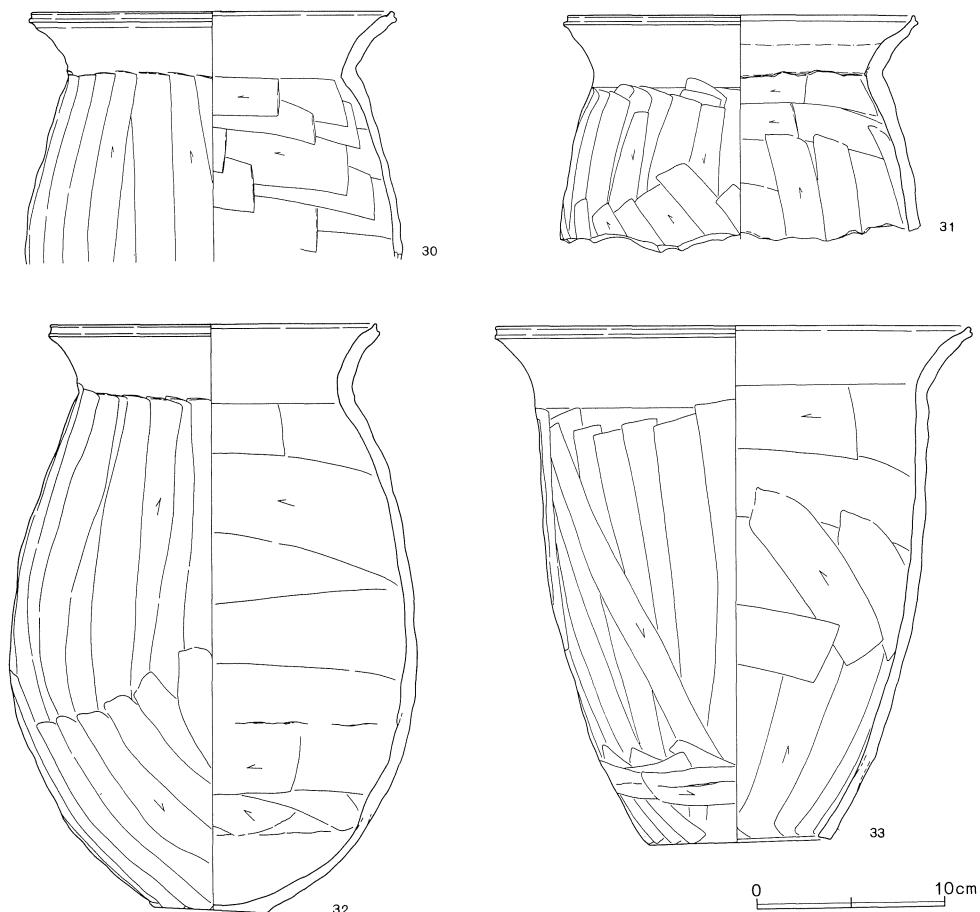
遺物は貯蔵穴内からまとめて出土した。1・2・3・4の壺、29の小型甕、32の甕は貯蔵穴内に落ち込むような状況で出土したが、5の壺は29の小型甕の中に入れ子になっていた。テラス上からは31の甕からの転用器台上に33の甕が乗せられていた状態で出土した。28の壺は3層上面から出土したが、全周する口縁部のみを倒立させ、その上に胴部破片の内面を上向きにして重ね置いた状態であり、埋め戻しの途中で意図的に据え置かれたと見られる。ほかは1・2層を中心とした覆土中からの出土であり、12の穿孔壺、22の透し孔をもつ高壺脚部、23・24・25の打撃痕土器片、26の擦切痕土器片、27の手捏土器など特殊な土器が目立つ。



第251図 第85号住居跡



第252図 第85号住居跡 出土遺物（1）



第253図 第85号住居跡 出土遺物（2）

第85号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.3	5.2		RWB	A	橙	100	No. 9
2	壺	12.2	4.9		RWB	A	橙	95	No. 5
3	壺	12.1	5.0		RWB	A	橙	100	No. 6
4	壺	12.6	5.3		RWB	A	鈍橙	100	No. 7
5	壺	12.4	4.4		RW	A	明赤褐	100	No. 8
6	壺	11.9	4.7		RW	B	橙	100	中層
7	壺	12.9	5.0		RWB	B	橙	70	上層
8	壺	11.9	4.7		RWB	B	橙	70	上層
9	壺	12.1	4.9		RW	A	橙	100	
10	壺	12.7	4.7		RW	B	明赤褐	60	
11	壺	11.9	5.3		RW	B	赤褐	70	
12	壺	13.0	5.2		RW	A	橙	100	穿孔土器
13	壺	11.9	4.4		RWB	B	橙	70	
14	壺	12.1	(5.1)		RW	B	橙	70	口縁部内外面に煤付着

第85号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
15	壺	13.6	6.0		RW	B	橙	50	
16	壺	11.6	4.6		W	B	鈍赤褐	95	上層 内外面黒色処理
17	壺	11.0	4.6		RW	B	黒褐	100	上層 内外面黒色処理
18	壺	11.6	4.7		W	B	明赤褐	40	
19	高壺		6.5	11.5	RW	A	橙	80	上層
20	高壺		(6.4)	9.8	W	A	橙	70	
21	高壺		(5.0)	9.1	WB	A	橙	90	上層
22	高壺		(3.5)	(13.6)	RWB	B	橙	20	脚部に方形透孔有り
23	甕				RWB	B	灰白	破片	刃物打撃痕土器片
24	甕				RWB	B	鈍黄橙	破片	刃物打撃痕土器片
25	壠				RWB	B	橙	破片	刃物打撃痕土器片
26	壺				RW	B	橙	破片	上層 擦切痕
27	手捏土器	2.9	2.5		W	A	橙	100	
28	壺	13.9	20.0	5.0	RW	A	橙	90	
29	小型甕	17.0	18.2		RWB	A	灰白	100	No.4
30	甕	19.3	(13.2)		RWB	B	鈍橙	60	上層
31	甕	18.5	(11.6)		RB	A	鈍器橙	100	No.2 転用器台
32	甕	17.6	30.9	6.0	RB	A	淡橙	95	No.3
33	甕	25.3	27.2	9.6	RW	A	淡赤橙	95	No.1

### 第86号住居跡

かー4グリッドに位置する。第85・87号住居跡に大部分を切り込まれていたため、住居の東隅から南東壁の一部が残存したのみで、規模や全体の形状は不明である。

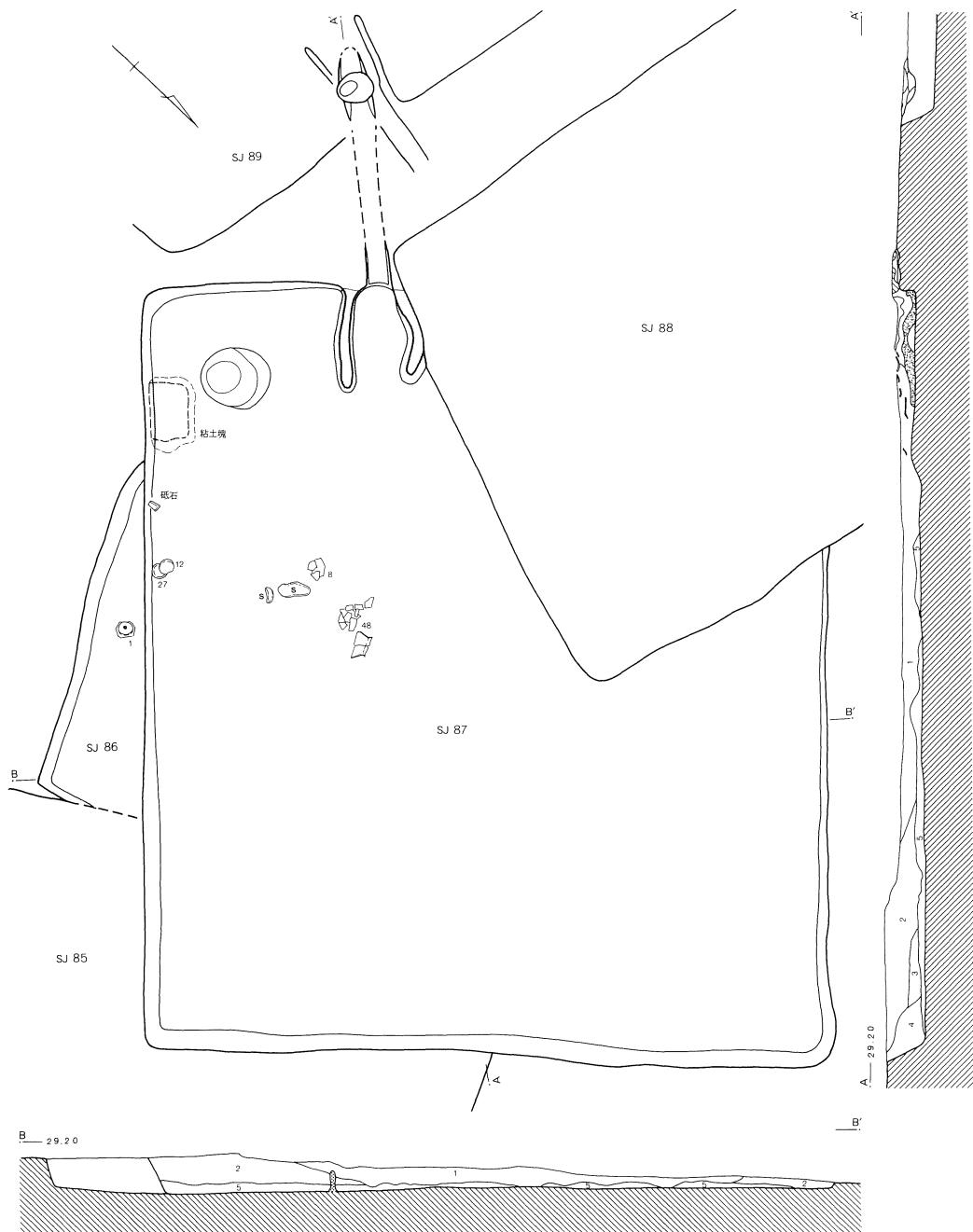
遺物は覆土中から1の高壺が出土したのみであった。

### 第87号住居跡

かー4グリッドに位置する。第85号・第86号・第89号住居跡を切り、第88号住居跡に切られていた。このため西側の4分の1ほどが破壊されていた。規模は長軸長6.35m、短軸長5.57m、深さ0.35mで、主軸方向はN-137°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、カマド左側で径119cm、深さ86cmの円形の貯蔵穴を検出した。このほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

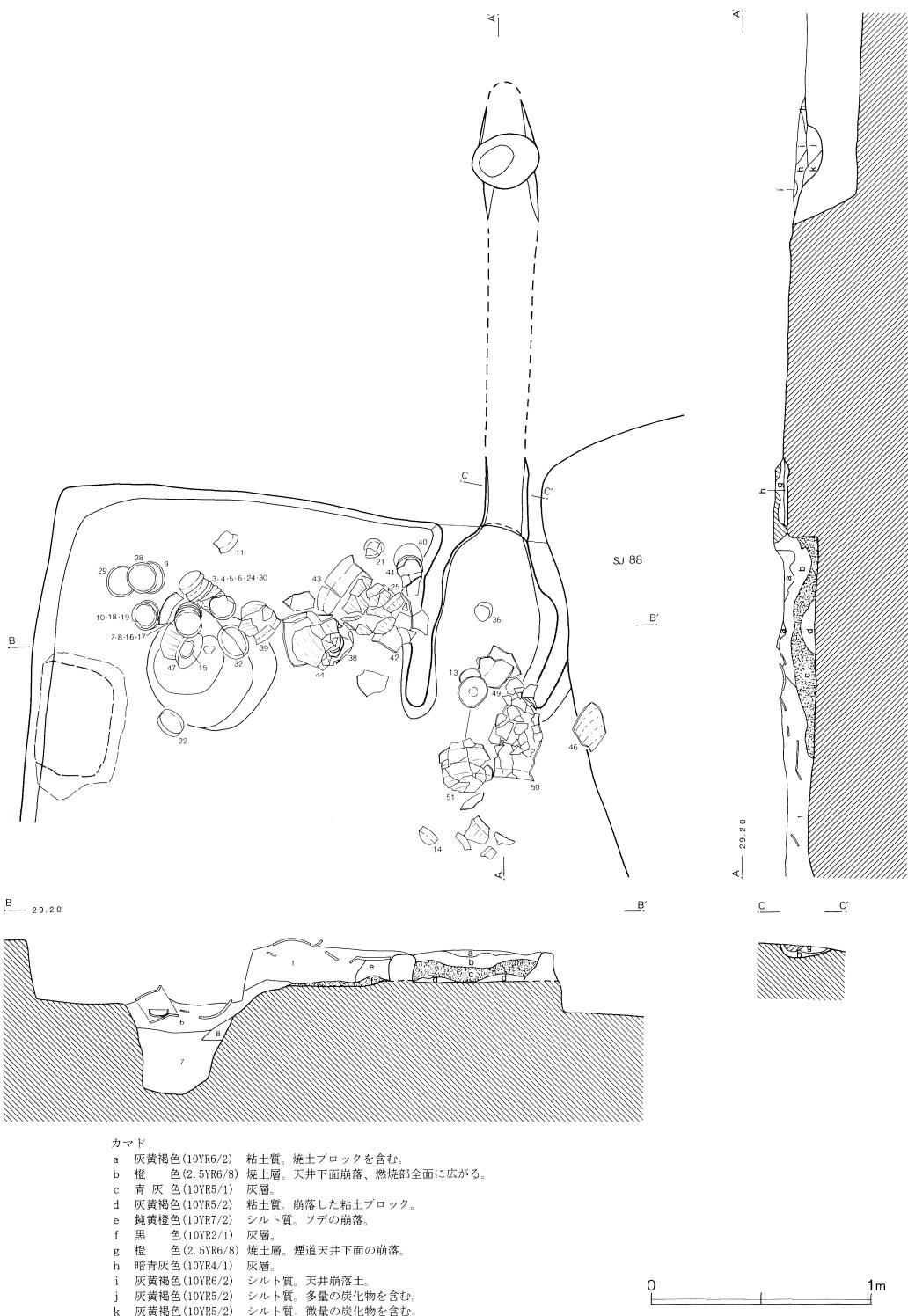
カマドは南西壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは90cmで、燃焼部の幅は51cmである。煙道は大部分が消失していたが、幅23cm、長さ200cmで、地山を水平に掘り抜き、燃焼部奥壁から175cmのところに煙出ピットをもっていた。支脚位置は左寄りで、土製支脚が使用されていた。左袖の外側には灰層があった。

遺物は出土位置によって4大別できる。住居中央寄りから南東壁際にかけては、48の甕、12・27の壺、砥石、擦痕のある平石、台石が出土した。貯蔵穴脇には60cm×35cm、高さ14cmの土壙状に固められた粘土塊もあり、工房的な性格も考えられる。2点の壺は27を下にして合わせ口状態だった。カマド燃焼部および焚口部周辺からは49・50・51の甕、13・14の壺が出土した。3点の甕の底部位

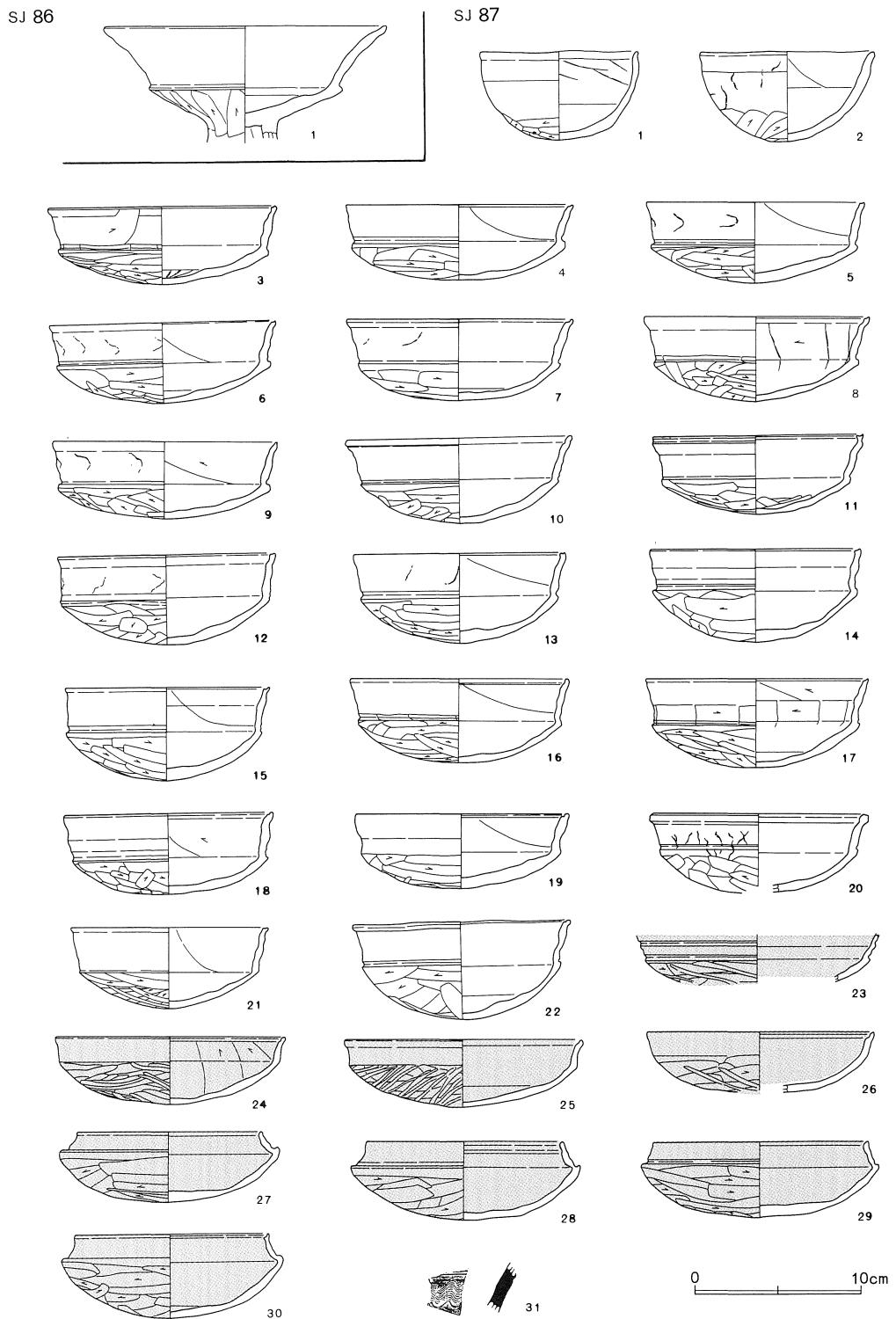


- |                 |                           |
|-----------------|---------------------------|
| 1 褐灰色(10YR6/1)  | シルト質。多量の炭化物・焼土粒・土器片・礫を含む。 |
| 2 純黄橙色(10YR7/2) | シルト質。炭化物を含む。              |
| 3 褐灰色(10YR6/1)  | シルト質。多量の炭化物を含む。           |
| 4 灰黄褐色(10YR6/2) | シルト質。灰白色シルトブロックを含む。       |
| 5 純黄橙色(10YR7/2) | 砂質。液状化による地山砂混合層。          |
| 6 灰白色(10YR7/1)  | 粘土質。土器片を含む。               |
| 7 灰黄褐色(10YR6/2) | シルト質。微量の炭化物・土器片を含む。       |
| 8 純黄橙色(10YR7/3) | 砂質。混入物なし。                 |

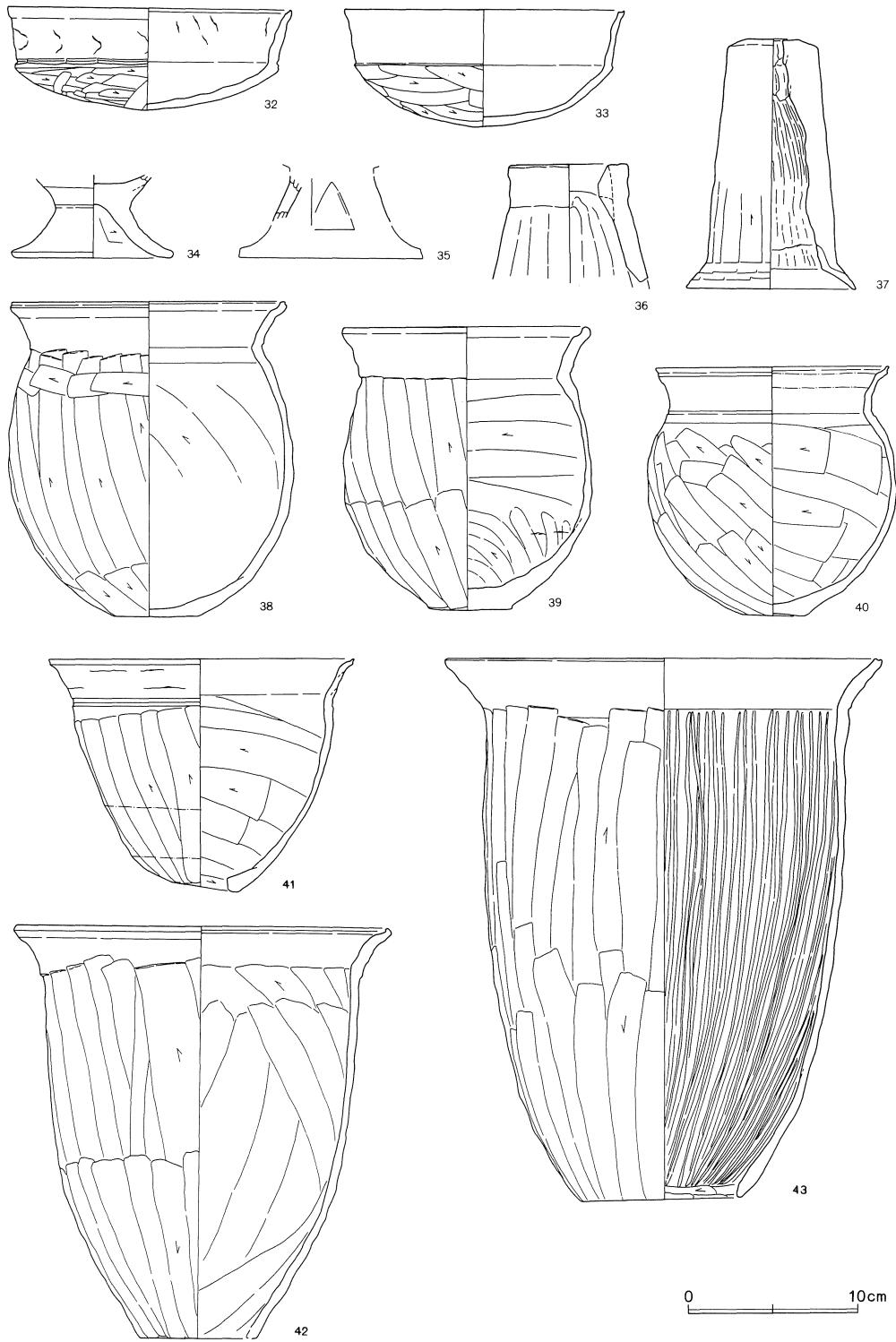
第254図 第86・87号住居跡



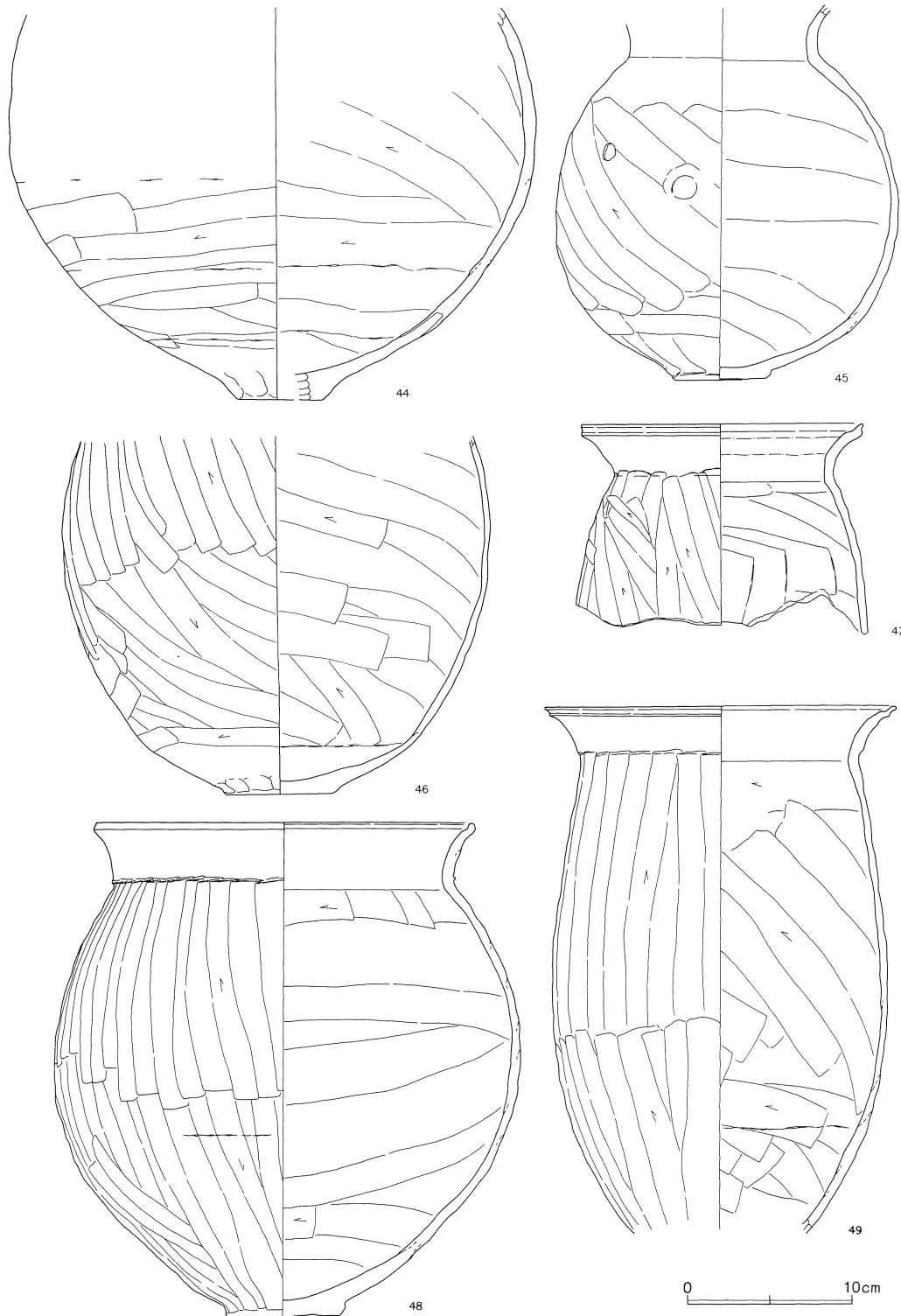
第255図 第87号住居跡 カマド



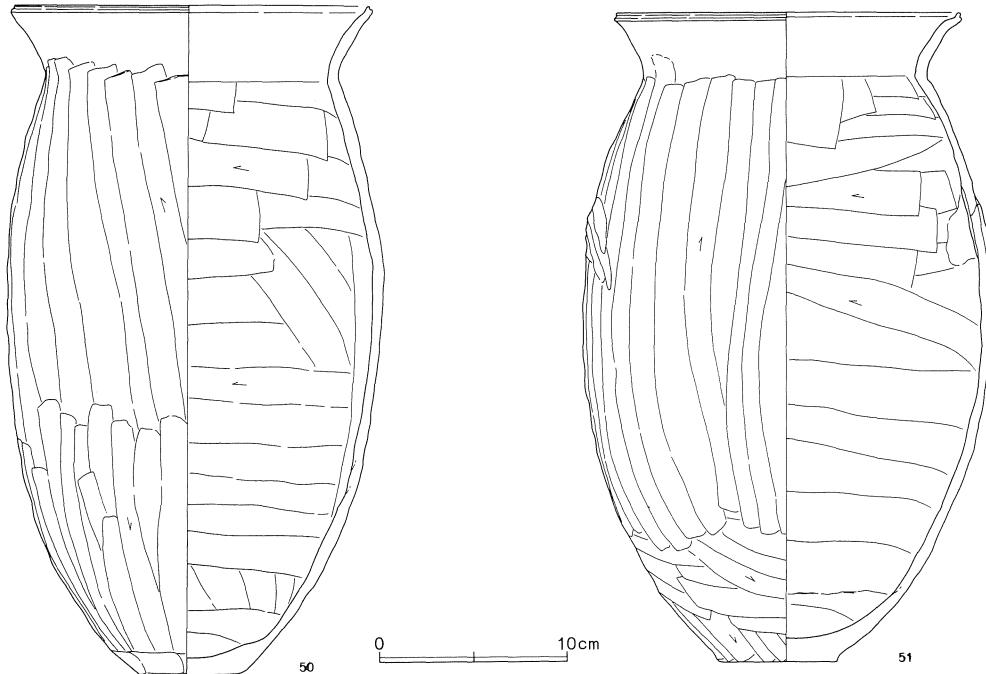
第256図 第86・87号住居跡 出土遺物（1）



第257図 第87号住居跡 出土遺物（2）



第258図 第87号住居跡 出土遺物（3）



第259図 第87号住居跡 出土遺物（4）

置から見て、50と51は焚口寄りに横並列に、49がその奥に掛けられていたと考えられる。13の壙は51の甕底部下より出土した。カマド左袖と貯蔵穴の間には中型の土器が集中して出土した。左袖の付け根では40の小型甕の上に41の小型甕が乗った状態だった。42と43の甕2点は42の中に43が差し込まれ横転していたが、本来は43の口縁部を下にして倒立重ねされていたと考えられる。この甕と44の壺の下からは38の小型甕、21・25の壙が出土した。貯蔵穴周辺には数点の壙が重ねられた4つのブロックがみとめられた。各ブロックを下位から上位の順に列挙すると、6・5・30・4・3・24、8・7・17・16、19・10・18、9・28となる。1の小型壙、32の大型壙、39の小型甕、47の転用器台は貯蔵穴の中に落ち込むように出土したが、47の中には15の壙が入れ子になっていた。以上のほか、31は須恵器壺の口縁部片であるが、第92号住居跡で同一個体の破片が出土している。33はカマド周辺出土の大型壙だが、内面に煤が付着していることから、火に掛けて使用されたと見られる。

#### 第86号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高壙	17.1	(6.8)		RW	B	橙	60	No.6

#### 第87号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壙	9.6	5.3		RWW'	B	鈍黃橙	70	
2	壙	10.6	5.4		RW	B	鈍橙	80	
3	壙	13.9	4.6		RWB	A	橙	100	No.31
4	壙	13.8	4.5		RW	A	橙	100	No.32

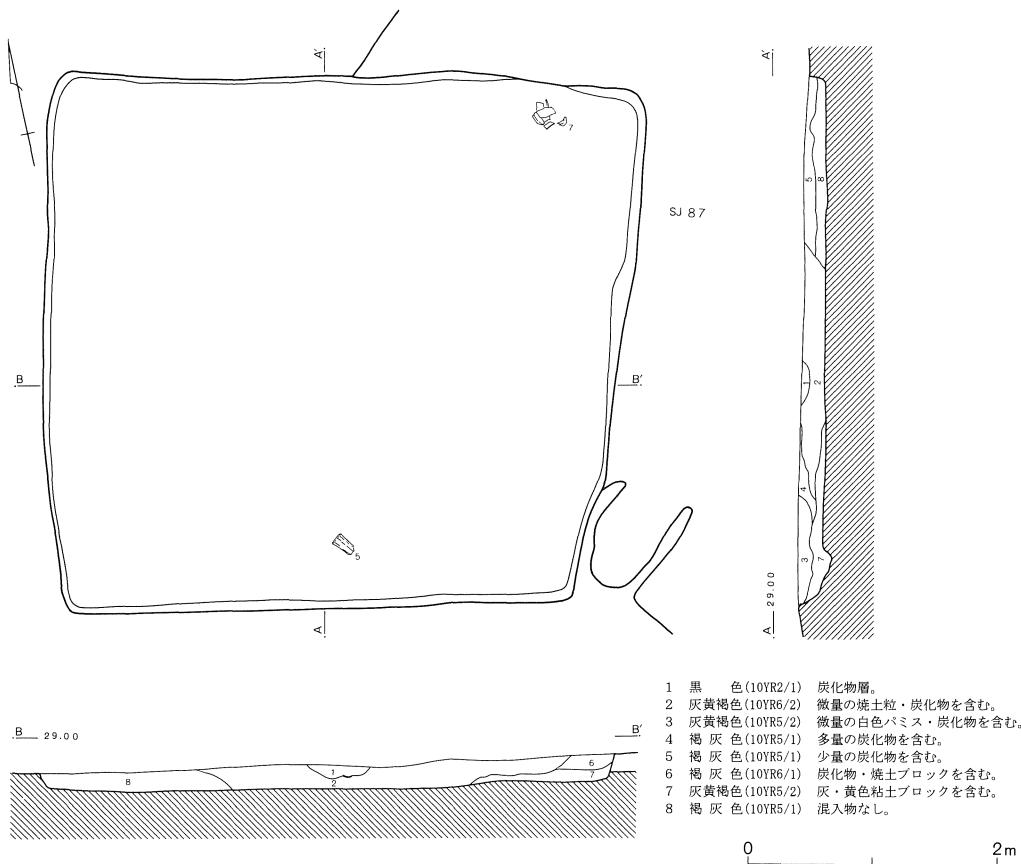
第87号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
5	壺	13.2	4.8		RW	A	橙	100	No.34
6	壺	13.7	4.8		RW	A	鈍橙	95	No.35
7	壺	13.8	4.8		RW	A	鈍橙	100	No.38
8	壺	13.6	5.1		W	A	橙	100	No.39
9	壺	13.6	4.6		RWB	A	橙	90	No.44
10	壺	13.7	5.1		RW	A	橙	100	No.41
11	壺	12.7	4.7		RWW'	A	橙	50	No.26
12	壺	13.2	5.3		W	B	鈍橙	90	No.7
13	壺	12.9	5.4		RW	A	橙	100	No.15
14	壺	12.8	5.5		RW	B	橙	60	No.16
15	壺	12.3	5.6		RW	A	橙	100	No.29
16	壺	13.3	5.0		RW	B	鈍橙	95	No.36
17	壺	13.5	5.3		RWB	A	橙	100	No.37
18	壺	12.7	4.8		RW	A	橙	80	No.40
19	壺	13.0	4.5		RW	A	橙	100	No.42
20	壺	(13.2)	(4.4)		RW	A	橙	20	カマド周辺
21	壺	12.0	4.8		RW	B	橙	60	No.20
22	壺	13.2	5.8		RW	A	橙	95	No.24
23	壺		(2.8)		W	B	黃橙	20	内外面黒色処理
24	壺	13.9	4.0		RW	A	鈍褐	100	No.30 内外面黒色処理
25	壺	14.5	4.0		RW	B	暗赤褐	60	No.48 内外面黒色処理
26	壺	(13.8)	(3.6)		RW	B	鈍黃橙	20	カマド周辺 内外面黒色処理
27	壺	11.2	4.2		RW	B	鈍橙	95	No.8 内外面黒色処理
28	壺	12.0	4.7		WB	A	鈍橙	100	No.43 内外面黒色処理
29	壺	13.1	4.5		RW	A	鈍褐	95	No.45 内外面黒色処理
30	壺	11.8	5.0		RW	A	橙	100	No.33 内外面黒色処理
31	壺				W	A	灰	破片	須恵器
32	大型 壺	16.9	6.0		WB	A	橙	100	No.27 口辺内外面に接合痕
33	大型 壺	16.6	6.9		RW	C	橙	70	カマド 内外面に煤付着
34	高 壺		4.9	9.6	RW	B	橙	70	
35	高 壺		(2.6)		RW	A	橙	15	脚部に三角形透し孔有り
36	支 脚	(7.0)	(7.0)		RWW'	C	鈍赤褐	25	No.17
37	支 脚		9.7	(10.0)	RW	A	橙	40	
38	小型 甕	16.4	18.5	5.1	RWB	B	浅黄橙	80	No.47
39	小型 甕	14.7	16.6	5.0	RB	B	鈍橙	70	No.25
40	小型 甕	13.8	14.6	3.7	RWB	A	鈍橙	90	No.19
41	甕	(18.1)	(13.3)	(4.0)	RW	A	鈍橙	40	No.18 胴部下位に磨滅帶
42	甕	(22.4)	(24.0)	(6.8)	RW	A	橙	45	No.21
43	甕	25.8	31.8	9.2	RWB	A	淡赤橙	90	No.22
44	壺		(23.6)	5.2	RWB	A	橙	70	No.23
45	壺		22.3	4.5	RW	B	淡赤橙	50	外方からの穿孔2か所 火に掛けた痕跡有り
46	壺		(21.5)	(6.4)	RWBH	A	淡橙	40	No.10・46 木葉底
47	甕	17.1	(12.1)		RWB	A	鈍橙	90	No.28 転用器台
48	甕	23.1	29.6	6.8	RWB	A	灰白	80	No.2
49	甕	(21.4)	(31.4)		RWB	A	灰白	20	No.11
50	甕	19.2	35.2	5.0	RWB	A	灰白	50	No.12
51	甕	(18.4)	(34.2)	(6.2)	RW	A	橙	40	No.13 焼成前の粘土上塗り補修有り

## 第88号住居跡

かー4グリッドに位置する。第87号住居跡の南西隅部を切り込んでいた。規模は長軸長4.61m、短軸長4.12m、深さ0.19mで、カマドは残存せず、位置を推定するための痕跡もみとめられないが、周辺の住居跡の傾向から北壁にカマドが造られたと仮定して、主軸方向をN-8°-Eとしておく。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土の堆積状況は乱れており、人為的に埋め戻したと考えられる。

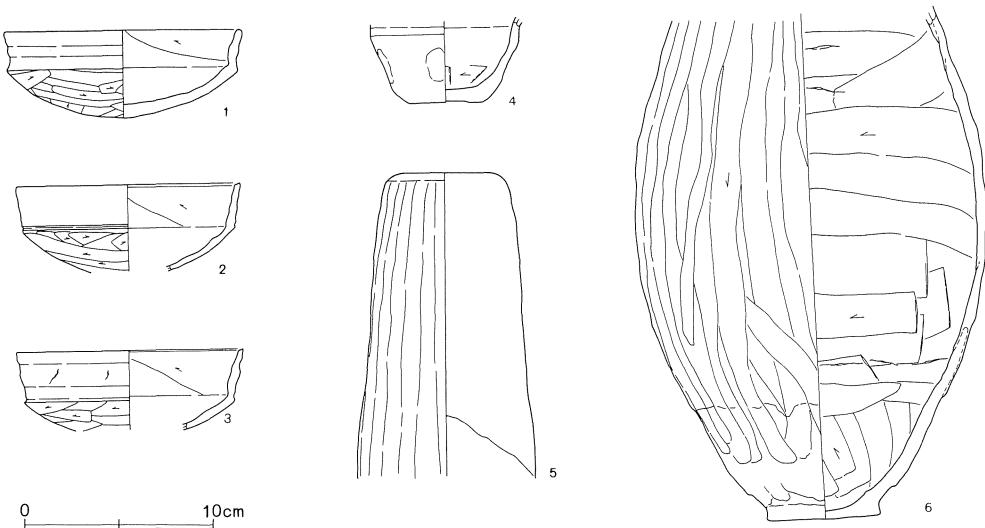
遺物の出土は少量であり、5の土製支脚と6の甕が床面上から出土した。



第260図 第88号住居跡

## 第88号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	4.6		RW	A	鈍黃橙	100	
2	壺	(11.9)	(4.6)		RW	B	橙	20	
3	壺	(12.0)	(4.2)		W	B	明赤褐	25	
4	手捏土器		(4.2)	(2.0)	RW	A	橙	20	
5	支脚	6.1	(16.0)	(6.0)	RWW'	B	鈍橙	50	No.1
6	甕		(26.6)			A	橙	20	



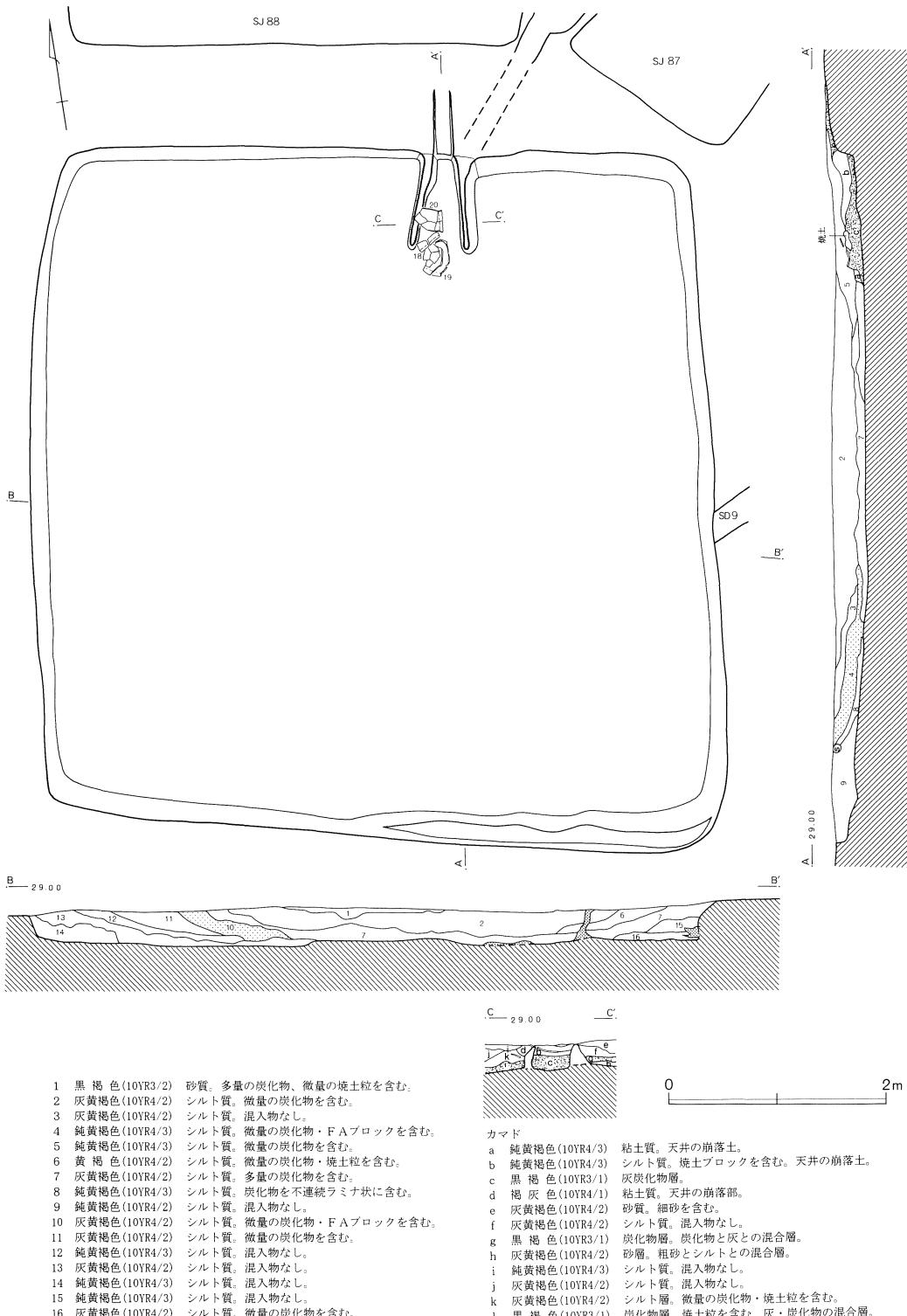
第261図 第88号住居跡 出土遺物

### 第89号住居跡

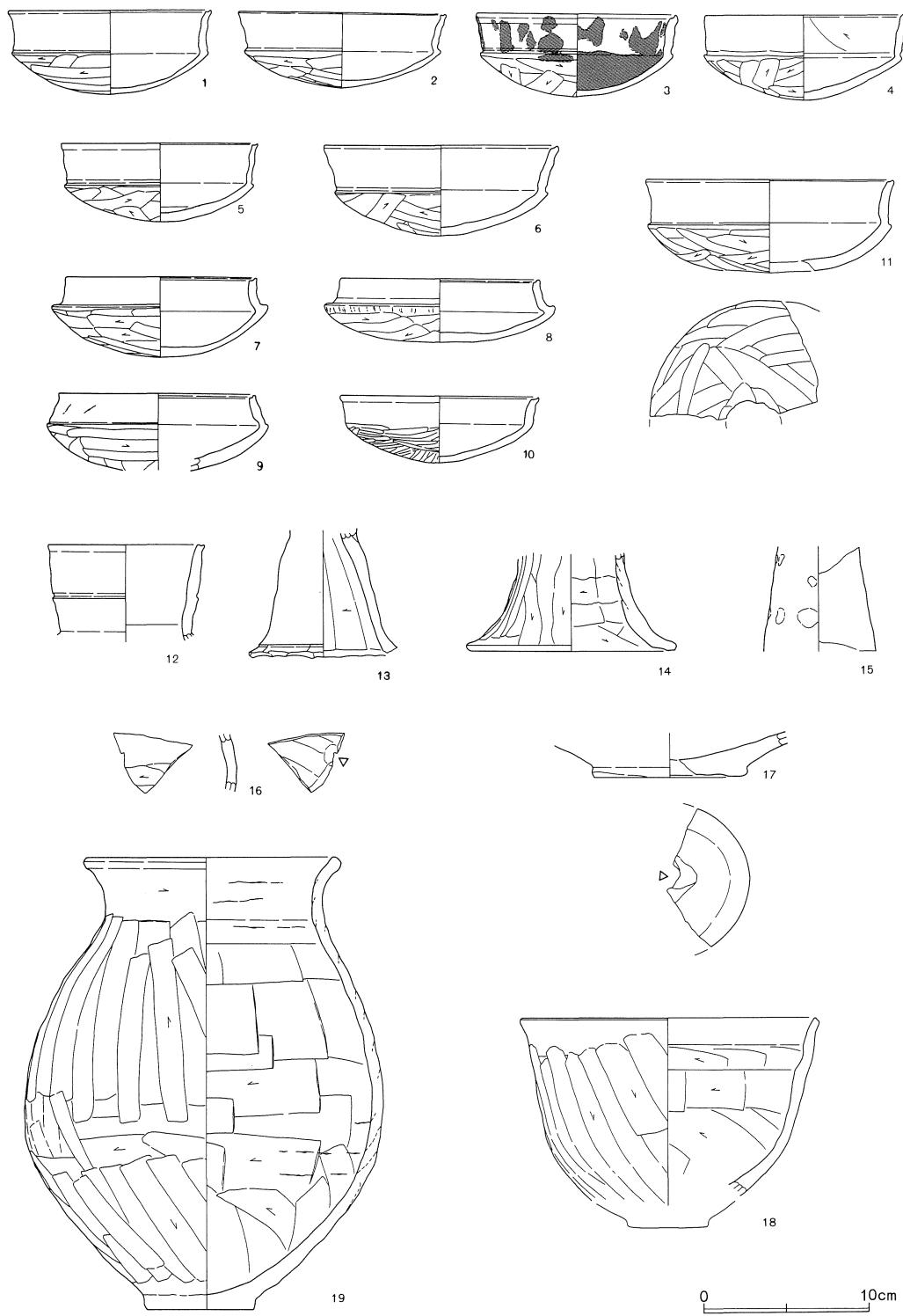
かー4グリッドに位置する。第87号住居跡にカマドを、また第9号溝に東壁をそれぞれの一部切られていた。全体は整った方形であるが、南壁の東半部は段を有しているため、やや膨らみ気味である。規模は東西、南北両軸長とも6.00m、面積36m<sup>2</sup>、深さ0.31mで、主軸方向はN-7°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれていたため、壁面の崩落と、液状化現象による攪乱がみとめられた。このため、西側では段差が生じていたほか、全面に凹凸が多く見られた。したがって、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土のうち、4層および10層中にはFAブロックが含まれされていた。

カマドは北壁わずかに東寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。袖はいくぶん開脚しており、「ハ」字状である。右袖は87cmと非常に長いのに対し、燃焼部は幅35cmとかなり狭い。火床面は概ね平坦で、奥部は一段高まっていた。灰の堆積はかなり厚く、特に中央では小山状に盛り上がっていた。煙道は幅17cm、長さ65cm以上で、傾斜をつけて掘られていた。左右両袖の外側には灰層があった。

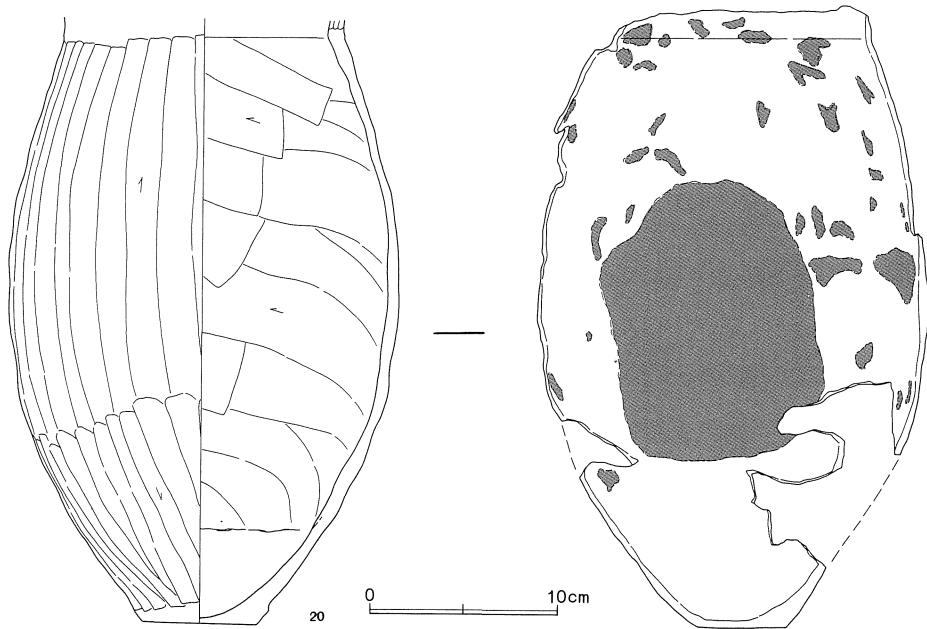
遺物は少量で、6・7の壺、19・20の甕、18の鉢がカマドからである以外は、いずれも覆土中からの出土である。特筆されるのは20の甕である。胴部を縦に半裁されたもので、その内面には樹脂が広範に付着している。内面を上に向けてカマドから出土したことを重視すれば、樹脂精製、ないしは樹脂塗布に用うべく、このように加工された器と考えられる。また、3の壺にも内外面に樹脂が付着している。7・8・9・10の形態の壺には、通常黒色処理の施されるものが多いが、これらにはその処理が行なわれていない。11は大型壺で、焼成後に底面中央を穿孔されている。13の高壺脚部は裾部が故意に打ち欠かれている。16と17はともに壺の小破片であるが、割れ口には打撃痕が見られる。



第262図 第89号住居跡



第263図 第89号住居跡 出土遺物（1）



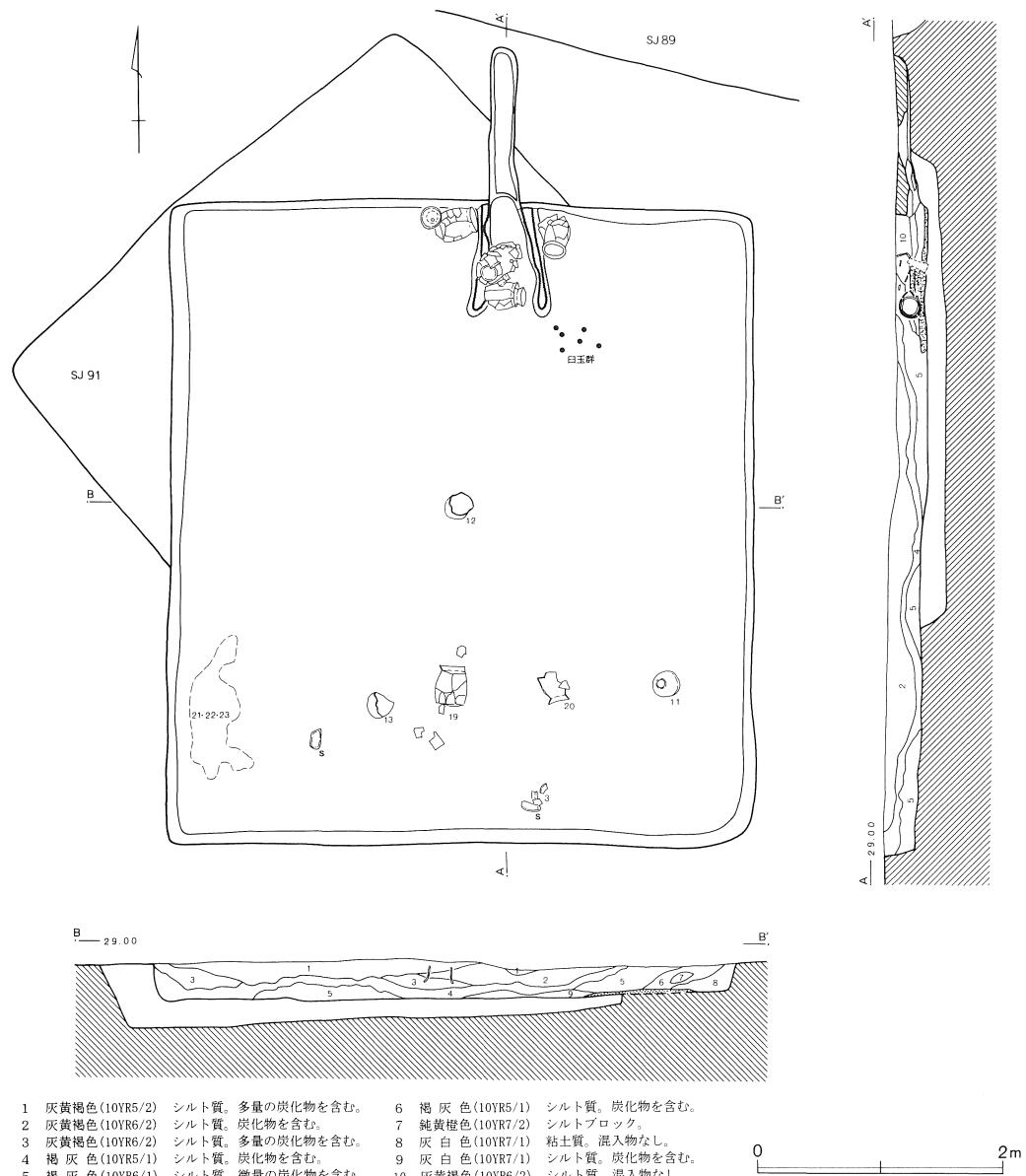
第264図 第89号住居跡 出土遺物（2）

第89号住居跡出土土器観察表

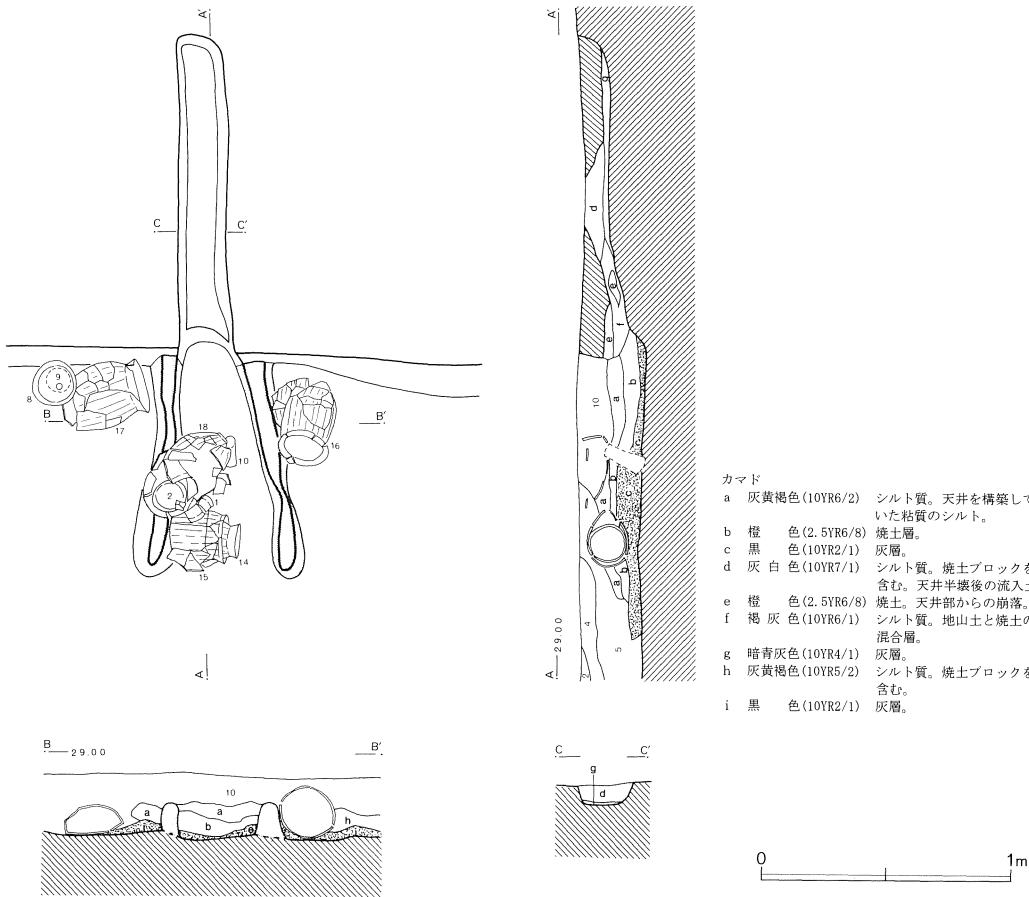
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.2	5.0		RWB	A	橙	50	
2	坏	12.5	4.5		RWB	A	橙	50	
3	坏	(12.1)	(5.0)		RW	A	淡赤橙	25	樹脂付着
4	坏	12.0	8.0		RW	A	橙	80	
5	坏	11.8	4.7		RW	A	橙	95	
6	坏	(14.1)	(5.5)		RW	A	淡赤橙	30	カマド
7	坏	11.5	4.8		RWB	A	橙	70	カマド
8	坏	(12.0)	(3.8)		RW	A	橙	30	
9	坏	(11.9)	(4.5)		RWW'	B	橙	30	
10	坏	12.0	4.0		RW	A	橙	50	
11	大型坏	(14.9)	(5.6)		RW	A	橙	25	穿孔土器
12	壺	(9.4)	(5.9)		RW	A	橙	25	
13	高 坏		(7.6)		RW	A	橙	40	裾部を打ち欠く
14	支 脚		(5.8)	(12.5)	RWB	B	鈍橙	90	
15	支 脚		(6.1)		RW	C	鈍橙	40	
16	壺				RW	B	鈍橙	破片	打撃痕
17	壺			(9.2)	RWW'	B	鈍橙	30	打撃痕
18	鉢	17.8	(12.5)		RWW'	A	橙	90	No.2 火に掛けた痕跡有り
19	甕	15.6	27.0	6.4	WB	B	灰白	90	No.3
20	甕		(31.9)	(6.0)	RWB	A	灰白	45	No.1 内面に樹脂付着

## 第90号住居跡

かー4グリッドに位置する。第91号住居跡を大きく切り込んでいた。全体は整った長方形で、隅部の屈曲も鋭い。規模は長軸長5.02m、短軸長4.57m、面積約22.9m<sup>2</sup>、深さ0.27mで、主軸方向はN-1°-Eである。床面の大部分は第91号住居跡の覆土中に形成されてはいるが、特に埋め戻しや貼り床が行なわれた様子はみとめられなかった。床面自体は概ね平坦で、北半部がやや低い。壁も覆土中でありながら、崩壊はほとんどなく、急角度の立ち上がりを保っていた。しかし、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土の堆積は不自然で乱れており、人為的な埋め戻しが



第265図 第90号住居跡

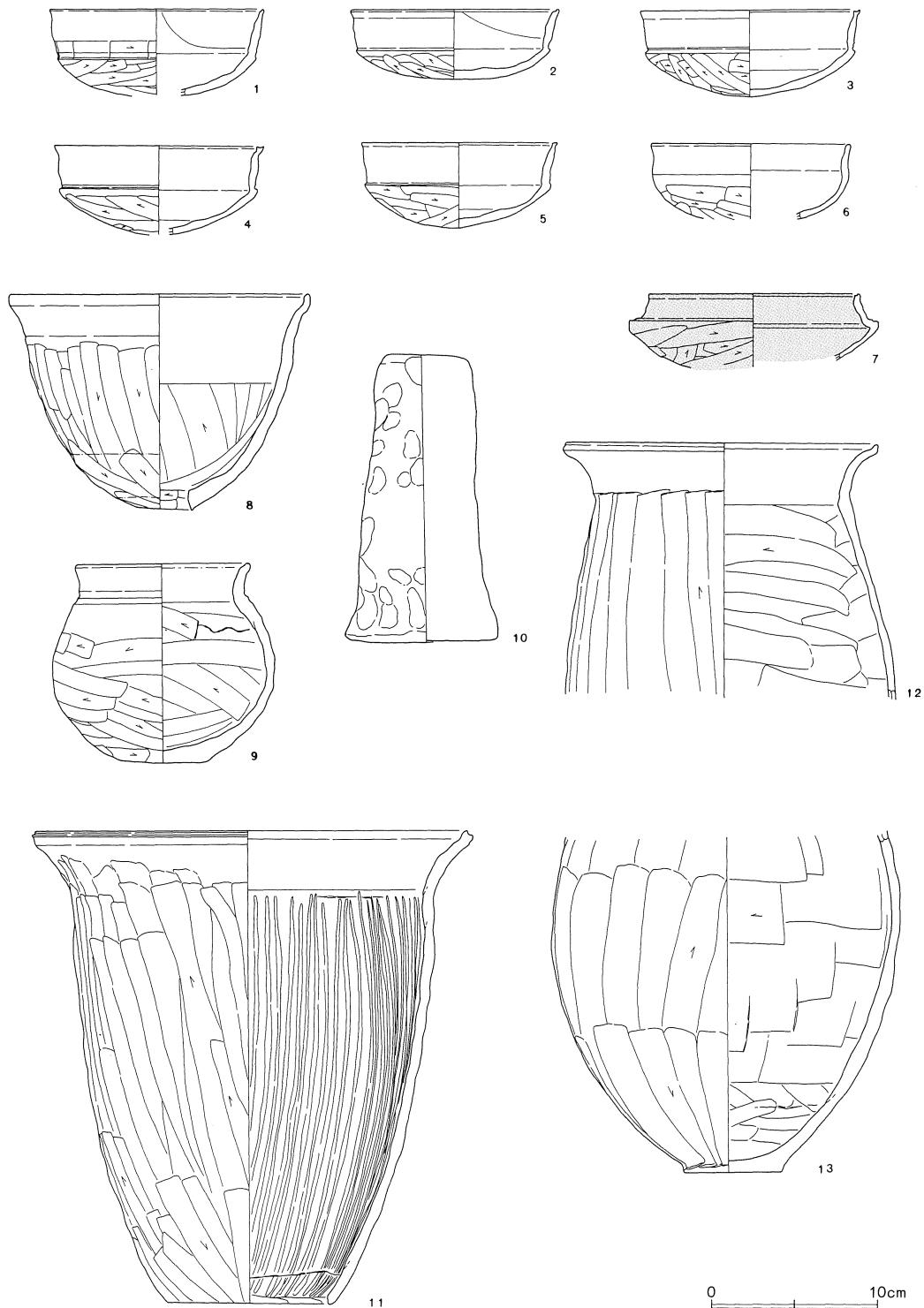


第266図 第90号住居跡 カマド

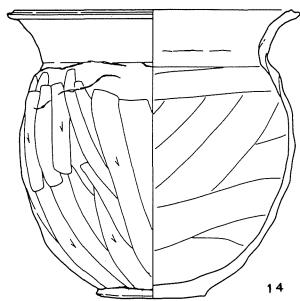
考えられる。

カマドは北壁の中央、わずかに東寄りに造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。袖は左右対象、「ハ」字状気味に開脚する。造り付けられた袖はきわめて長く、左袖では94cmにもおよぶ。これに比して燃焼部の幅はかなり狭く、中央部で32cm、焚口部でも45cmにすぎない。火床面はほぼ平坦で、床面との高低差はほとんどみとめられなかった。ここには厚く灰の堆積が見られたが、支脚手前側ではそれが顕著で、小山状の盛り上がりとなっていた。煙道は幅22cm、長さ117cmで、底面は水平に掘られていた。天井部は崩落しており、煙出口を塞いでいた。支脚の位置は燃焼部中央の右寄りであり、土製のものが据え置かれていた。なお、左右両袖の外側にも、厚く堆積した灰層が認められた。

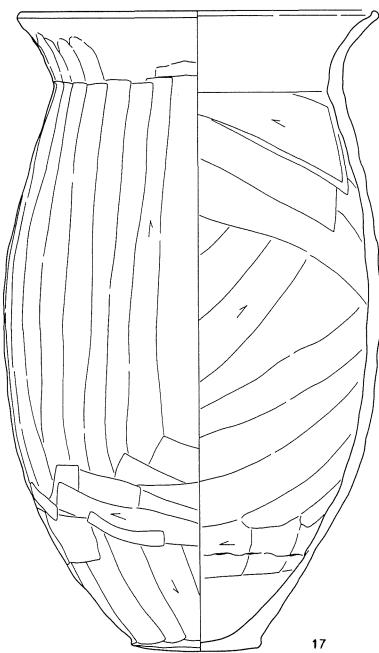
遺物はその出土した位置から見て、床面上のものと、覆土中のものとに大別できる。床面上から出土したものはカマド周辺に集中し、良好な遺存状態を保っていた。カマド燃焼部では18の甕が支脚上に乗せられ、2の壺で口縁部を塞がれていた。支脚は粘土を棒状に成形したもので、下端はつまり出されている。表面には指頭痕が残り、中実である。15の甕は底部を欠失するが、この中には



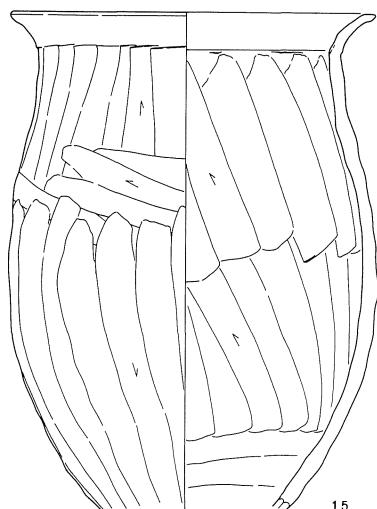
第267図 第90号住居跡 出土遺物（1）



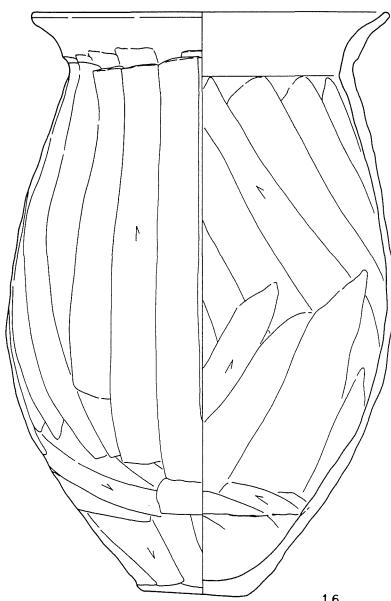
14



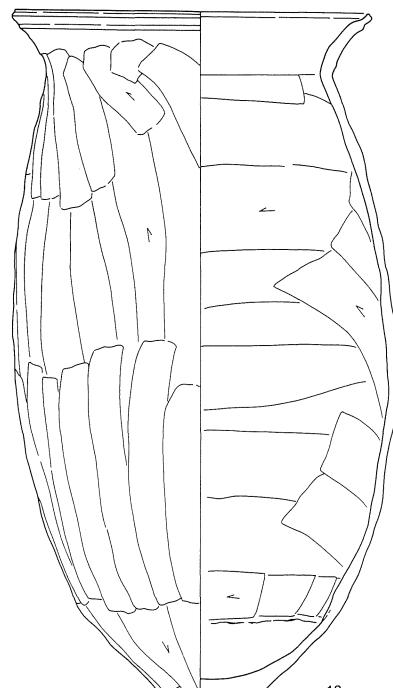
17



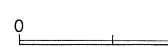
15



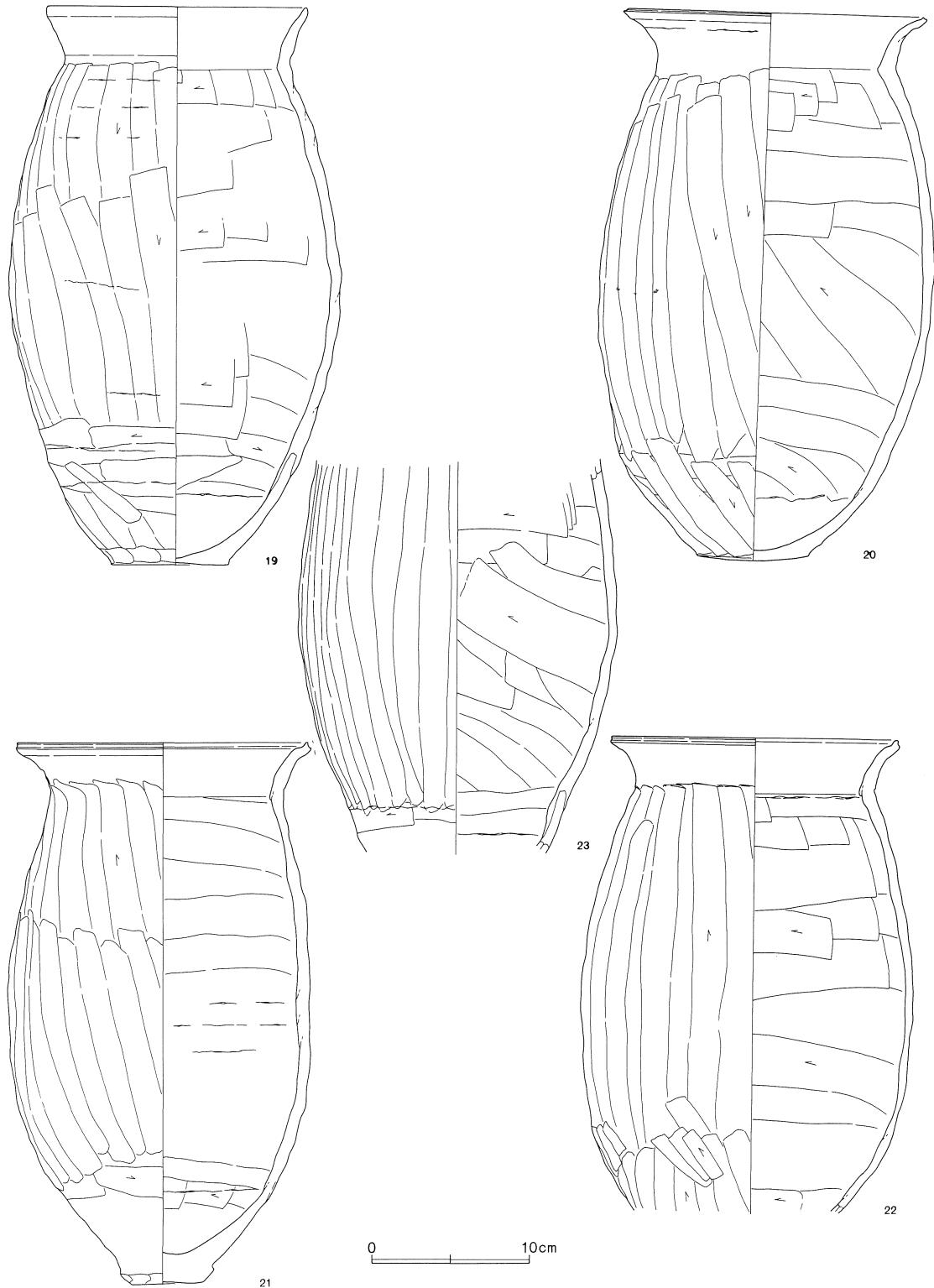
16



18



第268図 第90号住居跡 出土遺物（2）



第269図 第90号住居跡 出土遺物（3）

第90号住居跡出土土器観察表

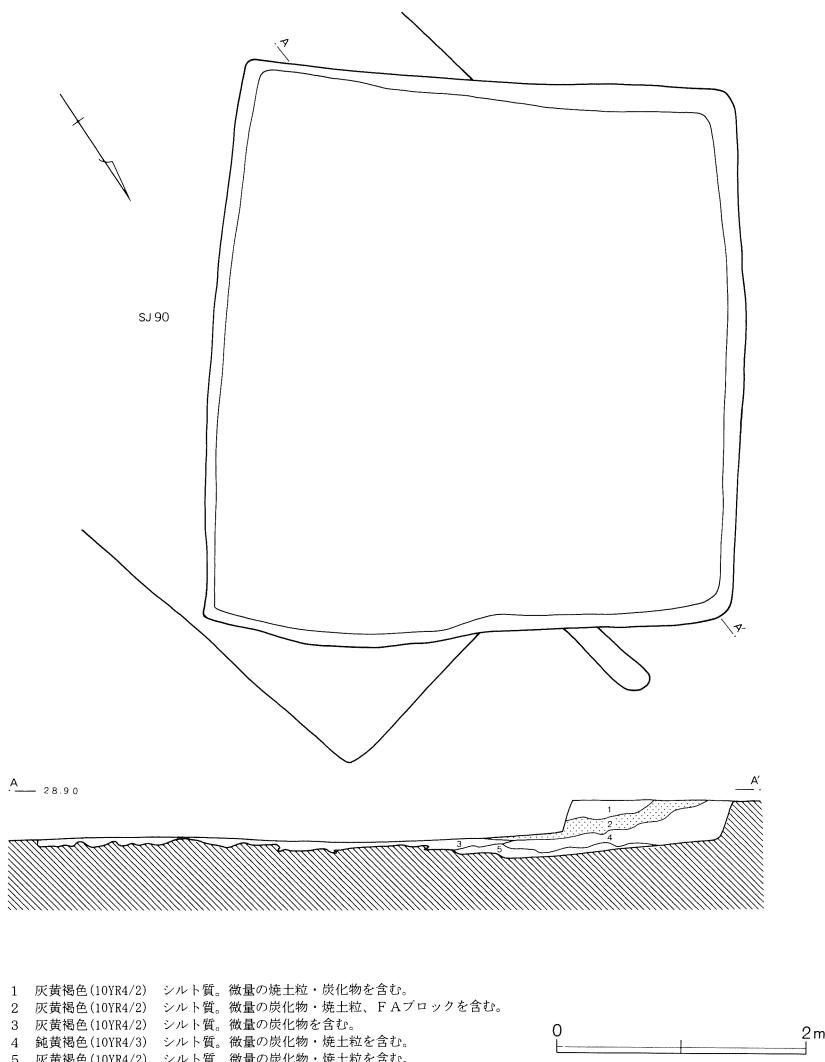
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.9	5.2		RW	B	鈍橙	50	No.15
2	壺	12.5	4.2		WB	B	鈍橙	100	No.14
3	壺	13.2	5.2		RW	A	橙	60	No.6
4	壺	(12.6)	(5.3)		RW	A	鈍橙	40	
5	壺	11.8	5.1		RWB	A	明赤褐	70	
6	壺	(12.0)	(4.5)		W	A	鈍橙	20	
7	壺	(12.7)	(4.4)		RW	B	黒褐	30	内外面黑色処理
8	甌	18.1	12.8		RB	A	橙	100	No.9 胴部下位に磨滅帶
9	短頸壺	10.5	11.9		RB	A	橙	100	No.10 口縁部内面に磨滅帶
10	支脚			9.2	RW	B	鈍橙	100	
11	甌	26.4	28.0	9.8	RW	A	橙	100	No.8
12	甌	18.9	(15.0)		RWB	A	灰白	90	No.7
13	甌		(19.9)	5.8	RWB	A	灰白	70	No.3
14	小型甌	15.6	15.2		WB	A	鈍橙	100	No.17
15	甌	19.5	(26.2)		WB	A	橙	70	No.16 カマド材に転用
16	甌	19.0	30.5	5.5	RW	A	淡橙	95	No.12
17	甌	19.2	33.7	6.2	RWW'	A	灰白	100	No.11
18	甌	19.1	35.8	5.5	RWB	A	淡橙	95	No.13
19	甌	16.5	34.9	7.4	RW	A	淡赤橙	80	No.4
20	甌	19.2	34.3	7.0	RWB	A	灰白	90	No.5
21	甌	18.7	33.9	4.5	RWW'B	A	灰白	60	No.1
22	甌	(18.2)	(29.9)		RWB	A	鈍黃橙	45	No.1
23	甌		(24.4)		RWB	A	灰白	25	No.1

14の小型甌が差し込まれ、焚口部に横転していた。このことから推して、本来両者は焚口の上部に、カマド天井の芯材として掛けられていたものと考えられる。カマドの右側では16の甌が、また左側では17の甌、8の甌、9の短頸壺が出土した。いずれも北壁に接するように置かれていた。このうち、8は9の上に乗ってセットとなっていた。相互の接触部となる甌の外面下位と、短頸壺の口縁部内面には磨滅帶がみとめられる。さらに、焚口部の前面右側からは滑石製臼玉6点がやや散らばつて出土した。このほか、東壁下の南東隅寄りでは、口縁を伏せられた状態で11の甌が出土した。覆土中の土器は住居跡の南半部に散乱した状態で、4層上面から出土した。土器は12・13・19・20・21・22・23の7個体で、すべてが甌である。うち21・22・23は破片となり、南東隅寄りから集中・混在して出土した。

## 第91号住居跡

かー4グリッドに位置する。第90号住居跡に大きく切り込まれ、覆土の大半は失われていた。しかし、掘り込みは本跡のほうが深いため、形状や規模は以下のように観察できた。全体は隅部の屈曲が鋭い方形を基本とするが、南東の壁がやや長いために台形状気味である。規模は長軸長4.04m、短軸長4.03m、面積約16.3m<sup>2</sup>、深さ0.36mである。カマドは第90号住居跡に完全に破壊されたものと思われ、なんらの痕跡も確認することはできなかった。南東壁に造られていたとすれば、主軸方向はN-143°-Eとなる。床面は地山砂層に掘り込まれており、液状化現象による攪乱を受けたため、面としての認定は困難であった。覆土は自然堆積を示し、第90号住居跡構築に際して、埋め戻されたような形跡はみとめられなかった。覆土2層中にはFAブロックが含まれていた。カマド以外でも、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットの確認はできなかった。

遺物の出土はまったくなかった。



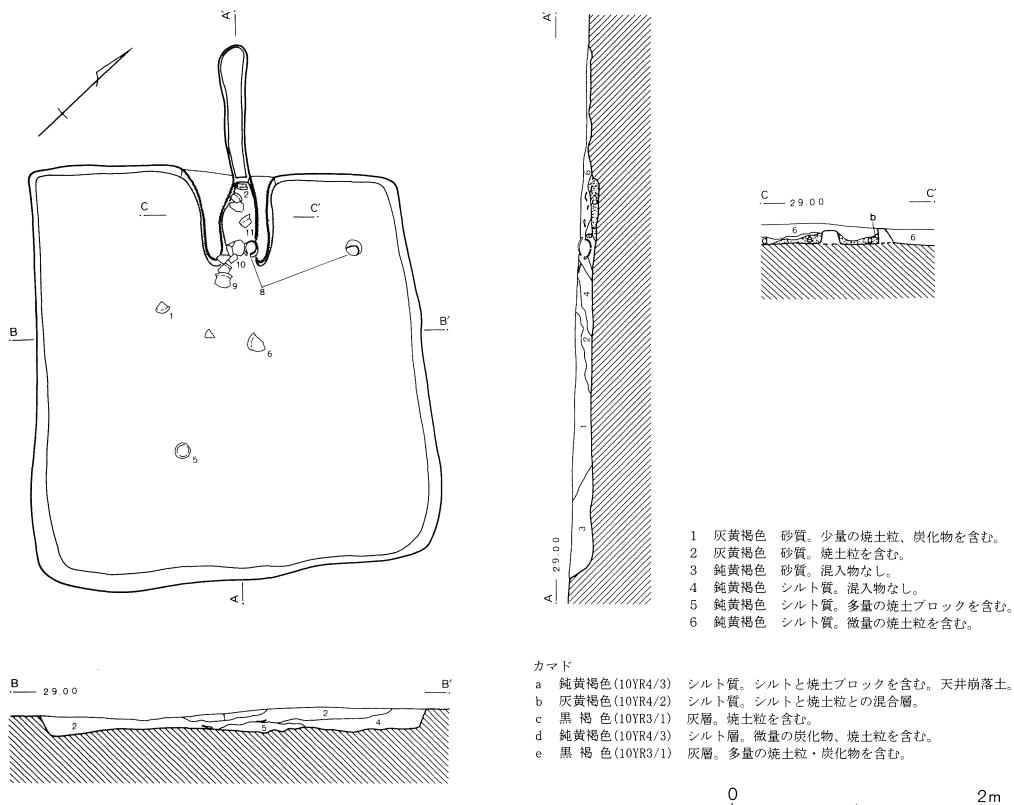
第270図 第91号住居跡

## 第92号住居跡

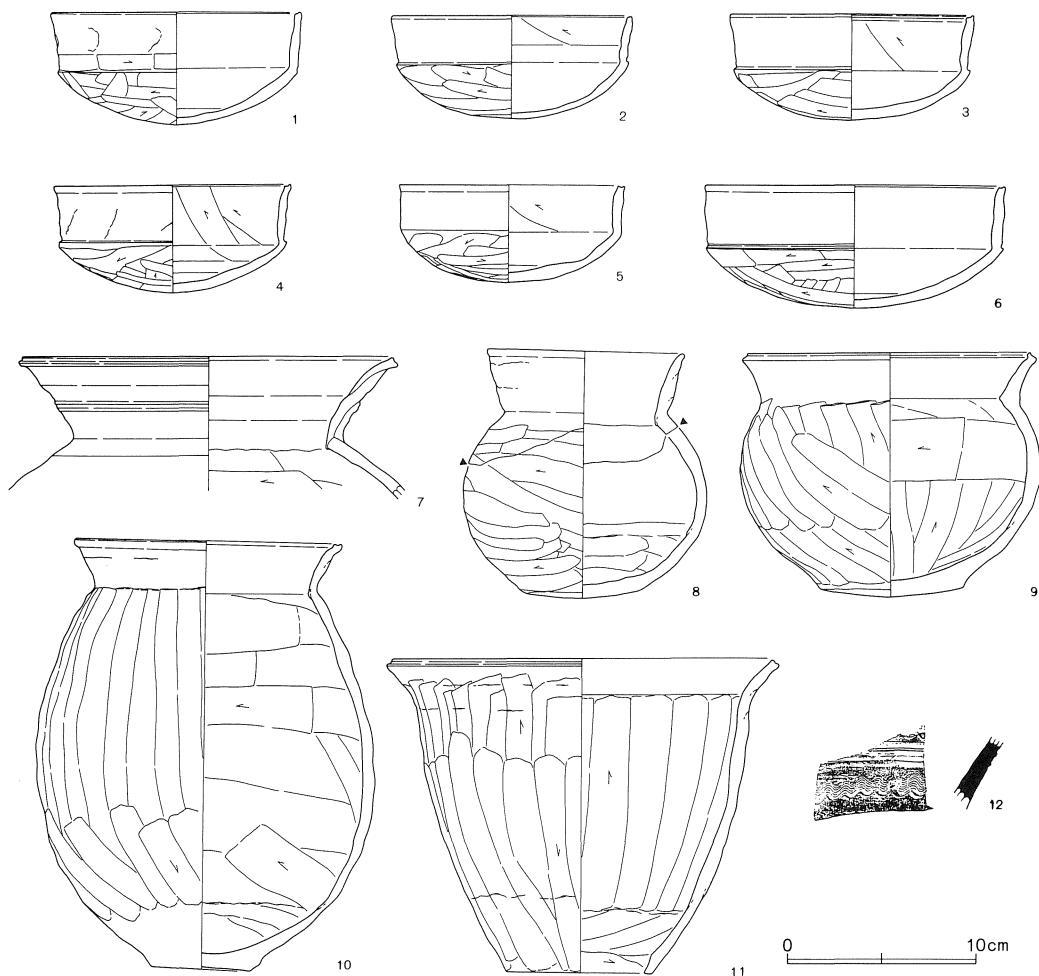
かー4グリッドに位置する。全体はやや歪んだ方形で、かなり小型の住居跡である。規模は長軸長3.18m、短軸長2.94m、面積約9.4m<sup>2</sup>、深さ0.16mで、主軸方向はN-48°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、液状化のためか凹凸が激しい。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北西壁の中央に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは72cmで、燃焼部の幅は33cmである。袖の基部は太く、かつ袖自体が湾曲しているため、燃焼部は橢円形気味となり、焚口部はすぼまっている。火床面は床面よりわずかに深く、灰の堆積が顕著であった。煙道は幅16cm、長さ103cmである。底面は起伏を有するものの、ほぼ水平に掘られていた。左袖の外側には灰層があった。

遺物はカマドを中心として出土した。カマド燃焼部から出土した土器は、2の壺、8の壺、10の甕である。出土状況で注目されるのはカマド焚口部において横転していた10の甕とカマド右袖にはさまれるように出土した8の壺の口縁部で、これはカマド右側の床面上で出土した胴部と同一個体だった。また床面上からは破片ではあるが、1の壺、9の鉢、11の甕が出土した。このほか、覆土中から5の壺と6の大型壺が出土した。12は須恵器壺の口縁部破片だが、第87号住居跡でも同一の破片が出土している。



第271図 第92号住居跡



第272図 第92号住居跡 出土遺物

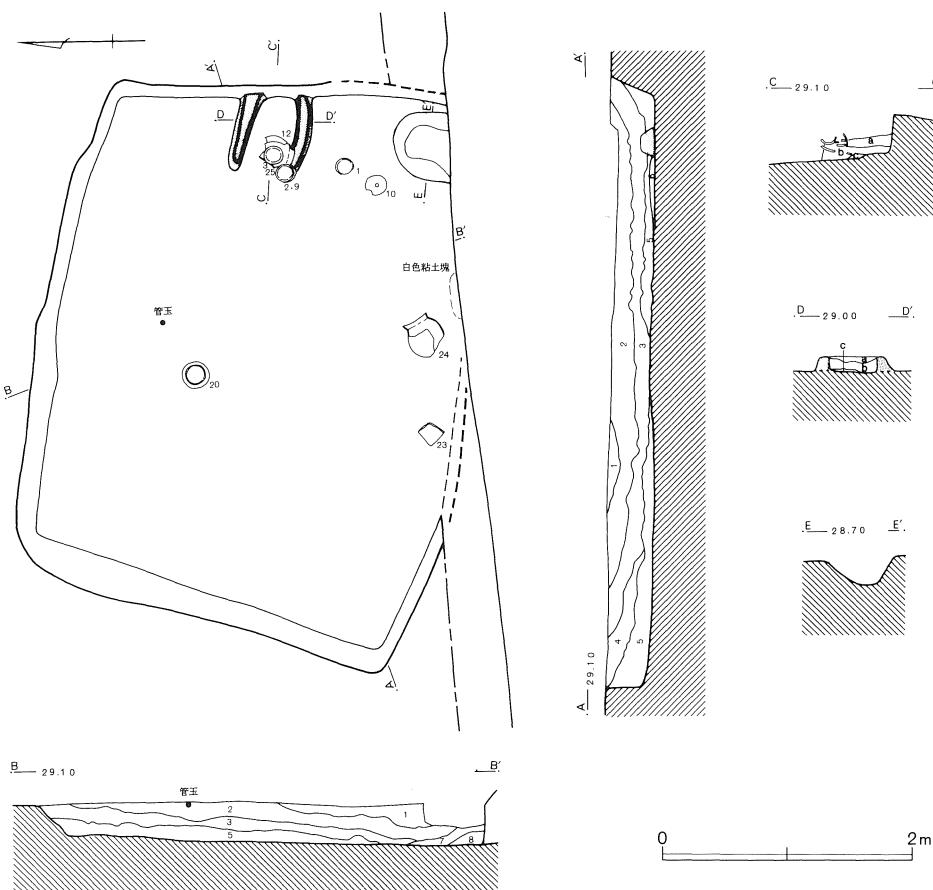
第92号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	6.0		RW	A	橙	75	No. 2
2	坏	12.8	5.4		RWB	A	橙	90	No. 6 • 7
3	坏	12.9	5.6		RWB	A	淡橙	80	カマド
4	坏	12.6	5.6		RWB	A	鈍橙	80	
5	坏	11.9	5.1		RWW'	A	橙	100	No. 1
6	大型坏	15.9	6.5		RWB	A	橙	60	No. 4
7	壺	(19.6)	(7.0)		RWW'	A	橙	25	
8	壺	10.4	13.1	8.0	RW	A	橙	100	No. 5 • 14 上下に打ち欠かれ分離して出土
9	鉢	15.0	12.9	7.1	RWW'B	A	灰白	60	No. 8 • 12 • 13 火に掛けた痕跡有り
10	甕	14.2	22.5	5.2	RWB	A	淡橙	60	No. 10 • 11
11	甕	20.9	16.5	7.6	RWB	A	橙	70	No. 3 • 8
12	壺				W	A	灰	破片	須恵器

### 第93号住居跡

かー4グリッドに位置する。住居跡の南隅部は調査区外となり、東壁と南壁の一部は事前に掘削した排水用の側溝によって破壊してしまった。全体は長方形を基本とするが、南壁が長いためか台形様である。また、地震による崩壊が原因と思われるが、各壁の掘り込みラインは乱れている。規模は長軸長3.79m、短軸長3.01m、面積約11.4m<sup>2</sup>、深さ0.33mで、主軸方向はN-104°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、概ね平坦ではあるものの、中央部はわずかに窪んでいた。床面からは南隅寄りで径53cm、深さ22cmの貯蔵穴を検出したが、そのほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

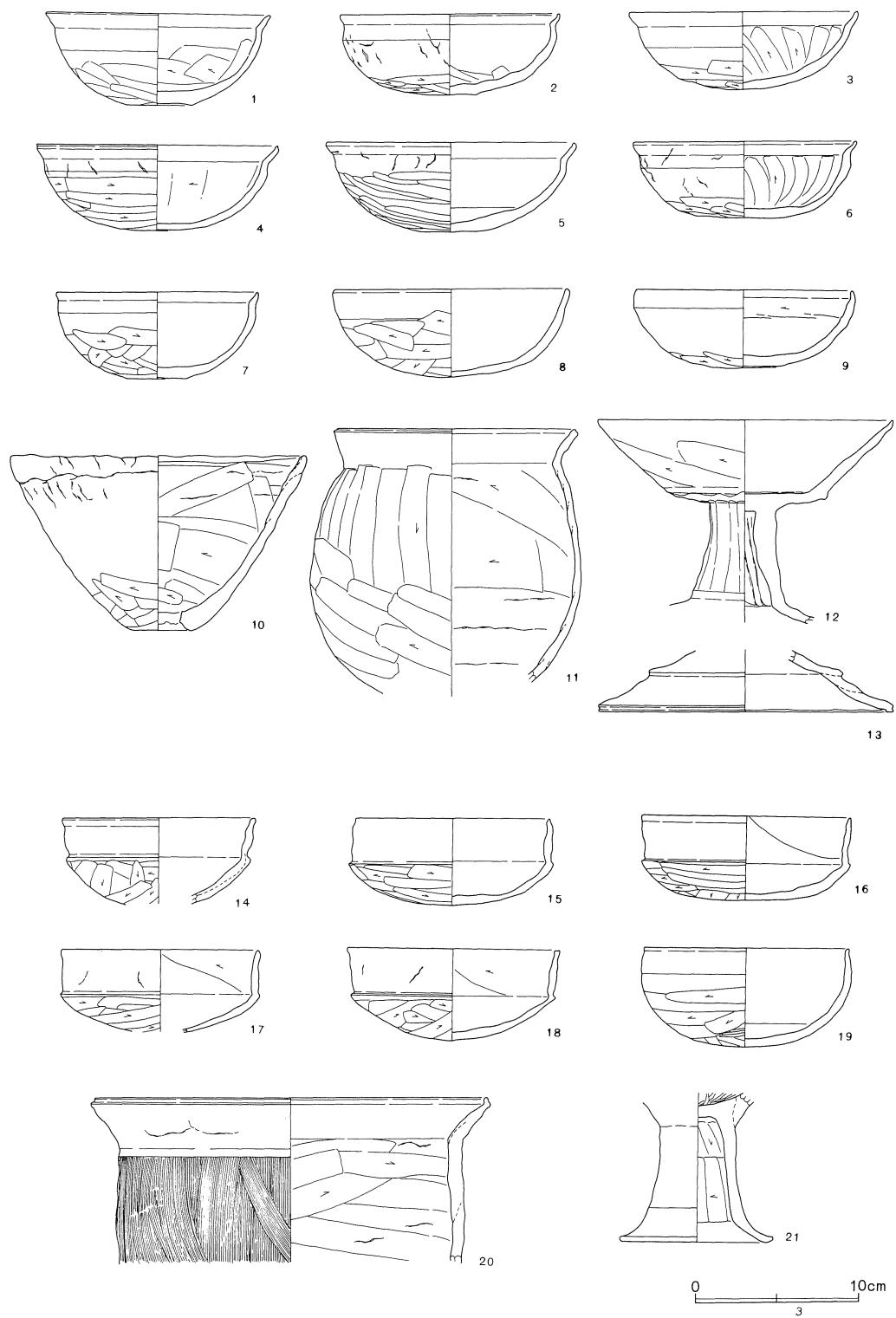
カマドは東壁の北寄りに造られている。袖には灰白色粘土が使用されていた。両袖は内湾気味に



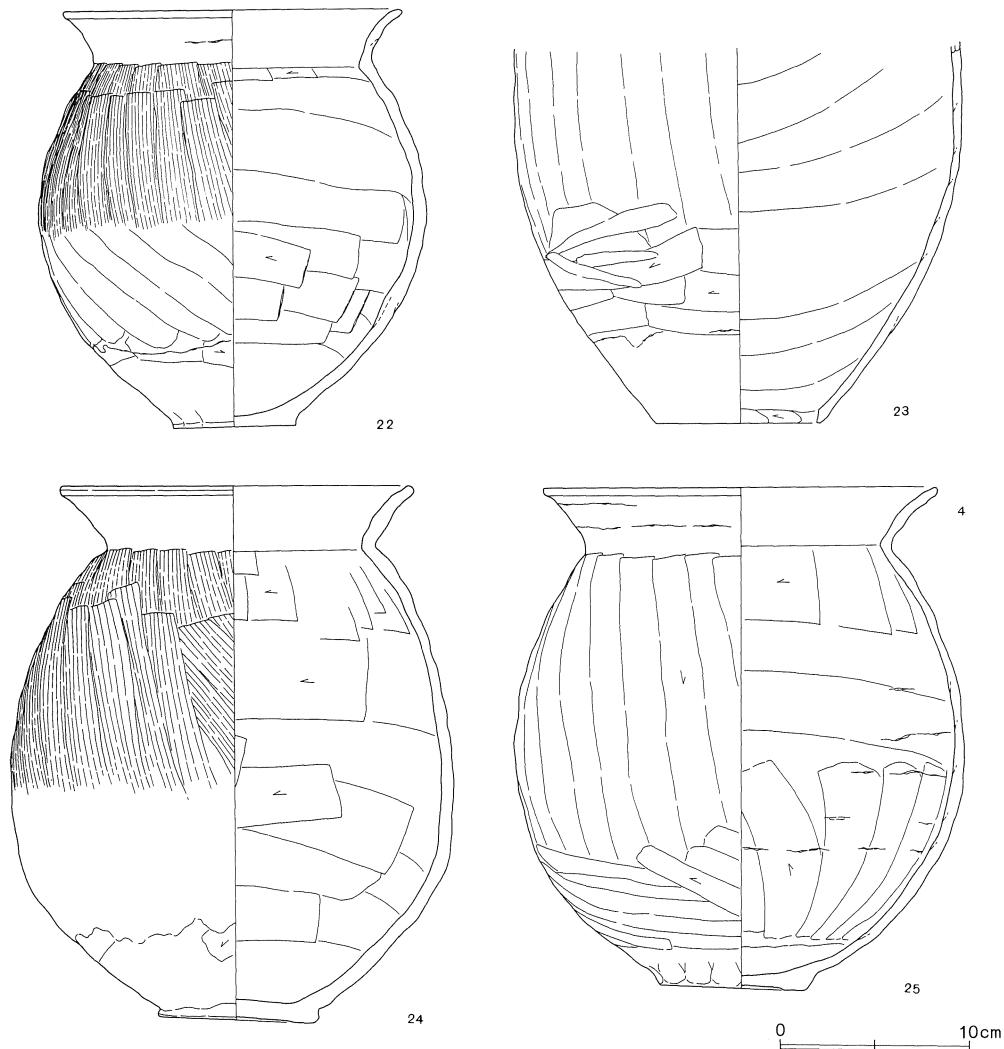
- 1 褐灰色(10YR6/1) 粘土質。炭化物・白色バミスを含む。
- 2 褐灰色(10YR5/1) 粘土質。炭化物・焼土粒を含む。
- 3 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質。炭化物を含む。
- 4 鮎黃橙色(10YR6/3) 砂質。粘土ブロックを含む。
- 5 黄褐色(2.5YR5/3) 砂質。少量の炭化物を含む。
- 6 黄褐色(2.5YR5/3) 砂質。多量の炭化物を含む。
- 7 褐灰色(10YR5/1) 砂質。炭化物を含む。
- 8 褐色土(10YR5/1) 砂質。多量の白色粘土を含む。

- カマド
  - a 純黄褐色(10YR4/3) シルト質。部分的に焼土化。天井の崩落。
  - b 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。部分的に焼土化。炭化物を含む。
  - c 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質。炭化物を含む。

第273図 第93号住居跡



第274図 第93号住居跡 出土遺物（1）



第275図 第93号住居跡 出土遺物（2）

垂下しており、左袖の長さは68cm、燃焼部の幅は39cmである。火床面は平坦で、床面とは段差がない。また、覆土には天井の崩落土はみとめられるものの、灰層の形成はなされていなかった。壁外に延びる煙道についても、検出することはできなかった。支脚の位置は焚口側の右寄りであり、脚部を欠失する高壺が転用されていた。

遺物はカマド周辺・貯蔵穴周辺・南壁下に集中していた。倒立した12の高壺の上に25の甕がのせられ、甕内には3の壺が入っていた。右袖先端上からは2と9の壺が重なって出土した。貯蔵穴内からは22の甕が出土し、カマドと貯蔵穴の間には1の壺と10の甕が正立していた。24の甕は南壁下の出土であるが隣接して床面上に灰白色粘土塊がみとめられた。覆土2層中より14～21の土器群と管玉が出土したが、埋没途中の投棄と見られる。1～9の壺のうち8と9は屈曲しない口縁部と胎土が同一であり、他とは異なっている。

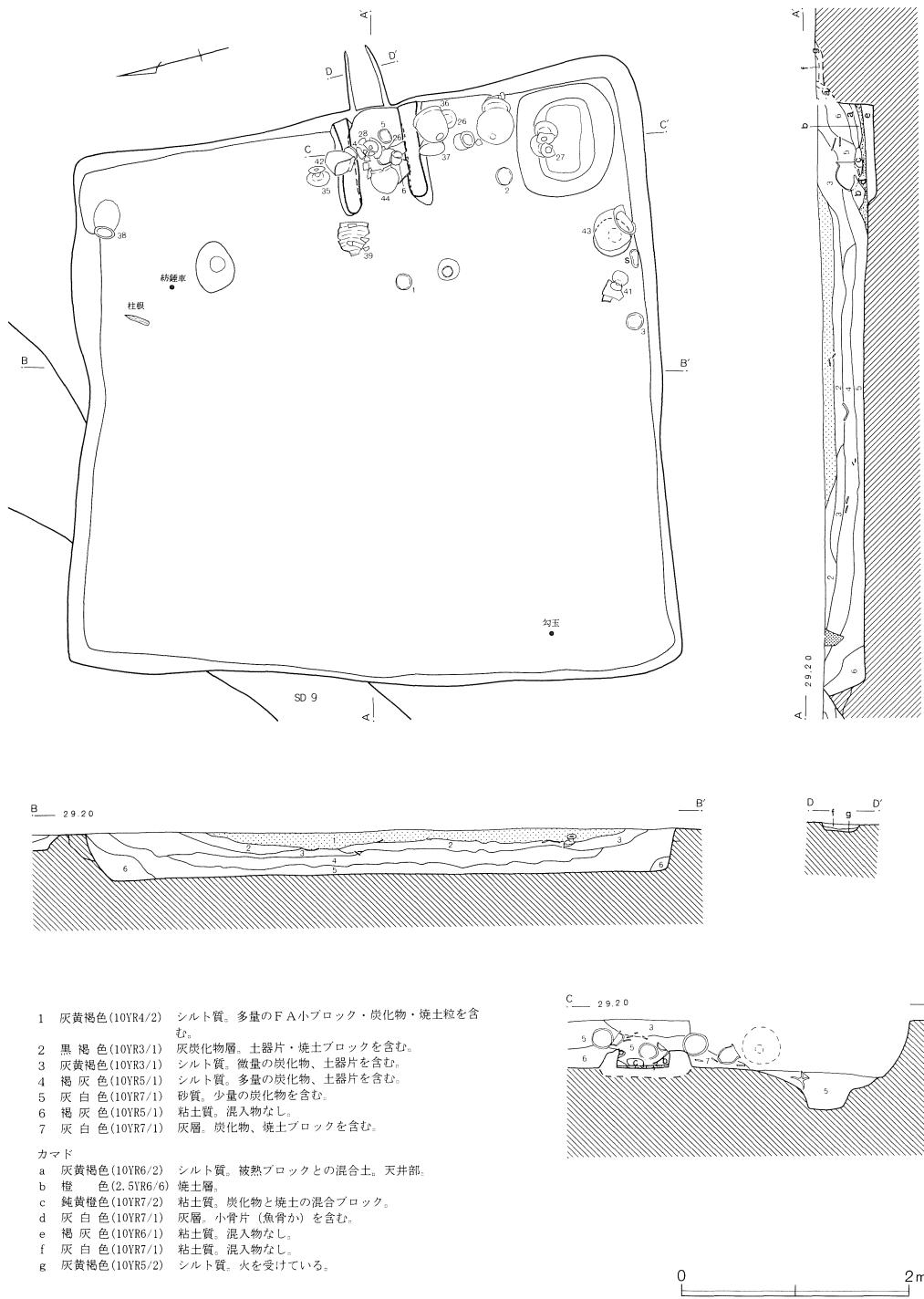
第93号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.8	5.6	4.0	RWW'	A	明赤褐	90	
2	壺	13.5	4.9		RW'	A	橙	100	No. 6
3	壺	15.3	5.5		RWB	A	明赤褐	100	No. 8
4	壺	14.8	5.2		RW	A	明赤褐	100	
5	壺	14.0	4.7		RW	B	明赤褐	95	
6	壺	13.7	4.6		RW	B	黒褐	95	
7	壺	12.4	5.2		RW'	B	明赤褐	100	
8	壺	14.5	5.4		RWB	B	鈍橙	100	
9	壺	13.3	4.7		RWB	B	鈍橙	100	No. 7
10	甌	18.1	10.6	3.5	RWB	A	明赤褐	90	No. 4
11	小型甌	14.8	(16.3)		RWW'B	A	橙	70	
12	高壺	18.1	(12.4)		RWB	B	橙	80	No. 10
13	高壺		(3.8)	(18.0)	RW	B	明褐	20	No. 10 転用支脚
14	壺	(11.8)	(5.2)		RWB	B	橙	30	覆土
15	壺	11.9	5.3		RWB	B	橙	60	覆土
16	壺	12.8	5.1		RWB	B	橙	50	覆土
17	壺	(12.2)	(5.0)		RW	B	鈍橙	30	覆土
18	壺	13.0	5.6		RWB	B	橙	100	覆土
19	壺	(12.5)	(6.0)		RW	B	鈍黃褐	40	
20	甌	(24.5)	(10.0)		RWB	B	鈍黃橙	40	No. 1
21	高壺		(9.1)	9.4	RW	A	鈍橙	90	
22	甌	18.0	21.9	6.5	RWH	B	橙	90	No. 11
23	甌		(19.8)	8.5	RWW'	A	橙	60	No. 2
24	甌	18.8	28.1	8.2	RWH	A	鈍橙	70	No. 3
25	甌	20.8	29.4	7.8	RWH	A	浅黃橙	90	No. 9

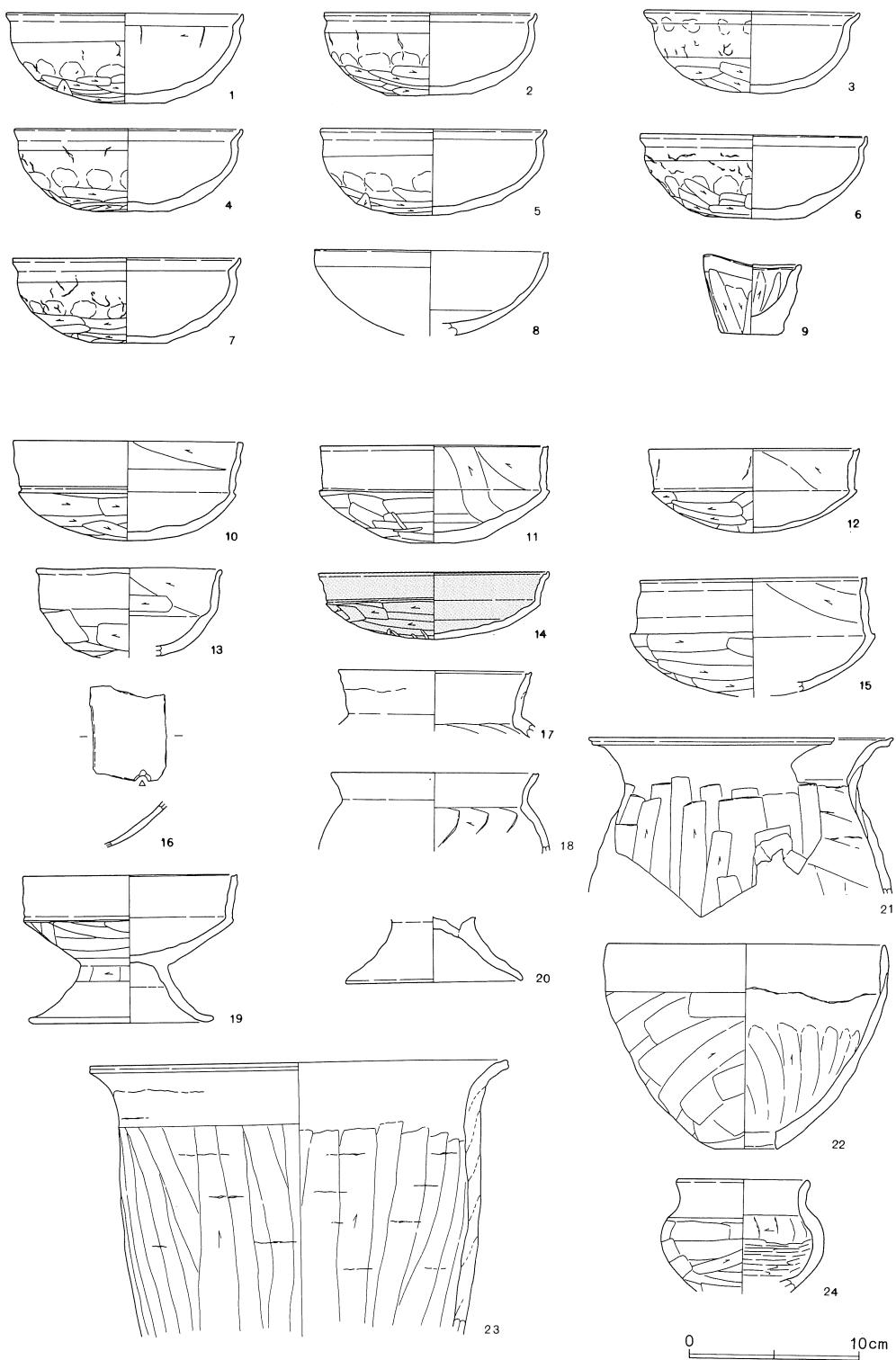
## 第94号住居跡

かー3グリッドに位置する。北西隅部を第9号溝に切られていた。四壁は直線的に掘り込まれるもの、住居跡全体は北壁の短い台形となっていた。規模は長軸長5.01m、短軸長4.80m、面積約24.1m<sup>2</sup>、深さ0.37mで、主軸方向はN-94°-Eである。床面までは地山砂層に掘り込まれていたため、液状化現象によって壁面が部分的に攪乱されていた。床面自体は概ね平坦で、中央部が若干高まっていた。南東隅の貯蔵穴、北東隅寄りと南東隅寄りの小ピット以外には、壁溝・柱穴等は確認できなかった。貯蔵穴は本来長方形で、有段傾斜の壁面であったと思われる。現状での平面は長径95cm、短径86cmとなり、床面からの深さは36cmである。住居跡の覆土1層中にはFAブロックが含まれていた。

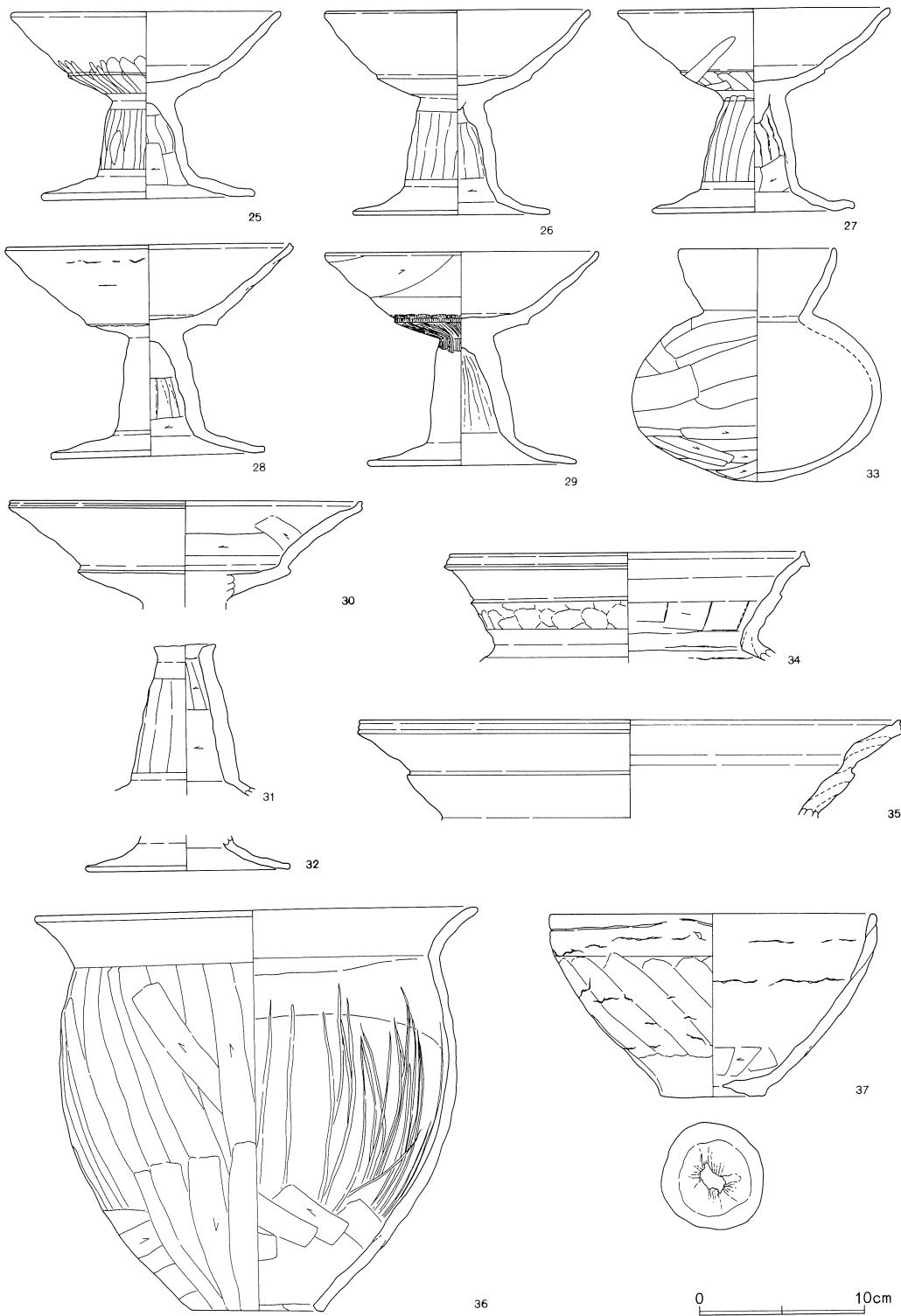
カマドは東壁の中央に造られている。袖には灰白色粘土が使用され、燃焼部の火床面にも同様の粘土が貼られていた。袖は壁より垂直に垂下し、いくぶん内傾していた。右袖の長さは94cm、燃焼部の幅は46cmである。火床面は平坦で、粘土が貼られた結果、床面との高低差はほとんどなくなっている。ここにはさほど厚くはないが、灰の堆積がみとめられた。煙道は幅32cm、長さ53cm以上で、燃焼部火床面から30cmの段を経て掘られていた。右袖の外側には灰層が形成されていた。



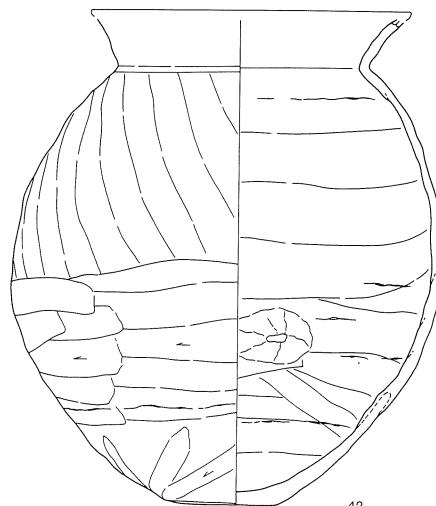
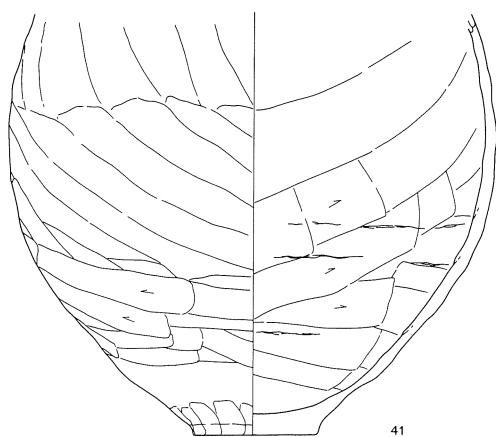
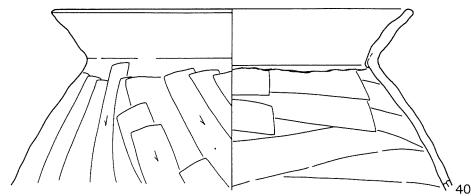
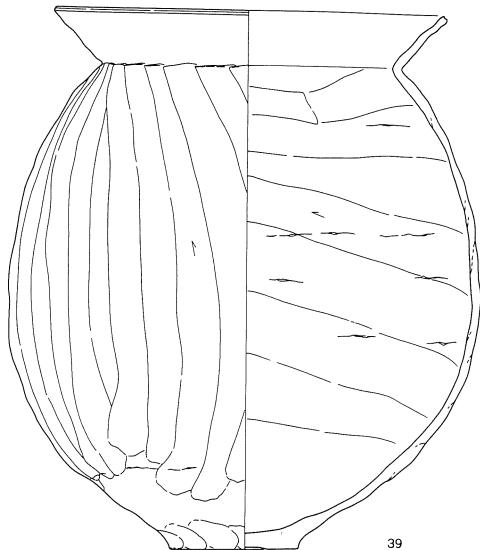
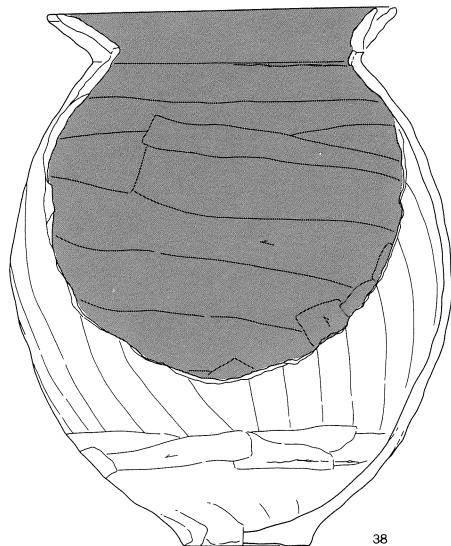
第276図 第94号住居跡



第277図 第94号住居跡 出土遺物 (1)

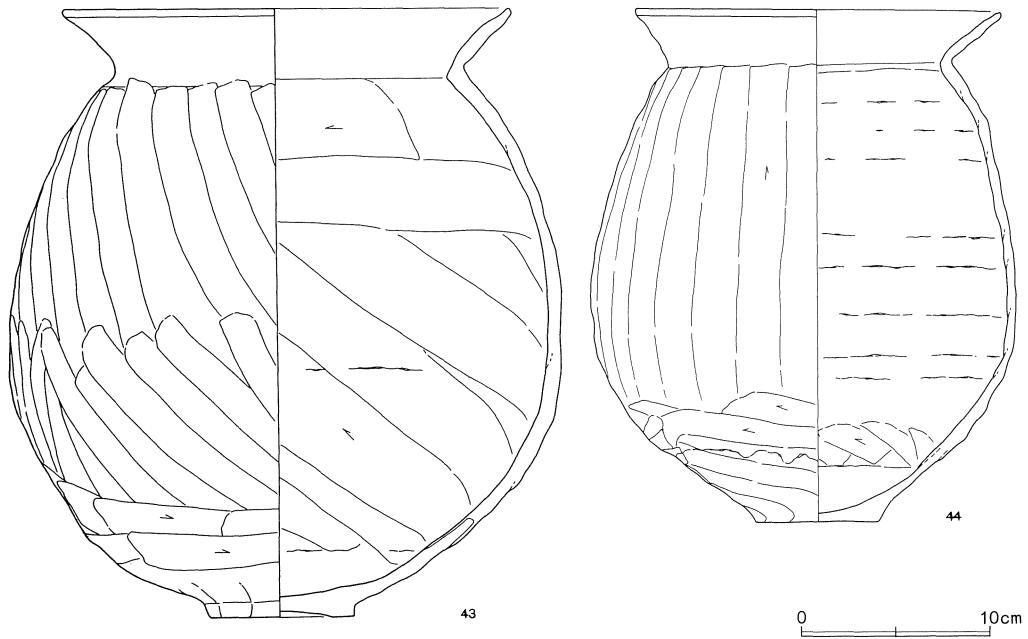


第278図 第94号住居跡 出土遺物（2）



0 10cm

第279図 第94号住居跡 出土遺物（3）



第280図 第94号住居跡 出土遺物（4）

遺物は直接本住居に伴うものと、覆土中のものとに分けられ、住居に伴う遺物はカマド、貯蔵穴周辺のものと、それ以外の床面上のものとに分けられる。カマド・貯蔵穴周辺の遺物は、2・4・5・6の壺、25・26・28・29の高壺、33の壠、36・37の甌、42・44の甕などで、一括して出土した。これらの土器群は床面上、あるいはカマド燃焼部内の出土ではない。カマド左側ではやや床面から浮き、カマド燃焼部では天井崩落土層の上面、またカマド右側では灰層の上面に見出された。正立、および据え置かれた状態の土器はなく、方向も乱れていた。このことから見て、土器群はカマドの上部施設に置かれていたものが、埋没途中に転落したものと考えられる。床面上の土器のうち、カマド・貯蔵穴周辺のものは1の壺、27・29の高壺、39・40の甕だが、27の高壺は貯蔵穴内に傾倒した状態だった。また貯蔵穴上のカマド側には大型壺が横転して出土した。南壁下の貯蔵穴寄りでは3の壺、41・43の甕が出土した。このうち、43の大型甕は小ピットに据えられた状態だった。北東隅では38の甕が横転して出土したが、この土器は口縁部から胴部にかけて意図的に打ち欠かれ、さらに内面全体に樹脂が付着していた。樹脂塗布の際に、容器として用いられたものと考えられる。以上の土器のほか柱材と見られる木片、滑石製の紡錘車と勾玉が出土した。覆土中の遺物は10～24である。1層から4層にわたって出土しているが、床面上の土器とは明らかに時期差がみとめられる。出土位置にかかわらず土器の特徴をあげると、16の壺と21の甕は打撃痕をもつ破片である。30と31は同一の高壺の可能性がある。34の壺口縁部は転用器台の可能性がある。35は破片であるが大型の壺と考えられる。37の甌は底部孔がケズリによって整えられず、指頭圧を加えられて薄く不整形になっている。38の甕の打ち欠きは外側からの打撃によってなされ、樹脂付着は口縁部の一部をのぞく内側全面におよんでいる。42の甕は胴部の下位に外側からの打撃によって穿孔されている。

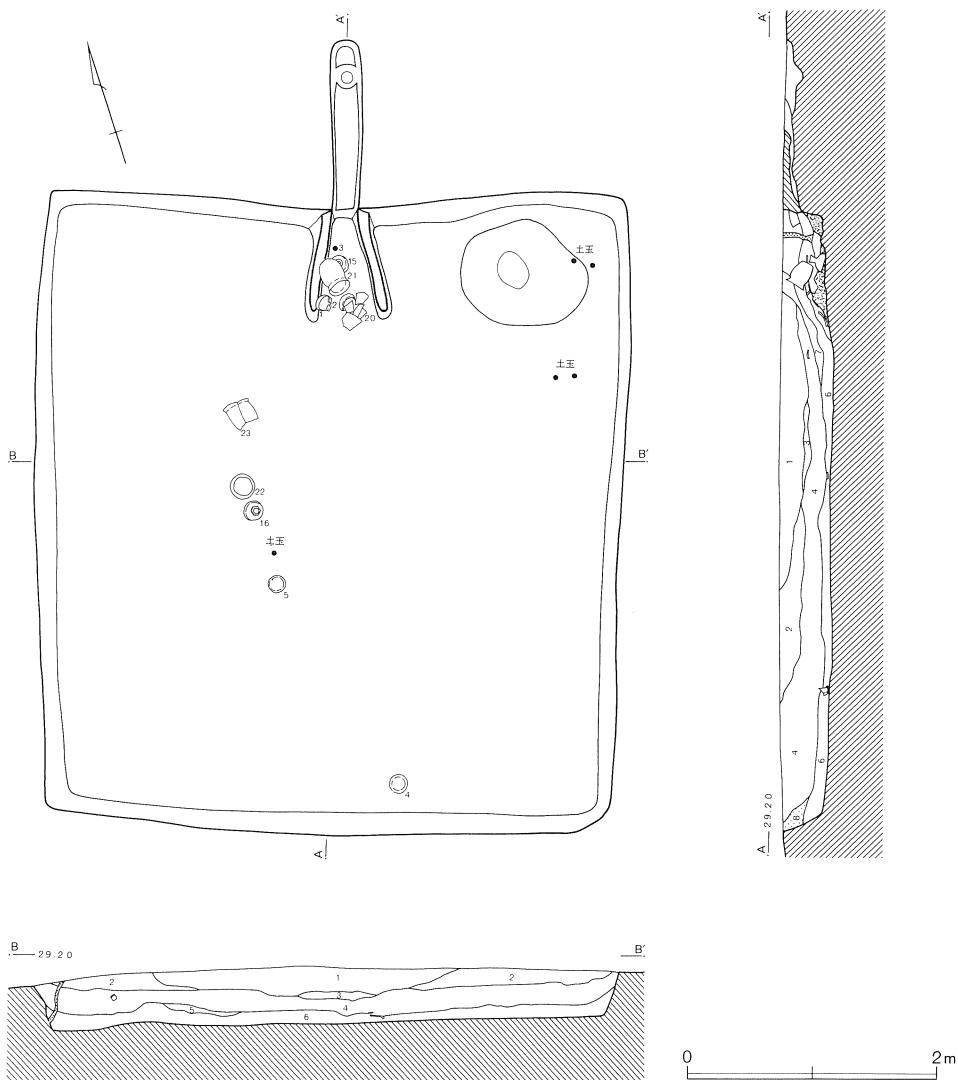
第94号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	14.0	5.3	3.9	RWW'	A	橙	100	No.3
2	壺	12.6	4.8	5.0	RWB	A	橙	100	No.11 平底
3	壺	12.7	4.8		RW	B	明赤褐	100	No.17
4	壺	13.5	4.9	4.5	RW	A	明赤褐	100	No.20 平底
5	壺	13.4	5.0		RW	A	明赤褐	100	No.22
6	壺	13.4	4.9	5.9	RWB	A	橙	95	No.23
7	壺	13.5	5.0	4.5	RWW'	A	橙	100	床直
8	壺	(13.8)	(5.0)		RWB	C	橙	30	
9	手捏土器	5.8	4.6	3.9	RW	A	明赤褐	60	
10	壺	13.6	5.8		RWB	B	橙	50	
11	壺	13.5	5.7		R	B	浅黄橙	60	
12	壺	12.5	5.0		RWB	B	橙	90	
13	壺	(11.0)	(5.2)		RWB	B	橙	30	
14	壺	(13.7)	(3.9)		RWB	B	鈍赤褐	20	内外面黒色処理
15	壺	13.4	(6.9)		RB	A	橙	70	
16	壺				RW	B	橙	破片	打撃痕土器片
17	壺	11.4	(3.7)		RWB	B	橙	90	
18	小型甕	12.3	(4.7)		RW	C	鈍橙	70	
19	高 壺	12.6	8.6	10.9	RWB	B	橙	70	
20	高 壺		(3.9)	10.5	RWB	A	橙	60	
21	甕	(18.0)			RW	B	橙	25	刃物打撃痕土器片
22	甕	(16.4)	(11.9)	(3.7)	RWB	B	橙	25	
23	甕	(24.2)	(15.9)		RW	B	橙	25	
24	ミニチュア	(7.9)	(6.6)		WB	B	鈍赤褐	25	彫形
25	高 壺	16.4	11.3	13.0	RW	B	橙	90	No.2
26	高 壺	16.1	12.4	11.9	RWW'B	B	橙	80	No.7
27	高 壺	16.5	12.3	12.4	RWB	B	橙	90	No.12
28	高 壺	17.5	12.7	13.0	RW	B	橙	90	No.21
29	高 壺	16.7	12.9	12.7	RWW'	B	橙	70	No.27
30	高 壺	21.4	(6.4)		RWB	B	橙	50	
31	高 壺		(9.0)		R	B	明赤褐	80	
32	高 壺		(2.2)	12.4	RWB	B	橙	60	
33	壠	9.5	14.0	2.4	RW	A	鈍赤褐	100	No.24
34	壺	21.6	(6.7)		RB	A	橙	80	転用器台の可能性有り
35	壺	(32.7)	(5.0)		RWB	A	鈍黄橙	25	
36	甕	26.8	24.0	7.5	RWB	A	浅黄橙	100	No.5
37	甕	19.9	11.0	5.5	RWB	A	鈍黄橙	95	No.6 不整形な底部孔
38	甕	18.5	28.2	6.5	WB	A	灰白	100	No.1 脊部上半を打ち欠く 内面樹脂付着
39	甕	20.7	28.3	6.8	RW	A	明褐灰	80	No.18
40	甕	(19.2)	(9.6)		WB	A	鈍黄橙	40	No.9 下
41	甕		(22.2)	(6.5)	RWBH	A	鈍橙	40	No.16
42	甕	17.0	26.0	5.8	RW	B	淡赤橙	80	No.19 穿孔土器
43	甕	23.7	32.3	7.6	RWBH	A	橙	85	No.14
44	甕	19.4	27.0	6.5	RW	A	橙	90	No.25

## 第95号住居跡

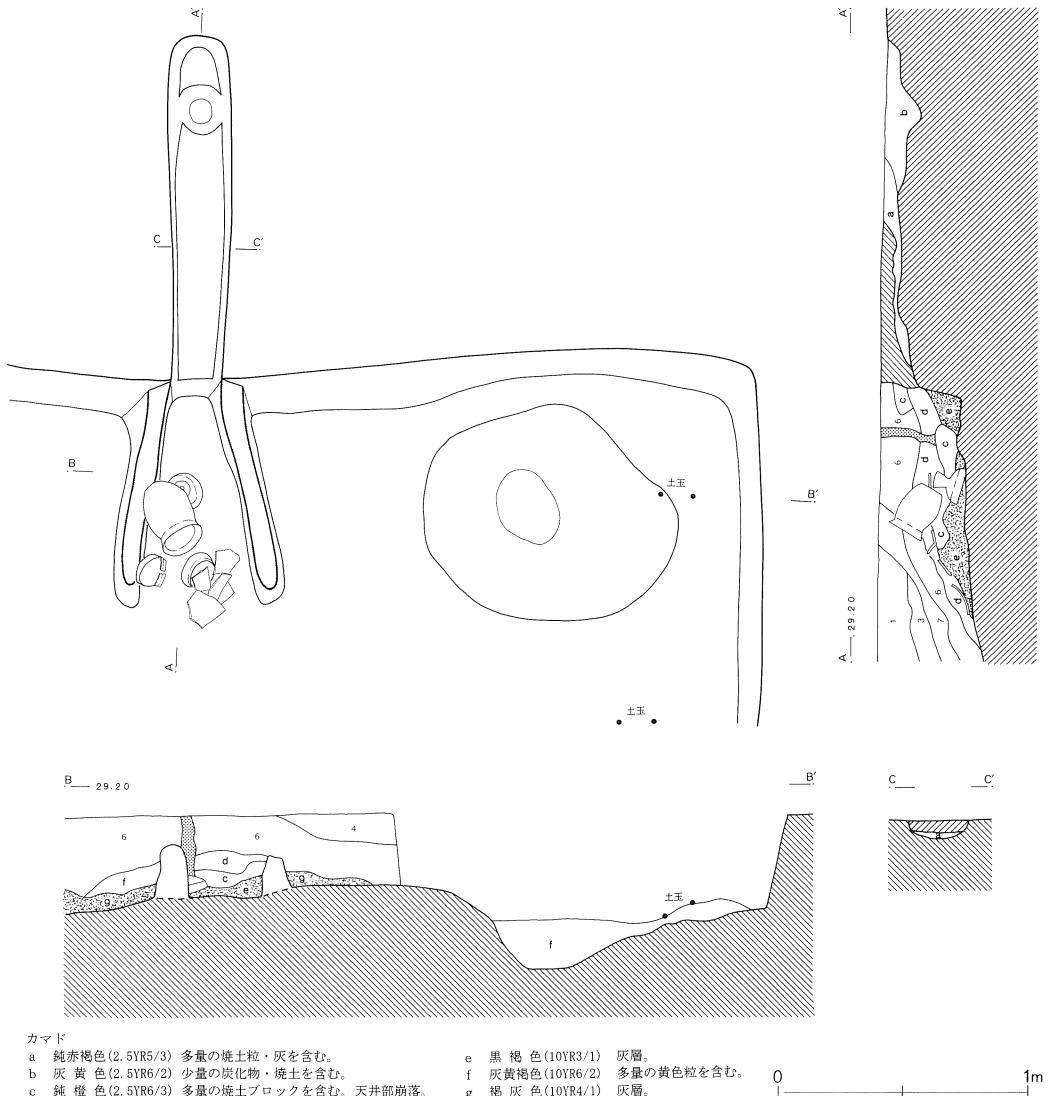
かー4グリッドに位置する。全体は均整のとれた方形で、各隅部の屈曲は鋭い。規模は長軸長4.73m、短軸長4.46m、面積約21.1m<sup>2</sup>、深さ0.45mで、主軸方向はN-20°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、東から西へ向けてわずかに傾斜していた。また、カマドの全面はやや窪んでいた。貯蔵穴は住居跡の北東隅に検出された。径102cm、床面からの深さ33cmの掘り鉢状である。そのほかに、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土8層中にはFAブロックが含まれていた。

カマドは北壁の中央部に造られる。袖には灰白色粘土が使用されており、壁から「ハ」字状に広が



- |                                       |                                  |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗灰(10YR6/1) 焼土粒・炭化物を含む。             | 5 灰黄褐色(10YR5/2) 炭化物・焼土粒を含み、砂っぽい。 |
| 2 灰黄褐色(10YR6/2) 焼土粒・炭化物を含む。           | 6 暗灰(10YR6/1) 灰色の粘土・炭化物を含む。      |
| 3 暗灰(10YR4/1) 多量の炭化物を含む。              | 7 灰(10YR4/1) 炭化物層。               |
| 4 灰黄褐色(10YR6/2) 多量の黄色粒を含み、2層より黄色味が強い。 | 8 暗灰(2.5YR6/2) FAブロックを含む。        |

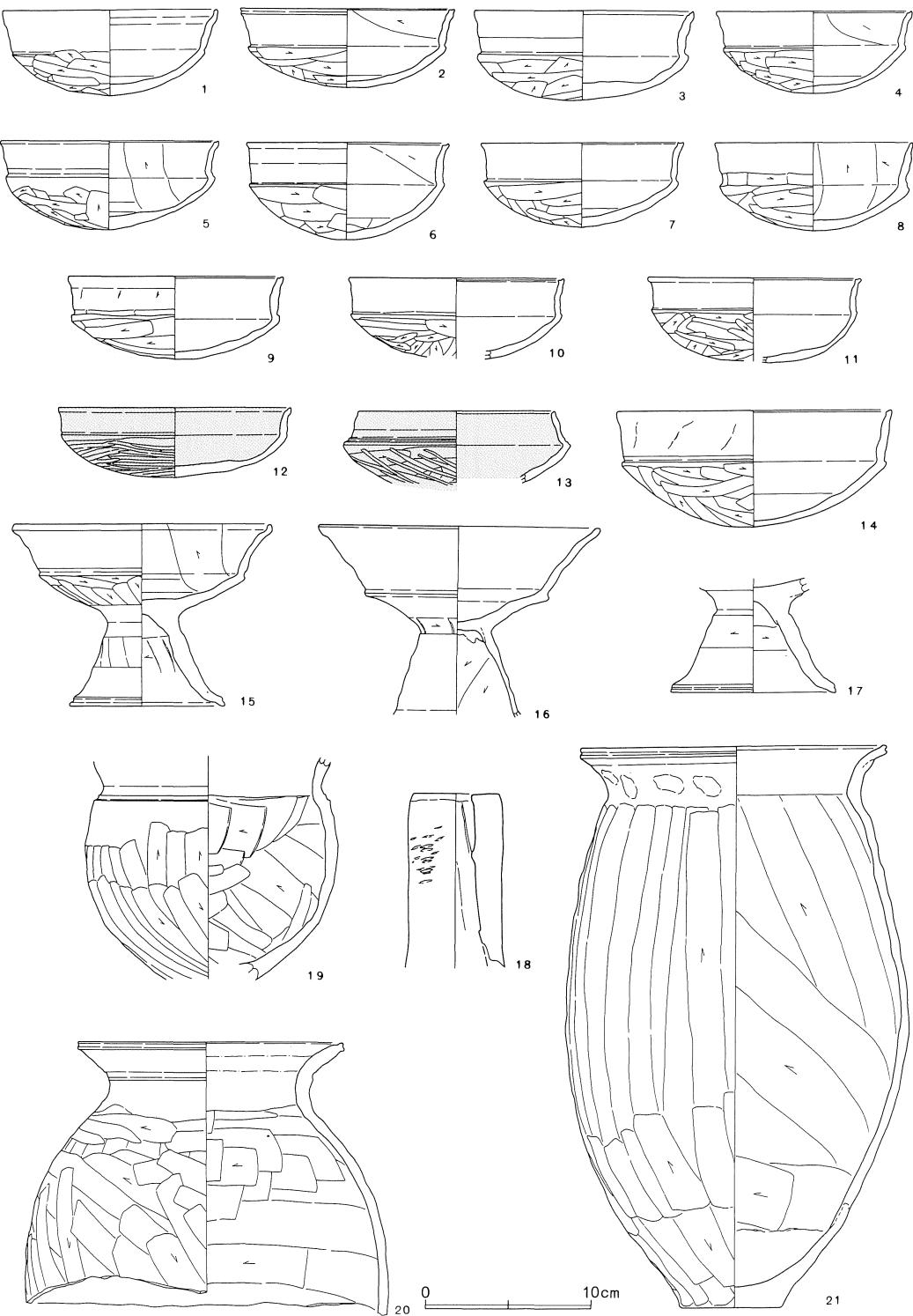
第281図 第95号住居跡



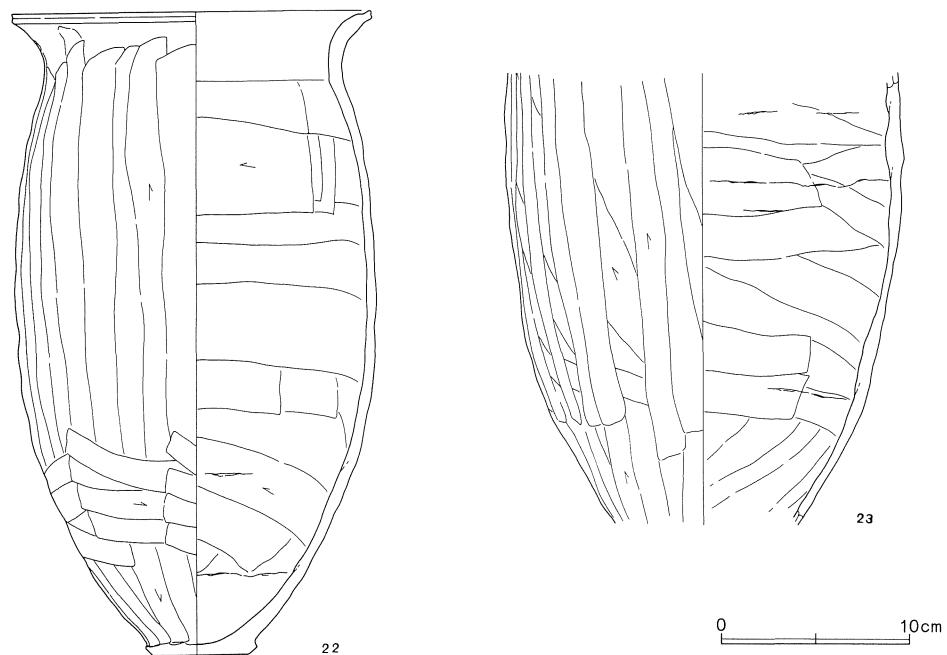
第282図 第95号住居跡 カマド

る。右袖の長さは83cm、燃焼部の幅は31cmである。火床面はほぼ平坦で、厚く灰の堆積が観察された。煙道は幅24cm、長さ138cmで、地山を水平に掘り抜いている。煙道部奥壁から108cmのところに煙出ピットを穿っていた。支脚の位置は燃焼部の左寄りであり、高壺が使用されていた。左右両袖の外側には灰層があった。

遺物はカマドを中心に出土した。カマド燃焼部からは1・2・3の壺、15の高壺、20の壺、21の甕が出土したが、3は灰層上に伏せられていた。15の高壺は支脚として倒立転用され、21の甕がのっていた。このほか、4・5の壺は床面上の出土であったが、16の高壺と22・23の甕は覆土中から出土した。また貯蔵穴付近を中心として、床面よりやや浮いて土玉が5点出土した。20は壺からの転用器台である。



第283図 第95号住居跡 出土遺物（1）



第284図 第95号住居跡 出土遺物（2）

第95号住居跡出土土器観察表

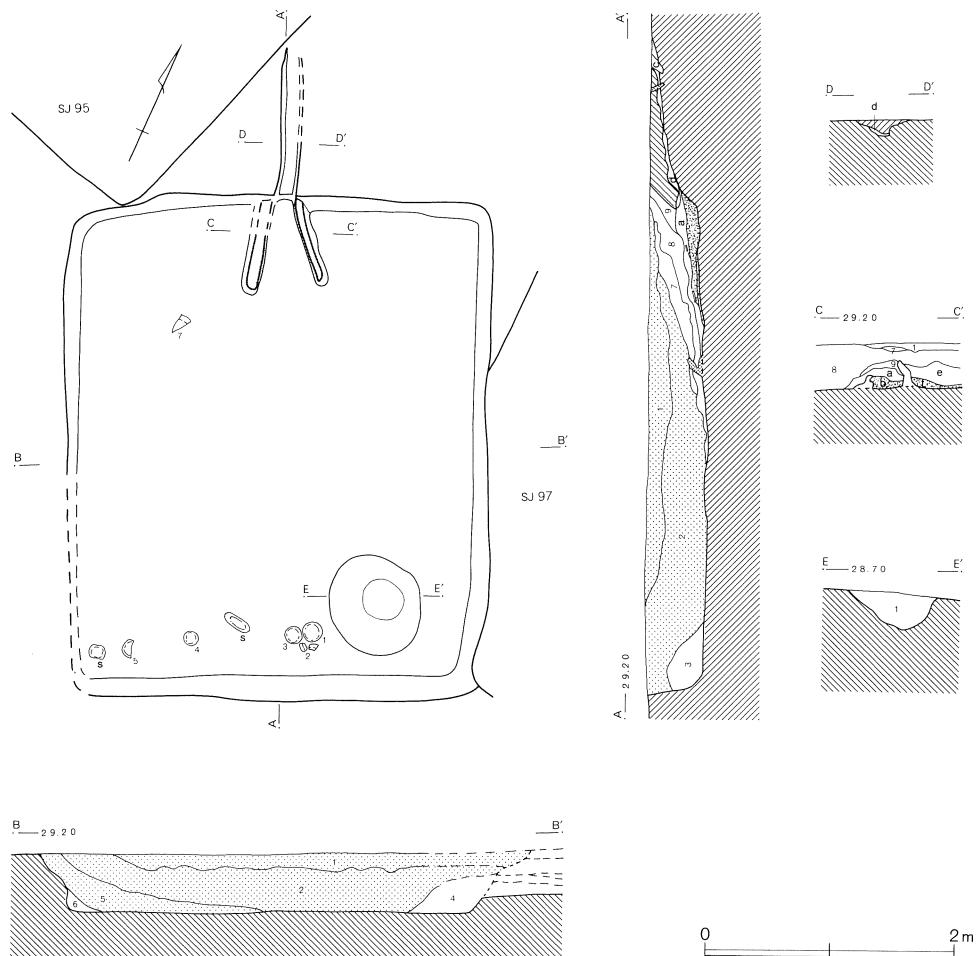
番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.0	5.1		RW	B	鈍橙	100	No. 2
2	壺	12.9	4.7		RW	B	灰褐	90	No. 3
3	壺	13.2	5.3		W	C	橙	80	No. 5
4	壺	11.8	4.9		W	A	鈍橙	90	No. 11
5	壺	13.1	5.3		RW	B	橙	100	No. 10
6	壺	12.3	5.8		W	A	橙	100	覆土
7	壺	12.2	5.1		RWB	B	鈍黃橙	80	
8	壺	11.9	5.3		RWW'B	B	橙	70	
9	壺	13.0	5.0		RW	B	橙	100	覆土
10	壺	13	(4.8)		RWB	B	橙	50	
11	壺	12.9	(5.0)		RW	B	赤褐	60	
12	壺	14.0	4.2		W	A	鈍赤褐	30	内外面黒色処理
13	壺	(11.9)	(4.3)		W	B	暗赤褐	20	内外面黒色処理
14	大型 壺	16.6	7.0		RW	B	鈍橙	70	No. 4
15	高 壺	15.7	10.9	9.4	RW	A	橙	60	No. 6
16	高 壺	17.0	11.3		R	A	鈍黃橙	70	No. 7
17	高 壺		(6.8)	10.0	W	A	橙	95	覆土
18	支 脚	(5.6)	(10.4)		RW	B	橙	40	
19	小 型 甕		(13.4)		RW	A	明赤褐	30	
20	壺	16.0	(15.0)		RWB	A	淡赤橙	90	No. 4 転用器台
21	甕	18.4	33.6	6.0	WB	A	浅黃橙	95	No. 1
22	甕	19.0	33.9	5.0	RWB	A	淡橙	60	No. 8
23	甕		(23.6)		RW	A	橙	80	No. 7

## 第96号住居跡

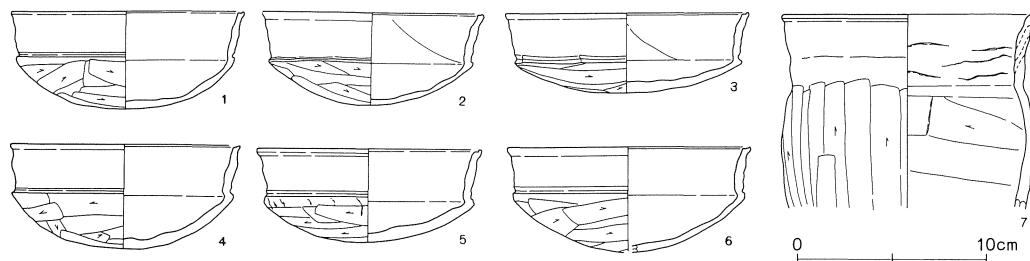
かー4グリッドに位置する。第97号住居跡を切り込んでいた。規模は長軸長3.72m、短軸長3.16m、深さ0.45mで、主軸方向はN-23°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、南東隅で貯蔵穴と見られる。径73cm、深さ30cmの掘り鉢状ピットを検出したが、そのほかに壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1・2・5層中にはFAブロックが含まれていた。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは75cm、燃焼部の幅は24cmである。煙道は幅18cm、長さ120cmで、傾斜をつけていた。右袖外側には灰層があった。

遺物は南壁下から1~5の壙が出土したが、3層中のものである。



第285図 第96号住居跡



第286図 第96号住居跡 出土遺物

### 第96号住居跡出土土器観察表

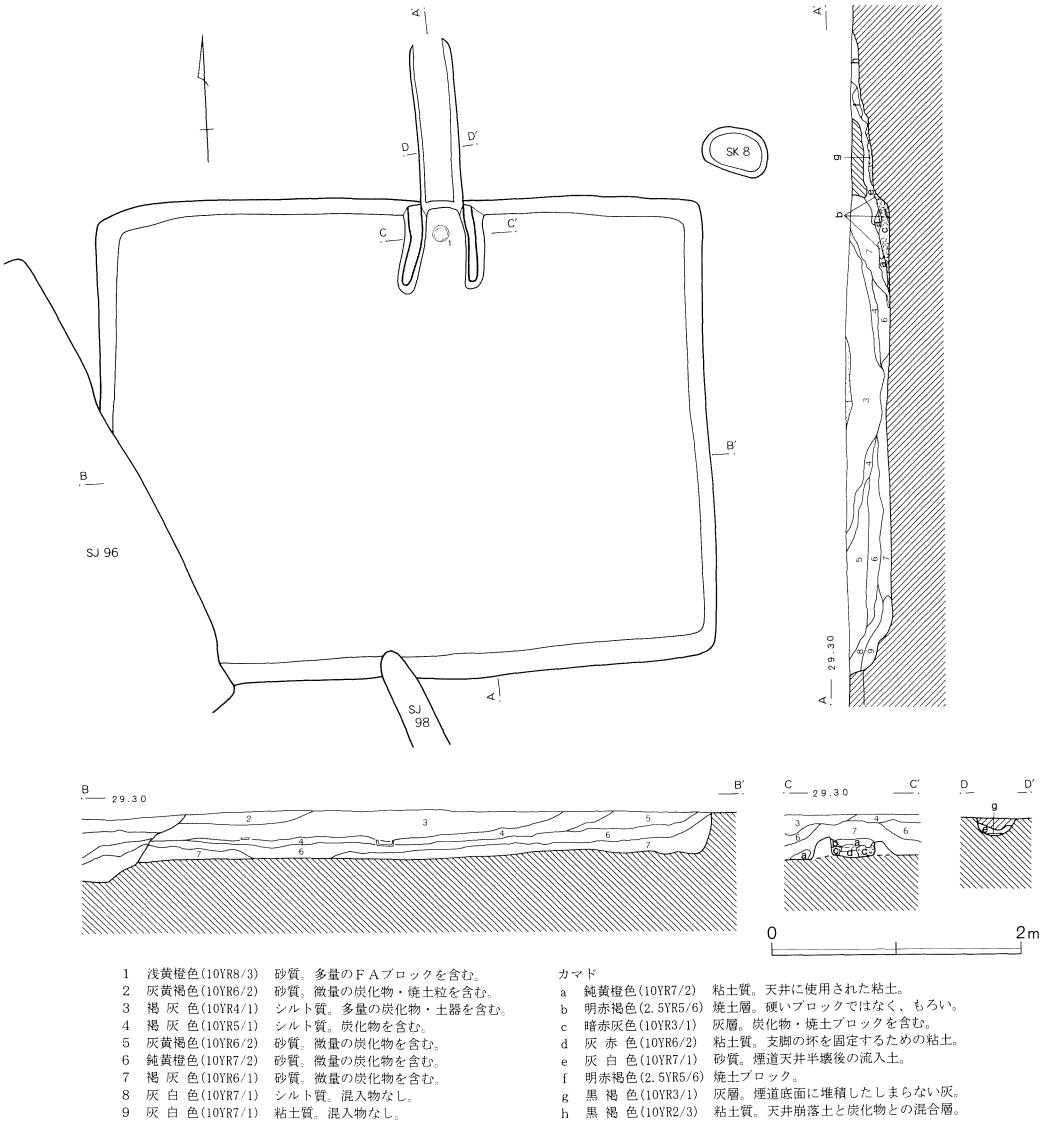
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.4	5.2		RB	B	橙	70	No. 1
2	壺	11.8	4.9		RW	B	橙	60	No. 2
3	壺	13.0	4.2		RW	A	橙	100	No. 3
4	壺	12.2	5.5		RW	B	橙	95	No. 4
5	壺	12.0	4.9		RW	B	橙	80	No. 5
6	壺	(13.0)	(5.5)		WB	B	鈍黃橙	40	
7	小型甕	(13.4)	(10.2)		RWB	B	橙	30	No. 6

### 第97号住居跡

かー3グリッドに位置する。南西隅を第96号住居跡に、南壁の一部を第98号住居跡に、それぞれ切られていた。全体はカマド位置に対して横長の長方形で、四壁は直線的に掘り込まれる。規模は長軸長4.58m、短軸長3.52m、面積約16.1m<sup>2</sup>、深さ0.39mで、主軸方向はN-2°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、緩やかながらも起伏を有していた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土1層中にはFAブロックが含まれていた。また3層中には多量の炭化物とともに、多くの土器も含まれていた。なお、住居跡外ではあるが、北西隅において炭化物の充填された、橢円形のピットを検出した。本住居跡との関連も充分に考えられるが、第8号土壤として後述する。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用され、内面は固く焼土化していた。左袖の長さは69cmで、燃焼部の幅は36cmである。煙道の幅は31cm、長さ128cmで、わずかに傾斜をつけて地山を掘り抜いていた。支脚位置は左寄りであり、粘土塊の上に壺を伏せ転用していた。

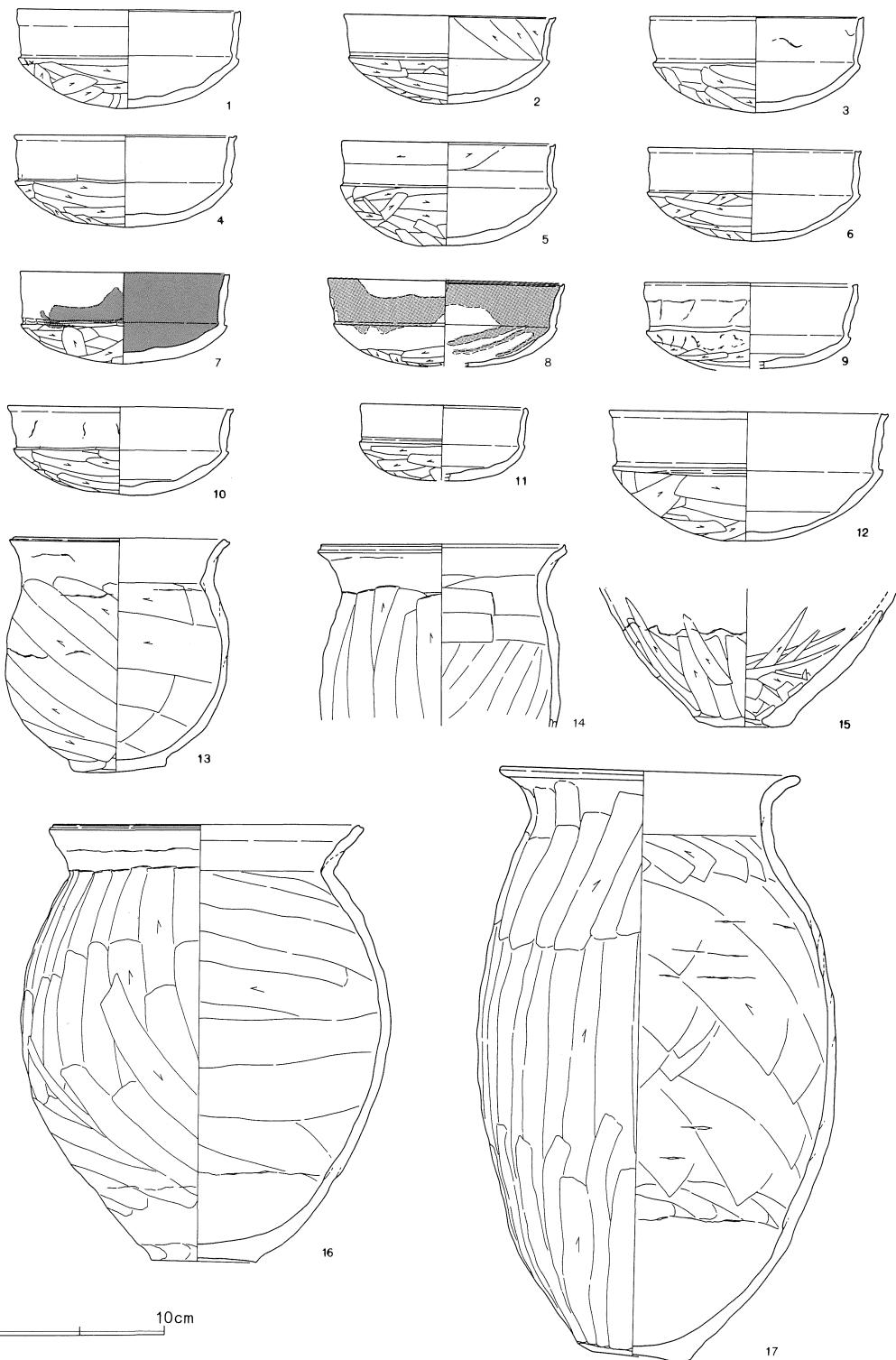
遺物は支脚に転用された1の壺以外はすべて3層を中心とした覆土中から出土した。投棄されたと見られる土器群であるが、7の壺や16・17の甕など完形の土器が含まれることが注目される。7の壺は内側全面と口辺部外面に樹脂が付着している。8の壺は破片で、内外面に赤色顔料が付着しているが、液状の顔料の痕が流れた痕跡が数条みとめられるため、塗彩土器というよりは、塗彩作業にかかる用具のひとつと考えられる。22の甕は底部を欠損するが胴部下端が水平に整えられており、転用器台の可能性がある。25は残存率が低いが復元口径22.5cm、同じく胴部最大径52cmとなり、第1号祭祀跡出土の大型壺程度の大きさになると考えられる。



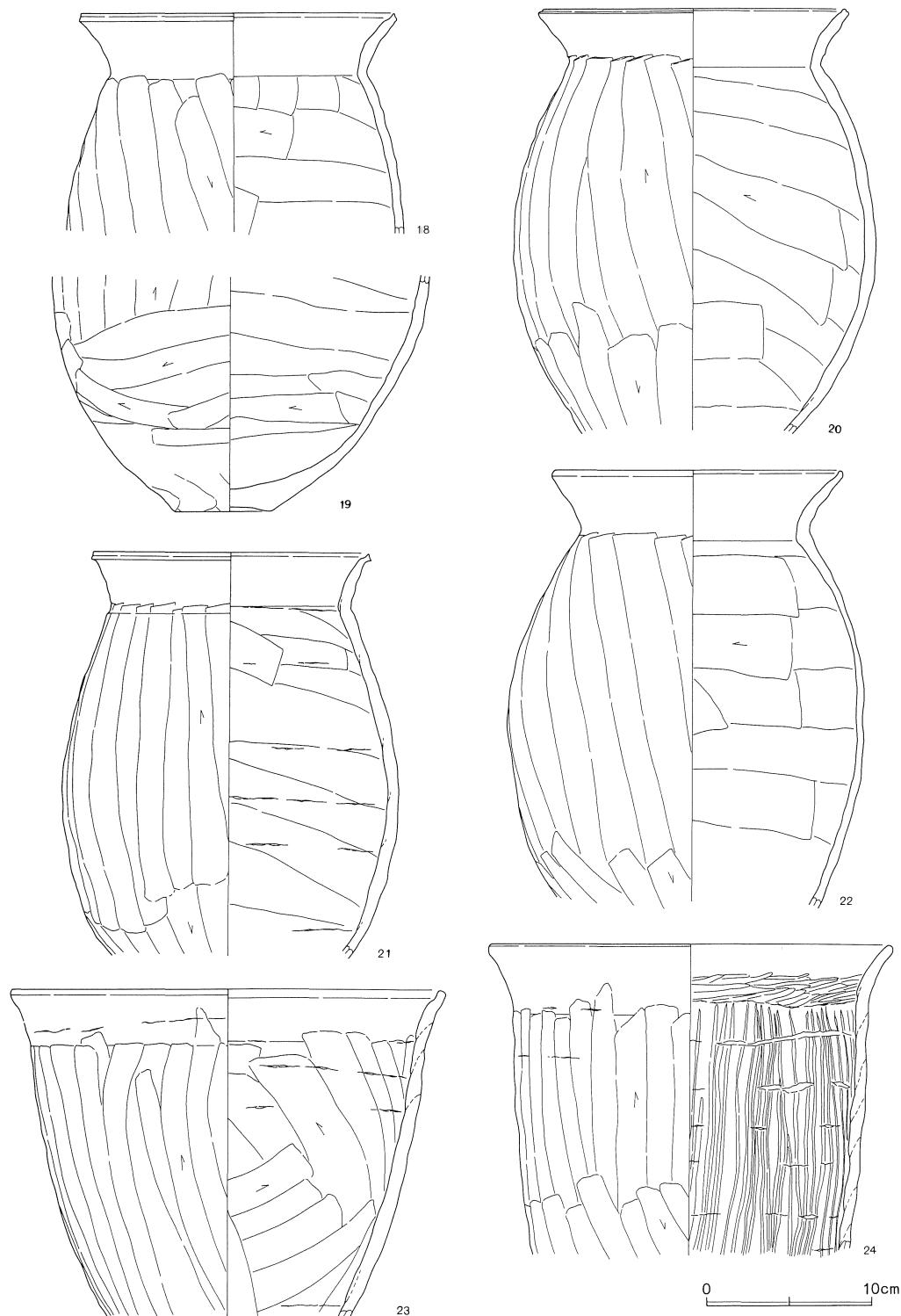
第287図 第97号住居跡

第97号住居跡出土土器観察表(1)

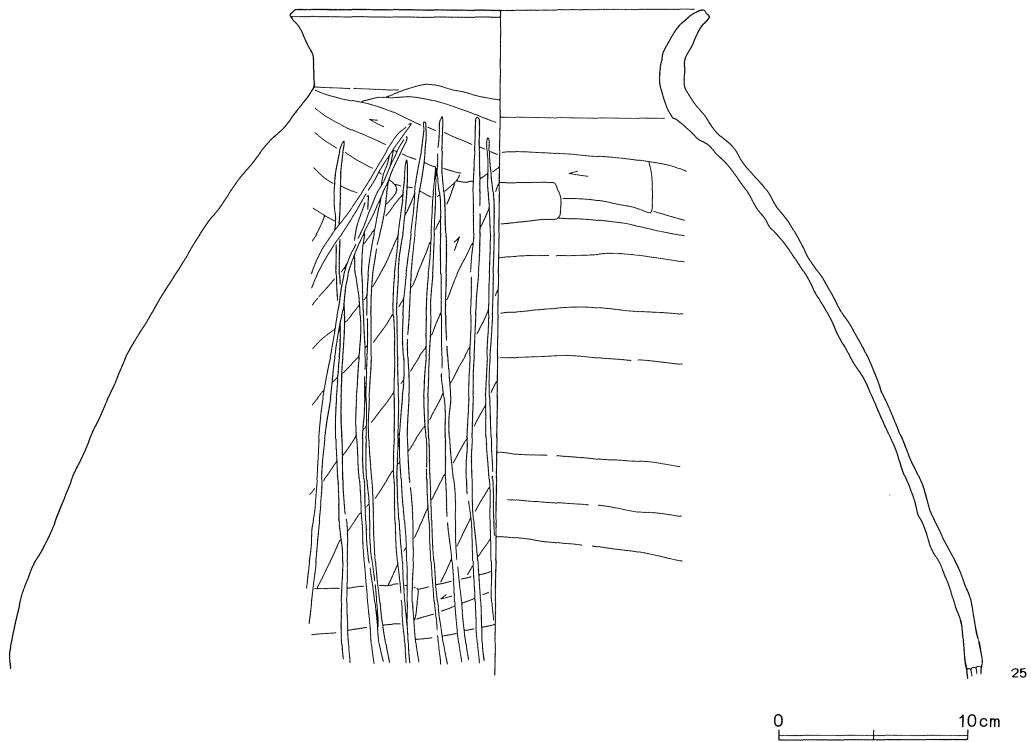
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.1	5.8		RW	A	橙	100	No.1 カマド支脚に転用
2	壺	12.5	5.2		R	A	鈍橙	80	3層
3	壺	12.6	5.6		RWB	B	橙	60	覆土
4	壺	13.1	5.4		RWB	B	橙	70	
5	壺	12.6	6.0		RWB	B	鈍黄橙	70	覆土
6	壺	12.6	5.4		RWB	B	橙	60	
7	壺	12.3	5.4		RB	A	鈍橙	100	3層 内外面に樹脂付着
8	壺	(13.9)	(5.0)		WW'B	A	鈍橙	40	赤色顔料付着



第288図 第97号住居跡 出土遺物（1）



第289図 第97号住居跡 出土遺物（2）



第290図 第97号住居跡 出土遺物（3）

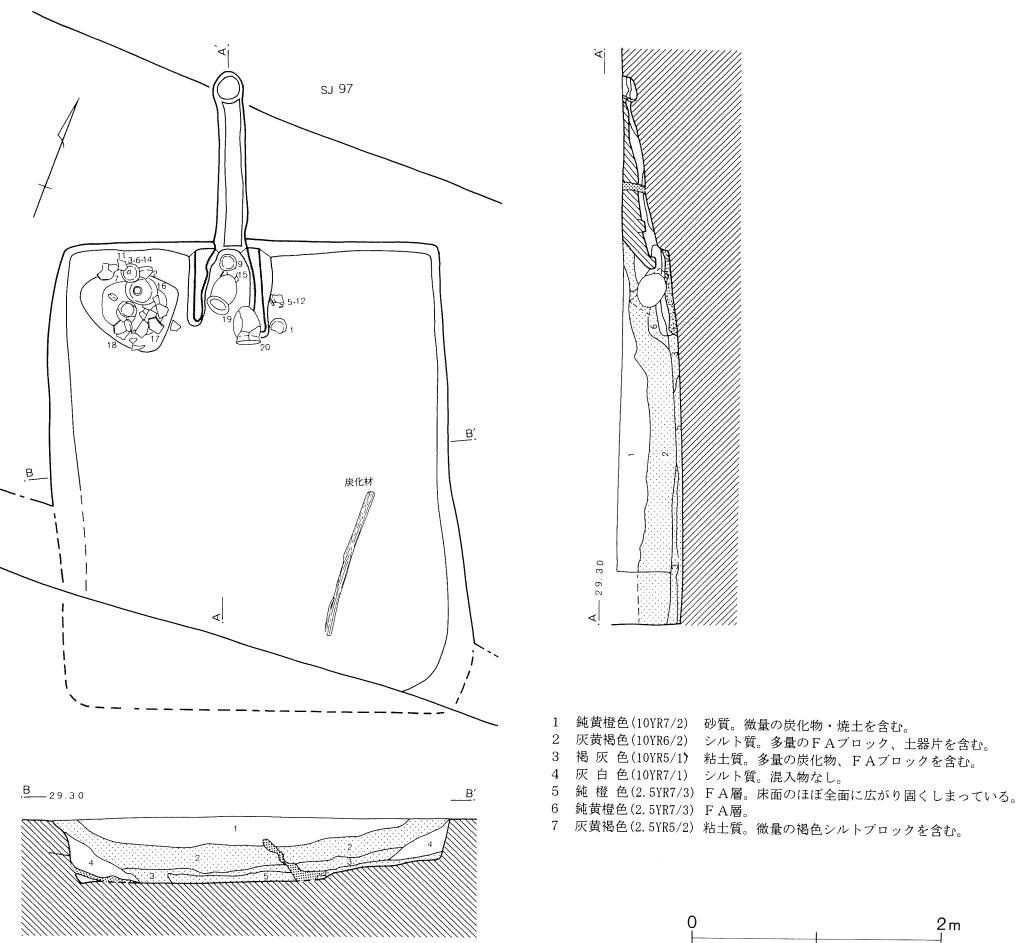
第97号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	壺	12.5	(5.0)		RW	B	明赤褐	50	覆土
10	壺	13.3	5.0		RW	B	鈍黄橙	80	
11	壺	(9.9)	(4.4)		RW	A	浅黄橙	30	
12	大型壺	16.4	7.5		RWB	B	橙	70	3層
13	小型甕	12.9	13.6	5.4	RH	B	鈍橙	50	覆土
14	小型甕	14.6	(10.6)		RWB	B	橙	70	3層
15	甕		(8.2)	(3.0)	RW'	A	橙	30	
16	甕	18.2	25.3	6.1	RWBH	A	灰白	100	3層
17	甕	17.7	33.9	5.5	RW	A	明褐灰	100	3層
18	甕	19.2	(13.0)		RWB	A	灰白	75	3層
19	甕		(14.0)	5.7	RW	A	淡橙	80	覆土
20	甕	18.7	(25.4)		RWU	B	灰白	90	
21	甕	16.8	(24.0)		RWB	A	淡橙	80	3層
22	甕	17.4	(25.8)		RWH	A	橙	80	3層 転用器台の可能性有り
23	甕	(26.2)	(19.8)		RWB	A	鈍橙	25	3層
24	甕	24.4	18.5		RW	A	橙	25	
25	壺	(22.5)	(35.5)		WB	B	灰白	10	3層 大型

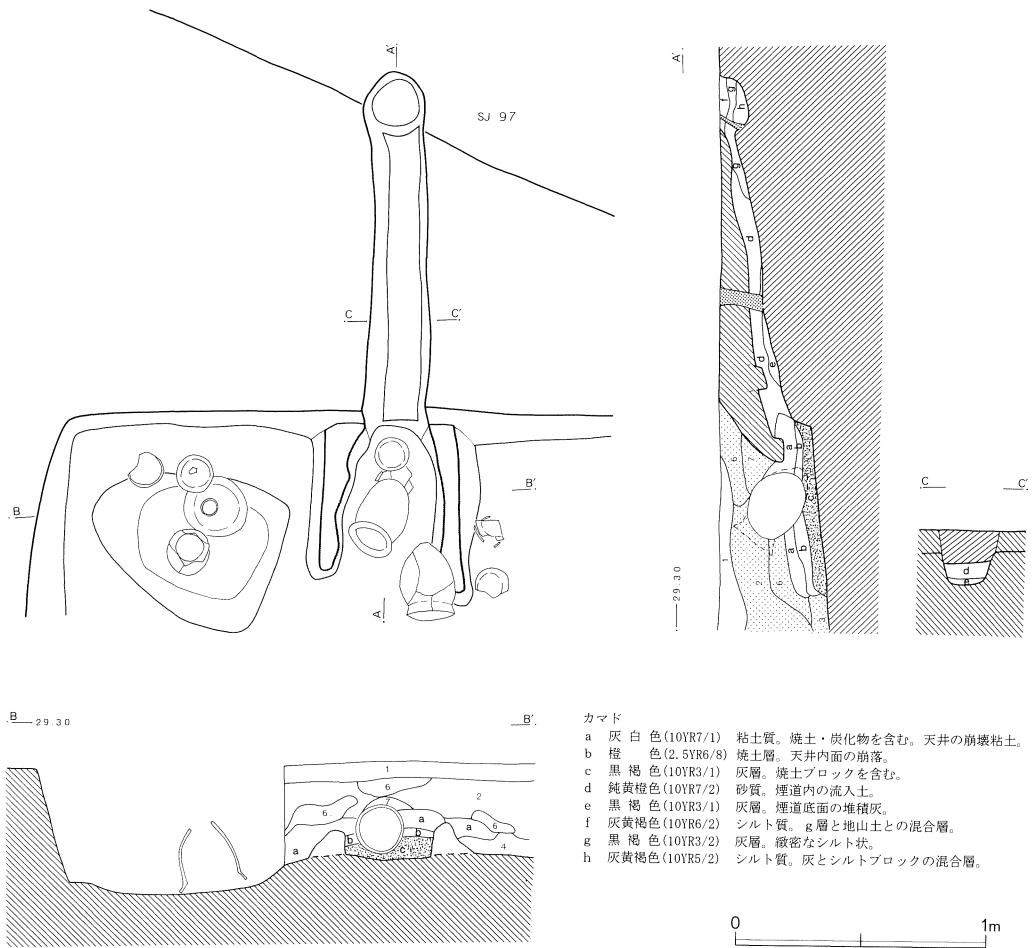
## 第98号住居跡

かー3グリッドに位置する。本跡のカマド煙道は、第97号住居跡を切り込んでいた。南西隅は調査区外に延びている。全体は比較的整った方形であり、壁の立ち上がりもしっかりしていた。規模は長軸長3.5m、短軸長2.95m、面積約10.3m<sup>2</sup>、深さ0.49mと小型の住居跡で、主軸方向はN-22°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれており、中央部へ向け皿状に窪んでいた。カマド左側では径78cm、深さ12cmのきわめて浅い貯蔵穴を検出した。これ以外には、壁溝・柱穴・ピットとともに確認ができなかった。覆土2・3層にはFAブロックが含まれ、5・6層では純層に近かった。特に5層は固く締まっており、自然堆積の覆土というよりは、むしろ床面に人为的に敷かれたものようである。

カマドは北壁の中央、わずかに西寄りに造られる。袖は平行に垂下し、灰白色粘土が使用されていた。右袖の長さは70cmで、燃焼部の幅は35cmである。平坦な火床面は床面との明瞭な境界が見られず、ごく緩やかに立ち上がっていいく。灰は層として識別できるほどの堆積は見られなかった。煙



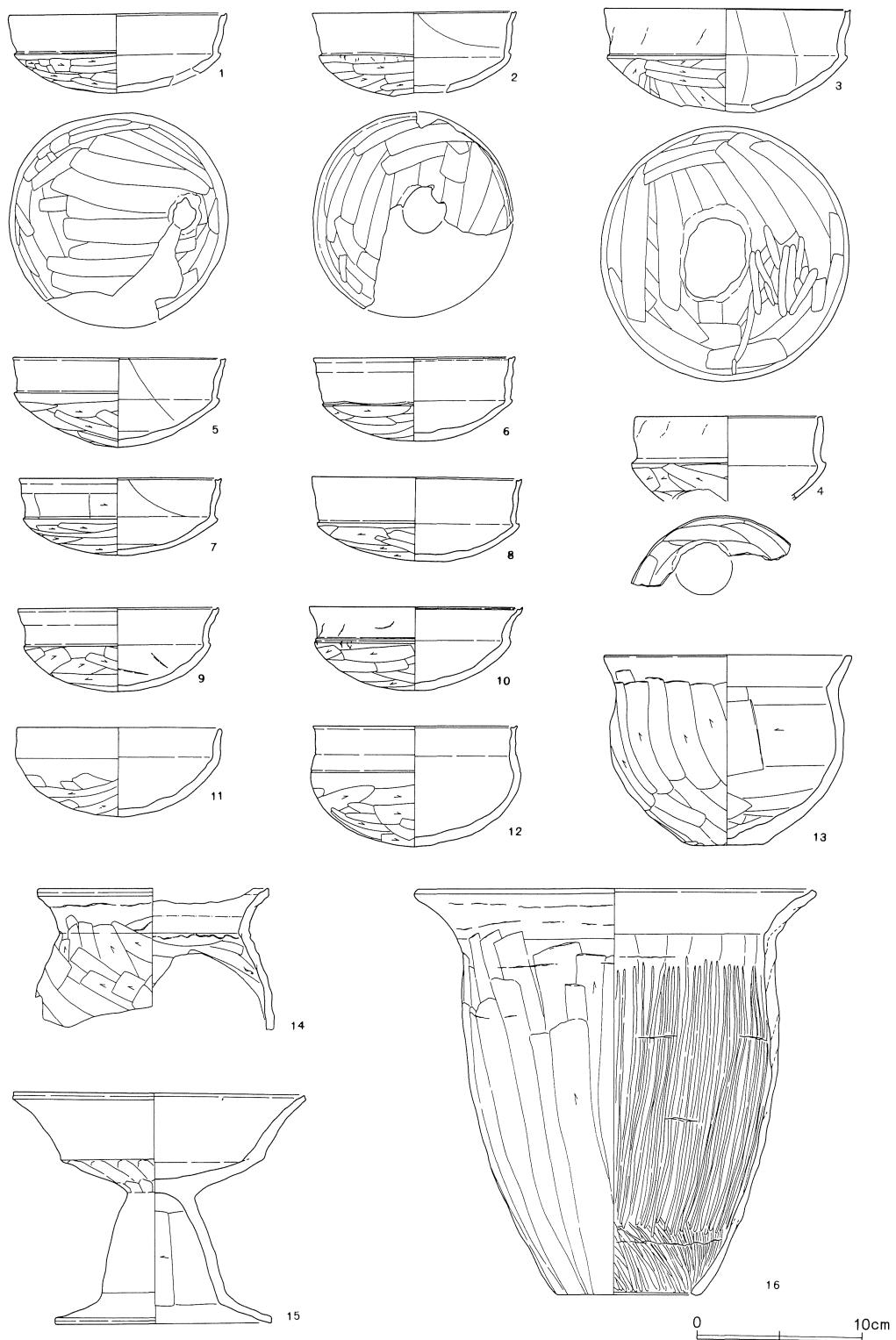
第291図 第98号住居跡



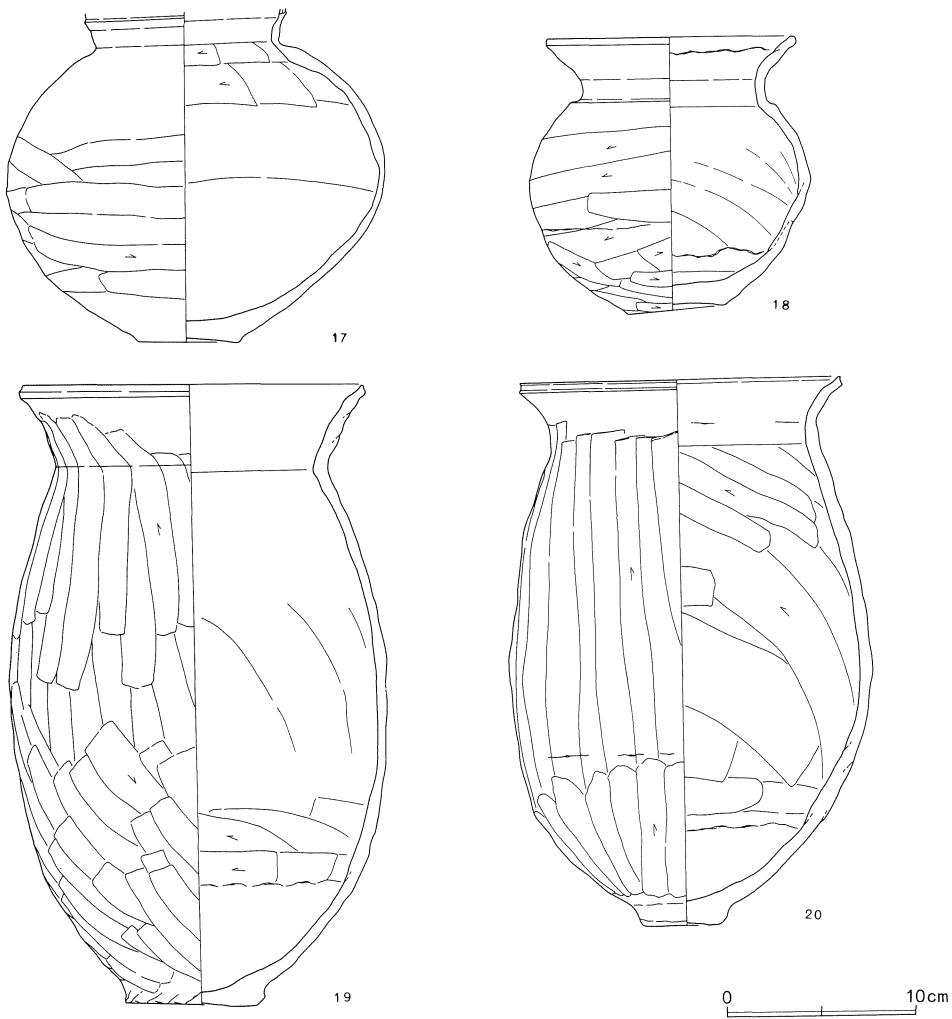
第292図 第98号住居跡 カマド

道は幅21cm、長さ137cmで、地山にやや強めの傾斜をつけて掘り抜かれていた。その先端部には、径25cmの煙出口を穿っていた。支脚はカマドの中軸線上、燃焼部の中央に据えられ、高坏が使用されていた。

遺物はカマド・貯蔵穴から出土した。カマド燃焼部には15の高坏が支脚として倒立転用され、その上に19の甕が乗せられていた。20の甕はその手前右寄りで出土した。9の坏は19の奥で正立状態にあったが、層位的には天井の崩落土層上である。貯蔵穴からは多量の土器が出土した。16の甕は倒立して置かれ、焼成後に穿孔された3の大型坏、7の坏、破碎状態の17・18の壺、11の坏は床面から浮いていた。またカマド右側からは1の穿孔坏と5の坏、12の椀が出土した。1・2・3・4と穿孔された坏が目立つのが特筆される。また4・6・14の3点セットは使用頻度が高かつたらしく、6の口唇内面と14の口縁内面には磨滅帶がみとめられる。このほか、南東隅寄りの床面上からは長さ120cmの炭化材が出土した。しかし、これ以外には炭化材や焼土の検出はないため、焼け落ちた屋根材か否かの判断は付けかねる。



第293図 第98号住居跡 出土遺物（1）



第294図 第98号住居跡 出土遺物（2）

第98号住居跡出土土器観察表(1)

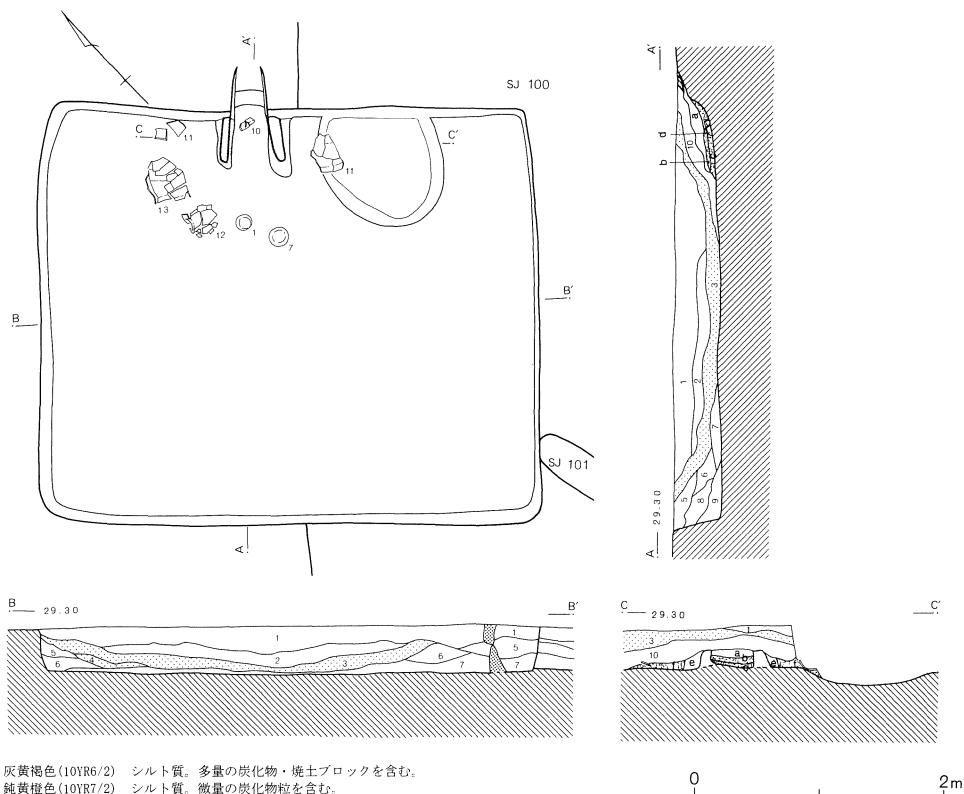
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	13.2	4.7		RWB	B	橙	70	No. 1 穿孔土器
2	壺	12.3	4.9		RWB	B	橙	60	No.16 穿孔土器
3	大型壺	14.9	6.2		RWB	A	明赤褐	100	No.15 穿孔土器
4	壺	(11.3)	(5.1)		RW	B	鈍橙	25	穿孔土器
5	壺	12.9	5.4		RWB	B	橙	80	No. 2
6	壺	12.2	5.0		RWB	A	橙	100	No.17 口縁部内面に磨滅帶有り
7	壺	12.2	4.6		RB	A	鈍橙	70	No.12・13
8	壺	12.7	5.0		RWB	B	明赤褐	60	
9	壺	12.2	5.0		RWB	A	橙	100	No. 5
10	壺	12.9	5.0		RW	B	橙	80	
11	壺	12.5	5.3		RWB	B	橙	100	No.13
12	椀	12.4	7.2		RWB	B	橙	50	No. 2

## 第98号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
13	鉢	(15.0)	(11.4)	(4.4)	RWB	B	浅黄橙	30	
14	小型甕	14.0	(7.1)		R	C	鈍	100	No.18 転用器台
15	高 壱	17.7	13.8	13.0	RW	A	橙	75	No.7 カマド支脚に転用
16	甕	24.3	24.3	8.4	RW	A	灰白	95	No.11
17	壺		(17.4)	5.3	RW	B	橙	90	No.8
18	壺	13.3	14.3	5.1	WW'B	C	鈍橙	70	No.9
19	甕	18.3	32.6	7.0	RWH	B	鈍橙	100	No.4
20	甕	17.0	28.8	4.0	WB	A	橙	100	No.3

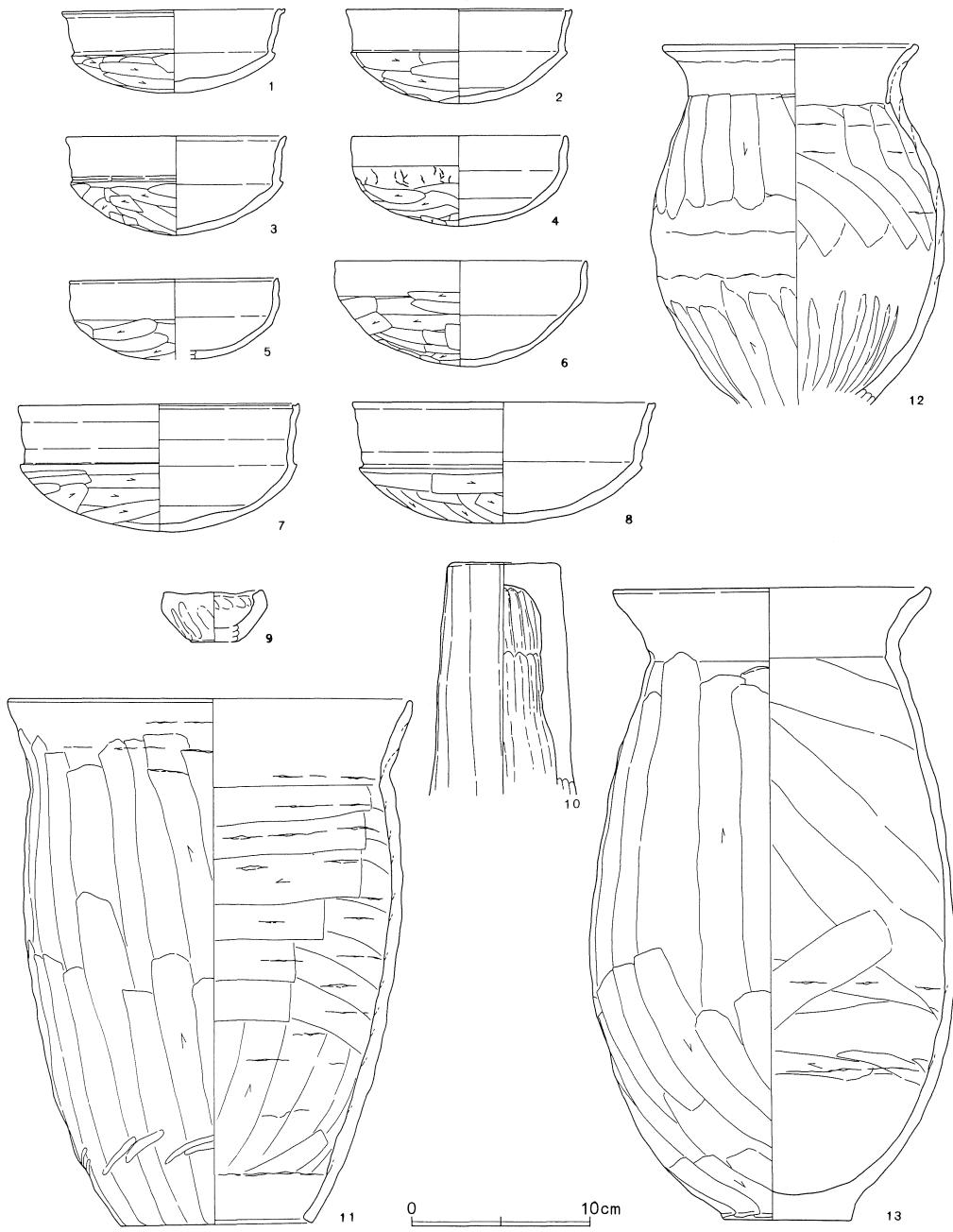
## 第99号住居跡

か-3 グリッドに位置する。第100号住居跡の西壁を切り込み、第101号住居跡の煙道先端に切られていた。四隅の屈曲は鋭く、全体はきれいな長方形となる。規模は長軸長3.88m、短軸長3.14m、面積約12.2m<sup>2</sup>、深さ0.38mで、主軸方向はN-40°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれて



- 1 灰黄褐色(10YR6/2) シルト質。多量の炭化物・焼土ブロックを含む。
- 2 鈍黄橙色(10YR7/2) シルト質。微量の炭化物粒を含む。
- 3 灰黄褐色(10YR5/2) シルト質。多量のFAブロック、炭化物・土器を含む。
- 4 淡赤橙色(2.5YR7/3) F A層。
- 5 暗灰色(2.5YR6/1) シルト質。微量の炭化物を含む。
- 6 鈍黄橙色(2.5YR7/2) 砂質。混入物なし。
- 7 灰白色(2.5YR7/1) シルト質。炭化物・焼土ブロックを含む。
- 8 灰白色(2.5YR7/1) 粘土質。微量の炭化物含む。
- 9 灰白色(2.5YR7/1) 砂質。6層と地山層との混合層。液状化により形成。
- 10 暗灰色(2.5YR6/1) シルト質。炭化物・焼土ブロックを含む。
- a 灰黄褐色(10YR6/2) 粘土質。炭化物・焼土を含む。本来の天井。
- b 暗灰色(10YR4/2) 灰層。灰と被熟粘土ブロックとの混合層。
- c 黒色(10YR2/1) 灰層。
- d 灰白色(10YR8/1) 粘土質。支脚を固定するための粘土。
- e 灰白色(10YR7/1) シルト質。袖の崩落土。
- f 暗灰色(10YR6/1) シルト質。多量の灰・焼土ブロックを含む。

第295図 第99号住居跡



第296図 第99号住居跡 出土遺物

第99号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口 径	器 高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.6	4.6		RWB	B	橙	100	No.4
2	壺	12.7	5.3		RWB	B	橙	50	
3	壺	12.4	5.5		RWB	B	橙	80	
4	壺	(12.2)	(5.0)		RWB	B	明赤褐	40	
5	壺	(11.8)	(4.5)		RWB	A	橙	40	
6	壺	14.2	5.9		RWB	A	明赤褐	70	
7	大型壺	15.8	7.1		RWB	A	橙	100	No.5
8	大型壺	17.0	6.7		RWW'B	B	橙	60	
9	手捏土器	(5.6)	2.9	(2.7)	RW	B	鈍橙	20	
10	支脚	6.4	12.9		RW	B	橙	60	
11	甌	22.7	29.3	10.7	RW	B	灰白	50	No.1・6
12	甌	14.4	20.1		RWB	B	鈍橙	95	No.3
13	甌	17.8	35.3	7.0	RW	B	橙	95	No.2

おり、中央部はやや窪んでいた。カマド右側で径101cm、深さ13cmの皿状の貯蔵穴を検出したものの、壁溝・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは北東壁の北寄りに造られ、袖には白色粘土が使用されていた、右袖の長さは61cm、燃焼部の幅は34cmである。火床面は平坦ながら、緩やかに上昇していく。内部には厚く灰の堆積が見られた。煙道は幅26cm、長さ21cm以上で、強めの傾斜をつけて掘られていた。支脚位置は中軸線上の奥部であり、土製のものが使用されていた。左右両袖の外側には、やはり厚く灰層の堆積がみとめられた。

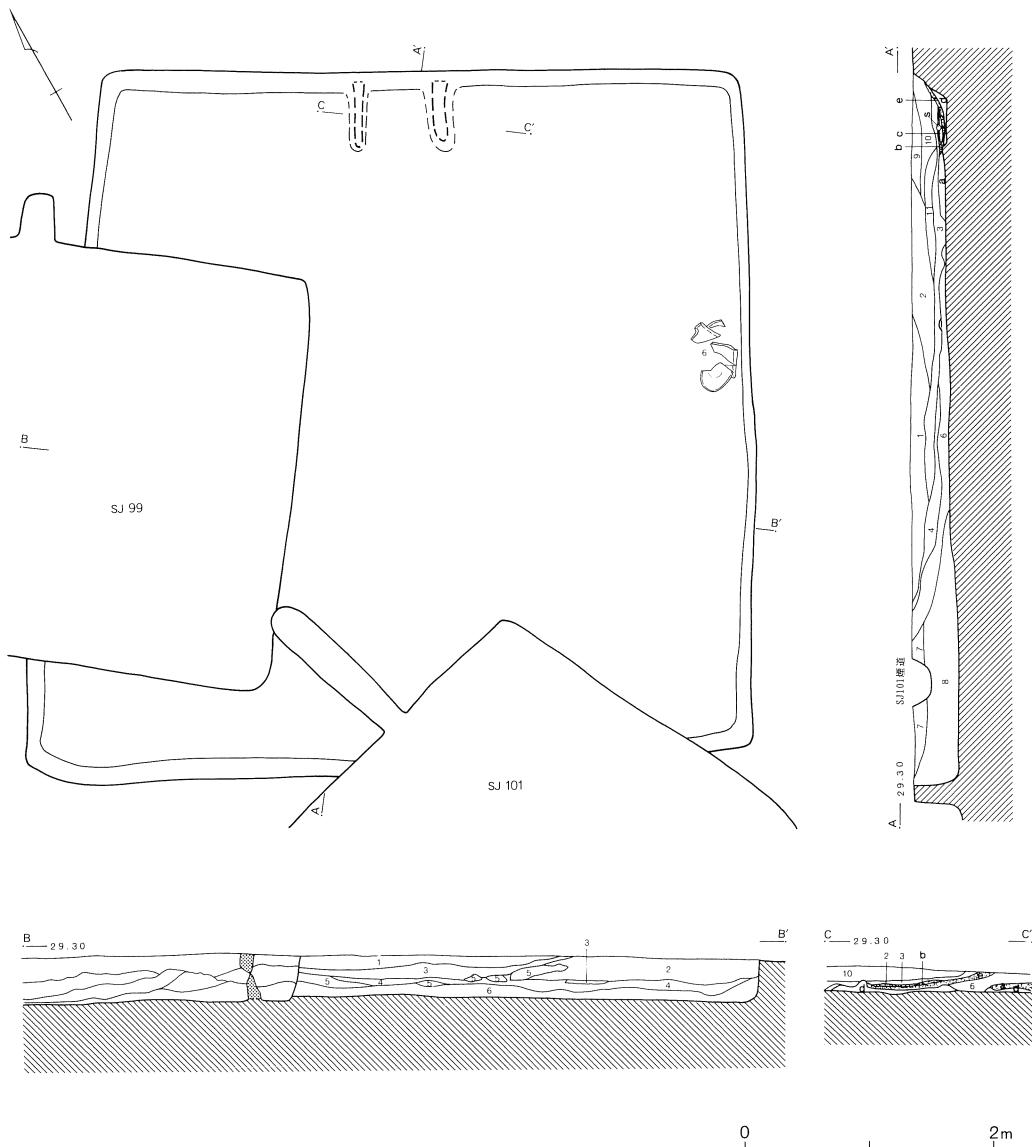
遺物は主にカマドの周辺から出土した。カマド前面の床面上からは1の壺、7の大型壺、12・13の甌が出土した。壺2点は完形品、甌2点はほぼそれに近いものである。11の甌はカマド両袖外側の灰層上面から、破片となって見いだされた。

### 第100号住居跡

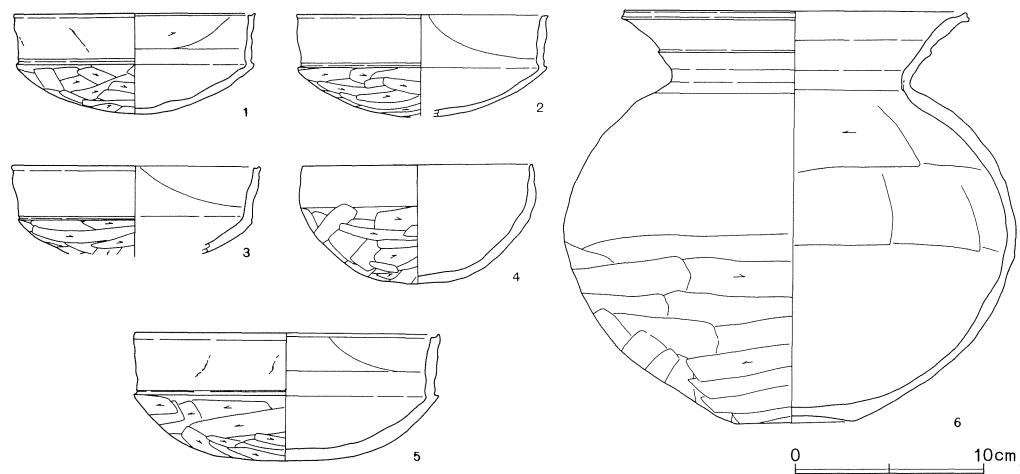
か-3グリッドに位置する。北西壁を第99住居跡、南西壁を第101号住居跡、それぞれに切られていた。四壁は直線的で、全体はほぼ方形となる。規模は長軸長5.55m、短軸長5.17m、面積約28.7m<sup>2</sup>、深さ0.33mで、主軸方向はN-30°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれており、中央部がいくぶん高まっていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土の堆積状況はかなり乱れていた。7・8層と他の土層との関係、2層と3層との部分的な逆転、灰・炭化物主体で土器片を含む3・4層の存在などから判断すれば、これらは人為的な埋め戻しと考えられる。

カマドは北東壁に造られ、袖に使用された灰白色粘土や焼土・灰などがみとめられたが、明瞭な袖や煙道は検出できなかった。意図的に破壊された可能性もある。断面観察から燃焼部幅は約50cmで燃焼部底にも粘土が敷かれていたと考えられる。

遺物は床面上で6の壺が出土したのみで、ほかは3・4層中からの出土である。6は胴部中位に煤が付着し、下半が被熱赤変しているので火に掛けたと見られる。



第297図 第100号住居跡



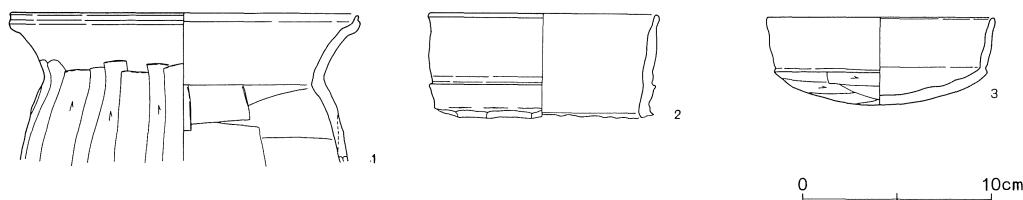
第298図 第100号住居跡 出土遺物

#### 第100号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.7	5.2		RWB	B	橙	70	
2	壺	(13.3)	(5.4)		RWB	B	橙	40	
3	壺	(13.2)	(4.8)		RWB	B	橙	30	
4	壺	(12.2)	(6.3)		RWB	B	橙	30	
5	大型壺	16.2	6.7		RW	B	明赤褐	70	
6	壺	18.4	21.6	6.2	RW	B	橙	80	火に掛けた痕跡有り

#### 第101号住居跡

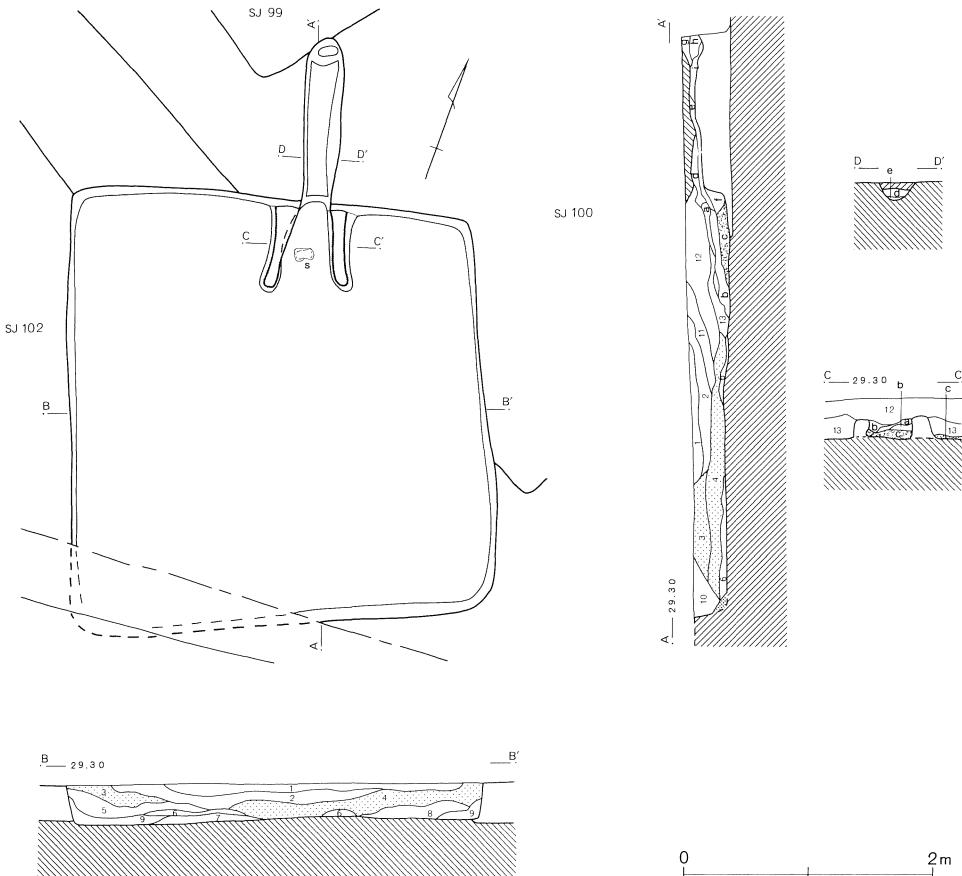
かー3グリッドに位置する。第99号・第100号・第102号住居跡の埋没後、これらを切り込んでいた。南壁西部は側溝によって破壊されていた。規模は長軸長3.21m、短軸長3.10m、深さ0.30mで、



第299図 第101号住居跡 出土遺物

#### 第101号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(18.5)	(7.8)		BU	B	鈍黃橙	25	
2	壺	12.3	(5.4)		RWB	B	鈍黃橙	90	転用器台
3	壺	12.1	4.6		RWB	C	橙	60	



- 1 暗灰色(10YR6/1) 微量の炭化物を含む。  
 2 細灰色(10YR6/1) 多量の燒土粒・炭化物を含む。  
 3 灰黄色(10YR6/2) 炭化物・FA粒を含む。  
 4 鈍黃褐色(10YR6/3) 黄色砂粒・FA粒を含む。  
 5 鈍黃褐色(10YR6/3) 黄色粒・炭化物を含む。  
 6 黑褐色(10YR3/1) 炭化物層。  
 7 灰黄色(10YR6/2) 多量の黄色粒を含む。  
 8 暗灰黄色(10YR5/2) 炭化物・燒土粒を含む。  
 9 灰黄色(10YR6/2) 炭化物・灰色粘土を含む。  
 10 灰黄褐色(10YR6/2) 炭化物を含む。  
 11 暗灰黄色(10YR5/2) 炭化物・白色粘土ブロックを含む。  
 12 黄褐色(10YR5/1) 炭化物・白色粘土ブロック・灰を含む。  
 13 暗灰黄色(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。

- カマド  
 a 鈍黃褐色(2.5YR4/3) 粘土質。混入物なし。天井の崩落。  
 b 橙色(2.5YR6/6) 烧土層。焼土ブロック・灰を含む。天井の崩落。  
 c 灰色(10YR4/1) 灰層。  
 d 灰黃褐色(10YR6/2) 砂層。微量の焼土ブロックを含む。流れ込みの砂。  
 e 灰褐色(10YR6/1) 灰層。焼土粒・微量の砂を含む。  
 f 鈍黃褐色(10YR7/2) 砂層。地山砂の流れ込み。  
 g 鈍黃褐色(10YR5/2) シルト質。地山シルトの流れ込み。  
 h 灰褐色(10YR4/1) 灰層。灰が主体だが微量の砂を含む。  
 i 暗灰色(10YR5/1) 灰層。e層に類似するが砂の混入が少ない。

第300図 第101号住居跡

主軸方向はN-20°-Wである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。覆土3・4層にはFAブロックが含まれ、堆積にも乱れがみられることから、人為的な埋め戻しが考えられる。

カマドは北壁に造られ、袖には灰白色粘土が使用されていた、左袖の長さは71cm、燃焼部の幅は36cmである。煙道は幅29cm、長さ123cmで、先端に煙出ピットをもっていた。支脚は不明だが、燃焼部中央からやや浮いて礫が出土し、支脚として使用されていた可能性も考えられる。右袖の外側には灰層があった。

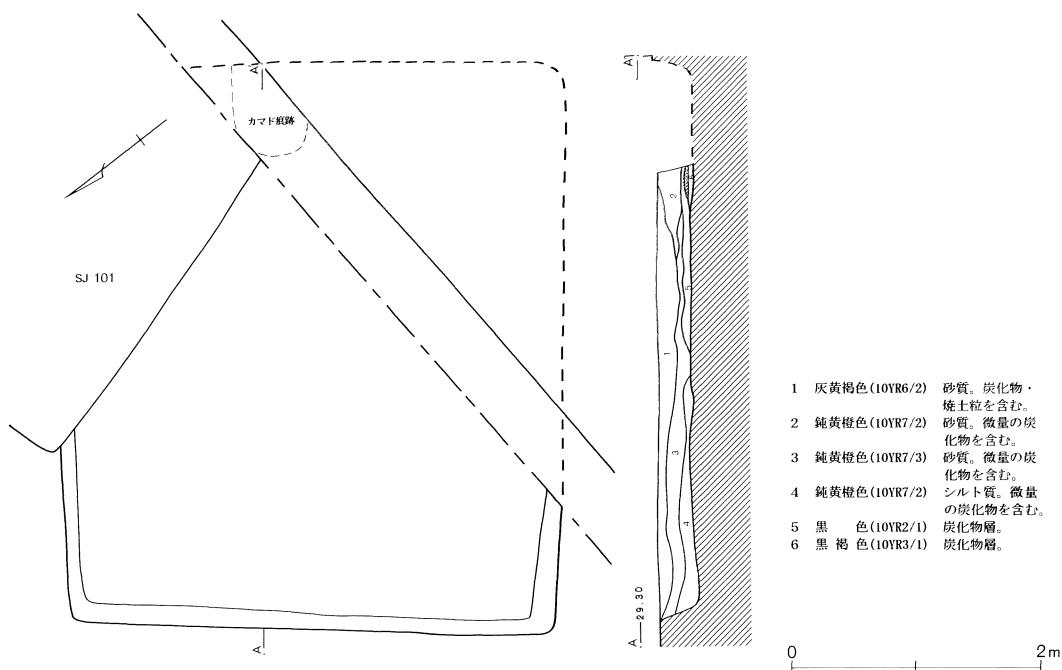
遺物の出土量は少なかった。2は壺の口縁部のみを転用した器台である。

## 第102号住居跡

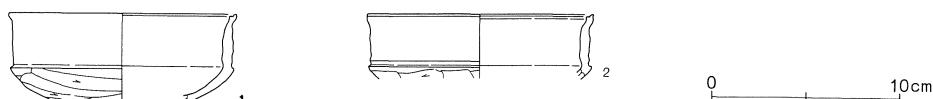
かー3グリッドに位置する。第101号住居跡に東隅部を切られていた。住居の南3分の1ほどは調査区外となるため、全体の形状や規模は明らかとしえなかった。検出した部分の規模は長軸長3.72m、短軸長3.55m、深さ0.25mで、主軸方向はN-130°-Eである。床面は地山砂層に掘り込まれ、壁溝・貯蔵穴・柱穴・ピットは確認できなかった。

カマドは調査前に設定した排水用の側溝によって、そのほとんどを破壊してしまった。但し、焼土や灰白色粘土ブロックなどの残存から、東壁のやや北寄りに造られ、袖は灰白色粘土を使用しているものと考えられた。

遺物はきわめて少量で、図示した坏も残存率は低い。



第301図 第102号住居跡



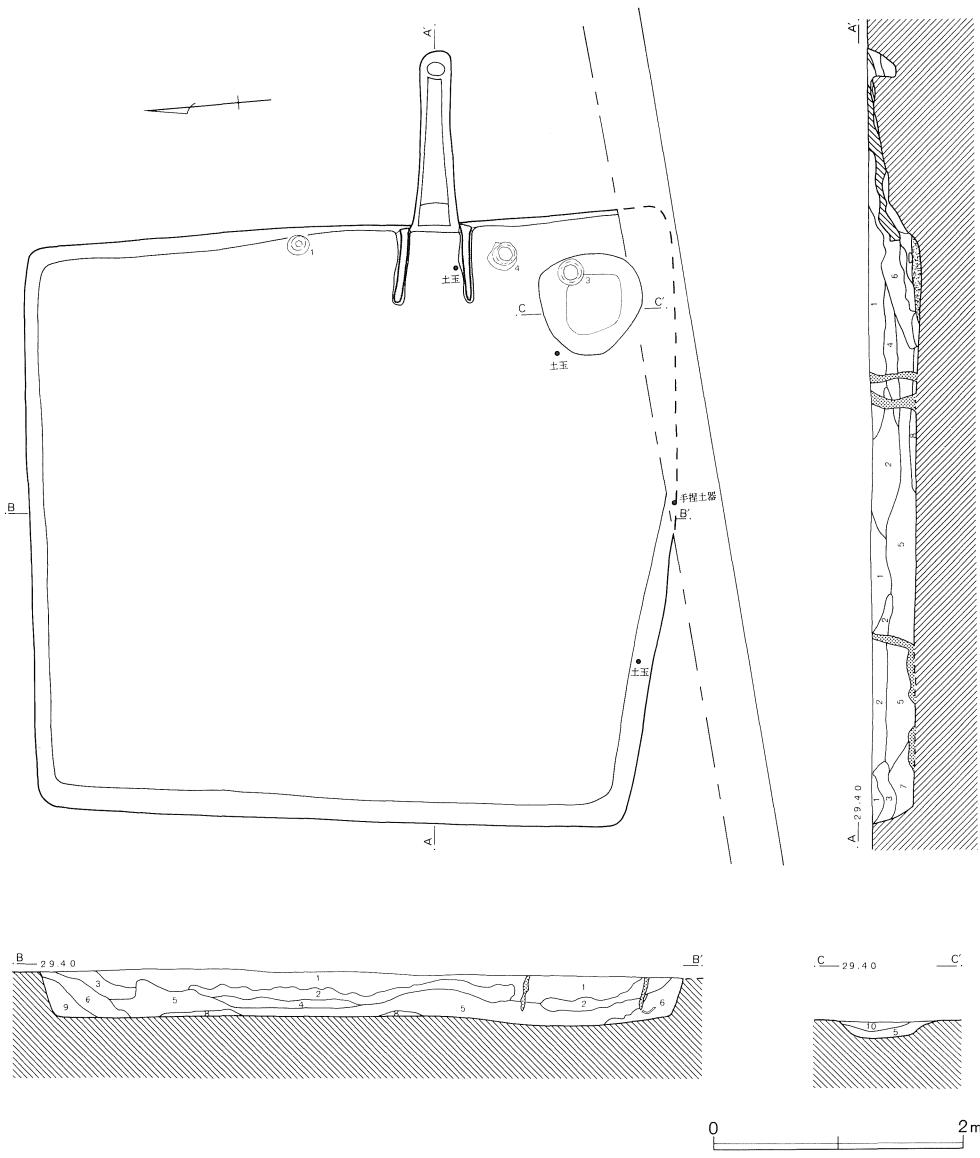
第302図 第102号住居跡 出土遺物

## 第102号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.1)	(4.7)		RW	B	橙	15	
2	坏	(12.0)	(3.2)		RB	A	橙	10	

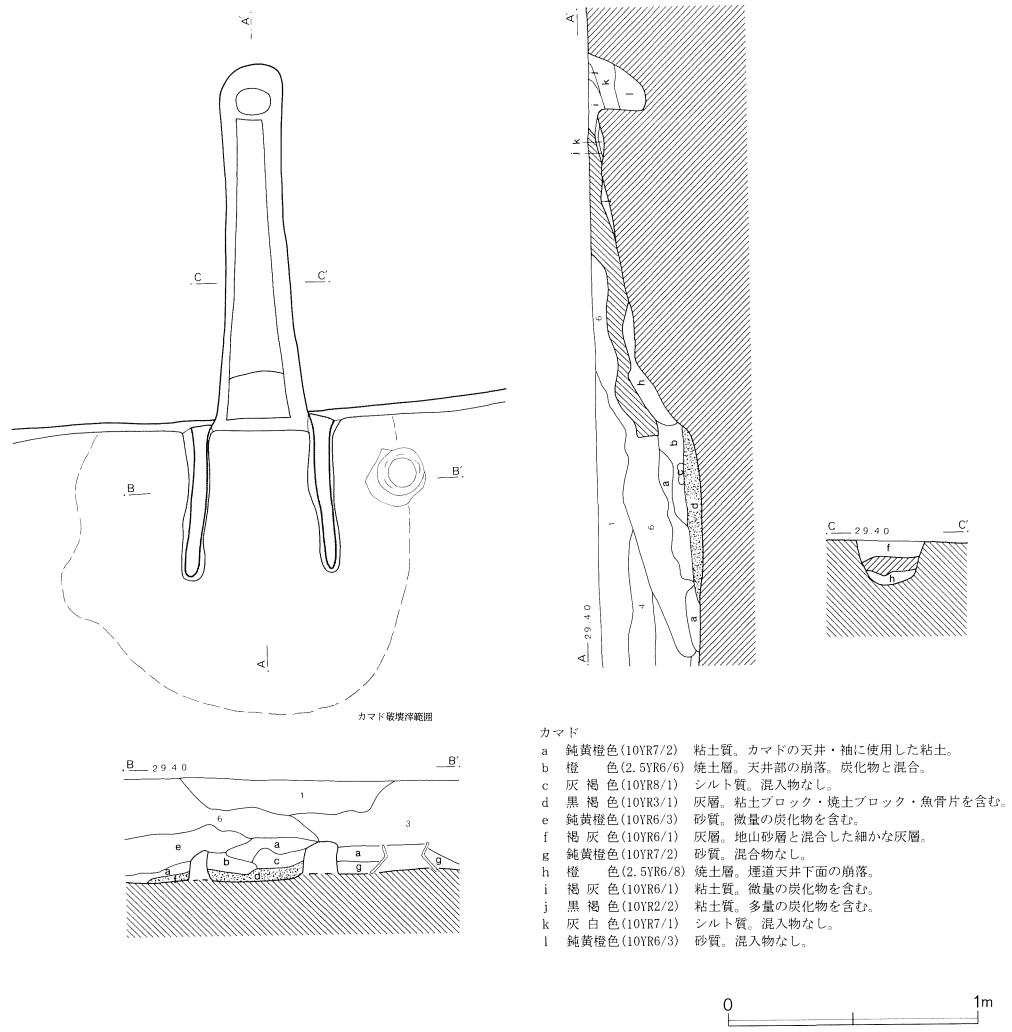
### 第103号住居跡

かー3グリッドに位置する。南東隅部は調査前に掘削した排水用の側溝により、床面まで破壊してしまった。但し、調査区の壁には本跡が現われていないため、側溝の中で収束していたものと考えられる。全体はカマドに対して横長の長方形を基本とするが、西壁に比して東壁がかなり長いため、台形に近いものとなっていた。各壁は直線的に掘り込まれ、北側両隅のなす屈曲は鋭い。規模は長軸長4.91m、短軸長4.45m、面積約21.7m<sup>2</sup>、深さ0.38mで、主軸方向はN-93°-Eである。床

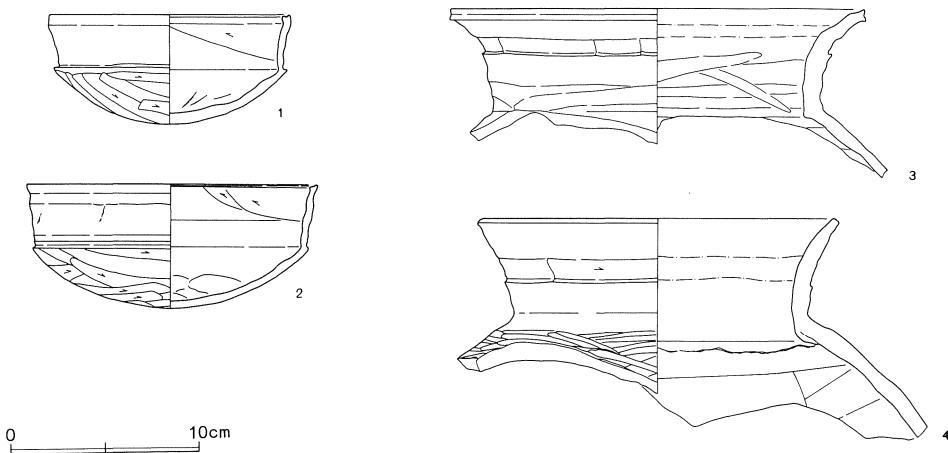


- |                                 |                                    |
|---------------------------------|------------------------------------|
| 1 灰黄褐色(10YR6/2) 砂質。微量の炭化物粒を含む。  | 6 褐灰色(10YR6/1) 砂質。灰色粘土ブロック・炭化物を含む。 |
| 2 灰黄褐色(10YR5/2) シルト質。微量の炭化物を含む。 | 7 灰白色(10YR7/1) 粘土質。混入物なし。          |
| 3 灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質。微量の炭化物を含む。  | 8 鈍黄橙色(10YR7/2) 砂質。炭化物を含む。         |
| 4 灰黄褐色(10YR6/2) シルト質。炭化物を含む。    | 9 鈍黄橙色(10YR7/2) 砂質。液状化による地山砂混合層。   |
| 5 鈍黄橙色(10YR7/2) 砂質。混入物なし。       | 10 橙色(2.5YR6/8) 粘土質。灰と焼土ブロックの混合層。  |

第303図 第103号住居跡



第304図 第103号住居跡 カマド



第305図 第103号住居跡 出土遺物

第103号住居跡出土土器観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	12.8	5.7		RWB	B	橙	70	No.3
2	大型壺	15.5	6.5		RWB	B	橙	90	
3	壺	22.0	(7.1)		RW	A	明赤褐	100	No.1 転用器台
4	壺	19.2	(9.2)		RWB	B	淡黄	100	No.2 転用器台

面は地山砂層に掘り込まれており、中央部がわずかに高まっていた。液状化による攪乱も部分的にはみとめられたが、壁の立ち上がりは概ね急角度を保っていた。床面上からはカマド右側で径83cm、深13cmの皿状の貯蔵穴を検出したにとどまる。壁溝・柱穴・ピットなどはいっさい確認できなかつた。覆土の砂質土とシルト質土が交互に詰まったもので、その堆積状態は不自然で乱れていた。このことから見て、これらの覆土は自然堆積によるものではなく、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。袖は壁からほぼ垂直に、左右が平行して垂下しており、長さの割には幅の狭いものであった。造り付けるに際しては、灰白色粘土が使用されていた。左袖の長さは57cm、燃焼部の幅は36cmである。燃焼部は平面的には長方形となり、袖の内面は内側に向けて少し傾斜していた。火床面は平坦で、床面との高低差はほとんど見られなかつた。灰の堆積は厚く、燃焼部全体に形成されていた。天井および袖は意図的に取り除かれたようであり、カマド外周の幅40cmほどの範囲には、焼土と灰白色粘土との混合土が広がっていた。煙道は幅27cm、長さ138cmで、地山に傾斜をつけて掘り抜いていた。先端には径25cm、深さ33cmの煙出ピットを穿っていた。なお、狭い範囲ではあるが、左袖の外側には灰層の形成がみとめられた。

遺物はカマド周辺にまとまっていたとはいいうものの、出土量としてはきわめて少なかつた。カマドの右側と貯蔵穴からは3・4の転用器台2点が出土した。両者はともに壺の口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部を上に据え付けられた状態であった。このほか、東壁際の床面上からは1の壺、貯蔵穴と南壁際の床面上からは土玉、南壁際の覆土上層からは手捏土器、それぞれが見いだされた。しかし、手捏土器は調査終了後に紛失してしまつたため、ここに図示することができなかつた。

## 報告書抄録

フリガナ	シロキタイセキ							
書名	城北遺跡							
副書名	一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告							卷次 II
シリーズ	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							卷次 第150集
編著者	山川守男							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884 TEL 0493-39-3955							
発行日	平成7年3月31日							
所収遺跡	所 在 地	コード		北緯 (° ′ ″)	東経 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡					
シロキタイセキ 城北遺跡	フカヤシホリゴメ 深谷市堀米	11218	0173	36°12'40"	139°19'55"	19890401～19910131	20,000	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
城北遺跡	集落	古墳後期	住居跡	157	土師器 須恵器 石製模造品 木製品 土製品	住居跡から人骨・牛馬骨が出土 遺存状態良好な祭祀跡を検出 生産関連遺物を検出		
			祭祀跡	5	溝			
		平安	土墳	9	土師器 須恵器	溝内から墨書き土器出土		
			溝	17				
			井戸跡	1				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集

城 北 遺 跡

一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告

—II—

(第1分冊)

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 (0493) 39-3955

印刷

朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社